日記及文範

前編

樋口夏子著

一葉全集 前編

日記及文範

東京博文館藏版

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/ichiyzensh018800

樋口夏子著

一葉全集

前編

日記及文範

東京博文館藏版

明治二十八年撮影

（樋口家所藏）

（色紙短册共樋口家所藏）

我が邦女流の文章を能くする者も亦多し藤式部の優麗と清納言の清奇と古未だ曾て有らずして後また及び難し降つて阿佛尼あり孝標女あり又降つて斐子あり武女あり麗子あり或は才或は學皆各彤管光を發し彩毫華を生ず人をして巾幗の侮る可からず鬚眉の或は愧づべきを思はしむ然りと雖も二媛より以下要するに是草間の蟲語山徑の小花たゞ其の清韵佳色悦ぶ可く憐む可きを見るのみ文妙情深人の耳目を奪つて肺腑に沁せんとするものに至つては悠々幾百年殆どこれ有る無し明治に迨びて聖世隆昌文運蔚興す忽然として一葉女史樋口氏あつて出づ不幸にして命を短うすと雖も其の作る所の諸篇萬人を感動し一時に洽

傳す詞藻の秀潤と才思の爛漫と蓋し人の耳目を奪ひ肺腑に沁せんとするもの有り嗚呼女史亦偉なりといふべし依田學海居士嘗て評して曰く古の才媛は富貴に生長し宮闈に出入す故に其の叙する所工なりと雖も未だ人情の微閭巷の秘を悉す能はざるなり若し夫れ紅涙萬斛灑いで文字と爲り熱血一腔瀝つて詞章と作り薄命を當壚に傷み情痴を狹邪に憐み今古同情の才子佳人をして痛哭流涕せしむるものは吾一葉女史濁江比長の諸篇に於て之を見ると言や實に當る聞然する無き也而して世或は妄人あり女史の濁江を著して才名大に揚るを見るや則ち謂へらく女史の人となりや猶濁江篇中の女の如き也と次いで又評者有り謂

つて曰く女史は才有つて行無し硯酒闘を遣り毒舌人を弄すと而して世又之を信ずる者有り信じて之を傳ふる者有り一狗の妄萬犬の陋達者與せずと雖も今に於て猶其の眞に然るを思ふ者有り文章の命と仇を爲す古より既に然りと云ふと雖も女史の屈を負ふも太甚し予の女史に於ける一面の識あり又數々女史に親近せる者の談を聞く私に目睹と耳聞との信ず可きに據りて考ふるに女史の性たる俊敏にして善柔母に孝に妹に慈に多感多涙中に逸氣を懷くと雖も外に異彩を露はす無し嘗て冶容を爲さず又疾言を敢てせず時に意平らかならざる有るも陰忍して諍はす而して蓄し其、胸底深奥のところ稜々たり耿々たるもの有つて

存し世相と人情との之に觸るゝ有るや文これより閃發し辭これより流溢せるのみ世の傳ふる所の事の如きは斷じてこれ無きこれ有る無き也久しい哉小人の才を嫉むや古亦これ有り其の藤を毀るは曰く死して泥犁に墮つと其の淸を傷るは曰く老いて寒巷に窮すと藤淸猶且小人の蜮射蝥螫するところとなるを免れず女史の譏刺せらるゝたまたま以て其の大を容れられざるに見る可きのみ才人の薄命古より然り鬼憎人妬亦何ぞ病まんや女史名は夏子士人の女なり歲二十一初めて闇櫻を著す死する時年二十五其の間作るところの文凡そ數十篇悉く收めて其の集に在り今茲改刊新に成るに及んで遺妹序を徵す夫の女史の文の妙情の深百

年稀出の才たるが若きは世おのづから公論有り予復何をか言はん乃ち聊か見る所を書して以て贈る

明治四十五年三月

幸田露伴識

一葉全集前篇目次

日記

書簡文範

一葉全集 前編

日記及書簡文範

樋口夏子

日記

若葉かげ　（二十四年四月）

花にあくがれ月にうかぶ折々のこゝろをかしきもまれにはあり。おもふこといはざらむは腹ふくるゝてふたとへも侍れば、おのが心にうれしともかなしともおもひあまりたるをもらすになん。さるはもとより世の人にみすべきものならねばふでに花なく文に艶なし、たゞその折々をおのづからなるから、あるはあながちにひとりぼめして今更におもなきもあり、無下にいやしうてものわらひなるも多かり。名のみことごとしう若葉かげなどいふものから行末しげれの祝ひ心には侍らずかし。

　　卯のはなのうきよの中のうれたさに
　　　　おのれ若葉のかげにこそすめ

卯月十一日　吉田かとり子ぬしの澄田川の家に花見の宴に招かるゝ日也。友なる人々は師の君のがりつどひて共に行き給ふもおはしき。おのれは妹のそれこのみ居て春の日にもあたらぬがうれたければ、いでやともになどそゝのかして誘ひ出ぬ。花ぐもりとかいふらんやうに少し空打霞みて日のかげのけざやかならぬもいとよし。上野

の岡はさかり過ぬとか聞つれど、花は盛りに月はくまなきをのみ愛るものかは。いでやその散がたの木かげこそをかしからめといへば、ならびに岡の法師のまねびにやといもうとなる人は打ゑみぬ、さすがに面なくて得いはず成ぬる事もをかし。我すむ家より上野の岡は遠きほどにてもなかりければ、まだ朝露のしげきほどに來にけり。聞けんやうにもあらず、清水の御堂の邊りこそ大方うつろひたれど、權現の御社の行手の方など、若木ながらさかり也き。さと吹く朝風のひやゝかなるにぬれたる花びらの吹雪と斗り散みだるゝはいとをしくて、おほふ斗の袖もがななどいはまほしけれど、例のと笑はれんがうしろめたくてやみぬ。澄田川にも心のいそげばをしき木かげたちはなれて車坂下るほど、こゝは父君の世にい給ひし頃花の折としなればいつもいつもおのれらともなひ給ひて朝夕立ならし給し所よと、ゆくりなく妹のかたるをきけば、むかしの春もおもかげにうかぶ心地して、

　山櫻ことしもにほふ花かげにちりてかへらぬ君をこそ思へ

心細しやなどいふまゝに、朝露ならねど二人の袖はぬれ渡りぬ。山下といふ所よぎりてむかし住けん宿のわたり過るほど、よの移り行さまこそいとしるけれ。まだ八と

せ斗のほどに下寺といひつるおきつち所は鐵の道引つらねて汽車の通ふ道とは成ぬ。其車とゞむる所を始め、區の役所、郵便局など、其頃思ひもかけざりしものあまた所出來にたり。わがはらから難波津ならふ頃、その師のがり行とて常にこのあたり行かよふほどやがてはかくならんなど人の語りて聞かせつれど、其はいつのよの事なるべき蜃氣樓のたぐひにこそと打笑み草にしたりしも、よの事業の俄かなる早くも開けんやうに成りにたるを、おのれらこそあれ其折に露たがはず何仕いでたる事はなくて徒にとしのみ重ねたるよと打なげかれぬ。このほとりより車ものして角田河までは行たり。枕ばしといふより車はかへしにき。散もはじめず咲ものこらぬ花の匂ひいとこまやかに、遠くのぞめば只一村の雲かと斗うたがはれ、近く見渡せば梢につもる雪かとのみ見ゆめる。まだ人々少なきほどゝて花のかげを我が物にしてみありくほど、まこと小蝶に身をかへたらん心地ぞする。秋葉、しら髭のわたりよぎりて梅若の塚までも花を探りき。このあたりには人のかげもなきがいと嬉し。かへさには長命寺の櫻もちゐ求めて妹に渡しぬ。こは母君にまゐらせんとて也。おのれは三めぐりのほとりにて袂わかちぬ。かとり子ぬしの家はその御社のそがひに高くそびえたる三階がそれなり

おのれより先にみの子の君、つや子の君おはしき。例のざれごといひかはすほどに、今日は大學の君たちきそひ舟ものし給ふとてはや木ま〱にこぎいで給ふを折からいとうれし。遠眼鏡ものして見渡せば、此高どのゝしたこぎ行やうにぞみゆる。赤しろ青紫など組々にて服の色わかち、おのがじゝ漕ぎそふさま水鳥などのやうに心のまゝ也。堤にはその友だちの君なるべし、赤よ白よなどおのが引方を呼はげまして心もとなげに舟とともにかけ給ふもいといさまし。みの子の君うらやましげに見居たまひて、かち給はゞさもこそ嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはゞさもこそくやしからめと打うめきて笑はれにき。かゝりしほどに師の君も友だちの君たちも來給ひぬ。龍子の君、靜子の君はきそひ舟見にまねかれ給ひてこなたのむしろには後にこそつらならめとて出行給ふ。難陳などもよふすほどまことに心や空にあくがれけん花のかげ斗みえてそゞろにすぎぬ。折から花火のあがりぬれば師の君

　　花にはなびをそへてみるかな

とかき給ひて此かみつけ給へと伊東の夏子ぬしにしめさせ給へば、君たゝちに、

思ふどちまとゐするさへうれしきを

とかいしるし給ひてさしおき給ふさま例ながら優にうるはしうこそ。更にみの子の君句のしもかき給ふ、

蛙の聲ものどけかりけり

おのれにかみをとすゝめたまふに打おどろかれて、かの花かげにあくがれありくうかれ心呼かへすなどまことにあわたゞし。時うつるとせめられて、

おもふどちおもふことなき花かげは

といひたらんやう成しがうつしごゝろならねば覺えず。猶君たちの玉の言の葉いとしげかりしもみな忘れにけり。この事終りて後久子の君が引すさび給ひし琴のねは心なきおのれさへ松風のひゞきともやいふべからんと思はれ侍りき。いでや日もくれなんとすなるを御ことのねに心はひかるゝものから、花かげのくらくならんもいとをしければと師の君のの給ふ折しも、龍子の君もしづ子の君も歸り來給ひぬ。あるじの君今しばしとも、の給ひしかど、まかり申して出ぬ。供なる男子ども、酒など給ふほどなれば後よりこよとて、師の君はじめ十三四人して堤には來たりぬ。折しも日かげは西にかたぶきて夕風少し冷かなるに。咲あまりたる花の三つ二つ散みだるゝは小蝶な

どのまふやうにみえてをかし。酔しれたる人の若き君たちにざれ言などいひかくるぞろうがはしくもいとにくし。やう／＼日の暮行くままにそれらの人はかげもとゞめずなりにたれば、今は心安しとて花の木かげたちめぐり、おのがじゝざれかはすほどにい　し〃名殘なく暮はてゝ、川の面をみ渡せば水上は白き衣を引たるやうに霞みて向ひのきしの火かげ斗かすかにみゆるも哀れなり。いでやまかりなんよ、月だにあらばよかるべきよなんめるを中々にうしろめたければと師の君の給ふも實にことわり、若き君たちのみなればなり。今しばしともいはまほしけれど、供の男子なども來てそゝのかせば、いとをしけれど木かげ立はなれて車ものする折から、春雨少し降そめぬれば別れの涙にこそとの給ひかはす。枕ばしまではもろともに成しが、こゝよりおのがじゝ行別れ給ふさままことに殘りをしげなり。まことに春のうちの春ともいふべき日なりと思ふにも、今しばし空の晴なましかばとおもはるゝはかの蜀をのぞむとかいへる人心にや。

十五日　雨少しふる。今日は野々宮きく子ぬしがかねて紹介の勞を取たまはりたる半井うしに初てまみえ參らする日なり。ひる過る頃より家をば出ぬ。君が住給ふは海

近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。かねて一たび鶴田といふ人までものすること有て其家へは行たる事もあれば、案内はよくしりたり。愛宕下の通りにて何とやらんいへる寄席のうらを行て突當りの左り手がそれなり。門くゞりいりておとなへばいらへして出きませしは妹の君なり。此方へとの給はすまゝに、左手の廊下より座敷のうちへと伴れいるに、兄はまだ歸り侍らず今暫く待給ひねと聞え給ひぬ。誠や君は東京朝日新聞の記者として小説に雜報に常に君があづかり給ふ所におはせば、さもこそはひまもなくおはすべけれと思ひつゞくるほどに、門の外に車のとまるおとのするは歸り給ひしなりけり。やがて服など常のにあらため給ひて出おはしたり。初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならはねば耳ほてり脣かはきていふべき言もおぼえず、のぶべき詞もなくて、ひたぶるに禮をなすのみなりき。よそめいか斗おこなりけんと思ふもはづかし。君はとしの頃卅年にやおはすらん、姿形など取立てしるし置かんもいと無禮なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと良く面おだやかに少し笑み給へるさまの誠に三才の童子もなつくべくこそ覺ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豐かにこえ給へばまことに見上る樣になん。おもむろに當

時の小說のさまなど物語り聞し給ひて、我思ふに叶ふべきは人好まず、人このまねば世にもて遊ばれず、日本の讀者の眼の幼ちなる新聞の小說といはゞ有ふれたる奸臣賊子の傳或は奸婦いん女の事跡樣の事をつゞらざれば世にうれざるをいかにせん、我今著す幾多の小說いつも我心に屑としてかきたるものはあらざるなり、されば世の學者といはれ識者の名ある人々には批難攻擊面も向けがたけれど、いかにせん我に名譽の爲め著作するにあらず、弟妹父母に衣食させんが故なり、其父母弟妹の爲めに受くるや批難もとより辭せざるのみ、もし時ありて我れわが心を持て小說をあらはすの日あらんか甘んじて其批難を受けざるなりとの給ひ終はつて大笑し給ふさま誠にさこそと思はれ侍れ。猶の給はく、君が小說をかゝんといふ事譯野々宮君よりよく聞及び侍りぬ、さこそはくるしくもおはすらめどしばしのほどにこそ忍び給ひね、我師といはれん能はあらねど談合の相手にはいつにても成りなん、遠慮なく來給へといとねんごろに聞え給ふことの限りなく嬉しきにもまづ淚こぼれぬ。物語りども少しする程に夕げしたゝめ給へとて種々ものして出されたり。まだ交もふかゝらぬものをと思へばしば〲辭すにゝ君、我家にては田舍ものゝ習ひ舊き友と新らしきとをとはず美味美

食はかきたれど箸をあげさせ參らするを例とす、心よくくひ給はゞ猶こそ嬉しけれ、我も御相伴をなすべきにとあまたゝび聞え給へば、いろひもやらでたうべ終りぬ。かゝりしほどに雨はいや降に降しきり、日はやう／＼くらく成ぬ。いでや暇給はりなんといへば、君車はかねてものし置たりのりてよとの給ふ。歸さにしたゝめ置たる小說の草稿一回分丈差置きて君が著作の小說四五册を借參らせて出ぬ、君がくまなきみ心ぞへの慕しく八時といふ頃にぞ家に歸りつけり。

廿一日　夜野々宮君吉田君參る。野々宮ぬしが役にて園遊會のもよほし有とやらんに、其時持參らせ給ふ景物樣のものゝ相談せばやとて來らせ給ひし成き。同夜十一時頃歸宿さる。此日先の日の小說の續稿成りたるをもて明日は桃水師のもとへまからんとて其夜淸書すべかりしも、五回斗かきたる程に母君のあまり夜のふくれば明日の事にせずやとの給はすまゝにやみぬ。

二十二日　例の午後よりなから井うしをとふ。種々のもの語りども聞えしらせ給ひて先の日の小說の一回新聞にのせんには少し長文なるが上に餘り和文めかしき所多かり、今少し俗調にと敎へ給ふ。猶さま／＼の學者達をも紹介し參らせんなれどいさゝ

かさわる所なきにしもあらねばやみぬ、されど吾友小宮山即眞居士は良師ともいふべき人なれば此君のみには引合せ參らせんなどの給ひ聞ゆ。昨夜かきたる丈の小說の添删給へとて差置たるまゝ此日は早々歸りぬ。人一度みてよき人も二度めにはさらぬもあり、うしは先の日ま見え參らせたるより、今日は又親しさまさりて、世に有難き人哉とぞ思ひ寄ぬ。

廿四日　までに草稿名殘なくしたゝめぬ。あすは小石川の稽古日なり。其夜は中々にあわたゞしかりき。其夜郵便して草稿は半井うしに送り參らせぬ。

廿五日　雨ふる。つとめて小石川に行く。ひる頃より空名殘なく晴て日かげ花やかに差入りぬ。今日は何となく物の手につかぬ樣に覺ゆるは何故成しやおのれもしらず暮々に歸宅す。其夜桃水師のもとより消息あり、小說の事にもの語りあり、かつ先の日約し置きし即眞居士への紹介をもなすべければ、さわる事なからんには明日午前より神田の表神保町俵とかやいへる下宿までもうこよとなり。母君にも斗り參らするに行ねとの給ふ、今宵は何となくむね打ふたがりてねぶるべき心地もせざりき。

あけの朝早く起出てみれば空はいつのまにか黑きくもておゝはれはてぬ。今日は

雨にこそと、打わぶれば、母君降なましかば行かでも有なんとの給へど、私の用なるを空しくまたせ參らせんやは、つよく降なばそは詮なし大方ならば必らず參らんとて支度する程に、雲の切間みえ初ぬといふ、うれしくて家をば出ぬ。田町といふほとりより又くろき雲おびたゞしく出來て雨俄に盆をかへす樣に成ぬ。今更に歸りなんか同じことぬれぬべければ志す方へとて、此ほとりより車ものしてゆく。小川町の洽集館が南の方へ新らしく開きたる土地の下宿屋なり。おのれこのとしまでまだ下宿に人をとひたる事なければ、何となく心おくして入もえかねたれど、はつべきならねば、ねんじて半井うしやおはすといひ入たり。はしたあやし氣の面もちして誰君にやと問ふ我名を通ずれば、此な方へと伴ひ入られぬ。少やかなる間幾間かしらず數多かり、うしのいませしは二階下の座しきにて、二間に住居給ふかとみゆるに、簞笥などの並べあるは手廻りたる事よと心には思ひて座につくほど、君は手紙したゝめ居給へりき。暫し免させ給へとてかき終り給ふ。今日は洋裝にて有たり。やがて例のいとおだやかに、昨日はあまりよき日成しものから今日の雨をば心づかで手紙參らせたるはいとあしき業なりき、實は小宮山君も俄に腦の病ひやしなはんとて、此明日かま倉地方へ赴

むかれたるをとていと〳〵う氣の毒がり給ふ。小説の事につきてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次ぎはかゝるも書み給へ、おのれかねてよりかゝんの心組み有しかども暇を得ずして日頃過ぬとて、かく〳〵してかくせばをかしからんなど物語り給ふ。それより先に今日はまづ君に聞え置度事ありてとの給ふ、そは何事にかと問ひ參らすれば、いなとや餘の事にもあらず。余やいまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを交際の工合甚だ都合よろしからずと、君眞に迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へばおもて火の樣に成ておのが手の置場もなく只恥かわしさをもておほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案ぜり。そは外ならず、余は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合をもなすべければ、君は又余をみるに青年の男子なりとせで同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり。我が家の貧なるをも君しろしめし給ふものから、もし差つかゆるよもあらば何にても言ひおこせよ、我身に應ずる事は心の限りなしてんなどの給ひて、君が貧困の來歴など殘るくまなくつげ給ふにもさま〴〵思ふこと多かり。ひる飯又君がもてなしにあづかりて家にかへる。師がの給ふ所をきけば、吾が家のまづしきは未

だまづしとすべきにもあらず、君の經來り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覺ゆる。

五月二日　小石川稽古なり。空めづらしく晴渡りて一村のくもゝなければ、來給ひし人々いと多かり。師の君の給はく、いかで今日過さず植物園のつゝじ牡丹みてこんはいかにとうながしたまへば、人々いとよき事なんめりとてみな〳〵うれしと思ひたり。三時頃より十三人して行。師の君例の直なる道は行たまはでおやしう傳通院うら藪めきたる所を分おはす。行ども〳〵其道ならねばゆかるべくもあらず、里の子の草村に遊び居たる呼びてとひたるにいとよく敎へくれたり、見にくき子成しかども可愛かりき。五時といふを限りに人は入ぬなりといふを十分ほど前なりしかばあわたゞしく切符もとめて入ぬ。中のけしき人々のさまは詞たるまじく、餘日記しぬべし。六時頃みな〳〵かへる。

八日　桃水君をとふ。をしへをこはんとてなり。此日は風あらくして天氣好かりき例の時に趣き侍りぬ。君やがて歸宿したまひて小說のことに付て種々ものがたりどもあり。例のねんごろにをしへを給ふ、今日ぞ小宮山君に紹介いたし侍らんにしばし待

給へよ、今社よりの歸さにこゝへ寄給ふべければとなり。少し有て日かげやゝ落ぬべき頃に即眞居士は參られたり。君はよはひ卅四斗桃水ぬしに二つのこのかみにおはすとか、たけたかやかならずこえ給はず人がらいとおだやかにみうけ侍り。ものがたりするほど例の夕げのむしろ開かせ給ふ。我身は久しう有ぬべからんもうしろめたければしば／＼暇たまはらんといひて出ぬ。み心ぞへの車して歸る、夜八時。

十二日　ぬしのもとよりふみあり。麹町平河町といへるに屋轉りしたまひしのみしらせなり。かつはものがたり度事侍ればまみえられべくやとなり。やがてかへししたゝめておくる、十五日にまからんとて、申す。

十五日　ひる過るほどより契りしやうに半井のうしを平河町にとふ。こたびの家はいとめでたき所なりけり。行てのちしばし有て歸らせ給ふ。何等のみ用にやとゝひ參らするに、いなとよ我がしる大阪の書しにて雜誌をこたび發兌せんとす小說かく人世話し給はれと申しつれば君をこそと物語りおきつるなれ、さるをあやにくに露國太子殿下の急變にて俄に用事出來たりとて今朝しも汽車にて歸阪なしたり、斷りまゐらせんともおもひたれどはや及ばじとおもひてさしおきぬ。百罪ゆるし給てよと詫給ふも

心ぐるし。此日はものがたり少しして歸る、日沒前成し。
廿七日　前約の小說稿成しをもて桃水ぬしにおもむく。今日は我れ例刻より遲かりしをもて君既におはしき。種々我爲よかれのものがたりども聞えしらせ給ふ。歸宅し侍んとする時に今しばし待給へ、君に參らせんとて今料理させおくものゝ侍ればとまめやかにの給ふを例のあらくもいろひかねて其まゝとゞまる。やがて料理は出來ぬ、こは朝せん元山の鶴なりとなり。さる遠方のものと聞くにこと更にめでたし。たふべ終れば君いでや歸り給へよ、あまりくらく成やし侍らんなど聞え給ひて、今日も車たまはりぬ。かへりしは七時。
卅日　殘りの原稿郵便して送る。此日は礫河の稽古なり。
卅一日　みの子ぬしの發會三番町の萬源にて催しあれば、おのれは早くより趣く。會主としばしものがたり居るほど師の君もまた來給ひぬ。來會する人卅人斗おはしき五時といふ頃人々歸る。おのれは七時頃にや有けん家に歸る。
つぐの日　朝まだきにみの子ぬしに文參らす。手ならひども少しして、夫より小石川の師の君昨日いたくつかれ給ひつるやう成しが心にかゝればみ樣子みんとてとふ。

さしたることもおはさゞりき。ひる頃歸る。

二日　あす半井うしへまからんとてふみ參らす。

三日　空少しく曇る。例刻より桃水うしをとふ。君近きほとりの友がり行給ひきとてはしため迎ひして歸り給ふ。此次の趣向ものがたりて君が說をとひ參らすに、思ふふし名殘なくいひ聞せ給ふ。やがて雨少し降初ぬ、暇こひ參らすれば今しばしなどの給ひて、あやし君來給ふ折には必らず雨天なるも、しかし今日は雨降ぬべきことこそあれ、いつになく今朝三時といふに朝床はなれつるはとの給ひて、いたく笑ひ給ふ。さもや侍らん此後我身まうでん時にはかならず朝寢し給ひてよとざれごといへば、君いとおもてにして、うけたまはりぬとの給へしはいとおもなかりき。門の戶いづるやがて車ものして歸る。家に入る頃より雨いといたく降る。はやく暇申してよかりきなどかたりかわす。

六日　小石川稽古なり。人々におくれてみの子ぬしと二人手ならひする。歸路くら子ぬし我家へ來給はんとあるにいなみかねてともなふ。夜八時頃歸り給ふ。賴まれたる針仕事遲くまでする。

七日　よべの殘りの仕事ども早くよりして十時頃出來る。それより机にむかふ。

八日　今日は灸治に行ばやの心ぐみ成しも空もやう少しあやしければやめにす。午後より晴る。夜十二時床に入る。

九日　快晴。今日は礫河の月次會なれば早朝より支度などせばやとて四時頃起出づ十時頃至る、來會者廿人斗、散會は五時頃成き。おのれは少し殘りて名古屋の禮子ぬしに送るべき各評の名先などしたゝめて、歸宅せしは既に日暮て後成し。今日の床かざりは水府立原某が畫きたる竹に鶴の掛ものに古さつまの花瓶に夏菊と姫百合の投入も優にやさしかりき。小笠原家よりマキノーリヤとやらん名はこちたけれどうるはしき花送られたり、もと我國のものならねば趣はことなりたるものから中々に見所多かり、葉はゆづり葉に似てそれよりはうらの色薄く、花はふやうに類したれど中のしべことなれり。名殘なくひらけばさし渡し六寸位にはなれりとか、名のうるはしからぬ爲歌によまれぬこそくちをしけれ。此花のみならずかゝる類ひいと多かり。

十日　朝より空くもる。みの子ぬしとゝもに今日は圖書館に書物みに行んの約成しかば序をもて灸治にも行かばやとて、ひるより家を出て、下谷に行く。二時頃よりみ

の子ぬしと共に圖書館に行く。六時歸宅す。

一日師の君のもとに小集有し時坐中の男女の年齢比べせんといふ人あり、夫をかしからんとて師もの給ふ。男は六人にて女は十四人有り、負くべきにはあらずとおもへば、文雅堂のあるじ伊豆田一渡りみ渡して數をとる、鈴木重嶺うしは七十八との給ふこれ斗にても女子の方の四人振は有るよとて一同笑ふ。梅村のりをぬし七十、加藤安彦うし七十二。はや二百の數をこえたり。江ざし恒久君七十。木村正養君少し下りて四十九、水野忠敬子四十。合て三百七十九との給ふ。女の方は師の君四十八、伊東延子ぬし五十九、みの子ぬし三十五、とよ子ぬしも同じく。かとり子ぬし四十七、小川信子ぬし四十五。これら少しは數のうちながら、殘るはいづれも〳〵口をしきまでに若し。高田不二子ぬし廿三、前島きく子ぬし廿、田邊靜子ぬしもおなじく。伊東の夏子ぬしも同じくといへば、師の君雷同し給ふにはあらずやとの給ふ、小笠原のつや子ぬし十六、廣子ぬし十九。中む田恒子ぬしの十三などいふこと更に口をし、おのれは廿といへば師の君あまりの掛直なり、まけじだましひかと笑ひ給ふ。誠のことなるものからいつまでも若き樣に思ひ給ふもをかし、かぞふれば四百十九なり。あなうれし

や四十斗のかちにこそとみな〳〵どよむほどに、小出粲ぬし來給ひぬ、すはや味方の一人ふゑたるよとて男方又色めいてみゆ。君はいくつ〳〵とせめとへば、おもむろに戸籍改めにや拙者は當年六十歳との給ふ。まことにはおはすべけれど空言にやと斗にくし、決をとればこなた廿のまけに成ぬるぞ限りなくうらめしきや。

十一日　今日も空曇る。入梅なりといへればさもや有べし。今日の新聞上に小舟町二丁目石崎廻漕店所有汽船石崎丸小樽より東京へ向て出帆し、四日の夜なるべし銚子の沖合に差かゝる折しも如何になしけん脆くも沈沒を爲て乘組五十餘名殘りなく溺死したりとか。同五日の朝銚子の濱邊に一片の救命標流れつきたりしより漸く人の知る所と成しに、やがて隨時に屍體小荷物など漂着したりき、さても何故にかゝる難破船の有し事と燈臺局は申に及ばずしるべ絶えてあらざりしやといふに、救命の汽笛の燈臺局に達ざりしをみれば海濱を去ること三里以上の沖合にて沈沒は爲したるなるべしと也、大方は犬吠岬の西南長崎浦の前面邊りなるべしや、このあたり暗礁多き所なれば也、誠や當夜は東風つよく吹あれ波浪高くことに濃霧さへ海面を閉たる夜也とか。とにも角にも涙ぐまるゝ物がたりにこそ。

十三日　今日は小石川稽古也。朝七時頃より行。師は今しも起出給ひし所也き。みの子君より乙骨まき子君の手紙を受る。石田農商務次官の紹介を以て大島みどり君入門す。伊東夏子君より依田學海君著作の十津川の物語少し聞く、人々の歸り給ひし後例の通りみの子君と二人習字をなす。歸宅の時師の君より四つ入單物一反賜はる。

十四日　雨天。今日はみの子君と共に圖書館へ行約束成しも、さはり有て行難ければはがきにて其旨を斷る。國子關場君へ行て書物ども少し借てくる。うちに學海居士の十津川もありき。昨日風說を聞てひそかに欽慕したりしに不斗見る時をうるもいとうれし。

十五日　まき子君への返事出す。午後より秀太郎來る。今日も終日雨天成りし。半井君を訪はんの心組成しも俄に心病ましければやめにす。

十六日　朝より雨天。早朝三田の兄君より書狀來る。午後秀太郎遊びに來る。日沒後半井うしより書狀來る。物語り度ことあり明日か明後日來よと也。例の小說の事なるべしとおもふにも胸つぶ〳〵と鳴こゝちす。何となく心にかゝりて夜一夜いもねず夜もすがら大雨成し。

十七日　朝まだきはまだよ半の餘波の雨雲立おほひて晴ぬべきけしきもさらにみえざりしを、ひるつ方より少し雲の絶まある樣に成ぬ。いでや今日こそ半井うしをばとはめとて俄に支度どもして午後二時といふ頃より出なんとするはしに奥田の老人來るさらば諸共にとて出ぬ。奥田の嫗とは眞砂町にて別れたり。かなたの家近く行ほど、こゝかしこ軒提燈ひまなくかけつらねたるは今日なん日枝の祭禮なるべし、おぞや心もつかでとおもひぬ。やがて例のおとなへばはしため出來ぬ、導かるゝまゝ例の座敷にまう昇りて御歸りはいまだにやととひつるに少しいぶかしげの面持して君は今日は郵便は給はせざりしにやといふ、いなとよ妾よりは參らせず昨日うしよりみ消息有て今日あたりこよとの御仰成しかば成とこたふれば、さらばやがて歸り給はん今朝家を出給ふ時今日は會議の有べければ歸りは例より遲からんなど仰給ひしかばといふに、さらば今しばし置給てよ、さても歸らせ給はざれば又こそ參らめなど物語るはしにかう子君歸り來給ひぬ。まさなごといひかはすはしに五時も過たり、いよ／＼歸らせ給はぬにやあらんさらば日の暮ざらんほどに暇申さめと思ふ折しも、例の夕げのあるじまうけし給ひぬ、いなみ申さんもさすがにてしばし物して終りしほどに師は歸り給ひぬ

ものがたりどもいと多かり。小宮山ぬしの深き御恩慮例のうしの情深きなどかたじけなしともかたじけなし。されど筆にまかしてかいしるさんもかつは我身づからやましきこともあり、よく爲し得べき事にあらぬか、今しも思ひわきがたければこはおのづからあらでのちに昔し語にもならばいとうれしけれと今はもらしつ。暇乞申して出る頃日はやう〳〵西にかたぶく頃成し。今日は道かへて濠端を歸る。夕風少し冷やかに吹てみほりの水の面て薄暗く、枝さしたるゝ松の姿伏したるも起たるもさま〴〵にいづれ千とせのこもらぬもなく、老てます〳〵さかんなりなどいふはかゝるをやなどおもはる、み返れば西の山のはに日はいりて赤き雲の色のはたてなどいふにや細く棚引たるも哀なり。行かふ人の無きにはあらねど市路ならねばいとさう〴〵し。堤の柳の絲長くたれてなびくは人もかく世の風にしたがへとにやいとうとまし。引かへて松のひゞきのたう〳〵となるは高きいさぎよき操のしるべ覺えて沈みし心も引起すべくなん。秋の夕暮ならねど思ふことある身にはみゐる物聞くものはらわたを斷ぬはなく、ともすれば身をさへあらぬさまにもなさまほしけれど、親はらからなどの上を思ひぬれば我が身一つにてはあらざりけりと思ひもかへしつべし。あゆむともなしにいつか九段の

坂上には成ぬ。こゝよりはいとにぎはゝしく馬車など音絶えずはせ行ばおしもとなどもあぶなげなり、猶おもひつゞけてうつむき勝にくる樣のいかにあやしかりけん、道行人のおもてさしのぞく樣にするもいとつゝましく、人わろければさしもみえじと思へど猶おのづから色にもるる成べし。家に歸りたるはくらくなりて成けり。

十八日　朝より晴なり。めづらかにと嬉しく、人より茄子苗の若やかなるを貰ひて母君植る。

十九日　今日も晴なり。朝とく庭前の梅の實をおとすみそこしといふ笊に一ッありたり。あやしう蟲ばみたるなどもあれば正味は夫より少なかるべし、こは先の日こゝの家差配の大方おとしてもてゆきたる後なればにや、殘らずにては二升の餘なるべしなどいふ。ひる過るほどより、今日も圖書館へ行く。先の日の約も有ればみの子君を誘ひつるに君待つけて共にとの給ふ。六時頃までみてかへる。

廿日　朝戶明てみれば空名殘なく曇りて今にも雨降ぬべき氣色なり。あなうしや今日は稽古日なるをと打うめかれぬ、と斗有て雨こぼれ來ぬ。家を出る頃にはますます降にふる。さればにや來給ふ人も少なかりけり。師の君は昨日よりあやしく心常なら

ずおはすとかや、例の過度に脳をつかひ給ひし故なるべし、さは今日は靜かにやすませたまはんこそよけれとて、人々をばみの子ぬしとおのれとにてあづかり申て稽古などす。ひる頃よりひのかげやうやくみえ初めて歸路はいとよく雨晴ぬ。今日しも始めて川越の中島ぬしが嫁の君に逢まゐらせたり、動物詠史といふあやしき詞聞たるもをかしかりき。結髪の歴史めきたるもの語も有たり。近き頃の

いてふ髷わりからこ　ちご髷

かつらひたぢ　今まれにはゆふ人あり

島田くずしかたはづし　茶せん

このうちにて今もゆふ髷もありされど大方今は

いてふがへし

こは大人となくこどもとなくゆふむすびがみといへるものなるべし。儀式の折などゆはぬかみ也。

たう人髷

こは十年より十四五までゆふ也。されどまれ／＼は十九廿位にてゆふ人もあれどみな貴孃のみなり。

高島田

これは此頃のはやりにぞあめる、十六七より廿四五まで島田といへば大方これ也。唄女の樣なるものさへこの頃にこれのみなり。

桃わりいてふ

品のよき髷にて一時いたく流行して都の中の女といふなんないはぬはなかりしをしばらくにしてすたれたり。

ばちがたしま田　唄女などの若からぬがゆふなり。素人にても少し年寄はゆふ、總て品は宜しからず意氣といふ方にやあらん、卅年の唄女いはゆる姉さんと云ふ樣は大方是れなり。島田より丸髷にうつる時にはこの髷誠によく似合へり、人の好みながら赤き切れかけたるも可愛氣なり。

お初丸髷

束髪は前がみを切て眉の上まで下げたる童などのまだ長からぬ髪を赤き切してゆひ下げたるこそこよなくうつくしけれ。

廿一日　終日ふる。其夜十一時頃大雷、跡にて聞ば淺草久右衞門町へ落たるとかや

廿二日　晴、午後より師の君の御樣子見んとて小石川へ行、師と共に中村君の家見に行。明日君は歸京し給ふなりとか。今日は國子のたん生日なり、いさゝかいはひなどす。

廿三日　晴。早朝より灸治に行、圖書館へ行、辨當などして行て午後二時歸る。西村君來給へり。

究竟は理即にひとしとぞきく、入りなんとする昔の迷と覺めはてぬる後の悟とそれ大方は似たるべし。此わか葉かげそも迷夢のはじめか悟道のしをりか、かれ木の後に見る人あらばとて、

なほしげれくらくなるとも一木立

わか草（二十四年七月）

山家如春

冬籠る山した庵は大方の
　よのはるよりものどけかりけり

雪中待友

契りてはおかぬものから初ゆきの
　ふる日は友のまたれぬる哉

草漸青

冬がれしこそのふる葉の中よりも
　やゝ青みたる垣の若草

帰雁入雲

のどかなるとこよの春に帰るらん
　雲路に消る天つ雁がね

月にのみかゝるとおもひしうき雲に
　かげかくれ行春の雁がね

花間蝶

うらやまし春の小蝶はねぶるまも
　花の木かげをはなれざりけり

夢とのみ消るをみてもたのしきは
　うきたる舟の花火成けり

西宮と云内親王對面の時に總角の者は着す半臂汗衫、下襲、表袴、玉之帶等を、

うらやまし世の風しらぬ谷かげに
　ちよをしめたる松も有けり

夕がほのみになるをのみまつやどの
　かきねにをしき花の色かな

つのくにのこや何といふ花ならん

ながむる軒に日ごとしげるは

七月十七日　みの子ぬしが月次會なり、ひる少し前より家をば出づ。道しるべにとて母君も出立給ひぬ。高等中學の横手の坂下るほど雨少し降來ぬ、空は薄墨の樣なるくもやう〳〵立重なりてやがて夕立しぬべしなど道行人もいひぬ、眞下まき子の墓谷中なれば母君と共に墓もうでする程、空いよ〳〵くらく成て雨いよ〳〵降にふる、こゝにて母君に別れ參らせ、みの子ぬしの家は直其むかひの道なればやがて行ぬ、集會者は十八人斗成し。

七月廿日　今日は土用の入とぞいふ、土用三郎とかや、この三日のほどの天氣は作物にいといたくかゝる所ありとて、人々空をあふぎて思ひわづらふに、朝よりかきくらし打くもりてひる過るころより少しこぼれ來ぬ、さし當りては何ごとも覺えねどことわざいとわづらはしうこそ、そのけにや今日は風ひやゝかにしていと暮しよし。

廿一日　朝より雨降る。晝少し過より稻葉君參る、いよ〳〵落はふれにしかば車引かばやと物語らる、かなしきこといと多かり、五時頃歸る、其夜地震す、五分間斗にて止む、夜に入ては雨いよ〳〵降る、此夜新聞號外來る、蜂須賀君貴族院議員に成り

富田鐵之助君府知事と成る。

廿二日　朝來雨天。今日の新聞に下田歌子君加納君のもとへ輿入せられたる事あり。午後一時頃師の君のもとより端書來る、縫物の依賴なりければ直に行く、單物を持來る、夕刻まで縫物をなす。暮てより國子ともに買物に通りまで趣く、今宵はびしやもんの緣日成しかば雜沓いと夥し。女郎花朝顏などの植木もいと多くみえたり、歸宅後雨やゝ降增る、久保木より魚少し貰ふ。今日釣に行たるのなりけり。

廿三日　朝より空晴て日のかげいと暑し。午前の内に浴衣一枚縫終りぬ。午後より上野伯父君參らる、晝飯を出す。種々の物語りあり、四時過に歸宅せらる。夜に入りて野々宮君、吉田君參らる。野々宮君は試驗休みなるよし、十一時歸宅せらる、今宵は夜業なしにて終る。

廿四日　晴天。午前にかいまきの綿入をなす。午後より西村君、菊地のお政君參らる、西村君は三時、奥方は四時ごろ歸宅せらる、菓子折をもろふ。日沒針仕事終る。此夜一時に床へ入る。

廿五日　晴天。今日は礫川稽古なり、よべ仕上たる縫ものに火のしなどして出たつ

田町より車を取てゆく、今日は少し遅刻なりけん、最早五人斗來給ひたり、ひる頃みな〳〵歸宅せらる、二人三人のこりて今一題よみかはす。三時頃歸宅す。頭いといたくてせんかたもなく苦しければ今宵は十時に床へ入ぬ、夢におそはれておびえなどす、かしらのあしければなめり。

廿六日　不忍の蓮、入谷の朝顔、此頃花盛りといふ。

廿八日　晝は晴、夜に入てより雷雨いとおびたゞしく、十一時頃には屋の上打貫様にふる、更てや止けん。

廿九日　空名殘なく晴渡りて少し風さへ吹そはりつ、いと暮しよき日なり、晝後母君神田へ行給ふ。其頃より又空曇り來て大粒なる雨降來ぬ、歸らせ給ふ頃には又晴ぬ夜十時頃より雷雨おびたゞしくす。

卅日　今日の新聞によれば一昨夜横濱の大雷雨成しといふ、東京のみにはあらざりしなり、地方出水の模樣あり、おどろ〳〵しきこととやいとおぼつかなし。今日は春木座の棟上式なり。午後より先生裕衣縫ふ。夕かた大方出來上る。三枝信君來る、母君例の土產物をくるゝ。夜に入て又雨降る。

卅一日　晴天。浴衣縫上る。午後より書もの、明日小石川稽古なれば此夜一時まで起居る。

八月一日　晴天。朝六時半に宅を出て小石川に行、未だ誰も來たらざりし、師君としばし物語りして菓子など給はる、此次の仕立物賴まる、友達の君は八時頃に揃ふ、大方は避暑に趣き給ひつれば來集者も多からず、十人斗成き。題二ッ、午後二時頃諸君歸る、後にて又しばしもの語りして三時頃かへる。前島君より小說本十二冊借る、（むら竹及涙香の小說）、此日佐々木君代岡村來り、師君に貸置たる吸入器の催促成けり、所在不分明にていたく當惑し給ひけり、きね女暇を乞ひて鄉里へ歸るといふ、去れども師君はさまで不自由を憂ひ給ふ樣子なし、吾宅へ歸りしは三時過成し、例の小說氣違ひとて此夜十時まで取付限りにて十冊計讀みぬ、しれたる業成や、國子今日關場敬に反物を貰ふ、幾度となく取出しては打眺めたるは嬉しさになめり、此夜山下次郞來る、直一君大病のよし、夜具仕立貰度とて成けり。

二日　晴天。母君山下の見舞に行給ふ、九時頃稻葉君來る。午後山下信忠君參らる直一君病氣に付母君に相談にてもあるやと思はれたれど留守なればしば〳〵依賴して

歸る。母君は四時頃歸宅さる。

三日 晴天。稻葉君參らる。姉君來る。母君岩佐へ參らる。午後母君近邊の子供に物をやる大悅びの事、國子當時蟬表職中一の手利に成たりと風說あり今宵は例より酒甘しとて母君大ひに醉給ひぬ、國子と兩人湯島へ買ものに參る、山加に切を買ひ、中島屋に紙を求め、かね安にて小間ものをとゝのふ、日暮てかへる。

四日 早朝稻葉君押かける、正朔君を伴ひ來たりて預りくれよといふ、されば今日一日はとてあづかる。午後母君山下氏の見舞に參らる。朝小雨ふる。やがて晴天。

五日 稻葉君來る、正朔を今夕迄預りくれ度しとて依賴す。午後江崎牧子君より郵書來る。國子と共に安達君へ暑中見舞に行腦病の物語りをなしたるに、伯父君はくれぐ〱讀書作文等をなさゞる樣にと物語らる、腦は神經の集合する所なれば患はこゝに止まらで餘病を引出すこともあり、又は充血して不測の禍を生ずることも有るべければ、小患の中によく養へよとて自身をたとへに引て諫めらる、承はりて歸る、夕飯したゝめゆけなどいひつれど、しのばずの蓮見ばやとて早々歸る。しのばずの記は別にしるす、歸路は池の端をめぐりて大學を通拔てかへる、五時過成し。此夜稻葉氏又來

たる、明朝まで正朔置貰度よしいふ。

六日　晴天。早朝より運動にとて近邊を散歩す、歸りて我の廻りを掃除す。

七日　晝晴、夜に入而より雷雨す、土用明といふ、この夜徹夜。

八日　早朝師君より手紙來る、一兩日は膓かたるにて腹痛たえがたければ今日一會休むべきよし成けり、依賴の裕衣も出來上りたるをもて直ちに見舞に行く、さしてのことにもあらずといふ、又綿入を仕立くれよとて一枚たのまる、歸宅せしは九時頃成しかば、これより圖書館へゆかばやとて出づ、空は一點の雲なくて燒樣なる太陽の光り烟かとみゆる大路の砂ほこりなど暑しともあつし、大學を拔て池の端へ出づ、茅町のほとりより蓮の淸き香遠くかをりて心地もすが／＼しく成ぬ、ひろごりたるはにくしと淸少納言がいひけん夏の柳岸になびくかげもすゞしく、まして水の面みえぬ斗咲みちたる紅白の蓮明渡る風に葉うらのかへりてみゆるもをかし、蓮根取の舟つなぎたるこれのみはあらずもがなとおもふ、競馬の埒結びたるいとみにくゝあいなかりしが、ふるびて所々こはれなどしぬれば少し氣色なほりし樣におもふもひが心にや、東照宮の石の段のぼる程さと吹おろすかぜに杉の下露のこぼるゝも凉し、こゝのみは

さらに夏と覺えぬよ、圖書館は例のいと狹き所へをし入らるゝなればさこそ暑さもたえがたからめとおもひしに、軒高く窓大きなればにや吹かよふかぜそゞろ寒きまでなるいと嬉し、いつ來たりてみるにも男子はいと多かれど、女子の閲覽する人大方一人もあらざるこそあやしけれ、それもそれ多くの男子の中に交りて書名をかき號をしらべなどしてもて行にたれば、違ひぬ今一度書直しこよといわるれば、おもて暑く成て身もふるへつべし、まして面みられさゝやかれなどせば心も消る樣に成て、しとゞ汗にをしひたされて文取しらぶる心もなく成ぬべし、今は代言試驗も近付し頃成とかにて法律書取しらぶる人いと多かりき、思ふまゝのふみ借得てよむとよむ程に長き日もはや夕暮に成ぬるべし、園の梢に日ぐらし聲高うなきて、入谷のかねかすかにひゞき、窓にさし入る夕日のかげ少し薄く成ぬ、おどろかされて室を出れば大方人も歸りにけり、書をかへして門を出ればからすの打むれてねぐらへかへるかげさへみえ初ぬ、母君の今日は早くかへりね、よべよすがらねむらざりしに身もつかれなばかひなからんとてかへす／″＼仰られしを忘れしならねど、いと／＼おくれにけり、いざや近道をとりて谷中より歸らんとてくる、西日やう／＼かげろひて紅の色を斗殘してあすも晴

ようとうなひ子がうたふ聲も道いそぐ身にはあわたゞしく聞えぬ、床机といふもの表へならべてあらひたる裕衣ののりこわげなるをきて團扇もてむねのあたりあふぎゐるは今行水とりたるなるべし、十斗の女の子がしろいもの所まだらにつけて、三つ斗の子の汗ぼなど出來たるにやかしら斗いとしろくしたるをせをひありくもをかし、片町といふ所の八百屋に新芋のあかきがみえしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとゞ汗に成て目にも口にもながれいるをはんけちもてをしぬぐひ／＼して、はては少しいたくさへ成ぬ、日は薄くらく成たれど人のみるらんわづらはしくて傘はなほかざしたり、空橋のした過る程、若き男の書生などにやあらん打むれてをばしまに依かかりてみおろし居りたり、何事にかあらんひそやかにいひて笑ひなどす。しらずがほして猶いそぎにいそげばひとしく手を打ならしてこちむき給へなどいふ。何の心にていふにや書のかたはしをもよむ人のしわざかとおもへばあやしくも成ぬ。家に歸れば母君は外に出て待給へり、妹は夕げのもうけいそがわしくし居たり、只今まかり歸りぬなどいふはしに、いざ帶とけよ、衣ぬげよ、あつかりし成べし、つかれつらめ、湯もわきてあればあびてこよと、殘る方なくの給はするに、かたじけなくもうれしくも

覺えて、汗の麻衣ぬぎ捨てゆあみて上ればあらひ衣の白きを出して、留守のまにこれあらひて置きぬ、着かへよとの給ふ。妹は姉君み給へ、君が好ませ給ふものにて、おき侍りさつまゐりもこしらへ置ぬ、夕げいざとてすゝめらるゝに、すきたるはらの長き道を廻きぬればいとゞしくうゑたるにはいづれも美味ならぬはなくて打くつろぎてたふべ終りぬ。

九日　江崎牧子君へ返事を出す、甲府伊庭氏幷に北川秀子君へはがきを出す、國の帶を一本仕立、晝後植木屋用聞に參る、依て建仁寺垣結べき樣申付く、明日より參るべくとてかへる。洋傘二本張換へさす、一ッは甲斐絹二重張、一ッは毛繻子の平常持也、双方にて一圓十錢といふ。

十日　早朝より植木屋參る。

筆すさび

日日にみる所聞ところ思ことさま〴〵にこそあれ、行雲のごと流るゝ水のごと過ぎはてなん年月ののち立歸りてむかしをしのぶくさばへにもと、筆の行まゝ心の赴くまゝ富士の烟のぼりたる際のことこそしらね、ふもとのちりのはかなごとをそゞろにかいしるし置なり。

春はあけぼのといふものから夕べも猶なつかしからぬかは、日ねもす遊びし花の木かげやう〳〵くらく成ほど、かねのねかすかにひゞきてねぐらにかへるからすのころなどものどかに聞えて、

大治二年崇徳の帝の御時殿上御修法どもする夜居の僧阿闍利の衣など盗人ありてはぎたりとか、折柄朝家の衰へしさましるくこそ。

鴨長明が四季物語七月の部にいへることあり。凡情の愚なる鶏牛犬馬よりおとれるなり、日夜世話につかはれて惑のうちに酔をなし、酔のうちに死をなす、約せしが如く、誰も〳〵やがて靈と成べきを、我も人を祭り又祭らるゝ道理をしらずといへり。

世の人耐しのぶといふことこそ萬の寶にもましてめでたけれ。またをくゞりけんかん信履をさゝげし張子房などを始めとして猶其ためし多かるべし。心におもはぬにはあらねど身のおこなふことの難きはいかなるにか。夏のよは更也冬も猶ともし火のもとにふみどもまなぶほどねぶたさのいとたへがたければ、氷の樣なる水かしらよりあびてしばしまぎらはすほどやがてこそあれ、身うち少しあたゝまり手足の常にかへる頃にははやいつか文の上にうつぶし居るこそあやしけれ。母なる人にこやなど呼さまされて始めて夢覺ぬるもはづかし。いでやこたびこそはとひたすらに念じて、ふたゝびふみ取あげて一ひら二ひらは少しおぼえあれど、夫より後は又同じ樣也。いふかひなく口をしくて父母の遺體とてひぢりはの給ふものから、もろこしにも其ためし有事よ、いかにしてかこのねぶさ覺してんと我もゝのあたりに錐の先少し突たてつれば、

其いたさはいとたへがたし。それも又しばしにてこゝろのこゝにあらねばにや、眼はみひらきながらよむ文はふとも覺えぬぞ心ゆかね。父君などのおはせし時昔し語りを聞けば子に伏し寅に起るとかや、いにしへの二時今の四時間いぬればよきもの也といへるを、我計かくねむきはいかなる故ぞも、こは病のなすわざにやともおもへり、おのれ十四計のとしまでは病ひといふもの更に覺えず、親もはらからもみな腦の病ひにくるしむなるを我は一人かしらいたきなどいふことふつになく、さればにやいときなきより物學びなど人よりはならひとること早くて忘るゝこと少なしなど、其頃の師もの給へりし、みづからが心にも一たび學びたることいかに年月ふとも忘るゝてふこと有べきならずと常におもへりしほどに、やゝ大人び行まゝにこゝにかしこに病ひ出來て、こと更にかしらいたみ肩などのいたくはれなどすれば物覺ゆる力とみにうせて、耐しのぶなどいふは更に出來うべくもあらず、昨日聞たるを今日忘るゝ夫はまだよし朝聞たるは夕に忘れ今學びたるを今のまに忘れぬ、かく成行てはて／＼はいかにかならんとすらんとおもふに、今より心細き事こそ限りなけれ。さはれ猶命の有なんほどは耐へもしのびもして學ばゞやとおもふもみのほどしらぬえせごゝろなるべし。

所替れば品かはるとやら人情風俗の異なること難波と伊勢の遠からぬさへあるを、ましてこれは左もこそあれと思ふもの語りを聞たるまゝかいしるす也。

倫敦人と巴里人との相違せること

巴里人は街道を行時右に倚り、倫敦の人は左による。巴里の人は兵營の樣に廣く大なる家に數家の人すめり、倫敦にては尋常なる家に一家族すめり、巴里にては集會をするに珈琲店にて催し、ろんどんにては倶樂部に會合す、巴里の人は寢室屋壁の上部にあり、倫敦人は室の中央に寢床を設く、巴里人は一日二食に過ざれど、倫敦人は三度四度の食事をすとか、巴里の麪包は其形長く、倫敦のは四角也、巴里人は珈琲をのみ、倫敦人は茶をたしむ、巴里人は食事の間に頻に話をなすとかいへど、倫敦にてはさることとなし、巴里の職人は其友を呼ぶに君如何とよび、倫敦のは傍輩どうだといふ也とか、或人のものがたられしなり。

水戸の人は大方酒をたしむ人多き樣也。我師の背の君林忠左衛門君などのことを聞に、常に夕げの折に三ますづゝをものし給ふとかや、それはまだことにもあらず、友など有ての時には一斗をも辭し給はずとなん、ある時山岡鐵太郎ぬしと共に一斗の酒

ものし給ひて後、高足駄にて箱根の山こし給ひしこともありきとぞ、さはれ猶酔給ふことは無きにや、師の君は遂にさる顔し給ひしを見ずに終りしとかたり給へりし。

馬琴が模稜案にいはく、暗き所には神明これを鑑み明き所には王道これを正す。

上田秋成がつゞら草子に西行法師をかけるうちに、鎌倉の右府仰たまふ、汝が遠つおやの秀郷といひしは世にいみじき弓の上手となん聞ゆる、傳へたることも有べし、かくこそと覺ししみぬることは忘れずこそ有らめ、事一ことにても敎へ承るべく、こはます〳〵おそれある御とはせなり、御物語のはて〳〵はつはものゝ道しばしも怠らせ給はぬみ心より、野山を住家のやせ法師にだにものとはせ給ふことのかたじけなさよ、むかひ奉りてはおこがましく家の傳へなりなどとて聞えや奉るべき、まして有難き大宮仕へをいなみたてまつり、みおやたちのいつくしみをさへあだなるものにとしわづかに廿五にして家を出たるいたづらものゝ弦引一つだに心にとゞめしことも侍らず、たゞ一言の忘れがたきは賞を重くし罰を輕くせよといひしも、任ずるもの

をはづかしむればあやふしといひし有難さよ、士卒の疽を病めるを吮ひしは人の心をよく買なすといへども、誠の情よりとも覺え侍らず、かまどを減じて人をあやふきにおとしいるゝは將師のさかしきにて、國を治め天下をしるべき君の御心にあらず、軍を出し給へることのあやしきまでかしこくませるをよそながら見聞奉るには此方の御とひゆるさせ給へとて額を板じきにすりつけて申すしか〴〵。西行後にこの事を人にかたりていふ、右府は誠にねぢけたる君なり、口に蜜し給へど心には針のおはするぞ、漢高の大度曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中にいれられたるは我佛の冥福といふことを生れえさせ給ひけん、只悲しむべきは神の御末の此後やう〳〵をとろえさせ給はん世の姿なるはとて、涙とゞめがたくしてもの語りしとなん。

馬琴が青砥模稜案の內牛裁判の批にいへらく、美女の細腰白刃を藏む房中此を以て轉た爲仇、奸夫の胸膈爪牙銳し、暗裏人食ふこと如虎彪、兄弟垣に鬩ぐ腰越狀、貝公指を拾ふ玉龍の湫、驚くことなかれ窮達塞翁が馬、世間斯の如き有牽牛。

同じく模稜案。

牝鷄晨すれば其家安からず、招嫁の鹽梅婦人に成る、親を棄て他を養ふは皆其興物の多きが爲なり、一ト度名を權る丶時は勢ひ禁ずべからず、鏡岱毒惡遺書を請ふ時老醫も治し難し、一家の難み獨庵滑稽句讀妙也、潤平いかでしるべき上梁の詞、南人の佳瑞とする所北俗は不吉とす、飛土太婆々を賊して婆々菜園を暴す、李下に冠を正さゞるは必賢者、瓜田に沓を入る丶も偸兒にあらず、福の倚る所は禍の始、禍の伏する所は福の基、足をしらざれば禍を招く、得まく欲すれば咎を致す、意馬を郤て心術に籠し、痴牛を牽て桃林に隱れよ、一人寡欲なれば一國羞を知らん、さはれ齊東野人の言、和にあらず漢に非ず。綴れども語をなさず、詩にあらず歌にあらず韻を嗣ぐによしなし。

夢は一事を以てその虛實をおすべからず、これを史傳に考ふれば神日本磐余彥神武天皇は夢に天照皇大神武甕雷神と謀りて劒を下し給ふと見て丹敷戶畔者を誅し給ひ活目入彥五十狹茅尊則垂仁天皇は御諸の山の峯に昇りて四方に繩を絚粟食雀を逐と夢みて帝嗣に定らる、殷の武丁は夢に依りて賢臣傅說を擧用ひ、周の文王は夢に依りて九十九の齡を知れり。この餘詩書禮經に載する所枚擧に遑あらず。

二夫川の善吉夜仇をさけて山中の廟に隠るゝくだり、破簷月を引て燈明に換ゆべく懸魚雨に朽て梟を栖ますするによろし、風は木の葉を誘て賽錢を散らす如く、狐踪蹟を印して落花を畫くに似たり、神祠ありといへども敬せざれば威をますによしなく、旅店なしといへども憇はざれば疲れを補ふにたらず、物おもふ身のいとゞしく仰げば月も傾きて丑三ははや過たり、且くこゝに明さんとて古廟の中に進み入、大山祇の冥助を祈りて厄難消除と念ずるに、秋の夜なればいと長くて曉る樣にてまだ明けず一夜を千世とまつの風山河の音凄まじく岩堰く水と我胸と碎けて落る涙には片しく袖をしぼりあへず、思ひつかれて身を倚る壁にもたれてぬるともしらず暫時はまどろみたる夢に。

佛國の探偵秘傳に、分り難き犯罪の底には必ず女あり。

あらはれは　　　　よみ人しらず

なとり川瀬々のうもれ木あらはれは

いかにせんとか逢ひみ初けん

うち橋の中絶

わすらるゝ身をうちはしの中絶て
　人もかよはぬとしぞへにける

賴氏日本外史引用書　二百五十八種

天地萬物逆旅　光陰者百代の過客。

謂濱の波面にたゝみ商山の月眉にたる。

干將の及も持人から。

留春春不駐、春歸寂寞、厭風風不定、風起花蕭索、

閑閣只聞朝暮鼓、上樓空覽往來舟、

落葉賦　紀齊名

霜白樹頂老、雨晴山影醉、

紅授褒賞下賜　明治二十四年七月廿日　賞勳局にて下賜せらる

島根縣石見國邑智郡日貫村大津千代太妻
山本しげ

明治廿四年六月十二日本村室田種平家宅失火の節同人妻咲の焔烟中に陷り死に瀕するを認め自己の危難を顧みず婦女子の身を以て猛火の間に冒進し爲に體重傷を被むるも屈せず遂に之を救濟す其義勇洵に奇特とす依て明治廿年七月勅定の紅授褒賞を賜ひて善行を表彰す

露國皇太子殿下大津に　逢難事件費
二萬四千四百十二圓三十五錢四厘

十八史畧　拔書

肅宗明皇帝、名は紹、幼にして聰慧なり、一日父帝問て曰く長安近きか日近きか。紹曰く長安近し、但使者長安より來るを聞く日邊より來たるを聞かず、帝其對を奇とす、其後群臣と談之に及ぶ、又問ふ、答て曰く日近し、帝愕然として何ぞ前日と異なると、曰く頭を擧れば日を見る、長安を見ず、帝益これを奇とす。

後趙の石勒自ら韓信彭越に比す。

うたておなじ師の君に學びておなじ樣にとし月を重ぬるものから、人は追風に帆上げたる舟覺えていとゞ進みにすゝむを、しれものは只坂にくるしむ車のやうにてともすれば下りがちなるがいと恥かはしきに、手などは生えてふつゝかにて詠草などかきたる我ながらいとあさましければ、かまへて人にみせ參らせぬをあやしう物はぢする人よとて、みの子の君ものつゝみの君とつけて笑ひ給ふに、こと人もいつしかさなんいふ。文月計例のまとゐに夏子の君詠草みばやとの給ふを例の引かくせしかば、打笑ひてやみ給ひにき。しばし有てたとう紙にかく書つけてたまはす、うへにはものつゝみの君へとて、

袖をもてよしおほふともたぐひなき
　玉の光りはかくれざりけり

いとゞ汗あゆるこゝちして物も覺えねど、

あらはれん光りなりせばこと更に

狹き袖には何つゝむべき

中々恨めしきまでなる御言葉哉、今はゆるさへ給へと泣ぬ計にいふほど、又みの子の君、

女郎花などこと方にそむくらん

おなじまがきのうちに咲るを

かへし參らせん言葉もしらねど、

咲まじる花のにほひのまばゆさに

そむく心を哀とぞみよ

猶ゆるさへ給へといへば、人々いとゞ打笑ひ給ふ。

一日例のまとゐに風前薄といふ題給はりぬ、おのれかくなむ、

野邊みれば薄の外の色もなし

千草の花は風にかくれて

師の君披講の折の給ふ、此題生死に關する文字一ツあり、猶[illegible]へみよとの給ふ、あまたゝびみもてゆけどえみしるべくもあらず、さての給ふ、結句しかれてとはなどい

はぬ、かくいはゞいとめで度かるべきをとなん。

のべみれば薄の外の色もなし

千草の花は風にしかれて

其折小がさ原君あらく吹風にはいとゞみだれけりとよみ給ひしに、さては實際に違へりとて證歌あげ給ふ。

一方になびき揃へてしの薄

あらき風にはみだれざりける

となむの給へりし。

家に畠作りていさゝか野菊など植ばやとて母君苗を買給ひしに、胡瓜成りとてとりたるもの生たつまゝにさまことなりたる樣なれば、相知りたる人にとひなどするにこは夕顔成るべしといふにいとうれしくて、いかで花をみばやとたのしみ居たるにやがて咲くをみれば黄なる花成りけり、あやしくて又とふにさはへちまといふもの成るべしといふ、へちまならば水とらんなどおもひまうけてみに成るをまてりしに冬瓜といふもの成ければ、おこに成て師の君にかくなんと聞えつるにいでやよはみな其たぐひ

ぞかし。

莪と思ふ子は蒿に成り、麒と思ふ人は駑と成るなん世のならひ成けり、これに依てかれを思へば得る所また少なからじとの給へりし、達人のの給ふことは何事にもかならず説有けり。

ことし春の頃より都わらべのうたふをきけば、かにしてくんねへやせるはへとなんいふ、かくて國會なども開けて歲費節減とかや何とかやいたくかしらいため給し人もありしとよ。さるを又此秋頃はかくなんうたふ、出來たかへ本當だよ、御飯がにえるかへ本當だよ、南瓜がと、或人はいへり、かならず豐年の兆なるべしと、誠いつはりはしらず聞けるまゝを。

家にある茶の樹にはふ虫のまゆを作りたるいとめづらかなりとて、妹の取たるをみるに、たゞ絹の綿もてつゝみたる樣にいとうつくしくゆゝしげにもあらざりけり、こをもて猶製作せばかならず有益のものならめなどいふものから、其道のことしらねばせんなし。

蟬は

あぶら、日ぐらし、つく〳〵法師、朝戸出の袖すゞしく吹風に軒ばの梢の露散て鳴出る日ぐらしの聲いといさまし、夕日のかげ消る山のかげにさゝがにのいとかくる軒ばをながめてものおもふ折しも鳴出るはいと淋し、すさまじかりし夕立の雨晴過て雲のあしきるゝやがてあぶらぜみのかしましく鳴はにくし、夏の暮方より秋にかけてをし〳〵と鳴たる、なれも同じ心にとおもふにかなしくもうくもつらうもさま〴〵にていと哀也、されどいそがしがほなるはいとにくし。

或人大隈重信君の書を得まほしとてこゝかしこに請たれどもいまだ得ることをえずとなんかたる、おのれの師の君は交りも深くものし給ばいさゝかの書はおはしますべしおのれより願ひ參らせんとてうけがひぬ、やがてとてなんいとせちにのぞむ人侍り哀一ひらにまれ得させ給へとこひつるに、師の君もいまだ更にみ參らせたる事あらずとなんの給へりし、いぶかしうてそれより猶こゝかしこ君に親しき人につきてこひ參

らすれど何方にも〳〵同じやうなるはいかなるにかいといぶかしうこそ。

葉月廿日の頃例の師の君のもとにて歌よむこと侍りしに、其日雨降ければ新秋雨涼といふ題成けり、にはの面をみ渡せば櫻の葉の色付てはら〳〵と散るさまふとめにつきて、

　　ふる雨に櫻の紅葉ぬれながら
　　　かつちる色に秋ぞみえけり

といひ侍りしに、師の君の給へり、此眼前の景なるものから猶實にのみよりてはよみ難きものぞかし、打まかせて櫻の紅葉といふべきなるはあらずとて、

　　そめ出し櫻の下葉ふる雨に
　　　かつ散る秋に成にける哉

櫻の直衣　　面白裏赤花。

柳は　面白裏青。
紅梅は　面紅裏紫。
青朽葉は　表青丹裏青。
ふたあいは　赤花と青花もてそむる。
村濃は
まごは　かみを白くしてすそを紫にても紺にてもこくそめし也。
卯花は　おもてしろくうら青き夏の衣也。
紫苑は　おもて蘇芳うらもえぎ。
萩は　おもてすはううら青し。
黄朽葉は　七月より九月まで着す。
藤は　おもて紫うら薄紫。
山吹は　おもて朽葉うら黄。

朽葉色といへるは青丹の事かなほ考ふべし。

日本紀抜書

無状あぢきなし、顧眄、可以爲、木の親、句々廼馳、草の親、草の姫又野繼、至貴を尊といひ、これよりあまるを命といひ、並に美擧といふ。

勞饗

花月草紙にいへることあり、何にまれ花さへ實さへはじめよりなんとてはいかで得ん。

天子詔、上皇宣旨、皇太子令旨、將軍御教書。

九月はじめの七日計母君淺草なる三枝殿におもむき給ふ、よからぬことゞもかさなりてこゝろざすことはならず、願はしきことは遠くていとせんなきに家はいやまづしにまづしく、妹は日頃なやましうして打ふし居るなど、取つゞくるにてこがね少し計からばやとて成けり、ひるすぐるも歸らせ給はず三時なるにかへらせたまはぬはなぞ

の故ぞ、花につく世のならひなるにかく落はふれてかゝることいひ行たりとて誰かはものがたらひ合せだにやはする、いふかひなさにいづくをか猶もとめ給ふにやなど思ふもいとむねいたし、とあるにつけかゝるにつけ身のいとかひなきなんなげかはしくて。いづらなその身は女といふともはや廿とも成れるを老たる母君一人をだにやしなひがたきなんしれたりや、我身ひとつの故成りせばいかゞいやしきおり立たる業をもしてやしなひ參せばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質におはしませば、兒賤業をいとなめば我死すともよし我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我兩方ははやく志をたて給てこの府にのぼり給ひしも名をのぞみ給へば成けめ、さるを兄君うせ父君ゆき、やう／＼人にはあなづられ世にはかろしめらるなどいかゞ心ぐるしかるべきことをと思ふもかなしう思ひつゞくる程に、四時といふ頃歸宅し給ひぬ。いかゞ彼方にてはととひ參らすれば兒よろこべよ世に人鬼はあらずとよ、信三君の仁俠なる、あなこと／＼しや其れ程のことになどわび給ふ、猶の給へおのれとりかへ參らせんとて心よく卅金かしてくれぬ。伯母君はいといたくやせのみゆるに鰻とらんくひ給へとて其馳走にも成たるよ

どていとうれしげに涙おしぬぐひ給ふ。人の情のかたじけなきにもいとゞ我がみはづかしうて其方に向て心のうちにはふしおがみぬ。其次の日の事成けり、小柳町なるもち月にて赤子のいたう病むてふを見舞てこんと母君の給ふ。其前の日にも見舞たれど猶いと心細く成しかばとて赴き給ふ、夕ぐれ方かへらせ給て、さて夏よ我みはいとあしきとして來にけり、なにしかられぬべく思ふぞよとの給ふ、何事にかおはします、身にはゞかりは侍らずかし、猶の給へととひ參らすれば、さは聞よ、もち月がり行て我みるに赤子はいたうやせさらばひてよも生くべくもみえざるに、家いとまづしうて今日の暮の米のしろ覺束なげに打なげくめる、とし寄のえうすぐしがたうて昨日よ所よりかりたるこがねかすべきにはあらざりけれどちと計かして來ぬ、いかゞゆるせよとの給ふに、なぞの御はゞかりぞそはいとよくもせさせ給し哉、情は人の爲ならずとかや、俗の詞も侍るものを、こゝにて成る丈のことにあらば、何ごとにまれめぐませ給へ、いとよき事をといへば、さいはるれば心おちゐぬとて打笑ひ給ひぬ。

六月の末成けり、半井うしより敎へをうけてさはなしうべきや何やしらず。

圖書館はしのぶが岡の西のすみ成るべし。音樂學校はむかひにて、美術學校は其むかひなり。

谷中へ通ふ大路を少し右へ入て櫻木病院のむかひがはにぬりたる塀高くしなして、門は此頃あらためたればにやまだいと新らし、入ての右より敷石つらねて玄關へ通路一筋、左は花だんにて秋草をかしうしなしたり、北の方にはぬりごめふたつあり、そが右の方はくれ竹のませさゝやかに結ひて、咲こぼれたる花どもいとをかし、山あいはかきの外にたけ高うたちて、萩は半ふしながらさけるもよく、薄はいまだなびかぬものから、秋の姿はいちじるくみゆ、女郎花はとくうつろひて桔梗に色をゆづり、をしろいとかいふ花の人めかぬものからなつかしう咲るかたへにかひざいくの作り出たる樣に咲たる、取立ていはんもいとこちたし、中庭は梅の老木の半うつろに成て空おほふ樣なるもめづらかにをかしく、枝ざしをかしき松もあり、高野まきのさゝやかなるもいとよし、つくばひはよしありげにて、燈籠も無下の石にはあらじかし、折まが

りたる廊のあたり、板敷のつやゝかなる、槇柱もより居まほしげ也。水亭の風鈴かすかにおとなひてしのぶの露のかゝる夕べ例の君の打とけたるあされ姿にて團扇手まさぐりして打ながめ給ふらんさまよ、いかなるらんいとみまほし。

花圃女史田邊龍子君はことし廿四斗成るべし。故の元老院議官今錦鷄の間祇候太一ぬしの一人娘におはしまして、風彩容姿清と洒をかね給へるうへに學は和漢洋の三つに渡りて今昔しのをしへの道あきらにさとり給ひ、書は我師の君いつの高弟にてあいよりあをしと師はの給へり、和歌は天ぴんと故伊東祐命うしもたゞえ給へりしとぞ。文章は筆なめらかにしてしかも餘ゐんにとませ給ひ、俗となく雅となく世の人もて遊ばぬはなし、其名の世に聞え初しは君が廿一許の頃藪の鶯となんいふ小說あらはし給ひしより成けり、其後都の花に八重櫻といふをものし給ひ、よみ賣新聞におだ卷物語を草し、ことし小說くさむらに萬歲の善作あり、又女學雜誌の特別記者として小說に紀行に高名なるいと多し、さるからにいさゝかもほこりがなどのけはなくて、打むかひ參らする析はをかしき滑けいものがたり洒

落の談話のみせさせ給ひて、人のおとがひをこそはとけ恐ろしなどおもはするけはいさゝかもおはさゞるこそいと有難けれ、おのれは當時の清少納言と心のうちにはおもひぬ。

天野瀧子ぬしは文學士爲之君の室にして、前橋孝義君のいもうとにこそおはしけれ、優柔の御心ざま溫雅の性はいとよくおもてにあらはれていとなつき安かりけり、學おはせどもあらはさず、文長じ給へども世にしらさず、折ふし、われどちのふみのうへ猶ざりの文章くらべなどにてはかくはおはしましけれといとたふとし、なかんづく奇才にたけ給へらんなんいとうらやましき、御子は今二方おはします、文子の君はろうたくふくよかにめゝしく、今より生先いとたのもし、武君はおの子にしおはしませばましていか計すゑは山松の大空までやおひのぼり給はんずらむ、かく方々の御母君ともなく君はいとわかうおはします、廿六七許にや、み參する所はいとわかげ也。

片山照子ぬしは工學博士東熊君の室にて同じ博士田邊朔郎ぬしが姉君なり、龍子ぬしにはいと子にておはしませば、面やうは少し似給へる樣なり、ことしは三十あまりにや、み參らする所はいと若かり、書と和歌は君が特技におはします上に手げいにた

け給るなん人の及ばぬ所にこそ、家政をいとよくをさめ給ひてみ心ひとつに萬思し靜めたるさまこそうれしけれ、君も人にの給はぬことかゝんはいとくるし、有がたきみ心ばへにこそ、みの子ぬしこそ猶風流の方はすぐれ給へれ、花顏柳姿いにしへゆかしがる人も多かるべし、かりそめにの給ふことも艶にけしきあるは只人の及ばぬ所なるべし。

萬はさし置ていふにもあまり筆にもえたらぬなん伊東の夏子ぬしぞかし、あでやかなるものから艶めかず、まめなるものから打やはらぎて、げに女とはみゆ、書はすがたに似てやはらかに歌はとゞこほる所なくして故人の後をふまず、實景をよみ給ふになん及ぶ人なかりき。かど〳〵しき學文の方はいと世にもてかくしてしられじとのみし給ふものから、薄ものにつゝみたる玉の樣に光りはおのづからもるゝぞかし、大方人がらのかう〳〵しうなごやかなるに、心ばせなんさすがにおもふこと人にことならせ給ひて、やまとごゝろのいとをかしきぞいわでおもふぞなるべし、君が境界よいかにせんいとくるしうもおはします哉、さはれ財には富たまへり、都大路廣しといへども君が家ほどの財もてる人は少なかるべし、母君も誠のにていとすこやかにおはしま

す、打みる所は何ごともあらざめるをなどさはと問參らせんもいとかなしう涙こぼれにこぼれてえもかきやらぬをかつは人のつゝませ給ふこととえもらさじとなり、としはおのれと同じこと、廿にことしは成給へりき。

學びの友いと多かり、信友多く益友多かり、いづれをいづれといふべきならねど、この君たちこそおのれの爲には姉君達にて、つかへまつるべきよしおはしませば猶更にいとなつかし、猶島田政子ぬしの麗質なる、乙骨牧子ぬしが風流洒落なる、鳥尾廣子君の行末賴もしき筆力、高田ふじ子君の艶美なる容貌、前島きく子ぬしが一ふしある和歌の體、橋本花子ぬしがむかし戀しき人がら、田邊龍子ぬしが無邪氣なる、淸水田鶴子君の計り難心中、小がさ原つや子君はよく父兄の君の敎へを守りて今樣めかせ給はぬ、水野銓子君は誠に諸修と覺ゆる容儀をさなけれどもいとよくとゝのひ給へり、中村とし子君はきはめて美にして、長齡子ぬしは沈着不替に、おさなき人には中牟田常子君行末今より思ひやる、伊澤の夏子君きわめて今樣の才にたけ給へるなど取たていわんもいとおこなりや。

別れこそ何ごとにつけてもいとかなしけれ、師の君のもとにかひたる猫子をうみぬ、四つ有つるうちのふたつははやう人にやりて殘りのなんいと中よくて抱き合てふし居たるなどをかしかりしが、島田の政子君ひとつ得まほしとの給ふまゝに送り參らせんとす、龍子君おのれがもて參らんとていかゞしめし給ふ、師の君のことにめで給ひしの成ければ少し心引かれてとかくまぎらはしつるほどに、いざ給へよおのれはまかでんとすなるをとの給ふ、さはせめて首輪をだにかへさせてとて眞紅のひも褪たる結びかへ給ひぬ、母君も見ておかせ給へみなもみよや、ものだにくわせてやらんとて魚少し手に置てくはすればかほ打守りてとみにもくはず、哀やなむしがしらすのなめりとてかきいだきて打ながむれば、にやう／＼となきてえりのあたりにひたと抱きつきぬ、今一ッ伴ひ出てみすればふたつながら悲しげになく、引もはなしがたけれど、はつべきならねば龍子の君いだきてやをら出給ひぬ、えんのほとりに今ひとつはつひ居てなきもえせず、うつしごゝろのなくなりたる樣にてふしたるなごりもいと哀なりし。

定家卿

苔のしたにうづもれぬなを殘すとも
　はかなのみちや敷しまのうた

小出の大人はいと人にくまるゝ人成りけり、みの子ぬしのもとをとふて例のこにくき筋など引かけつゝ物語りどもするうちにわが師の君久子茂子ぬしなどをもみな只呼ずてに呼つゝいふ、みの子ぬしがりかかり居る書生のいと聞にくゝわびしく成て、歸りて後なぞあの翁の傲慢なる今日はおもてよくみ覺えぬ、やみの夜に四つ辻に立ておもひのまゝに打こらさばやといふ、みの子ぬしをかしがりてさなまがくしくの給ひそ、いとよき歌よむ君ぞかし、今日もの給へりし、

雨晴て名殘しめれるあさ庭は
　こほろぎ啼て萩のはな散る

かくなんあるとかたり給へば、こはよき歌かな、さはゆるすべしといへりとなん、天地をうごかし給やあらずや、書生の洋杖はのがれ給へりとておのれとかたりて笑ふ。

一日背面美人といふ題給はれり、人々をかしがりて笑ひなどするに師の君それよいとをかしき物語こそあれ、祐命がまだ若かりし時のことぞかし千樹の君おのれなどしたしき人二人三人して墨田川に花見る時、先に行女のうたのねにいにしへのものがたりにいとよしとかきたるもいかでかくぞなどそゞろに床しがりて、あまた人をおし分つゝはしり出てふと面をみしに、いかにぞや桑を取たるむかしの人の様に宿瘤はいかゞ成けん猶其類なりければ、あなや二度驚きぬと高くよべば、かの女つとはしりかゝりて祐命が脊を手いたくたゝきて。これにて三度や驚き給ひけんといひしなんいとどしく興をそへていみじき笑草にせしぞかし、才たけたる女なりしよとて笑ふ。

心くるしきもの

實よりは名の高く成たる、さすがに其位置しをしければ才ひきゝをしられじとするに、詞も常におもふがまゝはえいはず、まして文かき歌よみなどすべて／＼心くるし女の身にてものほめたるもうれしきものと人はいひつれどいと心くるし。

詩經鳴鳩の篇、螟蛉子あり、蜾蠃これをおふ。
この意味をもて馬琴やしなひ子を螟蛉子といふ。

割物は龜甲、蜀紅、七寶、麻の葉、サヤ形、タテワク、其外幾等もあれどこゝ等が有也。

模樣は雲龍、二葉葵、龍の丸、籬々菊、源氏車、槌車、香の圖、牡丹唐草、菊から草、蓮がら草、立田、よし野、狂ひ獅子、藥玉、蝶の丸、菊水、花の丸、をとり桐、登り龍、下り龍、鳳凰の丸、其外形がはり鳳凰等幾らもあり。

品もの

三尺の細口にして臺附龍耳の花生一對。

一、花瓶の中ほど善き處へ二本の筋を引く是を見切といふ、其中へ正面の處へ龍に立浪の丸模樣を畫き但し表裏とも其廻りは菊桐の模樣を飛ばし、古代唐草を以て其あしらひとす、地つぶしは赤、其模樣の繪の具はすべて樣々のゑのぐにて是をだめるな

り。

二、上下は雲形を以て境界となし、其中には東大寺を模樣を以て色々にあやなし、其地つぶしはさや形七寶の類を以てしめる。

三號中程の帶は菊の丸を卅二ほど描き、其外はから草を以てつめる也、是にて中はどより上は大がひ終る、併し一號の帶と二號の雲形との間白地なれば是は後にて分明

四號は帶より以下也、是は畫の中はワク取りとなし、其中　は表の方は金閣寺銀閣寺を一本づゝに向ひ合せ、裏は港川に稻村が崎を向ひ合せ、其彩色は言ず、只ほめればよし、其まはりは上下に割り模樣を以て淵こしの區別をなし、其中に種々に古代模樣から草等の物にてつめる、夫よりわくの廻りは秋の七草を古さつ摩風に畫き、其あしらひに金模樣の蝶を散らし畫き、而して其模樣は上の一號と二號の間白地の處まで畫き、地つぶしは金なし地なり、是は雲ぼかし形しるべく、此梨子地はいまだ曾てなきなり、現今工風中也、夫より臺はさや形のかきつぶし、其中の處に丸もやうを描くかたよし、是にて目出度出來上る。

一つ金の入用廿匁、　一匁三圓八十五錢の割、

釜は下燒ともすべて四かま、　但し一本一釜の割ゆゑ八かま也。
一かまのまき代六十五錢一二錢の割。
生地代十八圓五十錢、
品もの圖の如し。

源義つね　夏子

やしまがたをしてさかろのあらそひに
　まづかち色のみえしきみかも

豊太閤

日の本にさる者有と犬じもの
　から人さへもかしこみに氣無

柴田勝家

露ばかりのこさぬ水のいさぎよき
　こゝろはかめのかゞみなりけり

加藤清正

鬼とのみおもひのほかの情さ弊
　あればや人もなびきよりけ無

明智光春

から崎のまつの木かげにのり捨し

心のこまもよに勝れけり

佐久間盛政

ものゝふは鬼こそよけれみだれたる
世には佛も何にかはせむ

眞田幸村

いくたびもよせくる浪をうちかへし
難波のあしのはなと散けり

石田三成

しばらくは石田の水も落ざらん
うら切とほす人なかりせば

木村重成

今はにも心をこめしたきものゝ
香ぐはしき名は世ににほひけり

礎、一筋、下り來し、手折、

石ずゑ、ひとすぢ、おりこし、たをる。

廿四年九月廿八日買入目覺し時計裏番號。

a

ba wi

p

f s

蓬生日記（廿四年菊月）

日かげにとほきやへむぐらのあきいとゞ露のをき所なきに、筆さしぬらしてかひつづくればあやしう人のしりうごとのやうにもなり侍しかな。

九月十五日　晴天。九時頃より灸治に行五十人斗待合して十時頃終る。それより直に圖書館に趣く。本朝文粹及雨夜のともし火、五雜俎とをかる。馬琴の著書中に五雜俎といふこといと多く有しかば見まほしくてなり。さわあれども例の不學故中々によむべくもあらず。いとせんなし。三時頃館を出てみの子君のもとにゆく。少しものがたりしてかへる。君はおとつひより箱根鎌倉あたりを旅行して昨日歸らせ給ひぬといふ塔の澤にて白なみの立さわぎしてふ物語りも有けり。家にかへりしは五時少し前也し。此夜はいとねむたふてえもたえがたきにわびてはやく打ふしぬ。十時成けん。

十六日　今日もめづらしき好天氣也。風もなく雲もなくさわれ暑からず、つねにかゝらましかばなどおもふ。母君は湯島の紺屋に參り給ふ、おのれは衣どもあまたあらひなどする程に午前十時といふころ成けん山下直一君參る。ものがたりすこしする程

に母君もかへられぬ。ゆづりておのれは師の君のしたてもの今日よりはじむ。君は午後の四時頃歸宅せらる。熊ヶ谷より來るとて小袖綿もらふ。夜食はやうくひてそゞろありき國子と共にす。あすは中秋なるてふを今宵の空もたゞならず雲の立さわぐはいかゞなどおもふも例なるものから大方かゝるをなげかれぬ。

十七日　早朝髮むすびて師のきみに行。今日はみの子ぬしの月次會なればかしまらする硯おのれもてまゐらんとて也。十一時半より家を出づ、母君みの子君の近邊まで送り給はる。談話少ししてのちに諸君參らる。今日は中秋なるてふを空めづらかに晴わたりて些斗の雲もなく風はつよからねどすゞしき程に吹ていとよき日也。點取題對山待月なり。小出君及師の君兩點也。

　　　甲　兩　君

　山のはの梢あかるく成にけり
　　今か出らむ秋のよの月

おのれの成ければ賞給はる。今日の各評題は山家水枕邊虫也。天は小川信子ぬし、地は中村禮子ぬし、人は伊東延子ぬし成けり。日沒少し前に諸君歸らる、おのれはつ

や子ぬしの迎ひのいとおそければ一人殘し參らせんがわびしければもろ共に殘る。とよ子君迎へに來給てよりおのれは歸る。みの子ぬしより心ぞへの車にて出る程に月は上野の森をはなれて櫻木病院の軒ばにのぼりぬ。うたて月をうしろにして歸ることのいとをしさよと心の中にはなげかれぬ。切通し邊へ來る程に雲少しかゝり初ぬ。家に歸りてより少し月さやかに成しが更けてはいとゞ雲かさなりておもひしことよとわびられぬ。今宵久保木の姉君參る。母君と共にものへ參らる。今宵も例のなまけてはやくふしぬ。

十八日　朝來曇天、十一時頃より小雨降くる。今日はさま〴〵なすこと多くあわたゞしければ仕たてものにせずして机にむかふ。一日降暮して夕暮方より風いと寒く成ぬ燈火のもとにむかひて更におもへば今日もすることなしに暮たる也、あな口をしとおもふは日々なるものから勉めもあえぬはいかなるにか、我ながらいとにくし。夜一夜雨降にふる。十一時頃ねやには入ぬ。

十九日　朝は小雨ふる。今日は例の稽古日也つとめて家をば出づ。師の君朝げものし給ふ折成り。少しものがたらふほどに人々參りあつまる、てにはのあやまりなどた

だし給ひてさての給ふ、君は此頃新古今をやみ給ふいたく調の似かよひたるなんある
あしきことにはあらぬものからまねぶはいとよからぬことぞかし、猶家集をみたまへ
手もとにおはさずばこゝになん侍るなどねんごろに教へ給ふ。あす松園の月次會なれ
ばとてその兼題を今日の點取にす八點以上はしたゝめておくらせばやとて也。みの子
夏子、廣子、艶子の君達およびおのれの五人成ければ色紙に寄合書しておくる。家に
歸りしは三時過る頃成し。空は餘波なく晴あがりぬ。此夜もはやくふしどに入ぬ。

廿日　曇天。師君の仕事をす。別してのことなし。中島くら子ぬしにはがきを參らす。

廿一日　朝來曇天。午後より母君築地へ寺參りに行給ふ。望月より使ひ來たる、さ
つま芋到來す。日沒後より雨降出ぬ、更けてはいとゞ風さへそひておどろ〱しう只
天の川の樋口切たらん樣成けり。なすこともなしに空しく起居て閨へ入りしは一時過る
頃成し。

廿二日　曉がたより雨やみて朝日のかげの薄らかにさし昇る程木々の梢小柴垣のひ
まなどに玉をつらねたる樣に露のみゆるもいとうつくし。稻葉君參らる。伊勢利來たる
午後中島くら子ぬしより通運便をもて書冊返却さる、書狀有けり。日沒前までに師の

君の仕立もの終る。たそがれより雨降出て今宵もいたく降ぬ。閨に入りしは十二時也しものから大方は居ねむりのみ成けんかし、なぞかく耐忍の力に乏しきにや、勉めばやとおもふ心さすがに無にしもあらず、筆をとればものかゝんことを願ひ、ふみに向へば讀明めんことをしおもへど、こゝろざし淺く思ひ至らねばにや凡知凡慮いよ／＼くらくしり難きことは日を追ひてしり難く昨日覺えたることは今日は忘れぬ、婦女のふむべき道ふまばやとねがへどそも成難くさはとておの子のをこなふ道まして伺ひしるべきにしもあらずかし、かくてはてゝは何とかならん、老たる親おはします此御上のいとなげかはしきによろしき程なる妹が身の有つきもいと不便也、とざまかうざまにおもへば只身のかひなきのみにぞ寄ける、いでや過て改むればてふ古語もあるを明日よりはとおもふも今宵のみならざりけり。

廿三日　空は曇りたるものから雨もまたふらざりけり。今日は秋季皇靈祭なるものからに隣なる家よりこわいひふかすべきもの借に來たる。家にても牡丹もちなどとゝのへて先祖のみたまに奉る、例の仕立もの師の君がりもて參る。歸りてみれば稻葉のお鑛の君參られぬ。午後より野々宮君來りとはる。一つは舊門閥の困衰、一つは當時

女學生の意氣、物語りもまたいたくことならせ給へり。猶うきよこそをかしくも歎しくもうくもつらくも有けれとは思はれ侍り。三時頃一としきり雨降にふる。野々宮君歸らるゝやがて國子の吉田君に借たる書物かへさんといふに伴ひて湯島までいたる。雲たゞよひにたゞよひて空のけしきいと覺束なきものから雨はふらざりき、家に歸りてのちなすこといと多かり。今宵はさまでねぶたくもあらでおもふこと少く成ぬる程也。閨に入しは十二時過る頃成し。

廿四日　今日はみの子の君の家移もし給ふ日おもふに空晴よかしなど昨日より願ひしにおもふがごとにていと嬉し。國子家の障子の張かへをす。午後お鑛君及本所の千村禮三君参らる。種々もの語り有て母君に是非同道いたしくれ度樣打頼まるゝに、さはとて伴ひて本所に参らる。甲州なる廣瀨七重郎來る、同性ぶんの犯罪に付被告事件の爲成といふ、おのれの爲にも遠緣の親族たればいといたく心にかゝりそはいかなる事にかとて猶とふに、いとはづかしうつゝましけれど、えいはではつべきにしもあらねばとてかたる、おのれがめひなるものから文こそよの淫婦にて有けれ、夫をかゆることはや六七人にも成ぬ、今相添ふは信州の種商人にて小宮山庄司となんよぶをのこ

成けり、此前にもてるは同じ郡の北野象次といふもの成き、相絕てよりことしは四とせにも成ぬる成べし、こたびの原告は則其をとこに侍り、其上覺書に依ればぶんとかの北野とはいつしかふたゝび寄絲のむかしのえにしを結びかへて小宮山よりはさり狀受けもとの夫と呼ばれんと大方ならず契りきとか、さるをことしの四月半同郡市橋といふ所に國內一の祭典侍りき、此日甲府の柳町三丁目に山がたやとなんよぶ旅店の二階に彼等二人酒打のみてたわぶれかはして居たりけるをかの小宮山なん聞しりて、おのれなどかはみゆるすべきとて右手に一尺斗の鎗の穗先をたづさへ左手に麻のなはをもてそこなる座敷にをどり入ぬ、二人は心きもゝみにそはず、いかで命ひとつをたすからばやとひたすらふし拜みて打佗たるに、をりしも傍に北駒郡のそれがし村なる伊藤寬作といふもの有て、君たすからんとおぼすならば金の外にものは侍らじ、おのれよろしくあつかはんとて取なすまゝに、命にかゆるたからはあらずとて、さわれこゝにはこがねも持ねば則百圓の借用證をしたゝめてなん其場はすましぬ、さるものから後におもへばこはまたくかのみたりのものゝ斗りてなせるわざぞとおもふにいきどほりいと胸にみちて則うつたへをおこせる也と也、ぶんが答はまたことなれり、そは

あとかたもなきことにてかの北野象次郎には先に夫婦に侍りし時我衣裝調度など典物せられしもの七草も侍りしが、其後こがねにて又廿金許もかしぬ合すれば百兩あまりのものにて其こがねなんかへさじとてかゝるうたへは起されけん、誠に無實に侍るなり、またかの伊藤寛作とやらん更におもてをみしことも侍らぬものにこそとて陳じ申す、小宮山はいづち行けんかげだにみえねばいとせんなし、伊東寛作もぶんなるものは更にしらずといふ、さるものから其日かしこの宿帳には正しく寛作の名前もしるされたるはいかにぞやとてつひに有罪とこそ定まり恐赫さぎ取財と定められぬ、されどもぶんは更にうけずこは道違へり道理ならずとてこゝに上告はせしなりといふ、にくきものから親族は親族に侍り、かゝるを見聞にえもたえやらず、やがて後にしたがひのぼりて辯護は守屋此助君に依賴しつ昨日さま〴〵に相談して公判は今日發かれ侍り、今日は事實の取しらべにのみ終りて申渡は明後廿六日となん聞ゆ、申さんもいと耻かゝやしくとて打なげきぬ、さはれ此人も道德明らかにくらき所にも耻ずといふならねどさすがにまださる筋あしき罪はまだ得ず有けん、よし今宵はこゝに泊りて夜すがら守屋君の申立などもの語り明す。

廿五日　晴天成り。小石川の例の月なみ會この月のいたくのびて今日催すなり、師の君例のなやましうせさせたまふ頃なればをのれにはやくより來よかしとの給はせしみ詞もあなれば十時頃よりして參りぬ、この時七重君も一たび定めの旅宿にかへられぬ、來會者は十八九名成けん、點取秋の鳥てふ題なり、甲乙は伊東の夏子ぬし、おのれとふたり成りけり、賞にはうるはしき柿のみ給へり、家に歸りしは日のやう／＼くらく成る程成りしかば母君途中までむかひさせ給ひき。此夜お鑛の君よりはがき來る。いたくつかれて今宵も早く打ふしぬ。

廿六日　空少し曇る。早朝千村禮三ぬし正朔君と共に來る。おのれは圖書館にふみ見んとてはやう出ぬ。道にて今野はるの商品陳列館に出勤するに逢て伴ひて行。外にも今一人居たり、少し早過たりけんまだ館は開かず。さて恰もよし、眞下の槇子とじが墓參せばや今日は彼岸の終りの日なるをとて谷中へ行。寺僧も今寢起たる計成き、あかくむも花たづそふるも悲しきものからいと嬉し、絶ず苔の下に聞くらむ松風に袂ぬらして手むけもあへず先打なげかれぬ、さるべき子どもなどもなきにしあらず有りながらはたいかなればか花手向たる人もなく水かれ墓はかはきにたり、しばしおろが

みてこゝを出つ。常なき世とはえおもわじとすれど猶このはかなごとやみをもはなれざりけり。かしこぞまだ開かず。しばし立つくしてやがて入ぬ。日本紀及花月草紙月次消息をかりてみる、神代の巻の解しがたきをしいてとかんとすればあやしうねむくさへ成ぬ、花月草紙にねぶりをさまして月なみ消息の流暢なるをうらやましうおもふもかひなし、三時斗り成けん雨少しこぼれ來ぬ、いたくふられなんわびしくて館をば出ぬ、道にしてやみたるは口をしかりき。しのばずの池蓮かれて浮草の花のたゞよふも淋し、秋は草木の上のみならずみるとみるものゝ露けくも有哉とて、しばし立とゞまりぬ、うしろよりくる書生の我うへなるべし何ごとかさゝやくがつゝましうてうつむきたるまゝいそぐもはづかし、家にかへればいたくも早くおはしつる哉とてみなみなよろこびぬ。國子は今日關場君とひ參らせつとて給はりつる栗など我にもくはす。半井うしの事などをも聞て來ぬ、いでや猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覺す樣には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝにもむねつぶれぬ。我爲には良師にしてかつ信友と君もの給へり、我が一家の秘事をも打明て頼み參らせ後來扶けにならんなどの

約も有しをそも僞り成りけんかしらず誰が誠をかけて打もなげかれぬ。今日は稻葉の妻君も參らせ給へりとぞ、關場君より日本外史及び吉野拾遺をかりて來る。日沒に母君に吉野拾遺讀みて聞かせ奉る。十一時斗成けんふしぬ。

廿七日　朝來曇天。午前久保木の姉君參らる。午後より廣瀨七重郎參る。ぶん子公判前裁判執行てふことに成きとていたく失望の體成し、おのれらも同じことなげかれぬ、監視のことにつき種々相談あり、明日またこばやとて日沒前かへる。今日はことに打なまけて何ごともえせず、今返るもまた早うふしぬ、いとかひなしや。

廿八日　晴天。午前のうちに國子吉田君に書物かへさんとて行しばらくにしてかへる。午後藤田より目覺し時計を買ふ。家なる時計のいたく損じたればなり。價もいとれんなり、いふよしなどわれ人共におもへばこゝなるのをかしこにうりていさゝかのたがひにて買入る、藤田屋參る。稻葉氏より書狀來る、返書を送る。今日も日ねもす何ごとせしといふこともなかりき。十一時半頃ふしぬ。

廿九日　晴天。母君藤田屋の賴みに依りて貸すべき金のことといひに行給ふ。家のとてあらねど三枝君より借りたる金少しあればそれかさんとてなり。歸路に高野に立

寄りてこゝよりも少し斗返金せらる。吉田君三人連にて參らる。日本外史三冊かし給ふ、もの少し到來す。正午少し前に歸る。母君は正午に歸宅し給ふ。稻葉君より書狀參る則返事を出し、佐藤梅吉氏に書狀を出す。午後上野の伯父君參らる。藤林のことに付物語り有けり。夕暮に歸らる。此夜はさまでねぶたからねば十二時頃ふしぬ。此頃より大雨盆をかへす樣成し。

卅日　朝より空のけしきたゞならず十時頃より强風大雨誠の野分に成にけり。其最中廣瀨七重郎來る、ぶん子の事に付き種々依賴さる。同人午後歸國の途にのぼる、一時頃より風力次第に減じて二時に鎭靜す。差配人土田來る、久保木の姉君見舞に參らる。近來稀なる大風成き。されども我家は山後の低所なれば、さまでつよからず、破損の場所もあらざりしが、所によりては屋根を吹めくられ塀垣など仆れたるは更也、丸つぶれに成たる家も少なからざりけらし。其夜は空いとよく晴れていとおだやか成し、稽古題二週間分よみてふしどに入しは十二時なりき。

十月一日　早朝師の君がり昨日の見舞に行、路次の樹木塀垣などの仆れたるいとおびたゞし。師のもとにてはさもあらず。只此頃植かへ給し木どもの二もと三もと打た

れたるのみ成しとなり、所々へ出すべきはがきしたゝめ會計上の計算などしてかへる大小の筆十本給ふ。此日山梨縣野尻君よりぶだう一籠到來す、いと美ことなれば母君安達へも少し送り給ふ。禮狀したゝめ出す。國子午後より吉田君へもちて行、此夜は早く打ふしぬ。

二日　曇天。今日の新聞に津田三藏肺炎症にて釧路監獄に死すてふ文あり。暴風雨の損害ども多くのせ、野菜のいたく高直に成たりなどもしるせり、國會朝日の内幕とていたく攻擊したる商賣忘敵かあらぬかにくしとおふも我心からなめり、午後より藤田屋參り金七圓斗來月返金の約束にて貸す、庭の木石などつくろひくるゝ、千葉の蠶豆一升到來せしが、庭前なる冬瓜一つ送る、薄暮に成て歸宅す。此夜久保木の姉君參る、栗柿少し到來す、ぶだう一房送る。國子と共に數詠をす、國子一首、おのれ十首の約束にて詠みつるに、一題はおのれ一首かつ、次なるはおのれ三首まけぬ。勝負なしとてやみぬ。此夜は更にねぶからず十二時ふしぬ。

三日　小石川稽古也。空めづらかに晴ていとよき日成。師の君のもとへぶだう少し奉る、來會者十二人斗成し、今日より稽古一日に成る、九月分會計の計算をなし

て歸る、五時頃成し、十二時いねぬ。

四日　晴天。午前に讀書をなし、午後作文をす、薄暮より國子と共に摩利支天に參る、歸路杉山勸工場を見物す、各商家一人の客なく寂寞たるには驚きたり、前住ける家の前を過てくるにあやしき待合などいふ家出來たり、中坂の頂き先の日の大風にや崩れけん一間斗石段落たり。家に歸りしは八時頃、夫より母君の揉療治少しして習字にかゝる、十二時ふしどにつきぬ。

待合といふものはいかなる物にやおのれはしらねど、只もじの表よりみれば、かり初に人を待あはすのみの事なめりとみるに、あやしう唄女など呼上て酒打のみ燈わかくこゑひくゝ夜更るまで打興ずめり、家あるじは大方女子にて二人三人みめよき酌女もみゆ、家は艶にすぎたるはいりのさま、高どのにはいよ簾かけ渡してすゞしの聲ねこゝろにくし、家名は行燈にかきたるもあり額打たるもあり、ときはと呼あり梅のや竹のや、湖月はからす森に名高く花月は新橋の裏町にあり、あるはいが嵐の奥座敷に風をいとひ朧のはなれに落花の狼藉をみるなど、大方世の紳士紳商などいふ人のかくれ遊びの場所なめり、少なくも一町に一ヶ所はかならずあり、多き所には軒をならべて

仕出しの岡持常に行かふを見る、世にはいかに數まんのこがねありてかゝる用なき人のいとのどかなるよを過すらむ、孟宗は竹をえかねて雪中にこゞえ、孫康は螢少なうして窓の光りくらきをなげくに、地租輕減をとなふる有志家豫算査定に熱中するの代議士かゝる遊びに費すこがねのをしからずとは不學不識のものゝしれがたき事にこそ。

五日　晴天。日ねもす机に寄て例のよしなしごと書つゞくる。西村君參らる、近日出店の都合成りといふ。小田病院の怪事をかたる。午飯をすゝめて歸宅せしは三時頃成し、瀧野君より庭前の栗を到來す、今日は甲子なればとて母君いさゝかものとゝのへなどして大黑天に奉る。日沒後母君の揉療治す、國子と共に少しして、今宵はいたくなまけにたり。

六日　快晴。母君朝來はり物をなし給ふ、姉君一寸參らる、午前よりひとへ衣二つ四つ洗ふ、午後よりは例の文机に打むかひぬ。

七日　快晴。午前髮すましぬ、午後より文机に打むかひて文どもそこはかとかいつゞくるに心ゆかぬことのみ多くて引さき捨/\することはや十度にも成りぬ、いまだに一篇の文をもつくり出ぬぞいとあやしき。早うものし初たるなむ師の君に一回丈添刪

を乞ひたるあり、そがつゞきをつゞらばやと思ふに我ながらおもしろからでかくは引やりつるなれど、さてはつべきならねば別に趣向をもうけなどして又つゞり出るに夫もかれもいとつたなし、昔し今の名高き物語も小說もみる度に我筆我ながらかなしく成りてはて／＼は打も捨まほしかれど、中々に思ひ懸ることとえやむまじきひが心にをこがましけれど又つゞくり出ぬ、あさつてまでにはかならず作りはてん、これ作りはてねば死なんとおもふも、心ちひさしと笑ふ人はわらひねかし。

八日　快晴。午前清書午後作文、十八史略及び小學を讀む。お鑛樣參る、明日の各評景物を作る。日暮て後母君と共に藥師に參詣す、勸工場を見物す、植木店に菊少しみえ初ぬ、露店六丁目邊までたてり、歸路途上にて姉君に逢ふ、歸宅後土產の粟餅を食す、母君ふし給て後、姉君一寸立よらる、これよりも土產にあはもちをもらふ、同道の人ありとて直歸る。風荒う吹出て空げしきいとすさまじ。十一時寢につく。

九日　早朝より支度をなす、小石川の稽古なればなり九時頃より家をば出ぬ、風は只吹にふく、されども空はいと晴たり、師の君に約し參らせたる茄子を持參す、いたく喜び給ひてこれひる飯の時にはくはゞやなどの給ふ、春日まんちうひとつそきて喰ひ

給ふとておのれにも半を分て給ふ、もの語りども少しする程にやがてひるにも成ぬ、もてなしにあづかりて諸君の來らせ給ふを待程に、かとう子君先參らる、今日は來會者二十二名成し、點取題秋烟にて、小出君の乙はおのれ成しかば短冊を給ふ、おやしう我點は樋口君にのみとらるゝよなどの給ふ、猶天性といふものこそ有けれつとめ給へ進むはかたくしりぞくはいと安きぞかし、我れ後見てんなどの給へば、師の君いでや夏子ぬしよ小出君に盃參らせ給へ、かくまでにの給はすはうきたることにはあらじをなど打笑ひ給ふ、例のひがものはいとつゝましうて只ものゝすみにのみひそまり居るもおこ成りと笑ふ方々あるべし、人々歸後小出君もかへる、みの子ぬしとをのれと又少し物語りす、歸宅せしは日沒少し過成し、母樣むかひに出給ひて道にて行違ひぬ、奧田の老人參り居りしかば給はりつるくだものなど少しやりぬ、老人は國子道まで送り、今宵和歌二十首斗よむ。ふしどに入ても更に寢られねば、ふたゝび起てふみどもよむ、十二時ふしぬ。

十日　晴天。湯島の天神大祭也、母君午前より所々遊覽にと參らる午後四時頃歸宅われも老ぬる哉かく氣樂に遊びありくこととて笑ひ給ふ、日沒より國子と共に拜禮に

行く、山車は切通し坂に一つ有のみ成けり、社内より新花町の方へ出んとて吉田君の表をよぎりしかば國子立よる、しばらくにしてもろ共に歸る、家に歸りしは七時頃成し、しばし打ためらひて机どもて出る程に郵便來る、今朝兄君に時候伺ながら一書参らせたるまゝその返事なめりとおもひて封じめきるにさま〴〵有りてさてこなたいと〳〵春よりの不都合勝にていかんともいたしかたなく負債の裁判などしば〳〵あり到底せんかたなければ財産差押さへといふことに成ぬ、明日は日限ともなればこと〴〵く破産の不幸に立至れり、其頃參りてものがたらひてんと成り、金三圓斗あらば何とか成べきことながら夫すら心にまかせずなど書給へり、いといたうおどろかれて何事ぞこはとて母君とも〴〵はかる、こゝに金四圓はありこれかしこへかさばこゝに又難義やおこりなんいかにせんなどの給へど、只そはなにかは公權の剝奪といふことは人事に於ていと耻べきことにはさぶらはずや。家は又我稽古衣の衣賣しろなすともよしこれもて行て故よし明らめ給ひて渡させ給へ、くらく成なむに明日といふなれば今宵は過しがたかるべしとて車ものして母君をやる、國子も共に案じ〳〵す程に十一時頃歸宅し給ふ、大方かたの付べき成りと聞に少しむね安くも成ぬ、此夜中より國子俄に

腹痛をやむ、夜ひと夜只くるしみにくるしみてはかなく明ぬ。

十二日　國子なほおこたらず、今日は本願寺のお取越しとかやなりとて母君九時頃より參詣せらる。十時頃より稻葉の妻君正朔殿と共に參らる、ひる飯參る、午後より姉君參る、國子の見舞になり、四時頃母君歸る、日沒少し前稻葉君歸らる、秀太郎參りしとて到來の赤飯などくわす、今日は法華宗にても十夜とかにてこゝかしこより配物貰ふ、今日もいたう怠たりにけり。

十三日　晴。兄君如何なし給ひけん只案じに案ずれど更にふみもおとづれもなし、沖なわ縣より依賴の歌師の君に添删乞はんとてもて行、ものへ行給ひて留守なるこそいと詮なし、又こそ參らめとて歸る。

十四日　さしたることなし。晴。

十五日　もおなじく六時よりものへ行。

十六日　おなじく。

十七日　稽古日なり。晴天成し、題例のふたつ一題十點の一つありけり、伊東夏子君二つ、鳥尾君ふたつあり、松井節哉君八つとらる、明治女學校の學生にて田邊君が知

人なるよし打みる所はいとおとなしやかなる人なり、日沒少し前歸宅す、岡田より仕立もの依賴せらる、母君斷らんなどの給を遠路よりのなればとておのれうべなふ、今宵は舊菊月十五日なり空はたゞみ渡す限り雲もなくてくずの葉のうらめづらしき夜なりいでやお茶の水橋の開橋になりなめるを行きみんはなど國子にいざなはれて、母君もみてこなどの給ふに家をば出ぬ、おぶみ坂登りはつる頃月さしのぼりぬ、軒ばもつちもたゞ霜のふりたる樣にて空はいまださむからず袖にともなふぞおもしろし、行々て橋のほとりに出ぬ、するが臺のいとひきくみゆるもをかし、月遠じろく水を照して行かふ舟の火影をかしく、金波銀波こもごもよせてくだけてはまどかなるかげいとをかし森はさかさまにかげをうかべて水の上に斗一時の雲かゝれるもよし、薄霧立まよひて遠方はいとほのかながらに電氣のともし火かすかにみゆるだもをかし、いざまからんまからんと斗いひてはそもはなれ難きぞいとわりなき、またかゝる夜いかゞはみんなど語りつれつゝするが臺より太田姬いなりの坂を下りてくるほど、下よりのぼりくる若人の四たり斗衣はかんにと出立さはやかに折にふれたるからうたぎんじくる哀をの子ならましかば我らえたへぬ夜のさまよとて國子のうら山しげにいふもをかし、馬車

のいとろうがはしきに小路につとはしりの〳〵、神田の森に月みんとて坂のぼるほどいとくるし、のぼりはてゝふと見返るに月はいつしか空高く成て二本ある杉のかげにかくれてさしのぞかざればみることうとし、うたよまざらんはいとくちをしとてさま〴〵におもひめぐらせど月のかげにやけをされけん、ふつに趣向もめぐらぬこそ猶よみなてふこと成べしとて打笑ひつゝやみぬ、大路をかへりくるほどいと〳〵をしう覺ゆれど、母君のまたせ給はらんなどいとうしろめたうていそぎかへる、八時前なりしかど時計只こゝもとに取寄せてさしのぞき居給えりし、なほ暮く遊事はいとあしきこと成り、母君をふさせ奉りて少しふみどもつゞる。此日は秀太郎小學の運動會としてかま倉地方へ遠足成しかばさこそつかれつらめなど案じくらす。

十八日　晴。午前母君他所へ參らる、おのれは依賴の仕事をはじむ、山下直一君參らる、下宿がへ昨日せしと也、少しもの語りて家の新聞など貸あたへてかへす。午後より菊子ぬし參らる、卒業しけん終り給ひていとよろこばしげ也。一昨日より半井君のもとに遊びてよべ歸りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどいといたう打案じての給へりし、參らせ給へよなどの給ふ。みにもかねてより參り寄らまほしく思ひながら

猶なんさはる事ありてまかでぬを常に心ぐるしうてのみなんある、か〻れどころにの給ふにも猶いとはづかし、さま〴〵もの語りありて歸り給ふ。此夜隣家中島にていとけふなること共ありたり。くらこぬしのもとにふみしたゝむ、十一時頃ふしどに入しかど思ふこと多くていをもねず。一時斗成けん花しよの國には至りつきぬ。

十九日　晴天。何事もなし。

廿日　晴。何事もなし。圖書館に行。

廿一日　晴。　同。

廿二日　晴。あす半井ぬしを問參せんとす、ふみかいしたゝめて出す、さはれまだ約束の文章は少しもしたゝめぬものをいとおぼつかなしやとおもへど猶せめて出す、入湯などして用意す、空いとよく晴れて塵斗の雲もなきに例半井君へ參るからに雨降らぬ日なかりつればいづら明日はと國子をかへりみていふに、頼むともやわかとて打ほゝゑみぬ。夜に入てより半井君より書狀參る、孝子君事廿七日嫁入らすべきよし、其後參りくれ度となりけり、俄のことにて誠ともおぼえず、いとあやし、十二時ねぬ。

廿三日　早朝床を出しに雨降にふる、さは又降らるべき成しなどいふ程に朝日のか

げさしのぼる頃より只晴にはれ行もをかし、稽古題五題・各評一題、難陳三題よみて
ひる飯をたうべぬ。午後よりもら月來る、新平參る、國子の蟬表えまほしと樣にいへ
ばやがて二つ斗うる、百足斗もて來し中にか斗のは又なしなどいふ、我身の歌しくら
べられんにいかにせまし穴にも入らまほしうこそ。十一時床に入る。

二十四日　空晴たれどいと寒し。八時頃より家をば出ぬ、師の君は昨日より例のこ
となやみ給ひていとくるしげにおはしますを。近衛家の令夫人うせ給ひしに其弔ひせ
ばやとておのれに留守ゆだねて朝のまに趣き給ふ。前田利嗣君の令妹にて芳紀二十三
とか聞召し若君御出生の月成しとか、來會者今日は多からず。伊東夏子ぬしもいとお
くれて參る、前島むつ子君入門せらる、十時許師の君歸宅題二つ成し、師の君より近
衞篤麿君の哀傷の歌を承るに、

なき數に母の入しもしらぬ子の
ゐがほみるさへかなしかりけり

誠心誠意の作はげに天地をも動かすべき成りとて師の君歎じ給けり、午後四時頃一
同歸宅、師の君いとなやましげにて直に打ふし給ふ、おのれ家に歸りつるは日沒少し

前成し、國子のゝ宮君を訪ふ。女學雜誌外少々書物をかりくる。半井孝子ぬしが嫁入給ふいはひもの少しもて行方よろしからめとてなり。さわ明日早朝にと心がまへす。久しう訪ひ奉らざりしうちに樣々あやしき物がたりども多かるを半井君のそをおのれにつゝまんとて苦心し給ふなど聞にも少しほゝゑまれぬ。十二時床にいる。

二十五日　朝來曇天。八時頃宅をば出づ、半井ぬしをとふ。門に車の下り居るは客人のおはしますにやとおもひつるにさはなくて、兄弟知己の方などへにや暇乞に趣き給らんとなめり、おのれは玄關にて祝詞のべなどして歸らんとするに孝子の君兄も宅にて侍りしばし上り給へなどいふ、うしも出來給ひてかにかくとの給ひつれど又こそとて歸る、二十七日福岡地方へ送りやるに其後必ず參らせ給へ少し打ちものがたらひ度ことあるになどいふ、歸路師の君の昨日いとなやまし氣におわしたればとひ參らす、今佐々木君へ診察受けに參り給ひてんといふ所なりけり、留守の用ども仰付かりて、師の立出で給ひて後、書狀二三通したゝめ出し、おのれは直に家に歸る。午後よりは書見をす。此夜十二時床にいる。

二十六日　晴天。國子關場君へ參る。半井君の負債事件聞來る。尾崎紅葉が不品行

なることゝなどいと多く聞ゆ。岡田より仕立もの取に來る、又依頼し度などいふにこれをも受合ふ。午後鳥尾家難陳歌合二題よみて送る、かしらなやましたれどいとかひなし

今宵はいねしは十二時成し、されどおもふことのなし難きなんこの身ながらにうし、

二十七日　よべ雨や降けん朝庭少ししめりたり。七時地震す。亡兄命日なればとてはつもの養などして奉る。鳥尾君へ參らん時の料にとて洗ひ張させし衣縫ふ、はぎものひる前かゝる、下まへのえり五つはぐ袖にはぎ二つあり。

　　宮城のにあらぬものからから衣
　　　　なども木萩のしげきなるらむ

絶えずかかと打笑ふもをかし、日暮迄は手ならひをす、今宵よりは筆のはこびいと思ふ樣に例刻よりはすこし多くなしたり、一時床に入る。

二十八日　雨天。六時頃急なる地震あり、ことしは大地しんの三十七年とかやいひていとうあやふがる人も有るなり、十時頃坂上なる洗たく店の主來る、明日午後までに綿入二枚仕立貰度となり、斷らむもさすがにてうけがふ。午後よりもてくる、國子と二人して日沒迄に平縫丈なし終りぬ、暮てより空晴行風少し吹く、例の手ならひ

一時斗して、作文にかゝる。

二十九日　早朝配達し來る新聞を見れば、昨朝の地震東京の地こそ何事もあらざりけらし、各地の電報によれば愛知岐阜邊より伊勢路濱松邊など、容易ならぬ災害成りといふ、但し詳細はいまだしれずと成り、横濱などにも家屋の崩れたるなどはなかりしものから電燈會社の烟筒など倒れて點燈しがたしなどいふ、或人はいたく驚怖して東京もやがて震ふべきなめりなどいふ、午後二時過に約束の縫物終る、夫より半井君にはがき奉る、明日參らんとなり、その文したゝめなどす、夕刻より朝日新聞の號外賣りに來る、地震の報道なるべし。此夜床に入りしは一時三十分なりし。夜半より强風、曉方に森川町神社の傍より失火、十二三戸燒る。

三十日　風止まず空雲りたる樣にていと寒し。新聞の來るいと遲しと取てみるに、此度の災害地の殊に害を被むりしは岐阜縣下及大垣笠松など也、殊に岐阜は全市燒失吏に實情相知れず、岐阜接近の場所加納笠松、關、大垣邊死傷算なく燒失崩潰等枚擧にいとまあらずといふに、江崎牧子ぬしは上加納高岩町に居し給ふなる、如何し給ひけんと思ふに涙たゞこぼれにこぼる、されど鐵道も電信も郵便も不通なりといふに安否を

問参らする事も能はず空しう打なげきて空のみながめぬ。十二時頃家をば出づ、半井君をとふ。二番地の寓所をとひ参らせしに種々込入たる話しもあれば此頃もとめし隠れ家にとの給ふ、伴なはれて一丁斗手前なるとあるうら屋に参る、座敷の間數四つ斗あり、書齋なるべし六疊の間に文机置てそか上に原稿紙筆硯など次第なく置かれたり、障子四枚立てる外は縁なるべし、入りての右は小窓なから風のいと強ければにやおろし込めたり、左に三尺の戸棚有て其並に同じ三尺の床めきたる所あり、おのれは例の近眼にてえよくもみえねど何やらん景色の寫眞額有けり、君と我とは長火桶ひとつ隔てゝ相對座しぬ、例のにこやかに打笑みつゝこゝへ寄給へなどの給ふ、七歳にして席を同じうせざるなん行ひがたかる業ながらかう人氣なき所に後めたくも有る事よと思ふにひやゝかなる汗の流るゝ心地す、いふべき事もえいひ出でやらで手に持てるハンケチのみをかしこき相手とまさぐり居たり、孝子嫁入らするとていたく苦勞をなしぬ、世の母親が娘を緣付るなん身のやするといふ事は僞ならず、我ながら瘦にたる心地のするなどの給ふ、つぎて新太君、鶴田民子ぬしが關係一條引出ていと面なげにの給ふ、さる頃野々宮して聞しめさせたる其事よ、我家よりさる醜聞の起るべきなど夢

にも思はざりしものをしらで過たるなん別ておのれがあやまりなり、さるに君がかく打絶て訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる樣にさかしらする人や侍りけん、身はしら雪の淸きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう。かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしがりて某に猶曲事ある樣になん思はるゝこれもつらし、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をとていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語り奉れるにこそ、おのれはかゝる粗野なる男子なれど貴孃方にいさゝかも害心をなんさし挾まぬ。されば兄弟中の醜聞より御母君などやあやふがりてかく引止め給ふにや。其心配なう參らせ給はゞ嬉しからんなどの給ふ、おのれはさる心にもあらざりしかど笹原はしる御心なめりかし、小說に付てしばし物語りして先日送り置きたるなん此頃變名にて世に出さばやなどの給ふ、恥かしき限りながら可然とて依賴す、小說本四五本かりて又こそ參らめとてたつ、例の今しばしなどの給へど久しうあらむもいとつらきに其まゝ歸る、九段坂より乘車して家に歸りしは五時少し前なりし難陳歌合のまき廻り來れり、今日はこれが判じをなす。床に入りしは十一時成し。

卅一日　小石川稽古成り、朝風のいと寒かるに起き出てみれば霜ましろに置けり、

初霜にこそなどいふ。八時頃家を出て師の君がり行く、暮秋の霜といふ題なん出ぬ。

　めづらしく朝霜みえて吹風の
　　寒き秋にも成にける哉

意景成りとて十點になりぬ。次に有孝卿の成りし龍田川紅葉みだれて流るめりてふを本歌に取りて、

　　いさゝ川渡らばにしきと斗りに
　　　散こそうかべ岸のもみぢ葉

かくなんいひていたく師の君にしかられにき、本歌を取てそを受たる詞なしとて成り、さもあらばあれ、小言にたゆまず猶かゝる歌もよむべし、其中には少しは聞ゆるものも出らんなどの給ふ。諸君の歸らせ給ひしは四時半成し。おのれ歸らんとする時師の君少しまてよとて止め給ひつ、小紋ちりめん三つ紋付の引通し衣類表丈給ふ。これは歳暮に參らせんとしたるなれど早き方都合もよかるべし、新年など何某くれがしの會に出るに紋付なくてもいかゞとて給ふかたじけなしなど中々なり、少し晴う成りたれば途中まで母君迎ひに參り給ふ、諸共に歸りて夕飯したゝめたる後、明日の景

物かひにとて本郷二丁目の信富館てふ勸工場へ行、ものとゝのへて歸りしは九時頃成し。夫より書物少して今宵は早く打ふしぬ。

十一月一日　朝來快晴。殊に時候暖和にて實に小春の日和成り、十時頃迄判にかゝる、夫より髮あげ化粧などして十二時半より家をば出ぬ。師の君がりとひ參らせしに今行んしばし待てよとて支度し給ふ、夫より諸共に歸るさは我家より車やらんにそは返せよとてこの車は鳥尾君より歸す。室内の模樣も庭園の景も別に記すべし。師の君拔き歌初冬紅葉には鳥尾君、隱家にてはおのれ、戀も鳥尾君成り、おのれは拔歌給はる、鳥尾君を辭したるは日暮て餘程の後なりし、師の君の許にかへりつきて後よき歌をよみたるに褒美などの給ひてくわし給ふ、又車をも給はりて家に歸りしは六時頃成し

今日の來會者、

水野君は親子、つや子君、齡子君、きく子君、みの子君、夏子君、かとり子君、のぶ子君の　諸君成りし。

此日江崎牧子君に書を出す。さるは電信全通したれば也。來る十九日は前島君のもとにて難陳歌合せんとて約す。

二日　快晴。裁縫をなす、稲葉君來る。何事もなし。日沒より書見をなす、十首斗歌をよむ。習字一時間、十二時床に入る。

三日　天長節なれば、例によりて餅少し斗つかす。山下君參る、しるこをとゝのへて出す、雜誌をかる、早稲田文學をからんとて約束す。午後に君は歸る。午前のうちに裁縫上着丈なし、午後よりした着の裾直しをする。各評廻る、田中君より瀧の川の誘引狀あり、斷つて延す。日暮てより書見。

四日　晴天。午前裁縫に從事す、午後より習字ならびに書見をす。今日より小説一日一回づゝ書く事をつとめとす、一回書ざる日は黑點を付せんと定む、但し我が心斗成りけり。日沒後國子と共に紙類を中島屋にかふ、心正堂に筆かはゞやとせしかど日沒よりは門を〆てうらず止を得ず歸る。久保木の姉君來る。稲葉氏にはがきを送る、十二時床に入る。

五日　曇天、朝來小雨正午より晴る。安達へ預け物取に行。女坂下心正堂に筆をかふ、三河屋に洗張りを賴む。午前歸宅す。今日も一日する事なしに終る。　咄怠惰本生。まき子ぬしよりはがき來る、先は無事也。

六日　午前奥田老人より、震災義捐金を出したりといふ。我もいかでいさゝか成りとも出さばやなど思ひながら母君の發し給はぬにかひなし。ひる飯をすゝむ、一時過歸宅さる、机邊には有ながら思ふ事何もならず、我身恥かしき仕業也。日沒後小林好愛君老母死去の報は青山君、師岡君より參る。母君の下駄かひに行。

七日　晴天。早朝母君小林君に悔みに參り給ふ。おのれは小石川稽古なり。八時三十分頃家をば出づ、かしこへ趣きしは九時前成けん、今日は慈善音樂會の催しあればにや來會者いと僅少なりし、午後二時暇を乞ひて歸宅す、家の都合あれば也。母君既に歸宅。午後四時頃強震あり、早卒母君を庭に出さしめなどするまに止みぬ、あやしき風説にこりたればなめり、日沒後母君再び小林君に趣く、今宵一夜通夜せんとて也。姉君參る、物語りなどして泊らんといひつれどかしこにも無人なればとて歸す、九時頃成し。

八日　早朝母君歸宅せらる、直ちに寢につく。おのれは圖書館に書物見に行、まだ開館に至らざりしかば櫻木町より根岸布田の稻荷迄そゞろありきす、名高き御行の松など見物す、ほゝづきやの奇談あり、やがて開館を待て入る。太平記、今昔物語及

び東鑑を買る、但し東鑑はよまで太平記並に今昔物語をのみ借かへてみる、館を出しは日のやゝ西にかたぶきし頃成き　向岡彌生町の坂にて若き書生のまだ十七八なると十四斗なると菊の鉢植をわら繩にて結ひて下げ來たりしに其繩切れて行なやみたればおのれがしめたる絹紐取てあたへんとしたる事、其折來かゝりたる大學の生徒のあやしげに見たる事、其書生が振舞の事、西片町にて別れし事、家に歸りつきしは日沒少し前成し、夫より母君再び小林君へ參る。十一時床に入ぬ。

九日　薄ぐもりせり。母君早朝歸宅せらる。今日は小石川稽古なるをもて髮上げなどす、突然に田邊有榮氏にとはる、狼狽の事、意味有氣なる物語の事、同氏歸宅やがておのれも母君も家を出ぬ。參着遲かりしかば師の君不機嫌の事、來會者廿九名斗有りし、小出君とみの子君との事、大造君に初めて逢ふ、片山てる子君實母に逢ふ、師君泊れとの給ひつれど家にいはざりしかばとて暇を乞ふにさればとて車を賜ふ、歸宅す、母君はおのれを迎ひながら西村君が新宅見んとて參り給ひしといふ、行違ひつるなめりとおもふに尋ね給なんいとわびしくてやがて又迎ひに行、師君は車を賜ひてまであやふしとの給ひし夜道を燈火もなくて一人行なんこゝにもかしこにもいとといふ方

なき罪成けり、表町といふ所に母君を尋ねあてゝともぐ\に歸る、八日斗の月雲に出沒して夜霧の道もみえぬまで立渡りたるなど只うつし畫の心地す。二人家に歸りつきしは九時成し。十二時床に入る。

十日　薄ぐもれり。此頃物入つゞきたるに例の困窮一しほ烈しく致しかたなしといふ、十五日には小出君催しの薊園の追善會に櫻雲臺にまねかれたる其料の着るもの縫ふべきながら、それ所かはとて小説の著述に從事す、十四日迄に編はてんとて成り。午前稻葉君正朔君と共に參らる、縫物依賴さる、せん方なくてうべなふ。午後大根をかふ、十四五本にて三錢五厘なりといふ。此廉にも驚きたり。四時頃より雨降出づ。母君血の道にて打臥給ふ、此夜小林より明日初七日逮夜なればとて招待狀參る。

都冬月　　　つばら

人をまつ車さむげにみゆるかな
みやこ大路の冬のよの月　　　のりを

雨晴しあしたのの邊を來てみれば

ぬれたる花に春風ぞふく　つばら

埋火

ともし火の油も氷る冬のよの
光りとたのむ閨のうづみ火　のりを

同

うづみ火にあたゝまりてもうしろより
吹くる風の寒きよ半かな　つばら

殘菊久

雪つりもかけたる松の下かげに
なほこそにほへしら菊の花　歌子

初冬紅葉

神無月しぐれのそめる紅葉を
秋のものとは誰かいひけん　同

隱家

山にのみ我かくれがをもとめしは
まだ入たらぬ心成りけり
　　　　　　　　　　　　　廣子

同

門のとはしるしの杉もなかりけり
くる人いとふ住か成らむ
　　　　　　　　　　　　　安彦

隔年戀

今日といひあすといひつゝあはぬ日の
一とせにさへ成にけるかな
　　　　　　　　　　　　　みの子

隱家

かくれがの軒ばのつたよ心して
色にないでそ秋はくるとも
　　　　　　　　　　　　　ひろ子

初冬紅葉

霜をへて更に色こき我山の
もみぢは冬のものとこそみれ

十一月二十二日　書を半井君によす、明日居宅の有無をとふ成けり。此夕したゝめものいと多くて三時過る頃まで執筆す。

二十三日　半井君より書状来る、幸ひに付来訪され度となり、午後より行かましの心にて其かまへなしつるに正午より空俄暗く成て大雨只盆を覆す様也、母君も心地なやましとて打ふしなどし給ひしに、路もいと難儀なめり彼方にてもかゝる折に人の来訪するはいたく迷惑のものなれば今日はやめにせずやなどの給ふ、例の怠惰心に制せられて行ず成ぬ。雨日暮て後も降にふる、今宵も三時に床へと入ぬ。

二十四日　起出みるに空高く澄のぼりて朝日のかげ花々とさし昇りてぬれたる梢軒ばなどに照り渡れるいと嬉し、昨日違約しまつれるに、今日だに時おくれさせじとて母君しきりに朝飯をはらば訪参らすべしとの給ふ、九時卅分家を出ぬ、かしこへ行しは十一時成けん、本宅の方とひ参らせしに、例の隠れ家にといふ、まだ目覚給はじ起し参らせんといふに、いなさてはちと早過たることよ、今しばしこゝに置給へ例覚給はんころにこそといへど、いな／＼といひて、下婢は出去りぬ、しばしして立帰りていふ、とくに覚給ばかなたへといふ、なるべくんば此方にてといはまほしけれどいひ

かねてしたがふ、君は木綿のふるびたる綿入の上にどてらといふものはふりて白か鼠のしごき帶し給る打とけ姿に、さしむかはなんおのづから汗あゆるこゝちす、下婢も歸り行ぬ、例の人なき小室の内に長火桶一ッ間に置てものがたりすることよ、我が學びの友達あるは親戚の人々なぞに聞かせ奉らんに何とかはそしられん、あやしかるべき身にも有哉、ましてかたみに語り合ふことなどいとまばゆしかし、新作せんとおもふ小說の趣向筋立などかたりてをしへを乞はんとてのすさび成けり、君まづの給ふいかなる趣向かつきたまひし承らまほしうといふ、心に決しては來りしものから何となくはなじろみて爪くはるゝ心地しけるぞわろき、いとなめげなることとなるにあからさまにはとも一度は思ひはべりしながら、文にはことに意を盡しかねてみづから參り侍りとてかたりいづ、骨子は片戀といふことにて侍りとて、其筋だてなどかたる、そはいとよかるべうとて、其くだりはかく〳〵せばよからん、こゝはかくせばなどの給ふ、あやしふもの語りの口とけて、いでやこの戀斗あやしきものはなし貴きも賤しきも賢なるも愚なるも其わいだめなき物也けり、されども今のよには其路をもて人をたぶらかし、世をくらますなんいと多き、城をかたむくるは女のみにてはあらざりけり

などの給ふ、奸譎なる美少年の貞淑なる良婦をたぶらかす談、利根の紳士が良家の處女が操をもて遊ぶてふ談などあり、さていはくかゝる類ひはみな其人を愛すにはさふらはず害すにて候也、誠の愛といはんからには其女が一生の大計を思ひはかりて安全なる良人を求め得させんことをこそ思ふべけれ、さて其人を選んに、世人が愛は猶我が思ふ意に滿たず、世人が敬は我が敬に過ぎず、世廣しといへども人多しといへどもかの女を敬愛することは我に過るの物はあらじ、さらばかれが安全の極り幸福の生涯をすぐさんこと我ならで誰かはなど思ひ到りたるこそ誠の愛なれなどの給ふ、かくて十二時にも成ぬ、ひる飯本宅よりもて來たりぬ、辭しかねてこゝにてたべぬ、君はなぞさは打とけ給はぬ、おのれはかゝる粗野なるをの子なれど恐れ給ふにはたらじをなどいふに、などかはさること侍るべき、こはおのれが生ねにこそ侍れ、年久しく相馴たる友はみなしることにて、かくかたくなゝるが本色にさふらふといへば、君も少し打笑ひてさることにやされば猶ぞかし、おのれもみる所こそかはれ心は君がの給ふごとなるものに侍るを哀れ友とし給ひて隔なくものし給へよといふ、そは今はじまりたることかはおのれはたゞ師の君とも兄君とも思ふなるをといふに、君また少しものい

はず成ぬ　少しありて哀我身こそ幸なきものなれ…………

日記（二十五年一月）

まつ人、をしむ人、喜こぶ人、憂ふる人、さま〲なるべき新玉のとし立返りぬ、天のとのあくる光りにことし明治廿五といふとしの姿あきらかにみえ初て、心さへにあらたまりたる様なるもをかし、人よりはやくといそぎ起て若水くみ上るもうれし、よべは雨いたくふりて風さへにすさまじかりしを名残なく晴渡りて大空の色のみどりなるに、いかのぼりの聲のいさましきも、つくばねののどかなる聲も、まじりて聞え渡れる何となくうれし、きのふより氣候とみにことなりて氣味わろきまであたゝかし、地震のこと心にかゝればなれど、埋火のもと遠くはなれて梅花の風軒ばにゆるく吹く、か斗の新年またせしことなしとて人々よろこぶ、いつも雪の様にみゆる霜の今朝しも置たりといふ色だになければ、

いか斗のどかに立し年ならむ
　霜だにみえぬ朝ぼらけかな

とおもはれぬ、雜煮いわひとそくみなど例年の通りなり、化粧などしてさて書初め

をなす、國子は日出山をしたゝめたり、おのれのは

　　くれ竹のおもふふしなく親も子も

　　　　のびたゝんとしの始とも哉

など樣のことをしたゝむ。山下直一君、久保木秀太郎年頭として來る。母君近隣に祝詞のべに參りたまふ。午後藤林房藏、西村釧之助、志川とくの二君參る。岩佐君門禮にて歸宅。夫より姉君、田部井參る。小時にてかへる。小宮山より年始狀ながらおぶん一條のはがき着、喜多川君よりも年頭狀來る、日沒後國子は裁縫、おのれは書見をなす。お寶とよぶ聲今宵より聞ゆるもをかし、初夢といふらんからに今宵みるこそ誠ならめど、ふるくより明日のものと成り居れるを、進みゆくよのしるし夢取こしてみよとにやをかし、ふしどに入しは十二時斗なりけん、時計直しにやりてわからねどねたり。

二日　曇天。早朝より年始着の三ツ揃へ仕立にかゝる、訪人まれなる宿のならひあら玉のとしともいわず、いと〳〵ものゝ靜かなるもとめねど閑成けり。午後より小宮山來る、おぶんの物がたり四時頃までする。今日年頭にこし人は土田恒之助ならびに

もと師の君がり仕へたる玉とよぶ女今二人三人成けり。今宵も裁縫に夜をふかしたり。

三日　曇天。よべは雨少し降たれど今日の空は夫ほどにもあらず。午前綾部喜亮参る。午後上野伯父君幷に三枝新君まゐらる、三枝君母君と伯父君に年頭として金子を送らる。種々はなしあり、一あし伯父君先にかへる、日没すこし前新君歸宅。この夜もよべにおなじくふけては雨に成りけり。

四日　曇天。年頭者は藤田君、菊地君のみ、野尻君、澁谷君より年頭状着、野尻君にはすでに差出したればよし、澁谷ぬしはこぞ赴任以來住家知れ難く、さりとて人にとはんも少し間のわるきに、思ひながら不沙汰なしたるに先よりはこと更に年賀いわれたる、答禮せずはとて直に返事を出す。午後甲州後屋敷村より奇異なる年頭状つきたり。今日までに諸々よりこし年頭状、熊ヶ谷より山下君、甲府より伊庭君、岐阜よりまき子君、音羽の前島君など成り、此方よりさし出したるも十五通斗はあるよし、今よりも猶四五軒はくるべしなどみな〳〵いふ。今日もひねもす裁縫、猶夜更るまでもなしたり。

五日　曇天成しが十時頃より晴になる。佐藤梅吉參る、一酌にて歸宅。午後より田部井參る。おなじくこの夜も裁縫よふかして一番鳥の聲聞てふしどに入たり。

六日　曇天。折々に雨さへふる風もいと寒かり、寒のいる日なりときけばことわりなり。三ッぞろへの綿入物をきる。この夜もおなじく三時まで裁縫。

七日　曇天寒し。明日はかならず降りなるべしなど國子などのいふはおのれが年頭にまわらむと定めたる日なればいやがらせんとていふなり。今日は目に立たる來客もあらざりし、稻葉君親子。おく田の老人の二組のみ、日暮迄に裁縫は仕終へたり、國子と共に入湯す、半井君に奉らむとし玉ものかひにとて本郷三丁目まで行、空いとよく晴て風少し吹初ぬ。山崎君、横山君、雨宮君より年頭狀つく。この夜綾部喜亮、久保木一條に付ものがたりにくる。おのれらはあすの仕度かれこれして夜をふかしたり。

八日　早起空打あふげばいとよく晴て塵斗のくもゝなし、うら〳〵とかすみたる樣なるが誠に春とのみ覺ゆ、出がけの支度かれ是するまに、綾部喜亮久保木同道にて參る、佗濟になる、歸宅直に國子は神田邊へ、おのれは車ものして先西村君へとて行、茨城より伯母君參られたりとて面會す、明日は歸國せんとおもふに是よりきく坂迄參

らんとの所なり、そなたより給はずば逢がたかりしとなどいひて嬉しげに物がたりす出て師君へ行、病中且來客なればと下女のいふにをして對面もいかゞ哉、さらば御老人はといふに只今ねぶりに付きたまひし所なりといふにわびて、更ば又こそとてかへる、みの子君を新小川町にとふ、あがれよなどの給ひつれど先をもいそげばとて暇ごひして出づ、車いそがせて平川町半井うしの本宅に來てみれば門戸かたく〱とざしてかし家のはり紙なゝめにはられたり、先むねとゞろかれて立よりてみれば、半井氏御尋の方は六丁目二十二番地小田何某方まで參られたしとなり、さらばとて又同家へ行、半井ぬしは何方へにかと訪へば、下女に似たるをな子打笑みながらに奥に入たり引違へて出來たるは主婦にやあらん三十斗の人我がとふに答ていふ樣、うしはさる頃より旅行して只今は留守に侍り、御用ならばこゝにいひ置給へといふ、御旅行はいづ方へかと又とへば、只地方へと斗いふ、今は尋ぬるも無益しとおもへば、只おのれは樋口と呼ばるゝものに侍り、別しての用なるならねど御年頭の御禮にとて參りつるなれば御歸京のふし其由申つぎ給てよ、又御手數なるべけれど御歸京の報をもねぎ奉るになんといひて出ぬ、なぞの御旅行か、まさしく御隱れ家になるべし、ぶしつけは

覺悟なり、頼み參らすこといと多かるをいかで對面せずにはとて、例のうら家をとひ寄たり、まづ庭口の方よりみればゑんがはの障子新たにはりかえて物何となくあらたまりたる樣なるは、もしよの人の住家にかはりたるかなどもうたがわる、格子戸のもとにたちてあまたゝびおとなへど誰れいらへする人もあらず、さては留守にやとおもへど、火鉢にたぎる湯のおとなど人なき折のさまにもあらず、うちにかとみれば格子戸の尻にせんさして出入かたく禁じたり、こゝ迄來て入れられざるも何となく物たらぬ心地のするに、いかで對面給はらずやとさま〳〵にいひ入たれどかひなし、水口の戸の明はなしあるにいさゝか力を得てそこよりいりぬ、さしのぞけばさま〳〵の家財つみ重ねたる納戸めきたる所、奥のかたにうしはをわすにかとおそる〳〵ものぞきたれど、人ありげにもみえず、留守なる所に上り居らんも後の人ぎゝいかゞなるべきかといそぎ立かへらむとす、さるにても參りしかひには奉らんとてもてきしものだにおかばやと思ひ寄て、臺所の板の間なる所に土產の小箱さし置て出ぬ、車にのりて歸る道すがらも思へばあやしき事をもなしたるかな、我身むかしはかゝる先ばしりたる心にもあらざりしを年たけると共におもての皮厚く成るなり、はしたなくもなりつるこ

とよ、かゝる筋のこと世の人もれ聞ましかば何とかいふらむ、あやしうなき名などたてられなんもしるべからず、いかゞはせんなど思ひ出づれば心は身をせめていとくるし、家に歸りしは二時半頃なりし。宮塚の伯母君參り居られたり、留守に姉君并に森照次君參られたりといふ、宮塚ぬしと暫時對話、西村の伯母君參る、おのれの早歸りにおどろき給ふ、夫より日沒迄西村伯母君談話、其中に國子歸宅、母君御伯母君を送りて表町へ參り給ふ、この夜日頃のつかれと遠路のつかれにや、疲勞ことに甚だし、さらに何事をなすべき心地もせねど、半井うしには是非一書參らずばすみがたかるべしとてしたゝむ、幾そ度書直しけんと角に心にもいらず、からうじて書終へたるはよみ返してみるに何となく末におそれの種やまかんとおそろしくさへ成て、状袋にいれたるまゝ便にもたくせず、余の事に移りぬ。母君九時頃歸宅。十二時まで詠歌す。

九日　早起小石川初稽古なればいそぎ出づ、さるにても西村の伯母君はいかにぞ、歸國やし給ひけん、道筋なれば訪奉らばやとて寄る、今日はたゝんか、いかにせんかなど樣にものがたらる、少時にて師君のもとに行、昨日對面をこはざりしとて師君大立腹なりと下女報ず、光長君來り給へり、師君に昨日の理由をのべて詫をなす、來會

者千名斗なりし、諸君歸宅は四時少し前成けん、夫より暫時二階にておのれが事に付て談話、半井君一條をものがたる、夫につきての心得かに角とをしへ給ふ、小說みばやわれにも又考案ありなど心切にの給ふ、日沒暇ごひして出ぬ。この夜よりおのれが平常ぎの綿衣仕立にかゝる。一時床にいる。

十日　晴天なれば今日は安達に年頭として行かばやと國子と共に支度をなす、父君墓所にも年始に參らざらんなん心ぐるしきに、今日こそはとて、まづ安達より先に行、小時にて築地に參り墓參、夫より直に歸宅、姉君のもとに年賀いひに行歸宅、小宮山おぶんの兩人參る、日沒前迄居たり。この夜はなすこといと多くて、ふしどにいりしは一時なりけん。

十一日　晴天寒し。母君四谷上野君に參らる。半井君よりはがきつく、旅行にも何にもあらず以前の隱家にありといふ、おもひしことよと打笑ふ、さるにても文出さゞりしこそ心安かれ、よくも書そこねなしたること哉と我ながら嬉し。午後母君歸宅、その前に久保木及び田中君來訪ありたり。今日はひねもす何ごとなしに一日を終へぬ床にいりしは十二時成けん。

十二日　早起、雪ちら／＼と降いでぬ、見るまに一寸斗も積りたるは極めて大雪になるべきなめりなどいひ合ふ程に、十時斗の頃には名殘なく晴わたりて日のかげさへもれ出ぬ。午後よりは雪たゞ消にきえて雨だりのおと軒ばに茂し、暮てよりは又雨に成ぬ。此夜より又小說著作にかゝる。ことの外になまけたり。

十三日　晴天、圖書館へ行く、九時頃より家をば出づ、太平記、大和物語をかりる但し大和ものがたりはみずして、太平記のみ閱覽す、三時頃出館、家にかへる。母君の爲に按摩を雇ふ、舊幕臣なりとて述懷のはなしあり、日沒後母君なほよろしからずとておのれ又按摩を爲す。十二時床にいる。

十四日、晴天也、母君神田邊に年始に趣き給ふ。午前のうちに綿入ものをなす、午後より作文にかゝる。日沒後より歌をよむ、宿題五ツ、十首を詠ず。十二時床にいるこの夜濱田何某夜にげの奇談。

十五日　早起、小豆がゆの節行ふ、午前髮あげをす。午後より作文。夕刻吉田君年頭として參らる、夜食を出す、八時頃まで談話、國子附木店まで送りて行。十二時床にいる。

十六日　小石川稽古なり。早起行、みの子君すでにあり、例のかるた君入給はではいとさう〴〵しきに是非をいはず來給へかしなどかへす〴〵いふ、師君も行べしなどの給はするに、さらばとて宅へは狀をさし出してこゝよりともなはる、來會者十七人斗、無禮講の一座中々にわづらはしかりしを終りしは三時斗成し、この夜小震あり、この日堤よし子君入門。

十七日　九時頃までねむる、朝飯を終てやがて車給はりて歸宅す。母君大立腹なりといふ、ひたすらに先非を後悔す。母君は小林君よりかけて三枝へ年頭にとて趣き給ひし留守なりけり。山下直一參る。晝飯を出す、二時ごろ歸宅、廣瀨ぶんへはがきを出す、三時頃母君歸宅、山下直一より借りたる早稻田文學通讀、よべ夜更しをなしたるに風をや引けんせき出てたえがたければわびていと早くふしどに入たり。三時頃大震。

十八日　天氣晴朗。吉田君にはがきを出す、みの子君親戚の緣談一條につきてなり母君望月へ趣きたまふ。廣瀨ぶん參る、ひる飯を出す、種々談話、三時頃歸宅、この夜も早く打ふしたり。

十九日　天氣快晴。母君下谷邊年頭にとて午前より出かけ給ふ。風邪ことに甚だしければ打ふす、服藥などす。此夜ねつ甚だし。

廿日　快晴。母君ぶん一條に付常總館へ趣き給ふ、おのれは猶病床を出ず、今日も一日打ふしたり、母君歸宅ぶん旣に監視換をなしたること、常總館主人かはるべきはなしあり、食事兎角すゝまず、此夜も服藥して寢たり、濱田の妻子來る、九時頃歸宅。

廿二日　快晴、寒氣甚だし明日は小石川稽古なるに、今日打ふし居らば母君又とめ給はんも斗りがたくて、早朝よりおくる、晝飯など味はなけれど常の通に食したり。御歌會始、御製並に豫撰の歌ども今日の新聞紙上に出たり。することなしに打ふしたり。

廿三日、天氣快晴なりおもむろに、髮など結びかへて午前十時といふに家を出ぬ、師のもとには來會者すでに十八斗ありし、伊東夏子ぬしも風邪にて參り給はず、小出君及び小笠原政德君參會歌話あり、吉田かとり子君落車の災難あり、今日は來會者いと多かりし、日沒終會、師君より鮭甘酒漬一箱給はりて歸宅す、田中君より新小說か

る、歸來閲覽に一夜を更す。

廿四日　天氣快晴。朝來手紙を二通したゝめ、午前丈習字をなす。午後より小說閲覽。

廿五日　無事。

廿六日　無事。

廿七日　曇天。午前例の通習字、午後より小說稿にかゝる。この夜なす事なしにふしたり。

廿八日　早起、曇天、あたゝけし。終日小說從事。

廿九日　曇天。

卅日　晴天。小石川稽古歌合ありたり、歸宅日沒。上野君母子來たりし由なり。

卅一日　しるす程のことなし。

二月一日　無事。

二日　無事。

三日　半井うしへはがきを出す、明日參らんとてなり。しばらくにしてうしよりも

はがき來たる、明日拜顏し度し來駕給はるまじきやとの文躰なり、こはおのれが出したるに先立てさし出し給へるなるべし。かく迄も心合ふことのあやしさよと一笑す。

四日　早朝より空もやうわるく、雪なるべしなどみないふ、十時ごろより霙まじりに雨降り出づ、晴てはふり〳〵ひるにもなりぬ、よし雪にならばなれ、なじかはいとふべきとて家を出づ。眞砂町のあたりより綿をちぎりたる樣に大きやかなるもこまかなるも小止なくなりぬ、壹岐殿坂より車を雇ひて行く、前ほろはうるさしとて掛させざりしに風にきをひて吹いるゝ雪のいとたえがたければ傘にて前をおほひ行くいとくるし、九段坂上るほどほり端通りなどやゝ道しろく見え初めぬ、平川町へつきしは十二時少し過る頃成けんうしが門におとづるゝにいらへする人もなし。あやしみてあまたゝびおとなひつれど同じ樣なるは留守にやと覺えて、しばし上りがまちにこし打かけて待つほどに、雪はたゞ投ぐる樣にふるに、風さへそひて格子の隙より吹入るゝ寒さもさむし、たえがたければやをら障子ほそめに明て玄關の二疊斗なる所に上りぬ、こゝには新聞二ひら(但し朝日、國會)配達しきたりたるまゝにあり、朝鮮釜山よりの書狀一通あり、唐紙一重そなたがうしの居間なれば明けだにせば在否は知るべきなが

らで、例の質とて中々には入りもならず、ふすまの際に寄りて耳そばだつれば、まだ睡りておはすなるべしいびきの聲かすかに聞ゆる樣なり、いかにせんと斗困じたる折しも、小田よりなりとて年若きみづしめ郵便をもて來たりぬ、こはうしの此頃世にかくれて人にあり家しらせ給はねば親戚などの遠地にある人々より書狀はみな小田君へむけてさし出し給ふなるべし、この使ひもこれ持來たりたるまゝうしをば起しもせでよろしくなどいひて歸りぬ、一時をも打ぬ、心細くさへなりてしわぶきなどしば／＼する程に、目覺給ひけんつとはね起る音して、ふすまはやがて開かれたり、寢まきの姿のしどけなきを恥ぢ給ひてや、こは失禮と斗いそがはしく廣袖の長ゑりかけたる羽織き給へり、よべ誘はれて歌舞伎座に遊び一時頃や歸宅しけん、夫より今日の分の小說ものして床に入しかば思はずも寢過しぬ、まだ十二時頃と思ひつるにはや二時にも近かりけり、など起しては給はらざりし遠慮にも過ぎ給へるよとて大笑しながら、雨戶などくり明け給ふ、あなや雪さへ降り出でたるにさぞかし困じ給ひけんとて勝手のかたへ行、手水などせんとなるべし、一人住みは心安かるべけれど、起るやがて車井の綱たぐるなど中々に侘しかるべきわざかなと思ひ居たるに、臺じうのといへるものに

消炭少し入れて其上に木片の細かにきりたるをのせてうし持て來たまへり、火桶に火起し湯わかしに水入れて來るなどみるめも侘しくて、おのれにも何か手傳はし給へ、お勝手しれがたければ敎へ給ひてよ、先づこの御寢所かた付ばやとてたゝまんとしたるに、うしいそがわしく押とめ給ひて、いな／＼願ふ事はなにもなし、それに其儘に置給ひてよと迷惑げなるにをしてはいかゞとてやみぬ、枕もとにかぶき座番附さては紙入れなど取ちらしあるに、紋付の羽織糸織の小袖など床の間の釘につるしあるなどらうがわしさも又極まれり、昨日書狀を出したる其用は今度靑年の人々といはゞいたく大人顏する樣なれど、まだ一向小說にならはざる若人達の硏究がてら、一つの雜誌を發兌せんとなり、世にいはゆる大家なる人一人も交えず、腕限り力かぎり仆れて止まんの決心中々にいさぎよく、原稿料はあらずともよし、期する所は一身の名譽てふ計畫ありて、一昨夜相談會ありたるまゝこは必らず成り立つべき事と思ふに、君をも是非とたのみて置きぬ、十五日までに短文一編草し給はずや、尤も一二回は原稿無料の御決心にてあらまほしく、少し世に出で初めなば他人はおきて先づ君などにこそ配當いたすべければなどくれ／＼の給ふ、さりながらおのれら如き不文のもの初號な

どに顔出しせんは雜誌の爲め不利益にや侍らむとて辭せば、何としてさることやはある、今更に其樣なこと仰せられては中に立てそれがし甚だ迷惑するなり、先方にはすでに當になしたることなればなど詞を盡して仰せ給ふ、さればよろしく取斗らひ給ひてよ、實はこの頃草しかけし文御めにかけばやとて今日もて參りぬ、完成のものならねどとて持てこし小說一覽に供す、よろしかるべしこれ出し給へ、おのれは過日ものがたりたるもの一通の文としてあらわさばやと思ふなりなどものがたらる、其中うし隣家へ鍋をかりに行く、とし若き女房の半井樣お客樣かお樂しみなるべし御浦山しうなどいふ聲、垣根一重のあなたなればいとよく聞ゆ、イヤ別して樂しみにもあらずなどいふはうしなり、先頃仰せられしあのおかたかと問はれて左なりといひたるまゝ、かけ出して歸り來たまへり、雪ふらずばいたく御馳走をなす筈なりしが、この雪にては畫餅に成ぬとて、手づからしるこをにてたまへり、めし給へ盆はあれど奥に仕舞込みて出すに遠し、箸もこれにて失禮ながらとて餅やきたるはしを給ふ。ものがたり種々うしが自まんの寫眞をみせなどし給ふ、暇をこへば、雪いや降りにふるを今宵は電報を發してこゝに一宿し給へと切にの給ふ、などかわさることといたさるべき、免しを

受けずして人のがりとまるなどいふ事いたく母にいましめられ侍ると眞顏にいへば、うし大笑し給ひて、さのみな恐れ給ひそ、おのれは小田へ行てとまりて來ん、君一人こゝに泊り給ふに何のことかわあるべきよろしかるべしなどの給へど、頭をふりてうけがわねば、さればとて重太君をして車やとはせ給ふ。半井うしがもとを出しは四時頃成けん、白がひ〳〵たる雪中、りん〳〵たる寒氣ををかして歸る、中々におもしろし、ほり端通り九段の邊、吹かくる雪におもてもむけがたくて頭巾の上に肩かけすつぽりとかぶりて、折ふし目斗さし出すもをかし、種々の感情むねにせまりて、雪の日といふ小說一編あまばやの腹稿なる、家に歸りしは五時、母君妹とのものがたりは多けれどもかゝず。

六日　小石川稽古。

七日　ことなし、但し山下君、西村君、萩野君、石井來給へり。

八日　ことなし。

九日　奧田老人病氣の報あり、母君直に參り給ふ、國子と共に同車に付てさま〳〵相談す、萩野君來給ふ、朝日新聞を持參したまふ、原町田、澁谷へ書狀さし出しくれ

度とてはがきを依頼さる、日沒後母君歸宅、老人は左までにもあらざるよし、此夜姉君秀太郎來る、十時頃まで談話歸宅、母君國子も今宵はねむからずとて、二時頃まで起居給へり。

四谷右京町二十七番地　上野兵藏
麴町平川町三丁目十五番地　中井洌
同町六丁目二十二番地　小田久太郎
越後國南蒲原郡三條町　澁谷三郎

和歌四天王の著名の歌

頓阿

月やどる澤田のおもにたつ鴫の
氷よりたつ明方の空

兼好

手枕の野邊の草葉の霜枯に

みはならはしの風の寒けさ

淨辨

滄江の氷にたてるあしの葉に
ゆふしもさやぎうら風ぞふく

廣運

庵結ぶ山のすそのゝ夕ひばり
あがるもおつる聲かとぞきく

につ記　（二十五年二月）

二月十日　朝來机邊にあり。午後母君奥田へ見舞に參り給ふ。日沒少し前小石川より郵便來る。師君風邪にて一人にて歩行も出來難しとのこと、早速參くれ度趣故、直に支度して行く。師君いたく喜び給ふ。逆上甚だしくともすれば本心をも失なひやせんと思ふ樣なるに種々後事など托しておかばやとて呼つる也とて、心細げに泣き給ふ、種々談話、君が來給ひしより心落居てや少し快よく成たる樣也との給ふ。藥などすゝめて十時にも成ぬ、明日又とて床にいりし。

十一日　快晴。師君大きによろしき方也。下婢のことに付て伊東家一條のものがたりあり、右らにつきおけいのもとへ使ひに行く。其もやうに依りて更に伊東君へ行く岩松のもとより車、伊東君にて暫時對話、但し夏子君は他行中なりし、歸路佐々木君にて藥取をなす、午後水野せん子君參らる、三時過る頃宅より國子迎ひに來る、新參の下婢のおのれと見違へたる奇談あり、夫より直に暇乞して歸る、四時成し。上野房藏來たりたるよし、國子それより吉田君へ行く、歸宅せしは日沒後なりし。吉田君よ

り梅と水仙のいけ花もらひて來る。此夜國子日記の書き初めをなしたりとて見せる。此夜二時床に入る。

十二日　雨天。父君の命日なれば母君寺參りし給ふべき筈なりしが見合せにす。小說十五日までに半井うしへ送べき約なるに期日も近づきぬ、まだ上の卷許にて中下とも殘れり、さらば明日の稽古は斷りいひて休まばやと師君のもとへはがきを出す、此夜小說少しよみて母君に聞かし參らす、思ふことおもふまゝにもならで今宵もいたく怠りにけり。

十三日　晴天。朝來小說にかゝる、終日從事、此夜終夜、曉がたに少しねむる。

十四日　大雨。終日小說に從事し、燈明に及で全備す、半井うしへはがきを出す、明午後參らんとて也、重荷おろしたる樣になりて、今宵はいたく安心す。

十五日　雨はやみたれど風寒し。午前に家を出で、師の君がり先行く、伊東君老母歸宅されんとする所成し、師君これより佐々木君へ參り給ふよし、暫時居りくれたしとて出かけ給ふ、二時近くなるまで歸宅なし、おのれも麴町行きに心いそがれて留守居の婢女に依賴して暇乞す、九段坂上より車にていたる、半井君方に來客ありげなれ

ば軒ばにしばしたゝずみ居しにうし窓より面を出し給ておゐ入あれ心配の人ならず、我が兄弟同樣のものぞとの給ふ・入てみるに何といふ人かしらず年若く色黒き人なり、小說一覽に供すいたくほめらる、其人も種々にいふ、雜誌の名はむさしのとつきたるよし、遲くも來月一日頃までには發兌すべき見込也といふ、男子の方は一月交代のつもりなれど君のみは連月に願ひたしなどいはる、うしが新著の草稿みせ給ふ、小がさ原艶子孃といふ人物の名ありこれは心づけて直し給へなどいふ、小時にて歸宅。芝兄君病氣にて困窮甚だしといへるに金少し通運便にて送りたりしが今少し送られたしとはがきにていひこしぬ、さらば明日おのれが參らんなどいふ。久保木參る、國子とおのれとがすもじかひに行く、留守にて母君腹痛のこと、歸宅早々手當をす、夜を盡してわるかりし。この日總選擧投票當日なれば市中の景況いづ方も何となく色付きたる姿なりし。

十六日　大風、寒氣甚だし。母君は森照次君がり金子かりにと趣き給ふ、おのれは芝へ行、萬世橋より鐵道馬車それより車にて行く、貧家のさまは思し如く成しかど、病氣はさまでつよからず大安心す。持參の金子送る　種々物がたりひる飯こゝにてた

べぬ。三時頃歸宅の途につく、新橋より又馬車、歸宅せしはやゝ日沒に近かりし。母君森君の方首尾よかりし物がたりをし給ふ、一同よろこぶ、この夜原町田謙谷君より返書來る。

十七日　早朝結髮して家を出づ、荻野君を中徒町の旅宿にとふ、物がたり種々書物をかりる、夫より圖書館へ行く、三時歸宅習字をなす、日沒後入湯さかなかひに行きし奇談あり。

十八日　晴天、寒風おもてを切るが如し。森君に禮ながら借用金に行かばやとて支度す母君と共に家を出しは九時成けん徒步林町にいたる、森君は留守成し、小君に種々談話證書したゝめて八圓かりる、昨日小林君まゐられたるよし。同家とう難のはなし及び栗塚國會議員同難にかゝりたるはなしなどあり、ひいて小說著作のことに移る。諸工竹内桂舟は小君が甥の師なるよし、折々は參る由もあり、同人は硯友合連の一人なれば美妙齋紅葉漣各君とも入懇なればもし同人らに紹介などを要せらるれば其勞とるべしとなり。右關係の事どものがたりて同家を暇乞せしは十一時成し、梅が香聞ながら藪下より參らんとて根津神社をぬけてかへる、風寒けれど春ははる也、鶯の

初音折々にして思はずてあしとゞむる垣根もあり、紅梅花をかしきに目をうばはるゝも少なからず、家に歸りしは十二時頃成けり。夫より新著の小說にかゝる、稻葉君來訪正朔君の衣類もらひ度とて也。日沒少し前三枝より出產祝ひの赤飯來る、夕飯ことに賑々しく終りて。諸大家のおもしろき小說一巡母君によみて聞かしまいらす、國子が日記を見てよく書きたりなどいふ、夜更て雪降り出づ、おのれが臥床に入しは二時ごろ成けん。

十九日　母君先おき出給ひて妻戶おしたまふ。さてもつもりたる哉尺にもあまりつべし。まだいくばくか降らんとすらむなどの給ふは雪のことなめりとうれしくてやをら起ぬ。國子をも起して共にみ出るにあめもつちも木立も軒ばも白妙ならぬ方なし、綿を投たる樣にふるさまいといさましく。ならば角田川あたりに一葉をうかべたらましかばなど風流がりて笑はれぬ、朝いひしまひて後も中々にやまず。待人もなき宿ながらせめて這入だけも道あけばやとて國子と共に支度のみはいさましくして雪かきをす、尺といひて二三寸はあまりつべし、近來覺えぬことなど語り合ふ、終りてより習字せばやとするに手ふるひてせんかたなし。力業する人の手かくこともつうくするは斷

りぞかし、荻野氏より借りたる雜誌並に山東京山編のくもの絲卷通讀、朝日新聞の記事少し見て晝飯にす、午後より早稻田文學中徳川文學、しるれる傳并にまくべす詳釋、徘諧論など四五册通讀、岩佐君來る、母君新平のもとへ參り給ふ、日沒後歸宅せらる。一時臥床に入る。

廿日　晴天。遲し寢過したり、朝の間に蜘の絲卷よみ終る、雜書少し見る、夫より習字、姉君來る、雜話、午後結髮して師の君がり行く、田町にて田中君の橘道守君發會へ赴き給ふにあふ、暫時立話し。師君病ひよろしからずとのよし傳へ聞きて小石川へ行く、師君大よろこびのこと、種々明日の手傳ひしてしるこの馳走などにあづかりて歸る、荻野君參り居られたり、晩飯馳走す、おのれらは仲町にかひものせんとて一あし先に家を出ぬ、歸宅は日沒後成し。此夜短册したゝめなどして床に入る。

廿一日　晴天。十時家を出づ、小石川へ行く、師君と共に車をつらねて會席へ趣くみの子君すでに參り居られたり、種々談話。文雅堂參る。四人ひるめし、其内加藤君參る、來會者は四十人計の見積り成し所追々に增加して五十人にもなりぬ、此日の點取題、雪後春月、黑川眞賴大人、三田葆光君。小出粲君の點なりし、黑川君甲はかと

り子ぬし、小出君甲は佐藤東君、三田君の甲黒川大人が乙はおのれのなりし、景品など給はる、諸君歸宅後別に小宴を開きて佐藤、井岡、田中三君並に師君おのれなど歌話あり、終會は八時頃成き、車を小石川によせて勸定のはなしなどす、又茶菓を給はりなどして歸宅す、此夜は何ごとをもなさずして床に入る、夜深く雨ふり出づ。

廿二日　雨天、寒し。午前はなし得たることもなく、午後より著作にかゝる、されども大方は紙と筆にむかひたるまゝとりてかくまでにはいたらざりき。和歌五題計よむ、風邪にやあらん、頭痛たえがたければ此夜は早くふしたり。

廿三日　曇天。朝のまに江崎君並に兄君へ出す郵便をしたゝむ。夫より小説原稿にかゝる此夜も早く床にいりたり、ねぶりかねて小説の趣向などたてる。

廿四日　曇天いとあたゝかし。朝來昨夜たてし趣向によりて筆をとる。田中君より明日かずよみなすべきに付參りくれ度しとて書狀來る。日沒後小説二三冊よみて母君に聞かし參らす。夜に入りて强風。

廿五日　風やまずいと寒し。髮ゆひてさて家を出づ、戶田君先參り居らる、伊東君は何ごとかさしつかへありて參り給はず。かず詠題三十、四時頃に終る。小説のもの

がたりして田中君自作の小説二冊計みせ給ふ。日沒頃車を給はりて歸る、十一時頃床に入る。

廿六日　快晴。

廿七日　小石川稽古也。强風寒氣はなはだし。早朝より行、前田君より來たりし歌に返歌したゝめておくる、三田彌吉君夫人入門せらる。四時頃歸宅す。

廿八日　早朝圖書館へ趣く。此日も强風寒し。荻野君旅宿を訪て書物を返しなどせしに竹洲君原町田へ一昨日參られたるに賢君計なりし、暫時對話夫より圖書館へ行く。館内にて新潟縣人田中しをの女史に邂逅、禪學の事に付て談話、女は長岡の戸長の嗣女なるよし、良人は洋畫を業とするとか、女禪學に志深けれど地方の習慣女子をして就學の便を得せしめず、偶近方の寺院などに布敎の僧ありと雖も俚耳に入り安き小乘の淺薄なる事のみにて事大乘のうん奥に致らす望洋の思ひありといふ、今たび上京の便に任し原坦山君に敎へを乞はゞやと思ふなどいふ、該學に關する書物など取調べたり、歸路同行して女史が池の端の寓居まで趣く、後日を約して立別れぬ。歸宅せしは日沒少し前なりき。この日野々宮君來訪されたるよし。

廿九日　ことなし。

三月一日　田中君より手紙來る、過日小說のことに付て新聞社の周旋依賴し置しに我が著作の小說一二回見度し其上にて相談せんといへる人あるよし、至急遣はされたしとて也、直ちに棚なし小舟に筆を下ろす。此夜一回丈書き終る、國子などの此月は必らず都合よかるべき也一日早々うれしき報を得たればなどいふ。

二日　午前髮をゆひて午後より新小川町に行く、田中君まさに各評の締切に成し所なりけり、打とけたる物語に長き日のくるゝも知らず、燭を取て猶談ず、晩飯の饗應受けてさて車にてかへる、日沒よほど過ぎ成けん。この夜は目立たることなく、只田邊君受持の難陳二題よみて床にいる。

三日　雨天也。早朝田邊君に書狀出す。各評廻り來たる。選みの上長谷川君に送る。姉君晝頃に參らる、今日は上巳の節會なればとて白酒いり豆などとゝのへて一同祝ふ、棚なし小舟續稿にかゝる。外にことなし。

四日　雨天、暖かし。和歌七題十五首計よむ。小說稿いそがはし。

五日　雨天。早朝小石川稽古に趣く、來る人十名計成し、水野君鎮地菊間神社へ奉

納の和歌をよみくれ度しとて則ち今日の點取にす、有松喜色なりけり、終りて後今一題詠ず、來る十一日梅見に行べき約束をなす、みの子君ある方より我が自作の小說見度しとて由來たれりとて今夜中に一回分遣はされ度といふ、趣向のあてもなけれどどうにか可成とてうけ合ふ。一同歸路につきしは四時頃成し、泥路歩行いと難義なりし。此日前島君より女學雜誌をかりる、歸宅早々日沒まで通讀、夫より小說著作に從事す、夜を徹してみなし子第一回稿終る。つまどのひまのしらむを見て暫時寢むる。

六日　雨天。十時起く、再び稿をあらためて郵便に付したり。小說著作、詠歌、習字などの日課を勉めて、夜に入ては讀書などをなす。十二時床に入る。

七日　連日の雨夜の間に晴渡りてうら／＼と霞む朝のけしきいとのどか也。蕩々たる春風に庭前の梅花花びらみだれて薫れる雪の降くるに惜しみがほ鶯のこゑなど我やどの春よの人に見せまほし。今日は半井うし訪はゞやとて母君に結髮をわづらはしたり、晩さんの後ぞとて母君國子籠をたづさへて下りたち給ふはわか菜つまんとて也、世には金殿樓閣に住む人もあるべく綾羅錦しやうにほこるもあるべし、借問す綿衣三年改ためず破窓わづかに膝をいるゝに過ぎざれど優々たる春の光春の匂ひの身にも心

にも家のうちにもみち渡りたる我が親子許たのしきものありや非らずや。さても今日も午前はなすことなしに終りて、晝飯たゞちに麹町へと趣く、我が半井うしへ行時として雨天か風かにあらぬは無し、今日こそ例にも違しなれなど笑ひ居しに、家を立出る頃より空俄にさわぎ初めて九段坂のあたりよりあられまじりに雨すさまじく成りぬ君のもとへつきしは一時過る頃成けり、門の戸押せどもあかず例の朝寢しておはすなるべしとおもへばからうじて明て入りぬ、みれば火桶に火あかくして湯などもたぎり居るにうしは見え給はずこはあしきこととしてけり、留守なる樣にとも思ひつれど其まゝに歸らんも殘りをしくてしばしあるに歸り來給へり、湯あみに趣きしなりとていたく侘給ふ、先頃の人も居りたり、談むさしのゝことに及ぶ、連中に種々さわりありて發兌の日數かく計には延たれど熱心の度は實に非常なるものにて柳塢亭寅彦の如きは原稿に金を添てまで出したしとのい氣組なり、其外右田年方は畫の寄附をなし、板木師は木の代丈も送らむといひしを堅く辭したり、小說雜誌の發兌日に月にしげくして濱の眞砂たゞならねどかく計熱心なるは未だ見し事も聞しこともあらずと書肆もいへり、此上は諸新聞にて廣告料丈寄附になしいんさつの職工が手間料を無代にし、數萬

の觀客が定價の上に幾分の義捐をなすにさへいたらば眞に武さしの萬歲なるべしと大笑し給ふに、おのれも今一人もたえず笑ふ、大人また都の花も二千五百、難波がたも二千五百の賣れ高なれば、我むさしのは五千ほど世に流布させ度しとの給ふ、今一人のされば寅彥に文章を作くらして聲よきものを撰びて緣日又はかん工場前など樣の所に目立ちたる服裝をさせて節おもしろく讀賣廣告をさせなんはいかにといふ、おのれ曰く猶よきことあり、萬世橋などの袂に立ちて往來の人々に無料配付をなさば五千はおろか萬も五萬も世に流布すべしといへば一同大笑す、君が闇櫻は小宮山にもみせぬ、氏が說にはむさしのは君が所有のぬしたるべしとなり、一二いふべき所も有しが世の批評の爲にとて殘しおくと氏はいへり、畫は寅彥が意匠にて年方にゑがゝするつもりなれば左覺せよ、君が姓名を表はさぬを床かしがりていかなる人ぞ見たしなど人々のさわぐがをかしきぞと例のの給ふ、但し武藏野は十五日發兌のつもり、次號の原稿は廿日過ぎまでに送られたしとの給へり。昨日の事なりし、國子がいつはりの無き世なりせばいか計人の言の葉うれしからましの歌を反對によみて給へといひしかば僞りのあるよなればぞかく計人のことの葉うれしかりけるといはゞいはなんとて笑ひし

が大人が詞に似合しきもをかし、三時にも成しかば又こそとて暇を乞ふ、今しばしまたるべし何か馳走をなすべきになど止め給ひしが空も漸く雲深くなる樣なればとてしひて歸る、歸路より段々に晴て家へつくほどには一點のくもなくなりしもあやし。奥田老人參り居られたり、晩さんを馳走す。關場君よりはがき來たり、國子に參りくれ度しとあれば何事かしれねど明日參り給へなどいふ。難陳廻り來る、書うつして伊東君へ送る。此夜はいたく頭痛してたえがたければ早くふしたり。森川町失火ありたり。

八日　午前くに關場君へ行、ひる飯馳走に成りて午後歸る、悅子君實家の妹十歲なりとかいへるを中島師のもとに入門させ度紹介を依賴したしと也、同家より御伽草紙貸與さる。此日中は何ごとの目立ちたる仕事なくて、日ともしに成ぬ。風いとあらく吹き出づ。

九日　晴天。早朝より支度をなして小石川へ行く、月次會なり、暫時ありて田中君まいらる。今日の來會者三十八九名成し、島田政君も參られたり、點取題野鶯にて重嶺、恒久、信綱、安彥四君の點なり。恒久君の甲重嶺君、安彥君の甲恒久君、重嶺君

甲安彦君成しかばこは誠に詮なしなどいふ、信綱君の甲はおのれ成けり、十一日梅見と定まる、相談種々、日沒一同退散、關場君依頼一條異義なくとゝのふ。

十日　曇天。武藏野雜誌次號に出すべき趣向のあらまし文して半井君へ送る、石井へはがきを出す、明日の天氣はいかならむ哀人は好天氣なれかしと待らむものを、我爲には降てくれよかし、友といへど心に隔てある高等婦人の陪従してをかしからぬことに笑ひおもしろからねど喜ばねばならぬこそ我が常に屑しとせざる所なるものを、植半八百松の鹽梅も我が爲には何のものかは、母妹を弊屋に殘して一片の魚肉にも猶あかせ奉らぬものを、龜井戸の梅花を分けて橋本に一ぱいの鯉こく何うまかるべき、人の愉快とする所は我が暗涙をのむの所なり、天ふれかし心あらばと打歎かれぬ。今日は終日心なやましくて何の仕出したることもなくて日沒に成りぬ、國子關場君に復命をもたらす、同家より報知新聞かり來る、夜に入りてよりおもしろき小説母君によみて聞かし奉る、其うち雨降出つ、萬歲ともとなへまほし。稻葉君夫妻、正朔君同道相談とてきたる、此夜一泊、十二時床にいる。

十一日　起出てみれば妻戸の際しろし、雪なりけり、さこそは梅見を約せし人々の

落膽し給ふらむなど思ひやる。十時といふ頃より空は只晴に〱て雪のとくること烟の如く消てひる頃にははや道もかわきつゝむと覺ゆ。前島君より手紙來る、今日はもとよりながらあすはいかゞ道わるくとも參り給ふべきにや。君まで我もなどありたりおのれはやがてそを携へて師の君許おもむく、こゝにて返書を出す、晴天なれば明日參るべくとのこと也、初心の人の詠草直しなどして歸る、直に關場君へはがきを出す暫時して同家よりはがき來る、行違ひになりたる也。

日記（三月）

十二日　日かげは薄けれど晴なれば梅見の催し實行すべきなり、我が家を出しは九時なりし、其際三枝信三郎君參る、師のもとにて一同そろふ、車を連て向島にむかふ、おのれは一人馳せ拔けて小梅に吉田君をいざなふ、既に趣かれし後なりき、臥龍梅に六花の淸楚たるを見て、これより徒歩江東梅にむかふ、庭園廣濶樹風愛すべく、花は少しすがれたれど花香の袖に移つてあやなき咎をおひ給ふ君もなからずやとをかし、奥の亭に粗菜を味ひ給ひ雞卵にうゑをやしなふなど高等婦人のいかにめづらしく喜び給ふらむ、嬉々たるよろこびの聲愛々たる眞の笑かゝる折にこそ人の情は見ゆるになん、この園より車にて木下川へぞおもむく、細流淸くなみをうかべて萬頃の水田まだ返さず折に交る麥生の若やかなるなど造化が自然の美を盡したる中を徐々としてはこび行かれぬ、をううつたる老松の洒々たる間に紅白の香花すきて見ゆるはこゝろざす林なりけり、到りつきて見るに入口にほそき鐵にて門を設けたるこれ無からましかばと恨み也、前の二園何方劣りたるならねど、このうちに入るに及んで更にこゝの

今一段まされるあるをしり得たり、花は今十分の香を放つて萬枝色ならざるはなく、ことに雨後の天色朗々として風なくあたゝかに、人はあすの日曜をと心に期すらむ、花下不風流の洋杖も見ず。くだ物の皮投打てあたら園内塵塚にする輩もなく、たまたま見ゆるは一瓢に眞意を屬せしじつ德出立か、遊獵銃を肩にする青年あるのみ、小亭のほとりにて三宮君の夫人同行にて遊覽したまふを見たり、暫時ありてこゝを出づ、かた山君がしきりに名殘を惜しみ給ふもをかし、この園伊東君はいひ給へり紋付上下なりと、げに其評や當れるべし、今少し亂雜の植かたならましかばと思ふ、狹きあぜ道を幾筋傳ひて向島新梅屋敷にいたる、こゝはいまだ早かりし、出る頃より天俄に陰雲をもてとざされぬ、車をいそがせて木母寺植半樓に至る、こゝに一酌の間、遊戲種々あり、日沒に及んで歸路につく、堤にて師君に別る、家に歸りしころには大雨盆を返す樣に成ぬ。

十三日　大雨。午後よりはれる。師君依頼の縫仕事にかゝる、夜を徹して從事す。

この日稻葉君小石川柳町に移轉す。

十四日　曇天。縫上りし衣類もて小石川に行く、師君としばらく談話歸る。稻葉君

參り居られたり。此夕べ新聞號外來る、陸奧農商務大臣依願免官、河野敏鎌氏後任の報なり、但し陸奧君は宮中顧問官に任ぜられたり。

十五日　晴天。今朝配達の新聞を閲し來たるに內閣の動勢定まらず、品川內務大臣職を副島伯にゆづりて身を宮中顧問に轉ぜられたるを始めとして、或は後藤遞信大臣冠をかけたるべしといひ、何某の大臣辭表を呈出されたりといひ、物情紛々記者得意の筆をふるふ可き時機と見えたり。午後母君森君へ趣き給ふ。其留守に稻葉君を尋ねて渡會といふ人本鄉より來る。もと千村方に居し職工のよしにて種々談話、稻葉君が食言家なることを縷々として述ぶ、驚く可きこと一ッにして足らず、我も國子もおきれにあきる、小時にして柳町へ向けて趣く、母君歸宅、それらの談話少しする程に同じく本所よりなりとて又一人きたる、稻葉君につきてのはなしをなす、かゝりし程に村松老人あわたゞしく來たる、こは此人々の我家より先に村松に行きてこのもの語をなしたるからにいたく驚きて、そを我家にも告げんとて來られしなり、村松老人しばらくにて歸る、母君と國子と入湯に趣かる、引違にお鑛どの參らる、我れに種々の事問はれしかど、如何答ふ可きにやたゆたはれて深くはもの語らひもせざりき、母君

もやがて歸宅せらる、前よりのことに付て今よりは來訪無用なりお前樣ゆゑ南家にまでいたく迷惑のかゝることあればとて斷る、お鑛どの涙など流して辨解さるゝに母君もこゝろ弱くなき給ふ、おのれは聞くに堪かねて次の間に退きさりぬ、同人歸宅。此夜もいたく怠りてはやく臥たり。

十六日　晴天。一點の雲なし。本妙寺にて種痘を行ふといふに我れもくに子も行ばやとて支度をなす。兩人の結髮を終りて母君は奥田へ御用ありて趣き給ふ。おのれは聖學自在通讀、午後早々秀太郎と共に種痘に行く。外に何事もなし。

十七日　晴天。みの子君發會也、十時頃より支度をなす、渡會といふ人來る。稻葉君のことに付てしばらく談話、其中に西村君來る、其人歸宅おのれは直に家を出づ、師君のもとにて少し物がたりす、田中君へ行しは十一時過る頃なりけん。今日の來會者豫定より稍多く廿六七名ありたり、點取題朝雲雀、重嶺君、鶴久子君の甲は伊東の夏子ぬし、三科子君の甲はおのれの成りけり、諸君の退散されしは五時成けん、おのれも直に車にておくらる。此夜は何事もせずして臥したり。

十八日　曇天。十時頃よりは雨に成りぬ。姉君來訪さる、午後關場君並に中島師の

もとより手紙來る、この手紙につきて近邊なる舊中島師かた下婢なりし今野たまかたに行く、これが返事のはがきをしたゝむる程に、思ひかけず半井うし來訪し給ふ、あたりを取片付るなど大さわぎ成し、我家に來給ひしは實に始めてなればなり、母君幷に國子にも初對面のあいさつなどなすいとくだ〳〵し、居を本鄕の西片町に移し給ひしよし、其報知がてらむさしの の事いはんとて也といふ、むさしのは種々延々になる事ありていよ〳〵明後廿日出版の都合なり、校正も廻り來たりしが我が轉宅の日成しかば君のもとに廻さん日間もなく我れ代理をなしたるにもし誤字脫字などあらばゆるし給へとの給ふ、茶菓を呈したる斗にて二時間斗ものがたらる、今しばしなどいはまほしかりしがいそぎ給へばえとゞめあへず歸宅し給ふ。母君も國子もとり〴〵にうわさす、母君は實にうつくしき人哉、亡泉太郞にも似たりし樣にて溫厚らしきことよ、誰は何といふともあやしき人にはあらざるべし、いはゞ若旦那の風ある人なりなどの給ふ。國子は又そは母君の目違ひ也、表むきこそはやさしげなれあの笑む口元の可愛らしきなどが權謀家の奧の手なるべし中々心はゆるしがたき人なりなどいふ、母人何はしかれ半井うしが詞にかく近くもなれるに他には行く所もなし夜分など運動がてら折

折に參るべければなどいはれしこそ當惑なれ、人の目つまにかゝれば正なき名やたゝんなど杞憂し給ふ。國子さていふとに角に家の狹きなん不都合なる、あはれ今一間あらましかばか斗に心ぐるしからまじ、いかでこの隣りなる家こゝよりは少し廣やかなるをかしこに家移りせんはいかになどいふ、おのれは詮なきこと也、我友とする人は家の狹きひろき衣の鮮と弊とをとはず、かざりなき詞かざりなき心をもてこそ交らめもしかしこは家せまし衣ふるびたりとて捨る人あらばそはをしむにたらずといふ、それはそれながらいかにもなれば心ぐるしきぞかしとてくに子は笑ふ。今日の半井うしが着服は八丈の下着に茶とこんのたつ縞の紬の小袖をかさねて白ちりめんの兵兒帶ゆるやかに黑八丈の羽織をき下し給へり。人わろしと聞く新聞記者中にかゝる風釆の人も有けりと素人目には驚かれぬ。秀太郎來る、少し話して歸る。日沒後國子に日本外史の素讀を授けて、さて聖學自在の愚者の辨一章讀みて聞かす。母君のかたをひねりてふさせ奉る。一時床に入る。

十九日　雨天。小石川稽古也、早朝に至る、師君まだ朝飯前なりし、首藤陸三氏の女小間使となりて今日よりこゝにあり。名對面するも中々に心ぐるし、難陳の開卷な

れば龍子ぬしもてる子ぬしも參られたり、東君、大造君は來たられず、午前に一題詠じて、午後よりはじむ、例は口述するなれば思ひのまゝには誰もえいはず、口ごもり勝なれど、今日は筆にいはせたることとて人々の難論さかんなりし、春の夕べのかた田中みの子ぬし高點になる、戀の喜憂はおのれなりけん、四時退散、田邊君、田中君と約して明後廿三日上野圖書館にて逢はんといふ。歸路稻葉君のこと問はんとて西村君の店をとふ、釧君留守、常女としばらく談話、夕飯馳走になる、提灯をかりて歸る道路汚泥ほと／＼困難を極めぬ、此夜なすことなしにふしぬ。但し關場君今日入門の筈なりしが障ることありて得せず、斷りはがき來る。

廿日　晴天。今日はむさしの發行とかきくに春季皇靈祭にもあればとてすしなど調ず、近隣兩三軒に配りなどす。伊東君に約束して今日來訪せんといひしかば午前より其の支度をす。山下直一君來る、早稻田文學九十號持參して借くるる、同人歸路もろ共に我れも行く、同じ道なればなり、行々ものがたりつゝ行くに車夫などの同車にてなど進むるよの人ならましかばいか斗はづかしからん、さるを何とも思はず同行するは心に邪心のなければなるべし、耻は情より發するものにやをかし、御茶の水橋にて

袂を分ち、伊東ぬしのもとをとふ、談話數刻、心腹を吐露し盡して今日はこと更に嬉しかりし、歸るべし〳〵といひ〳〵いつしかに日をも暮しぬ、晩飯馳走になりなどして猶中々にはなし盡ず、されどいつをいつとも定められぬにいざやとて暇をこふ、八時成りし、車たご給はりて歸る。歸宅後、種々母君に談話、伊東君と約せしこと無効に成しことあり、直に手紙をしたゝめて其むねを通ず、何をもなさずして今宵もふしぬ。

廿一日　晴天。晝後何某の妻來る、ひる飯馳走す、おのれは半井うしのもとへとふことありて行く。今度の住家のいと近くてみえ渡るほどなるがいと嬉し、表は例の戸ざし堅して庭口よりぞ自由の出入はゆるしためる。物がたり種々、大人前日の風邪猶よからずとて咳などいたくし給ふ、家にて相談せしこと半井うしにもかたる、おのれが小說到底よに用いられまじきものなればつゝみなく斷り給ひてよ、おのれはおのれの心を信ずるが如く人の仰せられし言を信ずるものなれば、君もし表面のみの賞詞を下し給ふ共其眞僞をし斗るべき智は侍らずかし、君が眞意をえしらずして一向の詞のみを頼み奉らんに、我が愚かさはさておきて君いか斗困じ給ふらむ、とても世に用いられまじきものなれば、今より直に心をあらためて我が身に應ずべきこと目論見候は

ん、只み心のうちを聞かせ給てよとくり返すに、君はいたくあきれ顔して、そは又何ぞの事よ、おのれかひなしといへども男のかたはし也、うけがひ參らせしこと僞りならんや、月々に案じ日々にかうがへて君が幸福を願ふぞかし、我れはあくまでも相携へて始終せんと思ふを、君はなどさ斗にうたがひ給ふ、さりながらこれより他に良善の策あらば止め候はじ、なくば今しばしたえ給へ、我思ふに君が著作此むさし野兩三回の後には必らず世に名をしられ給はん、さすれば朝日にまれ何にまれ我れ周旋の方法あり、家事の經濟などに付て憂ひたまふことあらばそはともかくも我すべし、むさし野初版より二千以上の發賣あらば利益の配當あるべき約なればこの分のみは我れのも合せて君に奉らんの心なり、か斗に思ふ心僞ならんや、大方は察し給へなどの給へり・談宗教のことに及ぶ、過つる日野々宮君に約して會堂へ行かばやと思ひしも障ることありてはたさゞりしと云ふ、大人そはよき事を先承りし哉、あやふかりしことよ、あたら御身渦流に卷き入られたまはん所なりしとて嘆じ給ふ、そは何故といへば君縷々として敎會の表面裏面を述給ふ、汚行彼の如きあり醜事是の如きあり・牧師獸師は恰も色情の敎師の如く、集合する男女の信者は殆ど其生徒に外ならずとて痛論し

給ふ、さりながらこはおのれが耶蘇をいたく排斥する心よりかゝる感も隨ひて生ずるにや。大方の教會かゝるにもあらざるべけれど、十中の七八は其類ならんと思ふを眞に宗教に熱心におはせば甲斐なし、さらずは先敬して遠さけ給ふかたよかるべしなどの給ふ、後日を約して歸路につく、四時なりし。此夜入湯することなしに臥したり。

廿二日　晴天。午前習字及著作に從事す。ひる飯直に家を出づ、圖書館行きの約束あればなり。かしこに至りて女のさる人や來りしと問へば、さおはしたり此下駄なめりとてみするは、さらさ形ある皮のはな緒也、みの子ぬしなめりと思へばそれと我れのと一とつにして館に入る。目錄書の臺の上にしきりになにかしたゝめ居給ふは思ひしごとみの子ぬし也、走り寄りて聲ひくに挨拶す、相携へて樓上婦人席に入る、先に一人の閲覽人あり、醫學の生徒ならん外科といふ書籍を見居たりき、田邊君はおはさぬのなるべしあまりのを、よなどいひて笑ふ、いつもは大方朝よりなれば午後にてうみつかれて睡たくさへなるを、今日はみる間露斗りにして閉館のすゞの聲す、そゝや追出されぬべしとて笑ひながら室を出づ、男子の方一人の止まる人なかりし、徒歩山内をぬけて廣小路に出で仲町にてみの子君かひ物をし給ふ、小路を入りて池の端に蓮

玉を味ふ、道々種々談話、中島師君の事などかたる、家にかへりつきしは日沒成し、みの子君とは眞砂町にて別れたり。伊東君より手紙來る、前日のことに付て也。國子に日本外史素讀を授く。半井君よりはがき來る、明日參りくれ度しらせ也。今宵もすることなしに早くふしたり。

廿三日　曇天、少しあたゝかし。半井うしを午後よりとふ、むさしのゝ表題の文字書きくれ度と也、しばしいろひたれど聞かるべくもあらねば十字斗しるしぬ。又むさし野卷末にのすべきもの少し斗不足なれば何にもあれ明午後までに作り給りてかなとの給はす、雨少しこぼれ來ぬればいそぎかへる。直ちに著作にかゝる、文章一篇草さんとて也、今宵雨いとつよくふる二時頃まで机邊にあり。

廿四日　大雨。又文章あまりおもしろからねば、春雨を詠ずる長歌になす、師の君に一覽をこはんとて大雨中家を出づ、雨傘といふもの一つもなければ、少さやかなる洋傘にしのぎ行く、雨はたゞいる樣にふるにいと高き下駄の爪皮もなきをはきて汚泥なる道を行くに困難なることおびたゞし、師君のもとへ參りつきし頃は羽織もきものもひたぬれにぬれぬ、師君二階の病床におはしき。もの語種々、長歌添删をこふ、談

文章のことに及ぶ、おのれ日々日記を作るに言文一致なるあり、和文めかしきあり、新聞體になるあり、かくては却りて文の爲に弊害とのみなりて利は侍らずやあらむとて師君の異見とひ參らす、そは一定の文則なくてはなさざるかたぞよき、何にまれ一の方にしたがいてものせよなどの給ふ、今のよの新聞屋文といふものこそ我とらざる所なれ、さるものからこも又一つの道具にて用なきにしもあらず、それはそれこれは之ぞかし、すべて文にまれ歌にまれ氣骨といふものこそあらまほしけれ、さりながら女といはんには常の行ひ姿形をはじめて物いふにも筆とるにもなよやかなるを表としたるぞよき、心の内にこそは政の成敗、天がしたの興廢、さては文武の弛廢、何にまれ思ひいたらぬくまなくて、しかも形にはあらはさぬなん誠の女なる、しかはあれどひたすらにをしつゝみたるのみならましかばつひによはきに流れてはては心まで青柳のいとのごと成ぬべきなめり、たとへばくろがねのまろがせを烟の内につゝみたらん樣なるがよきぞかしなどをしへ給ふ、ひる飯たべて少しまて見すべきものありとの給ふにぞ、しばし初心の人の詠草直しなどしてまつ、藏より一冊の手記と衣服とを取出し來給へり、ながきぬのいたくなへたる樣なるに何某くれがしの會などきこえは

困ずらめ、これもて行き調じ直せよなどの給はす、例ながらにいとうれし、この一冊かまへて人に見すまじきものなれどそこにはなどかさけてなんとて、常陸帯と表書したる日記みせ給ふ。こは下の卷也。上は師君水戸に下り給ふ道すがらの記也といふ、これは林ぬし江戸へのぼり給ふ別れのきざみよりかきはじめて師の君ひとやにつながれ給ふ迄の也、あるは涙をしのんで門出を送りたまふ曉の鳥の聲。あるは空しきふすまにあまよをしのび給ふくつわ蟲の聲、あるは初ての音づれ待得給ひし件、あるは身をなきものとおぼしなして更に故鄕の母君をこひ給ふくだり。あるはさばへなすねじけ人らがよこしまのことゞも、それが恥かしめをさけんとて妹君さては取でより供につれ給ひし小女なんどしるべのかたにしのばする折のこと、八重むぐら高くしげる館の内にたゞ一人國をうれひてつまごとしのび給ふ心の中、其折々の歌の心ばへなど哀にものかなしくもそゞろ涙ぐまれて打もおかず詠め入りぬ、君十九の時におはしける、おのれは歌の姿の哀なるよりも文の詞のなだらかなるよりも、其心ばへのいさましさをゝしさなんかしこみても猶あまりありけり、師の君の給ふ、こは其折なれば書けたる也、今はた思ひ出てつゞらばやとするに詞の花はいか斗もかざられなんこの感

情をいかでうつし得べき、文の眞とはかゝるをいふなれ、こは又文章といふもの學びたる時ならず、詞すらよくもしらねばたゞ有たる事を有りたるまゝにしるしたるなれど、中々今ものしたりとて及ぶべくはあらず。されば文まれ歌まれよしおのれ其のに向ひおらずとも眞といふこゝろになりてつゞくり出なば人をも世をもうごかすにたるべきものぞ。そこの小說をものせんとするもかゝる心ばへにてぞあれよかしなどをしへ給ふ。雨もやみぬ、あさては早くより參りくれよなどの給ふ、暇を乞てかへる。添删給ひしを直に原稿紙にうつしかへて半井ぬしがり行く、心の中種々なり、昨日森ぬしより文來りぬ、二月斗前より畑のしろのたしをたのみて六月がほどをうけがわれぬ、さるを俄にさはる事ありてこの斷りをいはれたるなれば母君も妹もいたくなげきまどふ、何とかすべし心安かれなど口にはいひ居しかど、ちいさき胸には波たちさわぎていかにせんと斗成しが、思ひ出ては半井ぬしのみ也、常義俠の心深くおはしますをいかですがり奉らばやとぞ思ふ、行々哀人なからましかばなど願ひしに思ひやつらぬきけんうしのみ成けり、うたみせ參らす、むさし野は今日版に上りぬとか、こは此次のにせんとに角にあづかり參らせんとの給ふ、いひにくけれど思ひ定めてこい

事打出しぬ、面あつきことよ。半井うし案じ給ふ氣色もなく、そはうけ給はりぬ、何とかなすべし心安かれと疾にの給ふ、この月はおとゝ共の洋服などあらたに調せしかば少しふところなんあしき、されど月末までにはとゝのへるべしとて白湯のみ給ふやうに引うけ給ふ、かたじけなきまゝ又涙こぼれぬうれしさにも早く母君に聞せ奉らばやと思へばあわたゞしく暇をこふ、嬉しきこと嬉しげにもあらず恩を恩ともしらぬとや覺すらん心には思へど口に多くあらはし難きはかひなかりける、此夜もすることいと怠りぬ。

廿五日　朝來打くもり雪ふる、十時頃より晴渡りたれど風いとつよし。今日はおのれが誕生の日なればとて魚などもとめていさゝかいはひ事す。午後より母君姉君から參り給ふ。西村ぬし來る、物がたり種々、日沒少し前水野ぬしより和歌小集の招き文來る。半井うしよりは廿八日までに小說の草稿まはしくれよとの文來る。今宵はさま〴〵にこと多し。

廿六日　稽古日。小雨。水野君行の相談とゝのふ、點取題三ッ、おの〳〵十點を得たり、五時頃歸宅。半井氏より重太君迎ひに來たれば好事あり直に參られたしといわ

れたりとか、今宵はすでに遲し、明早々參れとて今宵は歸しぬ。日沒後芝より兄君參らる。

廿七日　午後より半井君へ行く、小說雜誌むさし野出版になりたりとて一本をあたへらる、昨日の好事とは、君が別著の小說改進新聞に出さんとするの事也といふ、あれ斗はゆるし給へあまりといへば恥かしといひしに、夫は困る也すでに繪の注文さへなしたりといわる、更にせんなしいづ方にもとて諾す、原稿今一度校閱せんとてわが方に引取る、作りかへんとて也、四十回になしくれよの賴みなれど、三十五回ほどにてよろし、先は奮發し給へとて渡さる、明後夜中に二回ほどお廻しありたし、二十九日より揭載の都合なればなどの給ふ、了承して歸る、母君兄君大悅びの事、藤田屋來る、金一圓かりて兄君に二圓斗かす、日沒兄君歸宅。此夜十時二回分の校閱終りて、母君と共に半井君のもとへ行く。之夜は外に何もせず。

廿八日　朝來小說にかゝる。三時頃一日分丈持參、二回分の畵の注文をなす、歸宅日沒、國子むかひに來て居りたり。此夜何事もなさず。

廿九日　改進新聞早朝にみる、いまだ小說の載すべき餘地見えず、明後日あたりよ

りならんといふ、むさし野廣告出たり何となく極りわろし、午前水野君各評をよむ、午後早々師君のもとへ持參添削をこふ、みの子君參り居らる、雜誌のこなしつけ、新聞の談あり、歸宅四時、夫より一日分丈草す、半井君のもとへ持參せしは十時なりし今夜も國子同道。

卅日

四月一日

四月五日　今日は水野君和歌小集の催しある日也。朝來晴天。半井師に約して今日は二回丈是非送らんといひし改進新聞原稿未だ一回もしたゝめ終らず、困じ果てゝ強いて著作に從事す、十一時に家を出んとするに十時過ぐるまで草稿したゝめ居るにからくして一回分書き終へたれば、いそぎ化粧などして家を出づ、詫がてら半井君のもとに行、同君留守、伯母の君に言譯申て走かせぬ、至り侍しは一時近かりけん、來客早いと多かり、點取題歸雁及び野遊成し、來會人數三十名斗酒肴も中に三曲の合奏あり水野せん子君の琴聲心なき身にもそゞろにみみかたぶかれぬ、始は小がう、次は松竹梅、酒宴やんで又一曲何といふ曲かしらねどいとおもしろかりし、散會は九時、車

にて送らる。此夜二時まで小說著作に從事す。

六日 曇天。早朝庭の桃の枝を下ろす。奥田老人參らるべければ同人にやらんとて也。

月といふつきの光りもみえぬかな
　やみをやみともをもはざる身は

誰かみん誰かしるべきあるにあらず
　なきにもあらぬのりのともし火

みちのくのなき名とり河くるしきは
　人ぞきせたるぬれ衣にして

散ぬればいろなきものを櫻ばな
　こひとは何のすがたなるらむ

ゆく水いうきなも何か木の葉舟
　ながるるまゝにまかせてぞみん

日記（二十五年四月）

かまへて人にみすべき
　ものならねど。
　　立かへり我むかし
を思ふにあやふくも又
　ものぐるほしきこといと多なる、
あやしうも人みなば
　狂人の所爲とやいふらむ。

四月十八日　雨天。午前の内に片町の大人がり行く。此日頃惱み給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはかぐ〱敷は物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ。いでや今日こそは御心取らんとて出たつ、小石道のいと惱ましきをからうじて行くに、河村君よりの下女水など汲居たり、大人は早起出給へりやと問ふにうなづきてしるべをなす、例の庭口より書齋の椽にのぼるほど大人出來給へり、例はいとなつかしき物

がたり種々して歸るべき時なき樣なるを、此頃はあやしう異人のやうに成給へり。御病氣はいかゞぞなど問ふに、少しは好しされど頭のいたきのみは困じ居る也とて、後腦のかたを手してたゝき居給へり、何方も花ざかりと承るにたれこめてのみおはすはなぞやといへば、日陰の身なればとてしほれぬ、一昨日の夜上野の夜櫻を行てみし許、飛鳥山も墨田河も更に詣はず。さるにてもかく引籠りのみ居れば病ひも怠る時のなきにやと思ひたれば、少し散歩をこゝろみなどしたるにいよ〳〵頭いたきやうなり、如何にせば宜かるべきにや殆ど其策に困しみぬ。かくては遂に死ぬべきにやあらむなど心細きことの給ふ、頭うなだれがちに言葉少なく。それも此方より問ひ奉らぬ以上更に〳〵物語なし、武藏野一昨日までに諸事し終りて昨日發兌のつもり成しがいかにしけむいまだ廻り來らず、此度のはいづれも〳〵宜しからぬやうなりなどの給ふ、おのれのは別しての無茶苦茶にて嘸かし困じも怒りもし給ひけん、我師中島と同じ常に會日其他にて弟子の詠歌よろしからぬ時はいたく顏色わろき樣也、大人にも同じこと、我が著作のあまりわろきに怒り給ひていとゞ御病氣の重らせ給ふならずやと案じられ侍りといへば、いやさることはあらずと事も無くの給ふ、むさしの三號の分は

當月中に原稿廻し給へなどの給ふ、さるにても暇のなきなん健康上にいたく影響を及す也、朝日新聞の方も明日より又執筆することになりたり、せめて一月の猶豫あらばよけれど幸閑を得がたきが弱りきる也、など物がたらる、我れもいろ／＼いふこと有しが、五月蠅げなるに遠慮してそこ／＼に暇ごひしぬ、されども止めんともし給はざりけり、歸路快々たのしまず何ごとをかく計怒られけん、我れに少しも覺えなし、いかにせば昔しの如く成るべきにや、家に歸りてもこの事をのみいふ、母も妹も共にいたく案じぬ、母の給ふ、夫も其筈ぞかし世にも人にもかくれ給ふ身なればこそ此花咲鳥うたふ春の日をさゝやかなる家の内に暮したまふなるいか計／＼心くるしからむ、まして花柳のちまたを朝夕の宿とし給ひしものが俄にあし踏だにし給ひ難ければそは道理也などいふ、今日は何事のなすもなくて日を暮しぬ。

十九日　晴天。今日の改進新聞配達が待遠也、誰人か我が後には出けんと見るに南翠外史也、あな嬉しや大人の也けり、されば我が身いか計大いそぎに端をりちゞめても前後とも大人のなれば嬉しといふ、今日は來客いと多し、鍛治町石川及び菊地君與方など近火見舞の禮にとて來給へり。午前習字、午後より小說少しかく。著作にかゝ

る。櫻井君たのまれの詠草一册書く。

廿日　晴天。圖書館へ書物見にゆく、太田南畝、藤井懶齋が隨筆とも見る、明治女學校の生徒及び駒場農學校何某氏の妻刀劍類寫圖の模寫に來られしに逢ふ、歸路廣小路まで同伴す。滿山の櫻大方はうつろひたれど流石にまだ見る人は多かりき。日沒少し前家に歸る。

廿一日　曇天。午後より大人のもとを訪ふ、むさし野來月分趣向につきてなりけり畑島君も參り合されたり、種々物がたり、大人達の趣向の談合いとおもしろし、四時頃歸宅。此夜田中君より明日小金井行の催しありとてはがき來る。夜雨降出づ。

廿二日　今朝はいとよく晴たり。小金井行はいとうれしけれど、むさし野〆切日限もさしせまりたり、悠々たる暇なければやめになす。午前洗濯を少しなす。明日小石川稽古なれば各評兼題など少し詠ず。

廿三日　晴天。小石川へ行、日就社員鈴木光二郎氏師君履歴を探報の爲訪問、二階にて種々談話あり、其間島田政子君と共に下座敷に語る、悲話縷々思はず袖をぬらしぬ。

廿四日　早朝關君へはがきを出す。

廿五日　曇天。國子齒痛の爲姉君と共に谷中坂町妙清寺内へ願がけに行く、歸宅早々後かたもなく平癒したりといふ、奇なる事也。小説はじめて原稿にのぼす。日暮れより雨降り出づ。此夜母君に新小説よみて聞かし參らす。

廿六日　より雨天。

廿七日

廿八日

廿九日　まで小説一向に盡力せしものから出來上らず、終夜從事。

卅日　小説いまだ十頁計しか出來ず、せん方なければ其趣半井うしへ申さんとす、ことに今日は小石川稽古なり、朝來大雨なれどもをして家を出づ、師君のもとに十二時まで居る、歸路直に片町の師君がり訪ふ、大人は次の間におはすなるべし、河村君老母及内室小女等火桶のほとりに居たり。大人の病氣を問ひなどせしに、師君痔疾にておはせしをいたく秘し給ひしから、一時になやみつよくなりて一昨日切斷術を行はれぬと也、いたく驚きていかにやと氣遣ふにいとなめしけれど病間にて對面せんとて

此間へ通す、石炭酸の香いとつよし、こは日々洗できすればなめり、種々談話、流石の大人もいとくるしげにみえ給ふ、一時歸宅。

五月一日　午前十時頃より家を出で、下谷伊豫紋に口取を買ふ、桃水君に參らせんとて也、十二時頃より片町に行く、物がたり種々、追々快方なりといふ。

三日　西隣の家に轉宅せんといふ相談とゝのふ。

四日　半井君のもとを訪ふ、轉宅一條を物がたりて原稿七日までと日延をなす。

五日　晴天。轉宅。久保木田部井手傳ひに來る、此夜より又小說にかゝる。兄君偶然に來る。

六日　一日小說に從事、ならず。

七日　晩景までには何とぞ著作し度大勉強、但し今日は小石川稽古日なれど行かず。

八日　終日まだ成らず。

九日　小石川會日なれど早朝よりは行がたし、三時頃に至りて小說完備す、則ち直に髮を結びなどして先半井うしがり行、藤村にてむし菓子少しとゝのへ持參す　直に

歸る。其足にて小石川へ行く、師君大立腹

十日　より蟬表内職にかゝる。

十一日　おなじく。

十二日　おなじく。

十三日　師君のもとへ行く。

十四日　稽古日、田中君より田邊君傳言を聞く、島田君のこと師の君のこと、歸路は日沒少し前なりし、思ふこといと多し。

十七日　田中うに會也、午前より行、來會者十二三名、車にて送らる。

十八日　小がさ原君のもとに數よみの催しあり、招きにあづかりしもの五名、題は二十三題成けり、終りて後ばら新美香園にばらを見る、歸宅は日沒。

十九日　中井君をとふ、一時は日に日に快方成しを、又いさゝか無理などをなしたるにや依けん、更に切斷を行はずんば、能ふまじと思ふなりなど物がたらる、いといとなやましげなるにいか樣にせんと計打守り居る折しも、醫師來診に來しかばおのれは歸宅す。

廿日　又見舞に行く、昨日切斷はなしたれどいまだ充分ならざる樣也、今一度切らずんばなどいふ、今日も氣分わるげ也、二時間計居てかへる。

廿一日　小石川稽古也、早朝に行く、我小説のこと田中君よりの物語りもあり、何とか答へなさずばわるかるべく、さりながら半井ぬしが種々懇とくなる言葉行爲を思へば是を捨て彼につくなん義に於てなかなかなるべし、いか樣にせんと斗師君にも相談をなす、そは道理なりしからば斯なさんなど仰給ふ、むさし野上卷閲覽に供す、歸宅は日沒。此夜野々宮君敎會よりの歸り也とて一夜の無心に參る十二時頃まで談話。

廿二日　野々宮君と種々ものがたる、半井うしの性情人物などを聞に俄に交際をさへ斷り度なりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯る事いひもて行かるべき、快方を待てと心に思ふ、九時頃野々宮ぬし歸宅、午後より又半井君病氣を訪ふ、朝鮮より友人兩三名來たりしとかにて、此邊亂雜也けり、おのれ行たる故にや人々は早かへりぬ、其こと由謂なきにもあらじ。今日は日曜なればにや重太君及び小田君參る、初じめて果園氏近づきになる、直に歸宅。

廿三日　雨天。

廿四日　雨いたく降る。九雲夢書寫す、十葉計。

廿五日　雨いとゞつよく降る。午前の內九雲夢十葉計うつして、夫より小說草稿にかゝる。今日の改進新聞にむさしの上編の評をのせたり。

廿六日　連日の雨晴る。早朝より九雲夢書寫す。

廿七日　大雨。九雲夢書寫、此夕べ半井君より手紙來る。

廿八日　晴たり。小石川稽古に行、しかるに老人昨夜より急病生死おぼつかなしと聞く、今日の稽古休み給はゞなどいさめたれど、師の君聞給はず終日敎へをたれ給ふ、醫師も來たる、此分にては今が今にてもなかるべしと云ふ。おのれ夕つ方一先歸宅、又參らんとて也。歸家直に半井君に趣く、病氣見舞かつは返事すべきこと有て也日沒前藤田屋來たりて終日庭作りす、酒飯を供して勞にむくふ。此夜長齡子ぬしより借りたるよみ賣新聞小說三人妻二十回許見る。

廿九日　早朝直に小石川病人を訪ふ、正午時まで居る。此間に小がさ原家及伊藤老母見舞に來る。一時歸家して九雲夢少し寫す。更に夕がたより小石川へ行く。

我はじめよりかの人に心ゆるしたることもなく、はた戀し床しなど思ひつることかけてもなかりき、さればこそあまたゝびの對面に人げなき折々はそのことともなく打かすめてものいひかけられしことも有しが、知らず顔につれなうのみもてなしつる也、さるを今しもかう無き名など世にうたはれ初て處せく成ぬるなん口惜しとも口惜しかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、此頃降つゞく雨の夕べなど、ふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそこともなくおもかげに浮びて、彼の時はかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の參會の時手づから雜煮にて給はりしこと、母様のみやげにし給へとて干魚の瓶付送られしこと、我参る度々に嬉しげにもてなして歸らんといへば今しばし〳〵君様と一夕の物語には積日の苦をも忘るゝものを今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしこと、まして我が爲にとて雜誌の創立に及ばれしことなどいへば更也、久しうわづらひ給ひての後までよわ〳〵となやましげながら、夏子様召上りものは何がお好ぞや、此頃の病のうち無聊堪がたく夫のみにても死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひし御恩何にか比せん、謝禮には山海の珍味も及ぶまじけれどとて、兄弟などの樣にの給ふ、我料理は甚だ得手なり殊に

互もくずし調ずること得意なれば、近きに君様正客にして此御馳走申べしとて約束したりき、さるにても其手づからの調理ものよ、いつのよいかにして賜はることを得べきなど思ひ出るまゝに、有し頃戀しう、世の人うらめしう、今より後の身心はそうなど取あつめて一つ涙にひぬものから、かく成行しも誰故かは、其源はかの人みづから形もなき事まざ／＼しういひふらしたればこそ、わりなう友などの耳にも傳ひしなれ、友に信義の人しなければ、やがて眞そらごと師の君に訴にけん、されとも猶師の君にまこと我れを見る眼おはせばかくはかなき邪説などにやす／＼と迷はされ給ふべきにはあらじをなどさま／＼に思ふほど、憎くからぬ人もなく成ぬ、いでや罪は世の人ならず、我李下の冠のいましめを思はず、瓜田に沓をいれたればこそ、いつしか人の目にもとまりていひとき難き仕義にも成たれ、人の一生を旅と見てまだ出立の二あし三あしがほどなる身には是れのみにも非ざるべし、道のさまたげいと多からんに心せでは叶はぬ事よと思ひ定むる時ぞ、かしこう心定まりて口惜しき事なく、悲しき事なく、くやむことなく、戀しき事なく、只本善のぜんに歸りて、一意に大切なるは親兄弟さては家の爲なり、これにつけても我身のなほざりになし難きよなど思ふ折

しもあれ、又さる人に訪はれなどしてかの人のことふと物がたり出たる、この人にはもと末いはで叶はぬ筋なればかく〳〵しか〴〵にてさらに〳〵参ず成しなど語るに、其人打かたぶきていな〳〵夫は眞のみにも非らじ、かの人の口づからさることいひ出したるなどかけても思ひより難し、大方は君樣本名あらはし難しなどつね〴〵の給ひしかばかの人おのが性などにて世に出し給ひしには非ずや、さるををし計づよき人々かに角ものいひ構へてかくいひ開けたるなるべし、我思ふにかの人もし〳〵邪心ありて爲に計ごとを廻らし給ふとも〳〵もかく拙なき事〳〵わだてられん筈なし、外に手段もあるべきこと也、又かの人の質としてもの憐みつよく心切なるは我人共にしる處にて君樣にのみの譯ならねば夫は證とするに足らずかし、元來不羈放縱の人なれば、ありし頃もさら也常は柳闇花明のさとを家居として、金錢をみること芥の樣に、ある時は五十金を一夜につひやし、今日七十金の收入ありしも明日は僅かに五圓をあますのみなどの事あるはめづらしからず、一昨年のこと也、正月の一日にはれぎ五十金出して調せしを、二日目に友の窮する由きゝて殘りなくぬぎてやりつ、其身は古るびたる二子の袷に浴衣かさねて寒中をしのがれぬ、されども妹の君嫁入らせ給ひし時に思ひ定

めしことありて俄に身もちつゝしみ給ひつ、人知らぬ宿に蟄伏して我世の春待ち給ひしは事實也。あながち君樣に志しありてのみにも侍らざめり。又俄に家居たゝみて跡なくわたましゝ給ひしは、かうやうの事より隱れ家の世にもれんこと恐れ給ひての業ならずやとおのれは思ひ侍る也など、一々に證を引てあげつらふ、かくてはいとゞかの人憎くみ難し、恨みは大方の世の人也けり、かの人にくみ難しと思へば我輕忽の所爲今さらに取かへさまほしく、さりともよも腹立はし給はじ、我が心の潔白なるは思ひ知らせ給ふべきものをと思へど、か計仁慈ふかく義俠つよかりし人につれなうもてなしたる我何の罪人ぞや、そも〳〵我はじめて逢參らせたる頃、女の身のかゝる事に從事せんはいとあしき事なるを、さりとも家の爲なれば詮すべなし、さりながら行末見込ある筆つきなるをつとめ給はゞかならず世に知られ給はんよなど、又兄の樣にの給ひしことなどくり返にも悲し、いでや世の人は何ごともいへ我にけがれなく、かの人淸くさへあらばそしりは厭ふ處ならず、猶今の御住家尋ねあて今までの如く只兄君としたしまんか、しかはあれどかの人世にすぐれたるみにくき形などならばよけれと、憎くや美形の人の口いとゞふせぎ難く、且はかの人の心にも其美形なるに依りて

我か計に思ひしたふなどをし計られんか夫も口惜し、必竟は我かの人を思ふにも非す戀ふにも非らず。大方結び初たる友がきの中終始かはらざらんが願はしきにこそかくさま〴〵の物おもひをもする也、されど猶かくいふも我迷ひに入らんとする入口にやあらん、今こそ人も我もにごりたる心なく行ひなく、天地に恥ぢずして交りもなさめやう〳〵入立てむつれよるまゝにいかに我心人の心替り行かんか計り難し、かの人の是非曲直我が目にうつるほどはまだ醉つるならず。はては善も惡も取捨の分別なく、人のそしり世のはゞかり見もかへらず。徳に外れ道に戻る人にもならんは今踏たゆるとさらぬとの只一あしの違ひぞかし、あやふしともあやふしと思へばそゞろに身の毛も立ぬ、一心我をはなれて觀ずれば、愛憎厭忌何ごとかある、物信ふかければ悔いふかし。疑心も掛念も猶凡情俗心のみ、さればこそ君子の交りは淡くして水の如しとや師君の疑ひも友のねたみもかの人の交りも無かりし昔しに何事かある、只しる莊子が蝶の翩々たる如く、あれも夢也、是も夢なり、覺めんはいつのはてしなけれど我心の神明に照し無心無邪氣に成終らんのみ。

なき名の立ける頃、

みちのくのなき名とり川くるしきは
　人きせたるぬれ衣にして

されどたゞ、

行水のうきなも何か木の葉舟
　ながるゝまゝにまかせてぞみん

今日を限りとおもひ定めてうしのもとをとはんといふ日よめる、

いとゞしくつらかりぬべき別路を
　あはぬ今よりしのばるゝ哉

ある時は厭ひ、ある時はしたひ、よ所ながらもの語りきゝて胸とゞろかし、まのわたり文を見て涙にむせび、心緒みだれ盡して迷夢いよ〳〵闇かりしこと四十日にあまりぬ、七月の十二日に別れてより此かた一日も思ひ出さぬことなく、忘るゝひま一時も非ざりし、今はた思へば是ぞ人生にかならず一度びは來るべき通り魔といふものゝ

類ひ成けん、道にかんがみ良心に訪へば更に〳〵心やましきことなく、思ひわづらふふし更になし、我徳この人の爲にくもらんとして却りてみがゝれぬ、いでやこれよりいよ〳〵みがきて猶一大迷夢見破りてましと思ひ立しは、八月の廿四日、澁谷君に訪はれし翌日成けり。

しのぶぐさ　（二十五年六月）

六月一日　中島の老君病いよ／＼あつしとて我を迎ひの手紙來る、參りし頃ははや物もの給ひやらず、常はうとき師の兄君さては其娘たちなど枕もとに寄りつどひてすゝり啼し給ふさま悲しともかなし、思へば廿一日の朝のことなり、咳にいたく苦しみ給ひしかば我紙をもみて參らせたるに、病みつかれし目かすかに開きて誰ぞや夏どのか我もこたびこそは生くまじう覺ゆるよと物心細くの給ひしかば、何としてさることか侍るべきみ心つよふ覺せなどなぐさめし折まだかく俄になどは思はざりしをと、そゞろに我も涙ぐまれぬ、みの子ぬしも參られたり、今日一日のうちもいかにや／＼と心もとながるほどに夜にも入りぬ、醫師は佐々木東洋君なれど、俄かのことのあらん時にとて坂したなる矢島といふをも頼み置くなり、八時といふ頃より苦るしともなく息せわしく成て身もだえし給ふこと限りなし、矢島參りて皮下注射など二度び斗したれど露ほどもしるしなく、見る目いと詫し、師の君はまして心も心ならねばやあと枕に立そひてくれ惑ひ給ふさまことわりなり、十時といふ頃佐々木君も參られぬ、此頃

より少したゆみ初て、曉がたまで我も人も靜かならねど夢路に入りぬ、つぐの日もさして重るともなく時々に身もだえはし給ふものから、兎角暮したり、夜に入てよりはいよ〳〵限りと覺しくて手足の置處なげにみゆ、矢島にいたく請ていなせじといふものから皮下注射を更にしたり、それより唯ねぶりに眠りて三日の午前十一時といふに空しく成りぬ、みの子ぬしは其日斗家に歸りて折にあはず、いそぎ參られていと口惜しがる、房子君も一あしおくれにたり、此折のことども書んも中々なり、このほどの二日三日ひるなく夜なく立かはり入かはる人、さしも狹からぬ家ながら唯みちにみちていさゝかの間もなし、夜るなどはみな寄りつどひてをかしき物がたりどもしてねぶたさをまぎらはす、かゝる折にこそさま〴〵の人の心も知るべきながら、我見る目あざやかならず聞く耳さとからねば甲斐なし、甲斐なしとしれど又おのづからに目とまり耳に聞えなどする事種々なれど、さのみはとてなん。四日小出ぬしが催しにて櫻雲臺に何某の追善會ある日也、師の君の代りとしておのれ行く、田中君と同車也、心こゝにあらねば歌もえよめずやがて歸る。五日にからは柩に納めぬ。六日の午後野邊送りの左法をす、祭主は春日何某成き、伊東夏子ぬしとおのれとこしわきの役をなす。

師の君も徒歩にて砲兵工廠前まで行給ふ、これより車也、喪服にやつれ給へるさま悲しともかなし、今日生憎に故松平慶永ぬしが一週年の祭を星が岡に行ひ給ふ日とて、宮内省出仕の人々さてはうた人中有名のたれかれなどは参り合されず、されど送る人は二百人に過たるべし、大方は夫人令孃斗なりき、式場にての左法よりはじめて墓處に柩おさめ給ふまでえ書つゞけやらず、まして師の君の心いかならんかし、人々おの〳〵歸りさられぬ、師の君はらから、宇一君、くら子ぬしの二人、伊東君母子、みの子ぬし、おのれの八人車をつらねて歸りつきしは日沒近かりき、此人々もおの〳〵家に歸るに、おのれも又半井うしのもとよりいふ事ありとの文もあり、今宵斗はとて歸る。

七日　何は置て半井うし訪て見よと母君もの給ふに、ひる少し過る頃より行く、例の從姉妹の君も居られたり、おのれいつも取立たる髪など給はざりしを島田といふものになして有しかば人々めづらしがる、是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合給ふをなどいはれて中々に恥し、半井ぬし拵の給ふやう、种々に御事多かる中をさぞ出がたくやおはしけん、實は君が小説のことよ、さま〳〵に案じもしつるが到底

給入の新聞などには向き難く、や侍らん、さるつてをやう〳〵に見付て尾崎紅葉に君を引合せんとす。かれに依りて讀賣などにも筆とられなばとく多かるべし、又月々に極めての收入なくば經濟のことなどに心配多からんとて是をもよく〳〵計らはんとす、されど夫も是も我は日かげの身立出て何事かなし得べき、委細畑島にいとよくたのみてそれが知人より頼み込せしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ては見給はずや、もし其時に成て他人に逢ふはいやなりなどいはれんがあやふくて先この事を申なりとの給ふ、何事のいなか有べきいと辱しといふ、雜話さま〴〵にて歸る。直に小石川へ到る、こゝは只人々醉へる樣なり、夢の樣にて十二日にも成ぬ、十日祭の式行ふことに親しき人十四五人招きて小酒宴あり、伊東夏子ぬし不圖席を立て我にいふべき事あり此方といふ、呼ばれて行しは次の間の四疊計なるものゝかげ也、何事ぞと問へば、聲をひそめて、君は世の義理や重き家の名や惜しきいづれぞ、先この事問まほしとの給ふ、いでや世の義理は我がことに重んずる事なり、是故にては幾多の苦をもしのぐなれ、されど家の名はた惜しからぬかは、甲乙なしといふが中に心は家に引かれ侍り、我斗のことにもあらず、親あり兄弟ありと思へばといふ、さらば申すなり、

君と半井ぬしとの交際斷給ふ譯にはいかずやいかにといひて、我おもてつとまもる
いぶかしふもの給ふ哉、いつぞやも我いひつる樣にかの人年若く面て淸らになどあれば、我が參り行ふこと世のはゞかり無きにしも非ず、百度も千度も交際や斷ましと思ひつること無きならねど、受し恩義の重きに引かれて心淸くはえも去あへず、今も猶かくて有なり、されど神かけて我心に濁りなく、我が行ひにけがれなきは知り給はぬ君にも非らじ、さるをなどこと更にかうはの給ふぞと打恨めば、そは道理なり〳〵、さりながら我かゝることといひ出づるには故なきにしもあらず、されど今日は便わろかり、又の日其譯申さん、其上にも猶交際斷がたしとの給はんに、我すらうたがはんや知れ侍らずとていたく打歎き給ふ、いぶかしともいぶかし、かゝるほどに人々集り來ていとらうがはしく成ぬれば、立別れにけり、何事とも覺えねど胸の中にものたゝまりたる樣にて心安からず、人々歸りて後この事斗思ひぬ。

十三日　長齡子ぬしのもとに順會のかずよみなり、午前より行、來會者廣子、つや子、夏子、みの子、おのれの五人成き、數よみ題三十七詠じ止んで、雜話種々、田中ぬしなども折にふれて言ひ出らるゝことあやしう我に故ありげ也、夜に入りて一同歸

宅す。

十四日　終日倉子ぬしと物語りす。是も又我を底にやうたがふ覽、折々に詫めかしき詞ども聞ゆ、いと不審、今日は此人も歸られぬ、夜に入りて只西村の鶴どの、加藤の後家さては家内のはしため達の外、師の君と我を置て人もなし。ものに寄り集ひて世の中の物がたり共す。あやしくにごれる世のならひとて聞え出ること／＼にけがらはしからぬもなし、いづこの誰にはかゝる醜行あり、こゝの誰には何の汚行聞ゆとか、常に見聞く友などの上につきてもにごりにしまぬ人少なげにいひはやす、聞と聞まゝに人の上のみならず我がよ所の聞えも覺束なく成て席のはしに耳かたぶけ居し我不圖師の君の前にいざり出ぬ、師は物語りやんで臥床に入らばやと身を起す時なり、師の君しばし待たせ給へや、我少し問ひ參らせ度こと聞參らせ度ことどもあり。今宵聞て給はるべき哉はた明日になすべきにやといふに、師の君やをら座を定めて何事の問ぞ今宵聞んとの給ふ。半井うしのことはかねて師にも聞かせまつりて、其人となりも身の行ひもいとよく知り給ふ上にて、我が行かひも止め給はざりしなれば、我心に憚かる處いさゝかもあらず。先かく／＼しか／＼に人の申なる何の事と知らねど、或ひは半

井のことに依りてにや侍らん、もとより知らせ給ふ樣に我より願ひての交際にも非ず家の爲身のすぎわひの爲取る筆の力にとこそたのめ外に何のことあるならず、さるをか樣に人ごとなどのしげく成るなんいと心ぐるし、哀師の君の御考案はいかにぞや、もしみ心にもこは交際せぬ方宜しかるべしなど覺すことあらばあきらかに仰せ聞けられてよ、我は我心を信ずるまゝに男女の別をも思はず、世の人聞をも知らず、一向にしたしうせしものからかへり見ればいと心安からず、いかさまにしていかさまにすべきにか御敎へ給らまほしといふ、師の君不審氣に我をまもりて、扨は其半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ、こは何事ぞ行末の約はさて置て我いさゝかもさる心あるならず、師の君までまさなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨めば、夫に實か〳〵、眞實約束もなにもあらぬかと問ひ極め給ふも悲しく我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性とは知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふぞ恨めしく、人目なくば聲立ても泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公に妻也といひふらすよし、さる人より我も聞ぬ、おのづから緣しありて足下にも此事ゆるしたるならば他人のいさめを入るべきにも非ず、も

し全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに、我一度はあきれもしつ一度は驚きもしつ、ひたすら彼の人にくゝつらく、哀潔白の身に無き名おほせて世にしたり顔するなんにくしともにくし、成らばうたがひを受けしこゝらの人の見る目の前にて其しゝむらをさき膽を盡くして、さて我心の淸らけきをあらはし度しとまで我は思へり。猶よく聞參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて我が爲いとをしがられしとか。さるは世の聞えもよろしからず才の際なども高しともなき人なるに夏子ぬしが行末よいと氣のどくなるものなれなどいひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ斷りの手段に及ぶべしなど。師君にも語る、臥床に入れどなどかは寢られん。

十五日　午後より半井君のもとへ至る、梅雨降つゞく頃はいと詫し、うしがもとにはいと子君伯母君二處居たり、君は次の間の書室めきたる處に打ふし居給へり、雨のいたく降こめばにや雨戸殘りなくさしこめていと闇し、いと子の君伯母なる人に向ひて御覧ぜよ樋口樣のお髮のよきこと、島田は實によく似合給へりといへば、伯母君も

實に左なり〳〵、うしろ向きて見せ給へ、まことに昔しの御殿風と見えて品のよき髷の形哉、我は今様の根の下りたるはきらひ也などいひ給ふ、半井君つと立て、いざや美くしう成り給ひし御姿みるに餘りもさし込たる事よとて、雨戸二三枚引あく、口の悪き男かなとて人々笑ふ、我もほゝ笑むものから、あの口より世に無き事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我知らずにらまへもしつべし、我師の君より教へられつる様にことつくろひてもの語りす、師の君のもとに家の内取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて、いとせめて頼まれぬ、さるを無下にはなど斷はるべき、とし月の恩といふ義理はくろがねの刄も立ず、今しばらくは手傳ひ居らんとす、さすればいつぞや仰給はりし紅葉君のことも何も先え寄りの事ならずば折角御目通りしてからが筆も取りがたくば其かひあるまじく、お前様へ不義理にも成り申すべし、この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて參りつるなりといふ、それぞ困りたるもの也、尾崎の方も萬々話しとゝのひていつにてもあれ御目にかゝらんといふとか、明日にも手紙にて君に其通知せんと思ひしを今に成て斷りもいひ難し、いかにぞや筆とることはとまれ一度對面丈なし置給はずやといふ、さりながら御目通りせし上

にて筆取りがたしといはゞ何の甲斐もあるまじ、我も色々心にかゝる事ありて物がたりには盡し難けれどこゝにかしこにいとものうるさく身を責る頃なればといふ、さらば先兎角師の君に打明し給へよ、いつまで包み給ふともかくしおほせらるゝにもあらじ、其上にてよき考案つけらるゝぞよき、こゝにかしこに義理だて斗し給ふとも家計のことなどもあり、心を勞し給ふほど人は察し申間敷になどかたらる、常ならましかばいか斗嬉しと聞く言の葉ならむ今日は何となく上の空なり、種々ものがたりの内に我が心なぐさめんとにや高島炭礦のものがたりなどして笑はせんとす、何事ぞ聞きも入られず暇を乞ふて立つ、宅用少し有て菊坂へかへり、少時にて小石河に歸りぬ、今日のあらましもの語りなどして　師の君よりさし圖うけて半井君のもとへ文を出す。

十六日　田邊君參り合て種々もの語りす、半井君の事をいふ、此方の緣を斷ちて更に都の花などにも筆を取らんといふ相談也、久しう遊びて歸らる。

十七日　田中君參る、これにも半井君のものがたりす、打笑みながら聞居て半疑の姿いとよく見えぬ、終日かたりて歸る、文したゝめて伊東君送りもらひ度よし托す。

十八日　伊東君參られたり、百年の知己は何のかくすべき事もなくて思ふまゝにか

たり思ふまゝに無實を訴えて、君のみは實にや受給ると嬉し、猶この末いと多かれどあわたゞしき折にて書きも盡さず。

廿二日　家に歸る、こゝにもさま〴〵に相談してさて半井うしのもとに返すべき書物もて行、折から午前成しかば君はまだ蚊屋の内にうまいし居給へり、ゆり起さんもさすがにてしばしためらふほどにひる近く成ぬ。ふと目覺してこは夏子どのか淺ましき姿や御覽じけん。など起しては給はらざりしぞといひつゝ、あわたゞしく起出給ひぬ火桶の左右に座をしめつゝものがたりしめやかにす、情にもろきは我質なればにや是を限りに今よりは參らじと思ふに何ごととなく悲しくさへ成りぬ、伊東の夏子ぬしさては我母君妹などのいへるにも、書たえたる樣にするはいとあしきこと也、其故よし審らかに語りて得心の上に交際を斷ぞよきといへるに。我もしかせし方宜かるべしと思へば、今日しも人氣なくつゝましきことといふにはいとよき折からなり、我しばしはいひも出ずうつぶきがち成しが、さりともいはではつべきならじと、いとせめてものがたり出づ。例しらぬにしもあらぬにあたら御朝ねの夢おどろかし奉る罪ふかけれど、申さで叶はぬ事ありてかくは參り來つる也といふ、君何事ぞ〳〵と問ひ給ふ、い

でや我が上の事のみならず君樣の御名もいとをしくてなん、實は我がかく常に參り通ふこといかにして世にもれけん、親しき友などいへば更に師の耳にもいつしかいりて疑はるゝ處かは、君樣と我れまさしく事ありと誰も〳〵信ずめる、いひとかんとすればいとゞしくまつはりて此無實の名晴るべき時もあらじ、我身だに淸からば世の聞えはゞかるべきにも非ずとおもへど、誰は置きて師の手前是によりてうとまれなどせられなば一生のかきんに成べきそれ愁はしうと樣かうさまに案じつれど、我君のもとに參り通ふ限りは人の口ふさぐこと難かるべし、依りて今しばしのほどは御目にもかゝらじ御聲も聞じとぞおもふ、其こと申さんとて也、しかはあれど我は愚直の性かならず〳〵受參らせたる恩わするものには候はず、かゝること申出る心くるしさ推し給へといふ、大人も打あふぎてさる事成しかさること成しか、我は又勘違ひをなし居たりお前樣余の男子に逢ふはいや也とつね〴〵仰せられしかば紅葉に對面うるさしとて夫故の御と絕か、さらずば此日頃中島樣御中立などにてしかるべき御緣や定まりたるなんど、川村の老人とも語り居しなり。何はとまれ夫は御迷惑の事出到したるもの哉、我は男の何ともなけれどお前樣嘸かし御困りお察し申也、さりながら我は今更に驚きに

せず、かゝる事いわれんとはかねて覺悟なり、先我を人にしていわせても見給へよ樋口樣は此頃半井といふ人のもとへ時々に通ひ給ふよし、其男もまだ老朽たる人にも非ずとかかつは一人住みにあんなると聞を、とし若き乙女の故なきにしもあらじと此うたがひ立つは無理ならずして、何事なき我々二人が無理なるぞかしとて事もなげに笑ふ、さりながら何方の口より世にもりけん、我が友などにもお前樣のこと物がたりたる人もなきにかくすにあらはるゝが常なればにや人は我がしらぬ事までしる物なり、されど猶よくおもへば必竟は我罪かもしれず、先頃野々宮ぬしに物がたりの時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみかねてお前樣の事しきりにたゝえつ、何と嫁に行き給ふこと能はぬ御身分か、さらばよき聟君のお世話したし、我れ何ともして我家を出ることあたふ身ならばお嫌かしらずしゐても貰ひていたゞき度ものよなど我れ實はいひたり、夫や是や取あつめて世にさま〲にいひふらすなるべし、今仰せられし樣に恩の義理のとけがにもの給ふな、我は御前樣よかれとてこそ身をも盡すなれ、御一身の御都合よき樣が我にも本望なり、今よりはか來我家にお出あるな、さりとて丸でかげ絶給ふも少し人目をかしからんに折ふしは音づれ給へ、とかくは御一人住みが惡

るき也、我いつも申樣に御身を定め給ひしかた宜かるなり、今のうき名しばし消るとも我も君も生涯一人にて世を盡さんに、口淸うこそいへ何とも知れた物ならずなど尾ひれ添へられんかしるべからず。お前樣嫁入し給ひしのち、我一人にてあらんとも、哀不びんや女はちかひをも破りたらめど男は操を守りて生涯かくてあるよなどはよもいふ人も候はじとてはゝと打笑ふ、さま〴〵の物がたりしていざや歸らんといへば先今しばし宜かるべし、今日は御せん別ぞかし、又いつの日諸共に粗茶すゝり合ふこと有やなしや期し難きに今しばししばしとてもの語る、此人の心かねてより知らぬにもあらねばか樣の事引出しつるにくさ限りなけれど、又世にさま〴〵にいひふらしたる友の心もいかにぞや、信義なき人々とはいへ誠そら言斗り難きに夫をしも信じ難し、あれと是とを比べて見るに其僞りに曲てなけれど猶目の前に心は引かれて、此人のいふこと〴〵に哀に悲しく淚さへこぼれぬ。我ながら心よはしや、かゝるほどに國子迎ひに來る、家にてもいさゝかはうたがひなどするにやあらむ、打つれて歸る。

や車　雨天の時をば川原にすを結び立て魚をとる也。

地引あみ。

璺　ヒイ、きず、すきま

羝羊（をひつじ）　テイコウ

釉（ユウ）

しのぶぐさ（六月）

廿四日　半井ぬしの依頼にまかせて、畑島君に見すべき爲の尾崎紅葉紹介斷りの文を出す。

廿六日　夕歸宅す。國子の物がたりに聞けば廿三日に半井ぬし宅前まで參られし由折ふし來客ありしかば憚りてにや立寄もせで行かれたるとなり。今宵は家にとまる。

廿七日　今日は亡兄の命日也。西村君來訪されたるに茶菓をもてなして談話數刻、おのれは直に小石川へゆく。

七月一日　俄に師君思ひ立て鎌倉に趣かれんとす。同伴は田中君なり、小笠原伊東の兩君をも誘はれたるものからいづれも障りあるよし、午前十時家を出らる、留守居には西村の鶴どのとおのれなり、下婢二人と池田屋の妻が大方家の內取まかなへば鶴どのは取あつめて針し事などなし置かんとす、おのれは來客の應接の外は他事もなきに一意著作に從事せんとす、今日は終日師君が路ぢのほどいひ暮して夜にも入りぬ、戸ざし早うしてみな〳〵一處に寄りつどひてもの語りどもなす。

二日　師君のもとより安着の狀來る、宿は長谷の三橋なり。

三日　田邊君より我に文來る、さま〴〵あり、歌も有りけり。

四日　師君より又狀來る、下宿がへをされたるよし、八幡前の三ツ橋支店へなり、中三日ほどにて歸らむなどの給ひしが明日ならんか、明後日かと指をる。

五日　午後二時といふに歸宅されたり、やがて大雷雨、其夕べ暇を乞て我は家に歸る。

六日　小石川へ歸宅、歸路河村の女中に逢ふ、半井君の安否をとふに河村の主人病歿したるよし、うし一人にて萬の取まかなひに奔走いそがはしとかきく、此日伊東君に手紙を出す。

九日　鍋島邸に行幸あり、師君參邸、午後十時頃歸宅、此日半井ぬしのもとに文を出す。

十日　同じく行啓あり、師君參邸せられんとす、おのれは明日宅に事ありて夫にもうけ盡さんとて暇を乞ふ、西村の禮どの參る、是に諸事をゆづりて歸宅直に伊東君を訪ふ、金子借用せしなり。

十一日　亡父君祥月命日たい夜也、菊地の内君及び上野の伯父君、久保木の姉君を呼びて茶飯を供す、芝兄君は參られず、日沒一同歸宅。

十二日　早朝築地に趣く、國子と我と也、墓參終りて師君頼まれの伊東しき子とにをとふ、午前歸宅直に中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る。午後より大雷雨。思ひ立ことありて田邊君を訪ふ、三時より家を出で行く、途上の往來ふつに絕て盆を覆へす樣にふる雨いとすさまじ、女史がもとに至りつきてよりことにはげし、談話數刻晩さんの馳走を受く、太一君にも逢ふ、日くれてより歸宅。

十四日　師君を訪ふ、直に歸宅。

十六日　小石川へ行く。

廿一日二日と圖書館に通ふ、陶器のこと取しらべんとて也。

廿三日　稽古日なり、一同歸宅の後、頭痛はげしく暇を乞て灸治に行んとす、途中大雷雨、しばし表町の西村君のもとにしのぐ、こゝより一時家に歸る方よかるべしと定めて灸はやめになす、師君のもとにはがきを出す、是より歸宅、何事もなく日沒に成りぬ。

廿四日　雨天。

廿五日　おなじく。

廿六日　曇天。圖書館に行んとて支度するほど吉川君の内子參らる、談話正午に成る、同人歸宅後時間も少なければ圖書館行やめになす。

廿七日　圖書館に行く、中島師君のもとより病氣見舞として女中を使はさる、明日鳥尾君のもとに數よみ順會あるべきなれど、腦痛せん方なければ斷りの文を出す。

廿八日　ことなし、山梨縣に水害ありしと聞に、甲府伊庭郎君のもとより書狀もありしかば、是が返事並に親戚四五軒に書狀を出す。

廿九日　晴天。今日は暑氣はげしく頭痛たえ難ければ午後より暫時ねむる、久保木兄君昨日あみに趣きしとて川魚少し送らる。

卅日　晴天。早朝安達に書畫骨董類受とりに行。盛貞君と談話數刻、午前歸宅むし干をなす、日沒より師君を訪ふ、歸路雨ふる、西村君に立寄て傘をかりる、常洲北條穴澤の老人刺客の爲に斬られし物語、及び常どの病氣よろしからず樫村醫院に入院なしたる物がたり等あり、八時歸宅、此日の新紙上河野大隈の兩君にばく裂彈を送りた

るものある由しなり。
卅一日　雨。午前より野々宮君來る、終日歌詠す。半井君の事種々ものがたる。
八月一日　曇天。午前田中君來訪、我が病氣見舞として來られしなり、入谷に求め給ひし朝がほ一鉢送らる、甲州貞治より書狀來る。
二日　山崎正助君來訪、芝兄君幷に奥田老人よりはがき來る、伊東夏子ぬしより手紙來る、此日むさし野三編を買ふ。
三日　甲洲後屋敷より書狀來る、圖書館へ趣く、母君山崎へ金かりに行く、調達なる、奥田老人へ持參し送る。此日淺草に大旋風あり。
四日　晴天。田邊君に書狀を出す、此夕返事來る。
五日
六日　小石河稽古なり、不快をおして趣く、不平いふべからず、此日半井君より重太君を使者として茶一筒おくらる。
七日　野々宮君來訪。終日歌をよむ、半井君を訪給ひしよし我事に付ての談話ありしやに聞く、此夜滿月に當れば國子共にお茶の水に月をみる。

我かくかたらふ但し心の中なり、

　　吹風のたよりはきかじ荻の葉の
　　　　みだれて物をおもひもぞする

八日　晴天。早朝歌をよむ、六首、うつぼつたる心中まれに日月を得し心地す、快いふべからず、此日新聞號外來る、內閣總辭職、伊藤君總理大臣に成しよし、各新任大臣の名を出したり、夜に入てよりわれに源吉氏より書狀到來す。

九日　晴天。新聞を早朝に見る、內閣總理伊藤博文君、內務大臣井上君、外務大臣陸奥君、司法は山縣、遞信の黑田、陸軍大山、海軍仁禮、農商務は後藤君にして、文部を河野、大藏を渡邊君といふ役割定まりぬ、松方君はじや香の間祇候として特に大臣待遇をもつてせらるゝ由なり。

十日　晴天。朝のほど風祭甚三君より東京府士族授產金一條九田正庭君にかゝる訴訟等の爲委任狀に調印申こまる、但し代言は礒部四郎、宮城浩藏、鳩山和夫、黑岩鐵之助及び今一人なり、半井君より長文の手紙來る、返事したゝむ。ひる後小說に從事奥田より夜に入てはがき來る。此夜することいと多くて、十二時過る頃床にいる。

十一日　夜來の雨全く晴て初秋の空いとよくすめり。何事なし。

十二日　晴天。前島むつ子君のもとにかずよみす。題三十題。

十三日　小石川稽古日なり。此日龍子君も參られたり。談話種々。我舍のことに付て世に浮評かまびすしき由。前島君も席にものがたり出らる。諸君歸宅後田中君と我殘りて種々ものがたる。我斗は日沒近くまで居て師君に相談をうくる。

十四日　晴天。野々宮氏來訪、終日歌を詠ず。

十五日　晴天。午前三枝の君來訪。庭のくだ物持參。ひる飯馳走して歸す。暑氣甚だし。母君日沒後奥田へ病氣見舞に行給ふ。山下直一君熊谷より歸京したりとて來訪九時頃まで遊びて歸る。

十六日　晴天。暑氣いとゞ甚だし。華氏寒暖計九十七度にのぼりぬ。一時頃よりひる寢暫時なす。寢ざめて後師君のもとより郵書來る。此事につきて田中ぬしを訪はんとす。明日の方よかるべしといふ。

十六日　早朝に田中氏を訪ふ。師の君より依賴を受たる事に付てなり。師の君は今度の浮說の出所に付ていたく田中君をうたがひ給ふと覺しく。同家に出入する書生の

事我に問はせんとてなり、我も此人を正當の人とは更に思はず、花柳社會にたちたる人のならひ浮たる行ひありなんどの風説は誠なるべしと聞けり、されども此度のことに付てこゝより出たらんなどゝは流石に思ひもかけねど、猶樣子も見まほしく其上にて取計ふべき旨もあるべしと覺悟す、談話種々、今日は一日此處にて遊び給へとてひる飯振舞る、表面には情づくりて見ゆるものから猶したには師の君などをもいかに思へるにや折々に不平の詞聞えて、ともすれば小出君のことのみ引出すは怪しからぬ事なきにもあらじと思ふ、一日物がたりして歸路師の君のもとに寄る、師の君には中々にさま〴〵の事聞かせ奉らん又むつかしき中立にもやとはゞかりて唯書生の新聞社に出入せざる事のみ談ず。師の君は例の物うたがひ深き質とてひたすら田中君をのみ仇になす、されどもあらはには名をもさゝねどおのづから此人こそ利欲の爲にかゝること作り出して我舍を乘とらんとする計略なれ、夫には軍師あり手下あり、使はるゝ人の中には水原みさ子なども交るらんなどたしかに定めたる想像をたて給へり、明日は田邊君に參りて秘密にこの相談とげて貰ひ度し。この事相談すべき人君と田邊君、天野君の外にあらず、伊東君にも爲せばなすべきなれどおのづからもる處もあらんとの

給ふは田中君への事なめり。夜一夜はなし明す。我れ種々に思ひなせど田中君の所爲ともきこえず、さりとて島田君、首藤君の出來したるにもあるべからず、大方は師の君の身につきて宜からぬ行ひなどの有るがいつとなく世にもりてさるが上に田中君、島田氏抔の不品行の人を愛し給ひしかばいとゞ實說になりしなるべしと思ふ。流石にかくともいひ難きもの故いとゞ思ひ煩ふこと多かり。

十七日　晴天。九時頃より田邊君を訪ふ、此事につきてのもの語り種々、同氏も田中君をとは思はず、大方は世におのづから傳たるなめりといふ、岩本君、植村君など樣に人の信深き人々のいかにしてかいひ出たることゝて中々に此ふせぎは難かり、されども其源といふ處を探らば遂にはしれぬ事もあるまじ、もとを知らば枝葉は何とも成るべしなどかたる、とに角今日は此處に遊て歸路天野君にも諸共に行て此事かたらんはいかにといふ、さらば仰せにまかせんとてひる飯もたべぬ、小說家の事に付て種々はなす、交際ひろき人とておもしろきことをかしき事多し、さがのやおむろぬし及び梅花道人の發狂したりといふものがたりあり。內田不知庵君及び櫻井方寸子などの事、明治女學校の敎育方針など、或は高等女學校の浮說の世に流れたる源因、又田

邊君朋友の人々の種々なるものがたり等一つにしてたらず、暑き日一日かたり暮す、夕かけてより天野君を土手三番町に訪ふ、家は土手のいと近き處にて詩人のすみ家覺ゆる樣なる木立いとしげき處に三曲合奏の嚠喨として聞え出たるが夫なり、山登何某の出稽古に來たり居しなりとか、暫時西洋間の方にて待つ、やがて其三曲の間を取片付て其處にてしばしもの語りす、日沒少前暇乞して出ぬ、市谷見付にて田邊君と袂を分ちてこゝより車にて師のもとまで來る、灸治に趣き給ひし留守なりし少時待つ、但し今一泊なしくれたしと申置たるよしゆゑ我宅へは一書さし出す、晩景小出君來訪しばらく我とかたる、其中に師も歸り給へり、小出君歸宅後しばしものがたりありたり、田中君のこと高田君のこと首藤氏の娘のことなど其中にも重なり。

十九日　早朝歸宅せんとせしかど事多くて九時に成ぬ、いざとて歸宅がけに鈴木しげね君來訪我は直に家に歸る、母君西村へ趣き給ひし留守成き、久保木來る、二時に歸宅、今日は各評の歌並びに小說の著作少しなす、夜る早くふしけむ。

廿日　早朝。小石川に行く、稽古日也、題二つ、今日は伊東君とおのれと十點一つもあらざりし、湖月抄の講義も有けり、田邊君昨日田中君を來訪されしよし、我が同

君のもとに行たること並に天野君を訪ひたるなど殘りなく知られたり、あやしう秘密といふものを何故にはなし給ひけんとかたぶかれぬ、中村君のもとに明日かす讀の催しありしが障る事ありて廿四日にのばす、田邊君、天野君、片山君などの催しにて難陳あらんとす、大造、東の兩君をも中間に加へんといふ、師君又灸治に行給ふとなればおのれらは午後早々に歸る。歸宅後小說に從事。

廿一日　晴天。午前より野々宮君來る、歌の添删をなす、頗る佳絶のも有けり、點取り二つ詠ず、終りて後種々談話、同君が朋友の一女生本年四月人に嫁したるが其後便りのあらざりしかば此方より郵書さし出さんとて宿處を問合せて其里方へ趣きたる處、其人不計も居りたり、嬉しくて如何にして當所にはと問へば涙を一目うけてもの語りたる事よ哀さ堪がたしとて野々宮氏涙ぐまれぬ、我も心にかゝりて其人いかにせしにやとゝへば此頃の新聞などにも見えたる澤木何某が妻なるよし、夫は有爲の若人なるに事素志と同じからず鬱憂のあまり神經の變動を來たし終に自殺を志ざしゝなりとか、疵もいと深かれば多分は一命も六つかしかるべしといふ、其兄弟なる無賴漢のこと、親友なる柳何某とか時事新報の記者のこと、取集めて談し多し、半井君へ妻君に

野口といふ人周旋せばやとせしに中に立人をかしく引しろひて今一人の人を是非といふ、我は餘り心も進まねど頼れ故止を得ず寫眞あづかりて來たりとて見する、さまでには見にくゝも非ず、其人のことに付て小說の事種々かたる、こさ吹風といふ痴史が作をいたく愛て夫より行たしなどの念に成たるなめりといふ、怪しう世にはさま〴〵の人も有ものなりけり、同君歸路半井君を訪はんとて四時頃歸らる、同君よりかり受たる繪畫の手本今日よりならひはじむ、日沒後國子と共に散歩す、三崎町もよりより九段下まで行、半井君の寓居もよそながら見たり、宅に歸しは八時なりし、これより小說に從事。

廿二日　晴天。菊池の老君遊びに參らる、終日談話、久保木及び藤田屋の息子來る夜に入りてより突然澁谷君來訪、暑中休暇にて歸鄕したるなりとか種々ものがたりす我小說ものする事三枝君より傳へ聞たりとて其よしあしなどいふ、猶つとめ給へ潔白正直は人間の至寶なり、是をだに守らば何時かは好時に逢はずやある、我其かみの考へには君の家かくまでにとは思はず、富有と斗思ひしかば無理をいひたる事も有し、今はた思へばいと氣のどくに心ぐるしさたえ難し、もし相談したしと思ふことあら

ば遠慮なくいひ給へ、小説出版などの爲に費用あらば我たてかへ申べし、又春のやなり高田なりに紹介頼みたしとならば我明日にも其勞は取らんなどかたる、牛井ぬしのことかく〳〵と我もいへば夫は勉めてさけ給へ、いづれ恩も有べし義理も有らんが夫につながるゝ末いとあやふし、正當の結婚なさんとならば止むる處なけれど浮評といふものはあしき事なり潔白の身にもしみつかば又取かへしなかるべくや、兎角君は戸主の身振かたも六つかしからんが、國殿は他へ嫁し給ふ身あたら妙齢を空しく過し給ふな、我もむかしは書生上りの見る處少なく思ひ廣くして小説にいふ空像にのみ走りたれど今は流石によの風しみこみて老人めきたる考へにも成たりなどかたる、此新年の狀は君や書給ひしうまきものなり、我々も人ごとに見せてほこりぬ、何ぞ書きたるものあらば得させてよかたみにせん又持行てほこりたければと例のうまき事いふと知りながら流石につよくはいろいかねて短册一ひら送る、我が目の近くて澁谷ぬしのお顏さへよくも見えずと語れば困りしもの哉何とかして直し度ものなり、明後日我は歸鄕せんと思ふにあすまた訪はん諸共に醫師へ伴んかいかになどかたる、都の花にもし投書なさば一本を送り給へなんど夜ふくるまで語る、又何時來べきかしらず寫眞あら

ば給はるまじきか、我も送らん、とかくは潔白の世を過し給へ、今御覽ぜよ必らず善事は來るべし、此事のみは我保證するなりといふに、我れも世の浮説は何といふやしらず、天地神明に斗は恥ぢざるつもりなり、もしも世に入れられずば身を泪羅に沒するともよし決してにごりにはしまじと思ふなり、澁谷樣此次參りたまふ頃には枝豆うらんか、新聞の配達なさんか知れ侍らず、其時立寄らせ給ふやといへば、必〳〵立寄らん、もしも不義の榮利にほこり給ふに逢なば斷じて顧みはせざるべし、嗚呼則義どの在世ならばかゝる事にも立到らざらましと氣のどくの事なり、父君の愛し給ひし道具などはいかにかなしたる、もし迫り給ふことありともうしなひ給ふな、其場合には我もとへ告こし給へ、夫斗はうしなはせ申まじ、衣類などはことにも非らず、こしらへんとすれば何時にても出來るべし、重代のものは大事ぞかしなど入立てかたる、いざ歸らんと立しは十一時成し、又立歸りて夏子ぬしの目は困りしもの哉、いかなる質なるにかと氣遣しげに問はるゝに、我とこしらへたる近眼なりと笑ひていへば、さらば先よし、海岸などの見渡し廣き處に居てしばしやしなはゞ直ちになほるべしなどいひて出る、車待せて置たるなり、身形などはよくもあらねど金時計も出來たり、髭もは

やしぬ、去年中事補に任官して一年半とたゝぬほどに檢事に昇進して月俸五十圓なりといふ、我十四の時この人十九成けん、松永のもとにてはじめて逢ひし時は何のすぐれたる量見もなく學などもいと淺かりけん、思へば世は有爲轉變なりけり、其時の我と今の我と進歩の姿處かはむしろ退歩といふ方ならんを、此人のかく成りのぼりたるなんことに淺からぬ感情有けり、此夜何もなさずして床に入る。

廿三日　晴天。西村君來訪・師君のもとへ明日のかずよみ斷りのはがきを出す・澁谷君又來訪・土産に菓子を送らる・西村君直に歸る、談話種々おこる、夕べむさし野かはんとて繪草紙やたゝき起して買たるはよけれど・間違て吾妻にしきといふものにてあり、是より行て取かへてこんなど笑ふ、大隈、前島、鳩山をけさ訪しかば、路故佐藤の梅吉をも訪ひぬ、これより山崎君訪はゝやなどいふほどひるも近づきぬ　ひる飯いかになどいへど。否喰はじと斗いふに、さらばとて車夫に斗出す。書帖見度しといふがまゝに出して見する高まんのことゞも極りなし、いざ三人にて寫眞うつしに行かんいざ〳〵とそゝのかせど・先々とて我よりやめにす。越後へつかば直に手紙を參らすべし君も給へよなどいそ〳〵歸路につく、近世偉人傳のこと依頼せらる、晩菘翁

の履歴かき給ふ御處存なきやといへば、昔たけれどいまだ其暇に至らず、何とぞ君にも心がけて御聞こみの事あらば記をくに止め給ひてよなどいとこと多かり、手紙を約して歸る。今日はいと涼しき日なり、午後よりは來る人なくいと閒暇、小說に一意從事、めづらしく手習をなす、夜に入てより母君の肩をひねる、少し暑氣あたりとみえたり、夫より繪畫植物の一圖ひけり。

なみ風のありもあらずも何かせん
　一葉のふねのうきよ也けり

日記（二十五年八月）

廿四日、晴天ながら折々に鳴神の音するはやがてこゝにも降らんとすらんなどいひ合へり、きぬ三つ四つ洗ひて後机につく。西村君參らる、昨日細君の世話せんとて俵初音ぬしのこと物がたりしかば其事猶よく聞かんとてなり、午前に歸宅。母君一昨日より時候あたりにて心地すぐれず、今日は臥がちにおはしき。終日机邊にありて、日沒後母君の肩を國子と共にひねりて臥させ奉る。おのれも今宵はかしらいといたくなやめば早く臥たり。

廿五日晴天。母君まだ快からず、家内の掃除勝手もとのことなど九時頃までなして机につく、斗らぬことより種々の事案じ出して身をかへりみる心切に成ぬ、あみ初し小說の趣向もいたくかへんとす。

廿六日今曉三時傳通院內たく藏稻荷燒失、此いなり近邊に失火ある時は告あるき給ふとか聞しを、其社の燒しといふをかし。

廿七日小石川稽古日に趣く、稽古後師君と少しものがたりす、傳通院內淑德女學

校とかやに我を周旋せられんとかゝる物語あり、我も思ふ處の心がまをして歸る、母君にこの事を聞かせ奉るに喜限りなし。今宵はいたく勉强したり。

廿八日　晴天。野々宮來る、半井ぬしを訪ひ給ひしに鎌倉に赴き給ひしまゝいまだ歸宅されざる由、我が繪書用の筆買ひて給はりぬ。歌二題詠ず、初音君父姉の歌添刪頼み度しと持ち參られたり、終りて後種々談話、同君は宗教家の事とて有神論を主張し給ふ、我れは有神無神もと一物論をとなふ、談佳境に及て中々に盡ず、右京山に月のぼるまではなし暮す、いざとて歸宅されんとするに同君所持の洋傘及び我家のも合せて三本ほどいつのまにかうばはれたるもいとをかし、後に母君くに子などの殘念がれば何悔む事かは我家のものこそうしなひたれ天下のものゝうせたるならず、誰人の手に渡り誰れ人の處持になるとも用は一つのみ、洋傘は洋傘なる效用のかはるものならず、有たればこそうしなひたるなれなくなりたれば又うる事あらんとて笑ふ、我家貧困只せまりに迫りたる頃とて母君いといたく歎き給ふ、此月の卅日かぎり山崎君に金十圓返却すべき筈なるを我が著作いまだ成らず、一錢を得るの目あてあらず、人に信をかくこと口惜しとてなり、種々談合、おのれ國子ある限りの衣類質入して一時の

急をまぬかればやといふ、母君の愁傷これのみとわびし。（甲府野尻より書狀來る。此日野々宮君より國民新聞かりる。）

廿九日　晴天時々雷鳴す、頭痛いとはげしければ暫時ひる寢、午後より小說勉强す野々宮氏來訪、婦女雜誌持參にて物がたりす、洋傘を入より二本もらひたればとて一本を我家に送らる、昨日いひしに違はぬもをかし、又いつうしなふべきにや、少時にて歸宅。此夜國子に習字ををしふ。

卅日　晴天。母君しきりに質入れのことを可ならずとして安達に一度金策たのまんと早朝趣き給ふ、我つとめて止めたれど甲斐なし。同家不承諾のよしにて午前に歸宅思ひしことなりとて一同笑ふ。午後よりことに勉强、日沒後國子と共に右京山に月待とりて虫を聞く、歸宅後山下直一君來訪。

卅一日　晴天。今日は二百十日の厄日なりとか聞くを空のどかにして風もなし、終日來客なく、日沒後母君西村君を訪はんとて出給ふに引違へて同氏來訪、しばらくにして歸宅、山崎君金子の事に付て參る、此夜更けて久保木に出產の模樣ありとて母君迎ひに來る、先は其こと無く今宵も過ぎぬ。

九月一日　早朝國子姉君を見舞ふ、さしたることなし、母君は鍛冶町に金子からんとて趣き給ふ、我腦痛いとはげし水にてかしらあらひはち巻などなす、筆とることといとものうきに文章軌範少時通讀、韓非子が說難むねに徹しぬ、午後母君歸宅、鍛冶町より金十五圓かり來る、午後直に山崎君に金十圓返金に趣き給ふ、同氏澁谷三郎君を我家の聟に周旋せばや、もしは嫁に行給ひてはいかゞなどしきりにいひしを母君斷りて來給ひし由、世はさま〴〵なりとて一同笑ふ。澁谷君が今日も何事の感じありしにや我もとにての物がたり怪しう其筋を引かけつゝ、私よりいひ出んを待つものゝ樣に見えし、はじめ我父かの人に望を屬して我が聟にといひ出られし頃、其答へあざやかにはなさで何となく行通ひ、我とも隔てずものかたらひ、國子と三人して寄席に遊びし事なども有けり、さるほどに我が父この事を心にかけつゝ半は事とゝのひし樣に思ひて假にうせぬ、しばしありふるほどにかの人もいまだ年若く思慮定まらざりけんしらず、ある時母より其事懇にいひ出して定まりたる答へ聞まほしといひしに、我自身はいささか違背もあらず承諾なしぬといへり、母君悅こびてさらば三枚に表立ての中立は賴まんといひしに、先しばし待給へ猶よく父兄とも談じてとてその日は歸りに

き、事いかなるにか有けん其後佐藤梅吉して怪しく利欲にかゝはりたることいひて來れるに、母君いたく立腹して其請求を斷り給ひしに、さらば此縁成りがたしとて破談に成ぬ、我もとより是れに心の引かるるにも非ず、さりとて憎きにもあらねば、母君のさま〲に怒り給ふをひたすらに取しづめて其まゝに年月過ぎにき、されども彼方よりも往復更にそのかみに替らず、父君が一週忌の折心がけて訪よりたる、新年の禮かゝさぬ事、任官して越後へ出立せんといふ時まで我家にかならず立よりなどするからに是れよりもうとみあへず、彼より文來たればこなたよりも返し出しなど親しくはしたり、さるに此度びの上京いかに心を動かしけん更に昔しの契りにかへりて此事まとめんとするけしき彼方にみえたり、我家やう〱運かたぶきて其昔のかげも止めず借財山の如くにしてしかも得る處は我れ筆先の少しを持て引まどの烟たてんとする境界、人にはあなづられ世にかろしめられ耻辱困難一つに非ず、さるを今かの人は雲なき空にのぼる旭の如く實家は聞ゆる富豪のいよ〱盛大に成らんとするけしき、實姉は何某生糸商の妻に成て此家又三百圓の利潤ある頃といへり、身は新潟の檢事として正八位に叙せられ月俸五十圓の榮職にあるあり、今この人に我依らんか、母君をはじ

め妹も兄も亡き親の名までも辱かしめず、家も美事に成立つべきながら、そは一時の榮。もとより富貴を願ふ身ならず、位階何事かあらん、母君に待處を得せしめ妹に良配を與へて我れはやしなふ人なければ路頭にも伏さん、千家一鉢の食にとつかん、今にして此人に靡きしたがはん事なさじとぞ思ふ、そは此人の憎くきならず、はた我れ我まんの意地にも非らず。世の中のあだなる富貴榮譽うれはしく捐てゝ小町の末我やりて見たく、此心またいつ替るべきにや知らねど、今日の心はかくぞある、又おのづからにへだつる時ありやとてかくは記るしつ。今日はいとものうくて何事もなさずに日を暮しぬ。

二日　晴天。伊東夏子君及び師君に手紙を出す、終日何もなさず、沈思に終る、此夕は久保木姉君家出の騷動あり、母君大心配、但し此夜歸宅したるよし。雲いとさわがし雨にやなどいふ。

三日　晴天に成りぬ。早朝に洗濯もの三四枚なす、此頃柔弱に馴れたる身の苦しさ堪がたきに、是よりはつとめて力わざせばやなどかたる。

久保木來訪、姉君家出のてん末ものがたる、投身などの覺悟にや、水道橋の袂にて

取押へたるよし聞く心堪がたし、久保木歸る、直に母君奥田へ、例月の利子もて行給ふ

伊東君より書狀來る、昨日の返事なり。母君奥田にてひるめし馳走に預り給ふ、歸宅

は午後。

朝ごとに南のうねにたがやしててる日にむかひて牛をおひ又馬おひてシイドウハしることきく〳〵や可愛くもありのまゝなる野のたのしみはほんに王樣もなるまい事よ成ることならばよい妻持つて歌がたりを手枕にサァ手枕に。

長州赤間いなり町遊女から綾

すれ〳〵の中にとくさや露のたま

三界唯一心心外無別法心佛及衆生是三無差別

千代女

千なりもつる一と筋のこゝろから

その女

誰れかみんたれかしるべきあるに非らず
なきにもあらぬのりのともし火

いろなしとなにかいひけん吹くまゝに
　　みにしむものを秋の夕かせ

　　むねのうら書

伯父なる人のようといふ腫物になやみて切斷などしたるなごりもいと俄かには治しがたき景色なりときくにもの哀にて一日訪たる、六疊斗なる坐敷に打ふし居たる、石炭酸の香りの高やかなるにほひくるまゝにふと思ひ出るはかの人の病ひにふしたる時のことなり、かく廣やかなる處にはあらでものむづかしく狹やかなる部屋に夜具ふとん斗は此處のよりも立派にして枕もとに筆硯を放たず、いかに病ひはげしき時といへど日々の新聞に一回も缺きたる事なく、おのれ筆とり難き時は口述してやがて人に書かすめり、數千の借財に身をおそはれて行方もなき頃成しかば、いと〳〵かすかなる蓬生に這ひかくれて親兄弟なども身ぢかき處にあらざりしかば、いとこなる女に萬世話をうけ居たりしものたらずがちの景色もかなしく、枕もとに我を招きて一ひらの寫眞とり出しつ、是れはこのほど病ひの發せんとする一日前にうつせしなりよくうつ

りしか見て給はれ、我れはいつも生やさしくひな〳〵とうつりていや成りしに是れは人ごろしにてもなさんとする人の樣に見ゆるこれが正物なるべしとて心よげに笑ふ、われ日毎のやうに見舞て樣子をとへば嬉しげに物がたりすることもあり、眠はしげの時もあり、嬉しげなれば又明日も訪はましと思ひ、眠はしげなれば何事の氣に障りしにや機嫌取らんと又あすも訪ふ、ある日いとにこやかにて、樋口さまは我がせがれに逢ひ給ひし事ありやと問ふ、鶴田君がはらにと聞く其子の事かとかつは心可笑しく、いなまだと言へばさらばお目にかけんとてやをら起出で抱出し給ふは一尺斗の人形なり、娘子供の愛らん樣にうつくしき衣きせてかしづくと覺しきには三十男のしかも今の世の才たけたる人に似合しからぬ事とをかし、我れ抱き取りて頰ずりなどすれば、徒姉妹なる人の、君も人形は愛し給ふやこの顏つきよく見て給はれ何とよく似ては居侍らずや、此額ぎはの青筋はりて肝癪らしき處と笑ひつゝ半井ぬしを指さす、何處が似たりや我れには知れねど、此人形もうつくしくかの人も美くしければ似たりといはば似ても居るべし、彼人少し笑ひて、我れ一小說を著作し終る每にかならず其中の立物を人形にかた取りて一ツづゝ買ふが常なり、すでに〳〵十斗は買ひ溜たりといふ、さら

ば是れは誰れかと問ふに林正元なり、此子には羽織袴きせずば似合はず、兎に角に容貌うるはしきが上に品位備はりて天晴の子がらなり。かゝる子供一人あらば外に何をか願はんとて大笑す。來年よりは三月五月の兩節句に男女の人形共が祝ひしてお客様せん、其時はかならずお正客に招かんなどかたる、この人形かふ時もすでに祭のしたかりしかば幟りなど調へんとして伯母なる人にいたくしかられたり、此人形もいたく止められしを三夜十軒店にたち盡してやう／＼に手に入たりと子供あきたる物語りにしばしまぎらはすも中々になやましき處あれば成りけん、其時の我心には十二十斗數にも非ず、我身一生行來して何事まれ物語り合せんの心成しを、かく喰違ひて引はなれたる、彼方にはすでに／＼我名をも忘れ給ひけん、さりとも小説などの事の折ふしには思ひ出し給ふ事もなからずやなどゝ問ひしにかなし、此伯父の常にはことなりてなつかしげに物語りし、はれたる手をさし出して我手の上に重ねなどしてさめ／＼と涙落したる悲しともかなし、かゝる時の折ふしにも猶かの人の忘れ難きはなぞや。

泉州境眞言宗僧　辭世

よの中はしやの〱ころもつゝてん〱で
來る坊主にのこる松風

東叡山青龍院のちご喜平

朝がはのもろき命をもろ共に
あはれと思へ露の身の上

岐阜縣下美濃國惠那郡茄子川村成瀬誠志方

樋口虎之助

につ記（二十五年九月）

四日　曇天。今日は日曜なれば野々宮君來訪さるべしとて支度し居たるに、西村君上野の房藏氏來らる、談話少し、やがて野々宮君參らる、前よりの人々は歸る、歌二題よます、宗教上のもの語種々あり、午後より雨降り出づ、しばしの晴間に同君歸宅今宵は待宵なれど月なし。

五日　曇天。芝より兄君來る、薩摩陶器の土瓶かひてあらば賣りたしとて五箇ほど持參、我家にても一つあがなひ度しなどいふ、日沒まで遊びて、歸路諸共に萬世橋まで行く、兄君はこれより馬車、おのれと國子は小川町に廻りて燒あとの新築を見、東明館に墨をかふ、今宵舊七月の十五夜なり、夕方より一點の雲なく成りて明月の光り何ともいへず、お茶の水橋に虫聲きゝながら暫時たゝずむ、歸路にはがきをかひて田中君に各評出詠斷りを出し、小笠原君に數よみ出席斷りをいふ。家に歸りても月の光見捨がたく、板敷のもとに更るまで一人起居たり。

六日　大雨車軸をながす樣なり、前の小河に水あふれてさながら瀧つせのひゞきを

なす、母君は久保木に出產あるけしきなりとて午前の內丈かしこにあり、我今日は筆ことの外動きて一回分書き終へたり、日沒頃より久保木の樣子ことに惡敷、國子と母君替り〴〵に趣き給ふ。

七日　晴天。午前の內つとめて小說に從事す、動坂より師君手紙を賜ふ、小笠原家の數よみなるに我れ斷りて行かざりしかばなり、今日は田中も伊東も不參にていと淋しく淸書にもことかけば是非參り給へとなり、やがて支度して趣く、人々すでに詠に終りたるのち成りし、淸書しながら四題詠ず、師君用事ありとて直に歸宅、殘りて點數のしらべをなすに長齡子ぬし高點成けり、是よりいとま乞して歸る、日沒少し前成し。今宵の月ことに淸かり。

八日　晴天。澁谷君より書狀來る。小笠原君にははがきを寄す。

九日　晴天。兄君訪問、日沒まで遊び、歸宅後大雨車軸を流す、山崎君よりはがき來る。

十日　大雨。早朝に田中君車を馳せて今日の稽古に出席のことを賴み來る、さればとて直に小石川に趣く、稽古なくして師君出かけの處成し、暫時殘りて加藤の妻とも

のがたりす、師君の行爲聞くまゝに胸いたく成ぬ、みの子君も參らる、少時談話、正午頃歸宅、午後久保木に出產あり、小兒は死したる由日沒頃見舞にゆく、此夜石井よりはがき來る、野々宮君に明日の稽古斷りのはがき出す。

十一日　晴天。

十二日

十三日

十四日　此處三四日日記處でなく、大いそがしなり、但し格別かく事もなかりき。

十五日　小說うもれ木出來上る、田邊君に持參、途中より雨に成りぬ、車にて到る同君何方へか結婚の約整のひて是よりは筆とり難き身と成らんとすとて物がたらる、我が小說雜誌に揭載せんよりは小册の本になしたる方後來の爲よかるべしと物がたらる、我れ一人舞臺は心細きに君も何か書て給はらば驥尾の靑蠅僥倖なるべしといふに、否々夫處ではなし却て蛇の足ならんが、何か四五枚の物かくべしとうけがはる、半紙判二ツ折の小形製にしてうるはしき表裝にせばなどいふ、明日直に金港堂に持たして遣らん。但し十日位間はあるべしとにはべる。

十六日　晴天。圖書館へたねさがしに行く、春雨ものがたり丈山夜譚及び哲學會雜誌などを見る、歸路荻野君僑居を訪ふ、妻君に逢て新聞をかりる、歸宅は日沒少し前成し、今宵朝日新聞通讀、野尻君に一書さし出す、石井へも同じく。

十七日　晴天。今日は田中君會日なり、されどおのれは行かず圖書館に行く、奇々物がたり、くせ物語、昔々ものがたり、各國周遊記、雨中問答、乘合ばなし等かりる四時頃館を出る、此夜は何事をもなさず、はやく臥したり、但しこの夜山下直一君來訪。

十八日　晴天。野々宮稽古に參る、今日は用事ありとて正午歸宅、午後より諸宗教文少し見る、習字二通り斗りして夫より萬葉集を見る、夕暮より國子と共に散步をなす、右京山に虫を聞て夫より田町通り本郷の臺にのぼりて大學前あたりを遊びて歸る、二人にて母君のもみ療治をなす、臥させ奉りてより近松の淨瑠璃集をよむ。

十九日　起出でゝみるに雨成りけり、まだ明ぐれの庭のおもに草むらがくれこうろぎの鳴ける又なく哀なり、はき清めなどして机に向ふに、雨だれの音軒ばのらんの葉にほと／＼として、吹風のそゞろ寒さなど、氣候のうつり行さまいとしるし。

二十日　雨天。

廿一日　雨天。山梨より甲陽新報來る。伊東夏子君より書狀到着す。

廿三日　雨猶やまず。早朝野尻君より書狀來る、甲陽新報へ載すべき小說著作しくれ度しとなり、前田家より使ひ來る、各評の卷送りこしたるなり。午後小石河師君よりはがき來る、此月に入りてより思ふことありて何方の歌會へも一度の出席もなさゞれば夫をあやしみてなるべし、兎角明日の會には出席せばやと思ふ。日沒少し前より大雨盆をかへす樣なり、母君明日は不參の方よかるべしとの給ふに、さらばとて師君のもとにぞ手紙を出す。

廿四日　晴天に成りぬ。終日著作に從事。夜一夜雨ふる。

廿五日　晴天。野々宮君來る、和歌三題詠ず、四時半までものがたりす。日沒後國子と共に勸工場を一二ケ所縱覽。はやく寢たり。

廿六日　晴天。早朝師君のもとを訪ふ、大宮公園に秋草を見物と誘はれて直に十一時の汽車にて行く、三時の車にて歸る。

廿七日　晴天。日沒少し前師君のもとに平家もの語持參。

廿八日　田邊君よりはがき來る。

廿九日　ことなし、兄君美濃へ出立。

卅日　同じく。

十月一日　晴天。小石川稽古に行く、別にことなし。

二日　田邊君よりはがき來る。うもれ木一ト先都の花にのせ度よし金港堂より申來たりたるよし、原稿料は一葉二十五錢とのこと、違存あらや否やとなり、直に承知の返事を出す、母君此はがきを持參して三枝君のもとに此月の費用かりに行く、心よく諾されて六圓かり來る、そはうもれ木の原稿料十圓斗とれるを目的になり、此夜國子と共に下谷ステーションより池のはた近傍を散歩す。

三日　晴天。

これよりしばらくことなし。

連日の雨や机と御親類

十一日　少し雨のひまみえたり、野々宮君來訪、岩手縣に新高等女學校開校されんとするに招かれて主坐の任を帶て十四日出立せんとするなり、付きて教科書の不審の

處問ひき丶度しとて我れを訪ふ、和文讀本四冊を相談す、同人より駒下駄一足貰ふ。此方より花むけとでもなけれど有合せの半ゑり一かけ送る、夜に入るまでものがたりして歸る。

十四日　連日の雨はれ渡りぬ。野々宮ぬしの出立午前に成りしと聞くに早朝より家を出づ、國子と共に先づ途すがら安達君の病氣を訪ふ、ようといふ腫物にて切斷せられしなり、老たる人の心細ければにや涙ほろ〳〵とこぼして物がたりせる、こ丶を出でステーションに行きしは十一時ぢか丶りき、野々宮ぬしに逢ふ、送る人も十人斗あり、毛利すま子とて大島みどりぬしが知人もありけり、初對面の禮をなす、車の動き出るほど何とはなしに心細し、これより根岸邊を少し見物す、道路雨あがりにていと六ッかしかりき、歸路は國子よわりによわりて大學のうら門あたりまで來し時はあしも上がらぬ景色なりし、からくして歸る。

十五日　晴天。小石川稽古に久し振にてゆく、榊原家の令姫今日より通學し給ふ。

十六日　晴天。田邊君のもとを訪ふ。

十七日　雨天。上野房藏君來訪。

十八日　おなじく。野々宮君より安着の報來る。

十九日　好天氣なり。西村君來訪。母君小林君及菊地君を訪ふ。都の花に載すべき筈にて金港堂へ廻し置たる小説もはや一ヶ月斗にも成れるをいまだ其價は我が手に入らず、さりとて催促すべき處もなければ、日々首をのばして便を待ばかり、母君よりは手元の苦しさをしば〳〵訴へ給ふ、それも道理なり、此月中に是非入金の道なくばと頭を惱ます、甲陽新報へも六回斗の物差出し置きし夫さへ何の便りもなく、日々に送り越す新聞さへ此兩三日は如何にしけん發送もなし、彼れ是れと煩はしくて夜に入れどねむり難く、書見に二時すぐるまで更したり。

廿日　好天氣。よべ夜更しをなしたるに少し朝寢をしたりし枕もとに早くも郵便にて甲陽新報つき居たり、邦子いちはやくくり廣げてあゝ今朝より經づくゑ出たりとさけぶ、我れもあわたゞしく起出でみれば實にぞしかなりき、此月の六日斗にさし出し置しのなりけん、此分にては更に著作し送るとも沒書にも成るまじと安心す、おもへば我ながら恥かしき心なり、智識たらず學事とゝのはずとは萬も二萬も承知なしながら、文學中ことに六つかしゝと聞く小説をかきて一家三人の衣食をなさんなど大たん

といはんか身知らずと云はんか、人知らぬよ半の寐覺に背に汗のいと心くるし。

廿一日　圖書館に行く、此留守に金港堂編輯人藤本藤陰來る、うもれ木原稿料十一圓七十五錢送る、猶たのみ度ことあるよし言置たりと聞くに、さらば明日早朝に同人方を訪はんとおもふ。

廿二日　小石川稽古なれど藤本に約したることあれば早朝車を猿樂町に寄す、初めて對面す、種々ものがたる、都の花明年の初ずり附錄に松竹梅の三幅對を田邊君及び我と外一人の婦人に著作し貰ひ度し、依てこのことを花圃女史にも依賴なしたるに何れ考へてとのことなりしが、何とぞ相談の上に兩君にて一つづゝ題を定め給り度し、其殘りたるを佐々木竹柏園にか坪井秋香にか廻すべければと成けり、少時にて歸宅直に小石川へ行く、大雨成しが歸宅後には止みたり。

廿三日　母君三枝へ參り給ふ、都の花より受とりたる金のうち六圓を同君に返へさんとてなり、同君もいたく喜ばれたるよし。

廿四日　大雨。午後より田邊君を番町に訪ふ、留守にて母君としばし談る、歸路半井君下婢に逢ふ、同氏の近狀を聞く、萬感萬歎この夜睡ることかたし。

廿五日　晴天。母君田部井を訪ふ。西村常女來る、家にはりもの板なければ我家にて張り度しとなり。

道しばのつゆ　（二十五年十一月）

九日は萩のやの納會なり、二日三日前より時のけにやいたくなやみてかしらもあがらず、出席むづかしかるべしと思ひしも、今朝より俄に心すが〲しく此ほどならばと行、髮などもはか〲敷はとりあげず手あしなどもあかつきたるまゝ成し。田中、鳥尾、中村などの人々は我より先成けり、さはいへど常の樣にもあらねば歌もえよまずものうげなるを人々みあつかひてさま〲に介抱さるゝいと嬉し、來會者は三十人にあまりぬ、龍子の君の田中ぬしにことづけて我と伊東君に文あり、この廿日までに嫁入り給ふべきよし、今日の會をおもひやりて歌あり、

　　むれ遊ぶ澤邊のさまをおもひやりて
　　　心そらにもたづぞ鳴なる

なくねもしどろなるみだり心地をゆるさせ給ひてよなど例のうるはしうみだれ書給へるうつくしさゝやかなる紙に遠山のかたかすかにかすませて田鶴鳴渡る松ばらのけしき繪もをかしかりし、我には又別に十五日前にいま一度おとろかし給てよ、あ

たらしき家居には誰も居ごゝちよからぬものにて今よりのちしばらくはゆる／＼御ものがたりもかたかるべくいかで／＼などありけり、これがかへしはと人々いふものからさわがしさにまぎれてやみぬ、夕すぐるほどかしら俄になやましう成りしを人めにもしかみえけん、まだ殘る人いと多かりしかど、我はくるまたまはりて家に歸りぬ。

十一日　雲のあしさだまらず雨にやなどいへど、龍子ぬしよりの文もあり、今一度はいかでと思へば、今日をすぎて又よき日あらざりけり、さるはかの三崎町のうしに有しのちの物語も聞こえ、今の身のありさまもの隔てずつげまほしきをふりはへてはいかゞ人めの關のわづらはしきはさてものがるべし、母君妹なども ゆるしなうの給なすをしのぶの山のしたの通路もとめんには何ごとのうきかあるべき、たゞ誠のゆるしを得てとおもふほどに、折もよし此廿日よりはみやこの花にわが名かゝげられんとす、むさしのゝゆかりあるかの大人にこの事つげずばいかゞなど母君はまづの給ひ出にける、さらば龍子ぬしがり參らせ給ふ道すがらこそよけれど妹もいふ、ありし文には、

十一日か十三日おどろかしたまへとなるに、十三日は日曜なり、大人のもとにも友など多くつどひ居らん中々にものうるさしとて、今日は龍子ぬしも訪ふ成けり、祝ひのものどももてゆく道にて三崎町への文は出しぬ、君は何ごとの心がまへもなきやうに例のあされ居給へり、何某新聞の評したらんやうに大雅堂の夫妻おぼゆらんかし三宅雄次郎といへば世にはたゞ木のはしなどのやうにおもひて仙人とさへいふめり、さるをこの君のよにめづらしきまで才たかきをむかへたまふなる、猶たゞ人にはあらずとて目をおどろかす人々多し、みやこの花の松竹梅のことといかに成りし哉、われもいよ／＼十九日には鬼界がしまに移らんとするを中々いとまなきしも心のどかなればにや短編のものかゝばやの心ぐみあり、さるはほんやくといふほどならねど意やくなどいはゞいふべし、伊太利の小説を英にやくせしその物語を父より聞たるなり、是れを今金港堂に出さば大方は松竹梅に加へんとやする、新年の附ろくといふさへ花々しきを女斗三人などいさゝか目だつふしなきにもあらず、かしこにもさるけざやかなることを好まぬほんしようなるに、とつぎてほどもなくいかにぞや、それも君とわれと坪井の秋香ぬしなどならばまだ少しはよし、坪井の家は三宅とはいさゝか縁しのなき

にもあらず、此十三日に小石川の植物園にて披露をなすべき筈なれば夫よりは追々にしたしみを重ぬる道理なればなり、聞くところにては竹柏園や選みに當りけんそれにては少し不都合なればとて笑ふ、おなじうは君のと共にして一冊のものよに出さばや金港堂ならで春陽堂にてもよし、何かお作はなくやと問はる、我れ例の遲筆なれば是れぞとおもふものもあらず、されどもかねてものしかけしがしばしにてまとまらんとするをあはれ諸ともにせさせ給はゞ嬉しなど語り合ふ、ひる飯たまはりてしばして出ぬ、二時にも成けん、番町より車にて三崎町にいそぐ、北風いとつよく身をさす樣也、日月隔てゝものくるほしきまでおもひみだれたるを君はさしもおぼさじかし、心にもあらぬやうなる別れのその折はさま〴〵いひさわがれたる人ごとのつらさに何ごとをおもひ分くるいとまもなかりしを今さらにとりかへさまほしうおぼゆるぞかひなき、はじめよりにくからざりし人のしかも情ふかうおもひやりのなみ成らざりしなどおもひ出るまゝに、何故にかく成けん、身はよしやさは大かたのよにつきはじきされなんとも朝夕なれ聞こえなましかば中々にいけるよのかひなるべきをなど取あつむれば、人も我もよの中さへもいとにくしかし、まづ何ごとをいはゞや、かの君がみ心も

しらずうちつけならんやうに月日の隔てをかこたんもいかゞ、さりとて都の花のことよりせんもいとわびしかしなど思ひつゞくる間に車は大人が店につきたり。いよ更に心おくるれば音なうもしばしとたゆたはれぬ、此處は新開の町のはな〳〵敷にいとゞみがきそへたる茶だなにしあれば出入の人行來の人見おはすらん目ざし心がらにやいとつゝましくおぼゆ、こゝには早く文のとゞきて大人やしかの給ひおきけん、かしこげなるこものゝいそぎはしり迎へてこなたへといふ。店と奥の暖簾口にたちてさしまねくは見しれるはしたなり、ものつゝましういざり入れば六疊敷斗の處に机おきてゆたかに大人は寄りかゝり居たまへり、ふとあふげばものいはず打笑み給へる嬉しなどはよのつねたゞ胸のみおどりぬ、といはん角いはんなどおもひつゞけしことは何かにかはかくしけん、さらに〳〵いはるべくもあらず、からうじて月日いかゞすぐし給ひけん心には忘るゝ間もなきをおもひよらずもの隔てゝのみなんありし、御なやみの後はさしも御なごりなうとこそおもへりしに、此ほど御めしつかひよりそこはかとなくよわげになど承りしは誠にやなどほのかなるものがたりに景色心みれば、たゞにこやかに打笑みてこと少なうなるしも底に物ありげにていとくるし、都の花のことか

たるに、そはいとよき事成かし、何方にまれ筆とりておはしまさばよろこばしき事ぞかし、我がしれる友などもみな惜しみ合ひてありしものをなどかたらる、さる頃明治女學校の教師なる何某といふ人我がむさし野へ君のこと頼みに來たり、女學雜誌に執筆あり度しといひたれど、さしつかへおはします頃にてしばし筆とり給ふことあたふまじと斷りたるは我が潛越の所爲成けん、もしこれに出したしなどのぞみ給はゞいつにもあれ申給へ、我れ其人に紹介し參らせんにすこしも君が名のけがれには成るべくも非らずなどいふ、我も言はまほしきこといと多かれど人めあれば打もいであへず、君もの給ふことありげなれど口つぐみ給へり、畑島の老母一昨日俄かにうせしかばこの一日二日常に通ひて世話をなし居たりといふ、さるは我が郵便のとゞきたるより歸りおはしたる成るべし、氣の毒なることをとおもふ、商ひのいといそがはしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立はたらきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐる樣成し人の細々と成ぬるに、出入につけてものはかなきみづしめ樣のものにさへ客といへばかしら下げ給ふことのいたましさこれをなりわひとすれば身にはつらしとも覺さざめるを見る目はいと佗しかし、今日

は例に似ずいと商ひの多きは君のおはしたるに依りてなるべし、かゝる福ひの神おはしたるに何かおもてなしせずはあらじとて、みづしめ呼びて菓子などかひにやる、かく隔てなげにものし給ふものから何故とはしらずありしに替りし心地してたゞひたすらに心ぼそし、新開町のならひ何品といへどよきものうる家なく菓子も何もかゝるもののみなれどゆるし給へかし、かゝる中なれば人は我がみせをもこのたぐひと見てさしも珍重には思はざるを、もしもこゝに來て一度かふ人あればおもひがけずおどろきて、三崎町にもかゝる家ありと夫よりは常に買に來たるなん中々我家の繁昌はまさる成りとうち笑ひつゝ例のおどけ給ふに、夫れは道理ぞかし御店のみならず御あるじがら庭鳥のむれに鶴のうち交り給ふたぐひなればと僅にいへば、そは過賞ぞかしとて大笑し給ふ、人なきを見てつと御身ぢかくさし寄りつゝ何は置て御目にかゝることのいとはるかなるが口をしうこそ、何事もうき世に申合す人なき樣にて心ぼそさ堪がたしと言へば、何かは我などの御助けにも成る節あらんや、されどもしこゝに申ことありとも覺さば、此うら道のいとさびしく人めといふもののふつにあらねば此處より立寄給はんに誰かは見とがめ申べきことさゝやき給ふ、いでや其しのびたるたぐひを厭へばこ

そ、こゝにかく心くるしきをと言はまほしけれど申さず來りぬ、何も／＼殘したる樣にて別れぬる也。

十二月の七日　大人より文あり、朝日新聞にかねてのせたる小説こさふく風吏に一本にまとめて世に出さんとするを。いかで御歌一首めぐませ給はらずや、御都合にてしらぬ人のつもりにてもよく、又は御匿名にてもよし、これは參上願ふべき筈ながら例のはゞかりの關ある身中々御さわりにもやとて斯くはとあり、直にかへしたゝめて、歌は一首、よからねども林正元をよめるの成けり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し。

八日　ありし去歲をおもひ出るにまことに今日成けり、かの大人より俄かにいふべきことあり人前にてはいといひにくきを夜るなりとも參らせ給はらずや、御歸りは車にて送らすべしとありしに、母君中々にゆるし給ふべくもあらで。この早朝に平河町を訪ひにき、さしてのことにもあらで何かあやしきもの語りにほのめかし給ひしことありきなど、ふとかぞふる折しも龍田君參り給へり、かの歌のはし書をもとめ給ふ成けり、少しものがたりす、菓子など參らせたるを心よく喰ふ、ゆかりある人とおもへ

ば何方かにくかるべき、歸らんといふに母君菓子をつゝみて兄君のみやげにと出す、龍田君よりは我がよろこばしさ上もなかりき、かゝる折ふしのはかなごと中々にかひつけばやとおもへど、猶いさゝかは心地まぎるゝ様にてなん、あはれはかなしかし。

青木虎一
南佐久間町二丁目一番地

山下直一
さる樂町二丁目二番地河合直方

よもぎふにつ記　（二十五年十二月）

かけじとおもへど實に貧は諸道の妨成けり、すでに今年も師走の廿四日に成ぬ、こんとしのまうけ身のほど〳〵にはいそがるゝを、此月の始三枝君よりかりたるかねの今ははや殘り少なにて奥田の利金を拂はゞ誠に手拂ひに成ぬべし、何に何としてつくべき、家賃は何とせん歳暮の進物は何とせん、曉月夜の原稿料もいまだ手に入らず外に一錢入金の當もなきを、今日は稽古納めとて小石川に福引の催しいと心ぐるし、朝より立まじりて引當しはまどの月の折づめ成けり、家に歸れば國子待つけて、これ御覽ぜよ龍子樣より此お文只今參りぬ喜び給へとて見するははがきなり、來新年早々女學雜誌社より文學會といふ雜誌發兌に成らんとす、君に是非短編の小說かきて頂きたく彼社より賴まれて此御願と有けり、種々お物語もあれば御寸暇にて御入をと末にかゝれしかば直に返事書て、明後日參らんといふ、家にては斯く雜誌社などより賴まるゝ樣に成りしはもはや一事業の基かたまりしにおなじとて喜こばる、此ごろの早稻田文學に文學と糊口といふ一欄ありしを思ひ出れば面てあからむ業なり。

廿六日　早ひるにて番町にゆく、三宅君には始めて參るなれば何か土産持たずばなどいひしがいざや虚飾は無きこそよけれ、是れをしか〳〵咎め給はゞ哲學者の妻とはいはじと笑ひて行く、田邊君よりは一町斗手前にて女學雜誌社の通に少し引入りたる格子作りなり、向ひ合せに一二軒の隣あり、いはゞ裏屋めきたれど、座敷の數は十間ほどありて家のうちもさまで見にくからぬはおもひしより異成けり、志賀重昂君一あし先に有りて襖一重其方に三宅君と物がたる聲あり〳〵と聞ゆ、此處にもしきりに金を言ひて、五百圓何とやら宮崎が今必死なり、君何ほどとやらを出さば其餘は我何ともすべし、我れに手もとの無きは無論なれど、夫こそ何とかして才覺すべしといふは志賀君の樣なり、あるじは聲低からねど詞吃ればにや、よくも聞とれずと切れ〳〵のもの語り、窮鬼は何方をもおそふものかとをかし、龍子君は木綿の着初めを此處になして憂しとせぬ顏内心ほこる處あれば成るべし、志賀君歸られて後、三宅ぬしも我が席に來給ふ、彼れにこと葉なしこれに詞なし、初對面は窮窟なるものにて、はては困じて次の間に入られぬ、雜誌は女學雜誌社の北村透谷、星野天知子兩人の創立にて、はじめ葛衣と名付けしを文學會と改ためぬ、夫にはいはれありとて龍子君が異見の用

ひられしを語らる、我れに和歌の一團を受持くれよとの頼み成りしかば、もとより心る力も非らず且つは暇なきみの中々にうるさければ我一人ならば御免蒙り度し、今一人相役あらば兎も角もとて少し潛越成しが君の事をいひたるに、和歌は何方とも御心まかせ成るべく、一葉女史の事はしもかねて女學生に論じたる如くその妙想に感じ居れば是非小說の著作を依賴したく其方樣より依賴して給はれと星野君より手紙來たりぬ、其女學生の評は見給ひしやと問はる、否しらずと言へば龍子君もまだ見ず見度ものなり、兎角は是非かきて給はれかし、一ツは御名譽にも成り此のちのお爲にも成るべければなどいはる、三十一日までにとの約束にて暇乞して出しが、さりとては覺束なきこと成けらし。歸宅直に机に向ひて硯をならせど趣向中々にうかばず、いたづらに今日も暮れぬ。

廿七日　亡兄清光院祥月の命日なり、茶めし焚きて久保木の姉君をまねく、芝の兄君も來臨の筈成しが如何しけん來らず、上野の房藏、奥田の老人など來たりしかば是れを振舞ふ。金港堂の音づれいまだに非らず、さりとも明日は廿八日なり、餅つかせずばとて二圓斗あつらへぬ、是れは奥田に拂ふべき利金をしばし餅のかたに廻すべき

心づかひ成しなれども今宵この老人の來しに待てよと言はんも苦るしとて手よとにするほどを集めて二圓やる、さるはまだ二圓五十錢斗渡すべきながら夫れは利金ならずして元金の方なればしばしの猶豫を頼みて斯くはせしなり、扨も明日岡野より持こみし時何といはん、榛原へあつらへ置し醬油も酒も明日は來ん、其拂ひは何とせんとみ合す顏に吐息呑込むもつらし。奥田の老人いごとて歸らんとする時郵便とて屆きしは何、あわたゞしく見れば、藤陰隱士より曉月夜の原稿料明廿八日兩替町の編輯處にて御渡し申さん午前の内に參らせ給へとなり、自然は斯くも圓滑なるものか。

廿八日　夕べより野々宮君泊りて今朝もまだ歸らず。家にては餅つきの祝ひにする粉をこしらへんなど勝手に母君の手いそがし、我れも岡野やより持こむに先立て金港堂より金うけ取來たらんとて十時といふに家を出ぬ、野々宮君もさらば諸共にとて眞砂町まで伴ふ、伊東夏子ぬしにも借たる金あり、何時とかぎりの定めもなけれど我やりにては如何とて通り路なれば駿河臺に立寄りて其いひ譯をなす、彼方にも語ることいと多しといふ、我れよりもいふことあれど又こそとて別る、此處より車にて本兩替町の書籍會社にゆく、直に藤陰に會ひて曉月夜三十八枚の原稿料十一圓四十錢をう

けとる、十六斗の時成し、九十五の銀行に處用ありて此前を通りしに、洋服出立の若き男立派なる車に乘りて引こませしを見し時、天晴れ見ごとや彼れは大方若手の小說家などにて著作ものゝことに付き此家に出入する人なるべし、三寸の筆に本來の數寄を盡して人に尊まれ身にきらをかざり上もなき職業かなと思ひし愚かさよ、我れも辻車なれど美くしき毛皮の前掛に車夫が背縫ひの片かなもじ我が性かあらぬか知らぬ人のしることならねば、まして古ものなれど絹布の上下着て手に持つ頭巾の僅かに紺屋を口說きて覺束なしと斷られし染めを賴み、しんしの張りの出來がたければ家に只今火のしの力かりあぶらすとも、頭巾なしにて此寒天に見すぼらしければと母君の趣向の苦しがりとは人も知らじ、我れも昔しは思はざりし、此あさましき文學者家に歸りし時は餅も共に來たりぬ、酒も來たりぬ、醬油も一樽來たりぬ、拂ひは出來たり、和風家の內に吹くこそさてもはかなき、いざとて午後より師君へ歲暮に趣く、中村君より我れへの歲暮に帶上げのちりめんを送られしとて取次がる、師に賴まれて小出君に歲暮もの持ゆく、歸路かねての心組に曉月夜の原稿料十圓のつもり成しをおもふに越えたれば、彼の稻葉のほなみ風にもまれて枯々なるも哀なるに、昔しは我れも睦びし人の

是れよりは何ごとも賴まねど流石に仇の間には非らず、理を押せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の言はゞ姉ともいふべきを、いでや嘉びは諸共にとて柳町の裏やに貧苦の體を見舞ひて金子少し歳暮にやる、昔しは三千石の姫と呼ばれて白き肌に綾羅を斷たざりし人の髮は唯かれのゝ薄の樣にていつ取あげけん油氣もあらず、袖無しの羽織見すぼらしげに着て、流石に我れを耻ぢればにやうつむき勝に、さてお見苦るしき住居にて茶を參らせんも中々に無禮なればとて打詫るぞことに涙の種なり、疊は六疊斗にて切れもきれたり唯わらごみの樣なるに、障子は一處として紙の續きたる處もなく、見し昔しの形見と殘るものは卯の毛におく露ほどもなし、夜具蒲團もなかるべし、手道具もなかるべし、淺ましき形の火桶に土瓶かけて小鍋だての面かげ何處にかある、あるじは是れより仕事に出る處とて筒袖の法被肌寒げにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居るもはかなし、正朔君の我が土産を喜こびて紅葉の樣なる手に持しまゝ少時も放たず、御佛前に御覽に入給へと母君に言はれて佛だんめきたる處に備ふ、何事も時世にて又めぐり來る春もあらんを正朔君だにかくてあらば夢力を落し給ふな、かよはき御身に胸をいためて病氣などを起し給はゞ夫こそ取かへ

しのあることならねばとて慰むるに、聞き給へ此子の成長くならば陸軍の技師に成りて銀行よりいくらも金を持ち來りて父も母も安樂にすぐさせんと常々威張りて申すことゝ流石に賴もし氣に笑みて語る、又こそとて此家を出れば夕風袂に吹きて大路すでに闇く成ぬ。

廿九卅の兩日必死と著作に從事す、曉がたしばしまどろむのみにて一意に三十一日までに間に合せんとするほどいと苦るし、三十日には上野の伯父君歲暮にとて參られぬ、一日筆をとること叶はずして暮しき、其夜十一時まで燈下にありしが國子しばしば我れを諫めて名譽もほまれも命ありてにこそ斯くまでに腦をつかひ心を勞して煩ひ給はゞ何とかすべき、見る目もいと苦るしきに何卒これは斷りてもはや今宵に休み給へとくり返しいさむ、實に夫も道理なりとて筆をさしおけば、心共につかれて俄に睡くさへ成ぬ。

卅一日　早朝三宅君に斷りのはがきを出す、一日家の中を掃除などして日沒前に何ごともなし終りたり、いざとて國子と共に買物がてら下町の景氣見に行く、本鄕通りより明神坂を下り多町にものを買ひて小川町の景氣を眺め、三崎町に半井君の店先を

眺めぬ、年わかき女の美くしく髪などもかざりて下女にては有るまじき振舞は大方大人の妻君なるべしと國子のかたる、大阪の例の富豪家の娘大人に熱心ふかしと聞きしが持參金にて嫁入せしにあらずや。扨もいかに働きある人とてこれほどの店無手にて成るべきならねば出金の穴何方にかあるべきは定なり、世は斯かる物とうめきて歸路富坂下に國子ものをひらふ、いとのどかなる大晦日にて母君家を持ちし以來この暮ほど樂に心を持しことなしとていたく喜こばる、九時といふに表をとざして寝たり。

廿六年の一月一日　はいとのどかなる日かげにあらはれて、門松のみどり千歳といはひて例の雜煮もたべ終りぬ、昔しは元三のほど年頭客に勝手元の暇なく羽根つく間もあらずと恨みしが、引かはりて更に來る人もなし、母君近傍に年禮廻りをなし給へば、彼方よりも老母、内室など答禮はすべて女なりけり、芦澤芳太郎早朝より來る、陸軍にて賜はりし料理を持參す、一日遊びて三時ごろ營中にかへりぬ、今日年始狀のとゞきしは野尻理作、穴澤小三郎、山下信忠の人々なり、これより出せしは十五軒斗成き。

二日　もいと長閑し、三枝、藤林、山下、安達など親類めきたる年頭客あり、兄君

も來らる、久保木の姉君を呼びて此夜歌留多の催しいとにぎやかなり、姉君は三十七兄君廿八、我は廿二、國子廿いづれも子供にてすむまじき年輩なるを、打寄れば斯くまでおさなきかとて母君炬燵に寄り居て見給ふさま何事の憂きもあるまじく樂しげなるが勿體なくうれし、ことにまぎれてかき殘しぬ稻葉の正朔君も年禮とて今日遊びに來たりしなり。

三日　田中みの子君年頭に來る。

四日　大島みどり子君來る。

八日　にはじめて年頭に出る、猿樂町藤本君、西小川町大島君、下二番町にて田邊君、三宅君、歸路師の君に參る、車夫が廻り順のかゝる都合成しなり、田中君にも參るべき心組成しを三宅君のもとにて逢ひて、今日は留守なるにおなじくは又の日といふ、三宅君と共にしばし語る、文學界の小說是非出し給はれ、初號は廿日に發行のはづなれどこれに間に合はずば二號にてもよし、是非にといふ、少しかたりて別れたり去歲のこの日は半井ぬしを平河町に訪ひて逢はず、小田君のもとに行、かくれ家に行こゝろあわたゞしかりしを思ひ出るに、何ごとゝはなしに胸いとくるほし、昨是今非

の世、今日にあしたの何なるべきか、思へば喜憂は無差別なり。

十三日　の夜宮塚ぬし來訪、上海に趣きしは五年の前なり、昔しながらの物がたりに懷舊のおもひたえがたし、羽根つきて共に遊びし春は君が十七の頃なりし、さても變りにける身哉、かゝれとてしもおもはざりしを、涙たゞこぼれにこぼれて戀しきはそのいにしへなりけり。

十四日　小石川稽古はじめなり、風流の俗事少し斗の點取に暮して、日沒後かへる。

十五日　上野の清次母と共に來る、菊池の武治母と共に來る、田部井の清三父と共に來る、榊原家の少孃乳母と共に來る、これは中島師のもとに仕へたる女の今は榊原家にあるなり。

十六日　早朝秀太郎藪入に來たりて我家にも寄る、西村君來訪、ひる飯を馳走す。

十七日　龍子ぬしのもとより文學界に出す小說うながし來るいとものうし。

十八日　芝兄君に文を出す、議會傍聽券のことにつきてなり。

下院議會は昨十七日河野廣中君發議により政府の反省を求むる爲自ら五日間の休會

と決しぬ、そは豫算案の政府に容れられざりしに依れり、廿三日の開會こそ天下分めなれ、議會解散せらるべきか、內閣大臣總辭職に致らんか、この所いと六ッかし、こゝ兩三日間市中警戒嚴敷よし。

廿日　兄君に廿三日の傍聽券を送る、西村君を依賴なして飯村丈三郎君より貰ひたるなり。此夜までに小說雪の日したゝめ終る。

廿一日　小石川稽古なり、午前より行く、小說雪の日今日は郵便に托して三宅君に送る、師君は錦輝館に何某君の初會ありて趣き給ふ、我れは人々に手ならひなどをしへて、日沒ごろ歸る。

廿二日　藤本君を猿樂町に訪ふ、都の花のかりたるをかへし更に又其あとをかり來る。今後の著作につきてしばし物がたる、此日野々宮君、吉田君來訪、野々宮君は一度岩手に歸りて又今日來たられしなり、着京直になりとて行李など携へたり、結婚の事などにやとかたぶかれぬ、みちのくよりなりとて雉子のくを一羽送らる、此日西北の風いとはげしきに此人々歸りし後淺草より出火あり、西鳥越とか聞くに三枝君は如何など一同心をなやます。

廿三日　晴天。母君小林君に金かりに行給ふ、菊池君の老母來訪、新年はじめてなれば有合せにて酒を出す、母君一寸立かへりて直に三枝に火事見舞にと趣く、か成の大火にて百何十戸とか燒たれど三枝にはこともなかりし、この火事に又鳥越座も烏有に成りぬ、此夜新聞號外かしましく賣來る、我が改進新聞も號外を發しぬ、議會は停會に成ぬるなり。

廿三日より向ふ十五日間二月の六日までなり。

廿五日　雪ふる、いさゝかづゝはしば〳〵降りしがつもるほどなるは今日ぞ初雪成ける、中村禮子ぬしのもとに數よみの催しある日なれど此頃は歌にいたく心も入らず人々とものがたりなどするがいと物うければ物にかこつけて斷りしが、此雪にて他の人々も來會しけんか如何になど流石に思ひやらる、三寸斗はつもりけるなり、樹々の姿大路のさまいとおもしろし、四時ごろには降やみけり。

廿八日　小石川稽古なり、正午よりゆく、伊東君教會のことにつきて少しものがたりあり、中村君のもとに聞たることゝて怪しき言葉をいひ聞かせられしが其心よくわからず、師君は養子のこと取定まりて今日は其方へとて稽古後直に支度し給ふ、此處

すべて書つゞくべきにあらず。

廿九日　曉より雪ふる、今日はさきの日のにも增りて勢ひよく降りに降る、芦澤來る、今日は九段に大村卿の銅像落成式あるべきながら此雪故延に成しなど語る、安部川もちなどこしらへて打よりてくふほどに、いや降しきる雪つもりにつもりて芦澤歸宅ごろには五寸にも成りぬ、日沒少し前にやみぬるなり、夜いたう更けて雨だりのおとの聞ゆるは雪のとくるにやとねやの戶をして見出せば、庭もまがきもたゞしろかねの砂子をしきたるやうにきら／＼敷、見渡しの右京山たゞこゝもとに浮出たらん樣にて夜目ともいはずいとしるく見ゆるは月に成ぬる成るべし、こゝら思ふことをみながら捨てゝ有無の境をはなれんと思ふ身に猶しのびがたきは此雪のけしきなり、とさまかうさまに思ひつゞくるほど胸のうち熱して堪がたければやをらをりて雪をたなぞこにすくはんとすれば我がかげ落てあり／＼と見ゆ、月はわが軒の上にのぼりて閨ながらは見えざりしぞかし、空はたゞみがける鏡の樣にて星斗の影もとゞめず、何方まで照るらん、そゞろに詠むるもさびし。

降る雪にうもれもやらでみし人の

おもかげうかぶ月ぞかなしき

わがおもひなど降ゆきのつもりけん

つひにとくべき中にもあらぬを

三十日　淺みどりの空に村鳥の囀づりいとのどかなり、家々に雪かきすとてわらべなどのはしりさわぐもいとをかしげなり、この隣なる處にわかき娘二人ある家あり、その軒並びにやもめなる男のすめるが常に追從しありきてこの雪などをも唯かきにかく、この娘も共に立出てをかし氣にものかたらひうち笑ひなどしつゝかたはらいたきまでに睦つるゝは哀れ歎きの種をまかんとするにや、人ごとながらにいとあさまし。

二月三日　母君上野に年頭として趣き給ふ。

四日　佐藤梅吉へ同じく、この夜姉君誘ひて母君を寄席に伴ふ。

五日　梅吉より母君を誘ひて共に水天宮に參詣を爲す、歸路うなぎの馳走に成りしとて母君よろこび給ふ、此日日曜なればあし澤來る。

『戀はあさましきもの成けれ、心をつくし身をつくして成りぬべき中ならばこそあらめ、この戀成るまじき物と我からさだめてさても猶わすれがたく、ぬば玉の夢うつゝ

おもひわづらふらんよ、もとよりその人の目はな、おとがひさては手あしの何方におもひつきたりともなく、手かき文つゞる類ひ、ものいひ聲づかひ、たてたる心いづくいづくといふべきにも非らず、たゞ其人のこひしきなれば、常に我がおもふにも違ひてひとつ／＼にいへば戀しき處もあらじかし、ものゝ心なくあさはかなる人は一時の戀に身をあやまつたぐひ、かゝる所にこそおこれ、少しものおもひしりて靜まりたるはこの戀にまけじとすまひて、身の中はたゞもえる樣にこがるゝも心地はしぬべくおづらふも猶ま事の迷ひには入らでつひに夢の覺めぬるもあり、女などは心のほそきものなればあらそひまけて狂氣がるたぐひもあめり。されどこれは横さまなる戀にて、誠のつま女といはんに是ほどの中ならましかばいかゞは人もうらやみ世のほめものにも成らぬことか、貞女節婦などいへるはかうやうなる心を中にふくみて人のよのつとめをおもてにせし成るべし、親子の中か君と臣の間いづ方にも此心のあらまほしきをものゝ端にはしりては片おもりするものにて、したがひては害に成りぬることもぞある。この頃見る處開くところあるまじき人にあるまじき行ひなどの交るらんよ猶この類ひにておなじうはまめやかなる道にともなひまほしきを。」

六日　空はくもれり又雨なるべしと人々いふ、著作のことこゝろのまゝにならず、かしらはたゞいたみに痛みて何事の思慮もみなきえたり、こゝろざすは完全無瑕の一美人をつくらんの外なく、目をとぢて壁にむかひ、耳をふさぎて机に寄り、幽玄の間に理想の美人をもとめんとすれば、天地みなくらく成りてそのうつくしき花の姿もその愛らしきびんがの聲も心のかゞみにうつりきたらず、からく見とむれば紫は朱をうばひ白は黒にうつり表には裏あり善には悪ともなひわが筆によそほひて世にともなふべきあたひなく、しば／＼うれひしば／＼うらみかしこをけづりこゝをそぎやゝわが心にみてりとおもへば黒のうせぬる時しろもうせ悪をしりぞけし時に善も又みえず成りぬ、かくまでに我戀わぶる美人はまさしく世の中にあり得べからざるか、もしは我れに宿世の縁なくして凡俗の花紅葉ならでは我心の目にうつらざるか、もしは天地の間に誠の美といふものあらざるか、もしは我が眼に美ならずとみるものまことの美かもしは天地の自然が則ち美か、もしは誠の美といふもの描くべきものならず筆すべきものならず口にも心にもつくしがたきものにて、天地の間にみち／＼たる空氣の眼にも見えず手にも取りがたくしてしかもこれあればこそ世に生るがごとく、斯く我がい

ふも則ち美か、人の見る目則ち美か、我が惡と見とめて筆にしたるをも又ある人は善と見るか、さらば我が惡とみとむるもの則ち美成るべし、おもひ〳〵て心は天地の間をかけめぐり、身は苦惱の汗しとゞに成りぬ、思慮につかれてはひる猶夢の如く、覺めたりとも覺えず眠れりとも覺えず、さしも求むる美の本體まさしくありぬべきものともなかるべきものとも定かに見とむるは何時の曉かも、我れは營利の爲に筆をとるかさらば何が故にかくまでにおもひをこらす、得る所は文字の數四百をもて三十錢にあたひせんのみ、家は貧苦せまりにせまりて口に魚肉をくらはず、身に新衣をつけず、老たる母あり妹あり、一日一夜やすらかなる暇なけれど、こゝろのほかに文をうることのなげかはしさ、いたづらにかみくだく筆のさやの哀れうしやよの中。

二月七日　晴に成ぬ。一日机に寄くらして日沒より摩利支天に參詣し、萩野ぬしのもとに新聞をかりぬ、今日は議會開會の日なり、模樣いかになど人々いふめる、歸路切通し坂のあたりけしきいふべくもあらず、何よりも高きは號外賣くる新聞賣子の聲さてはそこ〳〵の辻にたちて壯士とかいふ樣なる人の今の世のさまを文につくりて鐵石心とかあやしきふしつけてうたふらんよ、郵便局の燈かゞやきて脚夫の行來繊る

よりしげく、電話交換所のいそがはしげなる警察に出入る人の二重廻し深々とゑりを立てしは探偵と覺しく、金ぼたん角帽子の二人三人づれに立入る寄席は女義太夫なり身なりいでたち斗は何方の姫奥方かと覺ゆる人の夫にはあるまじき人に手を取られてをかしげにものがたり行ことばを聞けば、みそこしさげて豆腐屋にはしるそれめきたり、文明開化か百鬼夜行か、筆こゝろにしたがはゞ材料は山ともいふべし、家に歸りつきし時に我新聞も號外來たれり、議會は解散にもあらず內閣總辭職にもあらず、無期停會に成ぬるなり、伊藤首相病後はじめての出席に例のなめらかなる言豐かなる姿よく上下を說き又さとし、此おだやかなるおさまりには成りぬ、此夜朝日新聞の小說五十回斗のものよむ、我が桃水師のものありけり、雪達摩とてたんてい小說なりき。十二時斗床に入りにき。

八日　空くもれりいと寒し、炬燵を昨日よりやめになせしかば、一しほに寒し。

九日　起出でみれば空ははれたれど垣根のもと草の葉のうへしろ〴〵と雪をいただきぬ、むべこそ夜の間の寒かりきなどかたる、朝の間しばし小說のこと國子とかたる風少しあれど今日はあたゝかなり、いでやつとめて今十日斗の間にこの一小說つゞり

終らばやとおもふ、金港堂よりの注文に歌よむ人の優美なるを出し給へといふこそはいとくるしけれ、さしも其社會にたち交りてあさましくいとはしきことを見聞きなれぬる身には、歌よむ人とさへいへばみだりがはしくねぢけたる人の樣におもはれて、誠のみやびなるをかゝんとせば人しらぬむぐらやに世をせばめたるなどをこそ引出で來つべけれ、玉だれの奥にうちしめりかひゝそまりたる令姫などにも歌よむ人なしといひがたけれどそれらはすべて我眼にうつり來らずかし、さてもならはしのさり難きをこれにしれば敎へといふものゝゆるかせになしがたきは道理ぞかし、心をあらひ目をぬぐひて誠の天地を見出んことこそ筆とるものゝ本意なれ、いさゝかの井のうちにひそまりてこれより外に世はなしとさとりがほなるを人より見んにいか斗をかしからめ、我もそのたぐひにて我ながらしもをかしきを此眼ひらきがたきは其ならひ性と成りしぞかし、やみぬべき哉。

敷島のうたのあらす田あれぬれどにごらぬかたもあるべきものを

こは歌にはあらずかし。

この日午後塙道忠來る、兄君の代理になり、少時ものがたりす。

十日　晴なり、やう〳〵腹稿だけは成ぬるに今日より筆を下ろさんとす、午前のうちなすことありて遊びたり。

十一日　小石川稽古にゆく、あらたに入門の人二人三人あり、渡瀨よね子、坪内何某、白根何某とか聞けり、この人々に習字をしへなどす、三宅龍子ぬし來る、文學界の初號郵送申べきながら怠りにけり廿六日の發會まで ゆるし給へなどいふ、顏并びは誰々なりやと問へば、初號は透谷などやうの人にて格別におもしろくも非ず、二號の豫告を見れば大和田建樹、井上通泰などの諸大家に我れと君との名前のり居たり、君の雪の日は例の出來よりわろき樣におもへど世の評はいかなるかしらずといふ、我もしか思ひしことなり、されどそは腦の仕業にて我が罪には非らずと笑ふ、龍子ぬし今日は御徒町の會堂に岩本善次君の父君と會葬するなりといふ、空色濱ちりの裾もやうに同じ色あられ小紋の二枚した着きて、帶はゑび茶繻珍、羽織は小豆色なゝ子なりけり、かき鼠の地に八重櫻二輪ばかり水色の糸に縫ひて、景色斗金絲の入りたる繻袢のゑり見えぬ斗甲斐絹の首まき深くなしゝは咽になやみ處ありとてなり、髮は何のかざりもなく英吉利むすびとかに束かねて、打見には十六七とのみ見ゆめり、はじめより人

とは異なりたる人なりしが三宅ぬしがりとつぎてよりいとゞしく異樣をまねぶか、何としてもつねの人とは覺えられず、此きるものもたゞ引あげに引あげてきしかば腰のあたりたぐまりて唯大きなる袋をまとひつけたる樣なり、みの子ぬし詞をつくして見ぐるし着かへ給へと切にいふに、我も傍よりそゝのかせば、うち笑みつゝさらば母樣の仰せにしたがはんとて田中ぬしに支度しかへてもらふ、我れと伊東ぬしと左右にありてそを見つゝこゝはかくせし方よしなど詞をそゆれば、あなかしましいひ給ふな、お筆を取りては樋口夏子樣お上手なれど、御身みづからのよそほひは我と姉妹の間ぞかし、かにかくとの給ひながら我姿を胸中の鏡にうつして谷田の醜婦はあの景狀をかくべし、腰のほとりに浮袋をつけてなどゝ今繪樣まで考へて居給ふべしと笑へば、我も人もたえずして笑ふ、おそく成るべしおそく成るべしさらばさらばとて馳せ出す時に、二つ三つかしらを下げしが一同への挨拶なりしが、あとは大風の後の樣にて俄に淋しくさへ成りぬ。中村禮子ぬし十六日に歌留多とりをなせば參り給ひてんやといふ、いかゞかむつかしからんと答へれば、君は我家を嫌ひ給ふにこそとてむつかる、かずよみの連中四五人殘らず參んとて約束なりにき、一同家に歸りしは四時なり。ま

こと江崎まき子ぬし昨日出産あり女子なりしとて報のありしなり。此夜國子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしていと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗みえしと國子のかたるに、

　　みるめなきうらみはおきてよる波の
　　　　たゞこゝよりぞたちかへらまし

いとおろか成りや、人にいふべきにもあらぬを。九段に行きし頃はるか南の空ほの〴〵赤く闇をこがしてやう〳〵濃くなるは火事成るべし、小川町にくる頃人々さわぎ立ちて此風にてはかならず大火に成るべしといふ、交番處につきて電報を見れば本芝四丁目邊よりなり、あやしきは去歳の天長節に國子と二人九段に遊びて其かへるさこのほとりにて錦町よりの火事に逢ひし、さぞは母君の案じおはすらめいそがんにはとてかけ出す、小川町より萬代橋をへて明神坂に母君の土産にあめをかふ、こは母君の好物の一ツにてしかも何處のよりこゝのを好み給へばなり、歸るさはいよ〳〵風吹あれておもてをむくる方もなく、露店などは大方ともし火を吹消されてうちつぶやきつゝ家路にいそぐめり、殘れるも買人なければそゞろ寒げにうちしほれてほと〳〵泣き

も出しぬべく見ゆ、家に歸るまで火事はたゞもえにもゆるとみえしが程なくしめりためる。

よもぎふ日記（二月）

二月十三日　よべよりの寒氣いとはげし、寒暖計は零度以上五度に成ぬ、我がまだしらぬ寒さなり、手あらひなどはあつき湯をそゝぎ入にたれども猶氷とけず、それにならひてもの皆その如し、仕かけ置し米のたゞこほりに氷りて桶より出すこと難く、これにも湯をそゝぎてやう／＼にとかしぬ、十時に成ては寒暖計廿度にのぼりしなり。

十四日　母君小林君に用事ありて行、この日も朝のまは寒暖計七度斗なりし。

十五日　少しゆるびたり、起出て見るに霜も少なく今日は廿一度なりとて一同よろこぶ、今日の新聞に歐羅巴各洲もまれなる寒氣にて全市みな氷にとざゝれたるも有よし。

衆議院上奏につきてかしこき詔勅の下りしは十日の日成りき、さるは其内廷の費を減じさせ給ひて六ヶ年の間三十萬圓づゝを年ごとに、軍艦製造費のうちに下させ給はんの御ことのりに誰かは涙をふるひて喜ばざらん、貴族院議員曾我中將こゝに其歳費

四分の一をもて献金の徴意を表さんとて緊急問題として議場に提出せられぬ、鳥尾中將これに不同意のかどありとて席をけつて退場し、谷將軍怒つて悲痛の詞を吐くなどことおだやかならざりしは十三日の議會なり、說に依りて遂に歲費十分ノ一をもて献金すべきことに議決せられしは昨日なりとぞ、或る草ふかき處に住む人こぶしを握りてなげくこと有りしとか。

このひのこと少ししるす。

十四日　衆議院議員宮城浩藏君死去。

十三日　淺草吉野町剛欲婆平澤ひな斬殺せらる。

十日頃　奥州酒田の豪族泉何某等數人相馬樓と呼ぶかし席に宮中御宴をまねびたる大不敬の所爲あり。

十四日　の新聞。

千島艦の處在たしかにしれる。

落花枝に返らず破鏡再度てらさず四大破れて五蘊空に歸す魂魄天地に消散して冥々

朦々たり、今汝何に依りてか此世に執着を止めんや、一心の迷妄に引かれて永く地獄に墜落し、剉焼舂磨のくるしみを受けんや、速に惡念を去て成佛得脫をとげよ、則ち汝を法通妙心院女と名付く、喝。

十七日　早朝地震あり、これより天氣くもる。午後一時頃湯島四丁目より失火直に消たり、西村君來訪、六時ころ歸宅す、雨降出づ、九時過る頃近邊失火の模樣あり、雨はしのをつく樣なるに立出てみれど何方成しか此夜は分らず。

十八日　雨やみて風吹き出づ、姉君來訪、母君血の道にてけしきすぐれず。

十九日　小石川稽古を休む。

廿日　安達盛貞君病ひあやふしと聞くに國子と共に見舞に行く、誠に此度こそは限りと見えたり、人がらおもしろからで常はさのみ親しくもせざるものから見るまゝに涙ぐまれて哀れ今しばし生かせまほしとぞ歎かれぬ、かゝるを見るにも老たる親を持つ身はともに悲し、枝靜かならんとせば風のやまざる樣に、養はんとおもふ親の世を早くなどなさば天地を恨みて甲斐のあるべきならず、さまざまにおもふほどいと胸いたし。この日望月來る、日曜なれば芦澤も來る。

廿二日　晴天。日沒近きころ都の花來る、百號にて一度とゞむべきよしに聞きたるに組織かはりて更に百壹號を出せしなるべし、表紙は薄紫の紙に桃櫻の畫樣も中々によし、我曉月夜これにのせて永洗がさし畫花々しく藤陰ぬしが口上に我が上ことごと敷かゝれたるも面ほてりする業なり。

廿三日　晴天。中島師君發會につきて問合せなし度よしにて榊原家より使者到來すつね姫君が侍女にて常に小石川へも供する人成しが、母君初對面し給ふとて立出るにやゝと驚きてあなた成しか〳〵存せざりしことよといふ、母君は老眼のたど〳〵しければ誰樣なりしや忘れぬといふに、これは其昔し安達ぬしがもとに千代子が侍女として仕へたりし女なりといふ、我も常に見しる長とかいふ大工の妹なり、緣は蛛の圍のめぐり〳〵しものなり、さればこそ天網粗なりとて罪せし罪ののがれ難きはや、こゝに話しの口とけて樣々のものがたりいと多し、此人歸りて午後姉君來訪、時候あたりにや、心地すぐれずといふに茶菓子の馳走などをなす、日沒後とさしかためてみなみな火桶のもとに寄つどひつゝ物がたりするほどに、門のとほと〳〵とたゝきて音なふ人あり、日暮て訪ふ人ありとも覺えぬを聞きたがへかと耳そばだつれば誠に我が家な

り、誰樣やと家のうちより問へば、半井にこそ候へ夜に入て無禮なれどといふに、其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん樣に成ておもひかけずたゞ夢とのみあきれにけり、立出て門のと開けて例のもの靜かに立入る姿うれしなどはしばし心地さだまりての後こそ、何事も靄の中にさまよふ樣なり、明ぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露はすれたるひまなく夢うつゝ身をはなれぬ人のいとゞ此一日二日空にまたれて訪ひ訪はるべき中にもあらぬをあやしう人づての便りもがな、せめては文にても見まほしきをなど人にいはれぬ物をおもへば幾度かどに出で立つくし、あらぬ郵便にたばかられて心耻かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覺えず問ふべき事も忘れて、面ほてりのみいと堪がたし、君しづかに口を開きてうち絶參らせし疎縁の罪はおのづから見ゆるし給へ、年頭の狀給はりしに其かへしも參らせず去歲より風邪を病みて新年に成りては久しう湯治になど遊びしものから思つゝ斯くはなど詫給ふ、去歲給はりし御歌の御禮ながら胡沙ふく風の製本せしを御覽にもそなへ度、夫故にこそ、書肆の欲ばりて賣かたにはいと早く廻すなるを作者のもとには中々に送りもこさず、漸く我が手に廻りければとて胡沙吹く風上下二卷賜ふ、表紙美麗にして書樣も美事に中

中の大部なり、前編の題字は朝鮮の忠士朴永孝、詩は衣州逸人とか君が知己なるべし我が參らせたるは晴々しく口畫の前にありて、林正元が肖像とは並びける、素園主人が文、うしがはしがき、卷末には愛讀者より送られたる詩文章の類多くのせたり、無名氏寄せられたる詩の内に、

背期海外擧奇勳　鐵鈒芒鞋意氣振
不穢素心歸落莫　一篇偉作表前身

たるそゞろに其昔し思はれて、ともし火のかげよりかすかに面を仰げば優然としてうち笑みたる面ざし、まこと林正元今こゝに出現したらん樣なり、我が小說曉月夜いつのほどにか見給ひけん、こまやかに物がたらる、猶折ふしに目とゞめ給ふらん嬉しさいとかなし、ことにものがたることも多からでさらばとたつを止め參らせんも中々にて送り出るほどかなしともかなし、嬉しともうしとも いはんかたぞなき、夢うつゝともえこそ分ねばいはまほしき事も何もたゞひたすらにものも覺えず。

胡沙ふく風は朝鮮小說にて百五十回の長編なり、桃水うしもとより文章粗にして華麗と幽邃とをかき給へり、又みづからも文に勉むる所なく、ひたすら趣向意匠をのみ

尊び給ふと見へたり、なれども林正元の智勇、香蘭の節操、青陽の苦節ともにいさゝかもそこなはれたる所なく、見るまゝに喜ぶべきは喜ばれ、歎くべきには涙こぼれにこぼれぬ、さるは編中の人物活動するにはあらで、我が心の奥にあやつるものあればなるべし、田中みのこぬしは學ふかゝらず識も又高からざる人なれど胡沙ふく風につきて批難し給ふ所あまた有し、そも當れる説にはあらざりけめど、とまれ完美の作にはあらざるべし、いでよしや、此小説うき世の捨ものにて人の爲には半文のあたひあらずともよし、我が爲生粹の友これを置て外に何かはあらん、孤燈かげほそく暗雨まどを打つの夜人しらぬおもひをこまやかに語りてはゞかる所なくなげきもし悦もせんはうつせみのよにもとめて得がたき所ぞかし、此夜此書をひもとひて曉の鐘ひとり聞けり、引とめんそでならなくにあかつきの別れかなしくものをこそおもへ、晝はしばし別れんにこそ。

萩の舍の發會は廿六日なり、ものうき事かさなればえ行かじともおもへりしを猶世の中にたちまじる身なりとおもひかへしてゆく、人は午後よりなれど例もかく午前より手傳ふ成けり、小石川に師のもとをとひて諸共に車つらねて行く、しばしあり

て田中ぬしも參られたり、うるさきものがたりに耳もふさがまほしきをからうじて聞き過せば、やがて人なき處に我を呼びすゑてみの子ぬしいとしめやかに師の上をかたる、例のことながらいと心ぐるし、夏子ぬし參られてよりのさま〴〵其のぶ子ぬしより我にたのみの詞など、あれを聞くもこれを聞くも憂さ堪がたし、榊原、小笠原、水野、中牟田などの令姫たち花をかざりて今日を晴と出たちたるいと罪なしかし、上をよそふて花見哉と故人のさとりをかしけれど、獨うるはしきはうるはしきものなり、三宅ぬし參らる、星野天知子よりの書狀文學界一號と共に送らる、筆墨料送られたるに返事書て給はれとこはれてかく、我がことをつむじまがりの女史と言ひしとか雄次郎君たはむれにまことかと龍子ぬしに問ひ給ひしかば、いつもいてふがへしののらざることなければ其處分たずとて笑ひしとかや。

散會は六時成し、天知子よりの文はいとねんごろにて力まけせしかと我上こと〴〵しげに察したるいとをかし、文學界にも若松、花圃、一葉の諸名媛とか書かれたる、實よりは名のすぐれたる世の中、誠の名姬の爲いと口をし、この夜早く臥したり。

廿七日　三枝君に文を出す、そは返金約に違ひしを詫びたるなり。ひる頃より雪ふ

り出づ、萬感こゝに生じて散亂の心ことに靜めがたし。我が雪の日をめづるはめづるにはあらでかなしむなりけり。かの火桶をはさみてものがたりのどかに手づから調理し賜はりししるこの昔し、戀も悟もかの雪の日なればぞかし。

廿一日　この日も少し雪ふる、腦の痛みたえがたくして一日うち臥したり、芝より兄君の使ひとして道忠來る、久保木依賴の單物出來あがりしかば持參したるなり。野々宮君より書狀來る。

三月一日　晴天。腦のなやみ猶さりやらぬに日たくるまで朝いしたり、起出て後胡沙吹風後編少しよむ。

福島少佐遠征のあと判然せずといふ變報あり誠か否かいとあやぶし。

昨夜澁谷ぬしを夢む。

京都山崎君より書狀あり。

二日　圖書館に書物見に行、產婆生にて稻垣しげと呼ぶ婦人にあふ、我隣家なる加藤なみ子が友なるよし、奇談あり、御伽婢子十册斗よみて歸る、此夜久保木姉君來たる、ひし餅到來し、北海道關場えつ子君より文あり。

三日　晴天。久保木姉君金子かりに來る、山田武甫君の葬儀は一昨日成けり。此夜國子と共に十軒店に雛市を見る。

四日　小石川稽古を休む、午後より雨ふる、大工の長來る。

五日　晴天あたゝけし、鶯の初音聞えそめしもをかし、所どころの梅咲ぬらんかしうもれ木の身にも流石に春のたよりはにくからぬかなどうちつぶやかれぬ、小說ひとつ松今日より筆とり初めんとす、大工のせがれ賴みごとありて來る、野々宮君に返事かく、芦澤芳太郎來る。

六日　早朝、地震す、風ふき出づいと寒し。奥田老人來る、同人を送りがてら本鄕通りを散歩少しして原稿紙かひ來る、野々宮菊子ぬしより又はがき來る、我が返事と行ちがひたるなるべし。久保木あそびに來る。小說著作に夜をふかして二時過る頃床に入りたり。

七日　晴天。七時に起出づ、河野大臣辭表を呈したるよし、內閣大臣某々の人々留任をしきりに進むるも斷然の決心動かしがたきかも、自から官邸を引拂ひて今川小路の自宅に移轉されしとか、伊東書記官の權勢、伊藤總理の艶聞いとをかし、國會議員

狩野傑一郎君病歿の報あり、久保木姉君來る、大工のせがれ來る、蟬表のしんを持來りしなり。

午後新聞號外來る、河野文相さり、井上樞密これに替りしなり、猶山縣司法大臣辭表を呈したるやの風說もあり、英公使河瀨君後任たるべしなどありけり。

おもふ人の難をすくひ、又我が厄をのがれて、靈鷲の山月よるふかき所ふみしだく草葉の露にかへふたつ落ちてたづさへし文の名殘いか斗うれしかりけん、いか斗かなしかりけん、されどつひの世を其人にかはりていさぎよき終りは本望成けんかし。

はかなきにをもひゆるしてしら露の
哀れ玉よと君みましかば

胡さ吹く風のうち香蘭をよめる、

うら山し霜に雪にも色かへで
おのれみどりの庭の姫松

林正元はわが日のもとの人と聞くに、

朝日さすわが敷島の山櫻

あはれか斗咲かせてしがな

八日　晴天、寒し。

九日　母君菊池君にまねかれ給ふ、東園翁五年祭なり。

十一日　夜號外來る、山縣司法大臣依願免官、樞密院議長に任ぜられ、農商務次官西村捨三君免官、文部次官久保田讓君おなじく、知事牧野伸顯君文部次官に任ぜられたり、司法大臣は伊藤首相これをかねらるなりけり。

十二日　晴天。福島小佐浦鹽斯德を去る五百里の地に無事着されたるよし電報ありといふ、いとめで度ことなりかし。日曜なれば芦澤芳太郎並に藤林芳藏來る、午後まで兩人とも遊ぶ、今宵國子と共に藥師の緣日そゞろありきす。夜に入りて失火あり。何方成けん。

我が家は細道一つ隔て上通りの商人どもの勝手とむかひ合居たり、されば口さがなきものどもが常にいひかわすまさなごとゞもいとよく聞ゆるに、今日しもとあることの序に華主先のものがたりすとてふと言ひたることに國子耳とゞむれば、かの大人があたりのことにぞ似たる、主めきたる人二人三人あればいづれが夫なるや分らねど、

色しろくたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や何や知らずおもざしなどさしても美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言いひつるに、左なまが〳〵しく商人なしかりそとて其まゝの價ひに買とりてくれたるはわかりし人成し、家は三崎町のはづれにて店がまへ立派なる葉茶屋なりといひ居たるよし、かの大人に逢ひはあらじなど國子かたるに、忘れぬものを又さらにおもひ出ていと堪がたし。

くれ竹のよも君しらじふく風の
　そよぐにつけてさわぐ心は

とある夕べかねの音を聞て、

まちぬべきものともしらぬ中空に
　など夕ぐれのかねの淋しき

十三日　晴天。早朝小石川より郵便あり、小笠原家に今日數よみの催しせんとするを是非に參らせ給へかしと成けり、障ることゞもいと多かるに斷りのはがき出す、午後稻葉の小君參らる、哀なるもの語多かり、日沒後山下直一君來る、早稻田文學四冊

持參、芦澤に爲替のこと賴む、久保木新たく庵を持參す。

十四日　早朝灸治をなす、久保木姉君參らる。

十五日　曇る。灸治をなす、昨日より家のうちに金といふもの一錢もなし、母君これを苦るしみて、姉君のもとより二十錢かり來る。

ありし玉章をくり返しみて、

　くり返しみるに心はなぐさまで
　　涙おちそふ水ぐきのあと

この頃のこと少し、

一　酒田不敬事件無罪に成る。

一　平澤ひなの遺族に遺産うけ取るべきほどの近親なければ、二萬圓余の財産其菩提院に死者追福の爲として納めらる。

一　西郷從道君入閣、海軍大臣と成る、これを品川君知られざりしこと。

一　改進新聞上告事件　則代言試驗問題洩漏のこと、官吏侮辱罪を其理由なしとてなりしか棄却されたり。

むさしあぶみとはぬもうしとなげきても
　　中々つらき命成けり

老たる親の上をおもへばふかうの罪さりがたけれど、

中々にしなぬいのちのくるしきは
　　うき人こふる心成けり

されど人の憂きにてあらですべて我心がらなれば、

つらからぬ人をば置てかたいとの
　　くるしやこゝろわれとみだるゝ

入る日のかたをながむればかの大人のあたりそことしのばれて。

うら山じ夕ぐれひゞくかねの音の
　　いたらぬ方もあらじとおもへば

十五日　午後廣瀨七重郎出京訴訟事なり、此日小梅村吉田かとり子ぬしより文來る、哀なること多しこぞの梅見を思出ての歌あり、

くるとあくと思ひ出さぬ折ぞなき
　ともに梅見しこぞの其日を

おもふどち梅見くらして植半の
　おかけの空氣なつかしぞおもふ

此ころとおもひしものをいと早も
　はや一とせのめぐりきにけり

などいと多かり、これがかへし必らず出さんとおもふ、この人のうへをおもへば、女の身のはかなきことといとゞしられて、男もちたる後も心安からじ、はや五十にもなかき人の三人四人子などもあるを猶うたひめなどの花々しきかたに男の心うつろひぬれば身は巣守りにて音をのみなき暮らすらんよ、三界に家なしといにしへこそいひけれ、今のよとてもかゝる人の上時々ぞ聞ゆるかし。

十六日　早朝廣瀨七重郎歸縣、吉田ぬしのもとへ返し出す、うきふしもかなしきふ

しもらし給ふにつけて少しはみ心なぐさむべきに折々は聞えおどろかし給へとて、

　　いざゝらばとも音になかん友千鳥

　　　　聲だにかよへうらの眞砂路

かきやるまゝにいと哀なり。

廣瀬よりの便りに聞けば野尻ぬし妻むかえ給へりとなん。國子の心をおもひやるに我もかのの悲しさ堪がたし。さゝやかなる紙に小さく書きて見するをみれば「いにしへにためしも有とあきらめて夢のうきよをうらみしもせじ」

いと哀なるまゝに、

　　身にちかくためしも有るをくれ竹の

　　　　うきよとはしもうらむなよ君

又國子かく、

　　我が心しるべき君のなかりせば

　　　　うきよを捨つるすみ染の袖

我うち笑ひて、

心から衣のうらの玉も有るを
　すみ染とまで何おもふらん

夜ふくるまで國子ねむりもやらぬに、

いでや君などさは寐ぬぞぬば玉の
　よは夢ぞかしよは夢ぞかし

ながむればこひしき人の戀しきに
　くもらばくもれ秋のよの月

よもぎふにつ記　（二十六年三月）

十七日　田中ぬしのもとに文を出す、十九日の發會に不參の斷りなり、やがて返事來る、此七日より三田ぬしのもとに講義聞きに參り給ふよし。さま〴〵語ること多しと云ふは師の君のことにつきてなめり、あなうるさの世の中や。

十八日　より机を北まどのもとにうつす、風いとすさまし。

十九日　晴。例の如し。

廿日　北航端艇墨田川に發程す、帝國大學、高等中學、高等商業、商船學校、三菱社、郵船會社、學習院、其他の諸學校數十校殘らず送る、下谷廣德寺邊、淺草並木通あたりより人々絕えず、吾妻橋上などは往來ふつに絕えたるよし、さま〴〵聞けること多けれどさのみはとてかゝず。

廿一日　午後文學界の平田といふ人訪ひ來たれり、國子の取次に出たるを呼びて、とし寄りかと問へば否まだいと若き人なりといふ、やましけれど逢ふ、高等中學の生徒なるよし、平田喜一とて日本橋伊勢町の繪の具商の息子なりとか、年は二十一とい

ふ、何用ありて來給ひしともそゞろにいひがたければ物がたり少しするに、詞かず多からず、うちしめりて心ふかげなれど、さりとて人がらの愛敬ありなつかしき樣したり。我が小說雪の日文學界の二號にのすべき筈成りしが寄稿のいと多かりしかば三號の方に廻したり、さ思し給へなどいふは、彼の編輯など受持つ人ならんと思ひ寄りぬ花の頃までに何か新著あらまほしと乞ふに、もしつゞること出來なばとこたふ、花圃ぬしは二號に何か出し給ひしやと問へば、出し給へり、筆のすさびとて和歌のことにつきて陳べ給ふ處ありき、君のもとにはいまだ奉らざりしやといふに、ざつし一號を拜見したるのみといへば、さらば直に送り參らせん、花圃君は此ごろしきりに女學雜誌に筆ふるひ給ふなり、多くはほんやくものなれど物かく筆の前かたよりはいたくかはり給ひし樣なりなどいふ、少し口ほどけて今の世文士のこと文學の有さまなどかたる、幸田露伴をいたくしたひて對どくろ、風流佛などの身にしむよしを語てほと〳〵淚もさしぐむ斗り、幽玄微妙のさかいを願ふものゝ如し、西行、兼好、蕉翁などの異人同心なるをいひ、つれ〴〵草のさるふし〴〵、山家集のあれこれの歌、かたり出るまゝに我も同じ心に詞かず多く成りて、はじめて逢にけん人とも思ゑず、君も露伴は

好み給ふなるべし、君が埋木をこそ見參らせしより大方はをし斗りてなんどいふに、我もうち笑ひて、男の御方々が見給はんに我がやうなるもの丶かきたるなどさこそかたはらいたしとも御覽ずらめ、誠に露伴子が本心はしらず、見る目は我が心なれば其かたはしを見とめておのが心に引當てつ丶めでまどふや何やしらず、今の世の作家のうち幸田ぬしこそいと嬉しき人なれ、其人は見知り給ふやと問へば、否露伴には逢ひしこともあらず、其弟の成友と呼ぶが我が高等中學の生徒にて、これは相しれる中なりといふ、高等中學と言へば某々の大學に入ぬべきかけ橋なり、しかるべき人々さぞ多からんを、睦み給ふ中にはいかなるかおはします御もの語をかしからん、うら山しさよとほ丶笑みて問へば、否友と呼ばんは一人も非らず、學業才能などは敎ゆるにしたがひて習ひとるものなれば口をしからぬほどなるも多かり、大方は同じいがたの内に作り出したるもの丶形の如く、おのづからの氣がいなどは求むるとも見出しがたし、我れ早くより父をうしなひてうき世の涙をくみ初し身の、もの笑みがちに心淺けき貴公子輩の友となりがたきはさるかたに推し給へかしとて打うめくに、さは御父君おはしまさぬ御身なりな、我もおなじく父におくれ兄におくれて浮世のちまたに迷ふ

身ぞかし、中學には今年にて幾年にかととへば三年なり、されども一年は數學におくれを取りしかば、今二年といふ斗なり、講師もおもしろからず學友もうれしからず、なべてうき世のはかなきをかんじて日夜の友をつれ〴〵の草紙に求むれば、いよ〳〵學校などの厭はしく、知りつゝ人よりはおくるゝぞかし、この程まではかしこの寄宿舍に起ふししたれど、又家に呼かへされて風塵に立まじりつゝもだえくるしむことたえがたき身なり、君も父君おはしまさずと聞けば同じく浮世にほだされ給ひてつながる處多かるべしと、やう〳〵人も我も涙わかるに成りぬ、文學界一號に岩本君なるべし禿木とかいへる名にて兼好の一章を書きたる我れも國子もそゞろ胸をさゝれて、ことの筋にも文章にもいたく感じ合へりしを、今又この人のかく語り來て、まだうら若き人ともなく悲哀の情をよくも汲知りたる哀れにも悲しく、いでや其うき世をのがれなんこともとより其もとにかへるのにて、邪正は一如善惡は不二とかや、さとれば十萬億の道も去此不遠ぞかし、墨染の衣にかしらそり丸めしのみが脫俗ならば、もだゆる法なく苦しむには及ばざらまし、苦腦は悟道のしをりにして煩腦則ち菩提にこそ、仰せ給ふ兼行法師とて凡夫の時は凡夫成し、今高等中學を退き給ふとも悟道これに

依りて了し給ふにも非ざるべし、猶よく戰ひ給ひてこそと少し生ざかしげにいへば、しか星野君もの給ひて我が退學の志を止め給ふなり、誠にかの兼好も四十二の曉までは心淸く此世をはなれかねしと見えたりとて打やすみつゝもの歎かしき體、涙胸のうちにたゝえて心のもだえ如何ならんかし、もの語今のよの女學の上に復りて、さしも二人三人女文學者と呼ぶ人あれど大方は西洋の口眞似なるぞ口をしき、我文學界は女流文學者の日本思想をもて長ぜしめんとするを雨夜の星といと稀なりかし、はじめより文學にと名のりあげて志ざす人のまこと文學に花さかするぞすくなき、思ふにもあまり、しのぶにもたえずして、文に成り章に成り、しかしてこそ世をも人をも動かすなれ、明治女學校などに文學思想をやしなひ初めしと見ゆれど、筆とりて物いふ人などの出來んは近々の事には非ざるべしとて、天知子のこと、透谷子のこと、岩本君の事さへさまざまにかたる、宇宙を宿とする古藤菴のこと殘月、雲峯のさまざま、いん文の成行、和歌の姿、今の世の歌人どもの人がらにつきてももの語あり、一とせ松の門みさ子が門に遊びて驚きたること、中々につきがたし、都の花には其後御作ありしやと問はるゝに、百一號といへるにをかしからぬもののせたるよしかたる。いかで我

家をも訪ひ給はずや、星野君のもとにも是非參り給へといふ、男に交はらじとはかねてよりの定めなるに、さりとてしかもいひがたき物ゆゑ、學淺くしること少なくして人にまみえんはいたづらに身の愚かさを顯はすのみにて何の甲斐もなくこそあらめとて打笑ひ居れば、いかでかさる事あらん是非とはせ給へ、我れは又これより折々參り寄らんにゆるし給へかしとてやう〳〵日のくれなんとする頃たつ、菊地の奥方など此間に來給ひて、いとろうがわしきほどの物がたりなれどかたみに盡さぬ事多し、丈たかやかなる人の中學の制服つけたる、さしも身のまはりのうるはしともなきは誠いひけん樣に貴公子の友にはあらで、うき世いか斗うら淋かるべき、又こそとて別れぬ。

廿二日　早朝文あり、歸るさに都の花をもとめて燈下にひもときたるよし、香山家の姫の心を哀れとみしとか、結末の文をいたくたゝえ給へり、道に志ざすこといと深くして風塵におそはれつゝくるしみもだゆるよしを、かへす〳〵歎き、露伴がお妙樣ほどの人に逢はゞなぶり殺されんも知れぬほどのおくしたる身なれど、すねて優しく二つ三つ姉なる人のしたはしく思ひし折から、こぞの秋うもれ木に君あるを知り、今又文學界の縁にてまゝ見ゆるを得るはおのづから行く方ありやと覺ゆるなどなつかしく

書きたり、いでやかたみに親なき身ぞかし、同じ心に哀れと覺して共に至道に盡くすをゆるし給へなど、さま〴〵あり、名を見れば禿木とぞしたゝめける、さてはかの吉田兼好を草したる人なりな、哀れ知らざりしことよとて國子にも見する、年もいとわかくおさなじみたる人のいかにしてかくまでに悲戀の心をさぐり知りけん、歌人の居ながらにして名所をしるにひとしく、踏みずして情の奥ふかくたどり給ふにや、さはいへどかゝる人こそ危ふき物なれ、月花にそゝぐ涙のあまりは玉露と成りて文章ににほはせ、しほりと成りて悟りの道にしるべせんはいとよしかし、涙に迷ひて涙の人に成なんいと淺ましや、こは人の上のみならず我が上にもよくせずば來たりぬべき事なり、目に見えぬかたきは無常のみならず、すべて形なきこそものはいみじけれとおもふ、文學界二號手もとにありけるをとて諸共に送られぬ、信も深き人なりかし。

廿四日　小石川の師君に文を出す、明日の會に不參の斷り也、糀町裁判所より廣瀬七重郎呼出狀來る、直に郵便にて山梨に送る、期日は四月廿日なりけり。

廿五日　晴天ぬぐひたる樣なり。我が誕生日なればとて赤のめしなどたく、姉君を招く、芦澤來る、何ごともなし。

廿六日　晴、早朝札幌關場君より國子のもとに文あり。今朝台門指月鈔をよむ、今夕本郷の通りを逍遙す、今夜十二時ふしどに入る。

廿七日　晴天。一日著作に從事す。

廿八日　晴れ。西村のおつねどの來る、これを送りがてら小石川の傳通院大黑天に參詣す、今日は甲子なればなり。此夜神田佐久間町より失火風はげしければ燒けぬ[illegible]き模樣なり。

廿九日　起出てみるに春雨少しうちそゝぎて軒の梅がかいと高し。母君火事見舞に參り給ふ、藤堂邸より失火、二長町の方へ延燒、市村座も燒失したりといふ、母君歸宅の後雨いや降にふる。今日のよみ賣新聞川越大火義捐金の部に日本橋いせ町繪の具問屋平田喜十郎とあるはかの禿木君のことなめり、此頃の流行なれど猶慈悲こそ嬉しきものなれ、此日午後伊東夏子ぬし來訪、英和學校にてピヤノに合せてうたふべき彼の國のうた是れのに詞を譯さんとするに、五七に斗ならひたる方八六の調べのいと六つかしく又意味をもよく取がたければ、あはれよき智慧かし給へとてなり、諸共にしばし案じてさは斯くなさんとて、をかしくもと、

たのしきくにあり　老せぬたみ
とこしへのはるに　かれせぬはな
日はつねに照りて　うきやみもなし
とみれば隔つる　死出のながれ

其　二

ときはの野べは　かわのあなた
ヨルダンもカナをぞ　へだてたりし
モッセのごとたちて　御くにをみば
いさみてこゆべし　さかまくなみ

すべてほんやくの難きは我れと彼れとならはしのことなりたる故なめり、猶原文を殘りなくかみ砕きて更に我が詞にていひ出さんにはしかず、かゝる短時間にておもふこと得よくも盡しがたきを其うちに又參らせ給はずや、もろ共にこれが研究せまほしきをなどかたる、雜談いろ〳〵、夕飯を出す、日沒少し前に歸宅しけり。此夜十二

時過るまで工夫に更したり。

此頃のこと少し

山梨縣知事中島君非職になる。

田沼健君同知事に轉任。

きりすと敎徒子ころしの件重禁錮三年づゝと申渡さる。

卅日　晴天、早朝國子と少し物がたりす、我家貧困日ましにせまりて今は何方より金かり出すべき道もなし、母君は只せまりにせまりて我が著作の速かならんことをい給ひ、いでやいかに力を盡すとも世に買人なき時はいかゞはせん、こゝよりもかしこよりも只もとめにもとむるを兎角引しろひて世に出さぬこそあやしけれ、誰もはじめより名文名作のあるべきならねば、よしいさゝか心に入らぬふし有ともそはしのばねばならずかし、たとへ十年の後に高名の道ありともそれまでの衣食なくてやは過す、かゝる詫しき目見んよりはよし十圓取りの小官吏にまれ、かた襷はなさぬ小商人にまれ身のよすが定まれば憂き事はしらじ、などの給ひなすこといと多し、不孝の子にならじとは日夜におもへど、猶かゝるみ心にも入らずしてかくわづらはしげにの給ふこ

し、常の樣なり。あなもたいなのことや。
大學總長加藤弘之君免ぜられ、濱尾新君任官、

春雨は軒の玉水くりかへし
　　ふりにしかたを又しのべとや
あなくるしつらくもあらぬ人ゆゑに
　　あらまほしさのかずそはりつゝ
中〳〵に戀とはいはじかりごもの
　　みだれ心はわれからにして
荻の葉のそよともいはですぐるかな
　　わすれやしけん空にへぬれば

今日よりよみ賣新聞とりはじむ。
四月一日　上野君淸次君同道にて參らる。日沒少し前歸宅。此夜本郷通りに遊びて
文學界三號發兌に成しをしる。
二日　芦澤來る。終日雨なり、夜ふけてより車軸をながす樣にふる。此日國子吉田

君に行、悲話縷々。

三日　空晴れに晴れていと心地よし、母君安達に趣き給ふ、久保木來訪、此夜伊勢屋がもとにはしる。

忘れにけり、甲州廣瀬のもとに裁判事件の書類を三月三十一日さし出す。

五日　早朝夏子ぬしより文あり、曉月夜のことに付て評あり、此夜荻野君のもとをとふ、松浦道子が艷聞を聞く、此夜少しく雨ふる。秀太郎青山より歸る。

六日　夜よりかけて雪少しふる。早朝廣瀬より落手の返事來る、雨晴れずいと寒し星野君よりはがき來る、文學界三號に出したる小説好評なるよし、五號か六號に執筆あり度しとたのみなりける。

桃も咲きぬ彼岸もそこゝほころびぬ、上野も澄田も此次の日曜までは持つまじなど聞くこそいとくちをしけれ、此事なし終りて後花見のあそびせんなどまめやかに思ひ定めたる事あるをや、折しも俄かに空寒く人はそゞろ詫あへるを、あはれ七日がほどかくてもあらなんと願ふもあやし。

　何となく硯にむかふ手ならひよ

おもふことのみまづかゝれつゝ

しらじかし花に木づたふ鶯の
　しの音に鳴てものおもふとも

しられぬもよしやあし間のうもれ水
　ながれてあはん中ならなくに

うら山し夕ぐれひゞくかねの音の
　いたらぬかたもあらじとおもへば

春にあふかき根のさくら中々に
　花めかしきがやましかなけり

春雨のふりにし中よわか草の
　またもえ出てものをこそおもへ

春雨はふりにふれどもかれ柳
　いかゞはすべきもゆるかたなし

いたづらにもゆる斗をわか草の

つみはやされんものとしもなく

こぞの春は花のもとに至戀の人となり、

ことしは春に鶯の音に至戀の人をなぐさむ、

春やあらぬわが身ひとつは花鳥の

あらぬ色音にまたなかれつゝ

もゝのさかりに人の名をおもひて、

もゝの花さきてうつろふ池水の

ふかくも君をしのぶ頃哉

よもぎふ日記（四月）

四月七日　晴天。午後狂風吹おこり、大雨しきりに來りていと物すごし、一時にてやむ。

八日　晴天。山下直一君來る、數時間あそびて歸る、此日母君菊地うぢが寺參りし給ふ。

九日　晴天。日曜なれば芦澤來る。三枝君來訪、かりたる金のことにつきてなり、さはれこと〴〵しき催促なども無くして歸る、久保木姉君來る、長十郎の風邪にてなやみ居るよしを語る、夕方直母君と共に湯島あたり散歩、此夜一時過るまで燈下にあり。

十日　いたく朝ねしたり、起出でみるに雨、いとあたゝかし、午前のうちに母君久保木及び菊地君に風邪の見舞をなし給ふ。高等中學の今日より稽古はじまりぬと聞くに其序を以て禿木君や訪ひ給ふと心にまちしが、あらずして止にき　今日一日雨に送りたり。

庭のやまぶきを折て花がめにさすとて、
　山ぶきとみのなき宿と春雨の
　　ふりはへてしも人のとはぬか
久しう何方にもとはで、
　くれ竹の友がきいかに荒れぬらん
　　ふしの間どほに成れるころかな
花のさかりも今一日二日と聞くに、
　春雨はたもとにばかりかゝる哉
　　いざ花にともいひがたきころ
なみ六茶屋の今日より開かれぬと聞くは。
　隅田川花に斗とおもひしを
　　ふでに狂へる人も有けり
十二日　小石川へゆく。
十三日　此夜吉原より失火、揚屋町。

十四日　圖書館。此夜稻葉君吉報を聞く。
十五日　藤本へゆく、半井君の消息を聞き得たり、此夜おこう樣參らる、稻葉君の奉職されたるにつきて入用なる衣類などの間に合ひがたきを西村君にかりたしとてその取なし母君にたのまんとてなり、この日國子と共に根津より天王寺迄遊ぶ。
十六日　家の門を直さんとて大工來る、俄に雨に成しかば其事にかゝらずして歸る、午後より晴たり。
十七日　晴れなれど大工來らず、母君午後より上野東照宮參詣、安達君、大工稻垣長太郎草もちを持參す、奥田老人伊勢より歸京なしたるよしにて來訪、歸りを送りて國子と共に三丁目まで行く、大學の前より安部邸をぬけて歸宅、此夜柳原邸より東照宮祭典の御料理を送らる、我が一兩度小石川の稽古をかきにしかば病氣にてはあらずやとて常姬君の案じ給ふよしうたより消息あり、使ひ歸る、此日吉原角ゑびの主人宮澤平吉が葬儀谷中にあり、岩崎以來のにぎはひと見し人語りぬ。
　我がすむ家のもとは中島何某とて文部省に奉職する人のすめるなり、しば〳〵ぬす人の入りていとけうなる家よとて引移りぬる成しが、此すむ家のとなりに堀川と呼ぶ

測量技師のかねてよりありし、年若き夫妻にていとかすかに世を送り居ると見えしが、これこそはぬす人成けれ、此ごろぞとらへられてひとやに趣きしよし、夫よりやがて此所をうつりて如何なしけん、かき一重隔てけるとなりにぬす人ありとは誰しもしるよしなく、多くの人をうたがひよをうらみて氣も狂ほしきまでに見えしかの中島がつまに似し人うきよの中にすくなからじ。

十八日　快晴。家のふしんにかゝる、山下次郎君熊ヶ谷より參られたるよしにて來訪、午飯を出す、我うらなる人の子ども四ッ斗なるが三人そろひて行衞しれず成たりとて人々もとめさはぐ、田町のはづれに遊び居たりとてやゝしばらくして見出しにけり、そのほどの親達が苦おもふべし、此夜邦子と互にもみ療治なし合ひて早くふしたり。

十九日　晴天なり。關根只誠翁昨十八日、死去せられたるよし、新聞に見えたり、是非とぶらはまほしきを、香花の料いかにして備ふべき、家は只貧せまりにせまりて、米しろだに得やすからぬを、邦子は我がこのまゝに衣をだに持ゆかば夫ほどのこと成り難きにも非らじ、いかで〱とうながす、姉樣は物に決斷のうとくしてぐずぐ

ずとせさせ給ふこそくちをしけれ、何方ともさだめ給へとしきりにせむ、母君にはいふまでもなし、我もしかおもふを、きたる衣とても大方はうり盡しぬる今日、この上にうしなはんはいと心ぐるし、ともらはましきはさる事ながら、明日の米にもことかくなるを人の上にかゝづらふべき身にもあらず、必竟は夏子の活智なくして金を得る道なければぞかし、かく有らばはてもしれぬをなどいとこと多くのゝしり給ふは、我が優柔を邦子とがめてしきりにせむ、

　　我こそはだるま大師に成にけれ

　　　とぶらはんにもあしなしにして

むかし／＼もろこしの莊子とかやいひし人はさる人の葬儀のむしろにつどふ人多きをみて、このうせにし人までうとみけるとや、一休和尙がされかうべの繪ものがたりを見てもさる事ぞかしとは時のやむを得ねばなるべし、やがて國子とものがたりて西村に金かりにゆく、母君よりのいひつけといひもてゆく、壹圓かりて來たりぬ。芦澤來る、演習として明日より十日間ならし野に趣くよし、午後より母君は關根君に參り給ふ、今宵入湯。

廿日　晴天。午前母君奥田老人を訪ふ、午後廣瀬七重郎出京、裁判事件につきてなり、本日直に歸縣なすよしなり。此夜母君と共に散步なす、臥したるは十二時成けん、大雨に成ぬ。

廿一日　雨天。わが心より出たるかたちなればなどか忘れんとして忘るゝにかたき事やあると、ひたすらに念じて忘れんとするほど、唯身にせまりくるがごとおもかげまのあたりにみえて得堪ゆべくも非ず、ふと打みじろげばかの藥の香のさとかをる心地しておもひやるこゝろや常に行かよふとぞゞろおそろしきまでおもひしみにたる心なり、かの六條の御息所のあさましさをおもふにげに僞りともいはれざりける、

おもひやる心かよはゞみてもこん
　　さてもやしばしなぐさめぬべく

廿二日　晴天。小石川稽古に行く、道すがら半井君を訪ふ、小石川は例のごとくなり、午後田邊君子君來訪、龍子ぬし懷妊せられたるよし、師之君に風聽の爲なり。

廿三日　晴天。芦澤よりならし野着の報來る、此夜龍子ぬしより文學界三號送達、稻葉のお鑛どの參らる。

廿四日　晴ながら風ひやゝかにて心地わるし、甲府伊庭隆次君より書狀來る、岩手より野々宮君書狀來る、此夜各返事をしたゝむ、十一時過るより雷雨天地をかへすが如くものすさまじき事いふべくも非らず、やがて雹降り出づ、雨戸に小石を打つくるが如し、十五分斗にて雹やむ、雹の大きさわたり三分位なるもあり、川の樣なる雨水の中にざく〳〵とたゞよひてすくひ取れば一時に一合も握れぬべし、我がまだしらぬ事なりき。

廿五日　早朝は晴れたる樣なりしが六時過るより空たゞくらく成に成て、雷雨昨夜にかはらずしばしも戶を明がたし、雹も少し交りしが今日はさまでにも非ず、運びさり運びくる雨のおといともものすごし、雷はたゞ頭上に落かゝるかと斗むねにひゞきていと恐ろし、文机の上に香たきなどして母君は桑原くわ原とぞの給ふめる、さしこめたる雨戶を一寸斗開きて邦子はしづかにつれ〴〵草よむなるべし、やゝ靜まりぬ、我れは文机に寄りてとさまかうさまにものおもふほどかしらたゞなやみになやみて、雷雨のおそろしきも何も耳に入らず、魂何方のさとにさそひ行かるらん、一時間斗夢の樣に成りぬ、ふと覺ぬる時は雨戶もる日かげいとあざやかに成りてさしも空はなごり

なく晴わたりしなり、午後より又少し雨そゝぎしがやがて風に成ぬ、かしらいいとなやましきに胸さへもたゞせまりにせまりてくるほしければふすまかつぎて打ふしたるまゝ日くるゝもしらず、八時過るまで寢にけり。

廿六日　晴天。後屋敷村佐久間より書狀來る、母君安達に見舞に趣き給ふ、姉君來訪、夕方より邦と共に散步なす、田町より丸山にのぼり、阿部邸より本多邸をへて本鄕の通りに勸工場二ヶ所みる、十一時半寢る。

廿七日　晴天。書を禿木君に寄す。

廿八日　夜母君と共に丸山運動。

廿九日　早朝小石川より書狀來る、今日の稽古是非參られたしとてなり、支度して行く、伊東君も參らる、來會者三十餘名なりき、片山君、山名君吉田君などのめづらしき人々會す、芦澤三雪君白井たれとやら入門の人を伴はる、太田竹子君齋藤それがしの妻に成らる、それも來る、西片町に住居するよし、我が家をも訪はんなどいふ、今宵は鍋島家に夜會あるよしにて師君趣き給はんとす、我と田中ぬしとは人々におくれてかへる、此夜母君いな葉氏を訪ふ。

卅日　晴天。芦澤ならしのより歸營せしよしにて來る、久保木來訪、文學界四号來る、午後五時より根津神社境内につゝじを尋ね、上野の岡に藤を見る、何れもいまだ十分ならず。但し新緑の木かげはいとうるはし、日沒少しすぎ歸宅、稻がき來る、お鑛どのも參らる。母君同人と共に西村へ趣き給ふ、十一時ごろ歸宅。

五月一日　晴天。今日は淺草觀音の開帳中廻向にて天童供養あるよし、母君に參り給へなどすゝむ。西村の母來たるべきよしいひつれば留守にせんもいかゞなどの給ひしが、午後まで訪ひ來べき樣子みえぬに一時ごろより趣き給ふ、久保木來訪、母君は六時ごろ歸宅し給へり、此夜お鑛どの衣類もらひに來る、邦子がゆかたをやる。

二日　晴天。望月のつま利子持參、菊池の奥方參らる、母君と共に摩利子天もうでに趣く、家主西本來る、かきを結ひ直さんことのおくれたるを言ひになり、此月も伊勢屋がもとにはしらねば事たらず、小袖四つ、羽織二つ、一風呂敷につゝみて母君と我と持ゆかんとす。

長持に春かくれ行ころもがへ

とかや誰やらが句を聞し事あり、其風流には似ざるもをかし。

藏のうちにはるかくれ行ころもがへ
ことのしらべや聞ゆべく、

秋しのやと山のみねの朝ぎりに
　うすれてのこる有明の月

いとゞなほあくがれよとやつらからぬ
　けしき斗を人のみすらん

木の葉ちるにはの月かげよひ〳〵に
　まさりてものをおもふ頃かな

我こそはあしの下をれ一ふしの
　ありとも誰れかありとしるべき

もしほやく難波のうらの八重がすみ
　一重はあまのしわざ成けり

圓珠庵

しのぶぐさ　（二十六年四月）

十二日　小石川に師君をとひ、田中君も訪ふ、ものがたり種々、いづれもかしらいたき事なり、三時頃歸宅、雨降り出づ。

十三日　の夜母君更るまでいさめ給ふ事多し。ふ孝の子に成らじとはつねの願ひながら、折ふし御心にかなひ難きふしの有こそはかなしけれ。

十四日　小說の事につきて藤陰隱士を訪はゞやとせしかど、早朝いと憂はしきことありてものいふほどに時の移りぬれば得行かず。圖書館に行く、上野は今日は花ざかりにて思ひなき人の醉しれたるさまいと興ありげなり、歸路安達君の病ひをとふ、こゝに母君參り合されてひとしく歸る。

十五日　早朝さるがく町に藤陰を訪ふ、都の花明日發行日なるをいまだ製本出來おがらず、これより築地に催促に趣かんとする所なりといふ、十分斗ものがたる、さがの屋の狂氣せしよし世にいふは僞りなること、伊豫の花園女史のこと並に花園女史より長編の小說出版をたのまれたれど取かたくして斷りたり、交々かたる、何か歌の入

たる小說出來給はゞ得させ給へなどいふ、歸路半井君の消息を聞きたり、打つゞきやむとしもなくなやみ渡り給ひしが、此ほどよりふとうちもゝに出來たる腫物の俄に甚だしく成て、本郷の親類がり趣き給ひしまゝ立歸ること能はず、かしこにて療治中なりといふ、聞くまゝに胸つとふさがる、去歳の此頃はいみじうなやみ給ひて我日ごとにとひ參らせぬる頃とおもふに引かへ、文をだに參らせがたき今のいかにせば御おたりとひ寄らるべき、中々に知らずばしらず、聞そめぬることとくやしくさへ成りぬ、歸宅の後これを母君に語り、いかで一度のとぶらひをゆるし給へとこふに、更に聞き給ふべきにも非らず。さらばせんなし文をだにとせちにいへど、いづれも／＼聞き入れ給はず、こは我が上をおぼし給ふによりてながら、身にあやまちすべきわれにもあらぬをなどかうはつらうの給はすらん、かしこにもいかにおぼしなやみてよの中うらめしうみだるゝふし多くおはすらんなど思ひやるまゝに、いと堪がたし、侘てこれを邦子にはかるに、思ひやりなきにしもあらぬ人は諸共に涙さへさしぐみて我が爲かにかくとはかる、わがはらからのあやしうよの中にことなりたる宿世にてはかなきことにもの思ふなる、人の上にて見んには如何かたはら痛からぬ、おさなきよりおもふこと

人にことにていさゝかも世の中の道といふことふみ違へしよし、人めにはいかに見んとも、我れは空にます神にこそとて。千よろづのこがねにも、しき渡すにしきにも心をかけすして過し來ぬるものか。はかなう世にも人にもうとまれぬべき人の、さりとは知らぬにしもあらで猶なんわすれがたき。邦子もおなじことあるまじきおもひにくるしむ成けり。されどもかたみにふみのつねのいろめかしき方はおもひかけぬ事にてたゞ隔てなき心のかはるまじきを願ひ。かくなやましき事ある折ふしなど心の限りの誠をあらはしてんのねがひぞかし。月花の折々に心をかはし。文にもまのあたりにもをかしき事いひ交しなどの嬉しきにもあらずかし。おなじうはもろ共に涙そゝがまほしきを。我とおなじき人しなければ大空のみにわがおもふなるべし、我がかくおもふ心を人はしらず只大方の戀と見てなまおこめかしうもて遊びがほに思ふらんもしらず。そは夫ぞかし。笑はれなんもよし。そしられなんもよし。我が戀の神はさるいさゝかなるまさなごとにかゝづらひて圓滿をかゝんことを惜しみ給へばなり。もとより戀に圓滿なし。圓滿のなきならねども人二人に分ちてはまどかなるべき道理なければ、その人といふ文字は只捨てにすてつ。天地にみちたる戀てふものゝ其かたはしを顯は

し初たるはその人をおもふに猶我が恩ある人をおもふに似てそのもとの忘れがたけれ
ばかくもおもひなやむ成りとは、折ふし定かにさだめたる我が哲理ながら、さし當り
ては猶よのつねの戀めかしく逢みまほしさなどの時々にしのびがたきぞかし、あはれ
〳〵書きつゞくるとも得やはおもふことのべ盡くすべきかは、只よにをかしくあやし
くのどかにやはらかに悲しくおもしろきものは戀とこそ言はめ。

まちし花も青葉に成ぬるときくに、

　人の上もかくこそ有けれ大かたの
　　　まつははかなきものとしらなん

みちのくなる友の花の頃久しくおと
せざりければことさらにうらみ聞えんもなめしけれど、

　春がすみ立隔てゝもみゆる哉
　　　いはての山の花や咲けん

まふ蝶の袖のうかれ給ふはことはりながら、都の花をいかにとだにの給はぬも情な
くこそ、

都のはるはいかにとだにの給はせぬもことはりながら、角田飛鳥の花の爲いとくちをしうこそ。

道もせに咲く花のなかばはつちに敷きて、雪の中ゆくなどはかゝるをいふにや、青葉に成ぬる梢、わかやかにもえ出たる小草など景色をかしきわたりにうしかふ家のひろやかなるなどもみゆ、田町よりの坂をのぼれば、かの馬琴が八犬傳に丸塚山とかきつる濱路が最期の場所めの前にうかぶ心地して、遠からぬ傳通院の森、小石川の町々只こゝもとにみゆるもをかし、おもふことなからましかばいか斗をかしからんと思ふも我が心からのつれなきぞかし、道ゆく人も我が面て守るらん樣に覺えて、只相しれる人に逢はじと斗いそぐ、かの家には思ひかけぬ事と只あきれにあきるゝものから、人々うれしげにもてなさるゝこといとうれし、かの人も昨日今日はやゝこゝちよき方にてなど起きかへりつゝかたる、いとこなる人の藥すゝむるとて枕邊にありしが、さしも久しく音せざり給ひしな、御かはりとも侍らざりしや、つねに御噂なん申暮して一昨日もさなり御うへ申出し候ひしことゝ言へば、いと多かる藥を一と口のみておう

わざはつねに申ことに侍りとて、何となくほゝゑむ、枕邊の机にいと大きなる花がめに櫻山吹色々に折まぜてとほき野山をあさりがたき心ゆかしにかくはといふ、誰れも花のさしかた心得るものもなく、うらなる園の花を有にまかせて折もて來てかく亂雜なるを笑はせ給へとていとこなる人の耻かしげにいふもをかし、さま〴〵の人の何など樣のもの唐紙の長やかなるに書きて其わたりの壁どもみえぬほどに下げたり、かの人はほゝゑみつゝ紙を取出させぬ、硯みづからをしすりて、いとなめしけれど御舊詠にまれ何にまれ一二首得させ給へ、使ひにてねがはんの心成しが、すなほに書かせ給ふまじきを知れば心にのみ思ひてとゞめつ、今日おもひよらず訪はせ給ひしは我が願ひのとゞきしにこそは、いかで書かせ給ひてと、毛せん出させ、猶紙きらせなどす、晴れがましや家に歸りてこそ、かゝる御紙どもならでつねの半紙などならばとわぶれど聞かるべくも非ず、見參らするまゝに心もすが〲しく成ぬべくなん、人だすけにこそなどいと多くいひつゞけ給ふ、いとこなる人もせちにこひて、病める人の願ひに侍ればいかで一二首をといふ、今はしも甲斐なくて、二首斗かく、いとわろき成り、これは反古に給はりて更にあらためてもて參らん、ゆるし給へといへば、さらばこなた

より紙を持たせて參らすべし、御引かへの時にはかならず返上なすべきを、それまでは得こそと笑ひて取り給ひつ、あとにて笑はせ給はんといへば、こはけしからず、たれにも見することには侍らず、朝夕にながめて身のたのしみ………

ろんどんの女すり。

さる老紳士汽車より下りて停車場を出んとする時、一少美人あはたゞしく來り、我が父上樣よくぞ來給ひしとて其くびに抱きつきて口すゝりなしぬ。老紳士は何思ひけん、靜かにそびらに手を廻していだきしめしに、かの女はしば〳〵紳士の面を見て、こは何とせんあまりにいとよく似給ひしから、ふと我が父にまがひ參らせたり、ゆるし給へとて振はらはんとす。紳士はこれをしばしもゆるめず、否な我は汝の父なり、おさなき時迷子になし、今も猶尋ぬる我子は汝よ、警官の來らんまでは放さじとて抱きたり、誠はこの女のすりなること見とめければ成りとか、何時の間にすりけんかの紳士二三品………

蓬生日記（二十六年五月）

一　束

母君が淺草の開帳に參り給ひしは一日成りき、中廻向にて天童供養などのいとにぎはゝしき日なればにや、さしもの廣場にきりをたつべきひまもなきまで人々居りて、本堂ちかくは老人などの近よるべきにもあらず、しゐて參らんとすれば、警官などのおごそかに守りたるが、あやふし怪我もぞするなど制すめり、折角にまうでたるものから、わに口とるにならさで歸り來給へるよし、奥山の興行ものなどいとをかしげなるが多かりしかど、そが中に鹿兒島戰爭の生人形みて歸りしとの給へるもをかし、すべていまだ見ぬにぎはゝしさと語り給ひぬ。

一小林好愛君本郷區の區會議員に成けるよし。

一ある夜邦子の物がたりけるは、日々おもふことの同じからずして、一日の中一時の間にもさまぐ\のおもひ沸き出でくるがいと佗しければ、いかで此心たゞさばやとて常に居る窓の障子に其時々はりをさしてしるしとしけるに、一間斗のほどは時の

間に穴斗に成りぬ、更にさしはじめたるに處もはや殘り少なになれり、しりつゝただ
さんとするにすらかくの如し、何事もおもひたどらず無意に此日を送らばいかにあやまちも多かるべきにか、いとあやふき事といひけり。

一文字こそ人の心をあらはすものなれ、同じ師のもとにおなじき手本をならひたるが中にさてかれこれひとしきは少なかりけり、花圃女史などのにほひやかに愛敬ありてしかも老筆めきたる、みる人かたには師にもまさりてなどいふめるは、おのづから家の筋を引きたるにて他人の及ぶべきにあらずといへど、猶よくみるにそれさのみにもあらじ、猶心よりこそと覺ゆれ、あながち歌にもあらず、洒落にもあらず、角ある手に千蔭をいとよくならひ取りたりとは誰れもみるべけれど、その中に一ふし才氣のあふれぬるこそかの人の本性みえて、愚直質朴などかけてもおもふべきにはあらじ、伊東の夏女も手はいとよく習ひ取たりと見ゆれど、猶やは〳〵しきかたに寄りて、すなほにうるはしうのみこそあれ、鳥尾の廣子がいとよく花圃女に似たりと見ゆれど、にほひやかなる處ぞかれはまさりたる、天野の瀧子が手をばさるかたに人たゝゆるよし、江崎のまき子などのいと達者に書きたる大かたうるはしき手

の書きならはざるよりは、ふみなどのおもていとよし、香川の政子が手をはやく島田三郎が妻成しころさる人みて、なよびやかに花々しとは見ゆれどたてたる節なしやといひしが、人もしか操なきものに成りて、今はさる商家のおもひものに成ぬるよし。

五月三日　曉がたより大雨車軸をながすが如し、起出る頃にはやゝ小雨に成ぬれど今日は晴ぬべき樣にもみえず。母君は例の血の道にて臥し給へり。今朝天知子より狀來る、文學界五號に少し長きものにてもよく、廿日前までに得させ給へとてなり、都の花の方もいまだ作り終らぬをいかでかとて、來月ならばと返事出す、今日母君いせ屋がもとに又參り給ふ。芦澤來る。

四日　晴れ。髮を洗ふ。何事なし。夕かけて西村君がもとに金かへしに行く、歸りてみるにお鑛どの居られたり、これより西村に金かりに行かんとてなり。

五日　晴天、風つよし。芦澤來る。ならし野演習の慰勞休暇なるよし、姉君來る、稻葉君禮に參らる。姉君芦澤兩人にて柏もち買ふ、一同にて喰ふ。

六日　いと寒し、薄霜の降たるよし、人々いふ。此日來客いと多し、久保木夫妻、

菊池の老人、奥田の老人及び西村の親子來る、小宮山庄司突然來たる、おぶんの姿をかくしたる由にて、もし我が家にもやと半ばうたがひ半ば訴へんとてなり、母君と一間にしばし語りてかへる、哀れ狂せん斗まどひぬる姿はかなしともはかなし、其昔は八字髭にいげん備はりて誰がめにみるとも一かどの人と見えしを、かの姦婦ゆゑにこの家をもうしなひ親をもわすれ、其身はうき世の日かげものに成て今はた口をのりする爲にとるべき業なく車を曳き居るよし、お恥かしき事ながらとて語るを聞けば、着たるものとても其ふるびたるあわせの外に一枚もあらざるよし、淺ましき肉戀のはてながら、今日この頃のかれが心よ思ひやるまゝにいと哀なり、ものがたり猶せまほし氣なりしかど人々居あつまりぬる中にて久しうは聞くべきにもあらず、又こよとて母君かへし給ふ、人々も日沒少しまへに歸りにき。まことや今日は前田家の園遊會なりけり、皇族大臣をはじめ貴族院議員外國公使など數の人來會するもの千人と聞えぬ。

七日　晴天。秀太郎來る。今日も又來客多し、山下直一及芦澤來る、芦澤は同僚をつれ來る、三人にひるめし出す、一同日沒少し前まで遊ぶ、此夜母君と共に右京山に烟火見る、九段の祭にてこゝよりよ見ゆればなり。

八日　晴天。小宮山にふみを出す、返事直に來たる、いまだ文のありかしれざるよし。

九日

十日　晴れ。夜に入てより、荻野君を訪ふ、信濃怪事。

十一日　晴れ。今朝より國會新聞取る、諸縣霜害のおびたゞしくして、桑、茶などは更なり、もろ〳〵の苗のかれたる多きよし、群馬、埼玉の縣などには蠶をかふべきすべなくして、山川などにすてぬるも多かり、茶はすべて黑色にかはりて、中には幹まで枯れぬるもありとぞいふなる。

十二日　夜に入てより小宮山來る、淺ましき物がたり多し、夜明がたに歸宅す。

十三日　山梨に文を出す、小宮山の事につきて也。

十四日　ことなし。

十五日　母君誕生日に付芝の兄君及び久保木の姉君をも呼ぶ、こゝろうき人々なれども同じはらからと聞ゆるものを道を道にたてゝうと〳〵しく成なんも母君の爲いと情なううらめしかるべき事とてかくは呼べる也、兄君より土産もらふ、姉君及び秀太

郎も來る、折よく上野の伯父君參られしかばこれにも酒を出しなどす、日沒少し前まで遊びて歸らる、兄君もおなじく。

十六日　雨。

十七日　晴れ。西村君來訪。

十八日　雨。

十九日　晴れ。母君花川戸の小宮山がもとを訪ふ、午前八時より出て午後四時ごろ歸宅、種々になだめさとして正道に歸せしめんとすれど德にしたがふべくも見えずとて母君いたくなげき給ふ、人の上ながらいと侘し。此夜新聞号外來る、福島縣吾妻山大破裂と聞えし。今日より四疊半の座敷にうつる。

戀は尊とくあさましく無ざんなるものなり、つれ〴〵の法師が發心のもとも文覺上人が悟道のしをりも是れに導かれてと聞き渡るこそ尊けれ、花の散る所月のかくるゝところいづことしてか戀なからむ、あさましき肉戀を唯一の命として臭骸しばしも相いだかざればわが戀またく終りぬとなげき、うき世の望み絕えはてぬと侘ぶらむよ、されど夫はまだよし、その唯一の命とする戀の本尊を惡魔と知り外道としり夜叉とし

り、これが爲に我が命正に終らむとするを空に知りつゝも猶いさぎよく立はなれかねて、寢食もわすれ子をもわすれはかなき思ひを胸にだきつゝ、終にはいかさまにならむとすらむ、戀は心にありて人にあらず、抱かんとすれば月もいだくべし花もいだくべし、厭ふとならば何か又すてるに難きものやある、かゞみに物のうつるはもの來たりて後うつるか、鏡あればこそ先うつるか、もとのかたちを極めんに末おのづから明かなるべし、されども無窮の月花は彼の靈山のいたゞきにあり、分けのぼる道はよしかはるとも終には我も人もひとしかるべし、色に迷ふ人は迷へ、情に狂ふ人は狂へ、現世にて一歩天にちかづくとおのづからの天機にいざなはるゝ也、是非一道善惡不二。

廿日　晴れ。朝鮮防穀事件故なく落着したるよし其筋に電報達したるよし、或はいふ十七日の終局談判を十九日まで延期せしなりとも。

山梨縣に十五萬圓雨ふる。

吾妻山破裂調査として技師派遣、吾妻山は盤梯山の北五六里の處なりといふ。

東京に狂水病おこらんとす。

廿一日　雨降る。日曜なれば芦澤來る、姉君も來訪されしが少時にて歸宅、西村君

來る、きのふ母君金かりに參られしに折ふし來客中にてもの言はず歸られしかばいぶかりて來たりしなり、壹圓かりる、直に菊池君に持參、かへすべき筈のものありしかばなり、此夜小宮山庄司來る、おぶん歸京の路用として金一圓五十錢爲替にさし出したれど猶何の返事もなし。此上は倅嘉一郎を迎として山梨に遣らんといふ、嘉一郎は漸くかぞへの十三歲にて十歲何ヶ月の小兒なり、是れをしも唯一人手ばなし三十里の行程ことに知る人もあらぬ處へやりなんとする小宮山の心はすべてこれ惡魔の處爲なり、滿身の血も彼の毒婦の上に斗そゝぎて母をも子をもかへりみるに處なき也、過る夜の物がたりの時は一家三人共に袂をしぼりて哀れ此人をすくはゞや、ともかくもして眞の道にいざなひ、眞の人にせばやと力を盡したるものから、やう／＼言の葉のもと末を取り今日までの來歷を問ひ定めなどするまゝに、淺ましき肉戀のはてのみにもあらず、人となりの正しからざることもほの／＼知らるゝに、今はこれまでなり、天は罪なき人を罪し給はず、毒を以て毒を制するとかや、古來いひ傳ふる事なり、又に血ぬらむもそれまでよ。あたら命うしなはむも定業よ、何かは我等があやまちなるべき、我等は我等のつとめを盡したり。成りぬべき人ならば正に道に歸すべし、言の用

ひられざるは天のかくせしめ給ふなるべし、止なんかなと思辨して、我は一語をも出さず、歸宅せしは十時過る頃成けり。これより腦痛はなはだしく終夜くるしみて胸間もゆるが如く、人世の浮沈人情の菲薄悽こも〳〵感じ來りて、くるほしき事いふべくも非らず。

廿二日　曇。九時ごろまでふしどにあり、母君もおなじく血の道にてやまし、今日一日は何事もなく暮したり。夕方より雨ふる。

廿三日　も雨也。母君血の道なほよろしからず。今日より日課をさだむ、此夜小宮山より郵書來る、いよ〳〵甲府に出立の心なるよし、今は又何をかいはん。十一時過る頃新聞号外來る、郡司大尉の一行暴風雨にあひ行方しれずとあり、又一報に大尉の行方はしれたり、委細はあとよりとありけり。

廿四日　雨。母君猶よからず、山梨縣廣瀬よりもろこしの粉郵送、これをもちに製して一同くふ、かしこにては日々の食のかてとして食するよし、我等いかにしても食し難し。此夕べ号外來る、北航端艇の中三番艇の行衞しれざりしもの青森縣上北郡字砂ケ森にたゞよひつきけるが、其乘組員一人もみえざるよし。

廿五日　晴れ。早朝西村君參らる、一同にて茶をのみなどす、雜談種々、はやうより我家と緣をくまんことを願ひてさま〳〵かこちける事もあり、我邦子を得まほしきよしは母もいひ、みづからもうちつけに此二月斗前にいひ出でけるを、思ふ事ことなりて斷はりぬるより、いかゞおもひ取たるにか打たえてかつふつに音せず成ぬ。此人一人を厭ひぬるならばこそあらめ、天地の間乾坤のうち形の夫はもうけじとさだめけるをや、何故にうらむらむ、あな心みじかや、相しり初てより今歳十三年、うらなく交りぬる中にあやしき波風をたゝせなむこと、かつはかの人みづからの心からながらいとやましく、これよりはおりしにかはらず行かひしけるがやう〳〵心なほり氣げんあらたまりけん、此一兩度うちつゞけてあしちかく通ひくる樣に成ぬ、うきよにかたきを持たんことのくるしきにかゝるさゝやかなる事なりともいとうれし。西村君のものがたりの中に桃水うしが小說をほめられたる見るめなき人かなとをもへどもにくからずかし。

今日の新聞廣告に同樂叢談とかや小說雜誌發行の廣告あり、正直正太夫、柳塢亭寅彥、果園主人などの顏なり、ありし武藏野におもかげ似たりとみるにも哀れむらさき

の一もといかにやとおもひやらる。
邦子今日より手内職をやめになす、日暮てより道太郎兄君の使ひに來る。
此夜はやくふしたれどおもふことありてねむり難かり。
　雨ははれたり、軒ばのわか葉みどりすゞしく、
　人はまつによしなし閑窓の中、
　たゞ苗うりの聲ひなびくるをきゝて、
　更によみつゞく唐詩選、
廿六日　雨。いと早く起出ぬ。漂流端艇乘組人行衛しれけるよし、電文簡單にて事實しれがたし。今日も何事もなく一日をおくる。夜ははやくねたり。
廿七日　起出でみるに又雨也、しばしにて晴れにけれど夕立などの樣に時々降りくる、かみさへおどろ／＼しくなり渡る。午後廣瀨七重郎控訴事件期日經過したるかどを以て棄却の判決下る、直に郵送したり。
同樂叢談批評出たり、二号には桃水、友彦などの作も出るよし、すべてありし武さし野にかはらず、岡田凌波、三品りん溪もあり、故郷人の會合をよそに聞くが如く今

昔のおもひたえがたし。今日は甲子也、夕刻より邦子と共に小石川大黒天參りなす。

北航端艇三番艇乘組人行衛しれける樣に聞しが、今日の報に寄れば死骸いまだ分らずとあり、何れが是なるべきにや。

朝鮮東學黨ます／＼勢力を加へけるよし。露國人の加はり居るやに風說すれば、同國政府の恐こう少なからぬよしに聞く。

童うたといふものゝことぞともなきものながら世につれてこそうたひ出らめ、いにしへのひぢりの微服して市街に遊び給ひしもこれが爲也、今のよの童どもよ、聞くに得たえぬ歌ども花やかにうたひて二人三人よたりいつたり大路をねり行くさまそも何の兆なるらむ。すでによの中くされたりや將にこれより亂れんとするや、朝にたち給ふ人のこゝろせさせ給ふべき事成かし。

稀有の日本人稻田眞之助あらはる。

故鄉は忘じ難しはた忘ずべからざるもの也、されど故鄉なつかしとてひたすらに心引かれてのみあらば都會に出でゝ志ざす大事業のなるべきものかは。逢はでやみにし其人の上はたとふるに戀の故鄉ぞかし。これをかけはしにして月を尋ね、花を尋ね、

かすみを哀れみ、霧をうれひ、人世を知り、天地をしり、古來今に渡りて宇宙の美をもとめんとす、何ものゝさまたげぞ夢にもうつゝにも立はなるゝによしなく、彼のさゝやかなる天地より見ばほとんど芥子の實のこぼれたらむ樣なる一現象に滿身をつくして、人しれず泣きみ笑ひみ、心月に成らんとする時花にならんとする時又立かへりてはなごりををしむらんよ、などひたすらに忘れん事かは、故さとは我が故さと也、軒ばあれぬとも人の心あらたまりぬとも昔しをしのぶに難かるべきかは、只一あしごとに志ざす方へ進まんこそよけれ　一あしはすゝまんことをねがひ一あしは歸らん事をおもふ我心そも何ものぞ、憂ひ來たりては彼の人をおもひ、力よはくしては彼の人をおもふ、よし今は更に人ともいはじ、淸らけき眼ともいはじ匂ひやかなる口ともいはじ、何と得しれぬ一物の唯其人の名のりするものゝひし／＼と身にせまりくるこそ悲しけれ、ふる鄕のごと忘るまじきはかへす／＼知りつゝ、さりながら其故鄕のわすられなむ事をなく鹿の起ふし願はるゝかし、あやし我こゝろは二つあるか、かたへより見れば淺ましくもをしくかへりてはおろかにいやしくさへおぼゆるを、今一方にてはよし此身あればこそかゝる物思ひもするなれ淵にも入らなん海にもしづまなん、

すべてうき世のそしりも厭はじ、親はらからの歎きもおもはじなど樣にさへ思はるゝよ、あはれ迷ひはいつの日にか晴れん、まことの美をばいつの日にか見む。

廿七日　雨。

廿八日　号外にて報を得たり、北航艇隊鼎浦丸又々難破、八の戸鮫浦字大久喜に漂着、のりくみ人一人もみえざるよし、恐らくは三番艇と其終りを同じうせしものならむとあり、かなしむべき哉。

廿九日　曇天。窮甚し、金子かりに伊東夏子君を訪ふ、こゝろよく八圓かされたり午後まで物がたる。宗敎のこと哲理のこと中々につき難し、言ふ事〳〵に反對ながら諸共に心胸かくす處なきぞ樂しき、邦子此日吉田君を訪ふ、野々宮君の事、喜多川君の事、奇談紛々、醜聞並び聞ゆ、此ごろ傳ふる處みるところ淸くいさぎよき事ども少なくして、かくあさましき事多かるはよの中をしなべてにごれるによるか、されどもかたへをみれば伊東夏子ぬし、平田禿木君などとしまだ若く世故になれざる人の心よ、神をしたひ神を敬まひ、道義の光を起さんとする人々も見ゆるを、あながちによの中にごれりとも定めがたし、思ふに一葉生じて一葉落つるは天地の理なり、正に大いに大

宗教おこり、大教理おこなはれんとする兆としてかくはかくまでみだれ行にや、十九世紀の孔夫子及び釋尊いづこにか睡れる、天下は來らむとするものを先むかふるなるべし、詩歌文學の漸々下り坂に見ゆめるはこも又大詩人、大歌人のねむりをさますものにあらずや、樂しいかなや、事をなすべき人の舞臺は今めの前にせまりぬるぞかし。

此夜凶報又到る、郡司大尉さめ浦に於自殺をなすと、又一報には變死なり、現場に判檢事出張すとあり。

されど我國會新聞の報に寄れば、大尉は自さつせしに非ず、過失にて負傷したる也きず又少なしと報ず。

卅日　雨。大尉の事をおもふに早朝心なやまし、我が新聞の報ずる處に寄れば破そん船體燒却の際右眼をやけどなしたる也といふ。

卅一日　めづらしく空晴れたり。郡司大尉變死一條の誠に針少棒大の僞りにて、小負傷をなしたるのみ、五日を經ば全治すべしと聞く。

姉君より兄君うけとるべき筈の金子遣はさる、夜に通運にてさし出したり。

芦澤來る、金子壹圓あづかる、もとよりのと合せて二圓九十錢也。

今日も空さわぎて一二度急雨來る。夕刻より又晴れ。山梨縣伊庭準次よりはがき來る。雜誌購求を依頼して也。

六月一日　晴れ。中島いく子君一年祭のむしもの到來、明日は祭典なればとて招かる。おこうさま參らる、古ゆかたを呈す、久保木姉君來訪、平田禿木君より書あり、文學界の事につきて也、此夜入浴おそく寢たり。此日土方邸行幸。

二日　曇天。午後より中島君に行く、雨に成ぬ、會する人二人にて誠に内輪なる會合成も。夜に入てより歸宅。伊東君よりよみ賣新聞かり來たりしまゝ十二時ごろまでこれをよむ。

此日土方邸行啓。

三日　めづらしく晴れたり。北航遠征記を見る、そう難てん末の委しきを見るにも一讀三歎などかゝるをいふにや、大尉が心中おもひやるだにいたまし。

四日　晴れ。小石川稽古におもむく、午後より番町に三宅君を訪ふ、一月以來はじめて訪ひしなり。ひたすら家事に身を委ねて世上の事文事の事何にも耳に入らずとて極めて冷やかに成給へり、少時にて歸宅。

五日　雨。山梨縣廣瀨來りて一泊。

六日　晴れ。稻葉小君來訪、菊池隱居來訪、兵隊來る、一日ごた〳〵に終りたり。

七日　晴れ。いなば君來訪、西村君來る、藤田東湖、籠田鵬齋の書人よりたのまれて賣却せんとするを中島先生などの中にしかるべきかひ手あらすやとて也。

片々

南洋諸島の中それがし島の王弟サミ氏來朝、こゝかしこにてもてなす、やかましきものは辯護士會長選擧のさわぎ、角石事件、花房君マーエット氏侮辱事件、市ノ川鑛山事件、いさましきものは福島中佐遠征終りて近々に歸朝さるゝと聞く。

あはれなるものは、

郡司大尉の一行、それも軍艦磐城に曳かれて五日には箱館に入りぬるよし。

隣りづから騷がしきは、

朝鮮東學黨、しづまりては又もえあがるよ。

八日　晴れ。寺島宮中顧問官薨去の報あり、夕刻より江戶川あたり散步、田中君に手本持參、此夜号外來る。吾妻山第三回の破裂に調査技師三浦宗三郞同雇西山總吉

死去とあり、いたましき哉。

九日　曇天。

十日　雨也。

三浦宗三郎、西山總吉両氏とも内室懐姙中なるよしかさねていたまし。

此ごろの大とりもの、

河内國七人斬兇手は二人にて金剛山にたて籠りつゝ、警察十津川管下の警察官を盡くしてもとむること二十日、とらゆること能はずして終に自殺す。

片々

郡司大尉の一行ボート行を中止して汽船にのりゆくよし。

何故にまつらむとも覺えず、又まちぬべきあてどのあるにもあらず、聞て嬉しきたよりか聞かずしてかへりて幸ふくなるか、何方にも／＼おもひたどられず、門をはしる郵便脚夫の哀れ我家に寄れかし、かの人のたよりなれかし、一人は空しくすぎぬとも此つぐなるこそはとまどに寄りてしば／＼まつ、はかなく過ぬるもにくゝとなりに入ぬるもにくし、門札しば／＼ながめてあらずとて行過たるいよ／＼にくし。

わすれぐさつまんとぞおもふすみよしの
　まつかひあらむものならなくに
戀はこゝろにあつく身にはいとふ、
沖津波きしのよる邊とねがはぬを
　くだくるものはこゝろ成けり
もろともにしなばしなんといのるかな
　あらむかぎりは戀しきものを
久かたのあめにまじりて我おらむ
　みえぬかたちは人もいとはじ
さるもの日々にうとしと人ごとにいへば、
しげりあふまどのわかたけ日にそへて
　うとしやなにのこと葉なるらむ
雨ふる日其人の著書をみる、
かきくらしふるは涙かさみだれの

空もはれせずものをこそおもへ

見るもうし見ざるもつらし、

くりかへしみるに心はなぐさまで

かなしきものをみづくきのあと

十一日　晴れ。午後より芦澤來る、少し雨ふる、今日は入梅なり。

片々

ひうちなだ事件やゝおさまる。

十二日　雨。寺島宗則君葬式と聞く、道路くるしかるべし、寺は海あん寺なりとか聞けり、今日はめづらしく老鶯の聲絶えず聞ゆ、郭公にあらそふらんもをかし、早朝星野君よりはがき來る、文學界にのすべき著作をうながして也、斷りのはがき出す。

十三日

十四日　大石公使歸朝、新橋停車場出迎人の喝采萬雷くづるゝ如し。

十五日　雨。芝兄君來る。

十六日　雨。

十七日　曇。

十八日　俠客駿河の次郎長死亡、本日葬儀、會するもの千餘名、上武甲の三洲より博徒の頭だちたるもの會する五百名と聞えたり。

十九日　晴れ。日沒後國子とまりし天參りなす。

廿日　晴天。

廿一日　曇。山梨より芳太郎衣類着。

著作まだならずして此月も一錢入金のめあてなし。

廿二日　晴れ。今日は國子誕生日なれども祝ひのばして廿五日になさんと云ふ、此夜母君と共に近傍散歩、小石川に中島師君機嫌をきく、風邪也とて打ふし居られけるが物がたること多かり、みの子ぬしの品行日ましにみだれゆく抔覺ゆるはなどものがたらる、夏子ぬしの敬神の念いやますはよけれど、たゞかたまりにかたまりてあのまゝならんには終に如何ならむとすらんなどかたらる、夏子ぬしの事はおきてみの子ぬしのさるすきがましきは如何にぞや、いとうたてくも有哉、内々のことはとまれよそよりみんには御門下の名のけづらるべきにあらず、我不學のよくしることならねど今

のよの文墨にたづさわる人にして女子のしかるべき人ふつになしとぞいふめる、いかで御門下出身の人にして少し世にも聞え、よし學はとまれ、道德たかゝらむ人をこそ出さまほしけれ、田中ぬしの不德は今日にはじまりしにもあらざめれどいかでをしへさとし給ひて誠の道にみちびかせ給はらずやなど語るに、師はたゞ打なげきて、いなあたわじ、もとよりみの子の事はいふべきにもあらず、こは秘密のことなれど鳥尾廣子ぬしの少し此頃歌の口ほどけたるより世にあらはれん事をせちに願ふなるこも又虛飾にて、誠のみちにこゝろざす人には非らず、夏子ぬしなどこそと思へどこれはた富家の處女いたづらに時世にもて遊ばれてたてたる心なしかしなど、たゞ門下の人をあしざまにのみの給ふめる、師は親なりおもふ事おはさばなどかの給ふにかたかるべき、おもてにはうつくしく時にしたがひたる事をのみ仰せて、さてかく右とひだり左と右おなじ友のたれかれの間には批判を加へてさみし給ふぞわりなき、我が事などをも斯くこその給ふめれ、いざや何事もよしむかしはか樣のことをいといたくにくみて友のうちにもさる人あらばまじらはじなどさへに思ひたりき、今はおもへば人は我をけがすものならず、かゝる人ありてかゝる事をいふ成けり、しらずしてまどはされなんは

わろし、知りての後に何事のあやふき事かはあると定めて、たゞ大方の物がたりしてかへる、師君財政のいと困難なるよし物がたられし也、我がよもさる事は侍らじ、口に山海のちん味を味はひ、身には綾羅をかざり給ふとも、たゞいさゝかなる身一つなるをといひしに、否な我が上には何ほどの事かあらむ、兄の必死と困難の折に落入て此春よりこれをすくはんが爲にいくばくの苦勞をかなしにけん、されどもいさゝかのしるしも見えず、いまだに何事のもとゐも立たずなどものがたらる、何ぞや事を兄君に歸して自家不德の貲に供し給ふらむ、きくまゝに心地わろしとおもふも猶一を知りて十に及ばざる心からなめり。

廿三日　はれ也。芦澤明日よりかまくら地方行軍なるを、用なく休日なればとて來る。今日も何事なしに終る。日沒少し前母君と共に右京山に花を尋ぬ。今宵より蚊帳つり初けり、はやく寐たり。

廿四日　晴れ。

さかりなるものは、

福島中佐歡迎沙汰、三浦西山が遺族扶助の義捐、いづれも〳〵しかるべき事にてい

と嬉しきものから、何事も名のみ尊とぶ頃にて。

あはれなるもの、

郡司大尉一行のゐとろふにつきたりと聞くにむねしづまる心地しながら、此後の事如何なさんとすらむ、先に移りたる人々の食にともしくて死したるもありとか聞くを其たくわへなども多からずして出立ちにし人々よあはれこゝにも眼をはなつ人あれかし、北海道は紳士の遊び處にあらず、此人々ぞまこと身をすてゝ邦に盡さんとする人ぞかし。

廿五日　晴れ、午後夕立來る。行水後國子と共に天王寺に中島老君寺參りす、夫より根岸に下りて御行の松一覽、そのわたりの田、早苗いまを盛にとるなる、日暮るゝもしらず見るもをかし、國子の蓮の葉と芋の葉と取違へたるもをかしかりき、歸路坂本の通りに出で五條天神の祭りみて池のはたより歸る、時しも夕ぐれにて歌ひめどもの行かふみるもをかし、馬見場にて福島中佐が歡迎場もうくるとてかゝりたきつゝ工事いそぐもにぎはし、家ちかくなるほど又々雨こぼれ來ぬ、されどやがて晴れにけり、一人燈下に更るまで書見をなす。

廿六日　晴れ。

廿七日　晴れ。金策におもむく…………

此よ小柳町失火、山下兄弟來る。

廿八日　山下次郎來る。

廿九日　晴れ、薄曇也。福島中佐歸京に付歡迎もやうしのおびたゞしからむをおもひ、母君にも見せ參らせ度もろ共に正午より上野に行、此ほどの事かきつゞくべきに非ず、三時頃歸宅。上野伯父上及び清次君來る、上野行かへりなるよし、我れは直に一昨日たのみたる金の成否いかゞを聞きにゆく、出來がたし…………

伊東君より歸りくる、日沒後なりし。此夜一同熟議實業につかん事に決す、かねてよりおもはざりし事にもあらず、いはゞ思ふ處なれども母君などのたゞ歎きになげきて汝が志よわく立てたる心なきからかく成行ぬる事とせめ給ふ、家財をうりたりとて實業につきたりとてこれに依りて我が心のうつろひぬるものならねど、老たる人などはたゞものゝ表のみを見てやがてよしあしを定め給ふめり、世渡りのむづかしきはこれをとるもかれを取るもおなじかるべし、これより行路難いかにぞや、されども我

らはらからはうきよのほめそしりをかへり見るものならず、唯おのれのよしとみて進む處にすゝまんのみ、霜ばしらくづれなば又立なほさんのみ。

卅日　早朝母君かぢ町に金とりに行く。

芳太郎のあづかり金二圓四拾錢になる。

みゝづは鹽氣を厭ふと見えたり、海邊ちかき處などはさら也、深川たて川通りなどに至ればいかなる濕地とてもみゝづを得る事なし。

につ記　（二十六年七月）

人つねの產なければ常のこゝろなし、手をふところにして月花にあくがれぬとも鹽噌なくして天壽を終らるべきものならず、かつや文學は糊口の爲になすべき物ならず、おもひの馳ずるまゝこゝろの趣くまゝにこそ筆は取らめ、いでや是れより糊口的文學の道をかへてうきよを十露盤の玉の汗に商ひといふ事はじめばや、もとより櫻かざしてあそびたる大宮人のまとゐなどは昨日のはるの夢とわすれて、志賀の都のふりにしことを言はず、さゞなみならぬ波錢小錢厘か毛なる利はもとめんとす、さればとて三井三びしが豪奢も願はず、さして浮よにすねものゝ名を取らんとにも非らず、母子草のはゝと子と三人の口をぬらせば事なし、ひまあらば月もみん花もみん、興來らば歌もよまん文もつくらむ、小說もあらはさん、唯讀者の好みにしたがひて此度は心中ものを作り給はれ、歌よむ人の優美なるがよし、涙に過たるは人よろこばず、纎巧なるは今はやらず、幽玄なるは世にわからず、歷史のあるものがよし、政治の肩書あるがよし、探てい小說すこぶるよし、此中にてなどゝ欲氣なき本屋の作者にせまるよ

し身にまだ覺え少なけれどうるさゝはこれにとゞめをさすべし、さる範圍の外にのがれてせめては文學の上にだけも義務少なき身とならばやとてなむ、されども生れ出て二十年あまり向ふ三軒兩どなりのつき合いにならはず、湯屋に小桶の御あいさつも大方はしらず顔してすましける身の、お暑うお寒う、負けひけのかけ引・問屋のかひ出し、かい手の氣うけ、おもへばむつかしき物也けり。ましてやもとでは絲しんのいと細くなるからなんとなうしばしゐの葉のこまつた事也、されどうき世はたなのだるま樣、ねるもおきるも我が手にはあらず、造化の伯父樣どうなとし給へとて、

　とにかくにこえるをみまし空せみのよわたる橋や夢のうきはし

七月一日　晴れ。母君かぢ町より金十五圓受とりきたる、芦澤かまくらより歸京なしたりとて來たりしかば商業はじむべきものがたりして山梨より金五拾圓かりくるゝ樣頼む、速座に手紙をかく、小づかひ二十錢渡す、殘り二圓二十錢也、此よ小石川より神田邊散歩。

二日　晴れ。早朝芦澤來る、母君山下君のもとに本をかへし、次郎君就職の結果を聞き來る、華族銀行の試けんに及第なして百人ばかりの中より七人役につく樣に成

りけるよし、母君歸り後次郎君も來る、門にてかへる、我が近邊に華族銀行員のあるを訪はんとてなめり、午後野々宮君より書狀來る、當月末には歸京なすよし、此度はもはや辭職の決心と見えたり、其わけ／＼ひそかに聞わたるこそをかしけれ、芳太郎日沒ちかく歸らむとする折から思ひ寄らず我が門とふ人あり、母のしば／＼見て猪三郎ならずやといふ、打笑みつゝつと入る、芳太郎が腹がはりの兄にて十年斗前我が家にかゝり居し人也、他鄕にありて故鄕人に逢ひぬるばかり嬉しきものなしとか聞けるを、まして是れははらから也、うれしさいか斗かとおもふに、事のおもひがけぬに胸をやうたれけんとかくの詞もなく顏のみ赤らめ居るもをかし、直に芳太郎歸營、猪三郎は東京に商業の目的を立てゝ移住せんが爲也といふ、此夜ふくるまで物がたりす。

三日　晴れ。母君同道にて猪三郎家さがしに行く、淺草田原町、七軒町二ケ處に氣に入しがあるよし、夕がたより又ゆく、差配人不在にてまとまらず、又明日行んといふ、暑は昨日九十六度、今日は九十五度なり、日中のあつさはいふべきにもあらず、此夜お鑛どの參る、十一時頃まで話す、芳太郎に小づかひ又三十錢渡したり。

四日　薄曇。猪三郎早朝より淺草に行く、母君小林君に金子の相談に參り給ふ、む

きなひを始めんといふにいさゝか也ともともとでなくては叶はず、せめては五拾兩ほどかり來んとてなり、されどももとよりの借もあり只にてはとて家に藏したる書畫類十幅斗をあづけんとす、父君愛し給ひしものながらこれをうらんとなさば二十金の直打もあらじ、何か外に添ゆるものあらばなど母君も妹もいふ、何かこれがあたいにとて乞ふには非らず、我れに信用あらば白紙一枚百金にもあがなはるべし、なくば一毛も六づかしかるべし、遺愛の甘棠きるなかれとさへいふを時のやみがたければこそ手ばなさんともいふなれ、みるめがらにては不孝の人にもならん、先づはおのづからに任せ給ひて我がこゝろのまゝを取つぎて始終の物がたりせさへ給いて、其上にかり出すことの出來がたければ夫までぞかしとて、母君に其品がきを參らす、正午少し前歸宅かしこにもいとこんざつなる事ありて成否まだ知れがたし、されどもいさゝかの綱が有りといふなり、夫より淺草に猪三郎のもとを母君訪ひ給ふ、田原町に家を持つ事に定めたれば也、此夜國子と共に近邊散歩、歸後夕立來る。

五日　薄ぐもりめづらかに涼し、奈良わたりのひでりにて水論しきりに起り、雨乞などの風說聞くさへ哀也。

四五日此方、横濱銀貨相場おびたゞしき亂高下にて中には店をとぢたるも有よし、獨り奇利をたくましくなしたるは正金銀行なりとか聞こえし。小林君より返書來る、金子調達なりがたし。此ごろかしましきもの、

教育宗教衝突事件、新聞に雜誌に議論かなへの沸く樣也。

　にくきものは、

密りよう船のはびこり、伊豆七島などにも出沒するよ。

　公使二人の上、

大鳥と大石といかならんとすらん。支那も朝鮮もかゝはる處ちかければ。千島かんもまだ裁判終らざるこそ心もとなけれ、反訴とかやにくき事をぞいふめる、わが判官べんごしらに明らけくさとき人ありてときふせたらむにはいかに嬉しかるべきにや。執達吏こそにくき役なれ、名のみ聞けば其人さへおに〱しく情なからむとおもふに、又相しりたる人などのそれに成りてさしもにくげなくなどさへあるはをかしきや。

　戀は、

見ても聞きてもふと思ひ初ぬるはじめいと淺し。

いはでおもふいと淺し、
これよりもおもひかれよりもおもはれぬるいと淺し、
これを大方のよには戀の成就とやいふらん、逢そめてうたがふいと淺し。
わすられてうらむいと淺し。
逢はんことは願はねど相おもはん事を願ふいと淺し。
相おもはんも願はず、言出んも願はず、一人こゝろにこめて一人たのしむいと淺し
名取川瀬々のうもれ木あらはればと人の爲我がためををしむらんたぐひ、うきに過たる年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものから身は引はなれてことさまに成行、さてはみさほを守りて百年いたづらぶしのたぐひ、いづれか哀れならざるべき、されどもこれらは戀に醉ひ戀に狂ひ、此戀の夢さめざらん中々此夢の中に死なんとぞ願ふめる、おもへばいと淺き事也。されども浦山しきは此さかひ成るべし、まこと入立ぬる戀の奥に何物かあるべき、もしありといはゞみぐるしくにくゝ、うく、つらく、淺ましく、かなしく、さびしく、恨めしく、取つめていはんには厭はしきものよりほかあらんとも覺えず、あはれ其厭ふ戀こそ戀の奥成けれ、厭

はじとて捨られなば厭ふにならず、いとふ心のふかきほど戀しさも又ふかゝるべし、いまだ戀といふ名の殘りぬる戀は淺し、人をも忘れ我をもわすれ、うさも戀しさもわすれぬる後に猶何物ともしれず殘りたるこそ此世のほかの此世成らめ、かゝるすゑにすべてたのしなどいふ詞を見出づべきにもあらず、さればくるしといふ詞もなかるべき筈と人いはんなれど、その戀あればこそ世にたゞよふなれ、捨たりといへど五體うごめき居らむほどは此苦も又はなれざるべし、佛者の佛ととなへ、美術家の美ととなふる、捨て〳〵すてぬるのちの一物やこれ。

六日　晴れ。芳太郎來る、奥田老人來る、暑氣あたりにやいたくよはりたる樣也。

七日　母君田部井のもとに衣類賣却の事たのみ參り給ふ、とても書畫などうりたりとてまとまりたる金子の得らるべきにもあらず、持つ人の手に有てこそ尊とびもせめ好まざらむ人には反古にもひとしかるべきを、いでやこれも父君のめで給ひしもの也冥々のさかひにおはしましてもをしませ給ふにや、買人なきこそよけれ、今はうらじさりとて金子の才覺はせざるべからず、大方の衣類うり盡しぬれど猶きぬちりめんのたぐひ一つ二つはあり、我が中島師のもとに會合などあらむ時の料なれどこれをしも

いふ時にあらず、さる頃まではいかに窮したりとも一つ二つは殘してさる時の用意になどもいひけれ、萬はみな非也けり、敷島の歌のあらす田あれにける樣を見しりけるより、すべてのよのあさましさはかなさまでおもひたどられて何か又さらに花々敷むしろにつらなりおこめかしくひゞらき居ぬべき心地もせず、萬骨をすてゝ市井のちりにまじはらむとおもひたちける身に、花紅葉何のうるはしき衣かざるべき、よしこれにて十金也とも十五金也とも得しほどをもてもと手とせむ、これをうしなはゞかれにつくべきのみとて成けり。

八日　晴れ。母君田部井に樣子きゝに參り給ふ。

九日　ふたゝび趣く、十五圓ならば買手ありといふ、二重どん子の丸帶一すぢ、緋はかたの片かはと繻珍繻子の片かは、ちりめんの袷衣二つ、絲織一つ也、夫にてよしとて約束なる、此夕べ西村君來る、事情ものがたりて道具を買ひくれ度よしたのむ爲まねきつる也。

十日　晴れ。田部井より金子うけとる。此夜さらに伊せ屋がもとにはしりて、あづけ置たるを出しふたゝび賣に出さんとするなどいとあはたゞし。兄君のもとにはがき

出す。

十一日　明日父君祥月命日なればたい夜として茶めしたき汁たてなどしてまねくといふほどならねど上野君を呼ぶ、午前より五時頃まで遊ぶ、此夜荻野を尋て荻野の妻來る。兄君來る、此度の計畫をもの語るに何事の可否もなし、もとより我がおもふにたがいたるはらからが如何樣の事なさんともそは關する處ならず、されども見給へ末終になしとげらるゝ物には非らじ、まことうきよのむづかしきを知り、たてたる心のをるゝ時あらば我も又よそに見んとはいはず、かしらを下げて來る事あらば母をも其身らをもやしなひては取らすべし、夫までの事は勝手たるべしとていとひやゝか也、深くかたる事もなくてふしぬ、暑さはげしく更るまで寢がたし。午後師君のもとに中元禮に行く。

十二日　早起兄妹三人築地に寺參りをなす、歸宅後疲勞ことに甚だし、午後より裁縫をする、芳太郎來る、猪三郎の日歩がしをせんといひ居るよしかたる、ことばに絕たるもの也。

号外來る、十一日午前九時發シカゴ博覽會特派員電文にいはく、昨日當會場に大火

あり、混雜甚だしく死者十七人と聞えし、いとみじかくて意を取がたけれど日本人はみな無事とありたるぞ先は嬉しき、母君田部井のもとに行く。

十八といふとし父におくれたるよりなぎさの小船波にたゞよひ初て覺束なきよをうみ渡ること四とせあまりに成ぬ、いたりがたき心のはかなさはなべてのよの中道を經がたくして、やう／＼大方の人にことなりゆくもとより我が才たらずおもふことあさからむをば恥おもへど、こゝろにはかりにも親はらからの言の葉にたがひ我がたてたる筋のみを通さんなどきしろひたる事もなきを、いかにぞや家貧にものたらず成ゆくまゝに此處にかしこにむづかしき論出來てたゞ我まゝなるよをふるとて、知らで母などをもくるしめ兄のたすけにもならざらんが如いひはやすよ、いでよしや大方の世はとて笑ふて答へざるものから、たれはおきて日夕あひかしづく母のあな佗し今五年さきにうせなば父君おはしますほどにうせなばかゝる憂きよも見ざらましを我一人殘りとゞまりたるこそかへす／″＼口をしけれ、否我が詞を用ひず、世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指すめる、邦も夏もおだやかにすなほに我がやらむといふ處、虎之助がやらむといふ處にだにしたがはゞ、何條ことかはあらむ、いかに心をつくしたりとて手を盡し

たりとて甲斐なき女子の何事をかなし得らるべき、おないや〳〵かゝる世を見るも否也とて朝夕にその給ふめる、母は子のこゝろを知り給はず、子も又母のこゝろをはかり難ければなめり、おもふ事おもふに違ひ世と時と我にひとしからず、孝ならむとする事はかへりて不孝に成行くげにかゝるこそ浮よ成けれと昨日今日ぞやう〳〵おもひしらるゝ。是非のめじるしあらざらむ世にたゞよふ身ぞかし、寄せかくる波は高し、我身はかよはし、折々には卷きさられんとするこそかなしけれ、福島中佐が踏分こしうらるの山は高かるべし、西比利亞の野の廣かるべし、冥々の中にひかえたる關のかくつらくかなしきを見ればいづれおなじき旅路也けり、こえ終らむほどは棺をおほふ曉なるから偖こそ善惡の評もさだまれ、今日此ごろの旅寢にしてほむるそしる聞及べき時にはあらず、かねてさだめ也、おもひたちたるまゝにとて。

十三日　晴れ。母君田部井にゆく、午後伊三郎盂禮に來る、日沒國子と近傍の寺廻りなす、伊三郎十時歸宅。

十四日　晴れ。母君田部井に今日もゆく、うりもの少し直段よく成たり、久保木佐藤盂禮に來る。

今日より新聞東京朝日にかへたり、小説は三昧道人、桃水痴史也。
久保木より李到來、母君菊地君もとに盆禮にゆく、隆一君新盆なればそなへもの持ちて。

安政年間子もり歌、

但し其ころの諸侯旗下などの中にのみとなへられけるものにや猶かんがうべし。

ぼうちやん明神樣へ行くときにや、栗毛のお馬にくら置いてむらさき手綱をお手にそへ、わかとー草履とりおやりもちで。はい／＼どう／＼と參ります、かへりのおみやは何であろ、

でん／＼大こに笙の笛、起上り小法師に犬はり子。

わらべ歌、

ほーたる來い、山みてこい、あんどの光りをちよいとみて來い。

子もり歌、

ねん／＼ころりこおころりよー。ねんねのお守りはどこへいた、山こえて川こえて

里へいた、おさとのおみやは何である、でん〳〵たいこに笙のふゑ。

塵の中（二十六年七月）

十五日より家さがしに出づ。朝日のかげまだ見え初ぬほどより和泉町、二長町、淺草にかけても鳥越より柳原藏前あたりまで行く。此度のおもひたちはもとより店つきの立派なるも願はず場處のすぐれたるをものぞまず、料ひくゝして人目にたつまじきあたりをとのさだめなれば、つとめて小家がちにむさ〳〵とせし處をのみ尋ぬ。はやうより世に落はふれてたよりなくさゝやかなる處にのみすみけるものから、猶門格子はかならずあり庭には木立あり家には床あるものとならひけるを、天井といはばくろくすゝけて仰ぐも憂く、柱ゆがみゆかひくゝ、軒は軒につゞき勝手もとは勝手元に並らびぬ、さるが上に大方は疊もなくふすまもなく唯家といふ名斗をかす成けり、はじめのほどはあまりの事にあきれて戸のそとより見けるばかり入りて尋ぬべき心地もせざりしが、かくて行々たりともはてもなしとまれ訪はんとて其隣の家につきてとふ親切にこれかれ語りて聞かするもあり、にく〳〵敷差配に行きて問ひ給へといふもあり、差配と聞えし男の四十斗にてかしらはげたるが帳場格子やうなるものをひかへて

そろばんはじき居るうしろに中元の禮にやもらひけんさゝやかなる砂糖袋さては素麺などやうのものをひしとならべていと鷹風にものいふもにくし。三くら橋と和泉ばしとのあはひなる小路に四疊半二疊二間なる家あり、店は三疊ばかりも板の間に成りて此處には疊もあり建具もつきけり、長屋なれどもさまできたなからず敷金三圓家賃壹圓八十錢といふ、それもよし是れもよし唯庭のいさゝかもなくしてうらは直にうら道の長屋の屋根につゞきて木立など夢にも見らるべきに非らず、うらみは是れと覺ゆるものから、猶母君に見せ參らせてよしとならばよしにせむといふ、くに子のしきりにつかれて道ゆきなやむも哀なれば、今日はこれまでよとて歸る、まだ午前成し、家にかへりて猶さま〳〵に相談なす、幾そ度おもへども下町に住まむ事はうれしからず、午後より更に山の手を尋ねばやといふ、庭のほしければなり。

　駒込、巣鴨、小石川邊はいづれも土地がら靜かによき處なれど、何がしくれがしの別莊など多く、我が樣なるいやしき商ひしたりとて買ふ人あるまじと覺ゆ、さては詮なし、牛込ならば神樂坂あたりこそと覺ゆれど、知る人ちかゝらむも佗しくかれこれさだまらずしてかへる、飯田ばしより御茶の水通りを來れば、今日は川開きとて此わ

たりに小舟うかべて客を引くよ、おかには馬車きしらせていそがするもあり、かちなるも美事によそほひ立てゝ其さまほこらしげなり、かへり見れば邦子のつかれにつかれけるあしを引きてしとゞ汗に成てしたがひ來るあはれ此人もふびん也、いといとけなきに父兄におくれて浮よめかしき遊びをもしらず、萬はかなくて送るほどにやうやう浮よのかはりものに成りて、春の花ののどかなるをのみ見こうれしとおもはぬほどに成ぬる。さてやこれよりの境界のあさましきをおもへば此人の爲も母の爲もかなしさは胸にみちてすゝむべき身もおぼえず、さりとて退ぞきて行かたもなし、心ぼそしとはかゝる時をこそ。

十六日　晴れ。母君西村に行く、道具の事につきて也。芳太郎並に山下直一來る、午後より山下次郎が頼み事にて梅吉を青柳町に訪ひ給ふ、今日は一日こんざつに終る。

十七日　晴れ。家を下谷邊に尋ぬ、國子のしきりにつかれこ行ことをいなめば母君と二人にて也、坂本通りにも二軒斗見たれど氣に入けるもなし、行々て龍泉寺町と呼ぶ處に間口二間奥行六間斗なる家あり、左隣りは酒屋なりければ其處に行きて諸事を聞く、雜作はなけれど店は六疊にて五疊と三疊の座敷あり、向きも南と北にして都合

わるからず見ゆ。三圓の敷金にて月壹圓五十錢といふにいさゝかなれども庭もあり、其家のにはあらねどうらに木立どものいと多かるもよし、さらば國子にかたりて三人ともによしとならばこゝに定めんとて其酒屋にたのみてかへる、邦子も違存なしといふより夕かけて又ゆく、少し行ちがひありて餘人の手に落ちん景色なればさまざまに盡力す。

十八日　晴れ。龍泉寺町のこと近邊なれば萬猪三郎にまかせたるに午後まで返事なし、さらばとて又母君と二人行く、道に行違ひて留守に行きけり、されども萬好都合におさまりたりと聞きしかばこれより轉宅のもうけをなす。

十九日　晴れ。早朝藤陰隱士をさるがく町に訪ひ二時あまりものがたりす、夫より伊東君を訪ふ、いづれも轉宅の事かたりになり、藤陰のもとには小說の事につきはなし多かり、此夕かけて道具を西村に持參、これをうりてあきなひのもと手になさんとて也、同じ道なれば師君をも訪ふ、病氣にて打ふし居給へり、もの語りしばらくおくらどの參られしかば夫にゆづりて直にかへる、家の片づけは久保木手傳ひて大方出來たり、今宵は何かむねさわぎて睡りがたし、さるは新生涯をむかへて舊生涯をすてん

ことのよこたわりて也。

廿日　薄曇り。家は十時といふに引拂ひぬ、此ほどのことすべて書つゞくべきにあらず。

此家は下谷よりよし原がよひの只一筋道にて、夕がたよりとゞろく車の音飛ちがふ燈火の光りたとへんに詞なし、行く車は午前一時までも絶えず、かへる車は三時よりひゞきはじめぬ、もの深き本郷の靜かなる宿より移りてこゝにはじめて寢ぬる夜の心地まだ生れ出でゝ覺えなかりき、家は長屋だてなれば壁一重には人力ひくおとこども住めり、商ひをはじめての後はいかならむ、其ものどもゝお客なれば氣げんにさからはじとつとむるにこそ、くるわ近く人氣あしき處と人々語りきかせたるが男氣なき家のいかにあなづられてくやしき事ども多からむ、何事もわれ一人はよし、母は老ひたり邦子はいまだ世間をしらず、そがおもひわづらふ景色を見るも哀也、さてあきなひはいかにして始むべきなど千々にこゝろのくだけぬ、蚊のいと多き處にて藪蚊といふ大きなるが夕暮よりうなり出るおそろしきまで也、この蚊なくならんほどは綿入きる時ぞとさる人のいひしが、冬までかくてあらんこと侘し。

井戸はよき水なれども深し、何事もなればかく心ぼそくのみあるべきならず、知る人も出來あきなひに得意もふゆべし、そは憂しとても程なき事也、唯かく落はふれ行ての末にうかぶ瀨なくして朽も終らばつひのよに斯い君に面を合はする時もなく忘られて忘られはてゝ我が戀は行雲のうはの空に消ゆべし、昨日まですみける家はかの人のあしをとゞめたる事もあり、まれにはまれ〳〵には何事ぞの序に家居のさまなりとも思ひ出でゝ我といふものありけりとだにしのばれなば生けるよの甲斐ならましを行ゑもしれずかげを消してかくあやしき塵の中にまじはりぬる後よし何事のようすがありておもひ出られぬとも、夫は哀れふびんなどの情にはあらで、終に此よを清く送り難くににごりにごりぬる淺ましの身とおもひ落され、更にかへりみらるべきにあらずかくおもひにおもへばむねつとふさがりていとゞねぶりがたく、曉のくるはやう聞えぬ、此宵は大雷にて稻づま恐ろしく光る。

廿一日　夕べより降ける雨なごりなく晴れていとしのぎよし、はがきしたゝめてこれかれ十軒ほど出す、今宵は少し寢られたり。

二十二日　晴れ。今日は土曜日也、小石川の稽古日いかならむとおもひやらる、母

君中橋の伊せ利を訪ふ、あきなひの事につきて也。逐籍のことたのみに久保木へ手紙出す、昨日今日は家内の掃除つくろひなどにてひまなし。

廿三日　晴れ。朝より伊せ利きたる、店に棚つりなどして午前をすぐ、午後かへるさながら問屋にかけ合ひくれんといふ、誰にまれ諸共にとあるに、さらば我を伴ひ給へとて共にゆく、門跡前に中村屋忠七とよべるが伊せ利の昔し馴染なるよしにて此處へ周旋す、五圓斗の品とゝのへくれよといふ、手つけとして一圓渡す、明日荷はもち込むべき約束、伊せ利は明後日朝かざりつけに來たらむといふ、諸事し終へてかへる此五圓の金も今は手もとになし、かねて伊三郎の夫ほどはかならず調へんといひけるをあてになしけるなれば、母君直に三間町に趣く、おもふまゝならぬこそ浮よ成けりな、伊三郎が妻昨夜より急病にて旅の空といひ持てる金も多からざる上、さる人にあづけたる金の返らざるなどにて右左むくよしもなき處へ故さとに殘したる妻も俄のわづらひにて留守の騷ぎ大方ならざるよし、秋蠶のはきたてにかゝりける最中男手なくして侘合へるもさこそと思へば、此地の人の病ひ少しひま見えば一度ふる鄉にかへりて又なす方もあらむなど、かしこにもいと難義の折からなりといふ、扨はせんなし、

この上は西村の方をといふ、今日上野君來訪されたり。

廿四日　早朝うす曇り。母君小石川に行く、正午ちかくまで歸り給はず、問屋より今日荷の來べき約なれにいか樣にせんと案じわづらふ、十二時母君歸宅、西村にてとゝのひ難しといひけるよし、かねて道具を引受けくるゝ約にて送り置ける其料二十金がほど早々といひけるを來月までといひ延びに成しなれど、かゝるいそぎの折から他に道もなし、五圓にてもよし、今直にをと母君の給ひけれど、三十日ちかくにはありいかにしてと斷りしかば、さらば何ほどなりとも出來るほどをとゝのへくれよ、かゝる次第なればと事のわけをうち明してたのみたまひけれど、いかにしても出來がたしと斷りける上、お常などの失禮なる詞いひけるよしの給ふ、かへるさに久保木にも賴みけれどもかしこにても出來ず、いかにせむとの給ふ、さてはせんなし、先づ問屋の方に斷りいひ置んとて直に家を出づ、田中より車にてはしらす、今荷ごしらへの最中成しかば事つくろいて一日二日の猶豫をいひ入る、こゝはわけもなくすみけり、これより直に伊せ利にも斷りいひやる、日沒少し前母君三間町を訪ふ、伊三郎すでに歸宅の後也、此夜かれがもとへ金子たのみの文を出す、國子と共に吉原にあそぶ、一々記

すことかたし、此日母君三枝を訪ふ。

廿五日　晴れ。母君中之町の伊せ久におちよどのを訪ふ、仕事のせ話をたのみになり、心よく引うけくれたるよしにてゆかた一枚持參、これを手みせにこれよりは絶えせず世話をなさんといひけるよし。國子直に仕たてにかゝる、此夕べ國子と共に三間町に病人の安否をとひ、歸路花川戸町、待乳山下、山谷ぼりより日本づゝみをかへる、いぬるまで國子と共に家の善後策を案ず。

落ぶれてそでに涙のかゝるとき人の心の奥ぞしらるゝとはげにいひける言葉哉、たらぬことなき其むかしは人はたれもたれも情ふかきもの世はいつとてかはりなきものとのみ思ひてけるよ、人世之行路難は人情反ぷくの間にあるこそいみじけれ、父兄よにおはしましける昔しの人も、こゝにかく落はふれぬる今日の人も、見るめに何れかはりも覺えざれど、心ざまのいろ〳〵をみれば浮世さながらうつろひぬる樣にこそおぼゆれ、さればこそ人に義人君子とよばるゝは少なく、貞女孝子のまれなるぞ道理なる、人は唯其時々の感情につかはれて一生をすごすもの成けりな、あはれはかなのよや。さりとては又哀れのよや、かの釧之助が我家に對して其むかし誠をはこびけるも

昨日今日のつれなき風情も、共に其こゝろのうつしゑ成けり、今にもあれ我が國子をゆるさんといはゞ手のうらを返さぬほどにそのあしらひの替りぬべきは必定也、をかしやうきよのさま〳〵なるこゝには又かゝる戀もありけり、其かみは我家たかく彼家いやしく欲より入て我はらからを得んといひ願ひけめ、やう〳〵移りかはりてはかしことみて我れ貧なるから恩をきせてをしいたゞかせんとや斗りつらむ、夫にもしたがふべき景色の見えぬをいとつらにくゝ口をしくおもひて、扨はこたびの事を時機におもひのまゝにくるしめんとたくらみけるにや、こは我がおもひやりの深きにて、あるひはさる事もあらざるべしとはおもへども、彼れほどの家に五圓十圓の金なき筈はあらず、よし家にあらずとて友もあり知人もあり、男の身のなさんとならば成らぬべきかは、殊に母君のかしら下ぐる斗にの給ひけるをや、とさまかうさまにおもへどかれは正しく我れに仇せんとなるべし、よし仇せんとならばあくまでせよ、樋口の家に二人殘りけゐ娘のあはれ骨なしかはらはたなしか、道の前には羊にも成るべし、仇とききゝてうしろを見すべき我にもあらず、虚無のうきよに好死處あれば事たれり、何ぞや釧之助風情が前にかしらを下ぐるべきかは、上に母君おはしますにこそ何事もやすら

かにと願ひもすれ、此一度のふみを出して其返事のも樣に寄りてはとおもふ處ありけり。

廿六日　雨。早朝西村に手がみを出す。字句つとめてうや〳〵しくひたすらにたのみてやる、母君中之町へ仕立もの、事につきて參り給ふ、午後出來あがりたるをもて又ゆく、我れは母も今日は例の血の道にてふしたり、母君日沒少し前三間町に見舞にゆく、あしき方成しよし、今日は終日ひやゝかにしてわた入羽をりきる人も見うけたり。

あはれいかにことしの秋はみにしまむ
　すみもならはぬやどの夕か是

いづれぞやうきにえたへで入そむる
　み山のおくの塵の中とは

御隱居樣など呼ばれけるは昨日也、こゝに移りぬる後はたれ一人むかしを知る人もあらじ、あやしき町風の詞にこそいはれんといひしに隣の妻の御隱居樣とやはりいふ、處から伊せの濱をぎもとの名をよばれんとしもおもはざりしを。

廿七日　晴れなれどはすゞし、すゞしといはんよりは冷やかなる方也。廿四日の寒

暖計正午時九十三四度とありしに、其夜より下りに下りて廿五日は七十度より八十度夜に入ては六十度にさへ成ぬ。昨日も今日も七十度代成り。午後區役處より呼出し來る、戸籍の事につきて也、母君地主に印もらひに行く、西村來る、金子たのみやりたるほどとゝのひ難しとて三圓持參。

又もえ上りたるは、相馬家の事件いかにおさまらんとすらむ。大石辭して大鳥君の兼任されけるより、朝鮮人その勢ひつよく成けるやにきく。天台道士杉浦君朝日の紙上に日支の關係を論ず、さりよと覺ゆる事多し。

廿八日　晴れ。寒暖計八十度なり。午前區役處に趣く、戸籍の上に少し違ひたる處ありて本郷の區役處に照會するなど今日中にはまだとゝのひ難し、此夜お若たのみにより伊三郎へ文を出す。

廿九日　晴れ。お千代どの及び五十二殿參らる、正午まではなして羽織一枚たのみ行く、酒井の娘二人我がもとへ下稽古たのみたしなどいふ、今日もさしたる事なし、夜に入てより伊三郎より手紙來る。

廿四日に出したる手紙の返事也、たのみつかはしたる金たしかに送るべきよしいひ越す、母君今日望月へ例月のもの取にゆく、一錢も出來がたくして歸る。

三十日　晴れ。何事もなし、夕刻吉田、野々宮兩君來る、野々宮君は廿七日歸京されたるよし、例の婚儀の約とゝのひて其支度の爲なるよしはかねて吉田君より聞居し事なれど、さも知らざるべし野々宮君のものいひたげに見ゆるもをかし、されど吉田君にはゞかりてにやこゝにてはいひも出さず。これより諸共に燈籠見にゆく、其道にてしか〲もの語るをかしきことゞも多かり、歸りしは十時頃なるべし、岩手みやげには名產豆銀糖とかや味はよからねどめづらしき物也、松島みやげの寫眞三葉、同じく穴なし竹の印材を送られたり。

三十一日　早朝雨ふる、量少なかりしかば今日はひねもすむして暑し、邦子職業の事につきて種々わづらひ多し、吉田野々宮のふたりに斗りて又せんすべも有べしとて此夜二人池のはたの吉田君がり訪ふ、歸りは九時成し、甲府伊庭より轉宅見舞狀來る伊せ久よりおいくどの來たりしよし。

八月一日　晴れ。芦澤今朝ならしのより歸京せしよしにて訪ひ來る、中之町の燈籠

今宵より又人形に改まるよしにて門すぐる車又おびたゞし、母君散歩ながら見に行、我れは七書をよむ。

此午前伊勢久がもとにたのまれの仕事母君持參、いたくほめられけるよし。

二日　晴れ。終日事なし、日暮てより望月の妻來る。二十五錢持參、廣瀬より爲替來る、此夜家內相談ありけり。

三日　曇り。早朝家を出づ、根津片町にほうづき屋を尋ね、上野をぬけて郵便局に爲替うけとる、金七圓也、それより門跡前に廻りて問屋に持込の事をたのむ、歸宅後直に伊せ利がもとへはがき出す、母君は廣瀬より來たりし由二圓をもちて伊三郎が留守宅にゆく、おわかに渡さんとて也。朝より今日は芳太郎來たりけり、午後より雨折々にふる、日くれてより國子と共に燈籠見にゆく、人形に變りける景況を見んとてなり、歸路雨になる。

人形は安本龜八及び門弟などの作なるべし。

東京名處成けり。

毎夜廓に心中ものなど三味線に合せてよみうりする女あり、歲は三十の上いくつ成

るべきにや、水淺黃にうろこ形のゆかたきて帶は黑じゆすの丸帶をしめ、吉原かぶりに手ぬぐひかぶりて、柄長の提燈を襟にさしたるさま小意氣にしやんとして其むかしは何成けん鶯なかせし末なるべきか、まだ捨がたき葉櫻の色を捨てゝのあきなひと見れば、大悟のひじりの心地もすれど、あるひは買かぶりの我れ主義にて仇な小歌の聲自まんこれに心をとゞめよとにや、すけんぞめきの格子先、一寸一服袖引たばこ、あがれあがるの問答に心うかるゝたはれをはしらず、粹が身をくふおもふどし二かしせかれてしのびあし、籬にからむつたのもん、松の太夫とさゝやきの哀れ命を引四つのかねに限り、ゑんをう瓦上おく霜の明日をゝまたじとおもひつめし身には、いかに身にしみて心ぼそかるべき、ほそく澄たる聲はりあげて糸の音色もしめやかに大路小路とながしゆくうしろ姿、これが哀か、かれが哀か。

一昨日の夜我が門通る車の數をかぞへしに十分間に七十五輛成けり。これをもてをしはかれば一時間には五百輛も通るべし、吉原かくてしるべし、さりながら多くは女づれなどの素見客のみにて茶屋かし座敷の實入りは少なきよしに聞く、伊せ久などにてすら客の一人もなき夜ありとかいひし、さなるべし、今宵九時まで見ありきける

うち、かんばんを提げたる茶屋送りの客は一人も見うけざりき、されど角ゑびのみは大景氣に見えけり、此夜江戸町に迷子を助く、四つ斗の男子にて何事も分からざりしには困りき、後にしれたるが父母及び他に男女二人三人あり、こゝはさほど雜踏の處にもあらざりしを迷子になしける親のいかにうかつに見ありき居けるにかをかし、さて我が子を尋ねあてぬれどさして我れ等によろこびを述べんとにもあらず、やがて又向ひの横町に伴ひ行きける、をかしき人もありけるものなり。

四日　晴れ。終日まちけれども問屋も來らず、伊せ利も來たらず、いかに行違ひしにかと一同まち侘ぶ、夕刻より問屋の樣子きゝに行く、違約のかどをいたく侘びて明日は早朝に持ち行くべしといふ、さらばとてこれより神田にゆく、雉子町の北川君がもとを訪はんとて也、途中にみやげもの買ひて三味せんぼり車にてゆく、邦子が友の中にて一の人と見えけり、少し輕忽にて重りかなる處は少なけれど馴れ安げに奥そこなきぞ却りては心深かるべきにや、詞つきも取なしも洒々落々せし人也、あきなひの事につきて種々たのむ、歸路はくらく成けり。

五日　晴れ。早朝根津のほうづき屋を訪ふはなしあり、下谷區役處に廻りて菓子小

賣の鑑札をうけんとす、いまだ戸籍の事さだまらざればとてやめになす、今日も午後まで問屋來らず、伊せ利の手つだひにとて一時ごろに來たりければ中村屋に約束の爲ゆく、直に送るべしといふ、二時までまてど來たらず、三時にもまだ也、四時も過けり、五時ちかく成りて來る、日沒までにかざりつけ濟たり、二間の間口に五圓の荷を入れけるなれば其淋しさおもふべし、幸ひに田部井よりがらす箱を買ひおきしかばそれにて少しものにぎやかしに成ぬ、伊せ利には一こん出す、十時ちかくまで飲みて話しけり。

六日　晴れ。店を開く、向ひの家にて直に買ひに來る、中々にをかしき物也、母君は例の奧田に利金拂ひ田部井に箱をあがなはんとて家を出づ、師君より書狀來る、一兩日中に伊香保へ湯治に趣き給ふよし、その留守にて我れ主と成りて數よみ催しくれよとの賴み也、斷りの文を出す。

文につけて思ひ出たり、伊庭のもとに一昨日はがき出したり。

夕刻より着類三つよつもちて本鄕の伊せ屋がもとにゆく、四圓五十錢かり來る、菊地君のもとに紙類少し仕入る、二圓ちかく成けり、今宵はじめて荷をせをふ、中々に

重きものなり、家に歸りしは十時ちかく成りき、持參の紙類明日の朝店に出すべき樣今宵のうちに下ごしらへをなす、十一時床に入る。

七日　晴れ。早朝花川戸の問屋に絲はりをもとめけり、しやぼんの割合中村屋よりは廉に覺えしかば一本もとめて來る、駒形の蠟燭屋にろうそくをかひ、看板の事などたのむ、歸宅後多事、西村より書狀來る、依賴なし置し金子ちか〴〵に出來べきもやうをいひこす、本日區役處より入籍の件に付呼出し來る。

今日は昨日にくらべて商ひ少し多し。

八日　晴れ。早朝髮をゆひて八時頃より區役處にゆく、母君の年齡芝區より間ちがひ來たりて今更に改たむること面倒なれば天保九年生れとなす、菓子小賣願ひの奥印をこひて東京府廳分署に行く、淺草南元町とて厩ばしのまだ先き也けり、印紙料三十錢、半年分税金五十錢を納めて事とゝのふ、歸路中村屋に蚊遣香の有無を問ひ、用たしすこしなす、他店のもやうをも知らんとて紙類少しづゝもとめ來る、今日のあつさは又おびたゞ敷、田圃道などは全く往來絕えたり、家に歸りしは正午、これよりしばしひる寢す、夕方より母君中の町に參らる、仕事持參、此夜習字。

此頃の事少し、

一墺國皇太子來朝、

一榎本子爵夫人たつ子死去、寺は駒込吉祥寺、葬儀五日。

一伊藤總理の息式部官勇吉君函館にて大負傷、墺國皇太子奉迎の爲趣きけるが乘船の折ボートに落ける也とか、性命も六づかしかるべしと聞く。

一知人笹岡君判事の退職を命ぜらる。

一朝日の小說一昨日よりなみ六になる、出しものは深見重三なり、例によつて例の如し。

九日　晴れ。早朝、二人あきなひあり、物馴れぬほどのをかしさは五厘の客に一錢のものをうり、一錢の客に八厘のものを出すなど、後にてしらぶればあきれたる事をのみなすぞかし、此まゝにてをしゆかば中々に利を見ることの出來得べきにもあらねど其うちには又其うちの利口生ずべしなど語り合ふ、伊せ久のお千代どの買ものに來る、二十錢斗商ひあり、午後上野君來訪、夕飯をいだす、日くれてより西村來る、

金十圓持參、上野の房藏君徵兵の抽せんにのがれけるよし。
十日　晴天。早朝母君と共に森下にて菓子箱を買ふ、歸路母君三間町を訪ひ給ふ、伊三郎がつま昨朝逃亡と聞く、驚愕直に山梨へ書狀出す、北川君のもとへは明朝菓子買出しにゆくべきよしはがき出す。

七つといふとしより草雙紙といふものを好みて手まりやり羽子をなげうちてよみけるが、其中にも一と好みけるは英雄豪傑の傳、任俠義人の行爲などのそゞろ身にしむ樣に覺えて、凡て勇ましく花やかなるが嬉しかりき、かくて九つ斗の時よりは我身の一生の世の常にて終らむことなげかはしく、あはれくれ竹の一ふしぬけ出てしがなとぞあけくれに願ひける、されども其ころの目には世の中などいふもの見ゆべくもあらず、只雲をふみて天にとゞかむを願ふ樣成りき、其頃の人はみな我を見ておとなしき子とほめ、物おぼえよき子といひけり、父は人にほこり給へり、師は弟子中むれを拔けて秘藏にし給へり、おさなき心には中々に身をかへり見るなど能ふべくもあらで天下くみしやすきのみ我事成就なし安きのみと賴みける、下のこゝろにまだ何事を持ち

て世に顯はれんとも思ひさだめざりけれど、只利慾にはしれる浮よの人あさましく厭はしく、これ故にかく狂へるかと見れば金銀はほとんど塵芥の樣にぞ覺えし、十二といふとし學校をやめけるが、そは母君の意見にて女子にながく學問をさせなんは行々の爲よろしからず、針仕事にても學ばせ、家事の見ならひなどさせんとて成き、父君はしかるべからず猶今しばしと爭ひ給へり、汝が思ふ處は如何にと問ひ給ひしものから、猶生れ得てこゝろ弱き身にていづ方にも〳〵定かなることいひ難く、死ぬ斗悲しかりしかど學校は止になりけり、それより十五まで家事の手傳ひ裁縫の稽古とかく年月を送りぬ、されども猶夜ごと〳〵文机にむかふ事をすてず、父君も又我が爲にとて和歌の集など買ひあたへたまひけるが、終に萬障を捨てゝ更に學につかしめんとし給ひき、其頃遠田澄庵父君と心安く出入しつるまゝに此事かたりて、師は誰をか撰ばんとの給ひけるに、何の歌子とかや娘の師にてとしごろ相しりたるがあり此人こそとすゝめけるにさらばとて其人をたのまんとす、苗字もしらず宿處をも知らざりしかば、荻野君にたのみて尋ねけるに、そは下田の事なるべし、當時婦女の學者は彼の人を置て外にあるまじとてかしこに周旋されき、然るに下田ぬしは當時華族女學校の學監と

して寸暇なく、内弟子としては取りがたし、學校の方へ參らせ給はゞとの答へなりけれど、我がやうなる貧困なる身が貴紳のむれに入なんも侘しとてはたさず、兎角日を送りて或時さらに遠田に其はなしをなしたるに我が歌子と呼ぶは下田の事ならず、中島とて家は小石川なり、和歌は景樹がおもかげをしたひ書は千蔭が流れをくめり、おなじ歌子といふめれど下田は小川のながれにして中島は泉のみなもとなるべし、入學のことは我れ取はからはんに何事の猶豫をかしたもふとてせちにすゝむ、はじめて堂にのぼりしは明治十九年の八月二十日成りき。

七月廿日より三十一日までの家賃六十錢三十一日渡す。

八月三日二十錢芳太郎に渡す、殘金四十錢に成けり。

八月二日望月より二十五錢來る。

神田雉子町三十番地　北川秀子

本郷區根津片町十一番地　太田芳之助

小石川表町六番地

淺草三間町二十番地

猿樂町二丁目二番地川合直方

西村銑之助

廣瀬伊三郎

山下直一

塵中日記（二十六年八月）

十一日　晴天。朝まだき家を出づ、北川君の許へ着きけるが漸く五時半頃なりけん藤兵衞老人の周旋にて菓子並びに手遊ものなどのかひ出しをなす、まだ生れ出てよりかゝる處の景況を知らざる身にはそゞろ恐ろしきまでものはげし。

正午少し前家に歸る。かざり付くるも遲しとばかり買ひに來たる子供あり、よろづものなれずして間違ひのみ多きもをかし。

十二日　晴れ。母君は小石川、本郷、あのあたりに禮參りに行き給ふ。今日のいそがしさは又無類成らん、さて賣上の金はと問へば二十八九錢成しなるべし。

十三日　晴れ。かひ出しに多町へ行く。今日のうりあげは三十三錢。

十四日　晴れ。また多町にゆく、歸路はくるま。今日のうりあげ三十九錢。

十五日　晴れ。今日も相應に賣れたり。

十六日　雨。家のふしんをなす、商ひを始めざりし頃はさのみにも思はざりし店つきの兎角に都合好からねばこれを直さんとてなり、一日にして事終る。今夜野々宮君

大久保君來訪。

十七日　晴れ。多町にかひ出しに行く。今日墺國皇族新橋に着、市中國旗をかゝぐ

十八日　朝來あれもやうにて風ものすさまし。

歸宅後更に大音寺前にせんべいをあつらへ、駒形に蠟燭の註文をなし。門跡前にしぶ團扇をあがなひ來る。

今日下駄をもとむ、後齒の白木にてさらさ形の革鼻緒成りしが、代金二十錢成し。

夕刻より雨になる、風力さらに加はりてほとんど嵐に似たり、戶を明け置く事あたはざればはやくおろしてふしたり。

十九日　晴れ。風あらし。午前より西村の母君來訪、例の緣邊の事につきてはなしあり、夕ちかく歸宅されき。

明日は鎭守なる千束神社の大祭なり、今歲は殊ににぎはしく山車などをも引出るとて人々さわぐ、隣りなる酒屋にて、兩日間うり出しをなすとて、かざり樽など積みたつるさま勇ましきに、思へば我家にても店つきのあまりに淋しからむは時に取りて策の得たる物にあらじ、さりとてもとでを出して品をふやさん事は出來うべきにもあら

ずよし出來たりとてさる當てもなき事に空しく金をつひやすべきにあらず、いでや中村やに行きてかざり箱少しあがなひ來んとて夜に入りてより家を出づ、今宵即座に間に合はざりしかば明日のあさ持參すべき約束にさだめてまつち五十錢ばかりをあがなひぬ、そは金がさ少なくして見場のよければなり。今夜は更るまで大多忙。

二十日　早起。雨もやうなり。多町にかひ出しに行かんも如何などしばしたゆたひけるが兎も角もとてゆく、歸りしは十時頃なりし。夫より門跡前にゆき、かざり箱並にみがき砂の類かひ來る、一日大多忙。商ひは壹圓ばかりありき。日暮れてより雨になる。

廿一日　山車神輿の渡御などいとにぎはし、されども商ひは多からず、然るは子供達の大道商人に引取られてなり。

廿二日　晴れ。

廿三日　はれ。

廿四日　はれ。今日は商ひ例より多し。各縣下暴風雨の報あり。

廿五日　晴、早朝芳山來る、廣瀨の事につきてなり。

今日も一日雨にくらしつ。

此處四五日、身のせわしさなみならざるが上に、腦のなやみつよくして寐たる日もあり、すべて日記を怠りぬ。

此頃の事

牛込原町中川三吉所有地處土窟のこと。

岐阜、愛知及び各縣下暴風雨洪水の件。

星亭並に相馬家の件。

九月一日　早朝より例の腦病起りてしばしもたつことあたはず、終日ふしたり。午後より雷雨おびたゞし。

三日　奈良孝太郎君厩橋邊なる質商佐野屋方へ奉公に赴く。

四日　早朝より多町へかひ出しに行く。前雇人吉太郎が八百屋になりたるに逢ふ。飯田町に芦澤が爲替うけ取る。

この日、狂風砂塵を卷きて、御成道、廣小路あたりは面を向くる方もなし、車にて

かへる。

廣瀬伊三郎歸京、參り居りしかど、腦痛はげしくしばしも起居ることかなはねば其まゝ打ふす。

此の一日二日腦痛烈しく、大方打ふしぎりなりしかば、日記も物せず。

七日　午前五時築地本願寺別院小使部屋より出火、太子堂を殘して悉皆燒失せり。

八日　晴れ。

十五日　廓内俄はじまる、母君切符を人に貰ひて、檢査場に勢ぞろひ見にゆく。

十六日　母君菊池君に行く、留守にて風船を仕入る。

十七日　中島師君より手紙來る。

十八日　星野君の郵書鎌倉笹目が谷より來る。

十九日　四五日腦痛烈しく、加ふるに商業忙しくして、何事をも物せず。

二十日　雨降る。彼岸の入りなり。

廿一日　おなじく雨。

此の頃の賣高、多き時は六十錢にあまり、少なしとても四十錢を下る事はまれなり

されど大方は五厘六厘の客なるから、一日に百人の客をせざる事はなし、身の忙しさかくて知るべし。

廿三日　薄ぐもり。早朝金杉なる菓子のおろしやに行く、こは毎朝の例なり。歸宅直に食事したゝめて、神田に繪紙かひ出しにゆく。

廿四日　雨少し降る。

過去無數の諸佛にも捨てられたるをばいかゞせん、現在十方の淨土にも往生すべき心なし、たとひ罪業おもくとも、引接し給へみだ佛。

　　尋ぬべき君ならませば告げてまし
　　　入りぬる山の名をば夫れとも

けんもんしやの兩面の水干に袖むらごに雀の居たるをぞ縫ひたりける、紫裾濃の袴をぞ着たる。

うすごうりにごる。

中々にたゞよふも亦おもしろし
　月の前ゆく空のうき雲

思ひかね妹がりゆけば冬の夜の
　川風寒み千鳥鳴くなり

世の中は何方かさしてやどならむ
　行とまるをぞかぎりと思はむ

下谷千束町三丁目十番地
　　あらもの屋

御徒町二丁目二十五番地
　　竹内　兼吉

塵中日記（二十六年十月）

今是集

いみじくおこたりにける哉此日記よ、今日いゝかしるさゞりけむ、家のうちのことよの中のこと一時として靜にあるべきかは、目になれ耳に聞えけるものしたがいておもひに成ぬるいとさわなれどこれをしも今しるさむとすればわづらはしさの堪え難きをいかゞはせむ、いざゝらば昨日の我に耻づる身ながらこりずまに今日是とみる所をしるさまし。

十月九日　晴れ。此二日より晴雨とも日々圖書館にかよいて暮しけるが今日はえゆかで奥なる一間にこもりて書をよむ、店は昨日一昨日よりうれ高いと多く成りて邦子のいそがしきこと起居ひまなし、さるは近き處にもとより有ける家の我家にうりまけて店をとぢけるが二軒あるよしに聞けばそれが爲なるにや、さしもきそひ心などの有るにも非ず、おのづからにまかせて商ふものから店をあづかる國子に運といふものあ

ればなるべし。

十日　晴れ。早朝神田へかひ出しにゆく、一昨日かい來たりし半箱の風船の昨日中にうれ切れに成りしかば、さらに一箱もとめになり。

塵中百首　　　樋口夏

秋朝

秋ふかく成にけらしな朝日かげ
　　はれたる空もさびしかりけり

秋夕

村がらす寝にかへりゆくこゑすなり
　　あなみじかゝる秋の一ひや

秋夕雲

紅葉のうへのみならで夕日かげ
　　うつろふ雲もくれなゐにして

野徑秋夕

鶉なく聲もきこえて花すゝき
　まねく野末の夕べさびしも

水郷秋夕

舟うたの聲うら淋しかり寢する
　淀の渡りの秋の夕暮

遠村秋夕

遠ざかるこゝちこそすれ夕ぎりの
　いや隔ゆく山もとのさと

山家秋夕

おもひすてゝ入ぬる山のかひぞなき
　秋の夕べは袖のぬれつゝ

閑居秋月

花薄まねく人さへなかりけり

あはれ淋しき宿の夕暮

秋夜

夜はなが〳〵成にける哉花がたみ
おさなきめさへさめがちにして

秋夜雨

いつのまに降出ぬらむさよ更て
むしの音しめるにはの村雨

秋野

岐もなく成にける哉八千種の
野はいろ〳〵の花にうもれて

秋野露

淺ぢふの小野のしの原しら露を
玉とちらして夕風ぞふく

秋海

わだの原けぶりたてゆく大ふねの
　別れやいかに秋の夕ぐれ

秋里

からごろも打おとさへも高やすの
　さとの寢覺やさびしかるらむ

稻葉風

春がすみ立別れしはいつならん
　いなばの風に雁のねぞする

鶯花契我春

契るらんいく萬代の春かけて
　みそのゝ梅に鶯の聲

よろづよを契りかはして梅の花
　かをればうたふそのゝ鶯

鶯の聲の春さへのどかなり

よろづよにほふその〻梅がえ

十一日　晴れ。今日は一日机邊にあり。
十二日　曇り。今日も多町に風船のかひ出しをなす、午後より雨ふる。
十三日　雨。議會召集令出る。十一月二十五日。
十四日　おなじく。
十五日　風雨はげし。岡山德島洪水の報いたる。
十六日　雨。朝日新聞社員横川勇次君占守より歸京、同十七日より北海の實況紙上にあらはる〻よしに聞く。

兒ちとせ

過去無數の諸佛にもすてられたるをばいかにせむ、
現在十方の淨土にも往生すべき望みなし、
たとへ罪業おもくとも引接し給へみだぼとけ、

今一人の子

尋ぬべき君ならませばつげてまし

いりぬる山の名をばそれとも

一相馬事件いつあきらかに成るべきにや、墓地發堀、死體解剖など漸く歩をすゝめて今は殘る所あるまじとおぼゆれど、すべて秘密を旨とすれば何事もまだ五里の霧中なり、さるが上に又井戸川忠とか呼べるはんじの新訴狀を奉りたるさへあるやにきく、斯していつはつべきにや。

一密獵のこと去歳よりことしは多しと聞く、又來るとしはいかなるべきにや。

一伊藤勇吉君きずいえて參內、御禮申上ぬるよし。

一しかご博覽會日本品好評のよし。

一かしましかるべきものよ又ことしの議會。

一あさましきもの　月日にそひゆくわいろ沙汰。

一巣鴨の某の町なる車夫名はわすれしが老父に孝なるをもて官より黄綬章をたまふ。

一後藤大臣及び齋藤次官の前途いかならむとすらむ、かの取引所條例の通過に際し密に內議にあづかりたりとのこと斗らずも改進新聞對星亭誹毀事件の公判より世にあらはれそめしかば朝野の一問題と成ぬるをや、第五議會の開設も近づきぬる今日此

頃。
十七日　大雨。岐阜、岡山及び各府縣の暴風雨のさた聞くもすさまし。
十八日　雨やうやくやむ。午後西村母君來訪、釧之助に緣談とゝのひぬるよし。
十九日
二十日　母君小石川によろこび持參。
二十一日　今日はにし村が婚禮なり。
二十四日　雨。相馬家事件局面一變、順胤君はじめ被告一同無罪被免、原告錦織夫妻辯護士岡野寬及び山口豫審判事拘引せらる。
二十五日　晴れ。午前神田にかい出しをなす、午後平田禿木子來訪、來月の文學界にかならず寄書なすべきよしを約す、七月以來はじめて文海の客にあふいとうれし、旅宿は日ぐらしのさと花見寺の隣家にて妙隆寺とかいへるよし、此夜田邊查官來訪、貧民救助の事につきてはなしあり、緣談の事申來る。
二十六日　雨。
此ほどしるすべきことなし。

三十一日　文學界十号及び五号以下を送る。
十一月一日　晴れ。多町にかひ出しをなす。
二日　久保木姉君來訪、金子の事たのむ。
三日　晴天。皇運萬歲。
四日　圖書館に書物みる、本日平田君より書狀來る、久保木より秀太郎金子持參、金五圓なり。
五日　多町にかい出し、さくら香より小間物仕入る。
六日　圖書館にゆく、本日より十二日まで虫ぼしの爲閉館のよしやむを得ずかへる今日もかい出し多し。
七日　晴れ。
八日　薄ぐもり。今日は初酉なりとて例の通り市どもたつ、日くれ前少し人の出はげしかるべき頃より雨ふり出づ、周章狼狽といふの外なし、おもはぬ儲は馬車、人力、飲食店、かさやなどなり。
九日　晴れ。多町にかひ出し。

十日　はれ。
十三日　山梨より廣瀨來る、例の訴訟事件にてなり、今宵我家に一泊。
十四日　はれ、初霜しろし。

日暮里花見寺の隣
妙隆寺內
平田禿木

千束町二丁目二十五番地
廣瀨伊三郎

北かく全盛みはたせば　軒は提灯電氣燈
いつもにぎはふ五丁町　むかしにかはらぬ別世界
春は櫻を植ならべ　秋は燈籠に初にわか
毎日毎晩客の山　日曜旗日は猶のこと
三味せん太このたえまなく　シャン〳〵〳〵の手をそろい

これも勉強するが爲　勉強するのもさとの爲
全盛じや〳〵愉快じや〳〵　萬歳〳〵萬々歳

男仁和賀福島中佐の内
全盛歌

麴町元その町一丁目十八番地
ストロング長生堂
定價十錢郵券代用一割まし
外に郵送料二錢

塵中日記（二十六年十一月）

人しらぬ花もこそさけいざゝらば
　なほ分け入らむはるのやま道

わだつみの沖にうかべる大ふねの
　何方までゆくおもひ成らむ

さとれば去此不遠、
まよへば十萬億土、

雲まよふ夕べの空に月はあれど
　おぼつかなしやみち暗くして

有無ふたつなし一切無量、

花ちらすかぜのやどりも何かとはむ
　ながれにまかす谷川のみづ

十一月十五日　師君を小石川にとふ、七月の十九日に別れけるより今日をはじめて

也、かたみにいはんとする事多かり、思ひせまりては涙さへさしぐみてとみには詞も出ず、およそ半としがほどにかはりけるよの中のさま〴〵を正木のかづら散々にかひつゞくれば、

水野せむ子ぬし會津侯に嫁せられたる。

龍子ぬしの子うみたる、女子にてしかもすこやかに大きなる子のよし、

中村禮子ぬしのつまをむかへて又さりたる、師君が養子を呼たる、大野さだ子のうせける、加藤のつまの足痛になやむなる。

猶社中にあたらしき弟子のましたるなど種々多かるが中に、舊に依て舊にことならざるは稽古の土曜日なる、日の短長を問はず二題四首詠、花にたはぶれ月をもて遊びうきよはよしや浪たゝばたて風ふかばふけ枕言葉に風情をやしなひ、野川の名處に文學のたらざるをおぎなふ仙人界のゝどやかなる、さては梅のや、くちなし園がをかしきなからひなどのみぞことなりたる處もなきや。

もとよりせまからざる家の又去年にことしとたてそへたる室どもかぞふれば十にも

ちかゝるべし、庭はたくだが手を盡くし、家の内のかざりにこがねをしまねば物とゝのひてたらざる處もなし、身は今のよの女傑とたゝへられて、ふるびたる門表にさへ光りある如く、出入くろぬり車につかれをしらず、あやにしきはつんでくらにみつべし、今日は式部長宮鍋島侯のもとに祝宴ありとて冬の月よのすさまじからぬほどによそほひをこらせば、こし元はした右左に助けて衣裳つけおごそか也、入てはうやまはれ出ては尊とばれ、かくて天年を終りたまはむには、かしつぎの小枝さへさだまり給へり、何事の思ひあらじとおもふを、猶述懷の詞にいはく、あはれ何方の野にまれ山にまれわたり尺なる金剛石一つほり出してし哉、我世を終るまでの財とぼしからず持たらんには、うきよを毀譽の外にのがれてこゝろのどかに送りぬべきものを、よに交はればこゝろのほかのへつらひも言はざるべからず、おもひのほかの仕わざをもなすべし、今年二十若からんにはあらん限り力を盡しあらんかぎりの樂をなしたりとも老ての樂をこゝろがくべけれど、今さらの齢の末に我力もてわがよをのどかにと願ふとも及ぶべきに非ず、あはれ慾ならねども尺の金剛石は得まほしきぞかしとの給へり、

三寸の舌にきよを出してしかも浮よのきよをば厭ひ給へり、何故ぞこゝろの中の金剛石をすて。さのみ野山にもとめ給ふらむ。これをみがゝばまづしき人をとめる人にいたし。にごりたる身を淸らかにもなすべし。たとふるに塵世はくされたるくつの如きか、これが取捨はすべて我こゝろのまゝならずや。有財無財何のかゝはりかあらむ、さるも猶すてがたしとあるはそもやうきよの風情にて、かくてぞ戀を出し、迷ひを出し、義理とからみ、欲となづけ。五十歲を苦樂のちまたにさまよわすなれ、おもへば塵中又をかしからずや。

椽に出て見れば黄白のきくにほひこまやかに、露にぬれたるけしきもなつかし、我も昔しはこゝに朝夕をたちならして一度はこゝの娘と呼ばるゝ斗、はては此庭もまがきも我がしめゆひぬべきゆかりもありしを、今はた小家がちのむさ／＼しき町にかたゐ乞食など樣の人を友として厘をあらそひ毛を論じてはてもなき日を過すらむよ。家にありてはさりともおぼえざりし惑の此處の景色にもよふされてにや、何故とはしらず涙さへさしぐまるゝよ。

さて何故の涙なるらむ。かくあやにしきのよを經んとならばあながちにくるしみも

だへずして過されぬべき一生を我から落て流れゆきし今日、滿足の笑みに物おもひわらざるべきをあなものぐるほしや、我れにこゝろ二つあるか、もしはこゝろに眞僞あるか、こゝろにむかひてこゝろの僞をいふか。

こゝろにいつはりなし、はた又こゝろはうごくものにあらず、うごくものは情なり、此淚も此笑みも心の底より出しものならで、情に動かされて、情のかたち也。

師は我が訪ひしを喜びて、とみには行くべき處に出でもやらず、何くれかくれもの語に時のうつるをゝしみ、我も又たち別るべき方を忘れて今しばし〳〵と語る、此中に紙一枚の隔てもなく、師は誠に慈愛深き師也、弟子は誠に溫良の弟子也。

かつて浮薄の徒とのゝしり、僞賢の人とうしろ指さしたる師は何方あげたりけん、をしへにもとり我身をたつる不良の子とあざみし弟子は何方にさりけん、

たとへば魚の水における如く、何故ともしらず愉々快々に半日を暮しぬ、此間のこゝろいにし半井ぬしを訪へる時のおもひにおなじ。

げにや花はさかりに月はくまなきをのみめづるものにあらず、ひとへに相見るをのみ戀といふかは、谷間の水の下にしのび、高峯の花の折られねばこそもだえ〳〵てお

もひはますらめ、たとへば芝居に遊ぶ日の見だらん後は見ぬ前にまさりやはする、いにしへ人のいはゆる苦は樂の種ならずして苦中の奥が則樂也。

あらゆるうきよをつまはじきせしも僞り、あらゆるうきよに爪はじきせられしも僞り、おもへば此戀の誠をしらざりしなり、うきよ行く處として善人なからむ、はた又惡人なからむ、萬人が萬人に對しての處爲はしらず、我が見るめひとつにては何方いかなる處にも至美至善なる人はあるべし、我が滿足を得んと思はゞつねに滿足ならぬほどになしたるぞよき。滿足の上に滿足あらんやは、もちの夜くもりて月もかくるゝならひぞかし。

十六日　雨。圖書館にゆく。

十七日　はれ。

十八日　はれ。禿木子來訪、文界の事につきてはなし多し。

十九日　はれ。神田にかひ出しす、明日は二の酉なれば店の用事いそがはし。文學界に出すべきものもいまだまとまらざる上に、昨日今日は商用いとせわしくわづらはしさたえ難し。

二の酉のにぎはひは此近年おぼえぬ景氣といへり、熊手、かねもち、大がしらをはじめ延喜物うる家の大方うれ切れにならざるもなく、十二時過る頃には出店さへ少なく成ぬとぞ、廓内のにぎはひおしてしるべし。

よの中に人のなさけのなかりせば

ものゝあはれはしらざらましを

二十一日　晴れ。

二十二日　おなじく。

二十三日　星野子より文學界の投稿うながし來る。いまだまとまらずして今兩日は夜すがら起居たり。

二十四日　終日つとめて猶ならず、又夜と共にす、女子の胸はいとよはきもの哉、二日二夜がほど露ねぶらざりけるにまなこはいとゞさえて氣はいよ〳〵澄行ものから筆とりて何事をかゝんおもふことはたゞ雲の中を分くる樣にあやしうひとつ處をのみ行かへるよ、いかで明日までにつゞり終らばや、これならずんば死すともやめじと只案じに案ず、かくて二更のかねの聲も聞えぬ、氣はいよ〳〵澄ゆきぬ、さし入る月の

かげは霜にけぶりて朦々朧々たるけしき誠に深夜の風情めにせまりてまなこはいとゞさえゆきぬ、かくても文辭は筆にのぼらずとかくして一番どりの聲もきこゑぬ、大路ゆく車の音きこえ初ぬ、こゝろはいよ〳〵せはしく成てあれよりこれに移りこれよりあれにうつり、筆はさらに動かんともせず、かくて明けゆく夜半もしるく、向ひなる家となりなどにて戸あくる音、水くむなどきこえ初るまゝに唯雲の中に引入るゝ如く成て、ねるともなくしばしふしたり。

二十五日　はれ。霜いとふかき朝にてふとみれば初雪ふりたる樣也。ねぶりけるは一時計成けん、今朝は又金杉に菓子おろしにゆく、寒さものに似ざりき。しばしにてもたましゐをやすめたればにや、今日は筆のやすらかに取れて午前の内に淸書を終りぬ、郵書になして星野子におくりしは一時頃成しか。

午後禿木子にはがき出す。

菊池隆直殿參らる、隆一君が一周の祭なりとてむしもの到來、廿六日にとて母君を招く。

廿六日　晴れ。寒し、今朝洲崎辨天町火あり、夜の三時頃よりと聞えしかば過半は

やけうせしなるべし、母君正午時より家を出給ふ、留守上野君來訪、あはれなるけしきなり。

廿七日　晴れ。天知子より狀來る、一兩日中に來訪あるべきよしなり。

廿八日　はれ。國子吉田君を訪ふ、野々宮君のことにつきて悲慘のはなしあり、今日前なる家より小兒の誕生日也とて赤飯送らる、いはゐもの持參。

廿九日　晴れ。禿木子より狀來る、歌あり、

　音にきくさとのほとりに來てみれば
　　うべこゝろある人はすみけり

とやありし、天知子よりの文は詞のたくみあり、ものなれ顏にさら〳〵としたるものからいひもてゆけば事好みたらむ樣にもみゆめる、禿木子のはまだわかくやはらかく愛敬ありてとゝのはざるしも末たのもしき樣也。今宵くに子と共に吉原神社の緣日みる、例の歌うたひが美音をきく。

三十日　雨。

十二月一日　晴れ。文學界十一号來る、花圃女が文章めづらしくみえたり、山の井

勾當がことを書しなるが文辭いたく老成になりてこゝ疵とみゆる處もなくとゝのひゆきぬ、今の世に多からぬ女文學者の中この人などやときは木のたぐひには後のよまで傳はりぬべきなめり、おのづから家の筋人ざまなどもうちあひて。

孤蝶子がさかわ川、無聲が哀縁などをかしき物なり、哀縁はおきてさかわ川はいん文といふべき物にもあらず、五七の調にてうたふべき樣にもあり、淨るりに似て散文體にもあり、今一息と見えたり。

いひふるしたるみじか歌の月花をはなれて今のよの開けゆく文物にともなひ難きあまり新體などいふも出くめり。もとよりさえかしこく學ひろき人々がものすのなめれど、猶わかう人が手になれるは好みにかくよりすきにへんしてあやしうこと樣のものになれるもあり、よに人の指さしわらふもげにと覺ゆることなきにしもあらず、さりとてみそひと文字の古體にしたがひて汽車汽船の便あるよにひとりうしぐるまゆるゆるとのみあるべきにあらず、いかで天地の自然をもととして變化の理にしたがひ、風雲のとらへがたき、人事のさま〴〵なる三寸の筆の上に呼出してしかな、さはいへかくおもふは我人共の願ひなるべけれどそは天才といふ人の世に出ざるかぎり成りたつ

まじきものなるにや、俗中に風流ある風流のうちに大俗あり、新たい詩歌の俗の樣に覺えて、かのみぢか歌のみやびやかに聞ゆるはならはしのみのしかるにあらず、人の心に入て人の誠をうたいしかも開けゆくよの觀念にともなはざれば也。詞はひたすら俗をまねびたりとも氣いん高からばおのづから調たかく聞えぬべし、さても學び易くしてうたひがたきは猶この道の奧にぞある。

此夜号外來る、議長不信任問題上奏案の可決なしたるよし。

二日　晴れ。議會紛々擾々、私行のあばき合ひ、隱事の摘發、さも大人げなきことよ。

半夜眼をとぢて靜かに當世の有さまをおもへばあはれいかさまに成りていかさまに成らんとすらん、かひなき女子の何事をおもひたりとも猶蟻みゝずの天を論ずるにもにて我れをしらざるの甚しと人しらばいはんなれど、さてもおなじ天をいたゞけば風雨雷電いづれか身の上にかゝらざらんや、國の一隅にうまれ一隅に育ちて我大君のみ惠に浴するは彼の將相にも露おとらざるを、日々せまり來る我國の有さま川を隔てゝ火をみる樣にあるべきかは、安きになれてはおごりくる人心のあはれ外つ國の花

やかなるをしたひ我が國振のふるきを厭ひてうかれうかるゝ仇ごゝろは、なりふり、住居の末なるより、詩歌、政體のまことしきにまで移りて、流れゆく水の塵芥をのせてはしるが如く、何處をばとゞまる處としらず、かくてあらはれ來ぬるものは何ぞ、外は對韓事件の處理むづかしく、千島艦の沈沒も我れに理ありて彼れに勝ちがたきなど、あなどらるゝ處あればぞかし。猶條約の改正せざるべからざるなどかく外にはさま〴〵に憂ひ多かるを、內は兄弟かきにせめぎて黨派のあらそひに議場の神聖をそこなひ、自利をはかりて公益をわするゝのともがらかぞふれば猶指もたるまじくなん、にごれる水は一朝にして淸め難し。かくて流れゆく我が國の末いかなるべきぞ、外にはするどきわしの爪あり、獅子の牙あり、印度、埃及の前例をきゝても身うちふるひ、たましひわなゝかるゝを、いでよしや物好きの名にたちてのちの人のあざけりをうくるともかゝる世にうまれ合せたる身のする事なしに終らむやは、なすべき道を尋ねてなすべき道を行はんのみ、さても耻かしきは女子の身なれと、

　吹かへす秋のの風にをみなへし

　　ひとりはもれぬものにぞ有ける

四日　晴れ。神田にかひ出しをなす、久し振にて伊東の夏子ぬしを訪ふ、もの語り多くて日沒ちかくまで話す、宇治拾遺並びに西行選集鈔かり來る。

七日　晴れ。多町にかひ出しながら喜多川君に菓子箱かへす、歸路奧田に利金入るゝ、此日伊三郎より金五圓かりる、高利の金にて俗に日なしといふもの也、かゝる事物覺えてはじめての事なり、此夜山梨縣に手紙出す。

金子のこと後屋敷に申つかはし、雨宮のもとへも賴み文出す。

八日　晴れ。母君神田邊より本鄕に趣き給ふ、久保木に金子のことといはんとてなり

此日淺草紙二しめ仕入る。

伊東君のもとにて聞ける事よ、彼のほし野天知子が今日斯道にこゝろを盡すことの本末もあら〳〵知られぬ、はやうまだ年などのいとけなかりし時の事也けん、唄ひ女とか聞えし娘にはあるまじき人に迷ひて、いか成けるにか遂に狂氣したりけるを、小松川の病院に久しく有ていえたる成りとか、あはれ悲戀のこゝろをつねにうたひて文辭の我等が胸をさすも實にかゝればこそかゝるなれとおもひ當りぬ、あはれはかなの人や、今日此ごろのおもひよ、空なる月日の雲はかゝれど靄はおほへど上は明らかには

れたるがごと、たのしみくるしみ身をはなれて一人もの靜にあるべきにや、さらずば迷雲折々にかゝりて一歩地にあり一歩天にあり、道の二道を知り絲の黑白をおもひ、なきて然かしていよ〳〵くるしむの人か、問ひがたきこゝろの底いよ〳〵哀なり。

十六日　雨宮にはがき出す、かの後屋敷のことたのみやゝたるより日かず今日までに成りぬれど、例のたよりも聞えざれば其返事聞かんとてなり、さるに日沒少し前伊三郎來訪、種々もの語りあり、到底郵書の上にて事とゝのふべきにもあらざるべし、一度はかならずかの地に趣かざるべからず、すでに年も終りにちかきを來年といはゞ又事のびなん、我も送りてゆかんには日のせまらざるほどになさまほしきを、今日出したる文の返事を取りてなどいはゞなか〳〵にうるさし、ゆかば今より直にゆかん、天氣のうれひもあらざるを今宵支度して明日の朝はやくにとすゝむ、さしもおもひさだめざるほど成しが、母も邦も我も夢の樣にてさらば直にと約す、未明に家より出立せんは近き家々がおもはくもいかゞとて、今宵伊三郎が家に泊りてあすもろ共にといふ假にてまことゝも覺えぬ樣と、伊三郎一あし先に出て母君は邦子が送りてゆく、路金などの事はすべて伊三郎が支度をなしけり。

十七日　寒氣いふべくもなし、母君のことをおもふにくに子も我も終日むねいたみともすれば涙のみなり。

十八日　夕ぐれちかく後屋敷より廣太郎來る、我れよりのふみにつきて雨宮の談もあり、そのまゝ有べきに非ずとて出京したる成るべし、されども請求に對しても異論ありげなる口ぶり見ゆ、何はとまれ此人來べきをしらば母君を長途の旅にも出し參らせじを、雨宮よりも此人よりも一通の狀も來らざりしぞ殘りをしきなり、歸りて後邦子とかたる。

十九日　伊三郎が留守宅に利金持參、待ち山に凧を仕入る。

母君のもとに一書出さんとおもへど廣太郎が電報をうつべきよしいひけるまゝ、さは今日あすがほどには歸り給ふべしとてそのまゝまつ。

廿日　まだたよりなし。

廿一日　いまだし、日々夜々くに子とかたるは此こと也、たがひに覺つかなさのあまりはものいひする事もあり、此日頃大方なみだ也。

廿一日　雨宮よりふみ來る、十九日出にしてしかも母君來甲のこと一字もなく、廣

太郎が上京の事もなし、談判の都合あしからず、一週間內にはともかくもなるべしとて、かれよりが志しを以て金五圓爲替にて送る、此人に金子かりんとにはあらざるを。

廿二日　何事のたよりも聞えず。

廿四日　伊三郎が宅に行く、廣太郎昨日歸鄕なしけるよし。

廿五日　伊三郎が妻來る、今日明日には歸京なるべしなど語る。

廿六日　の夕母君歸京、旅づかれもなくいと嬉し、後屋敷にての談判はすべてしるしつくるあたはず、母君が一錢の金をもち歸り給はざるにて大方はしるべし、歸路の路用は宇之助よりさし出したるよし。

二十七日　初雪ふる。母君一日やすみ給ふ、天知子より狀あり。

二十八日　母君寺參り、伊せ利より通運便にて金子五圓五拾錢來る、奥田の元金并に利金なり、天知子よりもひとしく金壹圓半送り來る、文學界十二號に出したることのねの原稿料なり、平田君より狀來る、今日より大宮の方にゆくよし、新年また逢はんなどあり。

廿九日　奥田に金持參、神田にかひ出しをなし、小石川師君に歳暮の進物持參く
ら子どのにあふ、はなし多し、こゝは又別天地なり。
三十日　もちをつく金壹圓、上野君父子歳暮に來る。議會解散。
三十一日　あきなひ多し、二時まで起居る。
廿七年一月一日　あさのほど少し雪ちらつく、やがてはれたり。今日のせわしさた
とふるにものなし、終日くにと我れと立つくすが如し。禮者なし。
二日　おなじく。西村禮に來る、久保木來る。
三日　上野房藏來る、佐久間夫婦來る、同日伊三郎來る。神田へかひ出し。
五日　より常の如し。
六日
七日　芝より兄君來る。むかひがはに同業出來る。
八日　よりあきなひひま也。
十日　平田君より狀來る。五日歸京したるよし、今月の双紙にも何か出しくれよと
て也、末文に古藤庵無聲が我宅を訪ひ度よしかたりたりとて紹介をなす。

これより年賀の狀を出したるは山梨にて野尻兄弟、雨宮、古屋、越後の坂本ぬし、札幌の關場君、東京にては三宅、伊東、田中、半井、櫻井、喜多川君、幷びに兄君成り、かれより來たりたるは此人々のほかに志方君などもあり。

十三日　午前星野君はじめて來訪、かねておもひしにはかはりていとものなれがほに馴れ安げの人也、としの頃は三十斗にや、小作りにて色白く、八丈もめんのきものに黑もん付の羽をり二重まわしをはをりて來りき、物語多かりしがさのみはとて。

十四日

十五日　平田君より狀來る、寺住ひの寒さにおそれ、ちかくの横川醫院とかいへるに轉じたるよし、そのうち訪はんなどありき。

今日はあきなひいと忙し。

十六日　はれ。一日あきなひせはしくして終る、一時の暇なし、坂本君より狀來る新發田區裁判所の判事に成けるよし、今宵よし原にまゆ玉かふ。

十七日　晴れ。つねの如し、須藤君來訪。

十八日　晴れ。

十九日　はれ。終日何事なし、今夜讀書曉にいたる。

廿日　はれ。植木屋寅次郎來る、午後平田君來訪、文學界寄稿のこと尋ねに成り、露伴子作五重塔、男はすべて重兵衞のやうに口かず多からざるぞよき、さればとてこと更につくろい顔ならんはにくけれど萬こゝろえがほになれ〱敷は才たかく學ひろしとても何となくあなどらるゝぞかし、春の花のうるはしきけはあらずとも天雲たな曳くたか山のそゞろ尊く恐ろしき樣にもあり、わづかにあふぎ見る樣なる中に何となくなつかしきけしきをふくみたらんぞよき。

二月二日　年始に出づ、きるべきものゝ塵ほども殘らずよその藏にあづけたれば、假そめに出んとするものもなし、邦子のからうじて背中と前袖とゑりさま〲にはぎ合せて、羽をりだにきたらましかばふとははぎ物とも覺えざる樣に小袖一かさねこしらへ出たり、これをきて出るに風ふくごとの心づかひものに似ず、寒風おもてうちて寒さ堪がたき時ぞともなく冷汗のみ出るよ、此月やいふべき金の何方より入るべきあてもなきに、今日は我が友のうちにてもこしらへ來んとて家を出づ、さはいへど伊東ぬしのもとにはかねてより負財も多し、又我心をなごりなく知りたりとも覺えぬ人に

かゝる筋のこと度々いふべきにもあらず、いかにせんと思ふに、かの西村が少なからぬ身代にはらふるを五圓十圓の金を出させなばいつにても成ぬべし、我はもとよりこびへつらひて人の惠みをうけんとにはあらず、いやならばよせかし、よをくれ竹の二つわりにさらく＼といふてのくべきのみとおもふ、車を坂本よりやとふて先湯島に安達君を訪ひ、久保木がもとに門禮して、直に小石川にゆく、西村には後によとて門をたゞ過ぎにすぐ、師君のもとより車をかへして入るに才子君折よく居合せらる、種々かたる、師君のもの語に三宅龍子ぬし家門を起し給ふこゝろのよし、さるは雄次郎君の內政のいとくるしくたらずがちなるに、例の才女のかゝる方におもむくこゝろ深くかくとはおもひたゝれし成るべし、師は我れにもせちにすゝめ給ふ、いかで此折過さず世に名を出し給はずや、發會當日の諸入用及びすべてのわづらひは憂ふるべからず何方よりも何ともなるべく、かへりては利益のあるべしといとよくすゝめ給ふ、すべて斷りて聞入れねば、師君猶申すべきことあり、そのうち來給へとて今日は末松君にけいこある日なればと出づ、我れも直に辭しさりて西村にて晝飯、種々ものがたる、金子は明日もやうをつぐべきよし、これより車を神田にはするに藤陰君は根岸に轉居

されたるよしにてかひなし、夏子ぬしを訪ふに家をうりて明日明後日のほどには何方へか移られんとていとろうがはしかりしが、此中にてもの語りす、夜ふくるまでありて、車たまはりてかへる。

二月十七日　平田君より状來る、文學界の投稿うながし來る也、ほし野君よりもおなじことにて狀來る。

十八日　十九日　執筆いそがし、小說花ぐもり四回分二十枚斗なる。

二十日　淸書、午後平田君にむけ出す。

二十二日　かみあらひ。

二十三日　根岸に藤陰君をたづぬ、令孃の別戶されたる物がたりあり、猶文界の事につきてもさま〴〵ありき、今日は本鄕に久佐賀義孝といへる人を訪はんのこゝろ成しかばこゝには長くもとゞまらで出づ、久佐賀はまさご丁に居して天啓顯眞術をもて世に高名なる人なり、うきよに捨ものゝ一身を何處の流にか投げこむべき、學あり力あり金力ある人によりておもしろくをかしくさわやかにいさましく世のあら波をこぎ渡らんとて、もとより見も知らざる人のちかづきにとて引合せする人もなければ、我

れよりこれを訪はんとて也。

大坂東區內淡路町二丁目九十三番屋敷

志方鍛

そなたより訪はずばこれよりもとあるに、
よしいまはまつともいはじ吹風の
とはれぬをしも我がとがにして
かまくらやまだみぬ友のあたりまで
おもかげうかぶ冬のよの月
紅葉がりいざといふべき友もなし
きのふもけふも時雨のみして

つゆしづく、（二十七年一月）

あしびきの山にも野にもすみてけり
　光くまなき秋の夜の月

たちまよふ市のちまたの塵のうちに
　つれなくすめる月のかげ哉

もろともにすめばすまるゝ世なりけり
　野山の月もおのがこゝろも

水の上にあともとゞめぬうたかたの
　あわにむすべる我がいのち哉

よの中も何かいとはん水の月の
　とまらぬかげをこゝろにはして

いとふべきほどだにもなしよの中は
　かぜにむすべる青柳のいと

中島歌子

かぎりなき光をそへてよの中の
　人のかゞみと成し君かな

おもふどちふきかはしたるふゑたけの
　むかしの音こそ戀しかりけれ

くれたけのすぐなりとおもふ我にしも

あやしきふしを人はつけゝり

ある人の來る日をまつとありしかば

すみよしの松は誠かわすれぐさ
　つむ人おほきあはれうきよに

鶯も聲せぬやどのはるぞとは
　しらでや梅のかににほふらん

これをだにありしかたみとうつし植て
　いとゞ涙の軒の梅がえ

梅の花さける斗をはるにして
　うぐひすだにもとはぬやど哉

ある折に、

宵々の夢に斗はみえよかし
　まつには人のつれなかりとも

はかなしや我こゝろからみる夢の
　たゞさばかりの戀もする哉

今日し又うはの空にて過ぬなり
　なにおもふらん身としらねども

ある折に、

まくづ原うらみし秋は夢なれや
　あともあらしのおとのさびしさ

これをしも戀とはいふや山柿の
　みだるゝ斗むねのくるしき

今はとておもひ絶たる中川に
　あやしく袖のぬれ渡る哉

　おもふ事ありて、
あれぬとてたゞに過なば敷島の
　歌のあらす田たれかすくべき

すがれよとまねく袂もうかりけり
　ひとりやたゝんたゞひとりにて

打寄する波にも花は咲ものを

たゞにくだけてわれやまめやは

いとこのうせたる時、

消にける露の玉のをたえてよに
あはれ〳〵といふ人やなき

かたち美にして才たかき女は、よしやしもがしものしなゝりとも、遂にあま雲棚引位山のたかきにものぼりがたからじと言ひしに、いなさしもしからじ、そはみさをといふ物なき人ならではと邦子のいふに、

くれ竹のぬけ出るさへあるものを
ふしは此よになにさはるらむ

野々宮君來訪、

池の面にあそぶ蛙のみなれては

しらずがほなるさへぞをかしき

本郷龍岡町十五番地

市谷谷町八十五番地

池ノ端七軒町三十番地　小島方

日暮里村妙隆寺内

芝神明町二十五番地　古山銓太郎方

本郷西片町十番地二ノ二十二號

馬場勝彌

孤蝶子

稻葉寬

平田喜一

山下直一

菊池隆直

三番丁四十三番地に轉居

本郷眞砂町三十二番地

久佐賀義孝

日記ちりの中（二十七年二月）

ひるは少し過たるべし、耳なれたるとうふうりの聲の聞ゆるに、おもへば菊坂の家にてかひなれたるそれなりけり。あぶみ坂上の靜かなる處ぞ眞砂町三十二番地と人をしゆるまゝに、とある下宿屋のよこをまがりて出ればやがてもと住ける家の上なり。大路よりは少し引入りて、黒ぬり塀にかしの木の植込みえたる、入るべき小道にしるしの招たてゝ、雨露にさらされたれば、文字はうすけれど、天啓顯眞術會本部とよまれたるにぞ此處也とむねとゞろく、入りて玄關におとなへば、おうとあらゝかに答へて、書生成べし十七八の立ながら物いふ男二間なる障子を五寸斗あけてものいふ、下谷邊より參りたるものなれど先生にこま〴〵お物語せまほしく御人少なゝる折に御見ねがひたければ何時出てしかるべきにや、お取次給はるべしといへば、鑑定にはおはしまさずやととふ、いな鑑定にはあらずといふ、さらば事故にこそ御名前はと又とふに、はじめて出たるなれば通じ給ふとも名前の甲斐はなけれど秋月と申させ給へとこたへけり、男入りてしばしもあらず出で來つるが、何の事故にや師は只今直にてもよ

ろしとあるこゝろ安きに先うれしくて、さらばゆるし給へとみちびかる、襖一重のそなたは其鑑定局なるべし、敷つめたる織物の流石に見にくからず、十疊斗なる處に書棚、ちがひ棚、黑棚など何處の富家よりおくられけん、見るめまばゆし、額二つありしが、一つは靜心館とやありし、今一つは何成けん、床は二幅對の絹地の畫也、床を背にして大きやかなる机をひかへ　火鉢の灰かきならし居るは其人ならん年は四十斗りにや小男にして音聲靜かにひくし、机の前に大きなる火桶ありて、そが前にしとね敷たる、それにせよとてしきりにすゝむ、我も彼れもしばしは無言成しが、いでや御はなし承らん、何等の事故おはしますにやとかれより問ひ出づ、つれ〴〵の法師が詞に、名を聞よりやがて實はおもひやらるれど、逢見れば又おもふ樣のかほしたる人ぞなきとありしが、げにしかぞかし、さればかくいはんといはんとおもひまうけしことは、時にあたりてさもいふまじきこともあり、さらに我がむねを開くこともありかし、先はことに先だちて申すべきはおしかけに參ての罪あさからざると、女子の身にてきまりをこえのりのほかにはしりなど、聞給ひてはものぐるはしとやおぼし給はん、それには故ありらしこあり、天地をさめ給らんとおもふそのひろやかなる御胸のうちに、愚言

の愚なるも、卑言のさもしきも捨て給はず、愛憎好惡さま〳〵の塵あくたの外に埋もれながら一節きえぬ誠のこゝろを聞しめして、おぼしめし給ふ處を仰せ給はらば嬉しかるべし、我れはまことに窮鳥の飛入るべきふところなくして、宇宙の間にさまよふ身に侍る、あはれ廣き御むねのうちにやどるべきとまり木もや、まづ我がことを聞きたまふべきやといへば、よし、おもしろし、いで聞かんと身をすゝます、我身父をうしなひてことし六年、うきよのあら波にたゞよひて、昨日は東今日はにし、あるは雲上の月花にまじはり、或は地下の塵芥にまじはり、老たる母、世のことしらぬいもとを抱きて、先こぞまでは女子らしき世をへにき、聞たまへ先生、うきよの人に情はなかりけるものを、わがこゝろよりつくり出てたのもしき人とたのみ、にごれるよをも清める物とおもひて、我れにあざむかれてこゝに誠を盡しにき、一朝まなこの覺めぬるは、我が宇宙にさまよふのはじめにして、人しらぬくるしみ此時より身にまつはりぬ、あえなくはかなく淺ましき物とおもひ捨てゝ、今は下谷の片ほとりにあきなひといふもふさはしかるまじきいさゝか成る小店を出して、こゝを一身のとまりと定むれど、なぞやうきよのくるしみのかくて免がるべきに非らず、老たる母に朝四暮三のはかなき

ものさへすゝめ難くて、我がはらからの侘び合へるはこれのみ、すでに浮世に望みは絶えぬ、此身ありて何にかはせん、いとをしとをしむは親の爲のみ、さらば一身をいけにゑにして運を一時のあやふきにかけ、相場といふこと爲して見ばや、されども貧者一錢の餘裕なくして我が力にて我がことを爲すに難く、おもひつきたるは先生のもと也、窮鳥ふところに入たる時はかり人もとらずとかや、天地のことはりをあきらめて、廣く慈善の心をもて萬人の痛苦をいやし給はんの御本願に思し當ることあらば敎へ給へ、いかにや先生、物ぐるはしきこゝろのもと末、御むねの內に入たりやいかにと問へば、久佐賀はしば／＼我おもて打ながめて打なげくけしきに見えしが、年はいくつぞ生れはと問ふ、申歲生れの二十三にて三月二十五日出生といへば、さても上々の生れかな、君がすぐれたる處をあげたらば、才あり智あり物に巧あり、悟道の方にもゑにしあり、をしむ處は望みの大にすぎてやぶるゝかたち見ゆ、福祿十分なれども金錢の福ならで、天禀うけ得たる一種の福なればこれに乘りて事はなすべきにこそ、商ひと聞だに君には不用なるを、ましてや賣買相場のかちまけをあらそふが如きはさえぎつて止め申べし、あらゆる望みを胸中よりさりて終生の願ひを安心立命

にかけたるぞこゝさ、こは君が天よりうけたる天然の質なればといふ、をかしやな、安心立命は今もなしたり、望みの大に過ぎてやぶるゝとは何をかさし給ふらん、五うん空に歸するの曉は誰れか四大のやぶれざるべき、望も願も夫までよ、我が一生は破れ〳〵て道端にふす乞食かたゐの夫こそは終生の願ひ成けれ、さもあらばあれ、其乞食にいたるまでの道中をつくらんとて朝夕もだゆる也、つひに破るべき一生を月に成てかけ。花に成て散らばやの願ひ、破れを願ふほかにやぶれはあるまじやは、要する處は好死處の得まほしきぞかし。先生久佐賀樣。此の好死處をさし給はずや、世に處す道のさま〴〵もうるさし。おもしろく花やかにさわやかの事業あらばをしへ給へとやう〳〵打笑みて語り出れば。其處也。そこ也と久佐賀もあまたたび手をうつ、されども圓滿を願ふはうきよのならひにして。圓滿をつかさどるは我がつとめなり、破れの事は俄かに語るべからず、そも君は何を以て唯一のたのしみと覺すぞや、それ承んとある、錦衣九重何かたのしからん、自然の誠にむかひて物いはぬ月花とかたる時こそうきよの何事も忘れはてゝ、造化のふところにおどり入ぬる樣には覺ゆれ、此景色にむかひたる時こそとこたふ、あはれ自然の景を人間にうつして御覽ぜよ、はじめ

て我が性の偶然ならざるを知り給ふべし、あやめ、撫子さま〴〵の性をうけて、おのがさま〴〵にほひ出る、これこそは世の有樣なれ、草木に植時の機あるをしれど、人の事業に種まきの機節をはからざるはいと愚ならずや、遠因近因來る處一筋ならず、人々只今の苦を知りて、根原の病ひをしらざれば、もだえはいたづらに空に散じてつゐにもとをいやすによしなし、人さかりにしては天の力も及ぶかたなし、盛なる時は我があづかりしる處ならず、我れは精神の病院に成て、痛苦の慰問者に成て、人世のくずやになりて、ぼろ、白紙、手ならひ草紙、あれをもこれをもかひあつめ、撰分て其むき〳〵の働きを爲させんとす、ぼろとすてたりける小袖のちぎれも道に寄てすきかへさば、今日有用の新紙と成ておほけなき御前に出る折もあり、ふるさをかへして新たにし破れをとゝのへてまつたふするは我が役なり、のたまふ處は我が賛成する處にして、君が性は我が愛し度本願にかなへり、月花を愛し給ふ心の誠をもとゝしたらば、其ほかの出來ごとは瑣事ならずや、小さき憂の大きに身にかゝるは日々の運用よろしからざるによる、運用の妙はこゝにありてしかも運用はたやすき物也、本源のさとり開かれぬる後に日々の運用何事かはあらん、さりながら、人を知る人の我を見る

は少なきがごと、本原は知るといへども枝葉にまよふはこも又無理ならざる處ぞかし、我が會員日本全國三萬にあまれり、その人々個々一樣ならず、事によりては我れにまされるもあり、我れより師とあほぐもあれど、三世にわたり一世を合するは又別物にしてと、かたり來る久佐賀もいよ〳〵こと多く成て、會員のもの語、鑑定者のさま〴〵、談じ來り談じさり、語々風を生ず、我れも人も一見舊識の如し、ものがたり四時にわたる、其うち會員の質問に來たりしもの一人あり、大阪米相場の高下電話にて報じ來たるなど、ろうがはしく成ぬるに、時もはや日暮れに成りぬ、我れもいさゝかかんがふべき事など聞き出たるに、今日はこれまでとてたつ、後藤大臣同じく夫人の尊敬一方ならざるよし、および高島嘉右衞門、井上圓了が哲學上の談話など、かたること多かりし。

二十五日　西村君來訪、午後まではなす、平田君來訪されたるより前者はかへる、例のせまやかなる部屋の内に物がたること多し、五時まで遊ぶ。女學雜誌に田邊龍子、鳥尾ひろ子のならべて家門を開かるゝよし有けるとか。萬感むねにせまりて、今宵はねぶること難し。

二十六日　星野君來訪、文學界十四号原稿料持參、社を當月より三の輪にうつされたるよし、車を待たせて直に歸宅す。

二十七日　田中君を牛込に訪ふ、新小川町を轉じてつくど前にうつりたるを知らざりしかば尋ね佗にたり、柴又に參詣して留守也、されども切に逢はまほしきことあれば、此まゝに歸らむもをしく、さらば神田にかひ物して又更にこんとて出づ、多町に手遊類かひて又こゝにかへる、田中君歸宅を待てかたる、伊東のぶ子君も折ふし來訪、談は中島の師が上なり、品行日々にみだれて、吝いよ／＼甚敷、歌道に盡すこゝろは塵ほども見えざるに、弟子のふえなんことをこれ求めて、我れ身しりぞきてより、新來の弟子二十人にあまりぬ、よめる歌はと問へば、こぞの稽古納めに歌合したる十中の八九は手にはとゝのはず、語格みだれて歌といふべき風情はなし、座に他の大人なかりしこそよけれ、なげかはしきおとろへ方と聞ゆ、田中君などが詠草一月にも十月にも滿ぞくに直しなど與へられたる事なしといふは僞のみにもあらざるべし、かねて我が上にも知ることなれば、かゝるが中にこの有樣を知りつくしたる龍子ぬしがこれに身を投じて家門を開かんとすと聞こそおぼろげのかんがへにはあらざるべし、秋の

紅葉のさかりは今一時なる師が袖にすがりて我世の春をむかへんとするの結構、此間にかならずあるべし、鳥尾ぬしがことには、もとより論ずるにたらず、師が甘き口に醉ひて我が才學のほどをもおもはずうきよに笑ひ草の種やまくらん、すべててん〳〵がたきの世とかたる、いでさらば何事をも言はじおもはじ、我はもとよりうきよに捨て物の一身を何のしわざにか歎くべき、田中ぬしはしからず、なまなかあらはし初たる名を末弟におされて、朝の霜の此まゝに消なんはいかに口をしからずや、師に情なく友に信なくとも、何か又そは厭ふにたらず、念とする所は君が手腕のみ、うきよは三日みぬ間の櫻なれば君もむかしの君ならで歌學大にあがり給ひしか知らねど、我が知りたるまゝならば、此世はとまれ、天下後代に殘してそしりなきほどの詠あるべしとも覺えず、いかで萬障をなげうちて歌道に心を盡し給はずや、我れもこれより君が爲におよぶ限りの相手にはなるべし、かずよみをもなし、各判をもなし、論議辯難もろ共にみがゝでやは、我は今まで小商人の、歌よむことをもなさゞりしかど、君は常におこたりなくつとめ居たまひしに相違あるまじきが、玉をみがくに他山の石を以てすとか、一人にてはいかでかとすゝむ、君にそのこゝろおはしませば我が喜びは上もなきぞと

田中ぬし喜ぶ、此人もとより汚濁の外にたちてすみ渡りたるこゝろならぬはしれど、おもて清くしてうらにけがれをかくす龍子などのにくゝいやしきに、よしけがれはけがれとして、多數のすてたる此人にせめては歌道にすゝむ方だけをはげまさんとて也、右もにごれり、左もにごれり、師も龍子も此人も何れにごりのうちなるを、あれをすてゝこれをたすくるは、時のよはきを見るにしのびず、人はたのまぬ義をおこして、我れから苦悶に身をなやます我が淺はかさあはれむにたえたり、ものがたること多くして日も暮れぬ、車をもて送られぬ。

二十八日　早朝久佐賀より書あり、君が精神の凡ならざるに感せり。爾來したしく交はらせ給はゞ余が本望なるべしなどあり、頃日臥龍梅滿開の時なるにいかで同行して天地の花時と人生の花時をならべ賞せんはたのしからずや、適日を期して返章を賜はらん事をとあり。又別紙に、君がふたゝび來たらせ玉ふをまちかねてとて歌あり、

とふ人やあるとこゝろにたのしみて
　そゞろうれしき秋の夕暮

歌もよからず、手もよく書たりとは見えねど、才をもて一世をおほはんの人なるべ

し、梅見の同行はかれに趣向あるべし、我れは彼れが手中に入るべからずとほゝ笑みて返事したゝむ、貧者餘裕なくして閑程の天地に自然の趣をさぐるによしなく、御心はあまたゝび拜しながら御供の列にくわゝり難きをさる方に見ゆるし給へ、よしや袂にあまる梅がゝは此處に縁なくとも、おこゝろざしを月とも花とも味はひ申すべく、不日參上御をしへをうけんとて、かへしならねどかくなん、

　すみよしの松は誠か忘れ草
　　つむ人多きあはれうきよに

二月一日　文學界十四号來る。早朝田部井より狀來る、妻の急病にてうせたるよし、すべて夢かとあきる、母君直に吊ひにゆく。

二日　曇り。かしらなやましくて終日打ふす。夕刻号外來る、衆議員當撰者の報なり。

三日　小雨ふる。

此ほどすべてことなし。

九日　雨。今日は銀こんの大典也、郡市府縣をしなべて、こゝろ〳〵の祝意を表す

るに狂するが如しとか聞しが、折あしき雨にて、さのみはにぎはしからぬやにきく。菊池の奥方高齢をもて恩賜金をたまはりたるよし、亡老君の五年祭をかねて祝義あるべきよし沙汰ありければ母君いはゐ物もちゆく、歌一首をそふ。

めづらしき御いはゐにさへ逢にあひて
　君かさぬらん千代も八千代も

よからねどかくなん。此夕べ樋口くら來る。

十日　くら逗留。雨天。

十一日　おなじく雨天。山下直一君死去の報來る、すべて夢とのみあきる。

十二日　母君山下君を吊ふ。おくら猪三郎のもとにゆく。禿木子及孤蝶君來訪、孤蝶君は故馬場辰猪君の令弟なるよし、二十の上いくつならん、慷慨悲歌の士なるよし、語々癖あり、不平々々のことばを聞く。うれしき人也。

數よみ、

春雨十首

朝春雨

ふしながら聞しはいつぞ朝市の
　たちゐくるしき春雨の空

夜春雨

春雨のおとを枕にきくよ半ぞ
　むかしの花の夢はみえける

對二春雨一言レ志

あづさゆみやよ春雨にものいはむ
　めぐむは露の草木ばかりか

田家春雨

たち出てみれば春雨かすむ也
　わがせやかへる小田の中道

閑居春雨

春雨のふる物がたりきかせてん
　小窓までこよ庭の鶯

十三日　晴れ。眞砂町に久佐賀を訪ふ、日沒歸宅。おくらいまだ歸らず。

十四日　田中君を訪ふ、かずよみせんとて也、夕べはがきを出したれど引ちがひてかれよりも文を出したるよし、今日は小石川師君と共に鍋島家に參賀の事ありとて支度中也、例の龍子ぬしが一條、いよ〳〵二十五日發會と發表に成ぬ、されば右披露をかねて鍋島家の恩顧をあほがん爲、今日の結構はある也けり、田中ぬし出でさられし後、一人殘りて暫時かずよみす、題は三十題成し。醜聞紛々、田中君の內情みゆる。

中根岸町二十六番地　藤本藤陰

上根岸町三十九番地　佐藤東

芝濱松町一丁目十五番地　山下信忠

中根岸町八十一番地　井岡大造

いはでもの記（二十七年三月）

よき衣裳して似つかぬ人あり、さるは下ざまのやつ〳〵敷なへたるなどをめしたるぞよき、身にそなはらぬは、よきに過るもあしきに過ぐるもよからぬもの也。

中々におもふ事はすてがたく。我身はかよわし。人になさけなければ黄金なくして世にふるたつきなし、すめる家は追はれなんとす、食とぼしければこゝろつかれて筆はもてども夢にいる日のみなり、かくていかさまにならんとすらん、死せるかばねは犬のゑじきに成りて、あがらぬ名をば野外にさらしつ、千年の後萬年の春秋、何をしるし此世にとゞむべき、岡邊のまつの風にうらむは同じたぐひの人の末か。わびし。

ふみもて來てさる人のこれあきらめさとし給へといふ、何ぞととへば、貝原益軒、室鳩巣などが書ける書どもなり、よみもてゆくに、たゞ〳〵敷ところのみぞ多かる。

塵の中日記（廿七年三月）

日々にうつり行こゝろの、哀れいつの時にか誠のさとりを得て、古潭の水の月をうかべるごとならんとすらん、愚かなるこゝろのならひ、時にしたがひことに移りて、かなしきは一筋にかなしく、をかしきは一筋にをかしく、こしかたをわすれ、行末をもおもはで身をふるまふらんこそうたても有けれ、こゝろはいたづらに雲井にまでのぼりて、おもふ事はきよくいさぎよく、人はおそるらむ死といふことをも唯風の前の塵とあきらめて、山櫻ちるをことはりとおもへばあらしもさまでおそろしからず、唯此死といふ事をかけて、浮世を月花におくらんとす、ひとへにおもへば其いにしへのかしこき人々も此願ひにほかならじ、さる物から、おもふまゝを行なひておもひのまゝに世を經んとするは大凡人の願ふ處なめれど、さも成がたきことなれば、人々身を屈しことをはゞかりて、心は悟らんとしつゝ、身は迷ひのうちに終るらんよ、あはれはかなしやな、虚無のうきよに○もなし○もなし、○といふそも〳〵僞也、○といふも又僞也、いつはりといへどもこれありてはじめて人道さだまる、無中有を生じて

こゝに一道の明らかなるものあれば、人中に事をなさんとくはだつるものかならず人道に寄らざるべからず、天地こと〴〵くのみ盡して有無兩端をたなぞこににぎりたりとも、行はざる誠は人みるによしなし、我身きよしといへども、感は人のこゝろにありて耳にあらねば、かひなきは放言高論のたぐひなり、世に文章家といふものありて、華文麗辭をつらぬるによく、和歌誹句たくみに詠ずるもあり、又辯士とて悲歌慷慨の語をなして一時の感を起すもあめり、さる物からこれ等はくゞつの木偶をまはして人めをよろこばしむるたぐひにも似て唯一時のよろこびばかりならんのみ、一時におこりたる感は一時にして消えぬべし、一代をつゝみ百世に殘りぬべきわざをとおもふに、事は我身にありて人にあらず、我み清しとて人をおとすはまだよし、人を論ずるを知りて我身の誠をあらはすをしらず、國政をそしり大臣をなみし大家名流の非をあげてあげつろふとも、かれは耳目にあらはれたる人なり、これは唯ひとつの口を動かすのみ、いかに又みにくからずや、こゝろは天地の誠を抱きて、身は一代の狂人になりも終らば、人に益なくうきよに功なく、清濁いづれをまされりとせんや、さればいにしへのかしこき人はこゝろの誠をもとゝして人の世に處するの務をはげみたりき、

つとめは行なひ也、行は德也、德つもりてはじめて人の感おこる。此感一代をつゝみ百世に渡り、風雨霜雪やぶるによしなく、一言一世に功あり、一語人に益あり、こん〳〵たる流れは濁を淸にかへして人生是非の標準さだまらんとす、我一身の欲をすて、たのしみを捨、しかして後にわがおもふまゝの世を得んとす。花をも實をもはじめより得んとしてはいかでか得んと、かき置し人も有をや、机上の論はもと虛にあらず、虛にあらずと雖行ひ熟さゞれば實といふを得ず。論者はおこなはず、おこなふものはいはず。いはずといへどもおこなひのあとにかくれやはする、是れを百世に殘すといへども、必竟は虛也、無なり、天地の誠は虛無のほかにあるべからずといへども、人世の誠は道德仁義のほかにあらず、これをたつとんでかれをすつるは愚也、かれを取りてこれに背もいまだし、虛は空にして實は存す、無はうらにして有は表也、四時の順環、日月の出入、うきよはひとりゆかず、天地はひとり存せず、地に花あり天に月あり、香は空にして色は目にうつる。あれも小とし難く、これも大とはいひ難し、されば人世に事を行はんもの、かぎりなき空をつゝんで限りある實をつとめざるべからず。一時の勇はいまだ勇といふべからず、一人の敵とさしちがへたらんは一軍

にいか斗のこうかはあらん、一を以て十にあたるいまだし、萬人の敵にあたるはかの孫呉の兵法にあらずや、奇正此内にあり、變化運用の妙天地をつゝんでしかも天地ののりをはなれず、これをしるものは偉大の人傑となり、これをうしなふものは名もなき狂者となる、さるからに法は奇にして濁にあらず、清流一貫古來今にいたる、おもへば聖者は行みづのながれの、とゞこほる所なからんぞうら山しき。

魚だにもすまぬかき根のいさゝ川
くむにもたらぬところ成けり

十四日　おくら丸茂醫學士のもとにゆく、幸作が件につきて也。
十五日　雨。丸茂の事件こと故なくとゝのひぬれば、おくら歸國の途につく。
十六日　はれ。吉原神社祭典、にはか出來る、此夜母君とゆく。
十七日　はれ。廣瀬伊三郎來る、お倉が事情をきく。
十八日　はれ。久保木姉君幷びに秀太郎來訪。平田君よりはがき來る、本月の文學界寄稿可成澤山に得まほしきよし、二十一日頃までにといふ孤蝶子の傳言、ならびに

その身も學校のいそがしさ片づき次第とはんなどあり。

十九日　はれ。木村ちよ殿來る、酒肴を出す、當人の賴に寄てなり、同じくたのまれて小堀何某、長堀何がしにはがき出す。

塵中につ記（二十七年三月）

おもひたつことあり、うたふらく、

すきかへす人こそなけれ敷島の
　うたのあらす田あれにあれしを

いでやあれにあれしは敷島のうた斗か、道德すたれて人情かみの如くうすく、朝野の人士私利をこれ事として國是の道を講ずるものなく、世はいかさまにならんとすらん、かひなき女子の何事を思ひ立たりとも及ぶまじきをしれど、われは一日の安きをむさぼりて百世の憂を念とせざるものならず、かすか成といへども人の一心を備へたるものが、我身一代の諸欲を殘りなくこれになげ入れて、死生いとはず、天地の法にしたがひて働かんとする時大丈夫も愚人も、男も女も、何のけぢめか有るべき、笑ふものは笑へ、そしるものはそしれわが心はすでに天地とひとつに成ぬ、わがこゝろざしは國家の大本にあり、わがかばねは野外にすてられてやせ犬のゑじきに成らんを期す、われつとむるといへども賞をまたず、勞するといへどもむくひを望まねば、前

後せばまらず、左右ひろかるべし、いでさらば分厘のあらそひに此一身をつながるゝべからず、去就は風の前の塵にひとし、心をいたむる事かはと、此あきなひのみせをとぢんとす。

國子はものにたえしのぶの氣象とぼし、この分厘にいたくあきたる比とて、前後の慮なくやめにせばやとひたすらすゝむ、母君もかく塵の中にうごめき居らんよりは小さしといへども門構への家に入り、やはらかき衣類にてもかさねまほしきが願ひなり、さればわがもとのこゝろはしるやしらずや、兩人ともにすゝむる事せつ也、されども年比うり盡し、かり盡しぬる後の事とて、此みせをとぢぬるのち、何方より一錢の入金もあるまじきをおもへば、こゝに思慮をめぐらさゞるべからず、さらばとて運動の方法をさだむ、まづかぢ町なる遠銀に金子五十圓の調達を申こむ、こは父君存生の比よりつねに二三百の金はかし置たる人なる上、しかも商法手びろくおもてを賣る人にさへあれば、はじめてのことゝてつれなくはよもとかゝりし也、此金額多からずといへども、行先をおやぶむ人は、俄にも決しかねて、來月花の成行にてといふ。

廿六日　半井ぬしを訪ふ、これよりいよ〳〵小說の事ひろく成してんのこゝろ構へあるに、此人の手あらば一しほしかるべしと、母君もの給へば也、年比のうき雲唯家のうちだけにはれて、此人のもとを表だちてとはるゝ樣に成ぬるうれしとも嬉し、まづふみを參らせて在宅の有無を尋ねしに、病氣にて就蓐中なれどいとはせ給はずはと返事あり。

此日、空もようよろしからざりしかど、あづさ弓いる矢の如き心のなどしばしもとゞまるべき。午後より出づ。君はいたく青みやせて、みし面かげは何方にか殘るべき、別れぬるほどより一月がほどもよき折なく、なやみになやみてかくはといふ、哀れとも哀也、物がたりいとなやましげなるに、多くもなさでかへる。

廿七日　小石川に師君を訪ふ、田邊君發會昨日有べき筈の所、同君病氣にてしばしのびたるよし、その席に我上をも、いかで斯道に盡したらんにはなど語らる、我が萩の舍の号をさながらゆづりて我が死後の事を賴むべき人門下の中に一人も有る事なきに、君ならましかばと思ふなどいとよくの給ふ、ひたすら賴み聞え給ふに、これよりも思ひまうけたる事也、さりとはもらさねど、さま〴〵に語りてかへる。

廿八日　母君は音羽町佐藤梅吉に金策たのみに行、むづかしげ也しかば、歸路西村に立よりて、我中島の方へ再度行べきよしを物がたりて金策たのむ、直にはむづかしげにみえしとか聞しが、母君歸宅直に車を飛して釧之助來訪、金子の員を問ふ、その親などにはゞかれば成べし。

四月に入てより、釧之助の手より金子五拾兩かりる、淸水たけといふ婦人かし主なるよし、利子は二十圓に付二十五錢にて、期限はいまだいつとも定めず、こは大方釧之助の成べし。

かくて、中島の方も漸々歩をすゝめて、我れに月々いさゝかなりとも報酬を爲して手傳ひを頼み度よし師より申こまる、萬事すべて我子と思ふべきにつき、我れを親として生涯の事を斗らひくれよ、我が此萩の舍は則ち君の物なればといふに、もとより我に大任を負ふにたる才なければそは過分の重任なるべけれど、此いさゝかなる身をあげて歌道の爲に盡し度心願なれば、此道にすゝむべき順序を得させ給はらばうれしとて、先づはなしはとゝのひぬ、此月のはじめよりぞ稽古にはかよふ。

花ははやく咲て散がたはやかりけり、あやにくに雨風のみつゞきたるに、かぢ町の

方上部谷ならず、からくして十五圓持參、いよ／＼轉居の事定まる、家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてたるが有けり、守喜といひしうなぎやのはなれ座敷成しとて、さのみふるくもあらず、家賃は月三圓也、たかけれどもこゝとさだむ。

居をうりて引移るほどのくだ／＼敷、おもひ出すもわづらはしく、心うき事多ければ得かゝぬ也。

五月一日　小雨成しかど轉宅、手傳は伊三郎を呼ぶ。

二日　小石川師君を訪ふ、轉居のことかたる、歸路西村にも報ず、いづれもそのすみやかなるに驚かる、久保木にも一兩日過ぎてしらす、驚のほどしるべし。

千束町二丁目三十五番地
小石川餌差町十八番地
今村けい

三番丁四十三番地　菊池隆直

千束町二丁目三十五番地　廣瀬伊三郎

水の上（二十七年六月）

四日　はれ。午後より小石川亡老君の墓參をなす、天王寺也、きのふ三年の祭成しを得ゆかざりしかば、邦子と共に參る也、墓前に花を奉り、靜に首をおげてあたりをみれば、何方より來にけん小蝶二つ、花の露をすひ、石面にうつり、とかくさりやらぬさへ哀れにもさびし。邦子としばしこゝにかたりて、それより寺内を逍ようす、雲井龍雄の碑文などをみる、夕日のかげくらく成ほど雨雲さへおこりたちて、空の色の物すさまじきに、そゝやといそぐ、團子坂より藪下を過ぎて根津神社の坂にかゝる、のぼり口の左手にさゝやかなる枝折戸して黒木の階段かう〴〵しくふりたる庵の有けり、二十二宮人丸とかきたる文字も故ありげなるに、邦子は常にかゝる方をあやしきものにいひくだせば、ひたすらにこれを笑ふ。

五日　かの人丸の異樣成しがこゝろにかゝれば、かゝる處に又おもしろき人もやとてその庵を訪ふ、異談一ならず物語をかしかりき、人はいくつ斗にや、髮ながく髭しろく、なへばみたる小袖の長やかなるを着たり。家は三間なれど、天井もなくくりや

め〳〵物もなし、雨戸といふ物一ひらもなくて、雨風はいかにしのぐらん、あやし、七八年を遊歴に送りて、この庭へはをとゝし斗よりときく。訪人ありとても、我が厭ふべきには逢はずとて、門にそのよしかいしるしあるも、さのみはいかでとをかし、しばし有けるほどに、人の來たりければ又とてかへる。

世はいかさまに成らんとすらん、上が上なるきはに此人はと覺ゆるもなく淺ましく憂き人のみ多かれば、いかで埋もれたるむぐらの中に共にかたるべき人もやとて此あやしきあたりまで求むるに、すべてはかなき利己流のしれ物ならざるはなく、はじめは少しをかしとおもふべきも、二度とその說をきけば、厭ふべくきらふべく。そのおもてにつばきせんとおもふ斗なるぞ多き、かつて天啓顯眞術會本部長と聞えし久佐賀のもとに物語しける頃、その善と惡とはしばらく問はず、此世に大なる目あてありて身を打すてつゝ一事に盡すそのたぐひかとも聞けるに、さてあまたゝびものいふほどにさても淺はかに小さきのぞみを持ちて唯めの前の分厘にのみまよふ成けり、かゝるともがらと大事を談じたらんはおさな子にむかひて天を論ずるが如く、勞して遂に益な

かるべし、おもへば我れも敵をしらざるのはなはだしさよと我れをさへあざけらる。

九日成けん、久佐賀より書狀來る、君が歌道熱心の爲に、しか困苦せさせ給ふさまの、我一身にもくらべられていと憐なれば、その成業の曉までの事は我れに於ていかにも爲して引受べし、され共唯一面の識のみにて、かゝる事をたのまれぬともたのみたりともいふは、君にしても心ぐるしかるべきにいでやその一身をこゝもとにゆだね給はらずやと、厭ふべき文の來たりぬ、そもやかのしれ物、わが本性をいかに見るにかあらん、世のくだれるをなげきてこゝに一道の光をおこさんとこゝろざす我れにして、唯目の前の苦をのがるゝが爲に、婦女の身として尤も尊ぶべき此の操をいかにして破らんや、あはれ笑ふにたえたるしれものかな、さもあらばあれかれも一派の投機師なり、一言一語を解さゞる人にもあらじとて、かへしをしたゝむ。

一道を持て世にたゝんとするは君も我れも露ことなる所なし、我れが今日までの詞、今日までの行、もし大事をなすにたると見給はゞ扶助を與へ給へ、われを女と見てあやしき筋になど思し給はらばむしろ一言にことはり給はんにはしかず、いかにぞやとて、明らかに決心をあらはしてかなたよりの返事をまつ。

文を出すの夜返事來る、おなじ筋にまつはりてにくき言葉どもをつらねたる、今は又かへしせじとてそのまゝになす。

かの人丸も我家を訪ひたり、かゝる人に似合はしからずと見ゆるは、かへす〳〵我れを浮世の異人なるよしたゝへて、長き交際を結ばまほしきよしなどいふ、おもしろからぬ者ども也。

四日　出づ。この日は田中ぬしが發會なりければ、手傳ふ事多かる身は朝よりゆく來會者二十二三人は有けり。人々かへりて後しばし小出ぬしとかたる、切に歌をよむべきよしすゝむ、君が業とする著作の事もとよりあしからず、そはおもしろかるべけれど、小説は書く人世に猶は多かるべし、歌道はしからず、今の此よに天然の歌才を得て一身をこれに打入れて世にたゝんとする人かつふつ有ことなし、されば中島の社中人多しといへども、我みたる所にて君を置てこれかと見ゆるもなきに、君にしてふるひ給はゞかならず千載に名をのこして不朽の事業たるべしとおもふに、いかで世にたち給はずやとすゝむ、歌論もさま〴〵ありける中げにとおぼゆるふし少なからず、

此人よろしからぬ人なれど、さすがに一ふしと見ゆる說こも聞ゆ。

十五日　師君のもとにて前田家たのまれの詠草をしたゝむ、奥方の也。

十六日　早朝禿木子來訪、天知君より文あり、花ごもり二度目の原稿料送りこさる禿木君も學校のいそがしき頃とてはやくかへる。われは小石川稽古にゆく。

此日三宅龍子ぬしより使にて依綠軒漫錄かさる、坪內ぬしよりかりたる小說もろとも今宵通讀、一時に及ぶ。

二十日　午後二時俄然大震あり。

我家は山かげのひくき處なればにや、さしたる震動もなく、そこなひたる處などもなかりしが、官省通勤の人々などつとめを中止して戻り來たるもあり、新聞の號外を發したるなどによれば、さては强震成しとしる、被害の場處は、芝より糀丁、丸の內、京橋、日本橋邊おも也、貴衆兩院、宮內、大藏內務の諸省大破、死傷あり、三田小山町邊には地の裂けたるもあり、泥水を吐出して其さま恐ろしとぞ聞く。直に久保木より秀太郎見舞に來る、ついで芝の兄君來訪、我れも小石川の師君を訪ふ、師君は此日、四谷の松平家にありて强震に逢たるよし、床の間の壁落ち、藏のこしまきくずる

るなどにて、松平家は大事成しとか。鍋島家にて新築の洋館震に逢て、珍貴の物品どもあまたそこなひ給ひけるよし。師君のもとにはさしたる事もなかりき。

此夜更に強震あるべきよし人々のいへばとて、兄君一泊せらる。この夜十時過る頃微震あり。

見舞状の來たりしは、横須賀にて野々宮君、靜岡にて江崎ぬしなどなり。山梨へも見舞の狀出す、例の返事はなし。

この頃の事、すべて書盡しがたし、朝鮮東學黨の騷動、我國よりの出兵、清國との爭端、これらは女子の得よくしるべき事にもあらず、かつは此頃打つゞき心のせわしきに、その日の事をその日にしたゝめあへねば、やがては忘れて散うせぬるも多かり、又折をまちてかいつけてん。

北里、青山兩醫博士黑死病しらべとて、香港に渡りたるはいみじき名よなりしや、青山博士のその病につかれてあやふげなる電音おぼつかなし、知らぬ人にもあらぬ中なれば、殊に哀なり。

樋口幸作兄妹此地に四月の半より來たりて、櫻木病院にありけるよし、二十六日の夜おくら來りて當時の病狀をかたる。

二十八日　くらより人來り我をむかふ、留守成しかば、母君かはりて趣き給ふ。

七月一日　芳太郎來訪。しばしありて横須賀より野々宮君參らる、かなしく淺ましくかつは哀れにもはづかしくもさま〴〵なる物語をかたり出る、失敗の女學生が標本ともいふべきにや。十時頃成けん櫻木町より使來り、幸作死去の報あり、母君驚愕直に參らる。

からはその日寺に送りて、日ぐらしの烟とたちのぼらせぬ、淺ましき終をちかき人にみる、我身の宿世もそゞろにかなし。

二日　早朝母君およびおくらと共に日ぐらしに、骨ひろひにゆく、山川程を隔てたる叔甥のおなじ所に烟とのぼるはこものがれぬ宿縁なるべきにや、おはしまさばと、今日はなき人に成し父上嬉しとおもふ。

五日　は小笠原家の數よみなり、會する人四人。

七日　小石川稽古日也。十二日までには是非金子の入用あるに、此月は別していかにともなすによしなく、師君に申てこそとこゝろは定めたりしを、さても猶いひおくれて、昨日までに成ぬ、今はいかにしても言はではあられぬ時とて、夕べ書物おはりて歸るさに文したゝめて机の上に殘し置し、されば今日の稽古日に何とかの給ふ可きは道理なり、よきこたへならば嬉しけれど、例の氣質も知らざるにはあらぬ師君が、いか樣なる事やの給ふらん。顏に………………

八日　平田君來訪、田中ぬしがかまくら紀行いづこの雜誌にか記載のこと賴む、これより森鷗外君のもとに趣けば、同君にたのみてしがらみ草紙などに出さばやとてかへる。午後中島くら殿來訪、物語多し、夜食を馳走してかへす。樋口のくらも來る、明早朝一番汽車にて歸鄕したしとあるに、今宵はみやげ物などとゝのふる爲本鄕通へ諸共に行く。

九日　早朝くらを送て上野に行、上野町の小松屋といへる旅店に知人の待合せ居り

て、共に歸縣をなすよしに付同家までゆく、上野よりにはあらで、新宿の汽車にて行よしなれば、我れはこゝより歸宅。

朝飯をしまひて、無沙汰み舞に伊東、田中の兩家を訪ふ、日くれまで遊ぶ。田中ぬしのもとにありける艶道通鑑とて五冊ものゝ隨筆めける、小出ぬしの藏書のよしなるをかりる。

十日　禿木子より狀あり、森君のもとにて田中ぬしの紀行よろしきよしに付、本名宿處報道あり度しとなり、返事つかはす。奥田君來訪。

十一日　師君のもとへ行く、田中ぬしも盆禮として來訪、雜誌の事を語るに喜色あふるゝやう也。師君いかなるにか、衣類その他を質入して、金子をとゝのへ給へるよしにて、加藤の妻より我れは金子をうけとる、師君ははやく出稽古に趣給ひぬ。此日、日くれ前より雷雨、中々に晴がたし、夜に入りてより歸宅。佐藤盆禮に來たりしよし。

十二日　到來物のありしかば半井君を訪ふ、めづらしくこゝろよげにてにこやかに物がたらる、されども來客のありければ長くもかたらで歸るに、いづれちかくに御音

づれ申べし。十五六の雨日のうちに雷雨なくばかならずといふ、たけをゝ敷此人の口よりかみなりの恐ろしきよしを聞こそをかしけれ。

靜かにかぞふれば誠や此人とうとく成そめぬるはをとゝしのけふよりなり、隔たりゆく月日のほどに、幾度こゝろのあらたまりけん、一度はこれをしをりにして悟道に入らばやとおもひつる事もあり、一度はふたゝびと此人の上をば思はじ、おもへばこそさま〴〵のもだえをも引おこすなれ、諸事はみな夢、この人こひしとおもふもいつまでの現かは、我れにはかられて我と迷ひの淵にしづむ我身はかなしとあきらめたる事もありき、そも〳〵思ひたえんとおもふが我がまよひなれば、殊更にすつべきかは、冥々の中に宿縁ありてつひにはなれがたき中ならばかひなし。見ては迷ひ、聞てはこがれ、馴ゆくまゝにしたふが如き我れならば遂に何事をかなしとげらるべき、かく斗したはしくなつかしき此人をよそに置て、おもふ事をもかたらず、なげきをももらさず、おさへんとするほどにまさるこゝろは、大河をふさぎてかへつてみなぎらするが如かるべし、悟道を共々にして、兄の如く妹のごとく、世人の見もしらざる潔白清淨なる行ひして一生を送らばやとおもふ。

十四日　小石川稽古にゆく。榊原家よりゆかた地、中村君より帶止、はんけち到來。此夜更るまでねぶり難し。あすの雷雨いかにや。

十五日　はれ。早朝芝の兄君來訪、少し物がたるほどに半井君參り給ふ、少し面やせたれども、その昔しよりはいげんいよ〳〵備はりて、態度の美事なるに、一樂織のひとへに嘉平次のはかま、絽にてはあるまじき羽織のいと美事なるをはふり給ふ、門に車をまたせ給へるは長くあらせ給ふべきにあらじとて、しゐてはとゞめず、鷄卵の折到來。

兄君は日くれまで遊び給ふ。夜に入りてより西村の禮助來る。此夜の月又なく清し。

十六日　はれ、風秋に似たり。

十七日　平田君より書狀來る、避暑として奧羽の旅にのぼりしよし、雜誌のこと申來る。

十八日　小石川に趣く、前田家の詠草したゝめ終る。

十九日　小說やみ夜の續稿いまだまとまらず、編輯の期近づきぬれば心あわたゞし。

此夜馬場孤蝶子のもとにふみつかはし、明日の編輯を明後日までにのばし給はらずやと頼む。

二十日　芦澤奈良志野より歸營、今日は土用の入なればとて蒲燒を芳太郎おごる。

隣家に此ほどよりかゝり居る女子あり、生れは神戸の刀劍商にて、然るべき筋の娘なれど、十六の歳より身の行よからで、契りしは何某の職工成ける、父なる人の怒にふれて侘しき暮しを二三年がほどなしつる、かゝりしほどに男子一人まうけて、二人が中にはあくこゝろもなかりしを、男の親の心惡しく、此女いかにしてもかくてあられぬ時は來りぬ、今はせんなしとて別れて家にかへる時、子は我が方につれもどして、その身はそれより大阪中の島の洗心館に中居といふ物に成りて、ことし五年がほど過ぬ、さるほどに此女生つき活達の氣象衆客の心にかなひて、引手あまたの全盛こゝにならぶ物なく、洗心館のお愛と呼ばれては、紅葉館のお愛と東西に嬌名たかく、我ぞ手折て我宿のと引かるゝ袖のさりとはうるさや、一つ心をぬし樣にと思ひこみぬるはかの地に名高きぼう易商、こゝにも人ぞしる森村市藏が一家に廣瀬武雄とてとしは二十六、當世樣の若大將、粹は身をくふ合ぼれの中おもしろく、互にのぼる二階三

階、せきはとゞめぬ帳場の爲にも、大盡客とて下にもをかぬもてなしを、猶やぬし樣御顏よかれと、みえにはそろひの總はつぴ、女子にちらす紙花の、哀れや女もつまりに成りて、双手にあまりしこがねの指輪、一つは内處、二つはそつと、三つ四つと賣つくせば、やがては客のひゞきに成りて、岡やき半分なぶらるゝ、座敷の數は昔しのまゝとても、我が手にのらぬそれ鷹のねらひたがへば、互がひの上にもみゆるぞかし。まけじ氣性は今更の戀に火の手つのりて、御免候へ、我にも可愛き人一人、のろけはならひぞ、うら山しくば眞似ても見給へ、花を見捨る藪住居もぬし樣故なら大事なき身とおもて晴たる取なしに、長くはあられぬ此家をはなれて共にと斗、息子も折ふし使ひ過しの詮議むつかしく、こゝの支店に左せんの身となれば、とるや手に手を鳥が鳴とはふるし、東に行て暫しの辛棒をと。落人ならねど人前つゝましき二人づれの汽車の中、出むかひの手前は、さる大家の孃樣學問修業にこれへとあるを我れに托されて同道とくるむれど、誰が目に見てもそれ者あがりのなりふり、さりとはむつかしの乳母がもとに、しばしの宿をとゞめける。

我れも家とくは四五年の後なり、部屋住の身の思ふにまかせぬほどは、そなたも修

業ぞや、つらくとも堅氣の家に奉公ずみして、やがて花咲く春にもあはゞ、假親まうけて奥樣とはいはすべし、賴むとありけるぬしが詞勿體なく、骨身にきざんでさらばと出立てば、全盛うつたる身に一人女子のはしり使ひ、何としてたへらるべき、我れこらゆれども、お主樣御氣に入らねば甲斐なや、出もどりの數を盡して、乳母の手前はづかしやと。こしらへ言の底情なくわれて、京の大家の孃樣と聞ましたるは僞り。九尾の狐の我が若旦那樣手の中にまろめて、手だてあぶなや、大切は若旦那樣が上とて、乳母が怒りに取つく島ふつとはなれて、我とはとかぬとも綱に行衞は波のわだ中を流れ小舟の身の上助くる人なくて、乳母が前への謝罪はこれと、をしや三日月の眉ごそりとそりぬ。

すくひ給へとすがられしも緣也、我身にあはぬ重荷なれども引受ますれば、御前樣は此家の子も同前、いふ事きいて貰ねば成ませぬ、東女はどんな物か、狹けれども此袖のかげにかくれて、とかくの時節をお待なされと引うけたるは今日也。

二十一日　早朝孤蝶君よりはがき來る、續稿は二十二日中にてよしとのこと、嬉しき人也。今日午後より田中君のもとを訪ひて、お愛がしばしの宿にたのまんとす。日

ぐれ少し前よりゆく、留守成しかどしばし待つ、たゞこゝくと斷がましく言を左右に托せど、見かけて頼みし我れに對し、厭とあらばお前樣女子にはあるまじ、横に車かしらず、長くとにはあらず二月か三月、それもむつかしくば一月にてもよしとて、おしつかへしつのはてに、さらば試に二日がほどをよこし給へといふ、雷雨はげしく、かへりは車にて送らる。

二十二日　晴れ。今朝やみよの續稿郵送。

朝鮮開戰の期漸く近づきぬ。

青山博士追々快方、北里技師かの地出立。

郡司君十九日入京、こぞの墨田川にくらぶれば心ある人の淚衣をうるほすべし。

二十三日　早朝田中君より斷の手紙來る、まことはうしろぐらき處ある人の、我れにはひたすらつゝまんとする物から、我よりつかはしたる女子に家内の樣子しれなば、つひには身の爲よからじとの心なるべし、あな狹の人ごゝろや、などをかし、さるにてもお愛のなげき一方ならず、いかでかく非運薄福の身と打なくさま、哀れにい

ぢらしければ、さらば今一度我が師のもとを訪ひて頼みてみんと家を出づ、師には事情殘りなくうちあけて頼み聞えたるに、師はその人となりの表面上よろしからざるにこれを引うけてかくまふといはゞ、我も君もこれよりの前途に一大障碍となりて、遂に救ひがたき大難を生ずべしとて聞入れ給はず、今はかひなし。

歸宅後、猶ほよくおあいと相談す、さらば一直線に武雄ぬしのもとを訪ひて、諸事談合の上に、いか樣とも策のほどこし方はあるべし、木挽町は物の表にして、これにはつくろひもあるべしはゞかりもあらん、武雄ぬしとの中は紙一枚の隔てなく、かくしだての入るべきならず、又よしや世人は何ともいへ、君にしていのちと頼むは此人なるべし、箱根にいますと定まりたらば、宮の下か芦の湯か、いづこまれ尋ねてしれぬことはあらじ、いざ給へ行きて逢見て後の事とうながすに、さらばと思ひ起して直に支度す。

隣家の妻がとゞむる詞のうるさかりしかど、さま〴〵に頼み聞えて出づ、出がけに、木挽町より帶取寄る爲とて文したゝむ、隣の妻が名前にて、ぬしのありかしれ居らば此文のはしにしるし給へとかく。

送りし車夫の歸りしは午後三時過る頃成し、首尾よく策の當りて宿處を敎へたるよし、まづはうれしかりしに、隣家の主歸宅の後、直に木挽町に實事を打あけんといふ、そはよろしかるまじとてとゞむるに、猶くど〳〵とのゝしりて、乳母のかたへの義理を思ふ、哀れなるは小人とるべき道をあやまりたるの人なり。

本郷向ヶ岡彌生丁三番地　櫻井榮三郎

相州箱根芦の湯松坂屋方　廣瀬武雄

しのぶぐさ（二十八年一月）

浪六のもとより今日や文の來るとまちてはかなくとしも暮れぬ、かしこも大つごもりのさわぎいかなりけん。

まちわたる人のたよりは聞かぬまに
　　またぬとしこそまづ來たりけれ

三日　の朝年禮にとてなから井のうし門までおはしぬ、何事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき。

ますかゞみわれもとり出ん見し人は
　　きのふとおもふにおもがはりせる

聞えし美男にて衣裳などいつもきらびやか成し人なりけるを。

おなじ日　さる人の來て、いでよせ聞にと引ゆるがすに暮ちかく家を出づ、三人也、菊坂の通を過て眞砂丁にのぼり、病院あとの原を過れば、月かげいつかたもと

にあり。

あづさゆみ春はいまだの中空に
　かすむとやいはん月おぼろなり

この夜新がたの坂本ぬしより賀狀來る、これよりはきだやらざりし也。

わすれぬもさすがにうれしからごろも
　つまにといひしなごりおもへば

猪三郎は商店を開き、信三郎は銀行を出したりといふ、ともにいとこどち也。

梅の花ひらきしやどのあまたあるを
　おくれ咲にも成ぬべきかな

君の男にをはしまさば、靑簾などの評をやうけ給はん、なま物しりのゑせものとくに子のそしるを聞けば、げにしか見ゆらんものぞとはづかし。

をり立し和歌の浦わのあだ波に

人のもくずとならんとやみし

四日　此よ本郷のあたりをそゞろありきして、にしき繪うる家になみろくが軍記はとゝふに、版の出來しはこぞなれど、今は品きれたりといふ、五百部よりほかはまだ世に出ぬなめりとうなづく。

谷のとの氷やかたき年たてど
　　まだよにいでぬ鶯のこゑ

初音ときかば、われも春めかんものを。

となりに酒うる家あり、女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとてわがもとにもて來る、ぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまさかは
　　誠にそまる色もありつや

うしろは丸山の岡にてものしづかなれど、前なるまちは物の音つねにたえず、あやしげなる家のみいと多かるを、かゝるあたりに長くあらんは、まだ年などのいとわかき身にて、終にそまらぬやうあらじと、しりうごと折々に聞ゆ。

つまごひのきゞすの鳴音しかの聲
　こゝもうきよのさがの奥也

ゆしまの坂通は、此ほどまで町やにていとにぎやかなりしが、家をこぼち道をひろげて岩崎ぬしのやしきに成しより、石垣たかくつみて木立ひまなく、やみのよなどいとさびしく成ぬ。

月まではいかにやいかによの中の
　ひかりはおのが物になしても

十五日　戸川の達子はじめてわがもとをとふ、殘花道人といふ父なる人の質はし

らねど、雨よのしなさだめにいひけるかしこ人とはかゝる人をや。

殘りなくしらせ盡してくれたけの
　　むなしかるべきむねのうちかな

ことしあらたに我家をとひそめし人ふたりみたりあり、かほよきは學の際などさしもあらず、ものゝ才ありと見ゆるはすがたぞ取所なきやいとうし。

から衣いづれをつまと撰らびては
　　おもひたゝれぬすさびならまし

おとこならぬこそこゝろやすけれ。

やゝかれがたなる男の、人めの關などことづけて文いひおこせたる、それがかへしをと女のこへるに書てやる。

はゞかりはたが人めにかしらかはの
　　關路よりこそ秋は立なれ

廿日　殘花君にとはる、みなわ集一冊これ見よとて也、なほ毎日新聞が日曜附錄にものせよとたのまる、稿をば二十六日までにといふ、文學界のかたもせまれるをこはいとあわたゞし。

分けいればまづなげきこそこられけれ
　　しをりもしらぬ文のはやしに

二月一日　友のもとをとひしに、折から雨ふり出ていとしめやかなり、高殿に茶を煮て靜かにうき世をかたる、障子を開らけば墨田川の流れしろきぬのをしきたるやうにて、堤にゆきゝのひとかげもをかしく、川を隔てゝかしこよし原のくるはと指さしつゝあるじのさんげ物がたりあはれふかし、此人を骨のあらしをと世にうたふはいかなるにか、筆取てはさこそ優柔華奢の風情もあらざらめど、大方人よりは情も深く、義にいさめるかたもおくれたりとは見えず、ものがたるまゝに落花たちまち雪に似たるのおもひあり。

落たぎつ岩にくだけて谷川の
そこには塵もとゞめざりけり

つまなる人は、かしこのくるはにこそ今まで有ける身とや、無垢の女の数は盡せぬよにとさんげの一卷世には心なく見すぐす人もあめり、我れこの人をすてゝ望みを世に求めば、我れは男の一生さこそ滿足なるべけれど、あはれや我ゆゑ沈みつる淵の出でがたく、苦しき海にうき寐のかなしさ、よそにはえこそ見過しがたけれ、いでよしや、人には長短のあるならひ、我れは此身をおくれたる方にして、一生のあやまちともおもひ置べし、更に世上の年わかき人にいはんに、つまをむかへば中立によりてこそ、わたくしには取かへしがたき悔もあるをと、うちなげく物からさすがに、とをしう捨がたきものにおもひたるいと情ふかし。

春淺きそのゝ若草わかければ
おふしもたてよつみはゆるして

ともいはまほしかりし、雨はをかしき物かな、降こめられてかゝる事も聞けるぞ

かし。

女友だちの久しう打絶てとはぬなどをば、いかにしてかくはなどおどろかしもすべし、男にはつゝましうてさる事もなさねば、いよ〳〵なつかしうこひしとおもふこともあり、月のよなどは更也、雨の日つれ〴〵と文机によりそひて文ども取散らし、その人の筆のあとなど、そこはかと見すさぶもあはれなり、かうやうの事人にはゆめいふまじかりけり、やがては名取川ぬれ衣くちをし。

よろしき女友達などあらばいみじうこゝろなぐさむわざならましを、さる人ももたねば折ふしのをかしきをもあはれなるをもかたらはんにかひなく、さしむかひてはたゞ人のこゝろやぶらじとさしいらへなどする、我がうへに有つる事どもかたるに、すこし聞よきをば物ねたみし、やがてしりう言をもすべし、よろしからぬをばまのあたりにあざけりて、しかもこゝろよげなるなど、すべて淺まし、男はさはいへど萬におほらかにて、かたらふ事のかひもありと見ゆれどそれもさるものにていさゝかやましきことそはぬにしもあらず、心やすきはひとり昔しのふみなどくりひ

ろぐるなりけり。

いにしへの人のあとふまじとにはあらねど、ふるきを尋ねて新らしきをしるなどいへるはいかなるにか、いさゝかおもひ得たるふしをことにまれうたにまれ、いひ出しきこえ出すに、やがて人はこと様なり、あやしさることいふ物かなどそしるめる、それもさこそはあれ、大方人はいにしへ人の書置けるあとをのみあなたうといかでかうはおもひうかべけんよもたゞうどにはあらじなどいひ／＼て、さらにそれがもとのこゝろをさぐらんともおもひたらず、流れの末に酔て世を終るにこそあらめ、ひかる源氏の物がたりはいみじき物なれど、おなじき女子の筆すさび也、よしや佛の化身といふとも人のみぞうくれば何かはことならん、それよりのちに又さる物の出こぬは、かゝんとおもふ人の出こねばぞかし、かの御時にはかの人ありてかの書をや書とゞめし、此世には此世をうつす筆を持て長きよにも傳へつべきを、更にそのこゝろもたるもあらず、はかなき花紅葉につけても、今のよのさまなどうたへるをば、いみじういやしき物にいひくだすこゝろしりがたし、今千歳ののちに今

のよの詞をもて今の世のさまをうつし置たるをあなあやしかゝるいやしき物更にみるべからずなどいはんものか、明治の世の衣類、調度、家居のさまなどかゝんに、天暦の御代のことばにていかでうつし得らるべき、それこそはことやうなれ、もしさるかき物の後の世に殘らば、人あやしみてものゝこかげにやおかん。

芝居はをかしき物なり、よせは猶いやしきもよきもたゞよりに寄てうちとけ物がたりなどもすめる、高座にのぼりて三味ひきうたうたふをのみ見る物かは、こゝら立こみたる人こそいみじき見ものにはあれ、圓左といへるが離縁のつまのはなしをしたりし時、大方の人はたゞその詞のをかしくおどけたるをのみめでくつがへりてどよみをつくりて笑ひたりしが中に、みそぢあまりの男、官吏ならましかば奏任がほどかと見えつる、黑きなゝこの三つもんつけたる羽織きし人一人うつむきて手巾にて目をしぬぐひ居たりしこそ、いかなるにかあはれ成し。

人傳などに聞つる時は、いといみじとおもひつる人の、逢見るにみおとりするこ

その口をしけれ、さては世にいみじとつたへいふは大方かゝるにこそ、めづらしげなし淺ましなど思はんはいかにぞや。それさる物なればこそ、世はいよ〳〵あなどるまじかりけれ、よろしき名ある人のかくいひがひなきが如く、かくろへしのびてありとも人しらぬほとりにおもひのほかなるかしこきもぞまじれる、不定の世なれば、目もたのまじ耳もたのまじ、位やんごとなきをも何かはおそれん、はにふの小屋なるをも何かおとしめん、名は實にあらず、實は名にあらず、せんずるにあなどるまじきは世の中也。

丁汝昌が自殺はかたきなれどもいとあはれなり、さばかりの豪傑をうしなひけんとおもふに、うとましきはたゝかひ也。

中垣の隣の花のちる見ても
　つらきははるのあらし成けり

水の上日記（二十八年四月）

春雨ふりて今日はいとつれ〴〵なり、なすべきことしも一わたりはてゝ身のいとまやう〳〵得らるゝに、田中とじがもと、伊東の夏子ぬしなどとはゞやと家を出づ、柳町より車いそがす、みの子ぬしはさる人と共に花見のもよほしなど折わろかりしかば直にかへる、夏子のもとにてものがたり多し、やがて中島の師がりとひて、博文館よりのたのまれ雑誌の題字、題歌など、爵位高き人々にとたのむ、二時頃家にかへる、西村の母とじ参り居らる、ともにひる飯したゝむ。ほかにことなし。

よに入て号外來る、平和談判とゝのへり、委細はあとよりとあり。

十七日　いまだ談判の後報來らず。

十八日　平田ぬしに文を出す。今日兄君來訪。來客は馬場君及び野々宮、安井の二人也、及びおかう樣、西村の老婆。

十九日　早朝平田君より返事來る。おかう樣來訪、ついで馬場君來る。西村の婆君も來る。終日馬場君とかたる。午後より雷雨、家の中くらし。

二十日　早朝大橋君來訪。小石川けいこ也、日沒近く家にかへれば久佐賀來訪、西村君もありけり、久佐賀ぬしと共に夜ふくるまでかたる、金六十圓かり度よし賴む。

二十一日　文を乙羽庵に出す、例の題字の事につきて也。穴澤の淸次郎君來訪。隣家のうら島轉宅す。

二十二日　はれ。早朝おかう樣來訪、小柳丁よりもち月のつまも來る。となりより緋鯉三尾あづかる。はがきをほしの君に出して文學界の寄稿を辭す。

うき世にはかなきものは戀也、さりとてこれのすてがたく、花紅葉のをかしきもこれよりと思ふに。いよ／＼世ははかなき物也。等思三人、等思五人、百も千も、人も草木も、いづれか戀しからざらむ、深夜人なし、硯をならしてわがみをかへりみてほゝゑむ事多し。

にくからぬ人のみ多し、我れはさはたれと定めてこひわたるべき、一人の爲に死なば、戀しにしといふ名もたつべし、萬人の爲に死ぬればいかならん、しる人なしに、

怪しうこと物にやいひ下されんぞそれもよしや。

　　よの人はよもしらじかしよの人の

　　　しらぬ道をもたどる身なれば

二十四日　午後馬場君來訪、本町にておもしろからぬ事ありしげにや、ものいひいとゞ激したるやう也、夕げ共にしたゝめて更るまで語る、雨俄かに降出ぬるにかさを參らす、駒下駄にては如何と、女ものにてをかしけれど、それをも參らすれば、笑ひてはきゆく。

二十五日　木曜なれば野々宮、安井の兩君來る。これより先、馬場ぬしの下駄かへしに參られしが、しばしにて歸る、けふ平田を作なはゞやと思ひしに、まだ身のゆく方さだまらねばとて、いと耻かし氣なるに、そのあたりまではつれ來しかど、得作なはぬなどかたられし。

二十六日　大橋乙羽君早朝に來訪、ながくもの語りす、此夜小出君來訪、もの語多し、西村君も來られしがはやくかへる。

二十七日　小石川けい古なり、さしてをかしきことも聞えず。

二十八日　此朝護國寺に花みる、上野の房藏來る、穴澤の清次、西村の禮助及び本宅の子息など來訪、夕暮ちかく野々宮君參りて、弟子への教授方などつげらる、此夜馬場君來訪、きのふも此家の上まで來たりしかど、さのみはとて得も立寄らざりし、小金井の紀行文、社よりは掲載をことはられたるに、君だに見すて給ひそとて見す、此夜もいたくふけてかへる。

二十九日　午後俵田初音けいこに來る、此次よりは日曜にといひやる。日くれ近く小出ぬし來訪、くちなしの花一部送らる。

三十日　ことなし、午後師君を訪ひて、前田家が題字の催促をなす、今一兩日のうちにはかならずといふ。

五月一日　書を久佐賀のもとへ送る、金子早々にとたのみやる、嶋田の妻來りて手紙をたのめるに書てやる、午後久佐賀より書あり、博覽會見物がてら京都へゆきてかの地よりの狀なり、六月末ならでは歸宅すまじとの事、さては留守へ文さし出したる事成しと笑ふ、金子の事さらばむづかし。

浪六のもとへも何となくふみいひやり置しに、絶て音づれもなし、誰れもたれもいひがひなき人々かな、三十金五十金のはしたなるに夫すらをしみて出し難しとや、さらば明らかにとゝのへがたしといひたるぞよき、ゑせ男を作りて、髭かき反せなどあはれ見にくしや、引うけたる事とゝのへぬは、たのみたる身のとがならず、我が心はいさゝ川の底すめるが如し、いさゝかのよどみなく、いさゝかの私なく、まがれる道をゆかんとにはあらず、まがれるは人々の心也、我れはいたづらに人を計りて、榮曜の遊びを求むるにもあらず、一枚の衣、一わんの食、甘きをねがはず、美しきをこのまず、慈母にむくひ、愛妹をやしなはん爲に、唯いさゝかの助けをこふのみ、そも又成りがたき人に成りがたき事をいはんや、我れたのみかれうけ引けばこそ打ちたのむなれ、たのまれて後いたづらに過すはそもたれの罪とかおぼす、我れに罪なければ天地おそろしからず、流れにしたがひていかなる淵にもおもむかんなれど、しばらくうきよの淺はかなるをしるして、自をしるをしへの一つにかぞへんとす。

二日　早朝書あり、安達の妻よりかねてのかり金催促の趣き、五圓斗のなれどもいまは手もとに一錢もなし難きを如何にせん、其よしいひて今しばしの日延をと母君

にたのむ、午後歸宅故なく濟みつるよし、かしこにては今年あらたに新室を作りて、それが壁額を我れにしたゝめもらひたしとてひながたよこす、うき世はつねなし、つねは我身貧にしてかれとめるから、無心合力など恐ろしうて、え近づかせじとふるまふを、さるおのれらに、我が常住の室の壁上にかゝぐる額書かせんとするよ。さまざまなるかなと打ほゝゑまれぬ。久保木より小でまり、白つゝじの花をもて來。四時頃より野々宮、安井も來る、和歌一巡おはりて源氏もの語講義をなす。のちには打とけてさま〴〵物がたるに、野々宮は例のあざれ出して、此ほど廊下にてすれ違ひたる馬場ぬしの事を評す、容貌は如何成しかよく見ず、人物のあたへはある人なりといふ、遠慮なき評をかの人に加へば、これより多望の時ならずば失望の時來たらんことうたがふべからず、そは大いなる失望か多望なるべしとほゝゑむ、一人しのびてはじめは笑ひしが、ゐたへかねて高く笑ふ。何故ともしらで聞居れば、猶詞をつぎていふやう、君にしてかの人の妻たる事をうべなひ給はゞ、かの人は幸福の人也、君にしてこれをしりぞけ給はんか、かの人は大失望のさま目にみゆるやう也とかたる、そは又ようゐならぬ事よと笑ふに、一座こぞりて笑ふ、日沒近く人々はかへる。此夜母君及び

國子として伊せやがもとにはしり給ふ、金四圓五拾錢かり來る、はやく臥たり。

三日　朝來かぜはげし。午前より田中ぬしが月次會におもむく、家を飯田町にうつされてよりはじめての會也、いたく尋ね佗にたり、歸宅せしは日沒前、留守に馬場君來訪ありしよし、いと失望して歸られしとか、氣のどく成し。

さりし日、孤蝶の君と秋骨ぬしとふたりして來る、秋骨少しほゝゑみながら、孤蝶君の君に參らせ度ものあるよしにさむろふうけさせ給ひなんやといふに、そは何をと問へば、何にもあらずと孤蝶子打けす、しばし物語るほどに、過る日社中打つどひて寫眞うつしたるよしに聞きけるを、一度は見せ給へなどいひ出づるに、そは事なしいざ出し給へと秋骨そゝのかせば、孤蝶子笑ひてふところをさぐる、半身像の寫眞也例には似ずあら縞のねんねこといふ物をきてそりかへりたるさま、何やらの親方おぼえてをかし、いとよくうつりたる事とたゝゆれば、孤蝶子滿足におぼすべしと秋骨かへりみる、やう／＼かたりて源氏のあげつらひなどするに、我れはいかにもをかしき事のあり、よにすき物の仇人とてそこにかしこに色めき渡るかの君にして、うきよのひまなきを打なげくをかしさよ、ほんやくの筆せはしきにも非じ、洋書の取しらべむ

つかしきもあらざらましをと秋骨のわらふに、そは君達あやまれり、人しらぬ戀に心を盡して、秋の長よをいも寐られず、細殿わたりたゝづみありき、起ゐて一人文かきやるなど、いかでか心のいとまあらんや、大やう戀は人にいはれぬくるしみなればこそさもよの中いとまなきやうに覺えけめ、戀する身ほどつかはるゝはあらじをといへば、さは今のよは開らけにけるよ、我れはかゝる人をかく戀わたるに此事なりなんやなど友どちいひかはすに、そはおもしろし、大方は成らん、さらば橋渡しを君にたのまん、よし引うけぬなどいふをこ者もさむろふとて孤蝶子をかへりみて笑ふに、これも苦るしげに笑ふ。

孤蝶子が父君ことしは七十三に成り給へるが、我が爲にとて筆簡にあしにかにの方ほりて給りぬ、これをも孤蝶子もて來て、返禮には歌よみ給へとせむ、秋骨何かものいひたげにありしが、孤蝶子の君をおもふこと一朝一夕にあらず、その熱度のたかきこと斗り難しといふに、そはかたじけなきことゝほゝ笑み居れば、さすがにあとのつぎかねて口をつぐむ、多く聞かんは侘しかるべし、かうやうの事何よりもつらし、かくありける後いとゞ孤蝶子のあし近きなんあはれなるやうにてかつは心ぐるし、も

のへ行ては一日もかゝさず文いひおこし、野べにつみつる花なんど送り來たるうれしけれどもわびし、人にはつゝむなるひめ事もらさずもの語りなど、いよ〳〵はかなし、君をばたゞ姉君のやうに思ふよなどいひ〳〵てとひよるに、五日とほどを隔てたる事なし、あはれ此おもひ今いくかつゞくべき、夏さり秋の來るをも待たじと思へば、ゆく水の乘せてさる落花にも似たり。

　　いづくより流れきにけん櫻花
　　　かき根の水にしばしうかべる

水の上（二十八年五月）

五月四日　小石川けい古也、早朝よりゆく、田中ぬしが來會おそからんとの事成しかば事かゝさじとてなり、ひるすこし前君も來る、今日入門の人、波多野初枝とて十五斗のむすめあり、紹介は堤ぬし成き、午後早々にみの子君かへる、古今集講義われのみにて終りき、人々の歸る頃より師君頭痛はげしきよしをもて床にいる、さしたる事にはあり氣にもあらず。

此夜馬場君。平田君來訪、ものがたること多し、ふけて歸らるゝに雨降り出づ、平田ぬしに傘のなければこゝなるを參らせぬ。

五日　母君芝の兄君がもとへゆく、金子少しもらはんの約束ありし也、午後山下の信忠及び西村の釧之助來訪、日沒少し前母君歸宅、淸正公御守り頂戴し來れりとて西村にもやる、此夜安達よりたのまれの額を書く、太陽五号來る。

六日　早朝母君は奥田へ、われは安達へたのまれの物もてゆく、老人のよろこびいとこと〴〵し、新聞雜誌などに折々わが名の見え渡るを、物馴れぬ人の目にいかゞけ

うなる事とや思ひけん、當り難きほめ詞など中々にはなじろまれぬ、亡父君あらばいかに悦ばれん。あはれ見せたかりしなど、老人はほろ〳〵と打なきてさへいふめり、我がはし書の文すこぶる心を得たりとてあまたゝび吟じかへす、歌は水戸の烈公が偕樂園にかゝげ置しそれをとのたのみ成しかば、はし書はたゞ斯くぞ、

水府何がし園のうち、亭あり、壁上にかゝぐる所の文字優に源烈公がおもかげをしめせるもゆかしければと、こゝにかり來て、市のちまたのかくれ家におく。

やがて新室の壁にかゝげて貴覽に備ふべしなど家内こぞりて喜ぶ、しばしかたりて歸る。日沒少し前野々宮君來訪。次の木曜日中島の月次會なればけいこは金曜にかへ給ひてよと文したゝめし所成き、折よしとてその旨つぐる。

小出つばらぬしが家集、くちなしの花といへる名もいとことなれりや、紫のおもとがそしりし和泉式部のそれとはうらうへの心ばへなめり、大方世にもてはなれてひとり思ひ得たるまゝを筆にすなれば天眞らんまんとやいはん、豪放なる體などはいふを得べし、なほ子細に見もてゆくに、誠に君は智恵の人也。常々我れにさとし給ふやう、

和歌をつくらんとおもふなかれ、おもひ得たるまゝをよみ給へかし、人智かぎりあり、天地のきわみあるべからず、學もと用なし、經驗恐るゝなかれと仰せられしものから、猶君の歌にも智惠あるこそうたてけれ、しゐてをさなびたるは誠の心ならねばかひなし、君が歌は幽玄のさかひを極むることいまだ百里のかなたなるべく、富士の根の歌にいはく、

一たびはのぼりてみんと昔しより
見るたびおもふ雪のふじの根

心情すでにをさなからず、無欲世界に到らんこと君の身として成るべきや、智惠はしばし人智をかすめて天眞に近しと見せしめしのみ。

七日　母君ちの道氣にてなやましうせさせ給ふ、午前浦島の妻來りて郵書をたのむかきてやる、午後西村の禮助あそびに來る、夕ぐれまでありたり、かゝりしほどに馬場、平田の二君上田柳村君を伴ひて來られしに禮助はかへる。まとゐのむしろ酒なけれども醉へるが如く、一さらのすもじをかこみて三人の客が論難評語わらひつかれたりつ平田ぬしなど積日の苦をみながら忘れぬといふ、こよひを戰の門出として孤

蝶、禿木の兩君は例のしけんにかゝられんとす、萬は凱旋の上とて意氣すこぶる高し、上田君名は敏、帝國大學文科生にして帝國文學の編輯人なるよし。溫厚にして沈着なる人がらよき人也、はやう中島のもとにて姉弟子也し乙骨まき子ぬしがいとこと聞くに、初見とも覺えずいとしたしまれぬ。

馬場君袖をかゝげ膝をうちて、我れは言はんと欲する所をいふのみ、我れを一葉女史にこぶるものとあやまるなかれ、よきをよきといひあしきをあしといふもと我がこゝろ也、太陽第五号にのする所の一篇ゆく雲を見てよしと思ひしは我がおもひし也、一葉女にこびるならずと、其いふ處さかん也、平田君は萬づ言少なにて、耻かし氣をつくれるもをかし、馬場君戀をとけば、顏をそむけてもはや止め給へとくるしげなるも此人に似ずとかつはほゝゑまれぬ、人物評に詞まじへず、人の聞をはゞかるに似たり、頭髮みじかくはさみあげて、今朝のほど床やが手にかゝりしとおぼしく、衣類など見よげなるをまとひて來たり。先きの夜君のもとにて平田はしくじりの詞をならべしかば、君にいたく論じられていとくるしがりて逃げしが、道すがら我れにしば／＼いふやう、今日は歸り際いとわろかりし、一葉君誠にいかりしにあらずや、もしさら

ばいかにせんと心細げにいひぬ、今日は又我がもとに來て、我れはこれより一葉君をとはんと思へど、一人にては何となくつゝまし、君もろ共に行て罪を謝し給ひてよと三拜してたのみしはをかしかりしと馬場君興に乘じてかたれば、そは僞也、そは僞也、我れはさる事いひし覺えなしといふ、何覺えなしといふか、その顏を今一度見せよ、この僞りものめと、さかんなるは孤蝶子也、われは一葉君の我まゝ息子なれば此家にては遠慮をせぬに極め居れりとて、膝をくづすも磊落の風中々にをかしけれど、平田ぬしがおもゝち常ならず見えぬ、歸宅せしは夜も十時にちかゝりし、

　夏はやし女あるじがあらひ髪

とは馬場ぬしが當座の句成し。

此夜西村の釧之助君も來訪。更けて火事あり、九だん坂のほとり成るよし。

八日　晴れ。あす木曜日なるに中島の會さし合へば、野々宮、安井兩君のけい古を今日の方になす、安井君より松嶋の硯を送られぬ、暮てかへる。

此夜西村君刀劍及び南州の軸物持參、これを質入して金子五十金斗得たしといふ、母君同道伊せやがもとへゆくに、目利とゞかねばとてとゝのひ難し、すでに今宵は十

時を過ぎぬ、明けぬればやがて入るべき追證據の金也、いかにせんと當惑の額をあつむ、さらば致し方なし衣類をもて來給へ、明早朝伊せやを口說き、三十四十は作るべしといふに、さらばと約して西村君かへる。

九日　早朝禮助衣類を持參、六品あり、その外に銀時計一個、合せて四十金と申せしに、伊せや中々事むづかしういひて僅かに二十二を用立しのみ、さらば甲斐なし、これを一まづ西村に持せやりて、此日くれまでには、あらんほどの我等が衣類取まとめて猶明日の追證據を作らばや、そのほどには又よそより金子のかり入れもつくべしなど語りあふほどに、釧之助も參る、右の事をかたりその金子の不足ならんを問へば、いなこれほどあらば何とも成るべし、今日だにすまばその後は事なしといふ、さらばとて一同むねを安めぬ、十時ごろより我れは中島の月なみ會にゆく、會する人三十人斗、しるすほどの事なし、今日久保木の長十郎來る。

我急を見て手を空しくせず、うらはとに角表面上なすほどの事をなしくれたる人、我にても又むくはざるは道ならず、西村ぬしの爲に力を盡す事このほかに何事もなし機一髮のむつかしき商買に身をゆだぬればかゝる事折ふしあらんとす、あやふきをも

て樂しみとするも又人の一くせならずや。

十日　姉君來訪、ついで秀太郎も來る、長くあそびたり、日暮れて馬場君、平田君袖をつらねて來らる、今日高等中學同窓會のもよほしありて平田ぬし其席につらなりしが、少し酒氣をおびて一人寐んことのをしく孤蝶子を誘ひて君のもとをとひし成りといふ、このほどの夜とかはりていと言葉多かりし、孤蝶子例によりてをかしき事どもいひちらす、哲理を談じ、文學をあげつろうにほこ先つよし、夜はいつしか更て十時にも成ぬ、いざ歸らむと馬場君いへば、禿木子窓にひぢをもたせてはるかに山のかたをな　つ、いかにしても僕は歸ることのいやに覺ゆるといふ、こはあまりにうちつけ也、少しつゝしめよと孤蝶子大笑すれば、今しばし置かせ給へと、此度は時計を打ながめていふ、月は今しも木のまをはなれて、やゝのぼらんとするけしき、村くも少し空にさわぎて、雨氣をふくみし風ひやゝかに醉ひたるおもてをなでゆけば、平田ぬしあはれよき夜やとかうべをめぐらしてはたゝへぬ、いかで一句と孤蝶子をうながすに、

月のまへにわか葉のそよぐこよひかな

景は句をのみ情に沒して、默々の間にたゞよきよと斗おもはるゝもをかしと例の笑ふ、いかに禿木子さはあらずや、我れは一葉ぬしがもとを訪ふごとに、唯しばし物語りせんのこゝろいつとなくゆるびて、いつも日をつゐやし夜を更して歸りては、しばしば氣の毒のねんおこりながら、こゝにある間は何事もみなからわすれて歸り難きはあやしけれど、ここは我れのみにもあらじ、君はいかにといふに、誠にさ也、今日はことに一時間斗のこゝろ成しをとてともにわぶるもいとをかし、試驗も近づきぬ、かくそゞろに遊び居るを秋骨きびしく異見などつらければ、かく夜更て歸らん事佗し、今宵は孤蝶子のもとに泊まらせ給へ、かれのきびしきにはほと〳〵難義を極めぬとかしら重げ也、そゞろによもふけぬ、十一時をうつかねの音に、さらばとて二人共にたつ、をかしき辻占をひらきて、これたまはらんと孤蝶子袖にしてかへる、こゝろ多き人よの。

時は五月十日の夜、月山の端にかげくらく、池に蛙の聲しきりて、燈影しば〳〵風にまたゝく所、坐するものは紅顏の美少年馬場孤蝶子、はやく高知の名物とたゝえられし兄君辰猪が氣魂を傳へて別に詩文の別天地をたくはゆれば、優美高傑かね備へて

をしむ所は短慮小心大事のなしがたからん生れなるべけれども歳はいま二十七、一たびおどらば山をもこゆべし、平田禿木は日本ばし伊せ町の商家の子、家は數代の豪商にして、家產今やうやくかたぶき身におもふこと重なるころとはいへれど、文學界中出色の文士、としは一の年少にて二十三歳也とか聞けり、今のまに高等學校、大學校越ゆれば、學士の稱号めの前にあり、靜かに後來を思ひて現在を見れば、此會合又得べしや否や、長やかなるうなじを延べて、澁茶一わんまた一わん、醉醒は甘露の味と舌打しつゝ、辻占を開らきては甲笑ひ乙うらむ、二人の間に遠慮なき談笑を交せて時に大議論の評者になるなど、つく〴〵思ふてをかしきこと二なし、わが身は無學無識にして家に產なく、緣類の世にきこゆるもなし、はかなき女子の一身をさゝげて思ふ事を世になさんとするとも、こゝろに限あり、智惠の極みしるべきのみ、かれは行水の流れに落花しばらくの春をとゞむるの人なるべく、いかでとこしへの友ならんや、親密〳〵、こはこれ何のことの葉ぞや、平田ぬしとはをとゞしの春より友也、馬場ぬしは一年の知を得たる斗、さりとも人情のさかんなるに乘じては相逢ふ事しばしもだし難く、一と月のほどに七度の會合多しとせず、それが中にていかにつもる言の葉ぞ

や、二度三度の文さへおこしぬ、我れよしや運ありて雲井の庭に遊ぶとも君がやへもぐらかならず訪はん音づれぬべし、はにふの小やは物かは、水火の中也ともその志は見すべしといふ。僞のなき世也せばいか斗此人々の言の葉うれしからん、人ははかなき世にはかなき言の葉をならべてとかくの契りなどこはもと夢の中なるたはむれ成けり、此人々と我れもとかり初の友といふ名のもとに遊ぶ身也、うき世の契りに於ていと輕やかなる友の中也、さりとも猶此輕やかなるちかいさへ末全からんや、まして情にはしり情に醉ふ戀の中に身をなげいるゝ人々いかに秋風の葛のうらみつらからざらん、夜更て風さむし、空ゆく雲の定めなきに月のはれくもる事今さらの樣におもはれて、燈火のかげにものいふ孤蝶子も、窓によりて沈默する平田ぬしも、その中にたちて茶菓取まかなふわれも、たゞ夢の中なる事ぐさに似て、禿木ぬしがいはゆる他界にあるらん誰人かの手にもて遊ばるゝ身ならずやと、思ふ事深し、きのふは他人にして今日は胸友たり、今日の親友あすの何ならん、花は散るべき物とさだめて猶暮春の恨みたれもありぬべき事、こよひの會合をしばらくしるして、袖の淚の料にとたくはへぬ。

十一日　は小石川の稽古日なり、來る人二十八人に近し、空あれて雨さへ降出づ、太陽五号中村君持參されてわが小說を人々に見する、小笠原ぬしかりてゆくに、田中ぬしも見たしと約す、家にかへりしは日沒ちかゝりし、夕飯終りてはやく床にいりし。

十二日　晴れ。野々宮君より添書ありて石黑とら子入門、つれ〴〵草講義。雅俗の文章まなび度よし、二時間斗をしへて歸す、同じ時に三枝の信三郞君來訪。十二時ちかくに歸る、中島の師君より前田侯爵、同夫人の書を郵びんにたくして送りこさる、こは博文館が百科全書の禮式の部にかゝぐべき題字也、侯爵のは禮の一字、奥がたの歌は師君代作なるべし、

　　里人も田に引く水のあらそはで
　　　みちをゆづれるよと成にけり

かくぞ有し、かしこにても取いそぎつゝあらんを思へば、直に車夫にもたせやる、主人不在なりとて狀箱を取置たるまゝ使ひをかへされき。此夜入浴の後藥師の御緣日に草花みる、よふけて寐たり。

十三日　早朝。野々宮ぬし及び在淸國芦澤より書狀來る、日淸媾和とゝのへればや

がて無事歸國なすべく、當時は金州附近に宿營のよし通知也、野々宮君よりは、音樂會の切符とゝのへ置たれば、他より求むる事見合せ給へとの事也、十八日美土代町にてあるべき青年音樂會の也けり、十時に近きころ大橋君のもとより使あり、きのふの禮及び太陽五號にのせたる我小説をば原抱一庵の國民の友にて細評するよしいひ居るとか、夫丈申こされたり。

十五日　午後馬場君來訪、春陽堂がしやしん畫報及び文藝くらぶ四號をかさる、夕はん共にしたゝめて、夜にいりてよりかへる。

十四日　ほしの君より、文學界の寄稿かならずとたのみこされたる物から、いまだ一文字もしたゝめ難し、今日は十七日也、今いく日のほどもあらねばこゝろしきりにいらるゝもせんなし。

今日夕はんを終りては、後に一粒のたくはへもなしといふ、母君しきりになげき、國子さまぐ〵にくどく、我れかくてあるほどはいかにともなし參らすべければ心な勞し給ひそとなぐさむれど、我れとて更に思ひよる方もなし、朝いひ終りて後、さら

ば小石川へだに行こゝろみんとて家を出づ、風つよくしておもてもむけがたし、師君のもとへゆきて博文館よりの禮などのぶる、流石に金子得まほしきよしをもいひがたくて、物語少しするほどに、師君起て例月の金二圓ほどをもて來給ふ、うれしともうれし、やがて暇をこひて歸るに、家には宮塚の老母訪ひ來居られたり、ひるいひ出しなどす、午後伊東夏子ぬし來訪、ものがたり少しゝて、同人は齋藤竹子ぬしがもと訪はんとてゆく、日くれ近く宮塚の老母かへる、引違へに西村君來訪、齋藤ぬしよりつかひにて手製のすしを送られき、人々歸りての夜にいりて、國子しきりにわか竹にかゝり居る越子一座の明日のよ限りにてよそへ行くべきをいかで聞かばやとうながすに、さらばとて家を出づ、午前はけふかぎりの食とて胸を痛めし身が、夜にいりてはよせへ遊ぶ、世はすべて夢也、聞しはこし子が三かつ酒や、こし六が太かう記、そのほかにもありけり、こし子はとし廿四五斗、あやの助にくらべて三だんの上に居るべく、小清にくらべて三だんの下なるべしなど評す、熱意は聞く人の情をうごかして、此としわかなる藝人が前に髭男のなくもの多し、冷語聞えず場面靜か也き。

十五日　馬場君來る、しけん第一回首尾よし。

十六日、木曜なれば野々宮、安井けい古に來る、おかう樣も來訪ありしが、母君淺草へ參られし留守成しかば早く歸りき。

十七日　一日雨ふる。かしらのわるくていと寐ぶたきに、終日床にあり、夕ぐれよりおき出づ、師君より明日興風會例日なればけい古は日曜にとはがき來り、關場君いもとより藤子が病氣の容體申こさる、星野君より文界學の寄稿かならずと申こされしは十四日成しが、いまだに筆取ることのものうくて、一回の原稿もしたゝめあへず、二十日ごろまでにと思ふにいよ〳〵かしらいたし。

時は今まさに初夏也、衣がへもなさではかなはず、ゆかたなど大方いせやが藏にあり、夕べごろより蚊もうなり出るに、蚊や斗は手もとにあるなん、これのみこゝろ安けれど、來月は早々の會日などひとへだつ物まとはではあられず、母君が夏羽織これも急に入るべし。ましてふだん用の品々いかにして調達し出ん、手もとにある金はや壹圓にたらず、かくて來客あらば魚をもかふべし、その後の事し斗がたければ、母君、國子が我れを責むることいはれなきにあらず、靜に前後を思ふてかしら痛き事さま〳〵多かれど、こはこれ昨年の夏がこゝろ也、けふの一葉はもはや世上のくるしみ

をくるしみとすべからず、恒産なくして世にふる身のかくあるは覺悟の前也、軒端の雨に訪人なきけふしも、胸間さま〴〵のおもひをしばし筆にゆだねて、貧家のくるしみをわすれんとす。

梅雨のふるき板やの雨もりに
　こやぬれとほる袂なるらん

隣にすめりし人家移りすとて、その池にかひたる緋ごひ金魚などかず〳〵我家にもて來てあづけぬ、大いなる魚共のひれを動かし尾をふりておよげるさまいとおもしろく、來る人ごとにほめたゝゆれば、いつとなく我物のやうにおぼえて、斗らざるに庭上の奇觀をそへたるなどよろこびあひし、ほどへてかしこの妻なるものその家に池のほれしかば魚たまはらんとさでなどもて來たり、いざとりて行給へといへば中にいりて追ひ迴るに隣りよりおこしたる少さきは得よくも取がたく、もとより我が池にありし大いなるをのみあつめて、數にみたしてもて歸る、それしか非じともいふにうるさければ取るにまかせてやるを、母君などいとにくがり給ふ、かくあるにて思へば、世は誠に常なきもの也、きのふおもしろしと見る事なくば、今日の殘りをし

き思ひあらんや、斗らざるに景色をそへ、斗らざるに景色を損す、つく〴〵おもふて、榮華も富貴も一朝の夢なるを思ふ事切也。

十八日　の夜はじめて大音樂會場にのぞむ、新知己を二人得たり、場のありさま心よはき身の胸つぶるゝ如し。

十九日　午前のうちだけ小石川稽古を斷りて、石ぐろ虎子がけいこをなす、野々宮君やがて來訪あり、もろ共にひるいひたべて我れは小石川へゆく、歸りしは日沒近かりしが、西村君來訪ありけり、留守のうち穴澤の淸次及び半井のぬしおはしたるとか、淸次の事は事なし、半井ぬしはいかにしておはしたるにや、夢かとたどられて何事を仰せられしと聞くにあわたゞし、むし菓子一折を送られしよし、別しての物がたりもおはせざりしや、姉君を迎へこんと幾度もいひしが否さしての用事も侍らず、久々にて御不沙汰見舞に參りつる也とて歸られしといふ、とにかくにむねつぶる。

二十日　野々宮君及び兄君にはがきを出す、兄君のもとへは家に不用の蚊やあり時節柄入用あらば送り參らせんとて也、野々宮へはきのふ半井ぬしのいひたる令妹上京中なれば暇を見て訪はせ給はんはいかにと也、夜にいりて馬場君及び秋骨子來訪、

孤蝶君けん定しけん第二回を本日受け給ひしよし。かなはず落第ならんとてかしら重げにしをれて見えき、物がたりさま〴〵して夜更てかへる。

二十一日　午後門にあわたゞ敷くつの音してはせ入る人あり、たれかと見れば孤蝶子、きのふのしけん首尾よく行たりし事今見て來たりぬ、少しも早くしらせんとてかくはいそぎ來つるとうれし氣のそ振共に〳〵うれし、日暮まで遊びてかへる、此夜小出ぬし來訪、ものがたり多し。

二十二日　平田君來訪あるべき約あるに、終日まてども來たらず、佐藤の梅吉及び西村の禮助來る、梅吉ははやく歸りて、日沒近く銅之助來訪、相場の場面今朝來一變して、月はじめよりの玉殘らず復活、元の外に二十の利益ありき、これより直に例の伊せやがあづけを引出し給はれとて、喜色まん面にあふれぬ、よろこびなりとて一同にうなぎの馳走をなす。かくありしも全く君達の周せん盡力による事とてかたじけながる事二なし、きのふは馬場ぬしの喜びあり、今日は西村の吉報をきく、家は貧たゞ迫りに迫れど、こゝろは春の海の如し。

水の上（二十八年五月）

五月二十三日　野々宮君けい古に來る、安井君は風邪のよしにて休みなり、大橋君より日用百科全書和洋禮式の部出版成しとて、前田家及師君、我がもとへも各一本を送らる。

二十四日　早朝大橋君のもとを訪ふ、はじめて妻なる人にあふ、乙羽ぬし出勤の後も久しくかたる、何かふるき書きものにてもよし文藝倶樂部のかたへ出さんといふに、家に歸りてかたれば、そはいとよし、此みそかのしのぎをつけんほどに、甲陽新報にのせ置し經机はいかにとて人々うながせば、さらばとていさゝか色をそへなどす、かゝるほどに西村君來訪、かくしか〴〵などかたれば、さのみに心をな苦しめ給ひそ、みそかの事は我れすべしとて、取あへず五圓ほどを殘しゆく。

二十五日　小石川けい古なり、出がけに大橋君へ小說原稿を送る、けふは馬場ぬしが成否さだまるべき日よと思ふにむねさわがるゝやうなり、家にかへりてしばしあるほど孤蝶子より書あり、八十人の受驗者やう〳〵にへりて殘りは六人なり、その中に

君もあるよし、親なる人々がよろこび思ひやられて涙ぐまるゝほどうれし、今宵わか竹に國子を誘ふ、更てかへれば、馬場君さらに來訪ありしよし、そは無禮成しと侘しがる。

二十六日　午後西村君來訪、やがて生まるべき子のまうけなど更になし置くとも見えぬを母君こと〴〵くとがめて、いざ衣類など買ひにゆかん、そのしろ出せとてあわたゞしく西村がり行く。釧之助はなほ殘り居て、さま〴〵に身の不幸をなげく、はてはなさけなげにと息つきて。我れは此世へくるしむ爲に生れ來つる身か計りがたし、思はぬつまに思はぬ子など出來るなん淺ましとも口惜し、幸ひにしてあの子うせなばよろこばしけれども、猶いのちありてながらふることならば、つひに乳母としてもかれをとゞめ置かざるべからず、さてはいよ〳〵我が生涯のおもしろからぬに、せめては君達だに見捨て給ひそ、こゝに來てかく物がたり暮すは心くるしけれど、しばしの極樂として寄り來る身をすくひ給へ、猶金錢に事かく折もあらば、そは遠慮なくつげこし給ふぞよき、我れにあたふほどの事は何時にてもなすべしなどいふ。かゝるほどに馬場君、平田ぬしつれ立て川上眉山君を伴ひ來る、君にははじめて逢へる也、とし

は二十七とか、丈たかく色白く、女子の中にもかゝるうつくしき人はあまた見がたかるべし、物いひて打笑む時頰のほどさと赤うなるも、男には似合しからねど、すべて優形にのどやかなる人なり、かねて高名なる作家ともおぼえず心安げにおさなびたるさま誠に親しみ安し、孤蝶子のうるはしきを秋の月にたとへば、眉山君は春の花なるべし、つよき所なく艶なるさま京の舞姬をみるやうにて、こゝなる柳橋あたりのうたひめにもたとへつべき孤蝶子のさまとはうらうへなり、君の名を聞初しはもはや四年かほと〳〵五年にも成るべし、參りよる折を得がたくて御近けれどもかくうとくは過ぬ萬づに心隔ず物語をたび給へとて打とけてかたる、來月あたり合綴のもの春陽堂より出さんはいかになどいふ、小說中の人物のこと、世間の事、我どちが業のくるしき事、朝寐なる事、自だ落なる事、正直なる事、損なることなど語り出るに極みなし、やがて馬場君政治を論じ出せば、眉山君手を打て、さなり面白しと一口まぜにいふ、平田ぬしも首尾よくしけんの及第したるよし、此人は言葉少なにて、折ふし孤蝶子をたしなむる樣なる詞づかひあやし。人々の來たりしは三時頃成し、五時といふより雨降り出づ、かき暮し降るほどに日の暮れゆくも知られず、うなぎ取よせなどして人々

にまいらす、歸りしは九時成しが、雨やまずして空くらし。

二十七日　中牟田つね子ぬしが數よみの會小石川にて催す成き、終日よむ、さのみは事なし。

二十八日　午後大橋の妻君わがもとへ和歌の門にいり度よし申來る、しばしかたりてかへる、引違へに野々宮、安井君來訪、明後日の木曜主上が御出むかへをなすべき筈につき、參上むづかしきか斗りがたしとて、歌よみに來しなり、日くれがたまでありて歸る、月謝を持參されき、此夕べ眉山君おとつひかしたる傘を持參、けふは又ことにうるはし、あがり給へといへば、今湯にいらんとて門には人もまてればといふ、見れば手ぬぐひさげたり、金ぶちの眼鏡に黃金の指輪など、誰が目にも天晴の小說家と見ゆらんを、こゝかしこの書肆に借財つもりて、一部を終れば一部のくるしみ眼の前に迫れる身としる人はなからん、これを此人々が境界かと見るに、我が身もかへりみられてあはれにはかなし。此夜にいりて馬場ぬし來訪、文學界の事につきて憤ること深げなり、退社せばやと思ふなどかたらる、かゝる事は大方の人にいふべきにもあらねば、常に親しといへど秋骨にも藤村にもえもらさぬ也、君は姉君のやうにおぼゆ

れば、こゝろのうちもらさずつげまつるとて、憤をおびたる顏もち淋しきやうにすごきやうなり、あまりに潔白に過ぎ給へばつひに人と衝突し給ふなり、さりとてよの人なみにうらおもてを置かせ給へと申ならねど、さのみ人事をこゝろにかけずゆるやかにふるまひ給へ、御老親おはします上に御身もすこやかならず、世を打侘て御病ひなど引出し給はゞいかにせん、何も御心にとゞめ給ふなといふに、いとよく承りぬとて、涙のこぼるゝとおぼしくしば／＼眼鏡をぬぐひ居たり、とある時は熱のおこりたるやうにさわがしく、ある時はこゝろのそこまで冷えたるやうに沈みいりぬ、こはこれ神經のする業なるべく、一つには家に傳へし高潔なる風のうきよにかなはで心もだゆるあまりわかき人のならひ血のさわぎはげしきなめり、文學界の內輪もめなどそのもと末をいかにとも知りがたけれど、我がもとなどにて馬場君の心安げにふるまひ給ふさま一つは禿木などによからぬ思ひをやいだかせたる、うきよのほかに立てる身はいかならん波のたゞよひもよ所に見るべきなれど、猶めの前にせまりたるあはれの見すぐしがたく、いかならんと思ふ事深し、此よりも十一時に近きころ孤蝶子かへる、しけんの前より過度になしたる勉強のなごりと、よくなし得たる心ゆるび及びそのほか

にも猶いかならん事の身にさわられるか足は力なくかしらはさゝふるにたえぬやうにて、沓などよくもあがらず、筋骨なきやうに成てかへりゆく姿何とはなくかなし。

此日芦澤芳太郎より書あり、台灣總とく附屬の身と成て、いよ／＼かの地へ趣くべく成しに、これよりは病氣と戰爭との二つをこゝろみる覺悟なりなどいひおこす、文は野戰郵便規則により月一回のほか出しがたければ、此書をば佐久間、廣瀨の二軒及び故郷へも送り給ひてよなど有けり、かたの如く取あつかふ。

二十九日　晴れ。する事なしに過ぬ、惡るき流行すべききざしあればとて大掃除はじまる。日くれてより西村君來訪。

三十日　風少しそひて空ははれたり。

主上東都に還幸、即ち凱旋の當日なれば、戸々國旗を出し軒提燈など場末の賤がふせやまでいたりて、うらや住居するものは手遊やにうる五厘國旗など軒にさしたるもみゆ、着輦は午後二時成りといふ、十時ごろ安井君來る、これより高等女子師はん校一同と共に奉迎に趣かんとするを野々宮君こゝより參り給はんとありしかば誘ひに來たりしといふ、いな君はおはさずといふにさらば又のちに參らんとていそぎて出づ、

正午過より花火の音絶まなし、午後三時過ぎ芝の兄君來る、芝區民奉迎の徽章を胸にかけて、塵の中をはせめぐりしかばいたくつかれしとおぼしくまろぶやうにして來たり、酒の支度などするほどに、野々宮も奉迎終りて來る、利久ひはの三つもん二枚袷、もち論地はちりめん也、白茶二重どんすの丸帶、雪駄ばきにて來る、これもつかれて正體なきやうなり、今日の有樣はいかになど問へども、たゞいまだおぼえずかゝる騷ぎはと誰も〳〵いふ。かゝるほどに秀太郎も來る、安井君も今來るべしなどいひ居るほどに、てつ子のもとより使ひあり、止みがたき客ありて供に萬歲を祝さんなどありて出がたければとなり、さらばせんなしとて、野々宮には夕めし出しなどして、こゝなるひとへものかして歸す。兄君、秀太郎も日沒頃かへる。このよは早く寐たり。

三十一日　空くもれり。今日はきさきの宮の還幸あるべき日なればいかで雨ふらざらんやうにといのる。午前のうち母君西村へ見舞にゆき給ふ、家には秀太郎來る、博文館より經机の原稿料來る、午後母君及び國子右の金子持てゆかたをかひにゆく、明日のけい古日にきるべきものなければなり。

六月一日　小石川けい古にゆく、一昨日のものがたりおびたゞし、たれもゆきたり

かれも見たり、君はいかになどとひかはすに、誠にえゆかざりしは師の君、田中ぬし我れなどゝしられぬ、凱旋門も今日は取くづさんとすなど聞くに、そは情なし、千載の一事といふ此大いわひにあひながら空しくその門さへ見過ぐさんや、さらばこれよりけい古終らば直にゆかん、車あつらへよなどもよふしたつ、四時といふに人々歸りて、我らは師の君を先に田中ぬしもろとも車いそがす、和田くら門を入りて坂下もんのあたりへ來るほど、こゝかしこに査官立ならびて、車おりよ／＼とゞむ、何事かと問へば、只今うへの青山より還御あるべきに、拜せんとならば、並立せよとなり、こは／＼思ひよらずとてとゞまる、まだ御先おひの騎馬も見えねば、わたらせ給ふにほどあるべしとてあたりを見かへるに、われどちと同じく例の門見にゆく人々なめり田舍翁のよめごつれたる。わかき書生の老たる母いざなふもみゆ、車四五輌をつらねてよろしき衣きたる人などもありしが、いづれも御通輦を拜さばやとてをりゐるに、引すてたる車のさゝなどそゞろにをかし、加茂のまつりのみ使わたるほど、こゝかしこに牛車のかさなりて物見の袖口など古代のものゝみめづらかにおもしろきやうなれども、黑漆金もんの車にほろ骨の朱なるもゑびなるもをかしく、白茶のびろうどに黑

き毛もてへりをとりたるひざおほひ、車夫はいづれも眞白き姿にて小松がもとの芝生にあつまりて、さすがにこわ高にも物いはず、おふこおろして休み居る市人と物いふさまなど、繪卷にして殘さまほし、あまりにことの優なれば、田中ぬし呼かけて、いかに此ありさま百年の後に見せば明治のよの古雅なるさまなど人たゝゆべしといふに誠にしかあらん、さりながら此物見には車あらそひのおこるべき美形もあらず、高貴なるなどかけてもあらで、みなわれどちの壺折姿どもかなと笑ふ、かくさしかけたる洋傘をもやがて長柄などいはずばみやびやかならずと笑ふに事さめてたゞほゝゑむ、と斗ありて騎馬の兵士まづ見え初ぬ、わたらせ給ふ也と人々靜まれば、御車たゞふたつして前後の人もさまで多からずたゞ靜やかに坂下御門よりいらせ給ひぬ、あはひはるかに隔たりたればえよくも拜しがたかりき、守りとくれば人々いそぎて車呼寄す、やがて凱旋門ちかく成れば、もはや取崩しに取かゝれりとおぼしく、取おろしたる杉の葉などこゝかしこに山とつまれぬ、さしもに大きやかなるものを時のまにいかで取くづし得べき、櫻田門に向ひし方斗は杉の葉なごりなく成て、組あげたる材木のみいと高々とあほがれぬ、車よりおりて内にいるに、もり砂の深さ中下駄の歯を埋めて、

折柄風さへあれば、いと佗し、すべてを杉の葉と樫もておほひたるに、さながら青地のにしきもて卷たてたるが如し、前後三ところの門に、東京商人有志者何々などあらはしたるはかはらなでしこのこまかなるを紅白色々さしたるなれば、美はしくして中中にやさしく見えぬ、それもこれも日にてらされてやゝ枯れがたに成たるなんあはれなる。かくて取すてなば何方のかまどの薪木にかならん、かくめで度よのためしにあへりし物をばとてあはれがりて杉の枝一つ二つなでしこ一花二花つみとれば、師も田中ぬしもひとしく折る、かくて日もくれんとす、いつまであらるゝ物ならねばとて車にのれどもをしき事二なし、今度はかすみが關よりのぼりて外務省のうらをかへる、九だんの上へ出るまでは、たゞみほりの水のみどりなるをうれしく、松の枝ぶり芝生の色をながめて、ほどなくうしが淵ちかく成ぬ。こゝにて三人ともに別れて、おのがじゝ家路をさしぬ。

二日　早朝石黑虎子けい古に來る。午後西村君來訪、少し物がたりするほどに川上眉山君おはしぬといふ、奥なる部やへ通して茶菓など參らす。今日は先の日見たりしやうに、黃金の指輪、絲織の小袖などの華美なるにはなくて、博多結城のひとへに角

帶しめて羽織は着ず、入湯せんとする折なれば手拭もて來たり、いたく人世を思ひいりてせんすべもなく、物の辨別つき難く成し頃とて、かしらいたく氣のぼりて常に夢の中にあるやうの心地すといふ、今日もこゝろわるくてのみ暮しがたければ、しばしねぶらばやと横に成つれど、夫すらなしがたければ、せめては君のもとをも訪ひてめづらしき物がたり承らばやとて來つる也とかたる、こは君が筆に一轉化の來るべき時機なめり、ひたすらになつかしくやさしき方をのみ取出るやう成し人のかくて誠に心もだへば、人世のうくつらき、人の情のありて無きなど、こまかにうつし出るやうに成なんも斗がたければ、こはこれ一級をすゝむる時ならんとうれし。もろともにかたる事多し、我が身の素性など物がたるに、さらば君は誠にをとなしくやさしき人におはしけり、思ひかけぬまですなほなる人成けり、さる柔和なるこゝろを持てかゝるうきよをかくまでにしのびて渡り給ふこと、下のこゝろのいづこにかつよき處のあればなるべし、男ごゝろのまけじ氣性にてするも、うきよの波にもまれては終におぼれぬ人少なきを。さるやさしき女性の身としてかくよに立て過し給ふ事よに有がたき人かな、自傳をものし給ふべし。今わが聞參らせたる所斗にても、たしかに人を感動さ

するねうちはたしか也、君が爲には氣のどくなれども　君が境界は誠に詩人の境界なるかな、おもしろき境界なるかな、すでに經來たり給ひし所は殘りなく詩にして、すでに〳〵人世の大學問ならずや。ふるひたち給ふべし　君にして女流文學に志し給はんか後來日本文學に一導の光を傳へて別に氣魂の天地に傳へるものあるべし、切に筆をもて世にたち給へなどいふ、そゝのかし給ふな、さらでも女子は高ぶり安きをとて笑ふに、君は誠に物つゝみし給ふ人也、よしゝからばこれより我れは書肆に斗りて、君のもとへ催促を打しきらすべし、人すゝめずば書かぬ人なめりとて笑ふ、やがて日も暮るに近ければ。又こそ訪はめとて立歸る、三年の知人に似たり。このよ國子と共に本郷にものをかふ。家に歸れば留守のほどに馬場ぬしおよび誰成しか外に二人三人づれの來客ありしが家にあらずと聞て歸りしとか。大方は禿木と秋骨なめり。

三日　田中の會なれども出がたし。午後より三崎町に半井ぬしを訪へば、飯田町の本宅におはします、かなたへ參らせ給へといふに、四丁め二十一番とて、田中ぬしとは一小路斗隔てたる處へゆく、黑塀にしだり柳など雅にもあらねど廣やかなる家也、五年ぶりにておかう君にあふ、取集めての吊詞などいふにこゝろうくたゞ涙ぐまれ

ぬ、鶴田ぬしがはらにまうけし千代と呼べるがことしは五つに成しが、いとよく我れに馴れてはなれ難き風情まことの母とや思ひ違へたる、哀れ深し、ちよ樣は我れをわすれ給ひしかといふに、房々とせし冠切りのつむりをふりて否やわすれずといふ、二階のはしごい昇りにくきを、我が手にすがりて伴ひゆくも可愛い。菓子などはこぶをあぶなしといへども誰も手なふれそお客樣には我れがもてゆくのなりとて、こまぐとはたらく、かゝるほどに戸田ぬしが子も目さむれば、おかう殿いだき來てみす、まだ生れて十月斗のほどならん、いとよくこえてたゞ人形をみるやうにくりくとせしさま愛らし。目もはなもいと少さくて、泣く事まれなる子といふがうれしければ、抱き取りてふりつゞみ見せ、犬はり子まはしなどするに、いつとなくなれて我が膝にのみはひよる、こはあやしき事かな、常にをとなしき子なれども見馴れぬ人にはむづかりて手をもふれさゝず、此ほど野々宮樣、大久保樣などあやし給ひしにいたく泣入りて困じにけるを、今日はかく馴れ參らせてよろこび居る事と、おかうどのいぶかる、半井ぬしほゝゑみて緣のあるなめりといひ消つ、すし取寄せ、くだもの出しなど馳走をつとむ、四年ぶりにて半井ぬしが誠の笑がほを見るやうなるが嬉しく、打くもりたる心

のはれる樣也、そのむかしのうつくしさはいづこにかげかくしたるか、雪のやう成し色はたゞくろみにくろみて、高かりしはなのみいちじるく成りぬ、肩巾の廣かりしも膝の肉の厚かりしも、やう／＼にせばまりやせて打みる所は四十男といふとも僞ならず見ゆ、なつかしげに物いひて打笑むさま、さはいへど大方の若ざかりよりは見にくからず、たゞ誠の兄君、伯父君などのやうにおぼゆ、君はいくつにかならせ給ふ、廿四とや、五年の前に逢そめ參らせたるその折に露違はずもおはしますかなといひいひて、こゝろおく方もなく語る、此人ゆゑに人世のくるしみを盡して、いくその涙をのみつる身とも思ひしらねば、たゞ大方の友とや思ふらん、今の我身に諸欲脱し盡して、假にも此人と共に人なみのおもしろき世を經んなどかけても思はず、はた又過にしかたのくやしさを呼おこして此人眼の前に死すとも涙もそゝがじの決心など大方うせたればたゞなつかしくむつまじき友として過さんこそ願はしけれ、かく思ひ來たりて此人を見れば、菩薩と惡魔をうらおもてにして、こゝに誠のみほとけを拜めるやうの心地いひしらずうれし、日くれに近く、暇ごひして歸らんとするに、さらば又此頃とはせ給へ、われも例の神鳴りのけなき折君がもとを訪はん、もろともに寄席にも

遊ばゞやなどいふ、下座敷にておくれば、樋口樣は歸らせ給ふか我れも逢ひ參らせたかりしをとて父君出でおはします、又とはせ給へ、ゆる〳〵御物語りせばやとて、これもかれもなつかしげなるがうれしく、暇をこひて出るこゝろ夢のやうなり、家に歸りて直に入浴、道にて雨にあふ、此よは大雨也。

四日　空はれたり。新聞の上にて見る處、台灣にて戰爭はじまりたるとおぼしく、芳太郎など只今初陣の折と思はる。

五日　の午後馬場君來訪、二日の夜には秋骨、禿木をさそひて訪ひしに、君は留守におはしけりとて少し物むづかしげ也、あの日眉山御もとを訪ひしよしといふに、いかにして夫れを知らせ給ふやと聞けば、三日の午後、川上は我がもとを訪ひて、酒竹禿木など呼集め、四人にて箕輪に藤村を訪ひしが、同人あらねば口をしく、これより歸らんも興味索然たればとて、今戶のわたしをこえて向島に三味をとはんと成しが衆議又かはりて言問の某亭に一酌を催し、歸路雨にあうてはふ〳〵に歸りしといふ、そは御さかん成しとて笑ふ、今宵は馬場君さのみもかたらでかへる。

六日　朝來平田君來訪、乙羽庵の妻も來らる、これは和歌の直しをこはんとてなり、

午後より野々宮、安井君および木村きん子とて、高等師はんの同勤の人なるよし、和歌および文章など學ばゞやとて來る、此日の來客西村の禮助、久保木の秀太郎、おかうどのなど合せては十八斗なり。

七日　午後西村君來訪、少し物語るほどに馬場・平田・川上の三君來る、紅葉の男ごゝろ、および心のやみ、珍本全集などかさる、日沒少し前に人々歸宅。

八日

九日　今日は小石川の會日なり、午前の中石黒とら子の稽古および野々宮が古今の講義終りて、午後よりゆく、此日田邊たつ子ぬし來會、田中ぬしは頭痛はげしきよしにて、席半ばにしてかへる、歸宅せしはいまだ日の高きうち成し。此よ馬場君來訪。

十日　小說著作に從事す、全編十五回七十五枚斗のものつくらんとす、いまだ筆おもふまゝに動かで、いたづらに母君の叱責をのみうけぬ、午後西村君來訪、少しかたりてかへる。

十一日　事なし。午後馬場君來訪、日沒までかたる。

十二日　父君靈前に田舍まん頭調じて奉る、國子一兩日來病氣にて食事もすゝみが

たし、されどもきびしき事にはあらぬ氣なれば、今宵母君を伴ひて若竹に小住の義太夫きゝにゆく、留守中馬場君來訪ありしよし、國子ねぶり居てしらざりし事はあすわかる。

十三日　午後馬場君來訪、あがらずして歸る。野々宮　安井、木村の三君稽古に來る。

十四日

十五日　朝來雨ふる。小石川けいこにいたれば、田中ぬし湯治場などにや行給ひつる今日は休みのよし、午前田邊君來る、我れに約束ありてそを僞にせじと斗の來會なるよし、直にかへる、午後大雨車軸をながすが如し、おどろ〳〵しく神なりはたゝめきて人々歸りわづらふ、二十人斗寄集ひてとらんぷの遊びをす、家にかへりしは日沒雨やみてよき日和に成ぬ。

十六日　家の稽古日也、石黑虎子來る、ついで野々宮君古今集の講義聞に來る、終に遊ぶ、歸宅せしは四時ごろ、やがて大雨盆をかへすやうに降出ぬ、さぞ歸路にしてなやみけんとわびし、家に一錢のたくはへなき上、差配がもとへおさむべき家ちん

もあとの月より延し置たる、それこれ三四の金なくてはかなはず、伊せやへはしらんか、ひとのもとへかりに行かんかなどいふ、さらばせんなし、西村をたのみてんとて日沒より家を出づ、かしこにて三圓かり來る、歸れば孤蝶　眉山の兩君來訪、もの語しきりにして十二時まであり。

水のうへ日記（二十八年十月）

やう〳〵世に名をしられ初て、めづらし氣にかしましうもてはやさるゝ、うれしなどいはんはいかにぞや、これも唯めの前のけぶりなるべく、きのふの我れと何事のちがひかあらん、小說かく、文つくる、たゞこれ七つの子供の昔しよりおもひ置つる事のそのかたはしをもらせるのみ、などこと〴〵敷はいひはやすらん、今の我みのかゝる名得つるが如く、やがて秋かぜたゝんほどは、たちまち野末にみかへるものなかるべき運命、あやしうも心ぼそうもある事かな、しばし書とゞめてのちの寐覺のこゝろやりにせばや。

七日の夜、母も妹も本鄕のとほりに物かふとて出行て、一人燈を守りてものよむ折ふし如來ぬし來訪、例の人とて、我が取次ぎに出たるに、一葉君はうちにやといふ、あがり給へとて燈火のもとにさしむかひたれば、はじめてさなりけりとや思ひたらんされど驚きたるけもなく物がたり居る、をかしき人なり、此まへ來たりしは秋風いと身に寒き朝成しかども、白地と黑のかすりとのゆかたをかさねて着て居たり、今日は

二タ子の袷出來てきたれど、素肌の上にはをりて、こと〳〵敷はかまはきたる姿もをかしく。草履ばきなどいよ〳〵出ていよ〳〵をかし、母も妹も歸りて後、夜ふくるまでかたる、そのおさなき時の物がたりなどし出るに、かげなる母も妹も堪へずやはゝと笑ふ聲の聞ゆ、妻めとらまほしきにしかるべしとおもふもあらば媒を給はれ、何も御覽の如くの男外に何の心あるにもあらず、むつかしき事などかけてもいふまじければとて、家のさまなど打あけかたる、これより上田敏君とひて、桐一葉の事評させんとす、瀧口入道は大學生某の作なるに、それが批難を歷史小說といへる題かり來て坪內が書立つべければ、大學よりは上田を呼おこしてこれに當らせばやとなり、横やりは依田の學海翁やとひ入るべし、いやとても應とても今宵は上田を說きつけ來べしと、意氣のさかんなるもをかしく、ともによみうりの紙上にてたゝかはせんの目ろみなるべし、九時すぐるころ歸る、雨降出しかばかさ持たせてやる、新坂のやみに狸出づべしなど笑へば、それは同やくよとてゆく、大風すぎての後に似たり、更けていよいよ雨ふる。

八日　も朝より雨やまず。あすは萩のやが月次會なればと道はわるけれど日くれが

た風呂やにゆく、歸りてみれば、如來樣よりとて傘かへし來たりし車夫に文を添へておこしぬ、夕べはあまりおそかりしかば、上田は家にあらで空しく蟬のもぬけをつかみぬ、今宵ふたゝびおもむく道すがら、これをばかへし參らする、一寸立よりてとおもへど、上田の事はてなば、谷中に大野酒竹が庵たゝくべき用あればたゞ文にて、今朝依田學海に逢ひたれば、君がにごり江上々の作とたゝへて、是非一度御めにかゝりたしといひき、御序に訪ひ給へ。淡泊の老人中々おもしろき人など書そへて、中には月よう附ろくの事もあり、終りには、例の妻の事よろしく〳〵、心から平身してなど書たり、いつに似合ずまじめなるを集ひて笑ふ。

九日　は空はれて、午前より中島の會にゆく、例によつて例の如くをかしき事もなし伊東夏子の大西祝が傳言いひたる、是非あひたしとてうわさいひ暮らすなど聞くに、世は飛鳥川とうめかれぬ。此夜中町に紙かひにゆく。あらざりしほどに安井てつ子岩手よりもらひたるのなりとて大いなる林檎もてきにける、それも女子師はん校の方へ田舍よりとゞきたるを直に我家にもて來しのよし、常は口重に世辭など數々なき人なれど、心にしみてうれしとおもふ事のあればかく取わきての事などもすめり、可愛

き人のこゝろよと母も妹もひとしくいふ。此夜文二通したゝめき、一つは如來ぬし、一つは馬場君、前のはきのふの返事、附ろくの事などいひて、つぎなるは久しう音づれのなきにいかゞ暮らすとおぼつかなくてなり。夜いたく更ぬれば、その外ことなしに寐にけり。

十日　は例のごとく例の通りにて過ぎゝ。たゞ大島みどり子の歌よみてくれとてたのみに來たると、安井、野々宮そのほかの稽古に來し斗りことなしに終る。郵便三通、田中二通、本願寺より一つ。

十一日　も晴れなり。

十五日より三十一日までの間に、如來ぬしの我家をとふ事四度。用ありて來し事もあり、あらずして來し事もあり。にごり江の評各雜誌にかしがましとて、まだ見ざるをば郵便にておこしつ、妻の事たのみおかれつれば、寫眞たまへといひやりしに、やがて寫してこれをも送りぬ、木强の男とふと見ゆれど、物なるゝまゝにおさな子のやうなる所うつくし。

川上眉山ぬしも、此ほど打しきりて訪ひ給ふ、此月にいりてより四五度は來給ふめ

り、一夜は關君と打つれて來つ。その次の夜の事なり、たがひに期せずして一つに成し事あり　我れにこゝろなければ何ともおもひたらねど、二人の面やうのをかしさ、物がたりのしどなさ、おもひがけず落あひしを耻あへるさま、男も猶ものつゝみはなす成けりとをかしかりき。

いで孤蝶ぬしのたより少ししるしとゞめばや、これも此月にいりてより文三通、長きは卷紙六枚をかさねて二枚切手の大封じなり、一たびは名所古跡の寫眞二葉、紫式部源氏の間などいへるをおくりこし給へり、例のこまかにつゝみなき言の葉、わが戀人にやるやうの事かきてあるもをかしく、誠ある人なれば、おのづからはげますやうのことの葉などもみゆめり、こゝろうつくしき人かな。

平田ぬしには此月たえて逢はず、文こま〴〵とおこしつれど、孤蝶ぬしとの間に物うたがひを入れて、少しねたまし氣などの事書てありしもうるさければ、返しはやらす成りにき。みづから二度ほど訪ひ來しかど、國子の取はからひて門よりかへしぬ、才子なれども憎き氣のあるぞ口をしき。

秋骨も幾度わがもとをとひけん、大方土曜日の夜ごとには訪ひ來る、來ればやがて

十一時すぎずして歸りし事なし、母も國子も厭ふは此人なれどいかゞはせん、ある夜川上君と共に來て物がたりのうちにふるひ出でぬる時など恐ろしかりし事よ、我れはいかにするとも此家の立はなれがたきかな、いかにせん、いかにせんとて身をうらみぬ、みづからこは怪し、怪しといひつゝあゝ先見廻しつゝ打ふるふに、川上ぬしもただあきれにあきれて、からく伴ひ出て送りかへしぬ、其夜なき寐入りにふしたりとてあくる朝まだきに文おこしぬ、うちにさまざまありけれど。猶親しきものにさせ給はらずや、いかにも中空に取あつかひ給ふ事のうらめしさなど書つらねありき、あなうたての哲學者よな。

優なるは上田君ぞかし、これも此頃打しきりてとひ來る、されども此人のは一景色ことなり、萬に學問のにほひある、酒落のけはひなき人なれども。青年の學生なればいとよしかし、桐一葉の評かく事をうがりてかにかくといひわけなどいひ居るもたかぶらずしてなつかしう見えぬ、されども心はいかならん、かく言ひ、かく見せて、世にたゝんの人なりや知りがたし、あなどりがたうもあるかな。

おそろしき世の波かせにこれより我身のたゞよはんなれや、おもふもかなしきはやう〳〵をさな子のさかいをはなれて爭ひしげき世に交る成けり、きのふは何がしの雜誌にかく書れぬ、今日は此大家のしか〳〵評せりなど、唯春の花の榮えある名斗うる如くみゆる物から、淺ましきは其そこにひそめる所のさま〴〵成けり、わか松、小金井、花圃の三女史が先んずるあれども、おくれて出たる此人をもて女流の一といふをはゞからず、たゝへても猶たゝへつべきは此人が才筆などいふもあり、紫清さりてことし幾百年、とつてかはるべきはそれ君ぞなどいふもあり、あるはとつ國の女文豪がおさなだちに比べ、今世に名高き秀才の際にならべぬ、何事ぞをとゞしの此ころは大音寺前に一文ぐわしならべて乞食を相手に朝夕を暮しつる身也、學は誰れか傳へし文をば又いかにして學ぶべき、草端の一螢よしや一時の光りをはなつとも、空しき名のみ、仇なるこゝろのみ、我れに比べて學才のきはなみ〳〵ならざりしさがのやが末のはかなき事、山田の美妙が數奇の體、あはれあはれ安き世の好みに投じてこの爭ひに立まじる身、いか斗かは淺ましからざらん、されども如何はせん、舟は流れの上にのりぬ、かくれ岩にくだけざらんほどは引もどす事かたかるべきか。

極みなき大海原に出にけり

やらばや小舟波のまに〳〵

十一月二日　の夜平田ぬし來訪、國子のはからひて門よりかへしぬ、引ちがへて川上ぬし來訪。大かたはもろ共に來つるなめれど、先君いりてみよなどいひしなるべし、あらずといひしかば、さらば我れかはりて音なはん、我れゆかばかならずありといふべしなどほこりて訪ひ寄しけしきおのづから分明なるもをかしく。國子は同じくるすなるよしをいひぬ、しゐ佗て歸りぬるさまもおこがましく、唯ひたすらにほゝゑまるゝよ。

三日　今日は天長の佳節なるものを、朝來の雨車じくを流すやうなり、神戸の小林あい子より松だけ一籠おくりこしたるを、いひにたきて集りてたうべぬ、稻葉のおこうどの參られたるに、同じく出しなどす。午後より平田、戸川の兩人又來る、あらずといひたるに、然れば少し座敷をだに貸させ給へ、衣少しほしたければと切にこふ、上にあげて國子と母とあへしらひ居るに、猶我れのかくろへ居る事もやとうたがひて小用たすとて廊下あたりなどふみ渡るいとをかし、三十分斗して歸りぬ。

其夜更けて、今はもはや門のとさゝばやなどいふ折しも、又平田と戸川と打つれて來にけり、今まで川上君のもとに遊びてその歸るさなるべし、いかにも逢はざらん事の氣の毒なれば、ありといはせて對面しつ、平田ぬしのみやげ物などかひ來つるもをかしく、さま〴〵の物語して遲く歸りぬ、平田ぬしはよみうりの紙上に我が評かゝばやなどいひき。

五日の夜關君來訪、落合直文のもとへゆくのなれども門を過がてに立寄りしなりといふ、物がたるほどに枝葉のしきりに添ひて一時間を過ぬ、二時間を過ぬ、今行かんさらば行かんといひつゝかたる、車夫は待くたびれて、玄關に高いびきして打臥しゝもをかしく、今はおくれにけり今宵は落合がり訪ふ事かなふまじきかといふに、さらば其處を訪ふを後日の事にして、今宵は我家に遊び給へといへば、今までに成ぬる物を今かへるとも五十歩と百歩の違ひのみ。さらば今少し置給へとて身を落つけてかたる、月給うけ取し以來一日も待合の二階に遊ばぬ事なく、今日までには殘りなくつかひ盡して今はのう中五厘錢一つのみ、煙草かふべきしろもなしとあれば、卷たばこかひてやる、語る事四時間、暇ごひして歸る時にはふし待の月高く冴えて一段の光景み

にじむ斗なりき、人々の原稿などみせて、平田といふ人君がにごり江の評か〻よしいひこしたりとかたる。

六日　午後山下の二郎來訪、關ぬしよりはがき來る、ゆふべの侘也。

七日　早朝平田ぬし來訪、くに子の留守なるよしをいひしに、いな對面得まほしきといふにもあらず、文藝くらぶ九編かし給へとてにごり江のくだりを持てゆく、よみうりに評か〻ん爲なるべし。

水のうへ（二十九年一月）

十二月の三十日に馬場ぬし近江より歸り來給ひぬ、年末年始の休暇を給はりてなり、家にわらんずぬき給ふよりはやくわが もし訪ひより給ひしのよし、國子に大津の藤娘かけるあふぎ。家へは小田原のかまぼこなどみやげに給はす、逢ひ見ざりし事四月ばかりなれば、かたみに語りあふ事おほし。夜ふけてかへる。これより川上君とはゞやとなりけり。

これをはじめにして七日の朝歸鄕までに、一日も我が家を訪ひ給はぬ事なかりき、ある時は三人五人の友うちつれて來る事もあり、ある時はたゞ一人しておはすこともあり、いとおもしろくにぎやかにのみ打過ぎぬ。

六日に文學會の新年宴會などいふ事ありき、われと三宅ぬしには別席しつらへおきぬればかならず出席あらまほしきよし星野ぬしよりいひこされたれど、さる所にはしたなう立出づべきにはたあらねば斷りいひやりて我れはえ行かざりしに、たつ子ぬしにも同じこと斷り成しよし、こゝの間に心をかしからぬ事あれば馬場ぬしもえ行か

じなどいひ居られしものから。さもいなみあへで出席有けるよ。有樣いか成けん。

こぞの秋かり初に物しつるにごり江のうわさ世にかしましうもてはやされて、かつは汗あゆるまで評論などのかしましき事よ、十三夜もめづらしげにいひさわぎ、女流中ならぶ物なしなどあやしき月旦の聞えわたれるこゝろぐるしくも有るかな。しばしばおもふて骨さむく肉ふるはるゝ夜半もありけり。かゝるをこそはうき世のさまといふべかりけれ、かく人々のいひさわぐ何かはまことのほめこと葉なるべき、たゞ女義太夫に三味の音色はえも聞わけで心をくるはするやうのはかなき人々が一時のすさびに取はやす成るらし、されども其聲あひ集まりては友のねたみ、師のいきどほりにくしみ、恨みなどの限りもなく出來つるいとあさましう情なくも有かな。虚名は一時にして消えぬべし。一たび人のこゝろに抱かれたるうらみの行水の如く流れさらんかそもはかりがたし、われはいちじるしくうき世の波といふものを見そめぬ、しかもこれにのりたるをいかにして引もどさるべき、あさましのさま少しかゝばや。

日ごと訪ふ人は花の如く蝶の如きうつくしの人々なり、大島文學士が奧がたのやさがたなる、大はしとき子の被布すがたわか〳〵しき、今は江木が寫眞師の妻なれど關え

つ子の裾もやうでたち、同じく樵子が薄色りんずの中振袖、それよりは花やかなる江間のよし子が秋の七草そめ出したる振袖に緋むくを重ねしかわいいのさまもよく、師はん校の両教授がねづみとひわの三まい着、取々にいやなるはなし、一昨年の春は大音寺前に一文ぐわし賣りて親せき近よらず故舊音にふ物なし、來る客とては悪處のかすに舌つゞみ打つ人々成りし、およそ此世の下ざまとてかゝるが如きは多からじ、身はすて物によるべなきさま成けるを、今日の我身の成のぼりしはたゞうき雲の根なくしてその中空にたゞよへるが如し、相あつまる人々この世に其名きこえわたれる紳士、紳商、學士社會のあがれる際などならぬはなし、夜更け人定まりて靜におもへば我れはむかしの我にして、家はむかしの家なるものを、そもそも何をたねとしてかうき草のうきしづみにより人のおもむけ異なる覽、たはやすきものはひとの世にして、あなどるまじきも此人のよ成り、其こゝろの大ひなる時は千里にひゞき、ひくきときは隣だも猶しらざるが如し。

國民のとも春季附ろく書つるは江見水蔭、ほし野天知、後藤宙外、泉鏡花および我

れの五人なりき、早々より人々の目そゝぎ耳引たてゝこれこそ此年はじめの花と待わたりけるなれば、世に出るよりやがて沸出るごとき評論のかしましさよ、さるは新聞に雜誌にいさゝか文學の緣あるは先をあらそひてかゝげざるもなし、一月の末には大かたそれも定まりぬ、あやしうこれも我がかちに歸して讀書社會の評判わるゝが如しとさへ沙汰せられぬ、評家の大斗と人ゆるすなる内田不知庵の口を極めてほめつる事よ、皮肉家の正太夫がめざまし草の初号に書きたるには道成寺に見たてゝ白拍子一葉同宿水蔭坊、天知坊、何がしくれがしと數へぬ、へつらふ物は萬歳〳〵とゝなへ、そねむ人は面を背けて我れをみること仇の如かり。

にごり江よりつゞきて十三夜、わかれ道、さしたる事なきをばかく取沙汰しぬれば我れはたゞ淺ましうて物だにいひがたかり、此二十四五年がほどより打たえ寐ぶりたるやうなる文界に妖艶の花を咲かしめて春風一時に來たるが如き全盛の舞臺にしかへしたるは君が一枝の力よなど筆にするものあり、口にする者あり、いかなる人ぞやおもかげ見たしなどつてを求めて訪ひよるも多く、人してものなど送りこすも有けり、雜誌業などする人々は先をあらそひて書きくれよと賴み引もきらず、夜にまぎれて

我が書つる門標ぬすみて逃ぐるもあり、雜誌社には我が書たる原稿紙一枚もとゝめずとぞいふなる、そは何がしくれがしの學生こぞりて貰ひにくる成りとか、閨秀小説いうれつるは前代未聞にしてはやくに三萬をうり盡し、再はんをさへ出すにいたれり、はじめ大坂へばかり七百の着荷有しに一日にしてうれ切れたれば再び五百を送りつるそれすら三日はたもたざりしよし、このほど大坂の人上野山仁一郎愛讀者の一人なりとて尋ね來つ、かの地における我がうわさ語り聞かす、我黨崇拜のものども打つどひて歡迎のもうけなすべければ此春はかの地に漫遊たまはらばや、手せまけれども別莊めきたるものもあり、いかでおはしませなどいざなふ、尾崎紅葉、川上眉山、江見水蔭および我れを加へて二枚折の銀屛一つはりまぜにせまほしく、うらばりは大和にしきにしてこれをは文學屛風と名づけ長く我家の重寶にせまほし、いかで原稿紙一ひら給はらばやなど切にいふ、金子御入用の事などもあらばいつにても遠慮なく申こさせ給へ、いかさまにも調達し參らする心得也などいふ、ひいきの角力に羽をり投ぐる格にやとをかし。

正太夫のもとよりはじめて文の來たりしは一月の八日成し、われは君に縁あるものならねど我が文界の爲君につげ度こと少しあり、わが方に來給ふか我より書にて送らんか、われに癖あり我れより君を訪ふ事を好まず、なほ我事聞かんとならばいかなる人にももらすまじきちかひの詞聞たしと也、何事ともしらねど此皮肉家がことかならずをかしからんとて返しをやる、人にはいふまじく候、つげさせ給はれかし、我れは男ならぬ身なれば御もとをば訪ふ事かたし、文おくり給はらばうれしかるべしといひき。

九日の夜書たる文十日にとゞきぬ、半紙四枚がほどを重ねて原稿かきたるがごと細かに書したり。にごり江の事、わかれ道の事、さま〴〵ありて、今の世の評者がめくらなる事、文人のやくざなる事、これらがほめそしりにかゝはらず、直往し給へといふ事、幷びに世にさま〴〵の取沙汰ある事、我れが何がし作家と結婚の約ありといふ事、浪六のもとへ原稿をたづさへ行給ひしときく事などありき、何がし作家とは川上君の事なるべし。君よりは想のひくき何がしとしるしぬ。

一覽の後は其狀かへし給はれ、君よりのもかへしまつるべし、世の人聞きうるさけ

れば今と成けり、直に封じてかへしやる、これはめざまし草の出るより二十日も前の事成き、のちに紙上を見ればわれ／＼へ對する評言はこのふみの如く細かにはあらでおほらかに此旨をぞ書ぬ。

正太夫はかねても聞けるあやしき男なり、今文豪の名を博して明治の文壇に有數の人なるべけれど、其しわざ、其手だてあやしき事の多くもある哉、しばらく記してのちのさまをまたんとす。

この頃世にあやしき沙汰聞え初ぬ、そは川上眉山と我れとの間に結婚の約なりたりといふうわさ成り、閙やきといふものおびたゞしき世なれば傳へ／＼て文界の士の知らぬもなしといふ、あるものは傳へて尾崎紅葉仲立なりとさへいふめる、あるもの紅葉にかたりたるに高笑ひしてもしさる事さだまらば我れ媒しやくにはかならず立つべしといひしとか、よみうり新聞新年宴會の席にて高田早苗君は眉山が肩をうちてこの仲立は我れ承らんとたはぶれしとか、こゝにかしこに此沙汰かしましければいつしか我れにも聞えぬるを、あやしきは川上ぬし知らずがほを作り給ふ事なり、この人

の有さまあやしとおもひしは過ぎし八日の夜われに寫眞給はれとてこばむをおして持行し事ありき、母君も國子もひとしういなみしを、さらばしばしかし給へ、男の口よりいひ出つる事つぶされんは心わるしとしひていふに、さらば五日がほどをとてかしつる其寫眞をばさながら返さず、人結婚の事をいひて君は一葉君と其やゝ有るよし誠にやととへば、そは迷わくの事いひふらすものかなとて打笑ひ居るよし、八日の夜のさまはほとんど物くるはしきやうに眼をいからし面を赤めて、なに故我れにはゆるし給はぬにや。我れをばさまで仇なるものとおぼし召か、此しやしん博文館より貰はゞ事はあるまじけれどあやしう立つ名の苦しければこゝに參りてかくいふを、猶君にはうとみ給ふにや。男子一たびいひ出たる事このまゝにしてえやはやむべきとて、つく息のすさまじかりし事。母君かげに聞て胸をば冷し給ひしよし。我れに妻の中立して給へや、此十五日を限りにして其返事聞度しいかで〳〵などせまられたる事ありしが、それこれを思ひ合せてあやしき事一つならず。文界の表面にこの頃あやしき雲氣のみゆるは何ものゝ下にひそめるならん。眉山排斥の聲やう〳〵高う成りぬ。

正太夫いはく君はおそらく文界の內情などしり給ふまじければ瑣細の事とおぼしめ

さんも斗られねど、我れの考へたる處にてはなほさりならぬ大事とおもへり、よろしく君がもとをとふやくざ文人どもを追ひ拂ひ給へ、かれ等は君が爲の油蟲なり、拂ひ給はずは一日より一日と其害を增さんのみといひき。

かどを訪ふ者日一日と多し、毎日の岡野正味、天涯茫々生など不可思儀の人々來る、茫々生はうき世に友といふ者なき人世間は目して人間の外におけりとおぼし、此人とひ來て二葉亭四迷に我れを引あはさんといふ、半日がほとをかたりき。

野々宮きく子關如來との緣やぶれて一度我れを恨めりき、しばしにしてうたがひの雲はれたれど猶我もとを男のとひよるねたましうあるまじき事にいひなす、教育社會の人々は我れを進めて著作の筆たゝしむるか、もしくは敎育趣味のもの書てよとの忠告さへ聞えぬ、紛たり擾たり、このほどの事雲くらし。

あやしき事また沸出ぬ、府下の豪商松木何がしおのが名をかくして月毎の會計に不足なきほど我がもとに送らんと也、取次ぐは西村の釧之助、同じく小三郎協力して我が家に盡さんとぞいふなる、松木は十萬の財產ある身なるよし、されども名の無き金

子たゞにして受けられんや、月毎いかほどを參らせんと問はれしに答へて我が手に書き物なしたる時は我手にして食をはこぶべし、もし能はぬ月ならば助けをもこはん、さらば老親に一日の孝をもかゝざるべければとて、一月の末二十金をもらひぬ。

身をすてつるなれば世の中の事何かはおそろしからん、松木がしむけも、正太夫が素ぶりも半としがほどにはあきらかにしらるべし、かしたしとならば金子もかりん、心づけたしとならば忠告も入るゝべし、我心は石にあらず、一封の書状、百金のこがねにて轉ばし得べきや。

みづの上（二十九年二月）

雨したゝりの音軒ばに聞えてとまりがらすの聲かしましきにふと文机のもとの夢はさめぬ、今日は二月廿日成きとゆびをるに、大かた物みなうつゝにかへりてわが名わがとしやう〳〵明らかに成ぬ、木よう日なれば人々稽古に來るべき也、春の雪のいみじう降たるなれば道いとわるからんにさぞな侘びあへるならんなどおもひやる。

みたりける夢の中にはおもふ事こゝろのまゝにいひもしつ、おもへることさながら人のしりつるなど嬉しかりしを、さめぬれば又もやうつせみのわれにかへりていふまじき事かたりがたき次第などさま〴〵ぞ有る。

しばし文机に頰づえつきておもへば誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとてそはなすべき事かは。

我に風月のおもひ有やいなやをしらず、塵の世をすてゝ深山にはしらんこゝろあるにもあらず、さるを厭世家とゆびさす人あり、そは何のゆゑならん、はかなき草紙にすみつけて世に出せば當代の秀逸など有ふれたる言の葉をならべて明日はそしらん口

の端にうや／＼しきほめ詞などなあ侘しからずや、かゝる界に身を置きてあけくれに見る人の一人も友といへるもなく、我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生れし心地ぞする。我れは女なり、いかにおもへることありともそは世に行ふべき事かあらぬか。

このほどの夜は御入下され候よしの所、病氣にてはやくに打ふし失禮申上候こと御ゆるし下され度、御連れは平田様と誰々様成けん御わびよろしう願上候、かねておほせのうらわか草文字小出ぬしより相とゞき候まゝの文字私いろ／＼のわからずやを申たのみ參り候まゝ、小出ぬし書やうに困りてこのやうにてよきかと封中のだけしたゝめ持參致され候。

平田ぬし御番地ふとわすれておもひ出るにかたくまことに御手数恐入り候へどもうらわか草の文字御手もとまでさし出し候御渡し願度、私いろ／＼とりとまらぬ事をいひて頼みしかば字の大きさなど小出ぬし分りかねし由にてこれほどしたゝめつかはされ候、中にて御氣に入しを御取願度、何れ御めもじ萬々、まづは此事のみ、かしこ。

戸川さま
　御もとに

　このほどの夜は御入成しよしを病氣にてはやくに打ふし存じ申さず失禮御ゆるし下され度、御一處成し御かた〴〵へよろしう御わび願上候、かねて仰せのうらわか草の文字平田ぬしが御もとふとわすれていかにもおもひ出かね候まゝ御手數おそれ入候へど御手もとまで參らせ候、御とゞけ被下度、私とりとまらぬ頼みやうを致したれば字の大きさなど小出ぬし分りかねし由にて……

　　斗らざるに高名先生の如き知己を得られ候こと。
　行かりのかげとほざかるこゝちして
雲ゐの庭にたづぞまふなる

夏子

寄春雨懐舊

もえ出る小草をみても春雨の
ふることばかりしのばるゝかな

早春風

梅の花みにこし岡の霜どけに
やすらひをれば春風ぞ吹く

みづの上（二十九年五月）

五月二日　の夜禿木秋骨の二子來訪、ものがたることしばしにして今宵は君がらてなしをうけばやとてまうで來つる也、いかなるまうけをかせさせ給ふぞや、これは大かたのにては得うけ引がたしとふたりながら笑ふ、何事ぞと問へば戸川ぬしふところより雜誌とり出でゝ朗讀せんかと平田ぬしをかへりみていふ、こはめざまし草卷の四成き、一昨日の發行にてわが文藝倶樂部に出したるたけくらべの細評あるよし新聞の廣告にみけるがそれならんかしと思ふにあわたゞしうはとふ事もせず打ゑみ居るに、いかでまうけせさせ給へ、この卷よけふ大學の講堂に上田敏氏の持來てこれみよと押開きさしよせられぬ、何ぞ〳〵と手に取りみれば、これ見給へかく〳〵しか〴〵の評鷗外、露伴の手に成て、當時の妙作これにとゞめをさしぬ、うれしさは胸にみちて物いはんひまもなく、これが朗讀大學の講堂にて高らかにはじめぬ、さても猶うれしさのやる方なきに學校を出るより早くはせて發兌の書林に走り、一冊あがなふより早く禿木が下宿にまろび入り君々これ見たまへと投つけしに、取りて一目みるよりはやく

平田は顏をも得あげず涙にかきくれぬ、さらばとく見せて此よろこびをものべ、ねたみをも聞えてんとて斯く二人相伴ひてはまうで來つる也、いかでよみ給ひてよ、我れやよまん、平田やと、詞せはしく喜びおもてにあふれていふ、今文だんの神よといふ鷗外が言葉としてわれはたとへ世の人に一葉崇拜のあざけりを受けんまでも此人にまことの詩人といふ名を送る事を惜しまざるべしといひ、作中の文字五六字づゝ今の世の評家作家に伎倆上達の靈符として吞ませたきものといへるあたり、我々文士の身として一度うけなば死すとも憾なかるまじき事ぞや、君が喜びいか斗ぞとうらやまる、二人はたゞ狂せるやうに喜びてかへられき。

此評よいたる所の新聞雜誌にかしましうもてさわがれぬ、日本新聞などにはたゞ一行よみては驚き歎じ二行よみては打うめきぬとか有けるの由國子のよそより聞來ていとあさましきまで立ぬる評かなと喜びながら悲しがる、そは槿花の一日の榮えを歎けばなるべし、世の中をしなべて文學にはしりぬる頃とて假初の一文一章遠國他鄕までもひゞきわたり聞えゆきて、立つ名さま〴〵、さてはよからぬ取沙汰もやう〳〵に增り來たりぬ、此たけくらべ書つると同じ号に我れと川上ぬしとの間のことあやしげに

書きなしある雜報有き、千葉あたりより來たりたる投書なりとか、これをばやがてよき材にして人ねたみもし憎くみもす、ことたる事なき身どちにはさして何事のなげかはしさもおぼえねど。そもそものはじめよりうき世にけがれの名を取らじ、世の人なみにはあるまじのおもひなりしを、かくよからぬ評など立出くるやましき事ならねど、我が不德のする所かとものなげかしう思はれき。

我れを訪ふ人十人に九人まではたゞ女子なりといふを喜びてもの珍らしさに集ふ成けり、さればこそことなる事なき反古紙作り出ても今淸少よむらさきよとはやし立る誠は心なしのいかなる底意ありてともしらず、我れをたゞ女子と斗見るよりのすさびされば其評のとり所なきこと、疵あれども見えずよき所ありともいひ顯すことなく、たゞ一葉はうまし、上手なり、餘の女どもは更也、男も大かたはかうべを下ぐべきの技倆なり、たゞうまし、上手なりといふ斗その外にはいふ詞なきか、いふべき疵を見出さぬか、いとあやしき事ども也。

二十四日　正太夫はじめて我家を訪ふ、ものがたる事多かり。

二十五日　田中みの子を飯田町にとひ、歸路半井君を尋ぬ、原稿製造中なるよしに

て三崎町のかたにをられつれば逢はずして歸る。

二十七日　の夕より平田、戶川の二人來る、物がたり多し。

二十八日　午前のうち田邊たつ子ぬしを番町にとふ、例によつて例の如き物がたりあり、十二時過るころ歸宅。今日は木ようなれば野々宮君來る、安井、木村の兩君は地久節の會ありて得も參られず、安井君宅より昇給いはひの赤の飯おくられき。新文だんの鳥海嵩香遊びに來たりしにはあらざめれど長くかたる、戶川の殘花われに嫁入の取もちすとて來る。先きに何がしの博士なりといひくる。正太夫門まで來たりて人氣のあるに又こそとて歸る。

二十九日　橫山源之助來訪、はなす事長し。うちに正太夫來る、ひそかに通して坐敷の次の間に誘ふ、源之助はやがて歸る。

わが近作われからの評めざまし草三人冗語の間に大いに見解を異にせる由、これにつきては正太夫の責任を明らかに一論文をしたゝめて世に出さんの目論なれども、わがいふ處尤なるか露伴の思ふ處當れるか一應君が所存を聞てしかして我れは一文を草さんと思ふ也。よつて昨日も二度まで御宅を訪ひ參らせしなれど御來客と見えしか

ば一度は歸りぬ。二度目も同じ事にていと甲斐なかりし、まづ其事とはやゝとて我れからの作意につきてといひをおこす。

一いなりの社前に納方物おもひを生ずる處あり、あれは親の世よりの事につきて明くれ物をおもひ居り、我れもいつしか母と同じき運命に廻り逢ふ事なからずやとの念かしこにいたらぬ前より有しものならんか。

一は、あの奥がたの性としてさる事常日頃おもひ居るべきにあらず、眞に偶然の出來事として描かれたる物なるべしといふ二つなり。

この二義のうち作者が當時の心は如何成しか、それによりて我が論は成立すべきにこそと正太夫いふ、誠にこれは偶然の出來事なり、しかれども常々おのれも知らぬ心のそこに怪しうひそむ物のありて心細き感は常々有しに相違なかるべく、さて此事は偶然におこりたるなるべしといふ、正太夫そは困りし事かなさては二論の中間に君は居給ふ成けり、前の說は露伴のとく處、あとなるは我が論じつる也、こは難義なる事よとほゝゑむ。

第二問は町子と書生との間に實事の有しやいなやなり、一方の論者はいはく、跡なき

風も騷ぐ世にしのぶが原の蟲の聲、つゆほどの事あらはれて奧樣いとゞうき身に成りぬ、といふ詞あれば彼れは正し、實事ありたる也といふ、されどかた〳〵の論者の見る處にては、こは作者がこと更に讀者をまよはさん爲にたくみの詞をもて遊びしのみ、實事はいまだなかりしものといはざるべからず、といふ爭ひなり、今少し行過たる說なれど、此處二月の猶豫をあたへなば此不義かならず成立すべきなりともいはるべくや、片つかたの實事ありしといふ論者の行過ぎたる證こには、實事有しに相違なきも作者は女なれば此間のこと憚りて態と曖昧にせられたるものなるべしとの說もあり、君が思ひし處はいかなるにかと問はる、誠にしのぶが原の蟲の音に心づき給ひしこそ我が心にてはあれといふに、さては又露伴に我れは負けにきと笑ふ、實事のありしといふ方天下の輿論ともみなすべきさまにて、無實といふは天下我れ一人のみの形なり、これも悉く實なしといふにはあらず、いま二月の猶豫をあたへよしからばまことに不義の成立をみるべしといふの也、此度のめざましには近松が鑓の權三の例を引置きつれど、あれも古來實否の處たしかならずあるものはなしといひ、あるものはありといひ、此論容易に詮じつめがたきなり、なれども我れをもつていはしむれば、權三おさゐ家

を出てより二月の間を放浪して、さておさゐは良人の手にかゝりてしなばやと願ひ居つるをみるにも、此二月間には必らず不義の成立したりしものとみとむる也、この處を明らかにかゝざる處、作者のずるき手段にて誠は作の功妙なる處ともいふべく、何方より見るもしか見ゆる又よかるべし、かゝる事は作者に問ふ事をせずして我れは見をもつて批評を試むるこそ誠の批評とはいふべきものなれど、我れいまだ力たらずして眼識さやかならぬを憂ひ。かく作家のもとにとふ事とは成ぬ、君としての答へには何方にてもよしとの給ふこそ當れるにはあらめ。などかたる。

君がわれからの評、わがめざましを先として明治評論、青年文、國民の友、太陽、帝國文學などいづれも書出る事となるべし、我れは近くにかの奥方一身を論據として一文を是非公にすべき心なり、さてこれより君が初作よりの物ことごとくよみ見ばやと思ふ也、さて作者と作との關係といふもの說かばやと思ふ、あながち我れが大發明者の眞似をするにもあらねどとて笑はる。

雨いよいよ降しきりて日やうやう暮んとす。わる口の正太夫ぬしに參らする物は無けれど、又笑はれん材料に柳町のすもじにてもさし上ばやと笑へば。いないな何も給

はる事はすまじゆふべさる處にて少し色氣のなきわづらひをしつればとて辭さるゝに
さらば參らすまじとて又はなしに移る、一昨日の夜は十一時頃より露伴と君が作を論じて四時に及びて猶其論盡きがたかりし、いつも君の作につきては爭論此間に起る也などかたらる、君は此頃博文館の爲に書簡文とかや文反古のやうのもの作り出給ひしよしそれは誠かととはる、百科全書の十二編として書簡文かきつるは誠なれど、文反古などいひて小說めかしきものには非ずといへば、されども君の書き給へるには相違なきなるべし、さらば面白き事、直ちに歸りて拜見すべし、乙羽庵のいへるに通俗書簡文と題はおきたれど終りのかたは純然たる小說なりと語りたれど、何の彼の男が批評眼とさのみ心にとゞめざりしなれども、君のものし給へるとならば必らず拜見すべきものなり、いと面白かるべしとて笑はるゝに、いな、見給ふは嫌なりゆるし給へと侘ぶるを、をかしげに見やりて、さもあらばあれもはや印刷に附して世に出し給へるなれば詮なし、書店にて賣居る以上は致しかたなかるべしとて又笑ふ。

正太夫としは二十九、痩せ姿の面やうすご味を帶びて、唯口もとにいひ難き愛敬あり綿銘仙の縞がらこまかき袷せに木綿がすりの羽織は着たれどうらは定めし甲斐絹なる

べくや、聲びくなれどすみとほれるやうの細くすゞしきにて、事理明白にものがたる、かつて浪六がいひつるごとく、かれは毒筆のみならず誠に毒心を包藏せるのなりとい ひしは實に當れる詞なるべし。世の人さのみはしらざるべけれど、花井お梅が事につきて何がしとかやいへる人より五百金をいすり取りたるは此人の手腕なりとか、其眼の光りの異樣なると、いふこと〳〵の嘲罵に似たる、優しき口もとより出ることなから、人によりては恐ろしくも思はれぬべき事也、われに癖あり君がもとをとふ事を好まずと書したる一文を送られしは此一月の事成き、斯道熱心の餘りわれを當代の作家中ものがたるにたるものと思ひて諸事を打すて訪ひ寄る義ならば何かこと更に人目をしのびてかくれたるやうの振舞あるべきや、めざまし草のことは誠なるべし、露伴との論も僞りにはあらざらめど猶このほかにひそめる事件のなからずやは、思ひてこゝにいたれば世はやう〳〵おもしろくも成にける哉、この男かたきに取てもいとおもしろし、みかたにつきなば猶さらにをかしかるべく、眉山、禿木が氣骨なきにくらべて一段の上ぞとは見えぬ。

逢へるはたゞの二度なれど、親しみは千年の馴染にも似たり、當時の批評壇をのゝ

しり、新學士のもの知らずを笑ひ、江戸趣味の滅亡をうらみ、其身の面白からぬ事をいひ、かたる事四時間にもわたりぬ、暮ぬればとて歸る、車はかどに待たせ置つる也。

三十一日　榊原家いさ子の朋輩にて中澤ぬひ子といふ人入門、束脩五十錢送らる、これ等とり集めて菊地ぬしがもとへ此月よりかへし初むべき金子持參母君立出らる。

六月一日　平田禿木めざまし草持參、わが評見よとてかし與へらる、正太夫の我がもとを訪ひ寄し事などさも思ひよらぬ事なれば知らず顏に語り居るいとをかし。評は此人の作としていといたく劣りたるもの也、たけくらべに及ばずにごり江に及ばず、わかれ道にも十三夜にもしかぬ作なり、此作者の作やうやくみだれんとする傾きありと正太夫のいひしは別れ道の時成しが、その詞をして誠たらしむるは、いかにも作者の爲かなしむべき事よとかけり、をかしきは、ひゐきと名のりて辯護の勞をとる人附添へる事なり、女人なればと今まではひかへつれど用字用語今少し心つけられよとは一論客のいへるに對し、こは聞ずてならぬ事也、わが一葉は女なれども身錢を遣はで高まんの詞をならぶる男どもが首位は引ぬきすつる力あるものなり、惡き事あらばいかにも

いひ給へ、御遠慮御無用女あしらひは嬉しからずとたけり立つ人あり、六頁にわたりてその論何方ともつかずに終りぬ。

いとかしらの痛き日成しかばねぶたげに物いひ居るいかゞ憂からざらん。平田は此本さしおきたるまゝかへる。

二日　早朝前田曙山君來る、春陽堂の使ひになり、著作のあら篇出來たらば書樣の注文ありたしとのたのみなり、今しばしたゝばといひてかへす。

先月のはじめ成し春陽堂みせのものをもて我が作是非にといひおこし、引つゞきわが店のものゝみ著作し給はるやうの契約給はらばいとかたじけなかるべし、さあらずとも是非にといひて、金子などは前金にいか斗も奉るべし、御用候はゞ端書一本つかはされたし、さすればたゞちに御仰せだけの金持參すべしといひき、さもあらばあれこは一時の虚名を書肆の利としておのれの欲をみたさん爲のみ、すでに浪六の例もあり、多くの作家のいたづらに苦るしみて心のまゝならぬものなど世に出すは此一時の榮えにおごりつきて債をこゝに負へばなるべし、我が身はかまへて其事なすまじとおもふに、一編の作趣向つばらに出來ざらんほどは書樣のこと金子のこと更にいひやら

じとなり、家は中々に貧迫り來てやる方のなければ綿のいりたるもの袷などはみながら伊せやがもとにやりて、からく一二枚の夏物したて出るほどなれども、やがてのくるしみをうけまじとて、母も國子も心をひとつに過す、いとやるかたなし。

午後三木竹二君來訪、醫學士森篤次郎とある名刺もて來しかばいかなる人かとおもひけり、君は森鷗外君が令弟にて小金井きみ子ぬしが兄にておはす、いと口がるにものいひつゞけて重りかならぬ人にてもあるかな、來訪の趣意はめざまし草社中の總代として我れに連合せられん事をといふ迎ひの使ひに來たりしなり。

今まで三人冗語といひて鷗外、露伴、正太夫の三人にて新作の評なし居たりしなれど、更に君を加へて四つ手あみといふ名を付しつ各々名を署して評論さかんにせばやといふ願ひなり、切に入會給はれよといふ。

君がたけくらべには一同たゞ驚歎し　口開くもの候はず、露伴などは生れて今日まで我れにはいまだ斯斗の作のなきを恨むといひつ、されば過る日の三人冗語にて詞を極めてほめたゝへしかば早稻田文學などには冷評を與へられぬ、露伴がいへるやうこの作中の文字五六字づゝ今のよの評家作家に技倆上達の靈符として吞ませたきものな

りと書きしに、かれはませかへして黒やきにしてふりかけては如何などいひぬ、とまれかくまれ心し給へ、こゝの學士、かしこの博士ども君が事といへば髭おもてのしまりをうしなひて、かゝる文書給ひしかばかゝる人なめり、いないな此詞をもてみれば人がらは斯くこそ有べけれなど、一字一句に解をいれていひさわぎ候ぞなどかたる。

正太夫の參りしよしを聞き候ひぬ、かれには假初にも心ゆるし給ふな、われ〳〵兄弟、幸田露伴などもうわべにはいとよき友のやうに交はり候へど猶隔ておきつゝものをもまふすなれ、いかなること申こんともいひがたきにかまへて〳〵たばかられ給ふなといふ、合評會の日取りきまらば申上候はんかならず參らせ給へといひて、たゞ一人のみこみつゝかへる。

夜に入てより正太夫來訪、けふ三木や參りつる、そのうわささる所にて聞しかば、さして承らんの用もなき折ながら、一應申度ことありて參りつる也といふ。

君がもとをとひ參らせしといふこと我れは誰れにも語らざりき、たゞ森に斗もらしつればやがて篤次郎にかたりつるなめり、我れに紹介狀かきてくれといふたのみありけれども、我れとてもたれが紹介といふ事もなく出つるなれば、それには及び候はじ

とて書かざりしが、今日は定めし參上しつるなるべしと察しぬ、名刺持ちてや參りつる、はなしはいかなる事成しかと問ふ。みな樣がたの打寄り御評遊ばさん折我れにも出て御はなし承れよといふ仰せ成しといへば、それは怪しき事にもあるかな、その相談にてはなかりしものをとかたぶく、して要領を得て歸り候ひしやいかゞといふ。

いかゞありけん私はたゞありがたき由を申ぬ、そのほかにはとて打ゑむに、さもありけんさあるべし、あの男の使ひなればとてひやゝかに打ゑむ。

我れ／＼が評するを聞きに來給へと申せしこそをかしけれ、罪なき申條にもあるかな、我がうち／＼の話しを聞しには君に歌少し給はれかし雜誌にのせたければと賴み參らするのなりといひき、しかれば我は其事甚だ心得ず、われ／＼は一葉君を歌人としていまだみしれるにあらず、唯作家としての人をしれるなるに、殊更の歌を取出さんいとあやしかるべし、同じことならば始より君が作を給はれ、小說是非といひたる方やさしかるべし、うたは三十一文字の責いとかろく出し給ふ　世上よりの沙汰もくるしからねば、まづ此事はうなづき給ふべし、この輕らかなるより取入りてやがて作を處望せんといふこゝろこそも／＼人をはかるに似て文士のいさぎよしとせざる處、たゞ打明

んにはしかずとて、我れは今宵かくふりはへて參れる也、かゝるをやがて人にくしと人の種にはするなるべし、いとゞ多き我れかなと淋しく打ゑむ。我れ等の期する處は君が大成の折をなり、みづからいだかるゝ寶珠をすてゝいたづらの世論に心を迷はし、はかなき理論沙汰などにかたぶき給はゞ、あたらしき人を種なしにもなすべきわざなればそのさかひを脱しさせ參らせたしといふこそ我れ〳〵の志しにてはあれ、されば殊更に合評會への出席あらんあらずにもかゝはらず、鷗外露伴の御もとを訪ひよりてもしかるべきわざなり、何かはことゞ〳〵敷招き參らするまでもなしとていと冷かなるさまなり。

ものがたりはいつしかめざまし草の事をはなれつ、正太夫が身の上のことゝかにかくとかたる、我れは今やがてこの文學沙汰立はなれていとあやしき境界にならばやと思ふなり、かゝる馬鹿野郎どもが集合の場處になが〳〵あらんは胸のわるければと聲たかくいひて、あな本性の出けるよと佗しげに笑ふ。

御もとなどに參りて馬鹿野郎呼はりするにてはなかりしを、おさへ難う成てつひ本性の顯はれぬ、驚きやし給ふとぬすむやうに打ながめて、いと聲ひくにいふ。

何かは承るは今はじめてなれど、君が馬鹿野郎の御うわさはやくより傳はりて世上に君が名しるほどの人承らぬはなかるべし、御遠慮なくの給へかしこれを初音にと笑へば、さらば御合點よなとて快く笑ふ。

吉原に入りてかし座敷の風呂番になりとも落つかばやと思ふなり、さらば此上の落處なきひくき處なればやるかたなき憤りももらすにかたく、誰れを相手に何をかいはん、こゝもうき世とあきはてなん時は唯死といふ一物のこれるのみ、其ほかに行く處しなければ中々に心安かるべうや、うき世に人の階級といふものありて上の品の人も下の位にたゝずむ身も同じくうくる普通の苦あり、我れはこゝに圖式をしめさんにこれをかりに縱の苦といふべし、このたての苦はうき世といふ詞のよりて起る處にして上はかしこき御一人より下萬民のたれも受けぬはあらざるべきたゞ一通りのものにてあり、次に横の苦といふものあり、こは階級によりていと異なる物なるべく、うわべをつくろひて人にも尊とまれなどするさかひこそわきてくるしきものにはあるべけれ、上の事はわがしらぬ事いはでもありなん、生中中の段にたゞよひて今日一升の米、一つかみの鹽に事かく事はありとも人にかたりて誠とされがたき痛かゆきやうの境界を思

へば、中々におもひやりある下流の住居ぞうらやまるゝ、一向に落ぶれはてなば心もおのづからひくきになれてみだりにもだえの生すべきにもあらじ、月六圓の收入あれば一人口安らかに送らるゝ場處もあるものを、用もなき長羽織きていとみぐるしきさかひにもたゞよふかな、いかにもしてこゝを放れんの願ひいと切なりといふ。

區役處のうけつけに成なんいとよけれど、かれは昔し正直正太夫とて筆もて口をぬらしゝ男也、淺ましき事して居るよなど打ながめられんこれも癪の種なるべく、郵便局に入りてすりがらすの中に事務とり居るいと好都合とおもへど、これも猶同僚などいふけにくきものあり、我れはすべての前生を打わすれて過さまほしきに、文字に緣なき博奕中間か、かし座敷の下廻りなどこそはと思ひよる也けり、いづ方になさばそもそもよかるべき。此道なほとりもあへず、斯くはたゞよへるぞとて打なげく。

御活計に憂ひなく、君をばたゞ我君とさゝげて撫牛のやうに御蒲團つみ重ねたるが上に据え參らせ、仰せられたしとならば御心のまゝに馬鹿野郎の給ひつ、御一生安らかに過し參らせたしといふ人あらば何とかせさせ給ふ、さても猶御心もだえ給ふや、かし座敷の下廻りばくち打など猶御望み遊ばさるべきやといへば、さる人もしあらば

いとよかるべきこと新聞の廣告にでも出し候はんかとて笑ふ。

さりながらさては我れ食客といふものになるなり。食客は嬉しからずといふに、さらばこれも御心にはかなはせ給はずやと笑ふ。

こゝと定めたる宿もなし、日の暮れゆけばもよりの家のたがもとにてもしれるかどをたゝきてはねぐらとし、明けぬればたゞおぼつかなくさまよひありきて、人にはたゞ蛇かつのやうにいみはゞかられつ。みづからは憤りに心もだえて筆とれども優なるもののなつかしきなどはかけても書き出らるべきにあらず。たま〳〵書出るは油地獄、てき面、あま蛙のたぐひたゞに敵を設くる斗、文學に一つの光りを加ふるにもたらず。後進を導くの助けとなるにもあらず。いたづらに心のもだえを顯はして、かれ毒筆にくむべしとのみのゝしらる。鷗外はもと富家の子順を追ふて當代に名をなしつるなればさもあるべし、露伴の今少し力を加へなばと思はるゝも我岡目の評なるべくや、たゞ天然にすねたる生れなりぬべきやも計られぬを、例の弱きもの見過しがたき餘りいと物がなしくながめらる。

正太夫かさねて曰く、かくはいへども猶われに自然ののがれ難きものありて、この文

學といふ事いかにしてもなすべきものぞといふたしかなる事定まらば何かは卑怯のにげ足を構ふべき、我れ生れて廿九年、競爭はこの後にあるべしとて笑ふ。

まことにさこそ候へ、さる人にかならず人が文だんにとゞまり給はん事を願ふべきにこそといへば、いな／＼今我れに此境界をはなるゝなといふ人あらば、そは借金し置し口々の人なるべし、吉原のけし炭に成なんには其金とりがたければと笑ふ。

いと遲く成にけり、又こそ參らめとて立しは十時すぐる程にや有けん、今宵はかたる事いと多かりし。

六月に入りてより人二人門に入りぬ、一人は野々宮ぬしが紹介にて三浦るや子といふ何がし校の敎師なり、一人は榊原家の侍女なるべしいさ子より文にてたのみおこしたる伊東せい子といへるなり、これは習字の弟子なれば手本かきてやる。

九日　中島の月次會なれど斷りいひゆかざりし、三宅たつ子ぬしよりたのまれの書簡文この日持參の約成しかどえゆかぬなれば博文館にたのみてかなたよりおくらす。

九日　大橋佐平、新太郎の兩名にて九週年の祝ひ致すべきにつき、十四日午後より

兩國柳橋龜淸まで御はこび有りたしとの招待狀來たりしかど、もとより行くべきわざにもおらねば斷りいひやる。

十日の夜平田ぬし來訪、星野君のあやしき事に邪推をなして、我れと戸川と日ごとの如く君がもとに入りびたり居るやうに小言をいひき、されば戸川は又ふたゝび君がもとを訪はじなどいひ居るとかたる、そは困りし事かな御餘波をしうといへば、いなかくはいへれど何かは訪はであらるべき今やがて參るべしなどいふ、しばしかたるほどにやがて川上ぬしが上に移りつ、御父上うせさせ給へる後君はかの君とひ給へりやといへば、いなまだ吊ひの文をだにやらずいといひわけなき事といへるに、行て參らせ給へかし、唯一人なる父君におくれてさこそは物こゝろ細うおはすべきになどいひ〱、君もしかしこを訪ひ給はゞ我が罪をも侘び給はれ、御悔みの文をだになど思ひつゝ、いつしか時過ぬれば今さらにあやしうてえ奉らず成ぬ、その侘びいひ給ひてよなどいへば、近きにかならず行て訪ひみべし、さて同人ともなひ御もとを訪はゞやなどいひ居るほどに、門に人のあし音聞え初めぬお家にかといふ聲はさながら其人なるに、おな川上ぬしにこそとて座をたてば、平田ぬしも同じく席をはなれて迎ふ、おも

ひかけぬ人の座にあれば川上ぬしはあきれたるやうに打まどひにき、おもての色のいと赤く酒氣淺からぬほどゝみえたり、かれこれ共に悔みなどいふに、定まりたるにこそはさても其後のせはしさよ、淋しなどいふ事かけてもなく、日々夜々にさま〳〵の相談事などいとうるさう、負債のぬしよりせめはたり來るなども多く、やる方なき暇なさなりといひてさのみは憂はしげにもなく打笑ふ、逢ひ參らせぬことほと〳〵一年なるべしと川上ぬしいふに、平田君えたへずかゝと打笑ひて何かはさる事あるべきといふに、あはてたるやうのせきたる聲して、いな〳〵逢ひみぬほどゝいひしにはあらず、此やどりに參り初めしより一年斗にや成りぬらん、こぞの此頃よりとおぼゆるなりといふに、誠に前の月の二十六日よりこそおはしまし初めつるなりと我れいへば、さりとはいとよく覺え給へる事よといふ。このほど御目にかゝらざりしは二月斗かと我がいふに、左までにはあらじをといふ〳〵指折かゞなへて左こそ日數をふりにけめ、人一人うせぬるほどの事なればといふ、何とはなしにかたる事いくばく時間をつひやしけん平田ぬしいざ我れは御暇にすべしといふ、川上ぬしも共にと立つを、君はかくるさいと近かるを今三十分も語り給へ、我れは遠ければと物ありげにいはれて、何か

は跡に殘りてものいふ事もなし、たゞもろともにとて出づ、十時半成き。

十一日　早朝三木君來訪、合評會の日どり取きめばやとなり、我れはたしかに入會すともいはざりしを一人ぎめして、露伴も兄も其日を樂しみに待わたるなればかならずともに出席給はれ、まづ幾日にせばや、この十三日か次の土曜日か兩日のうちにて御都合よき日になさばやといふ、我れに出る心なければ、何方にてもといふにさらば十三日と極め申べし、午後一時より千駄木にてといひ／＼かへる。

いと／＼侘しうもあるかな、こゝかしこより入會、出席などの事いひ來るにこゝへ斗出る事いかならん、今白ゆるよりも人來たらんとするをいかにせばやと母君國子と相集りてかたる、ともあれ文たゞちに出して斷りいはんにはとて、千駄木森君のもとにあて文したゝむ、何事なしにたゞ臆病ものなれば御はれがましき席の恥かしうてとのみをなりけり。

みづの上（二十九年六月）

六月中えしらぬ人より文の來たりたることは數多し、博文館へあておこしたるもあればたゞちに我家に送られしもあり、靜岡師範校寄宿舍の人にて二人、加藤鵬雪、關飄雨、および神奈川の人小原與三郎、房州にて原良造、群馬の田島せい女などいふ人人成き、何れも小說作りて直しをこはんといふもあり、文の上にて友たらんといふもあり、とり〴〵さま〴〵いと多かり、女子の小說つくりたしといふ人のもとにはかならずかならずさる業し給ふ物にあらずと身のつらきをさへ書きつらねておくる。

六月十七日　成けり、博文館へあておこしたる狀の一つに樋口勘次郎とて高等師範卒業生の文あり、かねてより敎科書改良の目的をもつて其むね校長まできこえ出つるにそれしかるべしとの贊成をうけ、卒業より此方すでに一年一意この事にのみ身をゆだねつ、ひたすらこれが改善を計れど文才なくしてこと心と伴はず、いたづらにもだえて日を明し暮すとなり、かねてより君が著作の數々を見て、かゝる自在の筆をもちて此おもふ事書き得られなばいか斗世の爲人の爲なるべき、いと聞えにくき事なれど

もし我がこれに盡す心をおぼしくませもし給はゞ一臂の助力も給はれや、この事人してたのみ參らすべきを生中に人傳せばあやまれる聞えのつたはらんも侘しく、かくうちつけにと書かれたり。ところ〴〵の書店より雜誌の事などいひ來たるとは事かはり、か斗教育に熱心なる人の詞をひくうしていはれたることうけがはざらんも本意なかるべくや、我れになし能ふ事かあらぬかとまれあひ見て事のよしとひきゝたらん後いかにもせばやと、かへししたゝめやる。

いつにも御訪はせ給はるべし、御まのあたりにて聞えんといひやりき、やがて此人よりの文にいとかたじけなき由をいひて、二十三日の火よう日御在宅給はれかし、かならず參上すべければと有き。

この日戸川殘花よりのたのみにて、明治女學校建築慈善市に出すべき扇面たにざく等かきやる。

此頃たえて中島師のもとにもうでず。

十九日　に正太夫夜に入て來にけり、幸田ぬしなどの事につきてものがたりおほく、こぞ著したるてき面の事などかたる、無妻主義にて年月過したる我れの今更妻もちた

し家ほしゝなどはふといひがたけれど、あるべきにさだまりたるものならば有るも又をかしかるべし、人の世の事何もみなこと〴〵くなし終りてさてのゝしるべきはのゝしり嘲るべきは嘲らんいとよかるべきを、限りある身なれば何も垣のぞきにてなどかたる。たけくらべの文體はじめの方と終にいたりてと異なれるは御承知にてかなどとふ、はじめよりかゝる文體にかゝばやといふ考へありてかととはれて、いなさもあらず唯書きよきがまゝにといふ、さらば筆とりてはじめて文體のなるにこそ、誰れも同じ事と笑ふ。

　さて今宵來つるは別しての用にもあらず、君は國民の友の夏期附ろく書き給はんの約成し由そは誠かととふ、いなさること此一日二日前に國木田の收二君申參られたれど斷りいひやりてえ書き候はず、いかで聞あやまり給ひけんといへば、そは誠かとよ、明らかなる答辨こそのぞましけれと勢ひこんで言はるゝに、何かは僞りをかまへて人を弄び候はんや、君こそいかなればさ斗物うたがひはなし給ふ、いとあやしき事とこたふるに、さては民友社に僞りありけり、けさのほど彼の社の何某我がもとに來たりて一葉君は相違なく承だくし給ひぬ、かくこそとて御名前しるしたる紙に墨引き

置きぬ。まことは我れ其はじめ彼の社に夏期附ろくの建議を呈しぬ。そはほかならず、我れこと〴〵く匿名にて四種の文體に小説つくり出で、世人をたばかりて驚かさん、その義なれば筆とるべしといひやりき、元來かの社にはいろ〳〵の事故ありてたれもこゝろよく筆とるものあらず、我れも朧げにては作り出づべきにはたあらねど、我れに此戯れの舞臺をかさんとならば心のまゝに筆とるべしといひつる也、さる處かの社はわれに答へていはく、ことしの夏期附ろくすでに何がしくれがしに依頼して筆とり初し人さへあるなれば、御おほせのまゝには今更とりかへしがたきことなりといひき、さらば其筆とる人はたれ〳〵かといひしに其名前更にいひこさず、まことは我れにもおもふ事ありしなり、かの社さきに露伴、鷗外、逍遙のもとに人をはせてことしの夏期ふろく是非にといひしを、何かはかしこの爲に筆とるべきとてたれもうけがふ物あらざりしかば、再度その餘のたれかれに依頼しぬ、依頼されたる誰れもかれもことごとく謝絶のみにて我れかゝばやといふ人のなきは我れきかねどもよくしれり、此上は田山花袋などを先きにいはゆる新派の人々筆とることならずやと思はるゝに、我れは死すとも新派の奴等に席はならべじ、かくいはゞ君も世にいふ新派の一人にてお

はせば御心ざわりならんもしらねど、わがいふ新派はさる義にていへるに非ず、何れも人しれず我がもとなどに原稿もて來て直しをこひながらうわべ斗は知らず顔をつくりて同じ文だんに勝敗をあらそふなん、われに損ありてぬす人にかてを與ふるのことわざに同じ、かゝるおもしろからぬ事又あらん物か、されば我れは同じ新派といへるものから君もしうつて出で給ふとならば我れもくつばみを揃へて立出づべしといひつるなり、一人にてもよし正しくかたきとねらふべき人あらば心勇みて戰場には出らるべけれ、自餘の奴原と何かは取組まん、此義をもつて我れは一葉君かき給はゞとこたへしなり、さる處彼はまざ〳〵と僞言つくりいで、此人斗はうたがひなく書き給ふなり、もはやうけがはれて筆とり初られしなればと我れをあざむきぬ、よしおもしろし明日の朝早々斷りいひやりてえ書かざるべし、おもしろく成ぬるかなとてほゝゑむ、その餘も多くかたる事ありて十一時ごろ歸られき。

二十日　の夜更けて半井君來訪、いとめづらしき事よとおもふにあわたゞしげの車にてさへ參られき、唐突に此ほど齋藤正太夫わがもとを訪ひ候ひき、御宅にまかり出たる由といふ、いかにも此ほどよりおはしまし初ぬ、いと氣味わろき御かたたよと笑へ

ば、誠にさにこそ、いと氣味わろき男なればかまへて心ゆるし給ふな、我がもとに來たりて君が身の上さま〴〵に問ひき、此ほどの世の取沙汰はかく〳〵しか〴〵こそいへなどいとおほくつゞけゝれど左のみはわすれておもひも出でられず、知らせ給ふ如く我れはうき世の別物に成りてたゞみかん箱製造にのみ日をおくれば文界の事など更にしり候はず、君がさ斗高名におはすなるをもかれ綠雨より傳へ聞くまでは夢にもしらで過ぎ候ひき、御筆いたくあがり給へるのよしをかれはいひき、彼れは近々君の事を論じたる一文世に公にするのよし、材料もあらばとゝはれたれど、我れは更にしらぬ由をこたへぬ、我れと君との上につきてあやしき關係ありしやにいひしかば、こは心得ぬこと、いかでさる事のあるべき、世人はとまれ君などさへさる事をいふ何なる心ぞやとなぢりしに、いな、君の事はすでに先口なり、こと舊聞に屬す、今更あなぐるべきにも非ずといひき、かくて何を書いで候らんといとおぼつかなげにいふ、我れしば〳〵一葉君をとふ惡口の種さがしにともやおぼし給ふらん、さりながらおもへば種さがしの爲成しかもしれずとかれはいひき、いと油斷の成がたき男よと心づけらる。

萬朝報にて君の事近々かゝばやと有しかば同じくはとひきゝ參らせてあやまりなき處をかけかしと我れはいひおきぬ、かしこの社にて不似合のこと君が事よく書くのなるよしとて笑ふ。

かたらまほしげの事多げにみえしが何もふくめたるやうにて又もこそと歸る、いとめづらかなる人のまれ〳〵とひ寄りたる、事なからずやはとかたぶかる。

此ほどの夜川上ぬし來訪、高田早苗君の依頼をうけて我れによみうり入社の事申參られしなり、おもふ事あればとて斷りいひしに、使ひがらかと立腹のけしきにみえぬ、さりし日の寫眞持參してかへさる、中味はかはれるやしり候はずといふは燒き增しをさせたるなめり、何にてもよし我が一分だにたゝばとおもふ。此夜いとおもしろからぬけしきにて歸られき。

二十一日　の夜更けて齋藤ぬしより文來る、好ましからぬ事なれどやむを得ねばと前おきして、さる十七日の國民新聞唯今人よりおくられしをみれば、警聽蜚語と題したるが中に正太夫一葉を訪ふといふ項目みえき。

正太夫おもへらく一葉が面の皮をひんむきぬと、一葉おもへらく正太夫はかゝらずか

如き男なりと、右は其會話なるものゝ末に同記者が附記したるものなり、とありて、是れ等のものにむかひて深く辨疏すべきの用ある事を我れは更にみとめ申さず、唯からすの如きしか〴〵を我れの信じざるが如く面の皮しか〳〵をも君の信じ給はざるべしとおもふまでにこれ參らするなり、さらでだに人より快く思はれざる我が事なればこれを種に例の人々は奇貨居くべしともいふ勢ひにて附會し誇張しじゆん飾し、さま〴〵の心々を申ことゝは成るべくくわしうは逢ひ參らせん折にとありけり、こゝの間がらいと物むづかしう成ぬ。

二十三日　午後樋口勘次郎約の如く來る、背ひくゝ色くろく、小ぶとりのせし品格なき人なり、左のみはものがたる事もおほからず。唯大かたに物うちたのみて、まづ手はじめに桃太郎さるかになどの昔しばなしより着手あらまほしゝとて漣君のものしたる昔しばなしそこばくさしおきて行く、猶打あはせまほしき事あらば御出願ひまつらんも計られずとて、唯これ斗をあづかる。

此人の趣意一あたりおもしろけれど、學校の敎科書に小說を用ひんといふやうの計畫あるいさゝか行はれがたき事ならずやとかたぶかる、されどそは我がたのまれのほ

かなれば何をかいはん、おひ〳〵に進みてさる事の相談をもうけなば其非なるよしをいはゞやと思ひき。

正太夫とひ來るやとまつに音もなくて此月くれぬ、こゝかしこの人々より君がもとを正太夫とひたる由などいひ出るあり、さま〴〵あやしき事のあれば今一たび逢ひみて物いはゞやとまつにいとかひなし、毎日社の横山鎌倉材木座にありて文おこす、民友社の人と同宿し居るなりとて事ありげの書きぶり成き、返じやらず。

此月くらしのいと侘しう今はやるかたなく成て、春陽堂より金三十金とりよす、人ごゝろのはかなさよ。

三十日野々宮のもとに金子持參して國子と我れとの衣類調達をたのむ、買ひ來たりしは七月四日成き、伊せ崎めいせん一疋價八圓六拾錢。

九日　谷中に田中ぬしをとひしが留守成しほどに正太夫來訪したりし由、いたく煩ひて生死おぼつかなきやう成しかばつひにかくは打おこたりて參らざりきとて、さらでも痩せたる人のいとゞしく骨斗に成つ、人らしき色もなくて來つる由、明日は姉も在宅なるべければと國子のいひしに、あすは參りがたかるべし、又そのうちにこそと

て歸られしとか、あかず口をしと我れはおもふ。
よもとおもひしに、其明けの日夜ふけて來訪されき、げに國子のいひつる如く聲などもいと力なく成りて消えん斗の有さまいたましうみえぬ、何をか病み給ひしととへば、腸の痛みはげしくしてやう〳〵注射に日を送りつ、絶食成しことほと〳〵二週日といふ、まだいと弱げにおはすなるを表に出給ひてよかるべきかとあやぶみて問へば、醫師よりはまだ外出とゞめられて居るなれど、いと怠屈のたへがたければきのふよりかゆの湯少しゆるされたるを喜びて、かくは出ありく成りといふ。
物がたりは國民新聞のこと成き、はじめ正太夫わがもとをたづねつゝ、さて此風說いづこより立出づ覽、さて其風說はいかなるかたちしてかと試みつるなりといふ、我れは秘密といはれしを守りてつひにしたしう出入るたれかれにも物がたり聞えざりしかば、われしるほどの人より此うはさ聞え出づべきにもあらず、正太夫はた鷗外君、露伴ぬしなどよりほかにえもらし聞えぬ事なれば何方よりかは立いで來ん、さは試みの矢射出さばやとて去月の十四五日の頃や國民の松原といふにその事いへるなりといふ、さてそれよりぞ此かたち大きう成て此月はじめの早稻田にても拔すいし

つ、やう〳〵此沙汰ひろまるべしとなり、用なき事をと我れは思へど、此人のこゝろにはかゝるはかな事もをかしきにやあらん。保守派に於てもことにかたくなゝる物にいひ居らるゝ我れの新派中隨一の全盛を極めらるゝ御もと訪ひ寄たるなれば、人はさだめしことやうに感じていかさまにかとりなすらん、いとをかしうと此人はいひ居る。

　いとむつかしき問題をもとり出さるれど、又こと〳〵く打とけたる身の上ばなしなども多かり、このわづらひせしにつけて家といふもののなからんは佗しかるべしとおもひ成ぬなどいはれき。此夜も更けてかへる。

　十一日　横山來訪、正太夫のもとを訪ひたる由かたる、君は緑雨しりたまへる由、かの人には我れはじめて逢へるなれどかねて聞けるには似もやらずさ斗の惡人とはみえざりきなどかたる、午前十時ごろよりしてひる飯ともにしたゝめぬる後二時過るまでありて歸る。

　十二日　樋口勘次郎來訪、そのうけもてる小さき子達の寫眞もて來てみせなどす、かたる事もさのみはなき上けふは人々のけい古日なれば其由いひて斷りいふ、しばし

にして歸る。

けふ思ひかけず坂本君來訪。野尻ぬしの不意にとひ來しはあとの月成しがけふも納
とひ來て家にあるほどなり、こはめづらしき人々の會合よと一同喜びてもてなしす。
けい古に來つるは野々宮。三浦の兩君なり、木村ぬしはみごもりつ、安井君は海外
留學の出發期迫れるに、語學專門にならはるゝ頃とて此日頃打たえられしなり。

榊原家侍女たちより中元のおくりものおこさる、江間よし子も同じこと。

此ほど博文館の義けん小說中に隨筆やうのもの書けり、いとあわたゞしうてみぐる
しかりしが。

十三日　は父君寺參りをかねて本願寺に中元のつゝみ物持參、國子とふたり新らし
くつくりたるひとへ物のき初めなり。

此日茶めしたきて久保木の姉君を呼ぶ、折ふし上野君父子、西村も參られき、いづ
れにも供養の物なればすゝめばやとおもふほど星野ぬし來訪されしかば、上野君父子
は歸宅、西村および姉君はたべられき。

星野君いとあらゝかに物うちいひてうちとけぬほどの素振いとあやし、量いとせば

き人ならずや。

十四日　佐藤梅吉中元の禮に來る、折ふしよみうりの記者平田骨仙、川上ぬしの紹介をもつて來訪。女學に關する雜誌の上に小說の筆とられたしとなり。

十五日　早朝兄君來訪、終日遊ぶ、午後より雨降出で歸るにかたければ今宵はこゝに泊る事と成ぬ。半井ぬしも中元の禮に來る、門にてかへられき。

久保木より秀太郎來る、兄君の行てつれられしなり。

人々かへりて夜いたう更ぬ、坐敷の次にかやつりつ、兄君の齒痛にてなやみ給ふまゝ寐せ參らせつ、おのれはかねてたのまれの智德會雜誌の原稿かゝばやと机に打むかふほどかどに車とゞむる人あり、このおびたゞしき雨ふりに大路行人かつふつなく、車は我家より日ほん橋まで四拾錢の高料にても猶行く物のなしといふ今宵、そもそもたれかは訪ひよりたると見るに、正太夫ぞ立たりける、おどろきてむかへ入るゝに猶弱げなるおもゝちいたましきさましたり、いよいよ文界の總まくり書かばやと決心しつ、材料ことごとく取集めつる、君がもとにも借り參らし度ものありてもう來つるといふ、何事ぞといへばあとの月の每日新聞をなりけり、早くより山梨のあし澤がもと

に送りやりて我がもとには一枚もとゞめぬなれば其事いひて斷るに、さらばほかにてかり申べし、此度はいよ〳〵君が事惡く申候ぞとて笑はるゝに、いかやうとも唯かたじけなき事に思ひ居るべくと笑へば、こも役目なればいかゞはせん、我が御もとを訪ひつること世間一體しらぬものなく成りて、正太夫が觀破したる處の一葉はいかなる物ぞの質問いとおびたゞしくてうるさゝ堪へがたし、きのふ坪内に逢ひしにかれもしか尋ねにき、かく口々の質問に一々こたへんもいと侘し、筆にしてこそと思ふ、わが此度かゝばやといふは此年二月より半としがほどの文界のことをなり、こと〴〵くしるさばめざまし草一冊書うづむともたるまじきながら、さのみはとて五六十頁にとどめんとす、その六分の一は君の事なりとて冷やかに笑ふ。

此日記しるしゝは七月二十日午前十一時ごろよりはじめて二時にいたらぬほどに一冊書終る、正太夫との物がたり猶かゝばやとするほどに幸田露伴三木竹二君と打つれて來られしにえしるさず成ぬる也、十五日のつゞき猶別冊にしたゝむ。

みづの上（二十九年七月）

七月十五日のつゞき、

君が性質見あきらめばやとてわれはまこと此日頃訪ひ寄るなり、ことばの中にか身のふるまひにか我がおもへるに合ひたる所あらばさて我が論は成り立べきなり、世人は一般君がにごりえ以下の諸作を熱涙もて書きたるもの也といふ、こは萬口一齊の言葉なり、さるを我が見るところにしていはしむればむしろ冷笑の筆ならざるなきか、嘲罵の詞も眞向よりうつてかゝるあり、おもては笑みをふくみつゝ、君はかしこうこそおはせ、いとよき人におはします、と優しげにいふ嘲りもあり、君が作中には此冷笑の心みち〳〵たりとおもふはいかに、されど世人のいふが如き涙もいかでなからざらん、こは泣きての後の冷笑なれば正しく涙はみちたるべし、まことに同情の涙にて泣きつゝこれを書くものとせんか、さのみ悲みの詞をつらねて涙の歴然と顯はるゝやうの事あらんや、人一度は涙の淵に身もなぐべし、さて其後のいたり處は何處ぞや、泣たるのみにとゞまるには非じ、君は正しく其さかひとおぼゆる物から、御口づからも

れたる事なければ如何あらん、君がかつてあらはし給ひしやみ夜といへる小説の主人公うらめる男の文おこしゝに憤りはむねにみちつゝ猶そしらぬ顏にかへししたゝむるの條ありき、あれこそはつゝみなき御本心なるべけれ、我がみる處あやまれるか世人のみる處相違なきか、いかゞおぼすぞと笑みつゝいふ、何かはさまでの深き處存あるにもあらず、たゞ時の拍子にてかき出るものどもなればきびしき御尋ねにはこたへ參らすべき趣意もあらずいと耻かしき事といへば、いなさる事はあるまじ、我が異見はかく/\と上下きていはれよとにもあらず、されど何事かの論なき事はあるまじ、心なくして彼斗のもの作り出らるゝとなれば眞にいふ大偉人とも申人なるべし、君こそはその偉人なるべきかしり候はねど、大かたの人心に理論のはなるゝものなし、觀察の目すでに此尺度より生ずるにあらずやと勢ひたけく物がたる。

君が書簡文のこと論ぜんとてかくしるしつけて來たりぬ、秘密のものなれど見せ參らすべしとて小つゝみ引ときて取出す、はじめより終りまでごと/\く朱墨入れつゝ一々の註釋いとこまやかなり。

此の書簡文全體にわたりて例の冷笑の有さまみち/\たりといふ、何ゆゑにかと問

へば、又いふ折もあるべし、われは左おもふなり、我れ君がもとを訪ふ前後幾度、いまだにいかにしても君しる事のかなはぬはいかなるゆゑならん、解しがたきは君が人となりにおはすよと打笑ふ。

このうたがひとくる世になれば我れは再度御宿とはぬ事とも成るべし、たゞ此論のたて度斗に研究しにとて参るなり、こも役目なればいたしかたなしとて笑ふ。

世人我が名を聞くよりやがて皮肉家の大將とやうに覺え込み居るを、君が事のみいはであらんは其さまあやしうみゆべき事なり、正太夫の一分かくてすたらんとす、ゆるし給へわる口はわが本職なればといふ。

とまれか斗に御手を下して細かに評し給はるなんわが書簡文の面目にはあれ、いとかたじけなき事といふに、その御口よそれは冷笑の御しるしといはれて、何かは左あらん誠にかく覺ゆるなるをとて笑ふ。

世の人いはく、正太夫に涙なし、たゞ嘲罵の毒筆をもてるのみと、こは皮相の見なるならんか、おもひ餘りては涙をうちにのみこみつゝにくき異見もいふ事あり、かれ等はまゝたきの政岡が千松の死がいいだきあげて流石女の愚にかへりと打なげく處に

のみ涙ありと信じて、山科の由良之助が力彌を折かんする條など無慈悲の父よしと見すぐすなるべし、君がにごり江を熱涙もて書きたるものといふいと笑ふべし、うらにかくれし冷笑を觀破するものなきをかしさよ。われはむしろ涙より以上の冷笑を喜ぶものなり、いかゞこたへ給へといふ、唯打笑ひてあればいひがひなしとやつひにやみぬ。いたく夜ふけて立かへる、車は例の如くまたせおきけり。

十六日　早朝兄君歸宅、けふはいとよき日和成き、日くれがたに西村のつね女來る、樋口勘次郎より文あり、二十日には京を辭して關西の敎育會にのぞまんとするを、さては又一月斗がほど逢ひ參らする事かなふまじ、願ひまつりし事のうちあらかじめ聞えおき度ことのあるを、いつ斗參上せば御不都合なかるべき、もし御事おほくて二十日の前に御目たまはる時なくばかく／＼の事御心に入れさせ給ひ御筆とらせ給ひてよと、文體のこと、朗讀のこと、標準語のことなどいひおこす、十八日土よう日には終日家にあればと返しやる。

十七日　早朝戸川殘花ぬしがもとに不沙汰見舞ながらさま／＼ものなどもらひつる禮にゆく、午前のうち歸宅。

午後習德會泉谷氏一君來訪、夏期附ろくのもの催促になりけり。

十八日　早朝奥田老人のことにつきて井出良かんといへる辯護士來る、さまぐ〵のものがたり、事なしにもどりたれど、やがて我れ等が浮沈の伏線となりぬべき事ならんとおもふ。野々宮來訪、あすの稽古はりになり、ひる飯ともにしたゝめて、午後早々にかへる。

引違へて樋口勘次郎來訪、さのみはかたる事も多からぬなればしばしにして歸る、二十日には東京を出で千葉の野田町に敎育會のあるのぞみ。さて立かり關西には趣くのよし、歸京は來月二十日の後。また其時にあひまつらんとてかへる。

上野の房藏來訪、これより野尻ぬしを訪はんとおもふなどいふ、けふ坂本の三郎ぬしより寫眞とゞきたり。

夜に入りて横山源之助より葉書來る、一昨日正太夫より狀來りて、君は過日小生と對話のうち正しく虛言をいひあられしこと今にして發見しぬ、やがて御まのあたりと ひ參らすべし明らかの答辨をまつとありき。虛言といふ事癪なればゆふべ自ら彼の家に行きつ何事と問ひつるに、過日君は我れに對して一葉女史としるべきならぬらしきお

もゝちをつくり居しこと、これ虚言ならずやとのこと、思はず失笑仕りぬ・こと貴方にかゝる事なれば此旨聞えおく、大坂行はやめに成ぬとある葉書なり、相もかはらぬ緑雨が神經しついとをかしとほゝゑまる。

人々寐やに入りて後文二通來る、一つは神奈川の小原與三郎より。一つは樋口勘次郎より切手二枚はりし大封じなり、けふ逢ひたる時は何事もいはで今さら文おこすこと何の用事ならんと、のりはなちて先づこれをみるにたゞ胸つぶるゝ事をぞ書たる、卷がみに書たる文と、原稿紙へ横たてにぬりけしも書きそへもしつしたゝめたるのと二つなり、文に曰く、我れ勿體なくも君をこひまつれる事幾十日、たちがたきおもひ日ましに增りていとやるかたなきを、いかにしても成るべき願ひならずと我れと我れをいましめつゝ、坐ぜんの床にやう／＼少し人心地の身になり候ひぬ、此別紙よ、やるかたなきおもひを日ごと夜ごとにしるしたる多くのうちに一ひらにこそ、先きの夜結伽したりし上こと／＼く火中のものとしたりし折友のもう來て一ひらつひにやかず成しをせめてのかたみと參らする、けふ參上の折御まのあたりにてとおもへりしも御おもかげみれば煩惱の雲たちおはふていさぎよくは奉りもなしあへず、かき抱き

て歸宅し候ひぬ、一覽給はりし後八つざきの刑に處し給へとあり。

別紙のかたくさ〴〵いとおほかり、終りにぬりけしたる一首の歌あり、

　　のぼりゆき手折らんすべも白雲の花にみだるゝわがおもひかな。

昔しは厭世の敎を持して敎育者不娶主義を主張したりし身の、このあとの月事業の助けをこひまつりて御めもじしたりし時よりか斗の骨なき身とぞ成ぬることいといがひなしなどかゝれたり。

小原よりの文にいはく、我れ此ほど參上の後君よりも一通の葉書などは給はるべきやとおもひつるに御音づれのなき口をしさ、われなどに給はる御筆はなしとや、おもふ人におくり給ふ山鳥の尾のなが〳〵しきならば御間のかくる由もあらん、一通の葉書にいくばくの時かはかゝるべきとありて、末に原稿の賣り口取もち給はれといふ事あり、霜夜の月といふ三十七八枚の物おくられしなり。

此月十日斗のほどにわざ〳〵出京して我家と內田不知庵のもとをとひに來しことありけれど、何かは此男か斗の文おこすよしあらんや、いとあやしき事をと心いられするまゝに、腹だてばたてよの文書てやる、さりとも原稿のことは別なり、文藝くら

ぶにもはなし聞えんかいかにおもふぞとそれをもとひやる。

十九日　ゆふべは夜のねぶりがたかりしにけふはつむりいといたかり、樋口がもとに……文いださんとせしかど事のさわりなればやめつ。

七月二十日　雨風おびたゞし。午後二時ごろ斗らず三木君、幸田君を伴ひ來る、はじめて逢ひ參らす、我れは幸田露伴と名のらるゝに、有さまつく〴〵うち守れば色白く胸のあたり赤く丈はひくゝしてよくこえたり、物いふ聲に重みあり、ひくゝしづみていと靜にかたらる、めざまし草に小說ならずともよし、何か書きもの寄せられたし、こをば賴みに來つるなりといふ。

ものがたることさま〴〵多く成りて、著作のこと身の上のこと世評のうるさきこと、とるにたらぬ事などかたらる　早く御としとり給はゞよけれどいとわかくおはしますこそ心ぐるしけれ、さりとも老ひ給はんは侘しうおぼすやなど笑ひ〳〵いふ、合作小說早くよりかゝばやの計畫ありしかどえまとまらで年月過ぬ、いかで君一連に入り給ひ　役者たる事をゆるし給はらずや、御同意ならば其うけもちの性格だけけふ取さだめ、さてあら〳〵の大筋たてばや。細かき處は各自のおもふ處にまかせていさゝ

か筆の自由を妨げず、おの〳〵の文體心々の書きざまいとをかしからんとおもふ、地の文といふものを別々の筆にて書きいださばはぎ〳〵に成りていとみぐるしかるべきに、すべて事を書簡文の體にしつ、文にかゝれぬ心中などはやがて日記文などにしたらばをかしかるべし、いかなる役者をかまづゑらばん、す大筆しばしかし給へと指ざせば、三木君立ちて我が机の上より取おろしく。

にごり江のお力といふ役をば樋口君には願はまほしゝ、といふものは三木君なり。

いな長文かくべきしかくなき人にてはかなふまじと露伴子しりぞく。

さらば紙治の小春といふ役はと例の芝居氣にて三木君のぞむ。

まづ待給へこゝにいかなるといかなる人物をか取出るべき、其人から定めて役者をふりつ、さて大筋には取かゝるべし、樋口君にはいづれとも女の役を願ふべきなれど、身分に好はあらせられずや、中等か上等か、商家か士族か官員かと露伴子とふ。

何れにても同じくむづかしきなればゑり好みのあるべきにもあらねど、二頭馬車の境界はみもしらねばかひなくや、唯中わたりの士族などこそといふ。

さらば士族の娘がたぞまづはこれ一つ定まりぬ。さて其次にと筆をねぶれば。三木

君あわたゞしく我が望みをいはせ給へと呼ぶ、女の內氣なるは世におもしろみなき物なり、狂かんの女子の山犬の如きはいかならん、一たび取つきたる男の身を終生はなれじといふやうなるあくどきはといふ、それを樋口君にかと露伴かほをしはむ。

いな、そは菊五郎と見立てゝ正太夫にふるべし。我れこゝにおもしろきあら筋をおもひよりぬ。學者にして世間みずの官員ありと假さだめ、そが我兄鷗外にうけ持たせんはいかに、さて樋口ぬしは其妹よ、ものいとよく知りて長官のにくしみをうけ、うき世に出世の道なくして苦悶の末にてつ學に身を投入れたるといふその兄をかみにいたゞきて一人もの思ふ妹のやくいと榮えあるべし、さてその相手の戀人は露伴子貴兄ならざるべからず、さる處君は大酒家の亂暴人の放蕩家にて正太夫が役の惡ずれ女と事出來つ、さてゆすりこまるゝやうなる筋はいかならん、こはいとおもしろかるべしと調子高に扇うちならしつゝいふ。

我れが戀人かと露伴つむりをたゝきて打笑ひつ、そのやうな役は此方に不似合なり、我れには氣みぢかの癇もちの、騷動の源おこしくるやうなる亂暴のやくこそよけれ、さて一役にては舞臺をなさず、二役老女にて子の異見いふといふこれをば樋口君

今一つうけがひ給へ、それは正太が役の母親ぞといふに、三木君又口を入れて外のやくはいかにもあれ君と樋口君東西の關にすゑずは此狂言初まりがたし、君はいかにしても樋口ぬしが戀人ぞ、二役子役は君にかぎれば樋口君の弟になり給へ、これも又をもしろかるべしといふ、露伴いはく猶舞臺の淋しきに友達といふやうな第三者なかるべからず、これはたれにかといへば、へんくつ官吏の友ならば鷗外にうけとらし給へ、兄貴が友のうちには粉本おほしと三木君いふ、事件に花を添ふべき横れんぼの人なかるべからず、其やくはと言へばそれこそは拙者つかまつらんと三木君いふ。

かりに我が心中をいはしめ給へ、かつてたけくらべを讀みたるとき密かに我れのおもへらく、龍華寺の信如は露伴兄にして、田中の正太は我が兄鷗外、横町の長吉はとりも直さず齋藤のはまり役なるべく、をどけの三五郎はかく申す拙者、大黑やの美登利は樋口君と定めき。

此わりにてやらまほしきなり、さしづめ我が兄は團十郎、樋口君は新こまところの
かゝる處なるべく、齋藤は菊五郎の向ふをはり、露伴子の役は故人宗十郎と參るなるべし、かくてこれをば小說にせずして芝居になさばと我れはおもふ、さてはいよ／＼お

もしろかるべしとおのが好きの道にいざなふいとをかし、露伴はしばしなりを靜めておもむろにいふ、場處などの事も御心にかなひたるこそよけれ、知り給はぬ處にては情うつらずしてをかしみ少なし、西洋の事は鷗外君うけもち、田舍のことはそれがし書くといふ體ならば實景實情まのあたりにうかぶべし、いかやうにも御心ずみのするやう仰せられよ、もとこれ假の遊戲なれば書きはじめて後おもしろからずば半ばにして筆をなげうつ誰れかは妨げん、しかも御互ひつひえのたつべき事にもあらねばといふ、我れ等一同君に迫りて我がめざましに無理やりの筆をとらし參らするやうおぼし給はんかしり候はねど、こと更にさる心得あるにもあらず、同じき業に遊ぶ身の文のたのしみを相たがひに別ちもし、知らざるはとひきゝしれるは敎へてともに進まばとおもふのみなり、天明のむかし横谷宗みん…………の兩人、當代の名人兩關といはれぬるこの人々のむつまじかりしこと、一つの額を二人の刀してつくりしもの、其ころの美談として傳へられぬ、もとより人に特異の點あれば同じ額を二人してつくる明かに變りし處ありしなるべし、されどもそをば人笑はんものか、引かへ用なきひがを張りて、何がし筆とる以上は我れ何かはといふやうの事あらば、そは區域いと狹くる

しく成りて進歩の道のさまたげなるべし、今昔と我れ等と相ともに提携して世に出んか、文士の交りはかゝる物と世人迷夢やゝはれつ、志しあるものは胸壁をつくらずしておのづから悠々の交りなるべしと思ふ、さま〴〵はゞかり給ふ事多からめど、此義なればとやう〳〵とくに、何かはさる處存にも候はず、餘りに筆のをさなくて御かた〴〵と一つ舞臺にのらんことといと心ぐるしければぞといふ。

　さるは用なき遠慮にてこそおはせ、我れも鷗外ぬしもいかでか卒業の身なるべき、ともに修業の道にあるもの、出來不出來そは時によるべし、今のわかさにさる弱き事にて成るべきか、うき世は長しまだ百篇二百篇の出來そこねこしらへ出るとも取かへしのつく時は多かるを、一生に一つよき物出來なばそれにて事は終るべし、弱き事おほせられなとゝき聞かさる。

　此合作出來あがる後までは世にもらし給ふ事なかれ、うるさき取さた聞くもあきたり、こしらへあげたる後めざましの別冊として出すもよく、書てんにおくるも時の都合なり、さらずは各自の間におきて世に出さぬもまた自由ぞ、すべて打くつろぎたる事こそよけれといふ。

こはいと長く物がたりき。このあら筋立ちもせば、又こそ參らめとて立あがる、かたれる事三時間に過ぬ、これより鷗外君がもとを訪ふとて三木君ともゞ家を出らる、いまだ十間ならじとおもふに大雨車軸を流すが如く降りくる。

以上七月二十一日午前のうちしたゝむ。

二十二日、の夜ふけて正太夫來る、露伴および三木竹二參上したりし由。めざまし草への寄稿御承諾相成しよしにきけるは誠かと問はる。いな。取とめたる事にもあらず、例の遲筆なればいつの何号にはなどさだかに申つるにもあらず。もし書出らるゝことあらば其折にと申つる也。いつの事ならんいとおぼつかなき業といへば、いな。書き給ふ、書き給はぬにもかゝはらず、唯めざましに物かならず書き給ふといふけい約遊ばされしにや、其ほど承り參らせ度なり。書かれたらばさし出さんといふ御言の葉はそこらの新聞やより物たのみに出たる時もおほせらるゝ御ことの葉なるべければ、さる無責任ごとのならでいと明らかに。と問ひ寄る、さりとも此外にはこたへ參らする樣もなし、責任論はいとむづかしきことはえしり侍らぬ身なればたゞほゝゑ

みてあるに。我が今宵參りつるはこゝにいと六づかしき意義ありて、これ事秘密に屬するなるを、君が御心さだかに承はりてさて其後にや聞ゆべき、まづ聞えおきて御決心のほどうながすべきかいかにせんと打たゆたふ、我がめざましにて御作得まほしといへるは御作の事にはあらで御名を我が方の人たらしめたき也、めさまし草の一員たる事をうけがはれ度を願ふなり。もと我がめざまし一書肆の企てに過ずといふといへども、内實はしからず、鷗外、露伴および我れ連帶責任をもつて起しつる雜誌なり、しかれども共に筋骨ひとしからぬ人々の連合なり。こと〴〵に一致せずして此間に風波しば〳〵おこりつ。我れも露伴もともすれば退き去らんの有さま折々にみゆるなれば、鷗外が痛苦眞におもふべき也。世人いへらくめざまし草の落城近きにありと、此こと眞に僞りならず。露伴は春陽堂より新小説の編輯人として立籠はれ、よしや名のみをかしたるにもせよ、紅葉は硯友社を根據として雪月花のはたあげをなさんの結構あり。森兄弟驚愕はせて森田思軒、依田學海を誘説し、めざましの社員たる事を依頼するにいたりしかば、我れたるものいかで傍觀するにしのびんや、さる見ぐるしき有樣を演じて今更他見をかざらんものか。我が社は我が社の人によりてこそも

し我が說入れられずとならば、我れもやむなし淚をふるひて此めざまし草みすてざるべからず、我れこれをはなるゝとならばよし三号にしてつぶれんまでもかならず一雜誌創立には及ぶべし、今かく崩れ初たるをいかさまにと引かへすべきよしもなけれど、他より人をいるゝほどの勇氣あらばさる老朽の士を蒐拾する何事かあらん。開門とあらば新らしき人をこそと我れはいひき。さて其あたらしきにいかなる人かあると鷗外いひにしかば、我れはその時君がこと申つるなり。されども事窮策にてまことに我が志しにはあらざりき。一昨日三木竹二、露伴がもとをとひていかなる談話をなしたりけん、相たづさえて君がもとをとひつ。さて昨日我がもとに明白の報知は有き、樋口一葉いよ／＼めざましの一員たる事承諾あり。合作の事も相談とゝのひぬと申こせり。我れには頗るあやしき事におもへりしもさるさだかなる報なればもし御承諾なりつるかともおもひつるなり。此事すべて秘みつに屬す。君には世にもらし給はぬをしればはゞかりなくかくはかたる。つゝみなき誠をいはゞ、君が承諾の一語につきてめざましの利害大かたならぬなり。はた又君が利害も大かたならぬ事とおもふ。我れつら／＼世のさまをみるに泉鏡花の評判絕頂に達せし時われはじめて一げきを加

へつるより名聲しみに落て又泉鏡花あるなしといふさまに及べりや、君がけふ此頃の有さますでに全盛の頂上ぞとおぼゆるに今もしわがめざましに入會の事ともならば世人よりのにくしみを一身におひ給ひて批難さこそは甚しかるべし、我がめざましの人々とてもしかなり、君がたけくらべ賞さんしつるより以來早稻田などのわれに冷評を加ふる事一月は一月より甚だし〳〵、我れ君がもとを訪ひたりと聞くより、いかに黑やきは本家へ行てもとめ得られしやなどいふ評いとかしがまし、此際君の入社せられしとならばいよ〳〵かゝる沙汰かしましく、思はぬ事より要なき名をも引出つべきに、とかくは入社み合せられたる方しかるべくやと余はおもふ、こはさへぎりてとゞめ參らするに非ず、唯君が爲我が爲打わつて申まてなりとくり返し〳〵この事をいふ、此男が心中いさゝ解さぬ我れにもあらず、何かは今更の世評沙汰……

文範

淺からぬ心盡しも水くきのかきならしたるあとにこそしれ　　龍子

序

手がみの文はさのみことゞゝ敷ことゑらびせんより、たれにもわきやすゝすなはなる詞もて思ふこゝろさながらいひあらはさるゝやう書ならひたらば其ほかにことなかるべし、こと葉の自由を得たらましかばいはんとおもふは我が心なればおのづからのたくみはもとめずしてとりいでらるべくや、されば此文たゞ初まなびの友にと計ゑらびて、夕月よたどゝゝ敷、みちのしるべにもなどいふにはあらずかし。

夏子しるす。

新年の部

●年始の文

改りぬる年の始の御壽かど松の色かわらぬためしに申納め候御夫婦樣御はじめ

誰君樣にも御揃ひ御のどやかに御年迎へ遊ばされ候御事いと〳〵嬉しく存じ候此方みな〳〵事なしに齡一つとり重ね候間御心安う思し召給はり度こそは誠に思ひのほかの御疏々しさ去りどころなき罪のほども年立つやがて御目もじにて御詫び申上べきを猶來客などのあわたゞしさに紛れて文にての略儀おぼしゆるし給はらば辱く候此品ことなる事もなきを御年玉のしるし許にとぞ何も申延べ候て　かしこ

◉同じ返事

新年の御ことぶき御早々と仰せ下されいとゞ身の怠りおもひ知られ申候こそよりの御詫びはこゝもとこそ何時も御噂申出ながら折からの事茂さ寒けさなどに引こめられ候て文をだに參らせず如何おぼしめしいらせられ候やと御耻かしうも存じられ候何れ近くに參上頂戴ものゝ御禮も何も申上べく御かへし御使ひの人して　かしこ

◉としの始友におくる

初日かげさものどかなる年に候かな此朝ぼらけは軒ばの霜だに見え候はずまして賑なき大路に遣り羽子の音などはやく心のあくがるゝやうに御座候逢ひ參らせしは一昨日の夜なれどはやとし隔たりたるやうにて御有さまゆかしう左こそ一夜の待久しうお

はして此若水は御手づからや汲ませ給ひし末の御妹御さま例のしたの御ことやの玉ひつるなど思ひやられ申候歳暮に仰せられし御着物のいろ〳〵御帯のさま今も參りて見たてまつり度を今日は女子の出づべき日かななどいましめられ候まゝ此ほど少し過してとたゆたはれ候をお約束たがへりとて怒り給はゞ詫しく候例も奉るなる鉢うゑの梅ことしは花の少なきやうにて見ぐるしけれど替らぬしるしばかりに候例のいはひ言葉どもは今御まのあたりにてと　かしこ

◉同かへし

此方よりこそ先づと存じたるを屠蘇など取はやし居つる紛れに御文はやく給はりて遲れ參らせたる事はづかしう候賜はりたる梅が香これこそは此年の榮えと一同かたじけながり御禮よろしくと申出候御うつりには例の甘露煮お重づめの隅にもさしおかせ給はゞ嬉しかるべく候此方こと齡一つとりければ今日よりは少しをとなしうせよなど家人にいましめら候て心のまゝに羽根つく事もならず妹どもが双六の相手など致し居候待渡りし歌留多こよひより人々呼集へ申候まゝ御ゆるし出で候はゞ必らずかならずおはしませ扨こそ千歳の御ことほぎも申のぶべく御ことの葉うけたまはらざらん程は

猶ふた年の心地に御座候　かしこ

●新年會斷りの文

新年は御早々と御入り下されことには美事のお年玉いたゞき候事御禮海山申上候お急ぎと仰せられしに屠蘇だに參らせざりしを今も口をしく存じられ候あの折の給はせし明日のお會つね／＼御目にかゝる事まれ／＼に成し御舊友のかた／＼御打そろひ一日のどかに遊び給ふのよし私をも其數にとお加へ下されし御嬉しさいかにもして參るべくお答へ申おき候處昨夜より別宅の隱居すこし勝れ申さず風邪にもあらで熱氣のある容體に御座候をたいした事にはあるまじけれど老人の事ゆゑ輕々しうは思はぬやうにと醫者よりも心づけられ申候例も御存じの通り子供のやうに成り居候なればしばしも私を傍よりはなし申さず喰べ物の注文などさま／＼致し居り申候右有さまゆゑ折角おほせ下されしをもどくは失禮と存じながら此度は御ゆるしを願ひて秋の折にも御加へ下され度おかた／＼には御前さまより御取なしお心わるくおぼし召のなきやう御傳へ下され度候誰れ樣かれ樣お姿をとなびてなど承るに限りもなうゆかしう存じられ候をお寄合ひ過ぎて後お暇もあらば一筆しめさせ給はらばやいとゞ我まゝの願ひに

候へども　かしこ

◉同返事

御隱居さま御容體いかゞいらせられ候や御書拜見たゞちにお見舞申上べきを幹事というやうな事に當り居候まゝ何くれと會の用おほくて今日まで文をも奉らず御ゆるし下さるべく候お熱は少しさめさせ給ひしや誠にそのやうの容躰はやり候よしにて彼の日も御斷りの人々おほく候ひし此蜜柑は雲州の知人より唯今もらひたるに候お甘くなきやうに候へどもお舌のお干き遊ばすにはと存じ送り參らせ候兎角お大切にあそばし候やう私のみならず彼の日より合ひし人々よりのお傳へに御座候久々にて御前樣に御めもじかなふ事と喜びてお出の方も有けるを其かひなくて口惜しがらるゝも少なからず他の事にてお出なきならばお恨みも申べきながら御尤の御障りとそれ〳〵秋の折を待わたられ候夕がたより雪降り出で候まゝ暮れはてぬほどに散會し候てお前さま浦山しうおぼすなる歌留多の遊びはせず候ひし委しうは其うち折を得て聞ゆべく吳れ〳〵御老人さま御大切にと陰ながら祈られ候　かしこ

◉歌留多會のあした遺失物をかへしやる文

昨夜は太郎さまようこそ御かし下されお陰さまにて近頃になき面白き遊び致し候いかにも御元氣のよきお子様と昨夜の連中おほめ申上此次の日曜日にも是非御一處に遊び度由さわぎ居られ候早くにお歸り遊し度よし仰せられしを今しばし今しばしと無理にお止め申候て遂ひあのやうの夜更けに相成りお宅にては何時もお定まりの時刻にお就蓐なるべきを嘸かし御ねむういらせられしならんと御詫び申上候昨夜かるたの盛りなりし時これは邪魔なればとて御懐中時計床の間にお取りおき遊ばしたるを人々の亂暴あやふくて私お預り申上しをお歸りの時は更なり一向に思ひ出し申さず唯今簞笥に用ありて始めて見出で申候まゝ直に人してさし出し候御受取下され度候私無言にお預りいたしたる事なれば萬一お取落し遊したるなどお案じもいらせられしやさらばいよいよ申譯なく返へす〳〵御詫び申上候太郎さまに宜しくお傳へ下され度候　かしこ

◉同返事

わざ〳〵お人にて時計おつかはし下され有がたく存じ候子息こそ毎々御邪魔にあがりては御厄介に相成り昨夜もお送りまで頂き候こと此方よりこそ御禮申上べきに候いかばかり面白き御連中にいらせられしや歸りて後床に入りても御噂申つゞけにて誰れ

さまに幾度まけ申したるの彼れさまは御するき遊しかたなどくり返しくり返し居候ひき時計のことさてはお預り置き下されしかとお使ひにて始めて心づきしほどに御座候いかにもいかにも恐れ入候興にまかせて御連中さまがたに定めし失禮もいたせしなるべく御詫びよろしく御申傳へ下され度候其うち一夜こゝもとへも御寄合ひ下され候はゞかたじけなく太郎しきりに願ひ居候御禮のみ　かしこ

◉田舍の祖母に寒中見舞の文

今朝は風はげしう候て北に向きたるは窓さへ明けがたきやうに御座候都のうちさへ此やうな寒さなるをまして山おろしいかばかりかと父母とも〴〵お案じ申上御樣子承るべしと語りあひ居候に私も餘りの御なつかしさと此寒中いかに御凌ぎいらせられ候や伺ひたさに文さし上度こゝろの中に存じ居候折からゆゑ此度は私にと申こひ候て此文をばしたゝめ申候祖母さまには此寒さに御障りもいらせられずや歳暮に伯父樣よりお文給はり候節いよ〳〵御健かにて伯母樣さへ御及びなきほど家内の御用お氣がるに遊ばさるゝよし承り父母はじめ私ともに嬉しう〳〵此春花の時は兄こそ御地へお迎ひに參り御さそひ申候て上野墨田川の人の出御目にかくる事もかなふべくと一同いさ

みたち居候今十日ほどにて寒は明け候へど餘寒は猶まさるものとか御身御大切に風引き給はぬやう遊ばされ度たゞこれのみを願ひ居候をかしきかたちなれど私こしらへし綿衣小包便にてお送り申候間御着衣のしたにお重ね下され度母よりは榮太樓の梅ぼしさし上候いづれも二三日うちには着き申べく候東京にては誰れも誰れも變ることなしに父はかねて薄々申上置しお役がへ新年早々御座候ひしまゝ御喜び下され度これは御年始狀さし出し候節申上べきを遲れにければ其方よりとの言ひつけに御座候誰君さまにも宜しくと申納め候　かしこ

◉祖母に代りて從妹より返事

御文今日の午後つき申候私學校より歸り候折からにて未だ包みも解きあへぬを祖母樣いそがはしう膝もとへ呼寄せ給ひ此文よむべきやう仰せられ繰返しよみ聞かし參らすれば笑みかたまけておはします御顏もちそれは御覽に入れ度やうに御座候ひし誠に仰せ下され候ごとく今年の寒さは近年になき事と人々申合ひ居る中なれども祖母さまの御勢ひのよき事生中のわかき者および候はずお耳は少しうとく成り給ひしなれども是れは長壽のしるしと人申候まゝお案じ下さるまじく寒さのお弱りなどはかけても無

くて其朝霜を踏み給ひては村はづれの地藏さまに日參のお務め欠き給はぬにても大凡御おしはかり下さるべく候綿衣お送り下され候よしをいと〳〵喜びに思しめし近隣の人々に吹聽あそばしては大御自慢に御座候例の甘いもの好きに候まゝ梅ぼし待わたり給ふさま子供のやうにて明日は着くべきか明後日はなど申され候御禮父よりも母よりも別きて祖母さまよりの御傳言山のやうに候へども田舍ものゝ筆たゝ申さず唯おかはりなきさまのみを申上候末になり候へども伯父さま結構の御樣子私かたまで光りの添はるやうにて御嬉しき御事祖母さまは早速地藏さまへお備餅をお納め申す筈に御座候先はお返事まで　かしこ

春の部

●餘寒見舞の文

暦をくれば春の日數に入り候へども梅うぐひすなどかけても思ひよられぬ御寒さにおはしまし候をいかゞ暮させ給ふや夏のあつさには汗だに見えさせ給はぬ御羨ましさに引かへいつも此頃を憂きものに思しめすやう承りおよび昨日よりの雪に御障りなう

どもいふせられずやと御案じ申上候御有さましめさせ給はゞ嬉しかるべく此甘酒は人より教へられ候て初めて試みたる手製に候まゝ加減のほどあやしけれども御笑ひぐさに參らせ候入れ物はお留め置き下され度候御樣子うかゞひまでに　かしこ

◉同じ返事

雪の上ふく風の寒さに春は炬燵のうちばかりと思ひ居りしを御文ならびに好物の品たまはり御情のあたゝかさを身にしめては餘寒の冴ゆるも忘るゝやうに御座候御察しのごとく人一倍の寒がりにて老人のやうにと笑はれながら籠居の明暮れ火桶を友に暮し候は例年も同じさまに候へど幸ひ今年は持病の咳おこり申さず是れは大助かりに候やがて參上御禮も申上べきに池の氷の岸をはなれん折まち渡り候御かへしのみ　かしこ

◉初午に人を招く文

春たちてよりまだ幾日にも候はねど思ひなしの風の寒からぬやうにて物のどかなる心地に御座候去歳の此頃は兎角雪ふりがちにて道などもいと惡く候ひしまゝ例の稻荷まつり初午はさらなり二の午も同じ事にて延々のはてはいつしか其事なしに終り候を

子供口をしがり候て一とせ打つゞき其恨みのみ申出され大きに困り入候ひしかばいかで今歳はと思ひわたり居候に明後日は折よく日曜にも當り候上はじめての午ゆゑ明日よりかけて社の太皷うちならすべきやう心がまへいたし候いつもの通り騒がしきのみにて何のお慰みもあるまじきなれど地口行燈の趣向など長屋中の若き者あつまりて兎角つくり出候まゝ坊さま方御伴ひ御泊りがけに御入り下さらばかたじけなくお相手にはお邸へあがり居り候娘呼寄せおき申べくかならずかならず待奉り候　かしこ

◉同じ返事

いづれも同じ子供ごゝろ御笑ひ下さるべく候此方末のいたづら者かね〴〵指をりては他處さまの御祭りを待久しがり今年は雪のなきやうになど自まゝの願ひを申居候ひしなれば御文のやう聞かせ候ところ躍りたちて嬉しがり明日はかならず參上らせくれよと迫り申候御言葉にあまへ夕刻より兩人とも御厄介願ひ候まゝ御遠慮なくお叱り下され一夜おはやしの連中に御加へ下され度私も參上久々にて御娘御さまに御目もじも願ひ度を良人こと杉田の梅見を誘はれ申私留守居いひつけられ居候まゝ御殘りをしけれど子供のみさし出すべく此品不器用のものなれどお煮染のお附合せにもと存じいさ

さか奉り候くれ〴〵いたづら子供に候間御しかりのほど願上候　かしこ

◉梅見に誘ふ文

俄のおもひたちにて御都合いかならんとあやぶみながら奉り候この四五日あやしう曇りがち成し雪空の今朝はおほへる物を取のけたるやうに晴れ渡り鶯のこゑなど催しがほに聞え初め候を折過さず葛飾あたりの梅ばやし尋ね見申度こゝもとよりは中の兄および嫂と私の三人御存じの隣の娘も誘ひ合はせ候餘りあわたゞしう候へど御前様にもし御さしつかえあらせられず候はゞ此上もなき喜びに候御都合のほど使ひのものに仰せ聞け下され度いかでいかでと待わたり奉る物から　かしこ

◉同じ返事

拜し候いともいともお嬉しき思し召たち何事をおきてもお供願度折から髪結ひの參り居候まゝ取あげ候はゞたゞちに參上いたすべく候何も御答へばかりをさし急ぎて

かしこ

◉初雛祝ひの文

日ごとのどかに成り增り候みな〳〵様いとゞ御機嫌やう渡らせ給ふらん御嬉しく

存じ候此ほど承ればお千代さまもはやお高笑ひ遊ばされ候とや誠にものを引き延す
やうにすぐ〳〵とお生長さぞかしお樂しみの御事なるべくおうらやましう存じられ候
私娘にも一人はあらせ度と望み居候へどこれのみは甲斐のなき事にて當人もしきりに
欲しがり居りせめてはあやかり奉らばや此朝ぼらけ自身十軒店へ參り候て御初節句の
お祝ひのしるしばかり五人ばやし一組これ奉りくれよとに御座候御處々より種々綺羅
びやかに參らせおはします御中へ御恥かしきさまなれど御心安さに任せて娘が心ばか
りに候納め給はらばかたじけなく裏の園に切らせたる桃一枝まだ蕾がちに候へど添へ
て御覽に備へ候　かしこ

◉同じ返事

御こゝろ入れのお祝ひ物ならびに御後園の桃の花をさへ添へて賜はりしかたじけな
さ共に雛壇のさかえと取はやし申候何事の式作法も之辨へ申さずあやしきさまに候へ
ど處々よりの賜はり物取ならべ其もとにて白酒一盃參らせ度こゝろ構へに候まゝ三日
は午前より御入りのやう願はまほしく御兩娘さまとも是非にとまち奉り候物好みの橘
町は參り申さず御心安き番町の人々其ほかとても淡泊とせし方々に候間かならずかな

らすおむづかしう思し召給はらぬやう取集めて申上候御禮は御めもじにて　かしこ

●三月ばかり初奉公の友に

うち絶え御目もじせぬやうに候此ほど御入の時門の柳のもとにて以來は何事も自由のかなはで一とせに兩三度ならでは逢ふ事もなるまじきに顏よく見せ給へなど仰せられしが耳につきて御別れ申すやがて最早三年も隔たりたるやうに戀しく懷かしく思ひ渡られ申候つね〴〵御氣のやさしきお前さまなれば萬一氣むづかしきお主人などにてもあらばいかばかりいかばかり御苦しき事ならん御病氣なども出でなばと取こし苦勞し候て覺束なさやるかた無く候昨日御母さま御もとお尋ね申御樣子承らんとせしに御寺參りのお留守にて其かひなく御返事たまはる段おはすまじとは存じつれど思ふ事文にて申候いつも愛で給ひし垣根の櫻今朝初花を見出候まゝ一人みるべき心地もし候はず一片封の內へ納めて參らせ候よしや一重の色薄くとも思ふ心はいかで八重にも思しくませ給へ又折々文奉るべく候まゝ其都度ならでも御手すきの折御かへしたまはらばや唯御なつかしさの餘りにこそ　かしこ

●同じ返事

世の中かはりたるやうにて此頃の心地われながらあやしく候立出でてよりまだ十日ほどなれども一日の長き事御一處に芝居見物の其まへの日のたぐひに候はず憂くはづかしき事さま〴〵多けれど是れは年月親のふところにばかり抱かれ居し餘波子供ごゝろの失せぬゆゑとおもひかへし申候朋輩はこれかれ合せて七人こゝろ〴〵とて嬉しからぬも候へど馴るれば馴れて行くものやと御案じ下さるまじく候御主はいづれも宜しき方々にて初奉公の身なれば何事にも心づかぬは道理と仰せられ取わき不憫のものに思し召下され候されば家に有しとかはる事なく愁らき事などあるまじき筈なれど何ゆゑとなく日の暮れなどに成り候へばいろ〳〵樣々おもひ出られ所謂のなき涙さへこぼれ申候を親のもとにこのやうの事きかせ候はゞいかばかり案じ候はんかと一向に包みて更に告げもやり候はず宜しき事のみ聞かせ置候間その御ふくみなし置下され度私家に居らず候ては母事たゞ一人にて心細き事なるべくと心ぐるしく候まゝ御暇々にお立より兎も角も安心いたすやう御話しおき下され度お友達も多かりし中お前樣ばかり今に及びてまで御親切に仰せ下され候　辱さに甘へて諸事を願上候賜はりし花びらは吉野初瀬の春に逢ひしよりも嬉しく嬉しく彼の夜の夢には御一處に手を取あひて木か

げに立つをまざ/\と見申候お返事をそゝはれるはさる方に思し召ゆるし給へ今宵は御ひけの早う候ていさゝか自由を得候まゝあはたゞしき走り書して奉り候猶申上度ことゞ胸のうちに疊まり居候へど又其うち折を得て聞ゆべくあら/\のみ　かしこ

◉小學校の卒業を祝ふ文

花も咲き申候御わたりいとゞ長閑におはしまし日々御笑みがちに御暮し遊ばされ候はんと羨ましう存じ奉り候かね/\待聞えつる次郎さま御試驗御とゞこほりなく濟ませられ小學全科御卒業あそばされ候よし普通よりも御年も參らぬに御試驗の度ごと席順などいつも人より上にと承りおよび御敎育がらさもあるべき事には候へど御感心の御勉强と申合ひ居候ひしに此度は取わき優等におはしまし候とや錦の上の花とも申すべく御兩親樣の御喜びいか計と推し上候この事はて給はゞ何方へか御遊山の旅あそばすやう伺ひ居りしに御場所は定まり給ひしや一日ゆる/\御物がたり聞え度と此方子息申居候まゝ御暇の折お入りもあらばかたじけなく候此品ふつゝかの至りなれど御祝ひのしるしばかり次郎さま御用にも立ち候はゞ此上もなき喜びに御座候　かしこ

◉同じ返事

次郎こと卒業御祝ひ下され數々の賜はり物當人は更なり御禮海山申上候御存じの不器用にて隨分父親などやかましき小言を申候へど兎角こゝろに任せ申さず漸く小學だけを終り候なればこれよりの事いとゞ案じられ候やがて入るべき學校の撰みそのほか是非御相談願はまほしく御總領さまに凡ての御心添へなし下され候やう御傳へ給はり度候試驗前よりの少々腦病の氣味にても候ひしまゝ常陸の親戚へ一月ばかり遊びに遣はす心得に候歸り候はゞたゞちに御許へさし出すべく御十分に御いましめいよ〳〵勵むべきやう御敎へいたゞき度お禮ながら右願置候　かしこ

● 春雨ふる日友に

今朝はいかばかりの御朝いなりけん此ふみ參らん頃御手水などすませ給ひてなほ重たげの御目ざし此あたりのさがな者がいつも申すなる霞の中の花をさながら例の御部屋の横柱に寄りおはしますらんさま見ゆるやうなるがをかしく候鶯の音いかに聞かせ給ふや音なく霞む御庭の面に柳のいとのぬれ色などいづれか御歌ぶくろの物ならざらん一首は此方にも惠み給へやさらば此雨にはくゞまるゝ垣ねの草の夫よりもはるに逢ふ喜びは增りぬべく候いとつれ〴〵に人こひしう言葉がたきも無き宿なれば御返り言

承らばやとのすさびに候手製のかすていら折からの御慰みにもと進じ候笑はせ給へ
やかしこ

◉同じ返事

今を寝起かとは思しめしやり餘りに候此頃たえてそのやうの怠りせし事なく人先に雨戸くりあけ申候僞りとおぼしめさば家内のものにお聞き下さるべく今はをとなに成り申候昨夜よりの雨にて上野やほころびし墨田川も色づきぬらんなど物ゆかしう鶯の音に梅の花笠きせまほしき事もたどられず空なる物もおもひ居候折からの御文にて例のことよき御言の葉さりとも餘りなるは憎くゝ候この御恨み御まのあたりならでは聞えにくきを途わるければ其かひなく何時かはとおもひめぐらされ候賜はりしかすていらは御手づからのとや是れはどのやうに燒き申すもの御傳授給はらば嬉しかるべく候いかにも御加減お上手にて一同かたじけながりもてはやし候そのお移りにはお恥かしけれど唯今妹ども相手にこしらへし押鮓いさゝか參らせ候徴し給ひし歌の代へともおぼし召給はるべく候　かしこ

◉土筆をおくる文

都の空はいかばかり打かすむらん我山里も松の白雪うちとけ申候冬より此地に引こもりしまゝ事なしの朝夕を山の姿とあたりの人の心ばへとに慰めて今までも猶過し居候へど文さし出さんとては二十町の遠くまで人はしらせ候心ぐるしさ便りのわるきに侘びては舊の住家に歸らんとさへおもひ立つ折しば／＼候されども此地に參りてより頭のなやましき事露ばかりもなく打かすむやう成し眼さへはる／＼と見わたされ候に今しばらくは猶かへる事を致すまじくことゞ／＼く病なき身になりたらばと思ひかへし居候きのふは子供引つれ近き野にて土筆をつみ申候小川の根芹岡のよめ菜など歌の題にせまほしきやうの趣きさま／＼候へど取わけこれはおもしろくて手提の籠にあふるゝほどに成り候ひしかばこれいかにもして御覽に備へ度と存じ幸ひ下男の忠助けふは東京へ物かひに行かせ候間事の序めきて失禮なれども思しゆるし給ふやと奉り候入れ物も何もひなびてあやしけれどかゝるをこそは此朝夕のさまよと思し汲ませ給へ　あなかしこ

◎同じ返事

うち絶え御有さま承らず候まゝ今日は文奉らんと存じ候ひしに思ひもかけずお人

にて珍らしきもの賜はせたるかたじけなき御文のやうくり返してはさぞ面白きお遊びに種々の物むづかしさを捨ておはします御うらやましさいかならん御病ひもお快く成り給はざらんやはと存じ奉り候忠助どのより承るに御子様がたいよ〳〵御機嫌よう御活潑にいらせられ候よし何よりの御事に候もとの御住居は御親族にお預け置とやされば月日そこばく經候共あれ増るべき憂ひもなく誠に御心安かるべき事と存じ候とまれ御保養專一に遊ばされいとゞ艶やかの御面ざし拜しまつる日をいつしかと待參らせ候越のあられいさゝか唯今よそより貰ひ候まゝ御子様がたお目ざましにもと忠助どのわづらはし候この地にて御用の品も候はゞ御書にて仰せ給はらばや御送りかたは此方にてつとめ申べく候　かしこ

◉花見誘ひの文

文し上候いつぞやの給ひし小金井のこと境の停車場に居候知人に賴みて盛りの頃つげこすやういひ置きしに今朝ほど便り御座候て花はこの二三日ばかりとの事に候日曜は人の出おびたゞしくて汽車の昇り降りなどわづらはしければさらぬ日にとの事にて明日と取きめ候へど御都合いかゞいらせられ候やかねては必らずと仰せられ候へど御

兄上樣御祝儀ほどなくと承りおよび御多用の折からいかならんさりとも申上ざらんは物たらぬ心地し候てあやぶみながら此文をば聞え候御立出かなはゞ嬉しさいかなるべきこゝもとよりは母妹および伯父も參るつもりに候御返事たまはり度　かしこ

◉同じ返事

小金井の花見明日のおぼしめし立のよし御玉章有がたく拜し候私はいまだに彼處を知り申さず何時も人さまの御はなし出るごとにおうらやましうのみ思ひわたり此春のみはかならず御連中に加へ給ひてよと自まゝの願ひ申上おきしにようぞおくらかし給はず殊に御かた〴〵とならば面白さいかならんと嬉しく母につげ候てゆるしのほど聞き申候處例の用ども大かたは片づきたる上私居たりとて何ほどのたしにも相成らず候なればよき御連れのある折願ひて御供申やう御刻限など委しう承はれよとの事に候御返事ながら婢女さし出し候間すべての御指圖お聞かせ下され度今宵すぐるを樂しみわたり候　かしこ

◉花見より歸りてすみれの花を友におくる

きのふは御客樣のよしにて御出なく終日はなの蔭にて御うわさ申出し口惜しがり候

ひき彼處はまことに咲も殘さぬ盛りのほどにて何がし橋の上より見やりたる景色つねづね申すことながら繪にもかゝれぬとはあの事なるべく候さりながら唯よし／＼とて歸らんも口をしければと例の從兄が手ぼめの水彩畫寫生といふ事して戻り候やがて御覽に備ふべく笑ひて御つかはし下され度候一行は此ほど申せし通の人々なれば隨分とをかしき遊びに候ひしかくて御前樣だにおはしまさば今年の花見におもひ殘すことあるまじき歲しをそれかなはぬのみ恨めしう存じられ候やむを得ぬ御障りとしる／＼御出のなきが憎くければ此春ばかり花のはなしは聞かせまつらじなど申合ひしかど否なそれよりは羨ませ參らするほどの一枝御覽に入ればやさらば此恨み晴れぬべしと談らひかへて人々木の下ごとに立寄候ひしが高き梢におもひのとゞかねば是れだに切めてと堤のつぼ菫のみ取りて書中におさめ參らせ候これは唯かたはしの面かげのみいといと床しき景色に候ひしを妬しとおぼしめさば此次またも何かの折候はんに必らず／＼おはましてよ　かしこ

◉同じ返事

承り候にくませ給ふは誰が上ならん田舍よりの泊り客ならば今朝のほど出立いた

し候今さらながら折ふしく東京見物とて參られたるに打すてゝ我が遊山もなしがたく失禮とは存じながらの御斷さてしもあくがるゝ心は終日とゞめがたく午後より歌舞伎座の案内いたせしなれども物みなうわの空にてあやしく候ひし此春中は花のうわさも聞かせじとの給ひし御心根はつらけれどさりとも菫の色の深き情はおはしけりと嬉しくたゞちに此ほど賜はりし歌集のあはひへおさめ申候今參りて從兄の君の御妙手拜見ねがふべく味方は一人に候を深くはくるしめ給ふなと此事かねて申上置候御返事の
みかしこ

◎汐干狩に誘ふ文

打つゞきいとよき日和に御座候花見の御催しなどもいらせられしや扨この頃新聞にて品川あたり汐干狩のもやう見およびさもやと思ひやられて心うごき居候ひしに明日は大じほのよしなれば定めしお臺場ちかくまでも干候はんといよ〳〵思ひたち申候幸ひ日曜ゆゑあるじこと留守居いたしくれ候筈にて子供こと〴〵く伴ひ宰領には御存じの佐助翁めしつるゝつもりに候同じうは貴方樣にも御入願ひ一日ゆる〳〵遊び申度御都合うかゞひ奉り候御さしつかへいらせられずば早朝手前かたまで御車よせ下され度

船のようい其他すべてとゝのへ置かせ申べく御めし物は成るべくおよろしからぬをと
申添へ候御うかゞひまで　かしこ

◉同じ返事

汐干狩御もよほしの由にて手前かたまで御誘ひ下され御文よみ聞かせ候ひしに弟ども大よろこびにて何事をおきてもお供いたし度と申さはぎ候御遠慮なしに候へど御言葉に甘へ大勢めしつれ參上いたすべく宜しきやう御取はからひ願上候よろづは明日御めもじにて何も御返事ばかりを　かしこ

◉花の頃都にある娘に

うち絶え便り聞き候はねばいかゞ暮らさるゝと案じ申候田舍は麻疹流行候てこれも輕くなき症ゆゑ隣村の作藏が二番息子は先月より煩ひて耳が聞えぬやうに成申候これを見るにつけ此方家内には何の異狀もなきなれども遠く離れ居るそもじの事あけくれ氣にかゝり申候これまで遂ひに一月と文の來ぬ事は無かりしに三月の三日づけ書狀五日にとゞきし此かた今日までを數ふればもはや四十日にも餘るまで便りこれなきは萬一わづらひてゞも居候にやそれをば一向おしつゝみて此方に心配かけまじとならば嬉

しきやうなれど心得ちがひ申候つね／＼そもじには草先草がれに氣欝の出る症なるに左様の容體などならんに獨り／＼と部屋の隅などにかきこもり藥も喰べず居候やうにては鳥渡すむべき事をも大事にせねばならず候もし病氣ならば有體にいひこし候へそれぞれの料おくるべく候間充分養生をも加へ猶よろしからずは歸國といふ事にし候ともいさゝか恥には候はぬぞ其地に頼もしき親類も持たぬ身なれば何事も心一つによくよく了簡し候てあやまりのなきやう致さるべく其身を其身のものとはおぼさで老たる母が苦勞の種の身なる事わすれ給ふなこれは取こしたる事なれど久しく音信のなきを案じの餘りさま／＼取出らるゝに候父君なくなり給ひし後兄とそもじを手一つに育てゝ人に後ゆびはさゝせじと思ひ來つる母が心くみ給はゞ其身を大切に病氣の事のみならず怪しき名など取り給ふなそもじも知り居らるゝべし横の長者が娘の不品行一村のものわらひと成りて親までも人に顏の向けがたきは彼娘が心一つに候女子を東京の學校に入るゝは田舍人いづれも嫌ひ候てよくは思はぬさまに候を此村よりはそもじ一人出で居るに候へば其邊いかにも心づけ給ふべく候兄は存じの通の稼ぎものにて人は舊城下の花見にとて長き着物きて旨き物たべに行もある中を一人くろく成りて男ども

の指圖もしみづから鋤鍬手にしても勉强專一といたされ候學問は嫌ひなればにも候へど兄は遂ひに此地を離れて修業といふをせし事もなし兩三度用事ながら東京見物せしばかり其地のさまなど更に委しう知るべきにも候はねどそもじは女子のことなり身一つ都に出で居るなれば嘸かし物の不自由もあるべく私には遠慮いたすやも知れ候はねば貴母よりお心づけおつかはし下されとて蔭に廻りて其もじを勞はる親切かならず忘れなさるまじく候これは度々申すことなれど若きものゝならひ氣のゆるけあらんを恐れてかくはくり返し申進じ候春くれば鴈だに故鄕をわすれ候はず身に病ひあらばしかじか告げこし候へさあらずは猶さら母は其方の空のみながめて便り待くらすに候へばかしこ

◉同じ返事娘より

御文涙にて拜し候誠に申さうやうなき御不沙汰かくまで御案じいたゞき候を事にまぎれて打すぎ居つるおこたりのほど勿體なさおき處なくその御申わけには候はねど此ほどの事少し御聞き願上候先月文さし上し頃よりかねても御耳に入れ候ひし妙子と申され候中よき人はげしき神經病になり候て平常より肝もちにて候ひしが別きて人嫌ひ

おびたゞしき校長はじめ寄宿舍の人々いづれも傍へ寄せ候はず田舍より看病にとて參られし親類のかた〴〵さへ持てあまされ候に唯私とには平日のとほり話しもいたされ心におもふ事など包みなく申され候まゝ私より人々に取次ぎてそれ〴〵心ゆくやう介抱などいたし候なればしばしも枕をはなるゝ事はならず又はなれ居候時に限りかならず容體あやしく候まゝ私は打たえ書物も手にし候はず此人の事にかゝりて一月過し申候この前私風邪よりつゞきて熱になやみ候ひし折人は傳染る事もやと大かた避け居候中に夜るひるわかず附きりに世話申くれ自ら面やせてまで心配しくれ候眞實しかも其折試驗中なりしに私こと看病にかゝづらひて一學期むなしうせしなど取重ね恩ふかく候まゝ此病ひなほりぬべきまではと立添ひ居りそれ故の御不音に相成候こと立かへり恐れ入候此人も追々と快く花ちりはてゝ世の人ごゝろ靜まる頃にもならば隨て落つくべしと醫者も申候ゆめ〳〵兄上の御こと母樣の御上なほざりに暮し居つるならねば何とぞ御ゆるし願ひまつり候御いましめはくり返し拜し候て又の御案じかけまじき心得御兄上樣にもよろしく御傳へ下され度候私身にはつゝがもなく例年よりは健かに候まゝこれも御心安うおぼし召願ひ度いつも申上候筈の此地の景況はうち絶え外にも

出候はねば隨ひて珍らしきもの見聞もし候はずされば此次の折にこそと取あへず御詫のみに御座候　あら〳〵かしこ

◉春の末つかた舊師のもとに竹の子をおくる

その後いかゞ御わたりいらせられ候や過日は花見御連中に御加へお伴ひいたゞき一日おもしろう遊ばれ候事かたじけなく直に御禮をと存じつゞけながら日々取まぎれてのみ御無沙汰御ゆるし下され度候此筍はこゝもと裏の藪のにて昨日の雨に育ちしやらん今朝土より上にいさゝか出しを見出たるに候やしなひも何もなければ味などいかゝ候やたゞやはらかきばかりを取柄に御覽に入れ候おひ〳〵出さかり候はゞ又いくらも奉るべく心地よげに生ひ出たるは勢ひよくてをかしく候まゝ御覽じにも入らせ給はは嬉しかるべく候花見の時鳥渡申上し羽織の襟とかくに返りのわるくて困り候ひしが彼の折お敎へいたゞきし通ぬひあらためしに子細なく着心地よろしく成申候なほ使ひよき形つけ御取寄せおきも候はゞ一箇頂戴ねがひ度御料は使ひのものに仰せきけ下され度候　かしこ

◉同じ返事

御舊宅には時々あがり候ひしが御引移り後さらにうかゞひもせでさりとは存じ寄らざりしに斯る物おひ出づべき御場處さへ持たせ給ふにや御廣々と住ませ給ふさま推しはかりに御うらやましく候　新らしきは何よりにて早速に頂戴いたすべく候仰せこしの形つけ折から手もとに宜しきも無く候まゝいづれそのうち參り候はゞ此方より御とゞけ致すべくお羽織の襟の事今少し申上度ところ候まゝ近きに伺ひ候はんさりながら例の子供あまた預り居候なれば何事も不定にて御待下さらば心ぐるしく候御禮のみを　かしこ

夏の部

◉藤の花を人におくる

花散りはてゝより幾日にも候はねど物の淋しきことといふばかりなく若葉のかげ打ながめて無端に春の行衞をおもはれ候折しも此處なる池のほとりの松がえにかゝりて覺束なげに咲出候藤のさりとも我れありと言はまほしげなるさまをかしく候を家主の心もほこらしげに思しめすらんは耻かしけれど一枝手折御目にかけ候これをしるべに春

の餘波はいかゞとも訪ひ給はゞ嬉しかるべく下におもふ處なきにも候はず　あなかし
こ

◉同じ返事

ゆかしき一枝に結びつけ給へる御文のさま其藤なみの立かへり見參らせ候まことに仰のごとく花ぞめ衣ぬぎかへ候てより長き日いとゞ暮しがたき心地し候て明日は龜井戸にも行かばやなど思ひ居候ひし折から御池の邊に斯くうるはしく咲出しを見せさせ給へるいと嬉しくも候かな待たずしもあらずと匂はせ給へる御言の葉にすがりて御水の面に月うかばん此頃過ぐさず驚かし候はんに構へて御もてなしなどせさせ給ふな此青さしといへるは怪しきものなれど葛飾のしり人にあつらへて取よせたるに候御目なれぬ物なればお慰みにもやと奉り候笑はせ給へ　かしこ

◉端午いはひの文

來ん日の御祝ひには何をがなと思ひめぐらされ候へど例御存じの田舍住居に年月へぬる身ははか〳〵しき事もおもひ寄られず却りては御事ざましにやと思ひかへされふるめかしけれど御內のぼり一對および竹內の久しき齡ひに似へ給へと武者人形取そへ

奉り候かくれの方にもさしおかせ給はらばやかねて仰せられし御外廻りの御用つとむる者こゝもと男にて御間にあふべくは御遠慮なく御申こし遣はされ度女婢も手あきにて遊び居候へば當日御配膳の御ぬひ役などにも御使ひあそばさるべくはと申進じ候和子様目ざましに御智慧づき遊ばされ御屋の棟にひるがへるそれがやうに勇ましう生立給はんさま思ひやられて御祖父母様がたの御喜び御兩親が御樂しみのほど推しはかり參らするも中々に候萬に言の葉たるまじければ唯幾千代もと祝ひおさめ申候て　かしこ

◉同じ返事

しるしばかりにせばやと存じつるを計らず事さわがしく成りて今さら面ふせなるまでに候一昨日は御美事の御幟ならびに人形御祝ひ下されかたじけなしともかたじけなく御子達あまたにしかも足らぬ事なく榮えおはします御もと様よりのなれば我子が千歳たのもしく取わけ嬉しう存じられ候御下人きのふより拜借し居候てさこそ御不都合にもいらせられ候はんなれどいかで今一日をも乞ひ奉り候此重の内不出來に候へどもまゝ物なれば御覽に備へ候引そへし菖蒲の根のながく御いつくしみに預かり度小兒に

代りて願し参らせ候かねても申上つる如く明日はかならず〳〵御入まち上候かしこ

◉花菖蒲見に誘ふ文

胡蝶の夢のまだ覺ぬ間に花は青葉に成り申候あくがるゝ心も同じう散りはてなばいと宜かるべきを夫くのみ餘波とゞまりてきのふけふ暮し詫候ひぬされば同じ心のたれかれ三四人あつまりて明日の朝此宿より車もよほしたて堀切の花菖蒲見に行かんとに候を御同意たまはらばいかに喜び候はん思召のほど承り度おなじうは最上川の稲船ならずもがな御返事はつ子規よりも待わたり候　かしこ

◉同じ返事

承り候御風流のおぼしめしたち殊には誰れ樣彼れ樣御一處とや嘸かし道すがらも面白き事おほく候はん推はかりにも床しうて御供願ひまし度をこゝもと今年はじめて養蠶といふ事こゝろみ候て唯いさゝか慰みにと存じつるを思ひのほか増殖候へは昨日今日桑よ何よとおわたゞしう不馴れの事ゆゑ足を空にまどひ申候かへすぐ〳〵御殘りをしき御事なれど人に打まかせても立出がたく心のほかの御斷申上候をさるかたに御見ゆるし給はり度候家もちなればさもあるべき事など御かたがたの後言わびしく候

かしこ

◉蠶豆を人におくる

田舍人に成り候てより都の手ぶりいつとなく忘れゆき花よ蝶よといふ春をも麥生の青きに慰めて過ぎ候ひきまして此頃の若葉の陰に初郭公いかにとも言はで此あたりの人々が早稻田の植つけいつよりなど言ひ合へるを待よろこび居り候誠に十里の隔てもなき處に候へど都會といへばはるかなるやう思はれ候て斯く御遠々しくのみ打過ぎつる怠り御ゆるし下され度候いよ／＼御健におはしまし其旦那さま益々御とゞこほりなく御出世の御事と蔭ながら喜び申候こなた良人ことかね／＼御心配いたゞき候腦病このほどは大かた宜しく候うへ此地勤務は唯々心まかせの氣樂なるに候へば打たへ例の肝もおこり申さず閑暇には手馴れぬ鋤鍬など持出で候て子供のやうな事致し居候今はよう／＼都會に立いでゝ花やかなる世おくらんの願ひも失せたれば長閑なるを取柄に此地に斯ても終らんなど申され候年來病ひがちに物むづかしき顏もちのみ見居たりしにくらべては此ほどの嬉しさ御察し下され度あたりの人々は何れも親の代よりの知人なればいかにも懇に世話いたしくれ他人と親族の隔てもなく心安さ上もなく候 私

も手拭をかぶりて桑つみなどに出で申おひ〳〵田舍のみすぎに馴れ申候一兩日前より人に機織ることとならひそめ候間ちかきにみづから絲とりつむぎて御めし料の物おくり參らすべく候今日其地實家より參り候まゝそれにつけて此處の圃になり出し蠶豆少しは此方手をもかけ候物なれば自慢ごゝろにてさし上候粒はちいさけれど土によく合ひて味は他處にも劣るまじき名物と人々のはなしに候めしあがり御試み下され度今少し御近き處に候はゞ斯る物折々御覽に入れ度をかなはぬは甲斐なく候まづは御機嫌うかがひながらこゝもと樣子御安心の願度とりつくろはぬ事どもを　かしこ

◉同じ返事

御實家さまよりのお使引とめ申候て御住居のさまはいかゞ田は近くに候や圃はなど細々うけたまはり現に御わたり思ひうかべられ候賜はりし御籠の中お手づからさやをばむかせ給ひての由左樣なる事にも馴れさせ給ひお上手に遊ばさるゝなど御使より承るまゝかつ嬉しきにも淚こぼれ申候御良人樣御古鄕なれば御引こもりもさる事にて田舍住居　御氣安さそれは御うらやましき事に候へど可惜しき御身を何時までも埋木に

はせさせ給はざらんやう致し度病院にあらせらるゝ思召に一郎養生専一にと存じられ候もとの御健康にさへもどらせ給はゞ御立出での道はいくらも候はん俗々る事をと笑はせ給はんはしらず私は唯やうに願ひ居り候御籠のもの八百やの持参るのとは品かはるかと思はれて打より頂戴いたし候厚う御禮申上度こゝもと有さまは取わけ書くと文し参らせん事もなく同じき朝夕をくり返し居るに御座候おほせられし花鳥の色音それは昔しの春に成り候て窓の若竹をぐらく茂るを針もつ手もとの覺束なさに惜しがるやうのさま郭公百首よまんとて夜もすがら寢もやらざりし頃の我れにもあらず成り候ひき　あなかしこ

◉新茶を人におくる文

西が原別莊の茶園このごろ人やとひ入れ候て製造にかゝらせ申候處今日はじめて少しばかり出來まゐり候まことは御一煎じほどなれど御風味下さらばかたじけなく奉存候かしこは遲れて咲し躑躅の色など見すてがたう近き麥畠の黄みわたれるも其事となく一景色候まゝ茶つみが唄のをかしきをも聞しめしがてら一日御遊びにお出下されまじきや私は此ほど絶えず行かよひ居候　かしこ

◉同じ返事

御珍らかなるを先賜はりたるかたじけなさ急ぎ火桶に炭さし添へ申候いつも申ことなれど好き御場所もたせ給ふ御うらやましさいかばかり御楽しみにいらせられ候はんか〻推はかられ候其茶つみの唄つゝじの色いと〳〵ゆかしう存じられ候に此頃かならず御あと追ひ申べく候この羊羹折から貰ひ合はせしを御紙代りに御座候　かしこ

◉梅雨ふる日人のなき跡を弔ふ文

今日もをやみなき空に御座候いとゞ御袖ひがたかるべしと思やられて御有さまうかがひにと雨傘おしひらき候へどさりとも餘りに度々参上せんは御めしつかひなどの御手数もわづらはしかるべく却りては御涙の媒にもやと思ひかへされ自らはえうかがひ候はで人して文奉らせ候きのふも申つる通御歎きはさる事なれども御悲しびー御心いためられ御病ひなども出で候はゞ去り給ひし母君の御心にもそを嬉しとは思召たまふまじく御兄弟さまがたなど何れも御幼少にいらせられ候なればこれよりは御家内の法事御一身に御引うけ遊ばされ御教育そのほか御母様代り数々の御務めさへあらせられ候を憂きに負け給ふべき時に候はず御前様御弱りにてはお子様がたのお世話父

君の御介抱も誰れかはなされ候ものぞ萬におぼしめしかへされ昨日仰せられしやうに何事する張合もなしなど〻くづをれてのみは居給ふべきにあらず候お勸めの與吉しづれも奥様の御かくれよりは孃さまの御身の案じらる〻とて昨日も泣き居候ひき呉々父君御兄弟さまの御爲又なき御母君が思召のほども推量まし御心づよう成らせ給はんこと願はしう候さは申せども今日は御たち日とおもふに有し御面かげいとゞ戀しう唯にはあられで今朝私も御墓參いたし候ひき隨分はやくと存じつれど猶あたらしき花のあまた見えしは御前樣や參らせ給ひしさらば一足おくれにこそ持たせさし出し候枇杷は庭に生たる例のなれば御佛前に御備へ下され度候何も雨ぐものかきくもれるやうにて

かしこ

◉同じ返事

きのふ御入下されし折は身の愚痴ばかりくり返し御いさめも承らで我まゝの淚御覽に入しこと恥かしう候まことに仰せの通弟どもゝまだ小さく候うへ父は御存じの無頓着に候へばかなはぬまでも私母がはりの心得なくてはあられず候を此やうに悲しくのみ居候ては如何致し候やらんさりながら途方にくれ候心のほども御推し下さる

べく候母ありし時は學校より歸り候と二階の部屋に籠りて縫物の針手にし候ばかり其ほかには何事も指圖をうけては動き居しに候をきのふけふ俄に物いひ敎ゆる人なく成りて是れはいかに致さばや彼れはなど婢女どもより聞かれ候度一々困り候ては其折ごとに無き人こひしく返らぬ事を歎かれ申候さりながら昨日くれ〴〵の御諫めもあり今日取別けての御使にて御ねんごろに仰せつかはされ候御事まことにそれよと思ひ當られ候まゝ今後は心よわくてのみは居申まじく心限り弟どもの爲に盡すべくと存じ申候されども猶御存じの辨へなしにて解ぬことかた〴〵多ければ御うるさくとも種々御敎へいたゞき度この事願ひ上置候此雨の中けさ墓參なし下され候とや淺からぬ御情のほど無き人もいかばかり喜び候はんかと身にしみてかたじけなく候頂戴の枇杷たゞちに佛前に備へこれはいつぞやも賜はりて忘れがたう言ひし御園生のなるよしを繰返し申候物ぐるほしきやうなれども　かしこ

◉暑中歸省のおくるゝを故鄕の親につぐる文

折からの暑けさに惡しき病しきりに流行候へば　私身の上さま〴〵御心配下されしばしばの御文有がたく仰せつかはされ候養生のことよく守り喰べ物其ほか心づけ居候

ゆゑか幸ひ身には何事もなく人は暑し／＼と苦しみ居候中をそれほどにも思はれねは健やかなればに候はん御安心下され度かね／＼御待侘申こしの暑中休校今一週の後よりに候まゝ其日たゝちに出立せばやの心がまへに候ひしかど隣村より参られ居候同組なる人かならず同行にと申交せしが御座候て此人いさゝか買物の都合よろしからず少しおくれすば歸國しがたしと申され候きのふけふの一二日は十年のやうに早く／＼御膝もとに参り度とのみ存じられ候へど我まゝに思ひたゝん事此人の手前少しは耻かしくかつは約束にたがふも宜しからぬやう存じられ候まゝ豫て定めの日取より四日ほど遅れ申べく停車場に人お出しおき下され候由なれば其御ふくみ願度着き候は日の暮れがたに成るべく候御あつらへ遊ばされし御菓子だけは私持参いたすべく親類のかたがたへさし上候土産物そのほか今日行李にして差出し候御受取置願度右申上まで　かしこ

◉同じ返事母より

郵便昨夜つき申候いつしかと待し暑中休み連だち歸るべき御友達の都合にて少し出立おくるゝの由御交際としても夫れは御待申べきが然るべく候さりながら此地鎮守の

御祭禮ことしは例年に似合ず賑やかにとの趣向に　明後日より五日間とりおこなはるべき　見せざらんはいかにも殘りをしく候東京にてはいくらも面白きもの見馴れては居候はんなれど田舍は田舍の風情あるべし兄弟ども一同もこれをそもじへ馳走の一つに數々置しなれば書面見候より大に力を落し候隣村より參られ居るならば同じ連合の祭ゆゑ其人お宿もとにても定めし〳〵待居らるべく候まゝ一應この事御話し成ることならばせめて二日も早く參られ候やう致し度父上はそのやうの事申やるに及ばずとて御叱りなれども母は其折引つれて親類回りも致させ度心ゆゑ右申進じ候とまれ此暑さに障りなきやう道中別して心がけらるべく候　かしこ

◉人の新盆に

またぬ月日のたつに早くて今年もいつか苧から賣るこゑを大路に聞くやう成申候まどに釣たる提燈の薄青き色を見るにつけうら淋しき事おもひ出られ候にまして御わたりはと思ひやられ申候こその此頃はまだ御妹子樣御やまひも出候はず私屋後の蓮池にその花折にとおはしまし浮葉の露の玉のやうなるをさながら取らんと片手を岸の小松にかけ給ひ御洋傘さしのべ給ふはしに御袂より紅のはんけちの洩いでゝ水にう

かびし有樣など唯今のやうに思はるゝを今年は門火に迎へられ給ひ御魂祭の棚の上にみそ萩のつゆ手向けられ給ふらん御事おもへども猶夢のやうに御座候多くもおはしまさで唯二人なる御中あけくれに御睦ましう他處目うらやましきやういらせられしを嘸かし御思ひ出ぐささま〴〵にて慰めがたういらせられ候はんいとゞ御思ひや增るとたゆたひながら有し餘波の蓮の花一もと持たせ差出し候を御備へ下さらばかたじけなく籠のうちの林檎は今朝はじめて木よりとりおろしたるに御座候同じう御覽に入れ度て

かしこ

◉同じ返事

暮れ行空をながめ候て天降り來んものゝやうに戀しのび居候折からようぞ思し召やらせ給ひ佛の爲にと數々の御備へ物ありがたく花も林檎も有しながらに拜見いたさせ候ならばいか計喜び狂ひ候てこれは我身に賜はりたるなればど姉樣には手も觸させまゐらせじなど我儘を申張り物あらそひも出來ぬべきに何事も得言はで眞菰の上に押据ゑられ香の煙のかすめるやうなる寫眞のおもかげいとをしき事いふ計なく斯ばかりはかなき一生と知らば六づかしき叱言など言はでも事のすみたるにと返らぬ事を考へら

れ候齢よりは若々しうて物のおもひやりなどかけても無き子に候ひしまゝ自づと御友達の中よきも少なく今日の祭りに思ひ出し給ふやうの人あるまじきを斯く忘れがたきものに思しなさせ給ふかたじけなさ涕こぼれて御禮申上候いづれ御まのあたりにと

かしこ

◉暑中見舞の文

今日は寒暖計九十度を越し申候いかゞ御しのぎいらせられ候や手洗の水も湯と沸き候て草木の色思もひなしか枯れしぼめるやうの御暑けさ氷の柱たてたらばとのみ思ひわたられ申候御もと様には御廣々とすまはせ給ひお天井さへ高くおはせば左のみは思しめすまじきか御様子承り度暑中御うかゞひのしるしばかり葛素麺一重御覧に入れ候最近の菓子屋に調へさせ候なれば出來などいかゞ候やらん砂糖蜜一瓶さしそへ奉り候折からの御暑さくれ〴〵も御いとひのやう願はしく候　かしこ

◉同じ返事

暑さ御見舞として好物の品給はり有がたく幸に宅がたみな〳〵格別のさはりもなく唯あつし〳〵の申續け位に候間乍憚樣御安心下され度いさゝか廻りは廣きやうに候

へど西東をうけたる家のうち朝夕とも隨分ときびしきちゝに御座候いづこにまれ御遊暑のおぼしめしたちなどあらば御供仰つけられ度御禮ながら右願置候　かしこ

◎納涼のむしろより友のもとに

月は今さしのぼらんとし候を此むしろに猶一つの光り添はざらんは口惜しく晝こそ暑さにまけさせ給ひ御出ましのなかりしも道理なれど此涼風にのらせられ幾ばくもなき道をおはしまさん事何事かはあるべきとて壁にそむけし燈火のもとにはしり書して參らせ候今日の會はしらせ給ふ如く物むづかしき上つがたさへおはしましたるなれば幹事承るどちいとゞ汗に成りてさま〴〵心ぞへ苦しがり居候ほどに散會しつるは午後五時ごろにや候ひけん人々彼の樓を立出でゝ辻に車のひき別れんとせし折例の子爵の奥がた仰せらるゝやう今より打とけたるすゞみ所に我が宿へは立よらずやせき入れたる水もあり月もいとよき夜なるべければと誘ひ給ふに御歸りのほど氣づかはるゝ姫君奥方もいまはなく皆われどちの老木どもなればさらば御高どのしばし借まつらんとて夫より此所に車いれさせ申候あるじの君が御琴の音に庭の松風ふきかよひ物ゆかしき夜のさま見せ奉らざらんは口をしく候かゝる折ふしいとよき歌など取いでらるべきを

此席の人々みな口重にてまとゐの三文子も歌はれず候まゝとく御出まし例の優なる御口つき承り度かね〱御存じの心安き御あるじなれば物むづかしうはおぼしめさるまじく候たゞ這わたるほどの御近さに隔ての垣根たかうはせさせ給ふな　かしこ

◉同じ返事

中川の御宿りならねどあやしき御方達へに候かな我が門をば音なしに御車ひきすぎさせ給ひ隣といふばかりの子爵さま御邸に納涼のむしろ開かせ給へりとやさりとものの御情に松風の琴の音ふきこし給へるは恨めしさも忘れてかたじけなく御使と共にも立出度をゝさなきもの今寝つき際にて更に乳をばはなし申さず泣むづかり候まゝこれをば少し見あつかひて猶おそからずはうかゞひ候はん貰ひ合せし果もの一籠御まとゐの中へと御使わづらはせ候参られ得べくは其折よろづ聞ゆべくあるじの君への御傳へよろしきやうにと差いそぎ御かへりのみ　かしこ

◉朝顔見に誘ふ文

こぞも御一處に參りたる入谷の朝がほ此頃ぞと思ひ出られ申候あの朝ぼらけ車つらねて上野の下を過ぎ候ころやう〱空のあかう成りて道のほとりのねむの花の寝ぶげ

に見ゆるがをかしなど戯れかはし候ひしを今にわすれず戀しう候まゝいかで今歳もおぼし立給はずや例の物ゆかしうする中の兄この事御進めすべきやう申出し候なれば歸路の御馳走いかばかりに候はんかねて御吹聽いたし置候御同意下され候はゞ明早朝しのばずの蓮の花をも見がてらに參り度私一人は伴ひくれ申さぬよしに候間何とぞ御繰合せよろしき御返事願度御母樣おゆるし出で候はゞ今宵より私かたへ御入にて御一泊のやう願度候　かしこ

◉同じ返事

明朝入谷への御おほせ何かはいなの候はん母も大よろこびにて御受申上よとの事に御座候御存じの通あまへて伴ひもらはん姉もなく手引つれて參るべき弟も持たぬ野中の一もと杉に候へば何方に行かばやの想ひたちはありとも一人は出かねて心うき事に候をいつも思しやりては斯る御供に加へ給ふかたじけなさ御兄君にも御禮よろしう願上候御ことばにあまへ此日暮れよりうかゞふべく御馳走よりは御心安くおぼしめし下され候を何よりに御座候　かしこ

◉雷鳴はげしかりし後友におくる

やう〳〵いき出たるやうにて猶うちふるへつゝ文したゝめ候先刻雨ぐも空をおほひて出し時はきのふも空しう過ぎたりし夕立の今やかゝると頼もしく久しう照りつゞきて寒暖計は百度にも近うならんとするを引かへ涼しう成ぬべしとて窓によりつゝ打ながめ居しが冷たき風に木の葉さはぎてそゝやと雨戸くり出す間もなく天の川をさかしまにせしやうなる降出しさまそれはいと心地よく胸ひらくるやう覺え居候ひしかど雨戸のひまよりきらめき入ぬる電光の眼をいるやう成に合せて轟き出たるかみなりのすさまじさ常は氣づよくほこり顏なる中働さへ桑原となへ出申候まして兩人の妹どもも母の膝にすがりて泣さわぎしさま家のうちにも鳴出しかと思はるゝやうに御座候ひし三度目と五度目のは別けて恐ろしう必らず近き邊に落雷の處あらんやう思はれ候今餘波なく晴れあがりて日かげさやかに松の梢をてらしつ鳴出る蟬のこゑなどすべて夢のさめたるやうに候へど猶前の川を流るゝ水のおとあらましう聞えてまだ涼しさを嬉しとも思はれ申さず候御前樣はいつも〳〵恐ろしき物のうち地震のつぎに數へ居させ給ふなれば嘸かし御驚き遊ばされ御枕もとに香たき給ひ御蚊帳の中にかゞまりおはしたりしや思ひやり參らするまゝに胸さわがれ申候御腦などいかゞいたせられ候はん唯

今の空のやうに餘波なく成り給はゞ嬉しけれど御有さま案じられ候まゝ御見舞申上度取あへず　かしこ

◉同じ返事

御心にかけさせられし御尋ね下されありがたく今さらながら例の心よわさは子供とても斯ばかりなるはなき物をと今日も兄どもに笑はれ申候初度の時は猶こゝろづよさをつくり居人々まとゐの中にありて折から茶などのみゐし時に候まゝかれこれ取まかなひ居しに候へど三度目のはげしかりし時は魂の身に添はぬやうにて有さまいか成しか身にも覺えもなく候へど奥の四疊半に蚊帳つり置しへかけこもり夜るのもの引着て夫よりはすべて物もおぼえず候ひし今婢女どもの申すを聞候へば顏のいろなどこと〴〵くうせて此世のものとも思はれぬやう成しよしされども例の癖に候へば晴るゝとやがてかはりたる心地もせず此涼風はたとへがたなく嬉しく候御禮ながら參上せばやと存じつれど折から兄どもが御友達のかた〴〵御出にて勝手もと俄にいそがしう成候まゝ女子どもの手傳ひせではかなはず書中にての失禮御ゆるし下され度候かゝるさまに候まま必らず御案じ下されまじくつとめて此くせ直さんと心がけ居候　かしこ

◉避暑に行つる人へ

都は日にまし暑さはげしく團扇の風もぬるきやう覺え候をうらやましうも山下風に御ゆかたの袖ふかれおはしますこと嘸かし仙人といふもの丶やうおぼし召あらせらるべく候昨日御留守宅へうかゞひし處御めしつかひの園どの御あたりより參りたる御文のさま語り聞しくれ旦那樣御奧樣御出ましのところには蚊といふもの一つも出申さぬよしとて呆れがほに居候ひきそれ一つも態々のがれ出給ひし御甲斐よと存じられ候近ごろ世にしられし溫泉のよしに候へばさのみ御知人のお出もなく御うるさき事などいらせらるまじきや旦那樣はさま〴〵御物馴れの御上手にいらせられ候へば何事も御むづかしうは思召たまふまじけれど御前樣は御はじめての事うるさきやうならば一週も居で歸らんなど仰せられしがもはや御逗留二週りにおよび候は定めし御氣樂の朝夕に候はん稀には御文給はり度御留守宅はお園どの例のまめやかに萬とりはからひ置かれ候まゝ御座敷には塵一もとゞめ申さず昨日參りたる折は御庭先の草しきりにつみ取居られ候ひし御秘藏の萬年青は日々丹精にあらはるゝと相見え光澤一しほに增り候猫の子大きくなり候て昨夜は初手がらに鼠一つくはへたるよし園どの申居られ候ひし

取集めて　かしこ

◉同じ返事

湯あたりにや其後すぐれ申さで此地の醫師に藥とゝのへ貰ひなど致し居候ひしまゝ着の御しらせ申上しのみにて御不音に相成居り今御文にて恐入候留守宅御見廻り願ひおきしに御暇なき御中御出下され候ひしよし厚ク御禮申上候此地景色山も水もいと面白く歌などよむ人ならばしかるべくとゝのへて文の上にも御覽に入れ日記なども物する折に候はんなれど其やうの事にも馴れ申さねば唯涼風をあくまでむさぼりてこれ東京への土産にもがなとならぬ事をば申居候蚊は更に驚きもせずそれよりも驚かるゝは四季に咲のべの花どもの時をもわかず亂れあひたるに御座候きのふ山の上まで伴はれ行候ひしが道々手折し草花のうち其地に見なれぬ物候まゝ拜借し參りたる小說のうちに納めてやがて御目にかくべく候知りたる人も二人三人は參り居り東京ものなりと申て少しは樣子の田舍めかぬ藝者でもなき女など呼び參られ三味ひかする席に兩三度まねかれ申候良人こと賜はりし休暇のほどもあと一週に候まゝ今五日もあらば立歸り申べきつもり御禮も何も其折聞ゆべく少しすゞしき思ひをして多く暑さのくるしみを受

けん事かと今より詫しがり居候　あら〳〵のみ　かしこ

秋の部

◉殘暑見舞の文

ことしは取わけ殘る暑さのはげしう候こ荻の上風おきともいまだ思はれず日々氷をいのちに暮し居候あなた樣には御老人樣がた御子達にも御かはりなう御機嫌ようい(ら)せられ候や御總領さまはもはや學校御はじまりの事なるべく御通學の御道いとゞ思ひやり奉り候夏のころより引つゞき流行しつる例の病このほどいよ〳〵勢はげしき由新聞などにあまた見および御宅などは御手ひろに空氣の通ひもよろしくいつも御奇麗にお掃除ゆきとゞき候うへ御養生家にもいらせられ候へばさる御案じはいらせらるまじけれど御外出のかた樣御用心のやう願はしく候暑し〳〵といふも今しばらくの間に候間何とぞ御いとひ此ほど御過し遊ばされ度暑氣御拂ひの料に泡盛二瓶奉り候何も御見舞まで　かしこ

◉同じ返事

御懇の御見舞ふみならびに暑氣拂ひにと思し召よりの二瓶ありがたく頂戴いたし候
仰せのとほり名のみは秋に入りながら萩の下葉に露おき候はんはしらず團扇はしばし
も置きがたく候さりながら手前かた一同幸に殘暑のさはりもなく老人たちもいたつ
て健康に候間はゞかりながら御安心下され度御案じ下され候總領つね〴〵虚弱のかた
に候まゝ猶今しばし通學休ませよなどとしよりもやかましう申候間身にはかへがたし
と存じ青山の實家へ當分遊びにつかはしおき候これ又お案じ下されまじくやがて參上
御禮よろづ申上候はん御使またせ參らせて御かへりごとのみを　かしこ

◉歸省せし人の秋に入りても歸らねば都の友より

此地にとゞまりしは私一人にて校内のかた〴〵大かたは御故鄕に暑さをのがれ給ひ
しなれば御留守のほどの淋しさいとゞ親なしの不幸なげかれ申候わけて御前樣には御兩
親さま御兄弟はさらなり祖父樣祖母さまさへ持たせ給ふよしなれば甘ゆる膝の數おほ
く此一月は一夜の夢のやうにも過ぐさせ給ひけん引かへ私はつね〴〵御前樣一かたを
たよりにして一日のうちに御智惠かゝ參らすること一兩度ならで過ぎ來つるなれば此
ほどのながゝりしこと十年も唯ならず明後日より學校も授業はじまり申候まゝ〳〵

たりまでには御歸京の事と指をりかぞへ居し所いまだ其やうの御報だに參らずいかゞ遊したるやと心ならず候萬一此やすみをば時機として御歸り限りの思し召にやさる御事ならば私にだけはひそかに御申ありても宜かるべきこと御沙汰なしにては平常御約束のやうにもなく候學校のほか例まゐる書の稽古も今日あたりより始まるに候へど私はお前樣お歸りなき限り稽古には參り申さず一人にては何の張合もなくつまらなき事に候都はいまだ暑さ去りあへず屋根の瓦にてる日の光やがて頭のうへにまで及ぶかと思はるゝやうなる寄宿舍のうちにて今も一人つく〲考へ居りいろ〲の愚痴湧かへり候まゝ筆にまかせてさし出し候其地は定めし御涼しき事なるべく其涼しさに此所の暑さをくらべても御覽ぜよ斯暑くるしき中にありて行處なしにお前樣一かたを待くらすものも候を御中よき御兄弟親御樣がたの御もとにいつ〲までも甘へおはして此處の淋しさ思ひやり給はぬは餘りに候御申わけあらばとく〲歸り來まして御まのあたり承らばや御口づからならずば得こそうけひき申まじく候　かしこ

◉同じ返事

御返事はみづから立出でゝ御申わけも致し度を猶四五日は此地にはなるゝ事かなふま

じく／＼と存じ筆にいはせ申候私歸省の時は何事もしり申さず唯大かたに推はかりて人の親の子をおもふ闇ゆゑ同じう遊ぶ一月がほどを都に空しう過させんより手もとに呼よせ蕎麥きりにても喰べさせ度存じより給ひしきりに待わたり迎へ文の來る事とのみ存じ居候處たち歸り有さま見候へば實に御前樣御察しの通これを機にして再び都へは出すまじく内々御前樣にも御話し申上しやうの事とり極め申さんと御座候されども此まゝ此地にとゞまり候ては今まで都に立出居しかひ少しもなく何事もみな半ばにてさしおかねばならぬに候へば私すこし生意氣のやうなれど思ふ事兩親兄姉にも語り申何とぞ來年あの校卒業までは御膝もとの孝養かなひがたきを御見ゆるし置下され度と折入りて賴み候ひしにさらば今一年がほど暇つかはすべし卒業せばかならず歸るべきやう申きかされ此度はやう／＼立出る事に成申候此ほどのくさ／＼は御目通の時御聞き願ふべくあと一週もたゝで同じう机をならべ得らるべく候間御取しまりへのお屆けよろしう願上置候　かしこ

◉草花に添へて人のもとに

螢おひしはきのふとおもふに殘る暑さもいつしか消え候て朝夕の風まことに秋よと

おぼえられ候市中をはなれたる私宿は夏の暑さをさのみに存じ申さゞりし代り秋のつゆけさ増りぬべきことと今より思ひわたされて物さびしきやうに御座候する事なしの手ずさびに萩桔梗をみなへしなど籬がきのうちにつくりていつしかと花まちゐしに此ころぞ其いろやう／＼見えそめ候萩は花すくなく女郎花はたけ高すぎなどいづれ美くしき選びにはもれ候はんなれど流石に野そだちよとさるかたに御あはれみあらば辱なく〱一枝づゝ手折さし上候この尾花のほに出でゝ招く心もおしはかり給はゞ遠里小野にも候はぬを蟲の音きゝにおはしまさずや前の小川にさでさして魚とらゆる子などをかしきも候　かしこ

◎同じ返事

軒より軒と立かさなりて大路にいでずば空だに見がたき下町の住居には花屋が持參のそれよりほか秋の色をも見ることかたく候に御手植の七草とり〲にうるはしきを惜しませ給はざりしかたじけなさ直に花がめのうちに入れ候て獨うれしがり居候御住居のさまはかね〲承りおよび御うらやましさ限りもなく私も上の娘に聟だに迎へ候はゞ其やうの閑靜なる處へ別莊と申すほどのはむづかしう候はんなれど少しはひな

ど植られ得べき空地ある處をとつね〴〵願ひ居るに候へどまだ世の役を盡し申さずうるさき事にて過し居候御おほせなくとも一夜御厄介相ねがひその蟲の音も承らまほしきを私みづからする事ならねど男あるじなければ店のものおのづからの手ぬかりなどもやと氣のくばられ候て墓參のほかつい外出も致し申さずかたつふりには猶おとり候を御笑ひ下さるべく候さりながら此ほど中より娘縁ぐみのはなしあら〳〵調ひしやうにてまだ内々の事に候へど是れだに引取らば仔細なく出あるかるゝ身に相成候はんやがて御五月蠅ほどあがるべきに御寄せ下され度小女郎揚いさゝか例の葭町のなれば似合しからぬ御移りなれど御覽に入れ候　かしこ

◉野分見舞の文

昨夜の大あらしいかゞ御障りもいらせられず候や漸く雲おさまり日かげさし出るを見候て少し胸しづまる心地に御座候さて〳〵近頃におぼえぬ大あれに候ひしかな手前かた屋後に有し栗の木二本は根をさかにして仆れ申候今少にて離れの屋根におほひかゝりぬべきをのがれしは幸に候ひし風筋はいかなるにて候ひしか唯西より北より南より吹まわすかと思ふやうにて家のうちは舟にあると同じやうに候ひしさりながら私か

たは平家のうへに地處も低く候へばさしての障りなきに候へど貴方様は御高臺の御二階作りいかに當て候ひけん塀垣などの御損處もあらせられずやあやぶみ思はれ候まゝ御うかゞひ申上度何も書きみだりて　かしこ

◎同じ返事

早速御人にて御たづねいたゞき有がたく仰せの通昨夜は生たる心地もし候はず戸障子のきしむ音は塀垣のたふるゝひゞきに合ひて屋根も柱も引ぬき持てゆかるゝ事と覺悟きはめ申候ひき折からあるじは昨日の土曜よりかけて一夜の旅に近郷の秋をさぐりにと出で申留守は老人と女子ばかりゆゑいかゞせましと遂ひに覺えぬ恐ろしき心地いたされ候ひしが追々出入のもの集りくれ家には支へをして屋根に物おきなど甲斐々々しく致しくれ候まゝそれに少し心づよく成て曉がたよりは物おぼゆるやう相成候今朝見候へば仆れしは廻りの塀と垣ばかりにて門前の長屋もうらの物おきも破損と申ほとの處なくさては驚きのかたおびたゞしかりしかと笑はれ申候御宅の栗の木も折れ候ひし由お惜しき事あそばされ候私かた柿の實悉く落候て中には疵つきしも多ければ少しも滿足なるをと選りて御子様がた御慰みにさし上候くれ〴〵御同様に事なく濟みつる

は何よりに御座候旦那樣にも宜しう御禮願度こなた良人こと大自慢にてことし花咲き候はゞ御夫婦樣御入りを願はんとお約束しおきし菊畠折れたる木どもの下に成りて淺ましう成り申候これのみ殘りをしく歸り候はゞ誰れに罪をや負せ候はん　かしこ

◉月見に人をまねく文

今宵の月かげいかに增り候はん淺みどりなる空の色今朝より塵ほどの雲だに見え候はぬは淺ましきまで思ひ入りて今日の晴れをと願ひつるこゝろざし何處の神のうけさせ給へると空打あふぎ拜まれ申候知らせ給ふごとく乙女の末こと今年は十五に成り申候處かねぐ\世のことわざに此とし今宵の月あきらかなれば其人一生幸運なるべしとの事舊弊なれども子をおもふ闇ゆゑははかなきことも賴まれ候て折から琴の奥ゆるしも得候へば其祝ひをかねて月見の宴いたし度ことぐ\しう祝ひなど申上候てさもなき御もてなし耻かしう候へど東にむかひし二階にて唯麁酒一つ參らせたしとに御座候何も娘が身いはひと思し召御入下さらば有がたかるべく參られ候は琴の師および其道のお友だち兩三人餘は伯父伯母だつ人々に候夕つかたより必らず必らずと待きこえ奉り候　かしこ

◉同じ返事

幾とせぶりに候はん珍らしう晴れたる今日の空を御事なくとも喜び居つるに取そへ御祝ひの御宴あそばさるゝよし此ほどまで唯嬰兒さまのやうに存じたるお末樣こよひの月の三五にならせ給へるをおもへばさやけき影に我が額の浪かぞへても見るべく今さらながら御子たちの御成人は御すみやかなる物に御座候はやくよりお琴よく遊ばさるゝとて承り居しがいつしか御奥ゆるしにもならせ給へる事御當人はさらなり御母君の御よろこび推はかり奉り候今宵はさだめし玉ほとばしる御つま音承り得らるべくと樂しみて必らず御席のはしにつらなり候はん今よりおもふも心ゆくやうなるはさやけき月のさしのぼらんほどその御物の音承りつゝ御二階の欄干よりとほくながめん心地に御座候お末樣御運と共に光り増りぬべきことうたがひなき空と喜びて御返事ばかりを　かしこ

◉もちの夜雨ふりしかば友のもとに

大かたは浮雲かゝるよと知りつゝ今朝までも猶たのみおもひ居しに晝すぐるころよりあやしう雲わき出でゝ夕つかたよりははら〱とこぼれ出つ今は淺ましき空に成り

申候かくおびたゞしき雨の音は閑居候へど猶こひしたふ心のわざにや今にも雲はれさやかなる影のぼらんやうに思はれて家のうちの人々物ぐるほしなど笑ひ候を獨まどの戸あけては打ながめられ申候今宵のかげのさやかならば御前様にも御入ねがひ月百首までならずとも五十題はと小さき紙に撰びおきたるを空しう成しは口をしう又めぐり來ん月のかげはさやかなる秋候はんとも人の身のはかりがたきにいとゞ物おもひ増るやうに候まゝ今宵は今宵の餘波とゞめ度ゑらび置し題ども御覽に入れ候もし御詠じ御つかはしも下さらばかたじけなくやがて雨中の月などあやしきものに取なされんなれど　かしこ

◉同じ返事

御近どなりながら此雨にはえも立出られずかねて御招きおき下されしものを晴れたる空ならば今ごろは御二階の簾まきたるに見おろしの御池の面には秋のも中のかげすみておどれる魚の姿もしるくいかに心も淸うあらんを物をしみの雨雲大空をばおのがものにして一とせに一度の月を見せ候はぬねたましさ餘りに口をしう候まゝ仲秋無月の恨みばかり心にある限り書つけんとて今墨すりそめたるに候處へ御下男御文ぬれぬ

れもて參りしを拜見いたし候へば誠にやさしき御心入れおほせのとほり雨中の月もをかしかるべく候其數にはとても滿たんことおぼつかなけれど御卷のはしに御加へもやと今御覽に備ふべく御男ひさしうまたせんが心ぐるしければはしり書の見ぐるしうて
かしこ

◉茸狩に誘ふ文

秋やゝさむく成り申候やがてしぐれん山の端の紅葉おもひやると共にこそ御一處に遊びたる松林のさましきりに戀しう茸は今出さかりに候はんを同じうは今年もと俄かに思ひたゝれ申候御同意も下され候はゞ日など取極め候て彼の田舍人につげやり申べく喜びて御待うけいたすべきに候御返事たまはり度　かしこ

◉同じ返事

茸がりおぼし召たちのよしにて御誘にあづかりいと〳〵かたじけなく候こそ御供にて其おもしろさ知り初しより樂しみの數一つふゑたる心地にて秋まち遠に存じ居しに候立ち葉がくれにおもひの外見出たる時のうれしさ互みにとり競ひて負けまじとおもふ勇ましさなど思ひ出るまゝに心うごき申候月曜と木曜は茶の湯と書との稽古日に

これあり日曜は父こと終日家に居候て手廻りの用いろ〳〵申つけらるゝにて此日も出ることかたく其ほかならばいつにても御供いたし度に候餘り我まゝながら御仰にあまへありのまゝを御返事申上候あら〳〵　かしこ

◉人の家に菊植たりけるを聞て

惜しませたまふ香りなりとも風のもて來候をいかゞはせん今日まで其花つくらせ給ふとも承らぬ恨みは置て此朝のほど私かた庭木の手入れさするとて呼寄せ候植木やの男はからず菊のはなし出し候處その者御出入する何がしさま御邸にめづらしう大輪の菊つくり出給ひて我々その道のものさへおどろくばかりの御仕たてざま斯るはいまだ見しこともなくなど取はやし申候を聞くともなく聞居候ひしに御庭園のさまなど唯御もと様をさながらに覺えられ試にもし其御やしきは何がし樣ならずやと問ひしにさにて候とていよ〳〵御花の美事なるさま語りつゞけ候かく知らぬ人なく取はやすをいまゝで見にことよとも仰せのなきは高くすぐれし趣きを知るものならずと思し召ありてにや花のもとには駒だにいさみ申候せめては下露に千とせの齢ひものばし度おしたちたる御願ひ申上候　かしこ

◉同じ返事

ようぞ仰せつかはされ花の面目とかたじけなく候うわさは次第に大きく成り候もの御覧じたらば御驚きや遊ばさんと塵塚のやうなる裏庭へ心ばかりの手などやりて少し曲るをとゞめたるほどのものに候御取なしのかた美事に過ぎ候て今さらほこり顔に御出まし願はんも耻かしく候へど我が子ほめられたる親ごゝろと同じういさゝか自慢も申上度に候菊見の宴などこと〴〵しうは申まじ唯このごろ新築出來あがりしはなれの茶室に粗茶めしあがらんの思し召にて御運びあらばいかばかり〴〵嬉しがり候はん今日まで申さゞりしは我が怠りならでさしひかへの過ぎたるに候さらば明日の午後よりと待奉り候　かしこ

◉菊のさかりに年賀する人のもとに

御母上樣喜の字の御祝ひ遊ばされ候よしにて私ども夫婦とも御招きにあづかり有がたく其日はかならず參上致し候はんと今より樂しみおもひ居候逢ひにあひて御庭の菊さへさかりと承るぞまことに千歳のためし空しからず此度をば始めとして幾百歳をか重ねさせ給ふらんと殊に喜びおもはれ申候あなた樣御はじめ御兄弟樣がたいづれも

のどかに榮えさせ給ひ御孫あまたに末廣うゐらせられ候を斯く御健にも見やらせ給ふ御母君の御心いかばかりお嬉しかるべきを推量りうらやまれ申候片つがたばかりも似かり奉り度を其御むしろに連なり得らるゝかたじけなさ申も中々に御座候態とさせたる緋緞子の褥菊のもやうを撰みたるは千歳をかねての祝ひ心に候「ばんや」といふを入れたればいさゝか冷えをもよけ候はん御平常御もちゐ下され度盡せぬことゞもは申延べ候て　かしこ

◉同じ返事

かたじけなき御祝ひ物めぐりの總のいとゞしう目おどろかれ候て一同さゝげもち拜見いたし候母はましして御心入れ有がたがり打ながめては喜び居候身は健やかに齒などもぬけ落候はねど心は子供のやうに成り候て赤きを喜ぶさま見るに我々も打ゑまれて御禮あつう申上候此ほど申上しやうに庭の菊をも御覽じながら其日はかならず御入願度さしたる御まうけもなしあへねど唯七十ぢは稀なる齡と世に申候を嬉しく子供うちより形ばかりの事いたし候て舊き御馴染のかたぐ〳〵に麁酒まゐらせ度願ひに御座候鶴の毛ごろも重ねぐ〳〵唯今の御禮申上度　あらく〳〵　かしこ

◉紅葉のたよりを山里にとひ合する文

さま〴〵まぎるゝ事おほくて思ひのほかに打たえ候ひき御かはりなくて家事御はげみの事なるべく喜びおもひ居候此春父御出京ありし時御はなしにいと良き聟をとりあてゝ娘も我れも仕合など喜び居られ候ひしがつね〴〵御もと孝行になされ候へばおのづから聟どのも感じおもはれての事なるべく左もあるべき事に此處にも嬉しう思ひ申候若きに似ず手がたうて稼ぎものと聞しが辛抱づよき御もとゝ共に作り出らるゝ身代さこそと行末かけて頼もしう存じ候こゝにも中なる娘にしかるべき緣ありて此年のうちには引うつらすべきつもりに候をさなきより御もとには解らずやを言ひて甘へもし串戯ものにて困らせたるなど遠慮なう有ける餘波今も心安うおもひなして此ほど農事のひまならば着る物の相談などし度ものをと我まゝの願ひ言ひ居候その事どもさまざま忙しき時なれど例の癖にて秋の景色は一しほ見過しがたく薄霜少しおき初しを見るにもいつぞや見つる彼の山の梢おもひやられていかならんと戀しきに有さまいひこし給はらば嬉しかるべく晩稻のかり入れなど嘸いそがしうもあるべきを心なきすさびと思ひかへしつゝ猶遠慮なき頼みを申候隱居大屋に一夜きぬたの音をも聞度てあまへ

たる事どもを　かしこ

◉同じ返事山里より

御文拜し候私こそは申上やうもなき御無沙汰とくに／＼御機嫌うかゞひ致すべきを春夏秋と三たびの養蠶はしばしの暇もなく暮し居り植付の田の草のと引つゞきたる事候へば夫らにまぎれ候うへ田舍ものゝいつしかと筆不精にさへ相成候て心のほかの怠り御ゆるし願上候御宅樣に御厄介ねがひ居りし頃手ならひせよ縫物おぼえよと御面倒御覽下されしかば今も我れどちのうちにては人にもてはやされ候を厚き御恩とつねづね親どもとは語り合居候なれど忘れしかのやうなる日頃のほど夢々私の本意にてはこれなく候御暇いたゞきしころ仰せ聞け下されし御敎へかず／＼に思ひおこされ候て我身の分といふ事相守り良人をもすゝめたて候ては直かせぎに稼ぎ居候へば人もひいきに致しくれ幸ひに出水ひでりの害もなければ田にも畠にも心をいためし事はなく養蠶をいたし候處よそよりは出來おほくて糸のつやよきよし評判され申候これもあれも御蔭に御座候いつぞや御出下されし時家のうしろに物置やうのもの御座候ひし彼れをば取くづし少さけれども藏のかたちをこしらへ申候此秋のはじめ出來あがりしか

ば其祝ひをかけて近隣の人を相招き日待といふを致し候ひしに父は例の醉ひにまかせし我子自慢申出し汗の流るゝばかりほこりたて申候人には耻かしけれど老たる親の喜びが嬉しくいつぞは申上げ御聞を願ふべくと思ひ居りしに候來年迄には隱居のかたにも修覆を加へ夏のお暑き頃などお出を待たん料にと心がけ居るに候紅葉のこと御たづね何かは御遠慮の候べき其やうの御用承るを父も私も身の面目と存じ居るに候まだ少少は早きやうにて此二十日過ぎにもならばと存じられ候何とぞ／＼御出願度おくての刈入れなどにて御もてなしは出來申すまじけれど必らず御憚りは下されまじく稻こきなどまだ御覽じたる事いらせられまじきに御目馴れぬぞをかしう覺しめす事も候はんをじかの聲も此頃さかりに御座候田舍人は田をあらしに來とてにくき物に申候を御歌には大事がらせ給ふもをかしく候孃さま御緣御さだまりのよし御めで度ことは申すに及ばずあなた樣が御安心おしはかりお嬉しう存じ候この忙しき處少し過ぎ候はゞ御手傳ひにも出申度御つかひ下され候やう願上候紅葉は今十日の後こそよろしかるべくと御返事のみを　あら／＼かしこ

◉紅葉見に誘ふ文

今日はいとのどかなる空の色に候よもや時雨もかゝるまじく去歳のやうに途中より引かへす憂ひはあるまじとおぼえられ候まゝ只今より瀧野川の紅葉見に參り度御誘ひ申上候一昨日の日曜に從兄弟の子の參りし時はや十分の紅ゐと申候ひしを今日頃はさのみに人も多からで水にうつれるおもむきなど靜かにもてはやす事かなふべくと存じ御支度も何も遊ばさで御平常姿そのまゝに願はしうこと／＼しく人目にたゝんは詫しかるべきに御侍女一人御つれ遊し御輕やかにと申進じ候馴れさせ給はぬ徒歩よりして車はとび／＼もをかしかるべく御心次第かへりは王子より汽車にてもと存じ候御うかゞひまで　かしこ

◉同じ返事

御返事はしり書して奉り候いとよき御誘ひにいかで洩れ候はんやとび／＼の車いといとをかしう道しらぬどち畠中などを迷ひ候はんこと去年おもひ出でゝ一人ゑみせられ候あの枝どもの短册をかしとやいはん妙なりとやいはん見馴れぬ文字のおほく見え候ひしを今年は書とめ歸るべき筆やうのもの必らず持たせ參るべく候さながら出よとの給ひしに湯をもつかひ候はで今唯今參るべく髮は一昨日ゆひたるがいさゝか打みだ

れ候を人のかきあげくれんとするを其ほどいかにと待たせ給はんも心ぐるしく御うけばかりを申上候御使かへり參らんほどに此方も參上致すべく候　かしこ

◉姉のもとに栗もらひにやる文

引かせはやり候よし常々御病ひがちの御身いかゞ御出遊ばされ候や父上母樣にも御案じいらせられ候彌太郎どの虫氣のやうに此ほど兄君おほせに候ひしが其後よろしう候やお君どのより頼まれの人形の着物まだ學校のいそがしうて縫終り候はねば嘸かし日々待居らるゝ事なるべく私けふもあがり候はずなれど其品出來あがらねばきまりの惡うて態と平助をさし出し候取かさね手前がつてを申やうに候へど此ほど兄上樣御出の時お庭の栗の相變らず美事になりて朝々御見廻の度おどろくばかり笑み落居候よし私にも拾ひに來よと仰せられしなれど前に申しゝお君どのが着物のこと心ぐるしく私の顏みられ候はゞ叔母さまあれはと必らず御催促なるべく其時のぞみを失なはせ候はんこといかにも〳〵愁らければ得もあがり候はずこれ縫終らずばと存じ居つるなれど私この頃ならひ初め候和洋料理お友達の稽古の會をたてゝ一月代りに家主つとむるのに候處明日は私かた其順に相當り人々參られ候なれば何とぞ栗のきんとんこし

らへ出で申度猶粒も美事に御味よき事かねて頂戴におぼえあり候まゝ御宅のこと自分勝手におもひより候多くは御無用に遊ばされ何とぞ少々賜はり度此籠に入れ置し葡萄は甲州に居給ふ伯母さまより今日おこし給へるを御福分いたしませよと母君よりの御仰せに候此籠に御入れあそばされ候ほど栗の頂戴ねがひ上候兄上様にもよろしく御仰あげ下され候て　かしこ

◎同じ返事

御美ごとの葡萄これは本場のとて彌太郎が父に見せ候處さらば君にも太郎にもつかはすまじ我れ一人にて頂戴せんに折角の御心入れむなしう成しと思し召さんも佗しければ祖母樣には内々になど取こめ申候御文拜見し居るをかたはらよりさしのぞきて御手のいたくあがり給ひし由くれ〴〵御ほめ申候ひきよく〳〵御勉強なされ候ゆゑと嬉れしうおもはれ候此頃は御料理もなされ候のにや女はかならず其ことたしなみおかるべくいと良き事に存じ候栗の御處望なぞや御他人行儀にとほゝえまれ候御華奢なる籠にこれが實は似合ひ申さず袋に入れてかたげさせ候猶いくらも候間又々參らすべく其代りきんとんの御馳走願上候私は流行かせの障りもなく太郎も此ほど虫封じ致し候ゆ

ゑにや乳をはくことなど止み申候間御安心下され候やう母様へ御傳へよろしう願度いづれ近きに御機嫌うかゞひには出候はんなれど　かしこ

冬の部

◉かりたる傘を時雨のゝちかへす文

つね〴〵御無沙汰のみ申居り我まゝの願ひには時にもかゝはらず御面倒申入れ吾れながら恥かしく存じ候まことに昨日のしぐれは身の罪おもひしれよとの神業とおぼえられ候秋の末轉宅の祝ひおほせ下されし其御禮に御禮にとおもひながら得もあがり候はで今更申わけなけれど御近邊の植木屋が庭に殘れる菊の今さかりなるがあるよし申傳へし人の候ひしかば引移りそのほかにて遂ひ團子坂へも行申さず殘りをしき事に存じ居しを幸ひの事と思ひたちしに御座候家を出る頃は何の雨氣もなき空の色にて候ひしかば洋傘をも持たで立出し所俄に彼のやうの降に成り御閾の高きも何も顧られず暫時の雨やどりをと御軒先をたのみに子供引つれ御面倒相ねがひしに折柄御食事中にて御馳走をさへ給はり候ことといよ〳〵恐入候拜借の傘人して返上いたし候御受取下さ

れ度御宅のもしあのあたりに在らせ給はずば車だに多くは行かよはぬ野邊にて親子ともどもぬれ鼠の見ぐるしきさま致すべかりしを御蔭樣にての大助かり萬々御禮申上候到來あはせの玉子一折御笑納下さらば辱く候　かしこ

◉同じ返事

まれ〳〵の御外出に折あしかりし事にて御殘念さこそと推量り申候さりながら花に嵐は世のならひに御座候憎く〳〵は思し召給ふな引かへ我宿にては彼の雨故こそ御入たまはりし事と嬉しく嬉しく好き日めかして御浮かれ心もよほしたて又も昨日のやうの事あれかしと願ひ居り候御志はたがへりとも御入だに給はらば何のかはる事か候はん私は其樣におもひて時雨は俄にたのもしく成り申候さても態々御使にて傘かへし給はりし御義理がたさよ夫には及び候はぬよし申つるに却りて恐れ入候殊には御美事の一折何よりの品と辱く御入給はりしだに此方は淺からぬお惠みと存じ居候もの取かさね御禮申上候何もあら〳〵を　かしこ

◉冬のはじめ仕立物の手傳ひをたのむ文

俄にしもあらぬ御寒さなれど思ひまうけぬやうに驚かれ候かねて知らせ給ふ如く家

内多にて働く人は少なきに候へば平常その心得なくては叶はぬを夏の暑さには晝寢がちに暮れば納涼するとて端居がちに夜を更しなど洗ひかへしも十分には出來申さず涼風少したつやうに成りては心地かろく氣のさわやかなるとて人の誘ふがまゝ七草よ菊見よと埒もなく日を暮せし事など候へば昨日今日多くの人々に同じう着せねばならぬに候を胴着の襟の直りしは上着の袖口見ぐるしく襦袢の袖よ裾なほしと淺ましき體に御座候平常のだけはやう〳〵間に合せ候へど表向きなる物何分手廻り申さで困入候いかにも意氣地なきこと御恥かしく候へど御心安きまゝの御願ひ羽織三つ重ね物二組ほど御稽古に參られ候御子達の中にて御縫はせ下さるまじきや誠に粗末の品に候へばかならずかならず御叮嚀に及ばず御みづからにては却りて心ぐるしく候御ゆるし下され候はゞ持たせさし出すべく御願ひまで　かしこ

◉同じ返事

承り候さぞかし〳〵御縫物には御追れの事なるべく御老人樣の御世話よりはじめ御子たちも少なからずいらせられ候へば夫れは御道理に御座候その御中いつも〳〵御間に合せお奇麗に遊ばしおかれ候を此宿の若きものみな驚きおもひ居るに候おほせの

お稽古に參り候娘たち聞候はゞ大よろこびに御引うけいたし候はんなれど私も隱居仕事のいたしかたなく母屋のものは大かた縫終りて餘る手あきに困り居候折ゆゑ御さしつかえなくば私拜借いたし度三つ五つのみならず幾らゝ御出し下され度御遠慮なく御はり返しなり何なり御つかはし下さるべく御心安き御中とりわけての御心配御無用に御座候御返事のみ　かしこ

◉初霜ふりたる日老人のもとに

軒ばの紅葉ちりはてぬ間に今朝うす霜のおき初申候秋よりとかく御なやみがちにと承り心ならず存じながら障ることゞもにてえも上り候はず其後いかゞいらせられ候や御案じ申居候日にそひ御寒く成りまさり候折から御老體一しほ御いとひ遊ばされ候やう願度これよりは別して夜は御足の冷え候はんに御あたゝめ遊ばすとて火をお入れのこと殊のほか毒なるよし人の申候湯たんぽならば御さしつかへなかるべしと聞き候まゝ此ほど外出の折見當りしをもとめ參りをかしき品なれど御用にもやと此うち 私參上の節持參の心得に候ひしがいかにも今朝の冷え候に此夜のほどもおもひやられ少しも早くと奉り候家事に追はれて昔しのやうにはうかゞふ事もならず候を平常くちを

しがり居るに候何とぞ御身御大切にいつ〳〵までも御健かにおはしましいさゝか志をも見せ奉る折あらんをば御待下され度滋養せんべい一袋御孫さまがた御目覺しにも御別ち下され度と取そへ御覽に入候　かしこ

◉同じ返事

老の目のたど〳〵しければ鳥のあとのやうにて御返事さし上候引はなしては一字一字の見ぐるしさに孫娘の十二になる學校より歸り來て代筆せんと申つれど中々申ことあとさきに成りなどして書うつさんものもうるさかるべく言ふ身もくるしかるべしとて談話のやうにしたゝめ候御尋ね下されし秋よりの煩ひは老やみと申のなるべく名なしの病に藥はたゞ養ひになる物さへ喰べ候はゞよしとのことゆゑ嫌ひなれどもそれぞれの心配氣の毒にて牛の乳をばのみはじめ候その効能か少しは血色もよく成り候よし斯く文をかき候を御覽じても御おしはかり御安心下され度候頂戴の御品々有がたく殊に御心入れの湯たんぽ今宵より早速こゝろみ申べく斯る御品何よりの御惠みに御座候いつも〳〵昔しながらの御優しさ御家内の御事さま〴〵いらせられ御娘御さま成し頃とは事かはり給ふべき御中に忘れ給はぬはかたじけなく候まだ御目出度御樣子もいら

せられすやこゝには夫をのみ待渡り居るに候さもあらばいとゝく仰せこし給へ御母君いらせ給はねば何かと御不案内の御こと多からんに老人にはつゝませ給ふことあるべからず候斯るみだり書をもひろひよみ給はれかしとぞ筆あやしうかすれ候ていとゞ見ぐるしう候　かしこ

◉天長節に人を招く文

大君が御代萬代の御とも〴〵祝ひおさめ申候まことに至らぬかたなき今日の御祝ひに合ひたる身のうらゝかなること花なき冬ともおぼえられず物とはなしに獨り笑せられ候唯今は例年のとほり御祝ひの餅一重ありがたく受納申上候こなたには相かはらずの赤飯ことなる事も候はぬを御交りの上とも御覽じ給はるべく候何方も御酒ごと御賑賑しう御來客さま打しきり御いそがしういらせられ候はんなれど今宵こゝもとに若き人々相集り藝盡しいたし候やう計畫居不意なるをよしとて未だ事とり極りもおらず候へど劒舞のをゝしき事もあり髭男の琴彈ずるもあるべしとの事御見しりどちの集ひなればお子樣がた御前樣にも御入給はるまじきや唯今お使より承る所御總領御次男樣とも觀兵式拜見に御出あそばしまだ御歸りなしとの事御歸宅あそばされ候はゞ日暮れ

と仰せられず直に御出下され度人々參らぬほどに息子ことも此頃ならひ初し寫眞機械庭に持出てゝ御さし圖うけながら御姿うつさせ頂き度よし願居候しばしも早く御入を希ひ候て　あなかしこ

◉同じ返事

おほせ給へる如く君が代おぼゆる空の色ちりばかりの雲もなしとは誠に今日の名に候はん扨御かはらせもなう御叮嚀のお重のうち幾久しく頂戴いたし候今宵の御もよほし子供はいまだ歸り候はねど承はらばいかばかり喜び候はん御遠慮なしにやがて參上いたさすべく御厄介願上候私も御まとゐのさま拜見の願はしう候へど引つゞき來客しげき上良人こと少し醉ひの過ぎたるやうにて胸いたがり居候まゝえもうかゞひ候はぬを惡しからずおぼしめし下され度候今子達參上の節御禮よろづ申さすべくあらあらのみ　かしこ

◉徴兵に出たる人の親に

御次男樣御儀いよ／＼御滯りなく御入營の御事なるべく御手紙なども參り候やもとより御氣象にもいらせられ候へば何事をも御しのび憂しなど仰せはなるまじけれど御

みづからは帯をだに手にもし給はざりし餘波にはかに兵營の起ふしいかゞおはしますらん嚴しき規則も候ことなり時節も折から寒う相成候を思ひやり參らするまゝに御傷はしう候さりながら是れはた國民の御務めにいらせられ候へば首尾よく御合格御當籤にさへ相成しは御うらやみこそ申せさる心弱きこと申進ずべきにも候はず彌々御勉強御袖の筋にぎやかに成らん事を願ひ居るに候こゝもと悴も御同年なり同じう檢査はうけたるに候へど例の近眼ゆへ撰みのうちには入り候はず取殘されたる意氣地なき甲斐なき事に口惜しがり何れ近々上京の都合にもなるべく候まゝやがて御次男さま御營所うかゞひ候て軍人境界のいさましきさま承はり度ものと申居候もはや御手紙參り候はゞ御附屬の隊の名おわかり相成しやうかゞひくれよとに御座候取わけ御秘藏の御子樣にいらせられ打はへ御手ばなしも遊ばされず候ひしなればさは申せども嘸かしよろづに御心配の事なるべくおしはかり奉り候此近邊より出たりし豫備の人のはなしなど聞候に最初こそあれ馴るればやがて磊落に物のかゝはりなき御交際おもしろく身はいよいよ健に心もわか／＼しう成行ものとか申候ひきともあれ餘りにお案じは遊ばさるまじく我がめゝしさに思ひくらべてと笑ひ給はんも顧みず推量のまゝをに御座候御う

かゞひまで　草々　かしこ

◉同じ返事

御文拜し候次男こと門出には御叮嚀の御はなむけに預り早速御禮にも出づべきを私すこし寒さに當り候て寐るほどには候はねど炬燵ごもりに日を送り居それ故の御無沙汰何とも申わけなき事に候唯今はわざ〳〵御使にての御文忰身のことおぼしやらせ給ひ私いかに思ひ居るやとまで御ねんごろに御尋ね下され有がたく存じ上候おほせ下され候ごとく老後にまうけし末子に候まゝ斯くてはならじと存じながらともすれば甘やかしがちにて髭男の三歳兒はめづらしなどゝ家内のものに笑はれ候まで可愛がり居し心底御わらひ下され度候さもあれ兵役は民たるものゝ務なるよし人々よりの話しにも聞まことに爾あるべきことゝも考へられ此春檢査の時合格と承りしよりは一しほ其心得に成り申候當人もをさなきよりの惡戯者に候へば鋤鍬もつは嫌ひ候へど劍をさげ銃を持つは願ふてもなき幸と喜び居り私くど〳〵と事ある時の心得など申聞せ候に仰せまでもなき事今日より命は君がものとして職務のために仆れぬべきつもり家には兄上もおはしませば我れをば一人國の爲に盡させ給はれ忠ならんとせば孝ならず候

だん御見ゆるししかく〳〵とて例の空威張かは知らず大に勇み立て出申候文は其の後はがき一通參り唯今封狀にて有樣つげこし候御宅樣へも參らせくれよと一書封じ込め御座候ひしまゝ御使にたのみさし上候營中のこと其ほか必らずしたゝめ御座候はん御覽じ下され度こゝもと書狀にもおもしろく勇ましき事のみ見え申候拭ひ掃除も致し候由水くみなどもするにや候はん彼の男あのさまにてと心をかしく兎もあれ親の手もとは離し見べきものに御座候御子息樣御合格ならざりしを惜しませ給ふはさる事なれど私かたのと異なり給ひ御一人子のうへゆく〳〵御學問にて御身をたて給ふべき思し召寄にさへおはしませば何れの道を取り給ふも國への御務は同じかるべきに候近きに御出京あそばされ候由そは何がし塾へ御入學の其事さだまり給ひしにや御出立の日は何日ばかりにか承り度候かの地に御立出相成り候はゞ悴もとをも御尋ね下され度隊の名は奉るなる狀のうらに御座候いづれ近々うかゞひ候て御めもじの折何も申述べく多くは書殘し候て　かしこ

◉新海苔を故郷の親族へおくるにそへて

御地は舊暦を御用ひ遊ばされ候なれば今霜月のさし入り頃にてまだ御事のどかに候

はん都は何かと忙はしう人の足音ことなるやうにてもはや年の市もたち初申候ことしの景氣は一體に引たちて私店など下職引たり申さず注文ものもて餘すほどに御座候此幾年來さらに無きこと御喜び下され度候新年へかけ候て猶この景氣相つゞき候はば來春は伊勢參宮をかねて久かた振りに御地へ參ることもかなふべく今より樂しみ居り候いつもさし上候新海苔去年のよりは少し肉薄きやうに候へど味は此方よろしかるべしと存じいさゝかづゝなれど菩提處の御住持樣學校の先生へも御上げ下され候やう別々につゝみて一行李に納め申候親類うちの何れも樣へ例の通り御別ち下され度およろしくば又仰せこし給はるべく唯こゝもとにてもまだ新海苔に候間さしいそぎ御覧に入るゝに御座候あるじより文さし上候筈の處商用いかにも忙しく候て筆とり居るひまなく代りて私よりみな樣の御機嫌をも相うかゞひ御無汰沙の御詫もせよとに候ひしを後先に成申候いづれも樣によろしう仰せ傳へ願度何も取あへぬ折のはしり書御ゆるし下され度候　かしこ

◉同じ返事

御行李昨日着いたしいつもながら御厚意の頂戴もの有がたく受納いたし御文の通り

直に何方へも配付いたし候處いづれも〳〵大喜びにて各自よりもお禮は申上べけれど便りもあらば辱がり居るさま申くれよとに御座候ひし中にも菩提所御住持樣は御もと樣にも御存じいらせられ候ごとく無類清淨の御方にて此あたりの寺々なまぐさの這入らぬもなき頃に候へど相かはらずの昆布だしにこれあり湯婆の生麩のとつね〳〵結構のお品もめしあがらぬに候へば一層の高味と珍重一かたならず彼の痩せずれたる頬に皺をよせて宜しく〳〵と申され候私宅一同は別してのこといつも是れの頂戴を指をりかぞへ待居るに候まゝ時は今霜月なれど是れだに給はらば早く新年になれましと存じられ參られ候客人へ自慢の御馳走いたし度に候早速いたゞき試しに昨年のよりは成ほど香味一しほと存じられ候旦那樣へも御禮よろしく願度お文によれば東京も上景氣に候よし御店の御繁昌は蔭ながら御喜ばしき事に候一昨年の暮れのやうに承り候ては此處ながらも心ぼそき事にて折角としごろお賣込みなされ候事なれども是れまでと思ひ絶え御立歸りしかるべしと親類一同より連名の書狀さし上ん約束もいたし候ほどにこれあり然るを引かへ御花々しき御繁昌と承りては胸あく心地いたされ候來春參宮の御思し召たちも候はゞ前もつて必らず御しらせおき下され度左すれば御待う

けの用意それ〴〵致申べく候御歳暮には御座なく候へども通運便にて太織一疋さし出し候これは私手織にていかにも見つきはよろしからねど色もさめ候はで持つことは受合に御座候御夫婦様の御平常着になし下され度田舎より進じたしとおもふもの大かた御地に無きはなしと承り何もおもひ寄られでおかしき物に成申候御笑ひ下さるべく候　かしこ

◎雪の日人のもとに

此朝ぼらけはやう〳〵宵のはなかくるゝ計に候ひしを時の間に松の雪づりおもげに見ゆるやう相成申候夜にかけてさへ降候はゞしるしの棹とやもてさわぐべき日頃待ちつるかひあるやうにて宿の小犬のかけめぐるを見るも心うれしく存じられ候こゝもと所せき庭のうちだにあるを見わたし廣々いらせられ候御二階の景色いかゞ候はんおしはかりにも御うらやましく候今日は折よく日曜にも候へば旦那さま御務めのお出ましもなくやがて盃もて出で給ひて御子息さまがた御膝もとに集へ給ひ世にあたゝけき雪見の宴御もよほしにもや思へば御子多きは幸おほきに御座候こゝもと良人も雪を友にと獨酌の淋しきやうにてはじめ候處へ根岸の知人より笹の雪もたせおこし候これを一

人たべんも甲斐なきやうなれば御わたりへ御裾分いたしませよとのこと餘りわづかにて御箸ぬらしに過ぎ候はねど御さかなの數にも加はり候はゞかたじけなかるべく良人こと例のりうまちすにさへ障り候はねば斯る折すぐさず必らず御邪魔に出づべきをえも伺はれぬ殘念さ取そへ申上よとに候俳句二つ三つ御座候をやがて御覽に供ふべければかねて御吹聽申上おくやうとのこと例の我れぼめに雪ふりやまば上らんとにこそ候はめ旦那樣によろしう御申上願度候あら〳〵のみ　かしこ

◉同じ返事

おもひがけぬほどの御使ひは今日の雪よりいとゞ深き御惠みと御文卷かへし拜し候いかに空にはおしはかり及びけんの給へる如く唯今は中間の若からぬ人たち二階の雪見にと轉び〳〵おはしゝかばいざ銚子もて來よ盃と景色ばかり取おこなふほどに御座候折よく何よりの御品たまはりしかたじけなさ主人ぶりのふつゝかなるを取かくすにも餘り候ていと〳〵嬉しう喜び入候旦那樣常のやうにいらせられ候はゞしひても御入願ふべきを御障り遊ばさんは心ぐるしうて思ひながら人をも奉らず今御風說致たるに御座候承れば同じう御酒ごとの最中とや御間にもあへかしと取いそぎ奉るは此人々

の中にて昨日鴨獵に行たればと投げおはしたるのに御座候おぼつかなき手前料理今庖刀をぬぐひし處に候へば何ぞや名のみこと〳〵しうて此肉の有どころと笑はせ給はんも顧みず御吸物のたね計に候そへて奉るもやし三つ葉はこゝもと裏の畠に藁を被らせて兎角生し立しに候は今雪の中よりつみ出たる君が爲とも取なしあへねど正しう衣手はぬれたるに御座候これにも一句と願候はゞいよ〳〵欲深の名に立候はんや其御名句どもあまたおはしますなるを伺ひには此方よりこそ降やみ候はんとも御寒さのきびしきに御立出はおよろしかるまじく御止め申上よとに御座候御こゝろ安だてに　かしこ

◉煤拂ひに紛失物見出たるを人につぐる文

ことしの日數も僅かに相成申候嘸かし御事多にいらせられ候はん御煤とりはもはや遊ばされ候やこゝもと昨日やう〳〵其事いたし一とせの重荷をおろしたるやうに御座候さて當期以來内々御耳に入れ御心配ねがひ置し主人が秘藏の名物裂人に見せ候節箱より取出し參りそを納むるとて藏までは私持行しに候へども御存じの通りをさなきが俄に驚風にて息をつめ候とて呼たてられ箱に入れしやいれざりしや確に覺えとては御座なく駈出しがそれぎりに直様病院へ入院などの騷ぎにて何事も思ひ出で申さず家

に歸りてその紛失に氣づきしは十日の後に御座候ひし知らせ給ふ如く召使のたれ〳〵もさる事すべき物とはおもはれず然りとて他處より人の入るべきにも候はねばもし鼠などの引つるかと簞笥長持かた寄せてはさま〴〵調べ見しに候へど更に〳〵見出し申さず重々私の不念にて家に傳はりしを後もなくさせつること良人に對し申わけなく平常粗末に心得るよりの過ちと申されんも致しかたなく思案に餘り候まゝもし他處よりはおぼしめしよらるゝ所も候はんかと御心づけ願ひ置きしに候さる處きのふの樣はきに藏の中のこりなく取かたづけ戸棚の隅より椽の下まで掃除いたさせ候處壁の隅に大いなる鼠穴のあき居りしを見出だし申何心なくさしのぞき候處巣を作り候料に紙の切れはし小裂れのやうなるものあまた引込み御座候もしやの疑ひもありしことなり殘らず引出し見候處それは〳〵淺ましき體に成りて彼の名物裂おなじう此うちの物に成居候良人は例の無頓着に鼠どのゝ惡戲に小言もいはれずとて大笑ひいたし候へど私は内心うち〳〵の者をもいさゝかは疑ひ居つるに候まゝいよ〳〵身の罪おもひ知られて人しらぬ事なれども恥かしさ堪へがたう七度尋ねてとは誠なりけりと思ひ當り申候御心配相かけし御詫びもいたし度私内々の物疑ひ聞かせましたるは御もと樣計に候まゝ懺

悔ながら始終申上候とても滿足なるはなく候へど何れもいさゝかづゝ形を殘しおり候間帖になりと作り置申べくあとなく成しよりはと良人もゆるしくれ候まゝ何とぞ〳〵御安心下され度かへす〴〵輕はづみに物疑ふまじき物とさとり申候右申上度　かしこ

◉同じ返事

御叮嚀の御狀御いそがしき御中わざ〳〵恐れ入候例の御品御見出し遊ばされし御めでたく嬉しけれど惡戯ものゝかみちらし候由御惜しきと御殘念のほどおもひやられ申候さりながらこれはた御災難と思し召かへされ候やう致し度もし御めしつかひの中より其樣の事いたせしもの出候はゞおのづから御家名も世にもれぬべく年來御使ひならし遊したるを罪人と極め候といかで御快くいらせらるべき私もよもやと存じ候へども隨分世間ありがちの事ゆゑ萬一出來心にてさる事致すまじきにも限らずと存じしのびしのびに心つけ居しに候これは成ほど知れまじき事にて候いはゞ御藏の端にかくまはれ居つるに候もの昨日の御煤とりは一とせ中の塵ほこりのみならず御心のうちの塵をも拂ひていか計御さつぱりと遊ばされ候ひけん御品は惜しけれど生體あらはに成しは喜ばしき事にて候御つゝしみ深く御口外なかりしこそよけれ若し一言も御疑ひのこ

と人にもれ候はゞ取かへしつくまじき處にて候ひし七度たづねてと仰せられしは誠に誠に御尤のこと何處いかやうの處に事はかくれ居るやも知れ申さず御つゝしみは何よりに御座候宅かたは明日煤とりいたすべくさて當春中なくなしたる店の品物見出すことかなはゞ喜ばしく候へど是れは鼠の質ことなり居候まゝさる都合に參るまじく詮なき事とひとり笑はせられ候今年は御かちん商賣やに御賴み遊ばされ候や御宅にてならば例の道具御もち遊ばさるべく男ども御手傳ひにはさし出し候はん御遠慮なくおほせこし下され度候立かへり一とせの終りに御疑ひの晴れたるを喜び入候て御とも〴〵胸あく心地に御座候いづれお歳暮の御禮に出候はん節くはしう御物がたり致すべく唯あらましを　かしこ

◉妹のもとに羽子板おくる

もはや十とも寢たまはでお正月に御座候いかばかり御嬉しかるべき此ほど父樣より承り候へばつね〴〵學校の御勉强感心にあそばされ候ゆゑ今歳の御歳暮はいつよりも好き物參らせんとのこともはや御頂きなされしや御品は何ならん當てゝ見候はんや人形にてもおはすまじく鞠にても候まじ御帶あげか御半襟かいつも御願ひなりし友禪

の御被布など出來候やらん姉も御うらやましく相成候もし夫れならば御色合など告げこし給へ御總のとり合せをかしきは見ともなく候こゝには太郎二郎が新年着の仕立まだ終らで今日は御歲暮の御禮に出候はずをまだ〳〵參上かなひ候はずさりとて是れの縫終らんを待ほどに御前樣もし待あへず羽子板めし給はゞ徒なるべしと存じ使にてさし出し候精々御氣に入るやうと存じつれど如何なりけん二夜つゞけて年の市見あさりしに御座候父上母樣には殘づゝみのうちの物駒下駄は兄上樣に御あげ下され度お前樣より御披露のほどねがひ參らせ候姉も今二日もたち候はゞ必らず伺ひ候はんに父樣御しかり無きやう宜しう申給はれや　かしこ

◉同じ返事

二人だちの羽子板美事なるを御送り下され御禮海山申上候母樣にも伯母樣にも御ねだり致したるに候へど十三といふは大人のとしなればもはや羽子板かふ物にあらずとていかに願ひても御ゆるし下されず切めて兄樣の御歲暮にとゝのへ頂んと御袖にすがりたれども例の通りやかましき事仰られて叱られて仕舞申候このやうにてはお正月も何もおもしろからねば樂しみにもなく一人くやしがり居しに候處あのやうな結構にう

つゝくしきを賜はり床の間にかざりておけと母樣は仰せられ候へど私は自分の部屋の机の上のほか何處へも置申さず兄樣などには見せ申さず候有がたく有がたく御禮いくらも申上候父樣よりの御歳暮は被布にてもなく糸織の着物が出來申候それは〳〵よき柄に候御出下さらば御覽に入るべく今は横町の仕立屋へ參り居候太郎さま二郎さま御仕立もの御いそがしき由私まだよくは縫へ候はねば御召はとてもむづかしけれどお襦袢お胴めしなど御手廻らぬ物候はゞ御遣し下され度うちのことは母樣御一人にて十分に間に合ひ私は毎日用なしに御座候父樣御はじめへ賜はり〳〵御歳暮の御禮は母樣御したゝめに候間其狀箱のうちを借り候て私の御禮のみ　かしこ

◉歳暮の文

大路を見わたし候に年のまうけの松竹たてわたして蓬萊の山今こゝにと目さむるやうに御座候ことしと申すも今日明日明後日は年波の立かへるらん思へば心あわたゞしく候御宅樣には平常の御心がけもいらせられ候へば今更なる御急ぎなども候はずや私ども何も手廻り申さず一つ袴を二人してはくやうなる騷ぎ御察し下され度候まことに此年は何くれ彼くれ御顧みのもとに候てよろづ御蔭を蒙りしかたじけなさ又來ん年も

と願入奉り候この鹽引鮭ありふれたるものに候へど北海道よりおこせたるに候まゝ御歳末御祝のしるし計御覽に入れ候みづから上りて申べきを使にての略儀御ゆるし下され度申盡されぬ御禮はみな新年にとゆづり候て唯これのみを　かしこ

◉同じ返事

御文ならびに御美事の一尾ありがたく受納いたし候いづかたも年の終りの事しげさは常々おもはぬ用事ども湧出候てこゝもとゝても同じこと沓を冠に取ちがへたる騷ぎのみいたし居候御もと樣には御ちひさき方さへいらせられ候へば一しほの御忙しさ推し上候此ほど仰せられしお針の婆々當分手明になるまじきやう申上置しが此まで賴まれ居し家の用事昨日までにて片づきたるよしに付御使ひ遊ばさるべくは明日よりにてもと夫等申進じかたゞ當方よりも心計の御暮歳とりもたせ今のほど人さし出したるに候給はりしのと行違ひにや相成りつらん年たちかへり候はゞよろづ長閑に聞ゆべく改たまりたる事どもはさて置てお子たちをも必らず歌留多とりなどには借し給はれ此方よりも若きものども御さまたげに出づべしなど今より申合ひ居候御前樣私いでや二人ともよろづの事靜まりなす後御すご言も申交し候はん御義理がたう取いそぎてなど

はおはしますなさては心ぐるしく候今年はかくて御こと通ふ暇も候はじ思へばいとゞと惜しき物から唯來ん年を待居りてあら〳〵に筆とめ申候御禮のみ　かしこ

雜の部

◉婚禮祝ひの文

承り候へば御娘御樣いとよき御緣おはしまし御引移りは此月末とや誠に御平常の御敎へもしるく御學問お手の藝何くれと殘るかたなくお習ひうかべ陰ながらも娘を持たば御宅さまのやうにてあれかしと申合へるに候を聟君はた聞ゆる御秀才にいらせられ候由相生の松いや榮えに御家門御繁昌の御根ざし今より思ひやり參らするも言の葉たるまじき御めでたさに候御つき添ひにはお使ひなれの竹どの參られ候由さらば貴母樣にもいか計御心安う御案じ處あるまじきに候御帶一筋ふるめきたる好みにて思し召には如何候はん御祝ひのしるし計に候御支度のさま〴〵は豫ての御手配もいらせらるべくと存じ候へど中通の御仕立いたすもの此知れるあたりに御座候御用も候はゞ仰せ越し給はるべく何れ近きにうかゞひて御物語よろづ承るべく候へど心ばかりの御

祝ひ迄に御座候　かしこ

◎同　返事

娘縁のことゝ御聞こみ遊ばされしとて御美事の御祝ひ物かたじけなさ何にかは比べん御織出しの松竹の幾久しく受納申上げ候御聞およびも候や先方身がらは左のみに候はねど磊落の人にて男らしうりゝしき處これあり我が聟ぼめはをかしけれど學才は人におくれ候はぬ由媒妁人の言葉のみならず私ども夫婦しば〳〵逢ひ試候處いかなる物にもかゝはらぬ氣性見目によりては少しあら〳〵しう見ゆべきや知り候はねど娘ことは御存じの通しづみ勝の内氣ものに候へば反對にて却りて宜しかるべきかと存じ早々取極め申候女子はあれ一人に候まゝ常々あまやかし子供のやうに育て居候へば一家の妻ぶりいかゞ務め候やらん猶心は落居申さず竹をつき添はせ候にて大凡御推量御笑ひ下さるべく候縫物のこと仰せ下され有がたく斯く俄なるさまにもありかた〴〵支度は必らず必らず致しくれざるやう唯さながらをと申され候まゝ殊更のまうけもしあへず唯いさゝかの物は松坂の引受候て大かたに出來あがり申候いづれ御禮ながら伴ひ出づべくよろづの心得おほせきけ下され候はゞ辱く候この日頃とざまかうざま心づかひし

つる餘波少し目のかすむやうにて筆はか〴〵しく取れ申さず何も申殘したるさまにて
かしこ

◉出産祝ひの文

御嫁御樣御こと昨夜お平らかに御産のひもとかせ給ひしよし御當り月もはやう過ぎさせ給へるを如何おはしますらん他處ながらも御案じ申居しに御初産の御手がらとも申べき御男子にさへいらせられ候由御兩親さま何方に似させ給はんも美くしう愛らしかるべき御形さぞかしと推量られ候御産婦樣はお血の氣などもいらせられずや女の一の大事なれば三度は三度の心づかひせられ候物ながら御始めては別きてのこと御前樣の御心づかひ如何いらせられけん御重荷をおろし給ひしやうにやおはすべき御祖母樣と申上んも似つかはしかるまじき御齡のほどにて初孫まうけ給へるは御うらやましく候早く上りて見參らせ度心いそぎせられ候へど田舍よりの泊の客御座候て今日はえも上られねば唯御祝ひのしるし計まことにあら〳〵しうて御耻かしけれど黃八丈一反進上いたし候蓋物のうちなるは御産婦樣に御上げ下され度さらし飴少々ばかりに候やがて參上赤さま抱き參らせんを樂しみ思ひ居候　かしこ

◉同じ返事

嫁ことはじめての産に候うへ月も延び候事なりいかさまにやとげに案じ思ひ居しに事もなく出產おほせの通り重荷をおろしたるとは此事に候はん幸に血の氣もなく子供も極めて丈夫らしう泣く聲たかうて父親似の太眉これも又肝もちかと笑はれ申候御叮嚀の御品々お祝ひ下され有がたく一同よろしくと申出候お客樣御歸りの後ゆる／＼御覽じに御入下され度御待申上候やがて子息よりも御願ひ申上べけれど御宅樣御總領より御はじめ何れも欠け處なき御出世御身も健かに御繁昌あそばされ候を平常うらやましき御榮えと見參らせ居候まゝ此子が行末あやからせ度御迷惑にはいらせられ候はんなれど名つけ親には是非御わたりをと強ひたる願ひを申居候御聽いれ下さらば嬉しかるべく何れ委しうは御まのあたりにて御使ひまたせ置き取いそぎたる御禮を　かしこ

◉開業祝ひの文

今日めしつかひの長松御近邊まで用たしに遣はし申候處はせ歸りつげ候には三河屋樣には今日御店開きと相見え提燈國旗など御賑々しう御店先は市のやうに人の山をつくりてと勇み立て申候近々御開業の御運びとは承り居しも今日とは存じよらで御祝

も申上ずおくれにけるは御免し下され度候御店開き早々御上景氣にいらせられ候は何よりの御吉兆御ともゝゝ喜び入候商賣ちがひにて御手傳ひに出候とも何の甲斐あるまじけれど夜に入らば主人うかゞひ候よし粗酒一樽交せ肴一籠御祝ひまでに持たせ上候御受納下され度いや榮えに榮え給はん御商運をいのり候て　かしこ

◉同じ返事

御使にて御美事の御祝ひ物今更おそれ入申候今日の店開き前もつて御耳に入れ置くべき筈に候へど事々しう御吹聽いたすべき六間間口の店がまへにもこれなく主人申候には兎角暖簾かけ渡して今日開業など聞の延びたる有樣をつくれるに來る人なくて店先にそゞろ寒げの面もちさらし居らんほど見られまつらんも恥かしければ何事も申上ず二日三日少し物なれの黒人めかしう成たらば斯くと告げ參らせて驚かし申べく夫れまではひた隱しに隱し參らせよとの申つけ私も事ども悉く新らしうて御恥かしきさまに候間もし入らせ給ふべくは今少したちての後御入願度やがては片襷に前だれはさみあげて小商人の妻らしう成ぬべきに候夫れまでゝゝ御入は御ゆるし下され度今長松どの御使に參られこゝもとまごゝゝの樣をかしきとて大笑ひされ申候今日は知れる人

の手傳ひもありまだ〳〵少しはつゝろひ居候なれど明日はいかにと思ひやられ候御禮にはやがて伺ひ候はん唯今日のこと御不沙汰成し申わけ計何も取あへぬはしり書にて
かしこ

◉新築落成をいはふ文

年來御手狹の御不自由をおほせられしが御藏の前より折めぐらして御椽つゞきに新らしう御建そへ遊ばされいつしか御普請御出來あがりの由にて御座敷開きには此方にも出候やう御招き下されいよ〳〵嬉しう樂しみ思はれ候御たてましのお二階よりは富士も筑波も一目に見やらせ給ふのなりとか夏の涼しさは更なる事月にも雪にも嘸かし嘸かし居ながらの御遊山御うらやましき事に候こゝもとに取まかなへよと仰せの有し御額の揮毫早速あるじこと例の君がり參りて賴み參らせしにいつに似合ず快く御引うけ何れ一兩日中にはとの事出來參らば此方より御屆け申上べく候御床かざりよりはじめよろづに委しう撰りとゝのへ給ふらんを怪しきさまにてさし出んはいと見苦しかるべけれど古薩摩の花瓶古銅獅子の置物御祝の心ばかりに候其日はやがて夫とも〳〵相うかゞひ御家作りこまかに拜見ねがふべく仰せられし南天の御床ばしら珍らかなるを

も御見せいたゞかれ候こと〻樂しみわたり申候　かしこ

◉同じ返事

何ばかりの數奇もなく唯餘りの手狹に少し息つく處をと建そへさせ候なれば取わき御覽に入る〻座敷もなきを唯打ひらきたる二階にて麁酒一つ參らせ度御入願上候ひし處　御心入の御祝ひ物ことに御家に御傳へ遊ばされし貴重の御品給はりたる辱さ長く床の間の光りに致すべく主人もくれぐ〜御禮申上よとに御座候御取もち願ひつる何がし樣御筆のこと委細御ふくみ御書き下され候由かねぐ〜御むづかしき方樣と承り居しに斯く仔細なく御聞き願はれ候こと全く御蔭と一同よろこび居候其額出來あがり候はんほど壁なども誠に干くべくさて御入願はん日は晴れにてもあれかしと今より夫をば祈らせ申候いかならんとも御二方樣必らず御入下され候やう繰返し願ひ參らせ候かしこ

◉媒妁たのみの文

事ある折ならでは文だに參らせず我まゝの事ども御ゆるし下され度候打あけ賴み參らする は御隣家櫻木樣御長女學校にての評判もよく氣だても温順に容貌も人よりすぐ

れてと承り及びかね〳〵望み居候此方嫁に申むねなき人とげに慕はしく御宅樣へ出候度々奥のお座敷にて承れば幽かにもれ來る琴の音にも心うごき居るに候如何候はん此方ども嫁にも御遣はし相成るまじきや萬一他處ほかへ御約束なども候やうならば申出さんも甲斐なかるべく內々思し召の處御聞かせ下され度候こなた悴は御存じの通の理屈ものにて未だ妻などの御心配には及び候はずと跳つけ候が常なれば此度の存じ寄にも不承知申出さんかと問聞候處いつぞや上野の音樂會とやらんにて御目通りしたる事もあり彼の人ならばお貰ひ下されてもさしつかへは候はずと何の異存もなく候は充分氣に入たるのと存じられ候此方身代より悴身のことは逐一御存じの御もと樣に今更改めて申上もし候はじ前のべつる通り御隣家にて御先約のなきやうに候はゞ何とぞ何とぞ御申し込御仲立の役お引うけ願度みづから參上御願ひ申べきを少し風邪の氣味にて風に當ること宜しからずと醫者よりとめられ居候にて善はいそげとも申候へば成るべく速かに御返事きゝまし度文にして申上候　かしこ

◉同じ返事

御文拜し上候御申きけの一條かねて左樣の思し召もあらばと思ひ居しに候へど御子

息樣とかく斯る筋を御しぶ〳〵にと承り申上候とも御聞入なるまじきかとさしひかへしに御座候誠に御目がねの通隣家の娘御はお行儀といひ御學藝まして性質のおとなしう女らしきは此あたりに知らぬ人もなく御わたりの御嫁御樣と申さんに誠に一對の御中なるべしと存じられ候早くより往來もし候て何くれと家内のさま知り居候へどいまだ何方へも緣のはなしは無きやうに候御仲立の大役は身に應じ候はねど御橋わたしはいかやうにも仕つり候はん早速聞合せ御返事申上べく平常御子息樣御はなし事の序に致したる覺え御座候間大かたいなやは有るまじく候へど今より參りて委しう物がたり候はん萬事は後より私あがりて申上べく何もあら〳〵　かしこ

◉家を買はんとて人にたのむ文

かねて御話し申上し總領娘分家のこと親類どもの相談やう〳〵とゝのひ申候間近々一家を構へさせ度に未だ相應の家やしき見當り申さず御もと樣は御手廣に御交際もいらせられ候なれば何方にか御心當りは有らせ給ふまじきや場處は高臺に候はゞ別しての好みもなく地處つきにて土藏も候はゞ猶々望む處に候大よその價は二千圓を越へざるほどにての內規に候間それら御含み何とぞ〳〵御心がけ下され度委しうは何れ御ま

のあたりにて先は右御願のみ　かしこ

◉同じ返事

拜見申上候御長女樣御分家のこと御相談とゝのひの由さすれば豫て御談しの聟君お迎へ遊ばされ候なるべく種々御心配の御樣子に承はりしが斯くならせ給ひしは重疊御めでたく候御申こしの御家のこと谷中に居候知人この近々故郷に立かへる事出來候て家よりはじめ有形のまゝ賣拂ひ度よしこれは一昨日聞し話しに候まゝ未だ約束も出來申まじく此家ならば大かた御好みに合ふべきかと存じ候藏もあり地處もあり庭木などは隨分と心を入れたる物御座候唯値段の處少し格高かと存じ候まゝ猶一應問ひ聞申べく建坪間どり其ほかの細かしき處は例の迂濶にてえよくも知り候はねば其事ども取しらべ繪圖面御覽に入るべく〱候御氣にかなふやうに候はゞ御一覽相成るべく見ともなきさまには候はねど長屋二棟つき居しかと存じ候合せて申上度猶委しうは取しらべ候うへ申上べく御急ぎと仰せられしまゝ差當り心うかびしを申進じ候あら〱　かしこ

◉遠きわたりの友に寫眞の取かへを賴む文

日毎御目にかゝりても猶あかずのみ思はれしを斯く遠ざかり參らせての朝夕いとゞ

御懐かしさやるかたなく候一日のうちには二度も三度も此頃いかに面がはりし給ひつらん以前よりの御母様似にておはしゝが田舎住居の御心のびらかに御頬の肉ゆたかに成らせ給ひしや然らずば丈高う成り給ふと共に御撫肩のいよ〳〵細りて誰れやらが見たてし枝垂り櫻の朝景色おぼゆるやなど取出られ申かず〳〵に戀しう思ひ居られ候都を御はなれ遊ばさるゝ時いかで一葉はと願ひしものを今に今にと言ひのがれに其まま寫眞の御恵みもなくもてひがみては故なき御恨みも申され候時々たまはる御文を日毎に取出しては御言の葉承る心地に候へど御面かげ見えねば物たらぬやうにていとど雲井のはるかなる思ひせられ候御文言葉のごとく今猶おもひおこせ給ふとならば何かは御姿を惜しませ給ふべき御愼み深き御心用ひはさる事なれど他人ならぬ私に何故の御隔てぞや賜はり候とも此方手箱のうちに秘めて夢々人には見せ候はず一人ながめて一人大事がり居申べきに候許し玉はゞ此方の見ぐるしきをも參らせ候はん殊にいつくしみ給へとにもあらず御机の引出し若しくは御針箱の隅にも紛れ居らんにはいささか恨みあるまじく候早々御返事給はり度御おもかげ拜さん日をいつ〳〵と待渡り候

かしこ

◉同じ返事

御文くり返しくり返し斯く仰せいたゞき候を差上ざらんは御怒りにや觸れぬべきさりとて淺ましき田舍人に成はてしを御覽に入れんは憂かるべくいかさまにせんと思ひたどらへ候へど有し其頃御とも〴〵學校通ひの朝夕も洋傘さしかざして日やけを厭ひし其我れにては無きさまも御推量りいらせらるべく見苦しとて參らせざらんは却りての失禮にや當り候はん都を去りしより以來しらせ給ふ通りの家のさま父さへ筆を鍬にかへて夫れまでならずともと人々申とゞむれども其時々の手すぎよとて立働き居候中を絹はんけちに顏ぬぐひても居るべきに候はず白粉などは最早幾月とり出ずや候はん早う都に有ける日田舍人は何れも年齡よりは老け形なるがをかしなど嘲り言ひ候ひしが誠に人は處から鄕に入りては鄕にしたがへに御座候此處らあたりには二十歲を越して肩揚の娘もなく三十女が緋ぢりめんの襦袢の袖などかけても見らるゝ事に候はずいさゝか縞の荒きを着候てもやがて人の見とがむるさまに候へば一向くすみ入りて今日此頃の私の有樣御覽じたらば御驚きや遊ばされん隨ひての面がはりは今奉る寫眞の上にも御覽じ下さるべく左もあらばあれ思ふ心は其昔しにもいとゞ增りて忘るゝよしな

ゝ戀しのび奉るなれば假令此おもかげの見苦しうもあれ是れに依りて倦かれまつるやうの輕らかなる御交らひには非じ物をと思ひかへされ斯く淺ましきを御覽に入れ候人ごとに逆らふはよからぬ事といつも御前樣の御教へなれば斯る事にも猶有かしと守るにて候いで其御取かへをも早々給はれかし此方のみ徵すは御人よしとも申がたく候

かしこ

◎奉公人の代りを求むる文

その後御かはりもいらせられずや御樣子うかゞひにと存じながら久しう召使ひし仲働きの竹こと故鄕の親病氣とて迎への人參り十日ほど前に暇つかはし候まゝ物の不自由のみならず小間使はまだ一向に年も參らず勝手もと働く女子は少し耳うとくて人さまとの御挨拶もなしあへねば遂ひ家を明ることかなひ候はず思ひながらい御不沙汰に御座候さて夫れをば先に御許し願置き賴み參らせたきは此竹に代りて釜の間の隅々心づけくれ候女子一人急々に抱へ申度ぬひ仕事少し出來候て折かゞみのよき二十歲より三十までのを望みにこれあり顏も少しは見ぐるしからぬをと是れは欲の上の欲いつぞや抱へし黑痘痕の女子のやうに夕つ方來ませしお客さまに聲たてさせる程にさへなく

ば夫れは如何やうにても仔細候はず極めてはげしき怜悧者より少しは鈍くも眞面目につとむるが欲しく候給料は年二十圓湯は自家にたち候へど髪は其身にて結はする定めに致し置候もし御心當りに相應の人候はゞ何とぞ〳〵お世話なし下され度御人出入多き御もと樣なればとて失禮をも顧みず御願ひに御座候御存じの通り心づかぬ勝の私日頃竹の手計を待居しに候へば俄に物のうるさくて一日も早く代りの求め度に候何も御願ひのみ　かしこ

◉同じ返事

久しう御渡りもなきはいかなるにかと存じながら此處にも不時の取こみごとなど候て何くれと紛れ暮し御伺ひも申上ず候ひしに承れば御召使の竹どの俄に御暇いたゞき故郷に歸り申候由御人ずくなの御不自由さこそいらせらるべく萬事こまかきを厭ひ給ふ御前樣が御面倒のほど推し上候不意におきたる走り使さへ無しと成りては不自由堪へがたきものに候をまして十年近うも御使ひ馴らし遊ばされお家の内こと〴〵く知り盡して御仰せは無くとも物とゝのひ行御氣樂の事成しを俄に居らず候ては御さしつかへいか計か候はん眞面目に努むる代りをとのお仰せ誠に當世の才はじけよりは少

し鈍に見え候とも其方はるかに御使ひよき者に候心がけおき然るべきものあらば直に御目見え致さすべく相知る人々にも頼み置候はん成るべく急々との御仰せ成れどさし當りの思ひよりも候はねばもし俄に人手も御入用なども候はゞ此方婢女どものうち何時にても御手傳ひにはさし出すべく御答をかねて右申上おき候御遠慮なしに仰せこし下され度候　かしこ

◎品物の借用をたのむ文

かね〴〵御心配いたゞきし良人こと病氣次第に快く家のうちだけは人手を借りずに歩かるゝやう相成候まゝ明日床あげの眞似事いたし御見舞給はりし御かた〴〵に心祝ひの赤の食參らせ度に候處こゝもと新世帯のまだ何も齊ひ申さで重などの用意も候はねばさして帛のふさはしきもなく如何せましと困り入候ほかならぬ御もと樣には平常家内のさまも打明け御聞願ひ居候なればお耻かしき事なれども御笑ひは下さるまじと存じ此品拜借願出候御ゆるし下さらば大助かりに御座候かさね〴〵我まゝを申やうに候へどいつぞや御煤とりの時參り合せ御道具の拜見ねがひし時これは次通りと仰せられしが如輪の御重あれをば拜借ねがはれまじきや御梨地のも御定紋つきも餘り御

美事に過ぎて却りて恐れ入るべく御帛これも上ならぬをと願上候猶々午後よりは誠に御親しき限り御招き申麁酒一つさし上度候間御夫婦樣とも御入下さらば辱く其願をも取そへてに御座候　かしこ

◎同じ返事

旦那さま御病氣いよ〳〵御快ういらせられ明日はお床あげ遊ばさるゝ由一時はいかにもお案じ申さるゝお容體に候ひしかど斯く速に御本復は全く御看護のお手厚きゆゑと失禮の申條ながら感心いたし居候なほ〳〵御輕はづみのなきやう御前樣に御如才はあるまじけれど譬へにもいふ老婆が心御聞き置き下さらば喜ばしく候重のことようぞ仰せこしなされ候御互ひ無きは無く有るは有ると打明が賴もしく然あらずは此方よりも願ひごとなど申がたく候定紋つきは好もしうも無きものゆゑさし出し候はず梨地のことはよしなき御憚りに候何れにても御遣ひ下さるべく仰せ遣はしの如輪杢と共に御使に持たせ上候此方隱宅のことなれば祝儀不祝儀いづれの事にも關係のなくて當時このやうの物入用に候はず唯藏の隅に押こめ置候のなれば强ちいそぎ御返しに及ばず御留おき相成りても苦しからず候明日の午後は何がしの歌會に是非出席の約束ありて

隱居は其方へ參り候まゝ私のみ御馳走いたゞきに出ぬべく萬事は其折申上候はん　かしこ

◎妹に意見をたのむ文

いと／＼恥かしきことに申上んも心ぐるしく言はざらんは彌々やる方なう候まゝ文にして御覽に入れ候こゝもと妹黑白かねても御存じいらせられ候ごとく私とは腹がはりの中にもあり平常何かと心おきがちに打とけぬ素振のかつはいむらしうも思はれ候へば父母なき後別して隔ての關をすゑ申さぬやう種々いひ數へもし諭しもして精々むつまじう成ぬべきやう心がけ居るに候へど更に其の甲斐見え申さず日一日とあやしう他人むきにのみ振舞候て悲しき事あれば獨り引籠りて歎きもし嬉しき折にもつひ笑顏といふもの見せ候はぬはいかなるにか唯一人の同胞に候へば私は我子と少しの變りもなく最愛しきものに思ひ居候なれど自ら私のおこなひに心づかぬ處などありて恨まするふしも候はんやさては亡き親たちに對し私すみ候はず知らせ給ふ如く取わき寵愛の子に候ひしを私代に成りてよりあらぬ拗強者などにも曲り行候はゞ罪はえのがるまじく候事にふれては心にかなはぬ次第とひ聞かばやと致し候へど口を閉ぢて何事もあ

かし申さず唯ひとり思ひてひとり歎く風情に候まゝ心に滿たぬは私行ひか良人の上か大方におし量りてはえ知れ候はず隨分こゝろづけ氣分に合ふやうと思ひ居り候なれど其原因わからねば直し處もなきやうにて眞に／＼困入候他人さまにも彼のごとく言葉ずくなに打ひそみてのみ居候なれど御もと樣には習字の御手本いたゞきて御直しを願ふほどの淺からぬ御緣も候へば常々御仰せばかりは守るべき存じ寄にもあるらしう遂に御言葉に背きしをも見候はねば彼の子が信じ參らする人御もと樣よりほかあらんとも思はれず御敎へによらば彼の心の底とけもやする若しは思ふ事の片はしなりとも言ひ洩らすやと此事願ひ上候餘人に聞かせなば物わらひなるべき家內の不和きこえさするも妹一人を空しうあらぬさまになさんが口惜しき故に候御廣やかなる御心にくまなく〳〵思し召やらせられ此うち妹參上の折に委しう御問聞き私こゝろのほども他處ながら思しやらせ給ふやうに御話し聞かせ下され度私願ひたりとなりては又心よからず思ふべきに候一重に御袖をのみたよりにして御縋り申上候　かしこ

○同じ返事

御文拜見御こゝろのほど推量り申候嘸かし御胸いたく候はんさりとも餘りに深くお

案じ遊ばされ御煩ひなどなきやうに願はしく候かゝる事の失敗より人の一生をあやしき物にさする事随分と世間にためし多く候よくぞ思し召つき此方には御仰せ下され候御意見申上るほどの事も出來申さぬながら御前樣御こゝろのほどは能く〳〵會得つき候まゝ充分黒白さまには御話し申上あの御娘が下におぼす處もあるべく候まゝ夫らつばらに承るべく尋常ならぬ節はたしかに相見え候へど然りとて御本性の曲れるにはいらせられず候へば今やがて直り給ふべくと存じ候此後お清書御持參の折朝のうちに御遣し下され度さらば人氣少なき處にてお話し申上るに都合よろしかるべく候　私の手のおよばざらんは知らず兎もあれ申上候はんと御返事のみ　かしこ

◉猫の子をもらひにやる文

今日學校にて伺ひしに御手飼の三毛あまた子を産み候よし勝れて容貌よき赤猫は御相續と仰せられたれば夫れは願ひも申上まじ悉く白うて尾と頭とに少し黒き處ある男猫の候とや私寵愛の玉をば隣の犬に噛まれしより以來あれに似かよひたる白きものあらばと望み居しに候まゝ御話し承りしより其猫のこと忘れがたう赤の他は他處へも御遣はし相成るべきやう仰せられしを嬉しくおしつけながら其猫が頂戴ねがひに出

し候かならず〳〵大事がり夜るも布團の上に寐かし申べく旨き物たべさせて光澤よき毛色を御目にかくるやう致すべく候前に申したる隣の犬は早くに行がた分らず成りて此頃は心安きに御座候まゝ何とぞ御ゆるし下され度御結納のしるし計粗末の鰹節一袋親猫たべ料にと進じ參らせ候御願ひまで　かしこ

◉同じ返事

御所望うけたまはり候只今表通りの米屋よりも貰ひ度よしにて人參りしかば何れにてもと答へたるに一應立歸り貰ひ主の娘と相談の上又出づべしとて門をくゞりしに行違へての御使いま少し遲からば止むを得ぬ御斷りもすべき處と一同顏を見合せ申候御叮嚀の御進物親猫いかに喜び候はん此猫君きのふ今日爪とぐことを覺え候て床柱にまれ襖にまれ厭ひなく突たて候間御用心遊ばされきびしく御躾け相成度儀のことにて何の用意もなく首玉の新らしきも何も飾らせ候ことかなはぬはさる方に御見ゆるし實家かたわるければと輕しめ給はざらんやう願度小ぬか三合にも足らぬ天木蓼の粉一袋を添へまゐらせ候幾久しう御面倒御覽下され度候　かしこ

◉種物配分をたのむ文

春の彼岸も今日よりと聞て俄に思ひ出文にて願ひ上候は去年の夏頃とも〳〵一夜の御無心申上つゆにぬれたる御垣根の朝がほ似ぬ物なしと拜見しつるが彼の御變り種いかにも面白くかゝるを作りて見度ものと申上しに種子は年ごとに納めて他處にも分るなれば何時にても取には來よ大かたは春の彼岸に種おろしするものと御教へさへ下されしかば其のちしば〳〵參上の折御配分ねがはんの心成しもあがれば何時も御はなしに紛れて遂ひ其事も打わすれ居り今日を彼岸と聞くより俄にそれよと思ひ出申候いささか御惠み下さらば辱く忘れて過ぎしを深からぬ志と思しめさんは恥かしけれど今美事に培ひて御入を待つやう致すべきに候二葉の頃より鉢に入れて養ひはいかなるとか仰せられし仄に覺えはあるやうなれど猶おぼろげに候まゝ久助さし出し候に付よく〳〵御聞かせ下され度合せて願上候手製の草餅これは彼岸の參らせものとも存せぬに候へば唯ありあひと思し召御茶うけになし下され度候　かしこ

◉同じ返事

忘れて過ぎしは私の罪に候よくぞ仰せこし給へる御使參らずば此處にも種おろしわすれて過ぎ候はんに御蔭さまにて取出され申候丸藥入れし袋のやうにて其上に色おゝ

び出まかせの名をしるし置候御蒔き遊ばされし處へ小さき札など御たて置き相成らばしかるべく扨その種おろし給ふべき土に仔細の候これは入谷の植木屋より聞たるにて年々試み居るに候今新らしう御こしらへ遊ばされしにては甲斐なかるべく當方かねて寒中より用意の分御座候間一鉢わけ參らせ候いづれ悉しく申上べく二葉の後のことゞもは久助どのに申置候間御聞相成度頂戴の草餅は御手製のよしなれば殊に有がたく賞翫いたすべく候御禮には一兩日うちにと先は御返事のみ　かしこ

◉娘の躾を人にたのむ文

日々御長閑に御暮しの御事御心廣さの夫故にはおはしまさんなれど羨ましき御身と存じられ候其御あたりの爽かなるには引かはり此方家のうちの喧しさ四季に絶えせぬ蟬の聲と主人は耳をふさぎて苦しがり候へど私一通りの制しなど何かは聞入れ候べき惡戯子供のしかも多人數にさへ候へばもて餘すことしば〳〵に御座候我子をわが手に躾くる事かなはでと思し召もお耻かしけれど是れは折入りてのお願ひに候御存じいらせられ候如く前後男ばかりの中に一人まうけし三番目の娘女らしき氣の少しもなうて飛びつ跳ねつの次第にはげしく昨日も見候へば大路を竹馬にてかけ廻り居候ひき

私の驚き御察し下され度何するぞと申つれば兄樣たちの軍ごとし給へば我れも其助けするのなりとて袂には小石あまた持居候定めし石打も致すのなるべく物は言はれで惘れはて申候弱としなれど十一にも成り候へば今少しの分別はあるべきに此れなればこそ人よりは變生男子の蔭口も申さるゝなれと熟々當惑の餘りきびしき小言も言ひしが前申通り男の中の一人女と申かつは氣がさものゝ負けじ心よりいつしか此樣にも成行しなるべくとても〳〵此中に交らせ置候ては女らしうならん事覺束なくと存じられかねての仰せに小娘一人御手もとに御しこみ御覽じ度と承りしに縋り參らせ萬一此樣の暴れものをも御手近におさし置き何くれの御面倒御覽じ給はるべきや誠に子を思ふ闇と申ことやう〳〵明らかに相成申候其昔しの私ならば心のまゝいかやうにも生たてよなど言ひ捨おくべきを左しも捨ておかれでの御願ひ思し汲ませ給はらば上もなさ喜びに候この事願ひに今日は參上せばやとせしを人參りて紛れ暮し子供學校より歸りなどし候へば遂ひ出る事かなはで文に成り申候失禮のだんおゆるし下され度候　かしこ

◉同じ返事

御文くり返し拜し參らせ御尤なる御縣念さもおはすべき事と推し上候さりながら幼なきほどの御いたづらは却りて御喜び申べき事もし御病氣などにもあらば如何にして其やうの烈しき遊びはなさるべき引かへての藥三昧などにもおはさば夫こそ御心配いか計に候はん殊に彼の御子樣は學校の御出來もよく御勉強はなされずして自然の御進みと承るに頼母しきこと一しほに候もし一つ重ぬるほどに女らしくは自ら相成る物この方とても覺えなきに候はず御手放し遊ばされ候ては御傍さびしく御戀しかるべきやしり候はねど思し召たゝれしを幸ひ此處に御預け下され候はゞ喜びてお世話申上度こゝろに候さりながら御存じいらせられ候如く御遠慮といふを知らぬ身なればやかましき小言などは申上べく夫等すべて御含み下され候はゞ何時にても此方は樂しみて待參らせ候いよ〳〵夫れと御決定にもならば一たび御目もじ萬事に御相談申上度御入のほど待上候　かしこ

◉書物の借用たのみの文

日々雨がちにて困り入候御母上樣御血の道など起らせ給はずや例もこのやうの空をなやましう思し召よしなれば如何にと御案じ申上候こゝもと父こと兎角目のなやみよ

ろしからず左りとて痛みもし候はねど物を見るに霧のかゝれる樣にて分明とし候はぬ由外出のかなはぬ上に目をつかふ事のならぬなれば一日の長き事十月のやうにて暮し詫び候樣子人さまにても御入下され候はゞ夫れに紛れて幾分おもしろげなる素振御座候へど然らでは一人居間にこもりて柱に寄りかゝれるまゝ物だに言はで傍より見る身も瘦せるやうに思はれ候此ほどより少しは慰みにもと存じ平常は餘り好み候はねど有合の小說などよみ聞かせ候處ことの外氣に入りて氣まゝ評など致しながら猶々めづらしきをと注文のいで申候さりながら私は御存じの通り彼のやうの物とんと不馴れにて此頃如何なる面白きもの出たりとも又は古きものにて如何なるが名高きか更に〳〵知り申さず同じうは氣にかなふやうなるを讀み聞かせ申度御前樣はもとよりのお好きの上御兄君さま御集めの數もいと多くと承り餘りに勝手がましう候へど務めて叮嚀に拜見致すべく候間思召にて此樣のをと御撰み拜借ねがはれ候はゞ辱く例の昔し氣質の父に候へば成るべく艶ならぬものが願はしく候御心安だての申條御見ゆるし下され度　かしこ

◉同じ返事

御使にての御狀拜見いと／＼安き御事この方手もとのにて御慰みにも相成らば上もなき喜びに御座候御仰せの通り御父上樣がお聞きに入れんには兄どもが撰みとも異なりて武張りし物など宜しくや候はん昔し今のを取そろへ品數十種とりあへず御使にお渡し申候誠に我れどもさへ紛るゝ方なき雨の日を御目のわるうて御引籠りいらせられ候はいか計の御難儀御傍にての御介抱も嘸かし御心ぐるしかるべきこと推し上候御醫者はたれに候ひけん餘り久しう同じさまにおはしまさば代へ試み給ふまじきや斯る事の御進めは申上がたきものなれどお案じ申され候まゝのすさび實は私兄の知人にて此ほど西洋より歸りたる醫學士の御座候眼科專門にて餘ほど熱心の人にもあり世間の評判も宜しき由に聞き居候まゝ若し御見せ遊ばすべくはと此旨申添候とかく御鬱ぎ勝なるべければ一兩日うちに御伺ひ替りし人の替りし話しをも聞かせまつらばと兄たち申居候私も參上致すべきを雨に降こめられて得も立出がたく御不沙汰申上候まゝ宜しう御傳へのほど願ひ度母は仰せ下され候通り例の持病にてかき籠り唯よろしくと申出候　かしこ

◉庭園の觀覽をこふとて人のもとに

一夜の雨より春の景色はやう／＼增り申候こゝなる垣のうちさへ櫻柳いろを作りて昨日かへりし蛙の子の小溝の流れに聲たつるも唯ならず候をまして吉野初瀨を一ところに集めまし松の木がくれ嵐山のおもかげもうつさせ給へば下ゆく水に大堰川の名おもしろう此ごろの朧月夜に舟うけ給ふらん新御殿の御庭のさま遙かに思ひやり參らせてあくがるゝ心とゞめ難く候まだ從二位樣御下屋敷と申さで亡せにし京屋が豪奢の庭に候ひし頃私はまだ蝶々髷も結ひ候はぬ振分髮の幼きほどに伯母なるものいさゝか彼方に緣の候ひしかば屢々伴はれて一夜を花のかげに明しつる事もあり月の殘れる朝ぼらけのほど彼の柴橋をふみ渡るとて轉びて落しおやまちも候すべて思ひ出ればさまざま忘れがたきかたみの場處に唯今御前樣御奉公遊ばされ朝夕に御たちならしいらせられ候御こと如何なる御緣と宿世あやしくさへ思はれ候ゆるしなき御垣のうちと思ひ絕え候はゞさてしも過ぬべきを若し御手びきにて昔しの夢をくり返すよしもあらばと此頃日々に思ひいで强ひたる願ひ申上候主人公がた渡らせ給はぬ御暇など御園よりの用事にても承り夫れをよすがに參上せば如何ならん御むづかしうは御竹むらの影計だに拜し度いかなる音にか鶯はなき候はんといと戀しうて　かしこ

◉同じ返事

御本邸に候ひし頃は何かと病みがちにて長くは御奉公つとまるまじとも存じつるを姫君様御供申上この新御殿にうつろひしより心かろらかに氣のさわやぎて昨日の我れにもあらず成しは一重に此御庭の賜物とひとりかしこまりて喜び居し處きのふの御文にてこま〴〵告げこさせ給つる御由緒げに思し召出ては御戀しさ如何なるべき其山のたゝずまひ水の流れも舊のまゝにはあらでさま〴〵作り改ためられ候へば御覧ずるままに御涙のたねならんも知らねど鹽がまのうら淋しき方にはあらで河原の院のすごげも無ければ一夜宿りにおはしませ御年若のやうにもなく御思ひやり深うおはす姫君なれば御文のやう斯く〳〵と聞え上しに本邸より御客なきほどは何時にても案内し參らせよ我れには憚らでといと心安う御ゆるしの御座候されば明日より三日のうちは御事なしの長閑に候まゝ御心次第御入相成るべく花ざかりに成り候はゞ又園遊會や何やと物うるさかるべきに同じうは此うちと待參らせ候　かしこ

◉留守中たのみの文

かねて御話し申上し大磯行明日よりと取きめ候まゝ留守中萬事ねがひし如く御取計

らひ置下され度弟竹三こと明後日までは留守致しくるゝつもりに候へど例の心輕う俄に何處へ參るべきや知れ候はず左なくも三日の後には學校はじまり寄宿舍の方へ歸るに候まゝ此人はとても當てになり候はず唯御前樣をのみ賴み入參らせ候此ほど仰せられしには私居らざらんほどに黴くさき物など引出し驚く計奇麗にしおきてなどの給ひしが夫れにては却りて恐入候まゝ唯こゝもとに御寢泊りなし下され老婢へのお指圖下さらば重疊かたじけなきに候御暇ごひに參上いろ／＼御願ひ申べきを友だち俄にいそがし參り明日の一番汽車にてと事忙がしうなり候まゝ例の旅なれぬものうろたへて心いられのみせられ候まゝ他ならぬ伯母樣に儀式たてゞもと我から理をこしらへ失禮至極の文にて願上候何も／＼よろしく御計らひ下され度候　かしこ

([illegible])同じ返事

明日の一番汽車にて立たるゝ由なれば今宵より參りてと心ならず候へど嫁が思はくも候まゝ御文見るより馳せ出ること少し憚かられ明日御立ちの後ゆる／＼とせしやうに參るべく候取ちらせし物の片付も何も私まゐらば悉くなすべきに夫等は打すて忘れ物のなきやう御心がけなさるべく途中は掏兒の用心專一に候汽車の昇り降りに足など

踏まるゝ事あらば懐中物に手をやり給へ束髪にてあるべければ簪の氣づかひは無けれ
ど時計も帯の奥深くにするか手提の中にして夫れをば膝ちかう引寄せおかるべく一人
旅ならでも汽車の中にて知人をこしらゆるは宜しからぬ事に候御逗留ながくは無きよ
しなれども成べく〳〵速かに御歸りのやう致し度たのまれ參らせたる留守居を厭ふに
はあらねど馴れぬ旅寐の案じらるゝ故に候あら〳〵　かしこ

◎俄に家を移せしを人につぐる文

箱庭のやうなりとて笑はせ給ひしもとの家は何がし博士の是非得まほしと申され候
まゝさながら讓りて一昨日よりこゝに暫時の假越し致し候かたつぶりだに家は出がた
きをと人に參られては其無造作を笑ひ給へど新らしき世帯の物もさのみは候はず車二
つ三つ手傳ひの男三人ばかり頼みしに事もなく此宿へと引移らせくれ申いつ釣りつら
ん厨に繪馬おく棚もあり荒神松のさばきまで知らぬ間に出來申候あるじは見馴れぬ住
家の旅にあるやうが面白しとて日々書筆もちては庭のさまなどうつし居候この前居し
家は無風流にてをかしげなしと其旦那さまあなづり給ひしが此度のは雅に過ぎてゐす
人の用心いかなるべき垣は名のみに大路よりさし覗き候はゞ池の蘆間に月のすみかも

あらはにや候はん晝は八重もぐらのむさ〳〵と又御物わらひに成らんも口をしければ物のはえある夜に入り露おくころに御入願へとあるじよりの申つけに候隣に横笛の上手ありて月にすみのぼる音を二夜まで聞き申候これをば御もてなしの一つにして必らす必らずと奉侍候　かしこ

●同じ返事

おもひの家ともいふ物をいかで輕らかには思し召給ふらん今人より聞き候へば御約束なりて三日の後には御引移りなりしよし行とまるをばとつね〳〵の御詞げに御心なりけりと驚かれ申候御庭にしげる八重もぐらは蟲の音きかんの御料なるべけれど池の水草月にはかきやらせ給ひてや態とあれさせても御覽ぜまほしき御垣根のもとより朽ちたるは御本望さぞかしと例の山烏に似たりし此庭のあるじ申候今宵の月に雲もなく家にさはりの客も候はずば必らず御門たゝくべきに宜しう申上よとに候御こたへのみかしこ

●親の病氣を田舍の妹につぐる文

さしいそぎ申上候土地隔たり居候へば何かと御心がゝり御案じ下され候中へ宜から

ぬ事ども御聞に入れんも心ぐるしく大方ならば申出ずして過ぎぬべき家内の相談なりしかども實は父上樣こと先月の末つかたより御發病御身のうち悉く痿痺しやうにて御自由の利き給はず御寢がへりもかなひ候はぬは中風のたぐひと醫者も首をかたげ申候つね〴〵大酒遊ばされ御身の健かを御自慢に過ぎさせ給ひし年月のつもりかと母上はじめ兄弟一同かなしみ此事に候容體申上候はゞ親おもひのお前樣かならず急ぎ御立越し遊ばされ度御望みにて其地舅御樣がた御機嫌も御はかりなく御良人の思召にも違ひ唯一筋に振舞はれ候はゞ相成るまじきこと事情こまかにお話し息あるうちに一度は逢はせまし度此方ねがひも取かさね御物がたり遊ばされさて御免し出なば急ぎ御立こし下され度旦那樣への文一通これは母上より參らせ候御容體さは申せども御口の廻らぬと御身の自由かなはぬばかり御氣分はたしかに候間急々の事などは無かるべく御驚きの餘りかへりて病氣など引出され候ては相成らず此段申添へ候　かしこ

◉同じ返事

父上樣御病氣の御報うけたまはりて驚き入候さる事とも存じ寄らねば餘り久々御無沙汰申上居候御詫びかた〴〵此地名產の雲丹少々小包便にてさし出したるは昨日に御

座候誠は晩酌の御膳の上にもと存じたるなれど其御酒こそは御病ひの原因なれと承るに堪へがたき心地いたされ候母樣よりの御文良人も拜見こなた兩親とも〲に驚きおもひて外ならぬ御大病の御枕もとに附そひ御看護申上るは子の役なるにいさゝかの猶豫も入らず直樣出立いたすやう願はずしての許しは出で申候さりながら此家弟六四郎どの背のわきに怪しき腫物の出來候を何とも知らで過ぎ居し處次第に氣分ふさぎて顏の色わるく如何にもいぶかしう思はれ候まゝ今朝市中に御座候病院へ良人伴ひ參り診察をうけ候處癰とか申て容易ならぬ病ひの由けふは連れ歸り候へど自宅にてはとても療治のかなふまじければ今宵にも入院いたさせ手術行ひ貰ふべくと取々評議中に御座候まゝ心は二つに一つの身を歎かはしく良人はじめ兩親も出立をいそがせ候へどこれが入院するまではと無情づくりて立とゞまり居候おそくも明日の夜か明後日は早朝旅路にのぼるべく如何にも不孝の罪深う候へど文計を先に奉りて身はおくれ申候　かしこ

◉雇人の逃亡を人に告る文

まづ御聞きに入れおかばやと文さしいそぎ參らせ候かね〲御贔負下されしこゝも

と手代久助こと一昨日の午後より御得意先の懸金頂戴にとさし出し候處その夜に入りても歸り申さず尤かねぐ〜耳に入りし怪しき噂は候へど遂ひにこれまで目にたつやうの不都合をせし事もなく候へば大かたは見ゆるし置しに候を誠に困り入りしことゝ其夜はさて明しよもや昨日の朝こそはと存じたるに猶おともなくて晝過ぎに成り申候知らせ給ふ如く多くの雇人もめしつかひ居候に彼の男さきに立ちて斯る不出來しいたし候ては他々のしめしにも相成らずと存じこれは密かにことをまうけて內々に取はからふ仕様をと番頭の忠七に委細申ふくめ例まゐるよしの釜屋がもとまで車はしらせ候處こゝには絶えて影も見せ候はぬとか忠七いろ〜と問ひ聞きも致したる由なれど疑ふべきふしも無ければ其車にて御得意先のり廻らし夫れとなく模様うかゞひしに懸金はこと〴〵く取集めさて何方へか參りたるに相違なき體とおどろきながら立歸りて告げ申候受人の□とにも忠七つかはし彼れこれ調べ見候へど實眞なる人にて僞りをいふべきにもあらねば知らぬと申すは何處までも知らぬに相違なかるべく心一つに身をかくしたる事疑ひなき次第今さらながら人心のかはり安きに口ふさがれ申さず飼犬に何とやら申候如くこゝもと長年の馴染にもあり唯我子のやうに存じたりしを金子持しより

の出來心か夫れともかねての存じ寄など候ひしか其ほども判らずひたすら疑がはしう思はれ候さりながら若氣の無分別に行先もなき事仕出し申結局は身の振かたなくて淺ましき事などに相成らば如何にも〱いたましき事罪は罪として其こと心がゝりに候まゝ萬一平常の御懇をたよりて行かたなしに御袖などへも縋りより詫言の御執なしなど願ひに出候はゞ御引とめ置御意見おほせつかはされさて私宅へ御使ひ給はり度さすれば忠七こと迎ひに參りて底なしに連れ戻すべく此度のあやまちは御座候へどこれまでの勤め振萬々此方は決して見限り申まじく此れほどの事にて人一人すて物にするはしのばれ申さず候まゝ未だ下々には事體一向に聞かせ申さず委しく知れるは番頭と私ばかり良人は知りて知らぬ顏もいたすべく候まゝ其邊御ふくみ萬一參上も致したらば心得違へなきやうに御申きけ願度三歳兒にもあらぬ人並の男が爲し業なれば思ふ處なきにもあらざるべく何時まで此地にさまよふやうの不覺ものには候はずと忠七申候へど私は猶肩揚の昔を忘れず小さき小供のやう存じられ候まゝいかにも〱案じられ御聞とりによりては御怒りにも觸れぬべきを憚りあへず此願ひ申上置候親の心子しらずにはあらで年月つかはれし主が心を存じもせで脇道にまぎれ入し困りものが在處御聞

こみも候はゞ然るべきやう御はからひ下され度くれ〴〵の願ひに御座候　かしこ

◉同じ返事

久助どの心得ちがひ致し行方わからぬよしの御文こゝにも拝見して驚き入候あの實體に心やさしき人のいかにして其やうな事をと實しうも存じられず他人なれば至極の不都合と一口に申落すべきなれど如何なる魔のみいりてかと打歎かれ申候何れ仔細なきには候はじ手筋こまかに御糺し遊ばされなば何方にかくろひて何方に罷こしたるとか事分明いたすべく日ごろの馴染も候ことなり萬一尋ね參らるゝやうならば猶更さらでもより〳〵に心がけ在處聞こむ樣の事あらば直に御耳に入れ表向ならで事相すむやう致し度おもへば長年の辛抱此事一つにて消えなんを歎かはしう思し召此方まで御懇の御狀御つかはしの御心底はゞかりながら涙こぼれて感じ入り申候何事もおだやかに人目にたつまじう御振舞の義一しほと存じ私は別して參上も致すまじく一向心がけ見出しかたはつとむべく候　かしこ

◉愛犬の行衛なく成しを友につぐる文

いと淺ましき事の候を御聞き下され度候きのふの夕がた私方かひ犬の赤こと聾の

ほど暑さにくるしみしを取かへすやうもやと湯に入れ候てさて心地よげに狂ひ居候を供につれ例の勸工場まで納涼ながら兄たち私ども四五人に一遊びに參りし處横町に柳の木のたけ高きがある門構への家の候を御存じもやあの邸内より耳のたれし大いなる黑犬かけ出でゝ一聲たかくうなりかゝり候處此方赤犬なりの小さきに似ず氣のつよう候まゝ走りかゝりて咽喉をとねらひ申候兄達はいつもの通り面白がりて赤よ負くるなゝど言ひ候ひしが私は物の恐ろしう彼の大なる犬とこれがすまふは不器用の私が繻子の袴ぬはんとするより六づかしきこと如何にも力足るまじきことゝ制しつれども重なる兄たち聞き入れ候はねばまして赤犬とびかゝりては哮えたて〳〵いつしか横町より大通へと追出で申候折から地藏樣御緣日の植木屋多く出で並び候中を二つの犬どものがれつ追ひつして呼ぶをも聞かず止むるをも耳には更に入れぬと覺しく早足の兄たち其處此處追ひありき候ひしかど適はで遂ひに見うしなひ候されども平常物よく敎へおき家への道など分明に知り居り候ものなればよも迷ひ犬にはなるまじきに心安う立歸れど人々にいさめられ私は心がゝりの事言ふ計なけれど詮方なく其まゝ連れられて戾り候。處それを限りに影みえ候はず昨夜は寐もせず耳をたてつゝもし歸り來るかと雨

戸のかけがね幾度はづして見候ひけん遂には覺束なくて明け渡りしかば萬一道より横の古井戸などに轉び落そのまゝに成しやうの事ならずやと今朝下男うながして探させに出し候處其様のけはいも無かりし由申歸り參り候いかに致したるや命だにあらば道迷ふべきにも候はず萬一人にでも盗まれしならばいかにせんとて連れ行つらん首輪かけさせて鮮かに主の名しらせ置たるなればよも打ころされはすまじと思へど如何にも物の案じられ候まゝ今人はしらせて三つ四つの新聞に在處やしるゝと廣告出させ申候折ふしの使ひいとよく仕候て御わたりに文奉らんとする時など帛につゝみて何時も首にさせつるを今日は郵便にてさし出し候こと何となく心淋しく候うさの紛るゝ方なく斯る事ども書ちらし參らするを物ぐるほしとも思し召さんや御わたりの諸君さまにも別して告げ聞え給ふな　かしこ

◉同じ返事

翁丸がやうに罪ありて追放されしさへ行衛なう成たるは憐なるべきを彼の愛らしうて物能く聞わけし赤犬のその影見えぬはいか計御心うかるべき彼の御郵便手に入し時封じ目ときてまだ末までも讀あへぬほどに私宿の裏手なる竹藪の方に犬のこゑおど

ろおどろしく多くの犬ども哮立る中に弱りしやうの聲の交れるを聞くと其まゝ御文披うちて思はず庭口よりかけ出し申候處それは隣家の飼犬にて私大嫌ひの斑毛の雄犬いやしきものにて塵塚さがしあるきては得物を何時も宿なしのと取あらさふに御座候いかにして此犬が聲を赤の聲とは聞違へけん思へば御前樣が夜もすがら御雨戸あけたておはしましたること御無理ならず存じられ候仰せの通り首輪かけさせ置き給へれば打ころさるゝ憂ひもなかるべきを如何さまにし候ひけん見るより可愛さの堪へがたく人知らぬ間に搔き抱きもて行かれしならば御惜しき事はもとよりなれど猶榮耀をばのがるまじく蒲團の上などに据へられて魚そへし膳にや飽かんとすらん何も今しばし立たばおのづからの在處知れざる事も候はじ此方ことも出入の車宿に申つけ若者ども何方へ參りし道にても斯る犬見出たらば連れ來るやう御褒美は何れ莫大にと此やうに申置候　かしこ

◉病氣本復をしらする文

母こと病中は御心にかけさせられ度々の御見舞有がたく老年の事にもあり如何にもさしこみ烈しく候間斯くては所詮おぼつかなくやと親類一同たのみの綱も半きれ居り

候處人のすゝめに依り世間に名はなき人に候へど何がしと申す醫師に診察をこひ藥をもらふやう相成しより不思議に胸の痛みも薄らぎ一日〳〵目にたちて快方に趣き候誠に人は天壽に候ものから病ひに醫者は選ぶべきこと此度のしるしにて發明いたされ申候まだ床には居り候へど手廻りの用もたり起ふし自由に相成しはもはや本復と申すにさしつかへなかるべく祝ひといふもかた計の赤の飯のみなれど御心づかひ頂きし方々樣に御禮も申上度候まゝ明日の午後こゝに御車よせ給はらばかたじけなく呉々も奉待候　かしこ

◉同じ返事

御母上樣御全快の御祝ひにとて明日の御招きおほせつかはされ御嬉しき事は更にも言はずひたすら御前樣の御孝心に感じ入申候今こそ御話しにもつかまつれ一時は唯々御病人の御顏と御前樣のとを見くらべて物もいはれず打泣かれ申候ひき誰れも〳〵御本復あらんとは思ひもかけず大切の御方を空しう見なし參らせなば殘らせ給へる御前樣が御歎き夫れをば殊に御案じ申たるに候霜こほる寒の夜中御うらの井戸の水あびてまでも思しめす御孝行も彼の御容體にてはと首かたげられ御病人はもとより御上いた

はしき事に存じ候ひしされども夫れは凡なる我々がおし量りにて何がし氏とやらん逢ひに今まで聞えも無かりし御醫者のよろしき藥とゝのへ參らせ日々薄紙をはぐやうにと承るは一重に御孝のいたす處人の力ならぬやうに思はれ申候明日の御むしろには何を置きても連なり度午後よりかならず參上致すべく候間御配膳の役にてもつとめさせ頂き度内輪の方に御さしおき下され度候　かしこ

◉着京のしらせを故郷の親に

今四日午後三時この地に事なく着き申候御申ふくめの通り停車場より車をやとひ此處の伯母様が御もとまで時の間に飛ばせ參りいさゝかもまごつく樣の事はなく候ひしまゝ御安心下され度候土産の品々伯母様大よろこび遊ばされ何々は如何にしても國元のこそよけれ東京にもおもかげうつしたるが無きにはあらねど味ひ格別にかはりて斯くは甘からずと一人引よせてめしあがられ候この地着の御報とく〳〵參らせよと促がし立て給ひ一人娘の一人旅をはじめてさせたる親心其方が思ふやうの物にはあらで此方の空のみ打ながめ物案じに日を送るべきなれば一時の延びは一時の不孝ぞと仰せられ候此卷紙も封筒も伯母様給はりてのに御座候私はまだ行李も解きあへずそれが麻繩

ゆるめんとて小刀もとめ候ひし處此子は何事せんとするぞ文かく紙は此宿にもある物を他人行儀うちすてよとて御机の引出しより此紙をば取いださせ給ひ御みづから墨おしすり給ひて此地にあるうちは我家の子ぞ隔て心もつなとて左もなつかしげに仰せられ候御寫眞にて見しとは異なり御言語はさながらの母様に御座候はじめて見し従兄弟たち何れも好き子好き人にて彼れこれと世話致しくれ是れより入るべき學校の事など心配致しくれ申候誠に私などは井の内の蛙にて候ひし此處に參りて従兄弟たちが物がたり聞き候に何れもおびたゞしき怜悧ものにて何事も能く存じ居り私よりはるか年の行かぬ人などにても學問は餘ほど上かと思はれ候東京の人はすべてが此やうに怜悧ものなるにや但しは伯母様御子たち計とりわきての發明かは知り候はねど兎に角今迄とは心得かた改め候て充分勉強候上態々此地に御出し下されし御恩報じも致すべく今又ゆる／＼文さし上候はんなれど無事着の御しらせ旁けふの思ふ事をしたゝめ申候近邊の御友だちへもやがて文出すべく候へど若し尋ねに來る人候はゞ事なく着し由御はなし下され度候はなむけ給はりし方々へも宜しう御傳へ願上候　かしこ

◉同じ返事

百里の道も下駄ばきにてと聞く此頃もはや牛馬にも踏まるまじき成人のそもじを手放したりとて心がゝりも無かるべき筈ながら年月手もとに置馴れて逢ひに一夜の泊り客にも遣はさゞりしその餘波かたはら淋しくて夜も寐かね候ひき無事着の文ひらき見て大きに安心致し候其地姉上は此方氣だてとも異なり萬事に拔目なくていたり深く親切は無類の人に候へども氣短かく怒り安き癖御座候間かねても申つる如く其もじが心をねりさへせば是れ一つの修業にて身の大藥に成るべく候從兄弟たちには心安う交はりて田舍ものゝ偏屈など言はれぬやう心がけ給ふべくさりとて打とけの過ぎて喧嘩など始まるやうにては長く同居かなふまじければ總てに思案して振舞はるべく候父上申され候に都は華美を尊ぶならはし定めし伯母がもとの人々も華奢風流の稽古ごとなど數々致し居らるべけれど行々田舍に歸りて聟とりすべき者が琴胡弓まで習はでも事すむべきに若し其やうの勸めあらば夫れは斷りに致し申やうくれ〴〵の仰せつけに候夜るのもの一通り及び糸の入りし着物三枚汽車の荷物にして送り候落手相成るべくそもじ出京のさまを見しより隣家の娘も俄に羨しう相成しとおぼしく近々立出申よし此子若しも其地に參るやう相成らば其時又も文さし出すべく此度はこれにてとゞめ申候

かしこ

◉家を賣らんといふ人の老婢がもとに

昨日御垣のそとより御庭の面さしのぞきながら伺ふ事もせず行過しを御存じありしやいたくゝ荒れ增り給へるかなよも彼れほどにはとおもひ居候ひしに實に御心細くも思し召給ふべき御事よそながらも袖ぬれ渡り申候御門をばくゞりてとも存じたるなれど主人の君に御目通りせんこといかにも心ぐるしく申わけなしとは知りつゝ其まゝ行過ぎたるに御座候折からの秋風に御障子の紙のやれたるがいとゞしう音たてぬべく表より見入れのあらはなれば御隱れ處なく覺えられ候て例の物やさしう耻かしげにおはしまし候奥方の御心地おもひやり參らするに物も言はれ候はず然る中に明くれの御慰めとも力草ともなされ給ふなる御もと樣が御心配り如何ばかりにか此ほどの給ひおこせ給へる御家のこと彌々手ばなし給はでは御事かなふまじきにや差いそぎ思し召さば今の世の人心弱きを助くるもなき頃にて玉を瓦といひ落しおのが利をのみ計り申べくまして世話人など言ふが手にかけ給はゞいとゞ淺ましく憎き事をぞ仕出候はん私もさまざま考へ候てよき人あらば申談じもと心がけ候へど偖此人にはと打明け言はんも無

きものにて思案に餘り申候悴こと今少しをとなびて世の用ゐある身にも候はゞ人手をからん迄でもなく御爲よろしかるべきことはからひ出候はんなれど此ほど打明け給ひしやうの御財政いかにも御はでやか成し御餘波御つくろひ物も我どちの少々なるにて事濟むべきに候はねば此處なる小悴が瘦せ腕の何とかはし候はん唯打寄り御噂申上打なげくのみに御座候さりとて他處にはいかで見候はん殿樣おはしましゝ世には淺からぬ御最負給はりて亡き良人など御助けに預りし事數しれず候を及はずとても今日の御身の上なる限りの御力添へ申度心をくだき居るに候私しれる人の中に昔しはさも無かりしを今は北陸あたりに聞ゆる財產家に成りて今年あたらしう多額納稅の貴族院にのぼられし人此十一月末つかた議員招集の前までには必らず上京致さるゝが候此人少しく俠氣にて賴まれごとなどあとへは引かじと言ふ抔にて候ひし今はた如何候はんや兩三年前見たりし時も若かりしに變らず涕もろにて候ひしかば參られなば御上よく語りて御家引渡し給はん後小さやかなるになりとも引こもらせおはしまし御手すさび成し編物の教授にても遊ばされ兎もあれ御長閑に世を過し給はんほどの料とゝのへ出すやう致し度此ほど承り候へば唯今にも御ゆづり遊し度おぼし召し伺ひしがさては如

何にしても御得策におはすまじく返す〴〵失禮の事のみ取並べ候へど萬一此一月ばかりがほど待おはしまさんに御差つかへの事なども候はゞ夫れほどは如何さまにも仕り候はん例の昔しながらの大やうに馴れさせ給へるを我どちが打とけ言かくと聞せまつらば失禮にも思し召されんに言よく取つくろひおはしまし此旨御聞きに入れ給はるまじきや何も同じ心に胸いたう存じられ候まゝ淺はかならん智慧をも顧みず御もと樣まで參らするに候　あなかしこ

◉同じ返事

きのふ御覽じ過ぎさせ給へりとや然らば事新らしう申さんも煩はしかるべけれど御返し認めんとの筆とり候へば涙たゞこぼれにこぼれて此あたりのさまをおもひ遣り給ふならん人に知られまつり度暫時の憂さを言ひもらさんとに候御文にも仰せ給へる如く奥庭の垣根など淺ましく破れ候に私田舍より弟參りし時ともかくも繕へよと申つけしに此男不器用にて御覽じつる如くまばらの結ひざま大路より御軒端まであらはなるを口惜しく御障子の際の屏風引たてゝおき申候さるは南向きにていと暖かなれば奥樣つね〴〵かしこの御部屋に縫物そのほか取ちらしおはしますなるを人の見候はんも

今は厭ひあへぬ頃に候へど昔しながらの私何か勿體なき心地いたされ候てのすさび人聞かば笑ひぬべく候御前樣にも御笑ひ遊ばさるべきか此樣なる昔しものゝ御附添ひ申候て事大層にのみ仕りたれば今の世のさまは彌々暗うおはしまし斯くやる方なき迄落ちおはしまさせつる半は私いたしたる罪に候此ほど御もと樣たづね參らするまでは何事も胸一つにくるしみて老ては萬に物の理解うとく候をいよ／＼惑ひては子供にも劣り申候寐ぬ夜の床のまぼろしに昔しをさながら先殿樣が御若衆姿にて黑羽二重の御振袖繻子の御袴優におはしまし御乘馬の御稽古あそばすを見る時もあり奥樣はまだ姫樣と申上候て御兒髷のうつくしう絞りの襷花やかに勇ましうて長刀つかひ給ふと見る時もあり驚きさめ候ては今の御さま如何さまにつかまつらんと俄に胸の轟くやうなるを長くは思案もするに堪へ候はず寐るやうに覺るやうに覺束なくて夜を明す折しば／＼に候ひしかゝる甲斐なき老人をば賴み處に思しめされ候ほどの奥樣なれば萬事おしはかり憐み給はらばや舊き御よしみなど縋り寄り宜しき事ならば知らず斯る末を御覽に入れんこと御主の御爲申わけなき事に候へど他人ならねばと打あけ賴み參らするに候さても昨日の御文よ御心ざし深うさま／＼思し召よられたること身の嬉しさは更にも

申さす奥様にも唯涙にて候ひきいかさまにも〳〵一向打たのみ聞え申候御料のことなどかねて申しゝ六づかしき物やり拂ふだけかなひ候はゞ其餘はさまでの望みもなくまだ殘れる御道具なども候をさゝやかなる處へ引こもらせ給はん後まで蒔繪の物の散ばふも見ぐるしかるべく夫れ等とり添へて悉く新らしき世を迎へさせ參らせん心に御座候すべて御はからひを奉待候　かしこ

◎友の驕奢をいさむる文

此春花ざかりに御宴會御催しの由にて態々御人下されしかど思ふ事ありて參上致さず猶御舟遊びや何やと御趣向御こらし遊ばされ人目を驚かす計の御事ども招かれ參らするは嬉しきやうなれど私は更に御同意申がたく候去歳までは日ごとの樣に參上今日は參らすべき御馳走のなければ夕飯あがらで歸り給へなど仰せられ候を押かへして我まゝを申張り御飯櫃みづから取おろし御母樣の御小言きゝながら箸を取し事も御座候あの折給はりし御湯づけの結構成しこと今御前樣が八百善や何やと御取ならべ御馳走下され候に增りていか計の高味にか候ひけん私うち絕えて參上申さぬこと少しは御心にかゝりて何故の不沙汰など思しめぐらさるゝ事候や但しは忘れて過ごさせ給ふや何

方にてもよし私は中ほどの事申さばやとに御座候おもへば御上様おはしまし〻頃の御家のさまは誠に世間の手本とおぼえて私などは御近づきにてあるをさへ身のほまれと思ふばかり人にも語りて自慢いたしたるに候さるを唯の一年まだ指をれば三百六十とまでも參らぬ今日此頃朝夕の御振舞何ごとに候ぞや必竟はお前様まだ世の事を何も御存じなく人の賞むるは宜き事と思し召陰にてのそしりに御心づかれぬよりの過ち御姿は派手を専らにと遊ばされ今更の御島田髷を人は三十振袖など申候ぞかし一昨日こなた縁類の物歌舞伎座見物に參りし處高土間五つ取拂はせ御家の一まき全盛の見やう遊ばされ殊に目立しは御前様が御姿なれば近江屋の御家様が御形見かと昨日こ〻もとへ參りて逐一かたり聞かせ候御母様おはし〻世には芝居は春秋二度の御見物それも質素に平土間をお取り遊ばされ御か〻りは大方の定めおはしましたる事いつも御一處にて

私知り居候よしや金藏にうなり聲きこえて土臺石に金剛石を据へ置くほどの身代なりとも能なき驕りの末榮えしは聞き候はず此邊おぼしめし廻らされ御身持御堅固に昔の御前様に御立かへりのやう願度御傍に番頭どのも御女中頭の富士も附そひ居ながらこれを止め參らせぬは此方いかにも不審しく存じられ候打たえ參上も申上ぬは私の心

かはれるにはあらで御あたりの有様いかにしても拜見するに忍ばれ申さず夫故にこそ斯く御不沙汰も致し居候へど心は常に御上をのみ案じ思はれ今日は如何に暮させ給ふとも昨日の御樣子は斯く成しなど逐一聞こみ居申候筆よりは口にてと存じ候へど又藝人などあまた候て生をかしかるべき折ふし苦きこと申出さんも如何とさしひかへ文して御覽に入れ候まだ申上度こと數多く候へど此方は一々御身の上を詮義だてして證據とりならべ候とも何にかはせん唯もとよりの仲よし成し御前樣が世のもの笑ひに成りなんこと口惜しく唯それればかり申上度に候人に物いはれて行ひを改たむるなどいふ事大嫌ひの御性分とは昔しより知り居候御怒りに觸れなば私は此まゝ御目にかゝる事をなすまじく一生憎くまれ參らするともいさゝか恨みに思ふまじく候まゝ御心一つに思しめしかへされしになして何とぞ御家業御出精かげ指さゝれぬやうなし下され度祈居候　かしこ

◎離緣を乞はんといふ人に

唯今寺參りより歸りて娘に聞き候へば先ほど御前樣御入りにてしかじか御物がたりの由おもひ寄らぬ事にて驚き入申候もはや御子達も御大勢いらせられ今更はづかしき

事など起り給ふべきにも候はず内輪のもめといふは池の面の小波に同じく絶えずありとは見ゆれど大した物にはこれなく候なるほど其始の御中にくらべ給はゞ御無理も仰せられ我まゝの御小言など面白からぬ御事まじらせ給ふべく候へどそは自然の御心安だて隔てぬよりの打とけにて深くは御心にも止め給はぬが宜しかるべく候旦那さま御事此頃打しきり御酒めし上り御氣のあら／＼しうて外出がちにと御申の由かゝる折ふし御前樣より丸からぬ事おほせ出され候はゞ御事破れていかさまにか成ぬべき古りぬることとなれど覆せし水は器にかへらず又の御戻り六づかしくば御子たちを如何にせんと思し召すらんもとより相生の松は名のみに夫婦は離れものゝ縁たえ候はゞ夫れ限りに相成るべく誰れもよく申こと彼の時何として彼のやうの短氣なりしか左まで怒らでも事に濟みしをと後々の悔おそろしく候此方媒妁人の身の上なれば片手落にて御前樣ばかりわろしといふには候はず唯女同士の打とけ言一割損のものとおぼし召御辛棒專一に候まだ／＼御わたりは御かけ向ひにて御姑御樣もいらせられねば何事も御氣樂なるに候此方長年の辛苦それは隨分と話しの種のやうな辛きおもひさま／＼致し候へどさて過せば過さるゝものゝ今此やうの老婆に成りて子供達に面倒見らるゝこと其頃の

取かへしに御座候何事も御子達に思しめしかへされ一旦の御はやり氣に御無用に遊ばさるゝやう致し度今娘より話し聞き候まゝ取あへず此文をば參らせ候何れ御まゐあたり何も申上べく呉々けふ仰せ置のやうなるは何時にても御申出かなふべく早まりたる事は取返しつき申さず候　かしこ

◉同じ返事

よしなき事を申出御心配を相かけ候事お恥かしう存じ候おふせの通心安だての我まゝより人の親にもなれる身にて子供のやうなる理由もなき事仕出し候先刻あがりし時御留守にて候ひしまゝ申上でも歸らんかと存じつれど猶胸のもやうやと遣る方なく候まゝ御娘御樣に始終御はなし申たれば夫れは心得違ひと彼のお子よりも御意見おほせられ候今更考へ候へば埒もなき事ども眞にあと先そろはぬ一端氣の立歸りては身ながらも思案のほど判りかね申候今御詫びの文さし出さんと思ひし處へ御案じ下されての御郵便いよ／＼恐れ入て身の縮むやうに候おほせの通りこぼしゝ水は舊に戻らず再度此家に歸られぬやうならば此子達をも見る事かなはで情なかるべき事おもへば身の毛だち申候もはや彼のやうの事は申すまじく候まゝ何とぞ／＼里方兩親にも此樣の事

ども御內聞になし置下され度入らぬ心配をかけ候も心ぐるしきなり二つには弟樣などに私所存見おとされんも耻かしく候御詫びには何れ近日うかゞふべく御禮ながら最早あるまじき考へなどは持居らず候を御知らせ申上度あら／＼に御座候　かしこ

●友の不養生をいさむる文

昨夜も更るまで御書見遊ばされしと覺しく此方二階のまどより見おろし候へば川を隔てゝ例の柳がくれに御軒のともし火あざやかに見え候ひき大かたの世の人は花よ蝶よとうかれ立なる此頃の空に猶御引こもりの御勉强はたゆみなき御心のほどあらはれてさればこその御進みと賴もしう存じられ候ものから餘の人ともことなる弱々しき御身にて晝はひねもす夜は又更るまで休みもなき御勤めは上もなき御不養生に御座候此ほど承れば其處ともなしに御眼のわるくて細かき文字など書かせ給ふに苦しき由さるを猶ともし火のもとに御本よみ給ふなり御筆とりたまふなり何れにもせよ昨夜のやうな御夜更しなされ候ては容易ならぬ大事にも相成るべく御熱心はさることながら御身の上をも御厭ひのやう致し度何事遊ばさるゝも身と心とのたしかならでは能はぬ事よろづ氣ながに思し召さるゝが然かるべく候私のは試驗前のせん方なきにて珍らしく

昨夜おそくまで物など調べ居り夫れにて御燈火見出たるに候あの夜ふかくに誰れか起居る者の候べき岸の柳の風になびきて其御ともし火の見えかくれするさま唯ならば書によく似たるともいひもすべきを私はたゞ心がゝりにて打ながめ居候ひき今朝はしを渡りて御面かげ見んと思ひしを少し寝おくれて學校への時おそなはり候まゝ今思ふことを今申上ざらんは口おしく文にして男にもたせ上候御兩親樣御兄弟のなかにも御上案じて心をいたむる者ありとおぼしめし御用心下され候やう願度かいつまみて　かしこ

◉同じ返事

かけ違ひて昨日も今日も御目にかゝらず御返事口にてと思へど甲斐のなければ筆にして御机の上に殘し置候まことに御親切の御いさめ私身をおぼしめし給はればこそと辱なさに御文さゝげもちて拜し候かねての御敎へも候へば私我まゝの夜ふかし致すにはあらねど何故となく夜の寝がたくて床に入れども思ふ事さま〳〵沸き出でかへりて胸ぐるしく候まゝ遂ひ〳〵燈火かゝげては用もなき書物とり散らしなど必竟は病ひの業に御座候はんこれよりは務めて外出も致し氣の晴やかに相成るやう心がけ申べ

く今すこやかの身に成りて御心づかひ頂きし御恩報じ致すべく候御案じ下されし眼のなやみは最早大かた快く候まゝ引つゞき養生さへせば仔細なくなほり候はんに御安心のほど願度候御試驗中は何かと御忙しく打とけ御物がたり致すべき間も候はじ御滯なく御すませの後一日都のほかにも遊びて御話しさま〴〵致し度それのみ待わたり候かしこ

◎退校せんといふ友を諫むる文

いづこも同じ秋の夕べを何こと更には思し歎かせ給ふらん折角これまで御はげみの學校のこと謂れもなく御やめ遊ばさるゝ御心のよしさりとは此方うけ難き事に候尤上級生のたれかれ御上を妬みて宜からぬ構造言など申觸らし御迷惑かくる由はかねがね知り居候へどこれとても何計のことか候はん夕べの月に雲はありとも晴るればもとの光に御座候すべてに御耳を遠く遊ばされさまでは物ごと氣にかけ給はず萬事をすてて過ぎおはしませ彼の學校の人々おもしろからずとて又よそほかに移り給はんとも悉く御氣にあふやうなるは稀なるべく友を撰ぶとて友探しに世を盡すやうの怪しきことにもいたりなば態々都へ出おはしたる本の御心たがふべくや私御世話いたしたるなれ

ばとて理を非にしてもと申すには候はず大凡半としがほどの御馴染に校長が氣風敎頭が品行などは御のみ込みには候はん彼の人々に點うつべき處なく正しき導きをだに遊ばされなば其餘の雜事はいかやうにも忍ばせられ唯一筋に學び給ひて御歸鄕の一時も早からんやう思したらば更に仔細なくや候はん今お前樣人よりの憎くしみを受け給ふこと必竟お學問の進み早く侮り難きを妬ましう思ふよりのすさび平らかに思ひ見候へば御前樣よりは一段下の人たちがつまらぬ事どもも申のにて候夫れになやまされ給ひて自然退校などの事にも成らば申さば御前樣の御思案わかくて其人々に負けたるに候何かは悉く御眼の中におきて爭ひ給ひそと進め參らすにもあらず塵より輕き其人々を御心のうちより摘みすて給はゞ御事なかるべくやとぞ夫れ等さま〴〵申上たきに是非御目もじ思召のほどをも伺ひながら此方存じ寄のべばやと思ひつれど何か御そは〳〵しくて打たえ御訪はせも無く此方より上る度ごといつも御留守なるを歎き筆にいはせ申候さりながら私は御上のこと好かれと思ふよりほかに心もなく候へば萬一私存じのほかに御厭はしさ堪へがたき事など候はゞ御つゝみなく仰せきけ願度ことによりては強ち御止めのみ申べきにも候はず此文は唯わが身のしれる限りにつきて申上度をのみに候

かしこ

◉同じ返事

御文にて身の罪おもひしられ申候さしも隔てなく敎へ聞えさせ給ふものを若し我心よりほかなる御諫めなどや承らんと詫しくて大かたは御門をもたゝかず成るべくは御面かげ見ざらんやうにとのがれ居し心のほどお耻かしく今は實をのべて御詫び申上候學校のことさま〴〵文には盡し難き厭はしさなど候へば近くにあがりて委しく御話し申上この後の心得かず〳〵承り度たゞひたすらの我まゝのみとは思し召さぬやう願上候まことにきのふの夜はやる方なきほど胸ぐるしくて明けなば直に旅よそほひしつ此地を思ひたゝばやとさへ存じたるに御座候そは何故と問ひ給ふな今御まのあたり何も申上べく明後日の土曜日かさらずば日曜あたり參上致したくと思ひ居候　かしこ

◉雇人の不注意をつげて都の親族をいましむる文

日々暖かに成增り候都はやがて花の木のもと賑はしき頃に相成るべく此處にも菜の花少し景色だち申候この野遊びに蝶を追ふて摘草といふを都にはせぬ事に候や此方隣家の彌兵衞と申すが此頃雇ひし子守の娘十二ばかりに成りて小怜悧に見えしが此月十

日まだ生れてより十月には足らねど末には彼の家のはしらとも成るべき一粒ものゝ男の子を負ひて左衛門原の日あたりに摘草すとて籠もち出し幼なきをば物にくるみしまま少し小高き岡のやうなる榛の木のかげに寢させおき自身は小刀手にして低きかたの水たまりに根芹よ何よと餘念もなくはるかの遠くに成て摘み居し所あはたゞしき兒のなく聲ものにひゞきて膽つぶるゝやう聞えければ何事と籠も取あへず小刀を逆にとりて驅け來つるに何處より來にけん大なる犬はや幼なきが耳たぶ喰きりて今腕にもかみつかんずる折と見えしを驚きながらも氣丈の子と覺しく石をひろひて投げゝる由子供なれど一生懸命のさまや凄まじかりけんかつは光れるものをも持たれば夫等にや恐れけん犬は其まゝのがれ失せ其子はまだ息のいさゝか有し由なれど人々呼つどへ家に連れ歸れるほどには全く絶て救ひがたき事と成申候これも自然の災ひと彼處の主人はあきらめたるさまに言ひ居り候へど唯一人の子にてさへあれば殘ねんいかばかりと此方ども唯涙にて野おくりつとめ候ひき是れをおもふに小さき子の守りをするは心づくべきことゝ他事ならず案じられ雨ふらぬほどに戸をおろし給へと言はんが如く益もなき申條と知りつゝ便りにつけて一書さし出し候は一重に御もとのを大切と思へばに御座

候此前生れし娘の子やう〳〵起かへりなど可愛らしう成られし由に聞き寫眞おくり越し給はれなど乞ひ申樂しみわたりける物を御使ひ人の竹とやらん餘り面白がらせ遊ばするとて兩手に高うさゝげなど狂へるほど俄に立ぐるみして自身の身もさゝへかね仆れ轉びて兒をば投出したれば火鉢の角にて頭腦をしたゝか打たれし由その後驚風にてなくなられしに思ひ合すれば夫等や下地に成けんと殘ねん此ことに候ひきさても今年めづらしう男の子をまうけられし嬉しさ此方そのかたはらにも居る身ならば日夜に心づけ人手になどは渡し申さず引とりての世話をも致すべきなれど其事かなはねば一段と案じられ斯る文をも參らするに候守りは子供にさする物にあらず大人といへど氣のはやらかに落つきなきは無用になさるべく思はぬ過ちなど出來てのち取かへす事成りがたきものに候もはや御もと小供にもあらぬを伯母がいつもの世話やきと苦み給ふや知り候はねど其地に親類のしかるべきおはせず御親達はやくに亡くならせ給へるなれば御樣子いかならんと思ひ煩らはるゝに候ことしの春蠶終り候はゞ一度は都見物ながら其地に參りてよろづに物申度さし當る處こゝに淺ましき例を見候まゝ御聞きに入れて御用心のためにもと申進じ候いづれは御めもじにて此度はこればかりをかしこ

◎同じ返事

今朝店口より顔を出して此文田舎の伯母さまより參らせくれよとなり受とり給へと其處にさし置て去ぬる人の有るよし店のものはせ來て斯く〳〵と告ぐるに扨は御わたりよりの御使ひなるべし御返りごと今參らすべきに暫時またせてなど申つれど早く出で去りて影の見えぬに詮かたなくて溫湯をだにも參らせず彼の御人誰れにか候ひけん失禮の罪よきやうに御申なし下され度候御文卷かへし拜見御ねんごろの御心添へかたじけなく萬事に心のとゞかぬを言ひ敎ゆる親さへ無き身に候へば兎角に心細うのみ思ひわたられ候處暗夜の燈火にもたとへつべき御言の葉たれをしるべと賴み參らするにも猶欲なれや御近くにて明暮れの御世話をも頂かれなばと及ばぬ事を願はれ候御隣家の幼なきが憐れ成しさま承はるに身の毛のたつやうにて仰せ給へる如く此處にも怪しきことより娘一人を空しく見なしたるなれば他人ごとゝは更に思はれ申さず候此あたりは家ごみにて其つみ草の原はなけれど二町ほど離れて川のあるへ鮒の子釣るとて子供の集まれるを此方丁稚とかく見に行たきより子守りを名にして立出候まゝ萬一人人の眞似ごとに水へでもかゝるやうに成り候はゞ自づと脊に子うるさう成りて粗末に

すとはなけれど思ひの外のあやまりなど仕出さんもはかり難くと存じ此頃絶えて負はせて出だす事を致し候はず仲働きの少し年とりたる女子に打まかせおき候まゝ憚りながら御心安う思召下されこ度とに此ほどは至極の丈夫にて虫氣に更なり風邪などの憂ひもなく引延ばすやうに大きう成り候まゝこれ又御喜び下され度候春蠶の御忙しきほど過ぎさせ給はゝ御出京あそばさるゝ由の御文それは誠かと夢のやうに嬉しう存じ候子持に成りては如何に汽車の便よしといひても御地まで出ることふとは叶ひがたく何時御目もじのなる事かと心細う存じ居つるに思ひがけぬほどの思し召たちは亡き母の親ふたゝび歸り來るやうにて嬉しく〳〵必らずおはしまさん事を待わたり申候あるじよりも御不沙汰の御詫よろしう申上御出京の折は御出迎へも致し候はんに其ほど委しう御申こし願ふべきやう吳々の申つけに御座候唯御返事御禮のみ盡しあへぬ事どもは又もこそと筆とめ申候　かしこ

◉事ありて中絶へたる友のもとに

此ほど上野の公園にて御影ほのかに見參らせしかど御心のほどはかりかね御あとも追ひ候はず空しうながめて立歸りしこのかた果敢なき思ひ日ごとに沸かへりよし御怒

りにふれなんまでも御詫び申こゝろみてと此文をばやう〳〵したゝめ申候さりとは筆のかひなさよ思ふ心の千が一つも書得られ候はず紙おしまろめて屢々打なき候ひぬさもあらばあれ墨のにじみに思しやらせ給ひて自づからの御憐れびも給はらんや斯く隔たり參らせたる事のもとすゑ靜かに思ひめぐらせば如何ならん違ひめより月日を渡りて御心とけず門の柳に月かすむ夜いざ合奏せん疾く來よの御誘ひもなく增して春雨のつれ〴〵に歌よまばやとての御音づれなどかき絶て忘れし樣にはもてなさせ給ふらん御心安さの餘り禮なき言葉をうちつけになど其は昔しながらの習慣と御見ゆるしたまはるべく其ほかには如何なる事や御氣にさはりけん屢々おもひて更に考へつき候はず今は打あけ思召のほど伺はんよりほか詮かたなく候私國もとを立出でゝ始めて彼處の女學校へ伯父に連れられ參りし時御友だちも無くて物の耻かしきこと言ふばかりなく唯汗に成りてかゞまり居つるを御前樣御覧じかねてや年はいくつぞ今までは何處の學校にてか學ばれしなど優しき問ひを給はりし時の辱なさ夫れよりは唯御袖にのみ縋りて退校も昇校も御一處にと過ぎ來つゝ卒業したりし後人々は大かた引わかれて逢ふは同窓會の春秋のみ夫れもことごとくは寄合ふ事をせぬほどの中に猶あけくれ御睦まし

うして中よき友の手本といへばやがて引出さるゝほど珍らしき物に言ひさわがれしを此ほどの有樣よそ目いか計怪しみ候はん是れはた我が身の罪なりや身に覺えなしと言はんは舌長きやうなれど自づからは知り候はず誠心からの過ちもせぬげにて候へは唯唯世の中かはれるやうに如何なる事と淺ましう思はれ申候さりながら此は我まゝの申條知らざらんほどに若し過まてる事なども候はゞ斯く〳〵の言葉おもしろからず此事心にも適はねば夫ゆゑの怒りぞとも宣まはんに御辯解すべきはし謝び參らすべきは如何やうにも仕るべく私は唯姉上と存じ居り候を御心にかなはずとて物のたまはぬは情なきおぼし召に候私いさゝか思ひ當れるは去る人さる仔細ありて私をば御前樣より引はなつやう心がくるには有らぬやの疑ひに候へど然りとも言ふまじきは人の上もし過ちならんには罪の上の罪を重ねて其人よりの憎くしみ恐ろしく候もはや何もえ書き候はじ思ふこと胸にたゝまりて中々の筆三昧うるさく候よろづに思し廻らされ此方あやまりなきほどを若し御見出しも下され候はゞよしや昔しの御交りに復らんことは六づかしうもあれ夫れまでの身と思ひ絶えて憂きをも申歎くまじ唯かゝるさまにて御疎々しう成なんこと口惜しう此方よりは隔て參らせぬ心ばかりをと思ふものからあはれ書

き盡しがたうも候かな　かしこ

◉同じ返事

夕べの空に月はありとも雲かゝれば道たど〳〵しく候おもはぬ事より御疎々しう成ゆきて言はねばこそあれ此方も同じう思ひ歎き居つるに候思ひ切たるやうの御言の葉ども御もと樣より先いはれまつりては此方今さら御返事の法もなく唯御互ひの思ひたがへ中よければこその爭ひと大かたに笑はせ給はんこと願はしう候御文中さる人や物いひつるの御推量あたらずとも遠からぬほどゝ御含み遊ばされ然りとも人には疵つけ給はざるやうなし下され度候必竟は此方心ろ短かくて深くは物も考へず怒る時は一筋に例の獸が前後を見かへらぬと同じければ斯る陷阱に落入るに候此ほど中より少しは心づき怪しき事にも成りにしものかなさて此まゝにて中絶えなば此末いかならんうら淋しうも有るべきをと御詫びの文かゝばやともしつれど知らせ給ふ通りの負けじ心はよしなき時にも妨げに成りて書きては破り破りては書き僞りには候はず手箱のうちに反古紙いまだ納めあり候きのふの御文見つるより年若の御前樣が御氣のねれしに驚かされ思へば私はまだ〳〵の小供と汗に成申候疑ひしは私の罪うたがはれしは御もと樣

が御災難とも思しめされ深うは何も尋ね給はず唯もとのまゝにと思し召のやう願はしく候御中なほりと言はんはをかしけれど久々にて胸あくばかり御物がたりも致し度こゝの夕つかた私宿まで御入も給はらば辱なく候さて其折に何も〳〵こゝには昨日の御返事ばかりに候　かしこ

◉借用ものそこなひつる謝罪の文

いと申にくきこと自身あがりて御詫び致すべきを何かそゞろ寒きやうにて人して御道具返上せさせ候誠に申わけもなきは此御重硯二組のうち青貝ずりのかた一つ其數不足に持たせあぐる事に候御大切の御品拜借ねがひおきながら如何にも心なき不調法の事どもおぼし召のほども御耻かしう候へど昨日の會の終れる後褥よ何よと取かたづけ扨御硯箱つみ重ねんとしつるに如何にかしけん一つの緣の放れ居候へば是れは誰が業ぞなど給仕の女子ども問ひたゞし候へど夢さら存せぬ由を申すに然らば客人たちのと當惑この事に候御氣に入らざらんをば心ぐるしう思ひながら今朝そのつくろひ致すものに成る限もとの樣にと申ふくめ持たせやり候へば今三日計のほど拜借御ゆるし願度それをば持參の上御詫びには罷出づべく思はぬあやまちに唯汗あゆる計にて細かには

御詫びも言ひあへぬを思しゆるさせ給はらば辱く候　かしこ

◉同じ返事

御ねんごろの御文何かは左までに及び候べき何方にも人おほき折の過失はあり勝のこと増してや此硯箱この度のみにも候はず何時も縁の放るゝ事などあるにて候へば若しは前々より取れ居りしを此方心づかで持たせあげしには非ざりしや御叮嚀の御つくろひなど痛み入申候かならず／＼御心づかひ下されざるやう御使ひの人申さるゝには奥様の御顔いたく蒼みていかさまにせんと歎きおはしますの由いかにも御氣の毒にて此方こそ汗に成り申候そのやうに他人行儀の御かしこまりは打すて給ひて御心安う物仰せられんこそいと嬉しかり申べけれ何時も御存じいらせられ候如く此方良人は道具などのこと深くは何とも思ひ申さず私はまた無頓着の女子に候もの何の御憚り候べきすべて御氣安うおぼし召ねがひ上候　かしこ

◉留守中來たりし人のもとに

人に誘はれ候て一夜泊りに江の島鎌倉をと珍らしう蝸牛のからを出候處きのふ立歸り留守居のものより聞き候へば一昨日の午後御車にて美くしき孃さまおはしまし御留

守なるよしを申しゝに然らば又こそとて御立歸り遊ばされしが御土産はこれとて美事の一折さし出し見せ候この女田舍の親類より下女代りにとおらせたるにて私宅にはまだ居る日の淺ければ誰君さまをも御見しり申上ず仰せおかれし御名前をさへいつしか忘れてゐまたゝび首のみを傾け居り見あげたる處御としは二十歲ばかり御束髮に高う遊ばされ色白にて如何にも美くしき方と唯これればかりに候まゝ私も考へつき候はず編物をしへ參らせたる子爵の姬君二かたのうちか然らずば例の參事官が御妹御かと知れるほどの年わかう美くしき人を撰りては其御名申試むるに否々さにも候はず〳〵とて更に御人知れ難く困じて其まゝ昨日は暮し今朝おき出でゝ嗽ぎながら不圖中庭に秋海棠のうつくしく咲るを見出で候まゝあはれ此花の優るゝことよなつかしくも有かなと獨言候ひしに椽先近う箒をとり居し此女あわたゞしき聲をたてゝ夫れよ一昨日の御方はこれが名によく似たまへる成き何かいだうとやらんと口疾く申候さらば二階堂の君かと言へば誠に其とほりと申されて手にもつ楊枝とり落し打わらはれ候ひき二十歲ばかりとだに言はずば頓て御上とも思ひつくべきを孃樣と先いはれしかば唯としの若き人をのみ撰り出して問聞たるおろかさ實に束髮に遊ばされなば人の親とも見えさせ

給ふまじく此宿なる婢女が十九二十と思ひしはあやまりにも非ざるべく候斯くと知りしよりいとゞ御目に懸らざりし殘念さ增りてなど稀々の御訪問に折あしき不在には爲したりけん取かへしがたう口惜しう思はれ申候賜はり物今ぞ水引をときて心安く頂戴あり難く御禮申上候さるにても萬一こゝもとに御用などにて御入りにはあらざりしや御道も近からず御事多き御前様の例ならぬ御ありきはと考られ候まゝ御詫び旁歸京の御しらせ申上候急なる事にも候はゞ御郵書御つかはし下され度御いそぎならぬ御用などにも候はんには何れ私近々に參上致すべき心得に候まゝ其折御申きけ願ふべくとまれ御人さだかに成しを喜びて　かしこ

◉同じ返事

思ひおこしゝやうに御門たゝきしかば何事ありてかとの御尋ねいさゝか用事のありてにも候はず餘り久しき籠りゐに少しつむりの腦ましうて家のこともうきに幼なき者たち一日二日實家かたへ泊りに遣はし置候まゝ此うちに平常の御不沙汰も御詫び致し度一つには少し大路の風にも吹かれ度てのすさび別しての事に候はねば御心安うおぼし召願上候　承れば江の島あたり御覽じにとおはしましたる由初秋風に御袂をひる

がへして貝ひらう濱の朝ぼらけなど左こそ御心地よくはいらせられ候ひけめ御獨柄の御氣安さ斯るとき取わき顯はれ申御羨ましさ限りもなく候こゝもとなど右に左に取すがる者多ければ遂ひお友だちのかた〳〵御見舞といふ事もかなはず時たま出れば車にての忙がしぶり落つきたる事もなく候つむりの痛ければ髮をときて例になき束髮に致したるを娘のやうに見られしとや十九二十歳は頓て我が子のとしに候を御目違ひも辱けなくて此次參らん折何か御禮にてもあげ度を彼のお人好物の品御しめし置下され度候　かしこ

◉取違へし品物を主のもとにかへすとて

昨日は御散會なほ遲く候ひしや小雨少しこぼれ來つる上宅より人にて來客あれば疾く歸れよの迎へ心にかゝり失禮とは存じながら御會主にのみ御斷り申上誰君樣にも御挨拶せで私は中座いたし候まゝ殘りの御興いと多からんをも存せず今に口惜しう思はれ候さて其歸るさ御玄關にて私持參の洋傘はと求めしに數多かる中の何れを何れと判きがたく彼れ是れと撰りもとむるほどに宅よりの迎人は疾く〳〵と言ふ奥には我名を呼び給ふ方あるやうにもありかた〳〵心あわたゞしうて大かた似たるを夫れなるべし

と心得てさしかざし立歸り候ひしが今朝また改ため袋に入れんと見候へば似てはあれども柄のこしらへ變りて總なども少し異なり居候まゝ誰君のをか斯くはあやまりてと粗忽の罪さりどころなく猶よく／＼見候へば此ほど紅葉見の折御一處に參りし道すがらさても自然氣の合へる物は申合せもせぬに此洋傘の好みの同じさはと指さして笑はせ給ひし彼傘なりけりと思ひつき人して直に持たせあげ候私のをもし御持歸りにもいらせられ候はゞ御渡し願度申わけなき御詫びは何れ御めもじに委しく申上ぐべく候

かしこ

◉同じ返事

きのふは俄に御影見えず成らせ給ひしかばいかなるにやと御案じ申され密かに御會主に承り候てやゝ心落付居候ひき彼の後さまでに事も無くて人々の歸られしは暮れ少し過るほど私はことに遲れて御暇ごひ申候御傘の事こゝにも持歸りて心づきしに候此方御先に歸らばかならず取違へもち參るべきを御叮嚀の御言葉にて痛み入り則ち御傘返上いたし候まゝ御落手下され度御手すきも候はゞ御遊びに御出下さるゝやう待上候へど取わけての詫びになどは御無用になし下され度候あら／＼御返事のみを　かし

こ

◉注文物の日限おくるゝを良人に代りて謝する文

いつも御かはりなう御繁昌の御さま憚りながら御めで度御うれしき事に存じ上候私は打たえ御機嫌うかゞひにも出候はず夫よりしば〳〵叱られ申候へど鳥の巣のやうの束ね髪すこし取あげてなど思ふほどに御處々よりの御誂へ間に合はねば夫れ下縫ひせよ鈕つけなど追ひつかはれ候て男女を兼帶にめまぐるしき日を送り居り申わけなき御不沙汰にも相成申候さて此ほど御申しつけの若旦那さま御洋服一そろへ今日迄との御急ぎ成しかば夜をかけての勉強かならず御間に合すべき覺悟に候ひしを此ほど中より仲間うちに少し六づかしき沙汰御座候て夫こと其仲裁の役相つとめ昨日は手打といふ事にて詮かたなく立出候ひしが御存じいらせられ候ごとく一通りならず弱き御酒なれば夕過るほど歸ると其まゝの高いびき一夜空しう成り申候今朝は未明より取かゝり候へど此日暮れまでに飾りみしんまでも如何候はん御急ぎと承りながら斯る體の申わけなさ前かたより御誂へつけの大店もあらせられ候御中私御奉公相つとめ候御緣より此新店の伎さへ鈍く候へ御申つけ下され候辱なさいかやうにもして仰せの通り仕

あげさし出すべき心得なるに思はぬ事よりの手違ひ夫はひたすら恐れ入りて御詫びいひにも上りがたければ其方かはりて有りのまゝに申上御ゆるし願ひ來よとに御座候私とても御閾の高きやうにて何日參上も致しかねし候まゝ使にて萬々の御詫び明日こそは必らず〳〵仕上げ持參仕るべく初度より此やうの粗漏にてはおぼしめしも恥かしう候へど繕ひなき眞實を申上御ゆるし願はゞやとに御座候　かしこ

◉同じ返事

御頼み申したるもの今日中には六かしき由あれは悴こと此度大阪の本家まで遊びをかねて參り候に付其時の用にと思へるにて前の心づもりには明日の二番汽車にて出立の定め成しかば扨こそ今日までにと日限り申つるに候さる處此方同業者の相談會臨時に開くべき事ありて明後日飯田川岸の富士見樓に集まる事と成り候へば何時も左樣の場所へ出席する事大きらひの父親まづ〳〵悴の出立を延ばさせて代理つとめさせし後といふ事に成り申候されば明日中に出來あがらばいさゝか差つかへも無く候まゝ左のみ恐れ入られで間に合せ下され度御つれあひにも此段お話し下され度候　かしこ

◉人の家の盆栽を子のそこなひつるに

唯今長太郎こと歸宅守りにと附け置し竹の申候には今日は一日目白樣御厄介に相成りさま／＼面白く遊ばせいたゞき御庭もいと廣くいらせられ候に此お子喜びてと夫れまはで宜かりしがさて御惡戯さま大事をし出し給ひ御つき添ひの私兩手に汗をにぎり候ひぬと始終はなし申候さりとは／＼以ての外の事その旦那樣つね／＼御秘藏あそばされ御丹精一かたならぬ御鉢うゑの登り龍とやらん其葉の縞もなみならぬ萬年青を此暴れもの不圖したる間にはしりより御花鋏のお椽にありしを取りて淺ましう切り刻みし由はなしを聞き候にさへ驚きに口ふさがれ申さず御立腹のほどいかならんと唯かしこまりて身の縮むやうに候いかに年のまゐらぬとて分別の無きにも限りあるものと平常の躾まで思しやらせ給ひて御さげすみや遊ばされん思ふほど御耻かしうて面ぶせなる心地いたされ候そなた附添ひ居りながら何故其やうのいたづらは爲せてと竹にも小言を申し長太郎にはもとより嚴しく申聞かせ候へど唯返事のみ好うして物の辨へあるべくも非ず稚なきものといふ中にも斯る惡戯作ならぬもあるをなど我が子のみと情なく思はれ候すぐさま御詫びに私罷出づべきなれど旅行中なりし良人こと此夕ぐれは歸京致すべく出迎へは此處にてなど親類の誰れ彼れ集り參り候まゝ何分にも出かね

て文にての御ゆるし願上候何れ良人とも申かはし御心には適はぬまでも其葉に似たるをもとめいで切めてはの御詫び申上度旦那さまへの御とりなし幾重にもなし下され候やう願ひ上候終日御厄介に相成しがうへ斯る過ちをさへ仕出し候を御詫びの言葉も覺えられず候　かしこ

◉同じ返事

誰れも一度はをさなかりしもの惡戯は子達のつねに候此方いまだに子は持ち候はねど夫程の思ひやりは無きにも候はず何かこと〲しう御詫び下さるまでもなく增して代りをなどの御心配御無用に遊ばされ度候あるじこと唯今役所より退出に相成候まゝ有さま斯くと申つるに長太郎殿のいたづら扨々子供の成長は早きものよの此ほどまで未だ起かへらるゝ位と思ひしに鋏の自由利くやうに成しか今の間に敏腕家など言はるるやうに成るべしとて大笑ひ申され候されば必らず御案じに及び候はずよしなき御心づかひ懸くるも佗しければ旦那樣御歸り遊ばさるゝとも必らず御沙汰なしにと申進じ候此やうの事氣の毒などゝ思し召また長太郎さま御遣しなきやうにては此方淋しさ堪へがたく候まゝ何とぞ變らず御貸し下され度願上候何も右申上度て　かしこ

◉不參のわびを約束せし人のもとに

此ふる雨に恐れてとやおぼすらん口惜しきはつね〴〵意氣地なき身に御座候その御申ひらきながら誠にやむを得ぬことにて今日の御まとゐの數にもれ候御詫びも致し度たちながらと申すばかりはしり書の見ぐるしうて此文さゝげさせ申候今のさき御連中のうちにて何時ぞや見參らせし覺えある口なし樣とやらん極めて物しづかの御かた御會におはしましたるべし無言の辻を彼の方まがらせ給ふ折私は御あとより傘さしかざし參りたるにて今日の茶話會にはよし雨にもあれ風にもあれ必らず出づべき覺悟なれば御定めの刻限にあふやう家を出で彼の辻まではいそぎしに候さる處口なし樣が御袖する計にして向ふより來たりし車の人私をば呼とめて少し物とはんとに御座候何事と聞けば斯く〳〵しか〴〵の番地や知り給ふと私宿をさながら申されあやしうて御もと樣は誰れにかなど問ひ候ひしに思ひきや遠國に嫁したる伯母のはる〴〵と尋ねてのぼれるに候ひき寫眞にておもかげは知りながら先觸れだになければ此處らあたりにて逢はんとはた思ひもかけぬを怪しうつくりつけたるやうにて驚かれ其まゝ打つれ歸り申候かくては今日の御席にもつらならんことかなひ難くと御詫びの文したゝめ候にも

平常まゐらず勝の私ことぐさを設けてなど思し召さんも口惜しければ有さま斯うは書つけ申候私御あとより參りしは口なし樣に御尋ねにてもさだかなるべく例の怠りにはあらぬ物から彼れまで堅く申上しを御違約の罪さり處なうて　かしこ

◎同じ返事

御文おほくの中にてよみ候ひし處さしもの口なし樣打わらひて誠に其文のとほり彼の辻までは來給ひしに相違なく御車のことも有しやうなれど振かへりて物も見ねばえ知り候はず唯こゝに來て最早時もうつれるを如何にしてをはしまさぬならん扨は中途より引かへしや爲給ひしと此やうに思ひ居つるまことに今日の御不參は御おこたりには非ざるべしと例の口重き人めづらしう證人に成りてもの宣へるいとをかしく候ひき左る御事どもならば今日は甲斐なし此次の折には必らず今より願ひ上置候つゝみ物一つ御使ひに持たせあげ候は此席にての喰べ物に御座候中途まではおはしたりし君に參らせざらんも客なるやうにやとてなん左しも旨からぬ物なれば此御使ひにだにおろさせ給へ　かしこ

◎雇人の周旋を受けし人のもとに

御禮までに一筆申上候このほど中は數々御手を煩はせ御迷惑のこと相ねがひ御蔭さまにていと好き人を雇入れ大助かりに御座候年の若きに似ず物のくま〴〵心づき子供の世話もよく致しくれ候へば幼なきものたち早く馴染て彼女ならでは夜の明ぬやうに取すがり居り申候はじめの御話しに田舍ものなれば讀み書きなどは出來ずやあらんとの御斷りなれば此方そのつもりにて居り候處稚なき者たゞ學校より歸り來て復習すとて書物とり散らしうろ覺えの處は拔かしなど早よみをするに彼の女かたはらに有りて夫れ〴〵其處はとの注意もの知らぬところには御座なく候私おしはかるに高等小學卒業のみにも非ず其上に必らずかたき字をも讀みたる覺えあるべしと思はれ申候自身はつとめて知らぬ由をよそほひ居り候へど出來ることは疑ひなくこれより私留守に致し候とも受取そのほかさしつかへも無かるべしと大喜びに御座候勝手もと働く女子もとより居りしにて自然家内の樣子に委しくみづから威ばれるつもりも無きに候はんが物ごとに幅をなして新らしき身には愁らしと思ふ事らあるべきなれど萬事こなた心得居り候まゝ必らず嫌氣などを出し申さぬやう此頃何か折を見て御もと樣まで同人使ひにさし出し候まゝ御申含めおき下され度候今まで多く婢女もおき試み候へど此度のほど

親切にしかも溫和しうて申旨のなきは覺へもこれ無く何とぞ長く居りくるゝやう致し度かゝる人御世話下されし辱なさも申のべかた〴〵前條願ひ上おき候　かしこ

◉同じ返事

このほどの女子首尾よう御氣に入りし由いかゞやと存じたるに斯くと承る喜ばしさ末々御見すてなく御使ひ下され候やう願上候讀み書きのこと左もやとも思はぬにはあらねど久しう田舍人に成り居りしかば昔しは昔しとして親たちなど物學びまでは手の屆かで捨て育ちにやさせつらん若し出來るよしを申上候て左もあらぬ時御いひわけなければ態と無學に申たてしに候御文のこと彼の女御つかはし下さらば委しう語り不心得のなきやう致すべく尤長年苦勞をいたしたる身に候へば大かたの事には堪へ申べく候何とぞ御甘やかし遊ばされず御小言などは御充分におほせられ御家風相守るやう御躾け下され度とし若なれば左は申せども手ぬかりさま〴〵多く候はんに御面倒は御覽下され候やう當人に代りて願上候　かしこ

◉饗應にあづかりし後人のもとに

昨日の花のかげ今も面かげに浮かびて仙境に遊びし人の再び人間にもどれるやう怪

しき心地いたされ候御處々の御木かげに假初の葭簀たてわたされ田樂あぶれる御娘たちの赤前だれおもしろく御茶めせなど呼び給へるは鶯の初音とも何れも御親類うちのと承るは誰れ〳〵樣の成りけんいと愛くしうもおはしたりしかな今も忘がたきは御流れの彼方に小さき橋を打こえて御萱ぶきの何亭とやらん額の文字なかば消えたるやうにて此方よみかね候ひしが彼のうちにおはしたりし十四五ばかりの高島田の御かたの心安う御案内をなし下され御庭のうち殘りなく拜見暮れゆく空に夕月のかげほののくを彼れ見給へ何やらの模樣にもよう似通ひて花の上ゆく雁も候ぞと指さし給ひし物ゆかしさ御庭も月も花もそのおかたも自身も畵の中のものゝやうにて此事いつまでもの思出ぐさに御座候夜に入りてよりの御物の音どもは申すも更なり御もてなしの種種今まで覺えなき樂しみを盡し候かたじけなさ御禮の文さゝげばやと筆とり申候ものから先何よりやと唯おもしろさの身に染みて頰づえつきたるまゝ目は空のみ見やられ候御馴染いと淺ければ御父君母上にも奉らず御前にのみ參らせ候をとりつくろひ御禮申上願度何やらんあやしき腰折れなどうかび候へど書つけんはいと恥かしうてなん

かしこ

◉同じ返事

園遊會などいはんより運動會の名や似合しかるべき唯廣野の原のやうに見處もなき庭のうちを御案内申上しばかり殊更に御招き申ながら其御もてなしの數もなくてひたすら御恥かしう存じられ候御ことよきに隨ひて又秋の折も御出願ひ候はん其時御迷惑など仰せられんや御歌おはしますなるをなど惜しみてはかくさせ給ふらんことさらにも乞ひ申度をと父母とも〳〵申候御氣に入りし高島田は私伯母の末子にて此頃此處に引とりおき候なれば御影いたゞきに彼女をやさし出し候はん御文のこと誠ならばよもや否とも仰せらるまじく何時ばかり參らせたらば御在宿なるべき一重に其御ゆるし願上候　かしこ

◉故郷へ歸るとて師のもとに

きのふ御門まで御暇乞にと出候處物へをはしましたるほどにて御目もじ願ひかね其まゝの歸宅御のこり惜しさ上もなく候いよ〳〵此夕暮は都をはなるゝ事と成り候まゝ今一度あがりての願ひもかなはず文にての失禮御ゆるし下され度候私はじめて御膝もとへ參りし時はまだ放ちがきのをさなうて筆は折るゝ計にぎりつめ臂もちがたくなに

つの字への字書あやまり今更その頃の清書引出し見候へば我ながらの不器用淺ましく候をそれよりの幾年御かげによりて此處はかく彼處はこのやうにと御面倒御覽下されやう〳〵人中への文したゝめ得らるゝ身と成しは一重に御惠みの露かゝりてと辱く御恩報じいつかはと心がけ居しに候處おもひよらぬ迎人にて故鄉の親族がもと相續いたすべき身と相成りいかにしても御膝もとを離れねば成りがたく此事歎かはしう存じ候へど親どもの申つけなれば如何はせん今は詮なく立歸りて田舍人に成ぬとも心だに同じからむにはと思ひ極め申候長々の御恩に報ゆる事もなく候をさる方に御見許し何時何時までも猶御子のはしと思しめしいたゞかれ候やう海山願奉り候おもふ事何も盡しがたくて　かしこ

◉同じ返事

いよ〳〵御出立と承り今一度は御目に懸り度と存じながら事おほき身にて參上もえせず昨日は態々御出のよしなりしを何がしの會かならず出席あらまほしなど申來られ候て折あしく御足空しうさせ申候御道もはるかなれば御道中御心づけ御出なさるるやう祈られ候御目にかゝる事かなひ難きはやる方なう悲しき物から御親族の御あと

絶んとするを御前様参られ候て御相續だに遊ばされなば枯木の春に逢ふが如く再びの榮えんと承り及び斯ることは御勸めも申上度いと嬉しき事に御座候御家のこと忙がはしうなりなんとも求め給はゞおのづからの御暇も候べし夜るなりとも習字御つとめ遊ばされ今一きざみたしかなる處まで御進ませ申度この方は夫れのみ願ひ居候かの地におはし着きたらば御安否たゞちに告げ越し給へ申し度ことはやがて文にして参らすべく御父君母様御はじめ御兄弟がたにも宜しう御傳へ下され度候　かしこ

◉友に代りて惠みをうけし人のもとに

いまだ御目にもかゝらず候を打つけにやと憚かられながら文して御禮申上候此ほどは淺茅しげ子こと一かたならぬ御恩にあづかり病中何くれの御丹精親兄弟も及ぶまじき御介抱にあづかり候由御馴染もなき御方にかくまでの御親切をいたゞき候こと一生わすれ難きかたじけなさと打なきて語り申候私身のことは茂子より御ものがたりせし由なれば改めても申候はず彼の人とは唯兄弟のやうに交り居日頃の事ども申談ずる中に候へど去る仔細の候て彼の家内のさま委しう知りながらみづから手をおろして助けをするも叶ひがたく泣く時は共泣きにて何の足しにも相成らぬにて候彼の人を今の女

工場に出しおくこと心のほかの事どもにて情なさ上もなく候へど兄弟多なる上老たる親たちも候なれば烟の料にと氣の毒なる事せさせ申候私友達など申たてつゝ自身は左のみ不足もなく過しながら彼れをばよそにと御思しのほど耻かしけれど此處に理由ありて心のまゝにも爲しかぬるに候前の月より鎌倉の別莊へと參り居り久しう此地の樣子しり候はず茂子が病ひは更なること御上より御恩蒙りしことなど夢さら存ぜず昨日歸りて今日彼の家を訪ひつるに兩親よりはじめて涙にての物がたり貰ひ泣きして世には斯る御人もおはしけるよ恥かしきは友甲斐もなき方と歎きつ喜びつ致され申候猶一日彼の家にとゞまり居らるゝならば御目にかゝり何くれの御禮も申上これよりの御懇意も願度ひたすら御懷かしう存じられ候ものから今日午前のうちだけとて家を出しなれば長くもあられで歸宅いたし候しげ子床のうちより見送り候て必らず御禮の文さしあげくれよ口には得も盡し難きかたじけなさを君もとも〴〵と猶いと弱げにて申候ひき御禮といはんもさし出たるやうにて姉にもあらぬ私のをこがましけれど何もはぢあへず文さゝげ候一たびは御目にかゝり此方おも人どもの意氣地なき事情御はなし申上此後とも彼の人につきての御盡力ねがはまほしきを唯籠の鳥のやうなる身にて何の

自由も利き候はずいと口惜しき事に候　かしこ

◉同じ返事

態々の御文とりわき御禮など仰せられ候ては面あかむ業に候何ばかりの御世話いたしたるにもなく彼の父御此所に花など賣りにと來られてつれ〴〵なるまゝ何くれの物がたりより娘御が病氣のさま聞およびし一とせ赤十字社に眞似ごとしたる覺えも候まゝ物むづかしう思はれんも憚からで我れながらさし過ごしたる事ども今さら御恥かしう候御前樣はまだ知らぬ中と仰せられ候へど何がしの園遊會にて此方ははるかに御姿拜しよそならぬ御知己に候ものの御前樣御中よき人ならば御緣はやがて御座候御心おきなく打まかせ介抱御させ下され度御家の事情もしげ子ぬしより聞申げに御心ぐるしかるべき事おしはかられ申候實の親子の中にてさへ手箱のものを費して人を助くるなどと申すことともすれば支へられ勝に候をまして御養ひ親の御隔ておはしますにては御無理ならぬこと茂子ぬしも頻にその事申居られ我れ故に御親たちの御機嫌損ね給ふやうにては相成らずとて然ればこそ病のさまをも御別莊には申上られざりしなるべく誠に心ぐるしがられ候彼の人の事につきては少し此方考へも候まゝ病氣だに快くなる

れば女工場がよひさするにも及ぶまじく其時は何とか御都合御はからひ彼處の家にまれ私かたへなり御はこび下さらば三人集ひて何かの御相談致すべく此方をも他人とはおぼしめさで親しき數に御入れ下され度候　かしこ

◉祭禮に人を招く文

御暑さ少し薄らぎ申候みな〳〵樣御事もなう此夏中を御過し遊ばされ御機嫌よきさまに承り何よりの御事と存上候さてこゝもと氏神樣御祭禮年ごと足袋はだしの雲齋うらも焦げぬるばかりの大暑の最中とり行はるゝ極りの處ことしは如何にも夥しき暑さなり惡しき病ひさへ烈しく候て軒並びといはんばかり白き服の人たち居るさまなればば斯る折の山車屋臺いかにぞや又蔓延の種にもやと其沙汰やめに成り居り候ひしが此兩三日の秋風にもはや左までの憂ひも無かべくと明後日より二日間神輿の渡御も御座候由山車は其數三十本地走りなどの催しもあり久しう封じこめられし餘波一度に賑はしうせん氏子中の意氣ごみと相見え申候此町内よりも山車二本出で申かざり物など二三ヶ處も出來る由今日あたりより青竹の手すり結ふもあれば山車小屋のしつらへなど大路にぎはひ申候されば此さま坊樣がたの御覽に入れ度かならず雜沓の中へは御供申

さず候間夜宮よりかけて御泊りがけに御出下され度御遊び相手なるべき小さき人三五人は參るべく棧敷こしらへ御待申上候　かしこ

◉同じ返事

御祭禮に付子供御招き下され有がたく誠にことしは暑さに支へられて夏中それら御沙汰も無かりしを此涼風に勢ひつきたらん御氏子中のさま思ひやられ申候御言葉にあまへ次の息子に姉女さし添へ當日うかゞはせ候間何とぞ御見せ願度上なるは實家の母借りに參りて十日ばかり留守なるほどに候間えうかゞはせ候はず此處のいたづら者ほかなる御方々と喧嘩など仕出し候はゞ御遠慮なく御叱り下され候やう前もつて願上置候　かしこ

◉娘を嫁入らする前に人を招く文

かねて委しう御話し申上し娘こと緣談いよ／＼取極り此月十五日腰入れ致さする事と成申候まゝ何とぞ御安心下され度いとけなきより御膝もとに參らせて女禮式を始めとし縫物の一通り耻かしからず出來うるやう相成しは全く御もと樣御丹精ゆゑと此緣まとまりしを見るにつけ辱なさ上もなく長々御世話をいたゞきし御禮ながら御吹聽

の宴を催し御暇ごひの御酌とらせ度に明日午後より御夫婦さまとも御入り下され候はば辱く年のみは相應に參りながらまだ世の中のこと悉く暗くて嫁入りを遊びに行くやう心得たるらしく夫れのみ心づかひに候まゝ私申きかせたりとも心安さの餘り何とも思ふまじければ何とぞ御入り給はりよろづの心得おほせきけにも預り度御もてなしの數も候はねど快く御醉ひ下さるゝやう願ひ度御相客は親族だつ人二三人に御座候

かしこ

◉同じ返事

人の生み給へるとも思はれずいと大切に存じたる彼の御子の御良緣さだまりしを承るに重荷のおりたる心地に御座候御年齢よりは若々しう見えさせ給へどもとよりの御利發にさへいらせられ候へば何かは御心配の入り候べき御舅姑樣がたの御機嫌御家の内のしめくゝりもたしかに御計らひかなふべき事此方御うけ合ひ申候御めで度ことは上もなけれど明日の御催し何か孃樣としての御名殘と存ずるに御いとほしき心地も致され申候何をおきても御席には必らずつらなり申べく良人も例の偏屈に似ずもろ共に伺ふやう申居候よろづは御まのあたりにて　かしこ

◉誕生日に人を招く文

ことゝゝしう文して御招き申すほどの御馳走もなく候へど明日は私誕生日に候まゝ例年の通り心祝ひの小豆の飯に手料理の粗末なるもの取ならべさて充分に遊び申度明日一日は赤子にかへらせ貰ひて私自由を利かせくれ候間兄こと秘藏の手遊るい昔しものにていとをかしきが夥多あるを平常には大事がりて私などには手も障へさせず候を御祝ひとしてこれ貸し給へと頼み申べく夫等御覽にも入れ度候間かならず朝より御出下され度御妹御樣も御一處にと願上候　かしこ

◉同じ返事

あすの御誕生日かねてより指折て御待申上しに候妹ことも何かおもしろき御祝ひもの考へ出しお褒めにあづかり度など申居り候まゝ持參いたすべき手箱のうち御うらなひ下され度御兄上樣御秘藏はいかなるにかと拜見たのしみに御座候あの御眼鏡に髯をばひねり給ひながら御手遊を大事がり給ふらんをかしさ人形も候や手まりなどはと妹ませかへし申候朝よりとの御招きなれども伯母よりたのまれの用事少々御座候間これを大いそぎに片付候て正午ごろより參上いたすべく其おぼし召願上候よろづの御

祝ひは御目もじにて　かしこ

◉相談事に人を招く文

秋やゝ寒く成參らせ候野の邊の尾花今うらがれて霜おく頃も遠かるまじく物こゝろぼそき事に候さて此初秋桐の葉と共にはかなき數に入り給ひにし白露の君が御四十九日今といふに思ひ出る事さま〴〵候て文さしあぐる事と成り申候知らせ給ふ如く彼の君が御かたみの人まだいと稚なきほどに候を後見さへなくて彼の廣やかなる家のうちにさし置くべきにもあるまじきを親族だつ人など袖のかげにおほふも無く唯うちすてと見ゆること此方こゝろならず候御前樣私ともに彼の君とは二もなき中にて唯姉妹のやうに交り來つるを御あとの事よそに見るはえ忍ばれ申さず候今も猶わすれ給はざるべし一とせ上野の岡の朧月夜に花のかげをば歩みながら彼の君空をあふぎて涙をさへ眼にもちつゝ斯る長閑き春にもいつまでかは逢はん思ふ事は多し身は虚弱しさても我れ失せぬとならば垣根のさし柳かれたりとて唯に打すてらるべきか冷たき墓の下に入ぬらん後とふ人さへ無くて松のあらしを聞居らんはいか計物こゝろぼそかるべきと哀れげに打なき給ふをそは誰れとても同じこと御上のみかはと君の宣ひしに然りとも雨

君は心安かるべし此世に繫累の煩はしきおはせず心にかゝる雲なければいたり給ふ處ことなるべくや我れは生中人の親に成りて頼もしき夫さへ先きにうせたれば斯くて此身の空しう成らんに寄る邊の無くて切なきものいかさまに漂はん此事こゝろに懸りぬれば體はうせぬとも魂なほ此處にとゞまりて憂き事さま〴〵多かるべし今より思ふもうら悲しくとてえ堪へずや手巾顔になし給ひて其時我れ〳〵ふたり詞をそろへて有るまじき事なれども人の世の定めなきに若しあやまちても然る事あらば我々あらんほど彼の御子のこと心にし給ふな子と思ひて育てもすべし物いひ敎へてしかるべき人とも爲すべきにと言ひつるに頼み參らするぞとて彼の痩せたる頰に笑みを寄せ給ひしさま今もおもかげに覺えて誠に今日の占よと思はれ申候さ計おぼし置たる彼の御子情なき親族の方々が手にのみ打まかせ置くべきに候はず次第によりては此方手もとに引とるなり君がもとにさし置かせ給ふなり然らずばしかるべき學校への頼み込みなど何方にもせよ早々こと計らひ申度四十九日間近う成ぬと思ふに契り逢へつるやうの念堪へがたく是非とも此事御心をもつかひて何とか道たて申度此方あがればよきなれど御人出入おほく御忙しき御中へいかゞやと差ひかへられ失禮ながら御さしつかへなからん

には明日午前か此夜分にても鳥渡の御入願度御歸りは車にて御送らせ申べく候　かしこ

◉同じ返事

御文拜し候御尤の仰せ此方もかねてより心には懸りながら知らせ給ふ通何事にても自から思ひたつと言ふ事ならぬ質にて忍びやかに打歎きゐつるに候嬉しき思し召たちは彼の人のみならず此處なる私さへ辱く候今宵たゞちに參りて御話し承り此方存じのほども陳べて御預り致すなり願ふなり何方とも取極め申度を此朝のほど物へ行くとて車にのり出しに何がし坂の上にて青物のせたる車の輪に此方の輪の打合ひていかなる機會か先方には左もなきに此車は出さまにと覆へり私は膝かけ懸けたるまゝ投出され申候髪だにこわれで不圖見たる處何の障りもなきやうに候ひしが家に歸りては全身いたみて身動きする事かなはず俄に醫者よ何よと今一週さわぎの終れるほどに候へば此御返事は唯口ばかり筆は人にと執らせたるに候斯くとも知らせ給はず例の物ごと規則正しき君なれば何をして斯くはおくるゝぞなど御憤りいらせられん他ならぬ自露ぬしが後事の御相談に身の都合にてうかゞはぬはいと口惜しければ斯るさまに思し

ゆるし給ひて此門に御車寄せ給はらば辱くいかにもして彼の事は早々取きめ度もの
に候　かしこ

◉法事に人を招く文

明後十八日は亡父こと一めぐりの忌日に當り申候まゝ心ばかりの法會相いとなみ舊
くよりの御知人に御集ひを願ひ候て粗末の御湯漬などめしあがりながら昔し物語をも
なし下され候はゞ佛のいかに喜び候はんと文して御入のほど願上候態と調へさせしむ
し物一重粗茶一箱相添へ奉り候御受納下され度當日はかならずと待奉りて　かしこ

◉同し返事

御文一通ならびに御志の二品拜受申上候おもへば月日は早きものに候かないつし
か御父君一週忌にさへならせ給ふこと唯々夢とのみ思はれ候此方はるかに御年よりは
上なるを斯く生殘りて今日に逢ふこと誠に定めなき物に候御志厚き御法會のむしろ
に御招き下されし辱なさ晴雨ともかならず參上致すべく候老ては涙もろにて御返事
したゝむるにも斯く紙のぬれ渡り申候墨のにじみ御ゆるし下され度　かしこ

◉試驗に落第せし人のもとに

けふ御下男の藤助どの此所の門をば通られし候まゝ呼こみて御樣承れば何とはなしに物歎かはしう思し召大かたは御部屋の内に計おはしますとや平常うち氣の御前樣この度のことを御心にかけられ沈みおはしますことゝ御道理には候へど試驗の及第のみが御名のほまれと申すにもあらざるべく御平常のことは知るほどの人しりぬべきに候かゝるさゝやかなる事に御心いためられ御病氣にても引出し給ふやうにてはゆく／＼六づかしき世の中をいかに渡らんとか思しめす此は唯御足もとに小さき石の轉べるにひとしく御躓きはありたりとも御進み遊ばさるゝに何の大事か候はん若葉の梢すゞしげに春はきのふの森の下露いと心地よき昨日今日を左る御籠居に暮し給ふは何よりも何よりも有まじき事と申上度候御兩親樣とても此失敗のつくのひには身に病ひをまうけて心配させくれよとは仰せらるまじく御恥かしと思し召は御前樣の平常よりをしはかりても御尤に思ひやられ候へど此日頃の御擧動は此方うけ難き事に候相成るべくは此失敗を彼れにかへて一層の御勉强この次には目ざましき事をと此樣のおぼし召願度たれもうき世の過ちなき者は候はず此方御前樣より少しも年の數多ければ夫れだけに過ちの數も候歎きつ悔みつ思ひかへしもしつさて追々と進みゆく事と存じられ候に

左のみは思し屈し給はで御立出も相成度こなた庭の面に老鶯のさへづりをかしく藤もやう〳〵景色みえ初候間一日おはしまして御茶めしあがり御氣ばらし遊ばされ候やう何も年上の申すことなればと御用ひ相成度候　かしこ

◉同じ返事

御ねんごろの御文有がたく御禮申上候人々よりもさま〴〵叱かられつ慰められつ今少し心を廣う持て此次の度を心がけよと申され候まゝ成ほどゝ思ひかへし昨日今日は此過ちを左のみは心にとゞめおかず至極氣樂のつもりに候へど何か外に遊ぶはものうきやうにて唯此部屋のうちの好もしきに候花のさかりは試驗に暮し若葉のかげには此やうの思ひ添ひて立出るに憂ければ櫻に縁のなき年とも申べく藤つゝじの盛りも過ごなば田舍の親族かたへ二月三月參るべきつもり扨少し此失敗の取かへしをと考へ居候遊に來よかし話しもして聞かせぬべきとの御仰せ嬉しけれど御目もじする事いかにもいかにも愁らきやうにて相成るべく逢ひまつらじの心に候間我まゝのほど御恥かしく候へど御見ゆるし置下され度今御詫び申上る折もあるべくやと唯かしこまりてのみ
かしこ

◉不緣に成し人をなぐさむる文

小雨降くらしていと物のつれ〴〵に覺えられ候をさなき御方はをとなしういらせられ候や御媒妁人とは申せ御親族にもあらぬ家にかゝりおはしますなれば御心づかひにか計にかとおし量られ申候かゝる御子さへいらせらるゝを唯に思し捨てゝ顧み給はぬ旦那樣御心根こゝにて承るさへ情なき事と存じられ候に增して御心の中いかならん必竟は例の鑛山のこと御心にも適はざりしより御煩悶のやるかたなく世はいかさまもなれ子も妻も我れには不用ぞ唯ひたすらに飮むこそよけれの御亂暴とおぼしく左は申せども御道理のなきには候はずやがては御夢さめて更に御上戀しうも成り給ひぬべく今唯今こそむづかしうもあれ御迎への參りぬべき事極まれるに暫時の憂さぞと忍びおはしましいかなる事にも御氣落など遊ばされず其御子樣御大切に御養育いらせらるゝやう致し度この降雨につれ〴〵いかゞやと思ひやり奉りて心計を文し上候此一重めづらしからぬ物なれども稚なき御方のお慰みにもと御覽に入れ候何も時機に候へば廻り來ん折を待給へ　かしこ

◉同じ返事

今稚なきも膝に寢入て一層軒ばの雨の音淋しく縫物するも物うければ疊紙は開きながら針箱も押やりて獨益もなき物おもひを續け居りしに候處あはたゞしう人の驅け來て御使ひのありといふ誠に昨日今日肩身の狹き身の上なれば奥に客來の賑はゝしき事ありとも此方は唯々よその祭りと見るばかり家内の人にさへ左のみ詞もかはし申さず增して文などの參ることいと稀なるに思ひかけぬほどの御使ひは若し誤りにはあらぬかと疑はるゝまで嬉しうて何か以前の身に立歸れるやうの心地いたされ申候御文くり返し拜見けふのつれ〴〵思しやらせ給ひてをさなき者へと御心入れの一重目さめなばいかに喜び候はん此兒よろこばせ給はる方は今日此頃の大恩人に御座候これが少しも皺面をつくりて嫌々など申出し候時は慰むる言葉も盡きはてゝ人見ぬ折は共泣きに候仰せの通り彼の鑛山のこと無かりし前は左のみあら〳〵しうも無き人に候ひしを生れかはりしやうの夫の亂行一つは私萬事に心のとゞかねば機嫌のとりやう宜しからぬにや候ひけん身には何事の罪ありとも覺えねど家風にあはぬと申さるゝ詮なさ千たびの詫びの甲斐もなくて今斯く中空のやうに此家の世話を受け居り候こと誰れやらが言ひし女子の宿世の浮きたる事まことに思ひしられ申候あの人あのやうの性質に

もこれあり一度申出したるを更に引かへし申ことならねば取あやまりても再度かしこへ迎へらるゝは叶ふべきに候はず今國もとより兄にまれ誰れにまれ引取りにといぼられ候はゞ私は此兒を引つれ立歸り田舍人に成りぬべきに候さしも猶春秋の折々おぼし出で給はゞ御訪はせ下され度田舍の家にも父母なきに候へば物ごといかに心憂からんこれよりの幾年此兒が成長せんまでの苦をおもふに唯々胸のいたく候されど此樣のことゞも結局は愚痴のくり言にて甲斐なき事を打歎くはお恥かしき心の底を打わるやうの物に候御聞流し下され度是よりは凡ての事を忘れはてゝ此兒の養育專念につとむべく此兒をば貰ひ得られしを幸ひとして他には何も思ふまじく候されば此地にあらんほどは更なり田舍ものに成りぬるとも折ふしの御心添へ何とぞ〳〵願度あまり思し召の嬉しきに用なきことまで御聞に入れ申御使ひ何處やらまでとか參らるゝとて文箱さしおき去なれしを幸ひ此やうの長手紙あとさき揃はで御判じがたくやいと御恥かしう候かしこ

○愛子をうしなひし人のもとに

彌太さま御こと小學校への御筒袖姿いさましう見あげしはきのふと思ふに御俄なる

さまにて彼の唱歌の御聲またとは伺ひがたきこと思へども御いとほしく候大路を行きて同じほどの大きさなるが何時もめされしやうの八丈の羽織など着て物のかげより走り出るを見ればやゝと聲もかけつべく思ひかへしてはおはさぬ成けりと知る時涙ただこぼれにこぼれ候何ならぬ私だにあるを多くの御中に唯一人御男にて御覧じたるなればさして御寵愛深うおはしまし葛飾の御田どころ幾町とやらんは彼の御子樣御料にとおぼし置末々御分家の上は御夫婦ともその御後見にと御取きまりも有し由我れは農學士に成りて處々の開墾をなし父樣御宿志をもつぎ兼ては軍人に成りて勇ましき功をたて金鵄勳章をば此むねにかくるのなりと大威張遊ばされしこと御子たちの常なる豪傑ずきのみならず眞に御名をあげ給はん思し召學校の御つとめぶりにも顯はれていと頼母しく存じゐしを斯るさまの御口惜しさ推量にも餘り候御葬儀の折御見おくりに罷出しに御父君は唯ものに驚き給へる如く御弱りともなくて夢心地のやうにいらせられ御前樣は御平常の御病ひにも障らせ給へる由にて御床のうちに伏し居給ひしさま見參らするまゝに堪へかね申候ひき御尤なる御力落しは千たび申すとも盡くまじう忘れ給へと申上るは近頃失禮の言葉かと此方思ひ居り候へど左りともひたすらの御追慕

に御病中なる御身をも厭ひ給はず雨風にもさゝへられ給はで時には日のうちに二度までの御墓參り遊ばさるゝ由そは却りて佛の御爲にはならせ給ふまじくかつは御身の大事に候殘らせ給へる御娘たち御一人は御緣さだまり給ひぬともそれよりの御次々いと多くおはすなるに此御歎きに身も弱らせ給ひ何事も捨ておはしますやうにては相成らず彌太さま御大切成りしはもとよりなれど孃さまがたに思しかへて御身の御保養相成度この方のやうに一人の實子もなく成しものさへあるを思しやらせ給ひて此事の御あきらめ相成度候父君はやう／＼御平常にと承れど猶いかさまにや御老體に候まゝ殊に御大切にと存じ上候私かねて一人子を失なひし其悲しびに思ひくらべ唯今の御さまいかにやと推量られ候まゝ斯くは文し上候さりながら歎かせ給ふなとはえ申上がたきものに候　かしこ

◉同じ返事

葬送の折および喪中の御尋ねまで頂戴いたし御志ありがたく少し心地よきさまに候はゞ御禮の文をもさし上度と存じながら何か筆とる事など物うくて思ひながらの失禮に候今朝はふりはへ御ねんごろの御書まことに仰せの通りの朝夕餘りおろかしう取

みだしたるさま心は闇にあらねどもと御憐れみ下され度おもへば御もと様御一人子を失なひ給ひし當時の御心いかなりけん此處には娘たちもいと多く總領の方には今孫さへも出來んとするを何を不足にしてと我れながらたどられ申候取わきての寵愛といはんはをかしけれど老後のなれば唯可愛ゆくて御恥かしき事なれどあの色黑を手の內の玉とかしづきしに候へば長くだに煩らはで唯三日がほどのくるしみに看病を盡したるも充分ならぬ心地のみせられ天狗などの來てかきさらひ行しが如く思はれ申候日ごとの寺參りこれこそは物狂ひの處爲と家內のものにも止められ候へど何か此部屋かの部屋かたみの處のみにて其障子のかげよりや此ふすまの彼方よりや不圖たち顯はれて母樣と聲かくる事もなど果敢なき事を考へ申しづかに居るは堪へかね候まゝ思ひたちてはやがて出申に候父は流石に男なればあの兩三日こそあれ昨日今日は左のみ口にも申出さず私のいひ甲斐なきを意氣地なしとて叱り居り候さりながら今日は此お返事これほどにも物とりまとめ認め得られ候へば今もと通りにかへるべくいかにも淋しさの堪へ難きに中々なき人の上をかたれば心なぐさむ心地に候まゝ御暇ならん折御訪はせも給はらば辱く御禮ながらの御願ひを申上候　かしこ

◉火事見舞の文

唯今出入の植木や參りて昨夜御ちかくより出火の由かたり申され始めて承知おどろき入りて御見舞申上候うけたまはれば御裏町より出火ときの間に表までもえ拔け候てさしも數寄をば盡し給ひし御茶室よりはじめ御庭の樹木御母屋まで半は烟にならせ給ひし由いかなる事ぞ此方區内の鐘は更に〳〵打ち申さず其事ありしは夢にも存じ申さざりしかば今まで人をも奉らざりしこと深く御詫び申上候御老人さまもおはしますなれば御心配いか計にか候ひけん先はみな〳〵樣御怪我もなく御立退き遊ばされしを御嬉しき事に存じ上候何も取あへず重の内ならびに酒一樽もたせ上候午後よりは私うかがふべきに此宿にて御間に合ふべき御品物なども候はゞ御遠慮なく御入用おほせつけ願度くれ〳〵も昨夜うかゞはせざりし御詫び申上候　かしこ

◉同じ返事

御叮嚀の御見舞ありがたく人々うばひ合ふ計にして頂戴大助かりに候御存じなかりしは御道理たゞ手のひら計やけたるに候へば近き處の親族などさへ未だ參らぬが多く候此方忰申すは今少し大火にもあらば燒け榮えもあるべきを竈の中ばかりの火にて大

騒ぎをしつる殘ねんさと口惜しがり居申候庭廻りより母屋まで大かたは燒うせしに同じく殘れる處もつきくづしなど致したれば形のあると申ばかりに候藏二つは目ぬり早くに手の廻りて幸ひ無難に候まゝ仰せ下されし當用のものにも事を欠くまじく未だ何事も手を下さず候へば其ほど調べもつきがたけれどあたふ限りは取納めたるつもりに候御安心下されたく先は御禮のみを　かしこ

◉負傷見舞の文

容易ならぬこと承り申候御取こみいかゞやと推量りみづからは參上も致さず文にて御様子うかゞひにと人さし出し申候旦那様御こと今午後かねて新聞の廣告にて承りし何がしの會など御臨み遊ばされ候爲御車にて何がし町までおはしたるに忽ち物かげよりぴすとるをもつて傷けまつりし者有し由人々の申口とり〴〵にて手前かた書生の聞參りしには御かすり手の淺々にて濟み給へるやうにもあり隣家忰などの取沙汰によれば御脇より玉の入りてやと承るまゝに胸とゞろきていかにもあれ御様子うかゞひ見ばやと筆はしらせ申候犯人は夫々の手にて捕へられしに候や良人この地に居り候はゞたゞちに參上も致すべきを御存じの留守中にて夫れかなはねは何とぞ御ゆるし下

され度何もとりあへずうかゞひばかりを　かしこ

◉同じ返事

疾く御耳に入りし由にて御尋ねかたじけなく候まだ何人のしわざとも知れ申さず彈は二の腕より脊にかけてつらぬきしにこれあり一時の出血はおびたゞしき事にて候ひし何の道入院の上療治せではかなはぬ由例の醫學博士今參られ手あて致し居られ候さりながら當人は私のおどろきほどもなく至極の平氣に候まゝ斯くては療治もたやすかるべしとのこと御安心下され度何も書みだりて御返事のみを　かしこ

◉地震見舞の文

一昨十五日の夜の地震は東京もいつよりは時間少し長く戸外に走り出でし人など無きにはあらざりしが棚のものだに落ぬほどなれば左までの事とも存じ申さず候ひしに今朝ほどの新聞にて見候へばさて〳〵御地のすさまじかりしこと地もさけ川もあふれ潰れ家怪我人數しれず夜より朝にかけて震ひし數は五十度今も猶折々の小さきは絶るまなく人々野宿して安き心もなきよしと御座候御家あたりは場所がらいかゞ候ひしや同じ町といへど處によりては左までにあらぬもあり多くの中に唯一構へつぶれ殘れる

家もありなど書かれたるは其御幸福のうちなれかしと祈られ申候御様子承り度さし
いそぎ文奉り候　かしこ

◉同じ返事

おそろしき夢のまだ覺はてぬ心地にて有さま委しうもしたゝめあへず大かたは東京の新聞にて御推量りの通り開闢以來と一と口に申候へど見ぬ世は知らず我々とし若きものたちが目にも耳にもいまだ見聞きおよばぬ大事に候ひし時は夜の十時ごろにや良人は役所よりの調べ物たづさへ歸りてともし火のもとに繰かへし居り私は其處より二間隔てし小さき部屋に子供寢かしつけ何時ぞや御送り下されし何がしの雜誌よみ居しほどに怪しう海嘯のよするやうに物すごき音のするを何ものとも存ぜずながら兒かき抱き立あがりしに良人は奥より聲をかけて燈火に心づけて表に出よ地震はすさまじきぞと申さるゝに早何事も覺えずらんぷを吹消して足袋はだしのまゝ庭へと飛ぜり物のあやふげなき垣根際にとたちたる時其凄まじさは今も目に殘りて何とも申すに言葉なく候少し心落つき候はゞ有さま文し御覽に入るべく此方住居は隣も近からず平屋づくりにて屋後には竹籔など候まゝ中にては震ひかた少なきにこれあり壁の土を落し瓦

の損じなどにて事すみ申候へど此方つね〲日用の物かひに行く何がしの町は潰れ家より火の出で〻百戸の人家こと〲く燒うせ顔見しれる人々の梁の下に成れるもあり燒死せるなども少なからずすべて思へば恐ろしき夢に御座候ひしおほせの通り小さき地震は今も猶折々これあり日のうちに二度も三度も箸もちながら駈け出るやうなこと珍らしからず人々物おぢして風の音にも膽ひやし居り候されど最早大した事はなかるべきやう東京より出張の學士など申され候ま〻先は御安心下され度いづれゆる〱文さし上べく取まとまらぬ折からなれば唯事なきさま計を　かしこ

◉盜難見舞の文

昨夜は我れおもしろの哥留多遊びにお初樣與五郎さましひて御引とめ申上夜中すぎまで御人ずくなにさせましつる申わけなさ今警察の前にて御下男御屆けにと參られしに此方悴出會ひ申御ありさま承り參り候さて〱驚き入たる事どもぬす人は宵のうちより紛れ入りて御物置き二階の薄くらきにしのび居り御人々寢しづまり給ふを待ゐしかとのこと御紛失品の莫大成しのみならず御衣類なども御奥座敷にゆる〱と撰みわけ殊に御立派なるを計持行しとはいかにも膽ふとく憎らしき處爲御家の案内しらぬ

ものゝ出來得ることならずとて御下男申せし由なれど何か御心當りなど候にや此方たゞらに御見舞にと存じ候へど年始の客人それよりそれと立こみて座をはづるゝ事なり難く文して御樣子うかゞひ上候御驚きの餘り御血の道などにも障らせ給はずやお初樣近近御目出度の御支度にとお取寄せおきの物など如何候ひけん夫れをば殊に御案じ申され候此方御兩人を御引とゞめ申さずば自づから御締りのくまぐ〵御氣づき遊ばされ人忍び居るたよりもあらず候ひけんを何れは御人少なの御手廻らでと此事眞に御詫び申上候御見舞までに　かしこ

◎同じ返事

立田の山も行かぬものを夜半の白波さりとは淺ましき事にて候ひきお初與五郎の歸宅せしは十二時少し前ぐらゐにて種々おもしろく遊ばせ頂きし話しなど致し床に入りしは何時よりも少し計おくれしにこれあり其時戸じまりは私の役なれば例の通り見廻りしも火の用心など心づけしに候へど物おき二階までは遂ひ見及ばで彼のやうの事にも成れるに候斯る災難ある時のならひ何時も眼さとくて鼠のおとにもやがて耳引たつる私のいとよく寢入りしこと今朝がたまで一度も夢さめ候はずされば縷々と品の撰り

わけなど致し行し暇充分にありしなるべく大かたは曲者一人にはあらで先きに忍び居つる者みちびきをなしやがて中間の襲ひしものなるべくと察しられ申候おほせ下されしお初が支度のもの夫れは淺ましう持ゆかれ差當り此さしつかへに困り入候御存じの通り何事も氣樂の娘に候まゝさのみ歎きもし候はず種々の用意は身に不相應なりと盜人の思ひはかりて此やうに持行きくれしなれば最早とりわきての支度にも及ばず母樣も歎かせ給ふなと申居り候へど私はこれのみ殘念に思はれ候御察し下され度下男などは此曲者かならず家內のこと知り居るものゝ處業なるべしと申候へど何かは夫れに限り申べき燈火を手にして家內中ゆる〳〵と探り求めしに候もの何のあり處か知れずには居候はんや今更の騷ぎは出水の後に堤の沙汰をいたすやうなもの甲斐なき事にてお恥かしく候年のはじめの初夢にはいと恐ろしかりしこと胸には手をも置き候はぬを

かしこ

◉病氣見舞の文

御母上樣御容體けふはいかやうにいらせられ候や俄の御日和にて何となく頭おもたく覺え候を御障りなどもやゝと御案じ申され候御醫者かはらせ給ひてより初めての御藥

と昨日參上の節うかゞひしが御樣子いかゞ夫れによりての御驗しなども候はずや今日もあがられ得べくはと存じつれど人參りて其ことかなはず候まゝ使にてうかゞはせ候御病人さまは未なにをもめしあがらずと承りこれは御伽の衆へと參らせ候御晝飯の御間にも合へかしと急ぎ賚あげて不加減のだん御ゆるし下され度一重はお前樣きのふ仰せられし笹まき鮓此あたりより取よせしなれば御口には合ふまじきや唯少々を奉り候御手ずくなに御病人さま御看病あそばさるゝなれば嘸かし何かと御不自由なるべく若し相應の御用も候はゞ此處に何なりと御申つけ下され度きのふ申上んとして何か其まゝの歸宅とりわきたるやうに怪しけれど文にて聞えおき候とかく御病人さま御大切に少し御快き際など別しての御心づけ專一と存じられ候何も今日の御樣子うかゞひまでに　かしこ

◉同じ返事

母こと病氣御心にかけさせられ屢々の御訪問ありがたく今日は御客樣にて御せはしういらせられ候御中わざ〳〵御人にて御賚物いろ〳〵私へと取わきての御重の內まで數々御禮申上候人出入は多きに家のもの少なきなれば唯上を下へと騷ぎのみ強うて物

養る心もつかず候へ御心入れのほど一層かたじけなく存じ候御尋ね下され候病人の容體ひとつはお醫者かはりしよりの思ひなしか今日は何時になく出來よろしきやうに候としよりの事に候へば殊に目だちての驗しなどは如何かと思ひつるに斯くては追々こころよかるべきかと樂しまれ申候御安心下され度唯この不食の處少し案じられ申候へど胸のさばきだにつかば飯湯など今にたべられ得べく扱はいよ〳〵此方のものと御醫者申されしを力に御座候未だ海山とも分きがたけれど不圖みる處はよろしき方に候ままの御返事このこと引つゞきなばと思ひ居り候　かしこ

◉友の故郷に歸るを送る

いよ〳〵今日に成り申候昨夜は更るまで御妨申上それ〴〵の御支度も候ひけんを心なき事ども御ゆるし下され度候雨ふらば今日の御出立あすに延び候よし左らば汽車までの御送りかなふべしと存じつるを中々の晴れ口惜しゝ候昨夜も申上し通り唯今何がし醫院に入院中なる伯父のもとを一日おきには必らず訪問ぬべき約束これあり病人これをば樂しみて待居候なれば違へかねて御前樣への失禮今その處へ參るとて衣ぬぎかへ候にも今一度御目にかゝらぬを殘りをしく切めてはと文に致し申候嬉しき事にての

御歸鄕なれば唯よろこびてのみあるべきを左もつゝしみあへず心細き思ひに候昨夜ら寫眞の事仰せられしを如何にも見ぐるしければ今寫しかへてと御斷り申上しが今更御心をもどきしこと悔しうて何もつゝみあへず奉り候うつれる影はさておきて心ばかりを納め給はらばや御五月蠅ともこれより屢々文奉るべきに折ふしの御返し必らずと待上候御道中御つゝがなきやう彼の地におはしつきて後も今日の御變りのさながらなるやう共に祈りて此文をばしたゝめ申候花の春月の秋こゝには大空をながめて御あたり思ひやり奉るべきに今宵は嘸なとも此曉は如何ならんとも思ひおこせ給はらば嬉しかるべく盡きせぬ事を短かき文の口惜しけれど心に筆の伴なはねば唯わすれ給ふなとのみに墨おしぬぐひ申候いと甲斐なくて　かしこ

◉同じ返事

今一かへり御暇乞ひにも出づべきを反對なる怠り御ゆるし下され度候昨夜は御入にて御餞別の品々給はり今日はとりわきての御使ひにて寫眞の御惠み御志のかたじけなさをば唯いつの世にか御禮申べきと斯く別れ參らする身の行かたなき心地せられ候かり初のやうにて過しつれど數ふれば三年の春秋御懇意下され候て妹のやうに御いつ

くしみ下されしを取る年の甲斐なさ豫てさだめの時にも相成り候へば追願ひも叶はず是非ともの歸鄕いひ渡され御恩がへしのみか言葉にての御禮もいひあへぬほどに御別れ申上ること誠にこゝろのほかに御座候此午後二時といふに汽車をのり出でゝ明日の午前には故鄕の人に相成るべく扨は又いつ頃か立出でられ候はんや申上つる如き身の方さへつき候なれば此次嬉しき御目もじかなはん時は淺ましき田舍人に成り居るべきに候此家の人々および故鄕より迎ひの者かれこれの支度など心づけくれ候て私は唯身一つをもてあつかひ居候折なれば用なきくり言長く成り申候くれ〲御兩親樣御大切に御孝養專一と遊ばされ申までも無き日頃の御勉强猶一しほにと祈られ候糸による物ならなくにとは眞なりけりと心細うて此筆いつまでも置くに憂けれど御使の人さぞと存じて何もこれにとゞめ候月花の折は御もろ共に打ながめ候はんよし大空に雲は出るとも花の梢に風はさわぐとも此契りのみは岩根の松の萬代までとぞ去るもの日にうとうは爲させ給ふな　かしこ

◉旅中都の友に送る文

汽車もある世に殊更の物ずきと都のみな樣笑はせ給ひしがさりとは徒步路の苦しさ

可笑しさ足弱の私つき添へるなれば道は誠にはかの參らで昨日やう〳〵此里までたどりつき申候宿の主は良人がかねての敎へ子にて氣心よく知れし親切の人に候まゝ心のどかに今二日ばかり、逗留いたすべきつもり人迷惑にや例の思ひやりなき同志うちそろひての處爲御わらひ下さるべく候軒ばの山に名は無けれど夕ぐれの松風あはれに淋しく前なる小川に入日のたゞよひ都にも見る景色なれどこゝろ細きものに候田舍人の物めづらしげに東京の先生おはしたりなど取沙汰しつる物と見え人々紙筆など携へ來て是非になどそゝのかされ良人大きに困り入り我れは其道の人にもなきものを句の歌のと思ひもよらず書かば書をこそと言ひたきまゝに申せば夫れを〳〵と又責め來るいかにするかと傍に冷めたき汗ながら打まもり居候へば筆かいとつて炭團の木兎のと怪しきものをぬりたて候袖引ゆるがして止むるをも聞かず賴みなればと左りとは亂暴の事ども定めてあとより怒らるゝ事と其人々に對し氣の毒さ堪へがたく生れてはじめての憂き思ひ成しに其事は此朝の事にて其書さゝげ持ちて歸り行し人々打つどひ此里よりは一里あまりも隔たりたる何がし川に網を入れて鰭ふる魚をさながらのつかひもの持たせおこされて驚き入り候一體の人氣おだやかに極めて眞面目の處に候粉々挽き

うたをかしく聞けば猶盆踊りも致すの由暦は舊きを用ゐ候なれば今がやう〳〵九月のはじめ菊の節句明後日ばかりとのこと旅にいでゝ又もや秋に廻りあふは追つきたるのなりなど打興じ申候都いでゝよりいくばくもなけれど怪しう月日隔てし心地に其方の空うちまもられ候は猶うき旅の名に背かずをかしきは可笑しきとして何故となき淋しさ御座候其地のさま御きかせも給はらばいと嬉しかるべく昨日までは大かた一夜泊りに御返事まち見るほどもなかりしが此宿には前申しつる如く兩三日か少し何くれの場所案内を賴みなど致し候はゞ五六日の逗留にも相成るべく其ほどに御便りもがなと待上候日記ものせよと仰せられしを宿りにつけばやがて疲れに何事も思はれず其日のあらまし覺えはあるやうにて遂ひ夢に入り候まゝ今日まで更に筆をもとらず送り給はりし手張の一枚目に此旅の起因めきたるを書しばかりに候これよりの行先いとをかしく見るべき處あまたあるよし良人申候まゝ夫れをば樂しみに待ゐ候へど例の何をば申きかせ候やらん此處の淵は何がしの僧正入水のあとにて是れに由縁ありと長々しき物がたり誠かと聞て淚おしのごへば非ず〳〵と打消されて口惜しき思ひしつる事もあり彼處の松は歌人何がしが庵のあとぞなど指しめされ態々の畑中を縫ひ行きて笑はれし事

もありすべて案内者の怪しきに候へば此日記いかなる物にか成り候はん書かばやがての御笑ひ草にこそ　かしこ

◉同じ返事

軒ばに山あり垣根に川ある御旅宿のしかも主は旦那樣御弟子にさへいらせらるゝ由うき旅などは御かごとにて羨みねとぞ聞え候さもあれ夕べの雲に日のてりて松風あはれに音づるゝ時都の空おぼし出らるゝは實に〳〵と思ひやられ奉り候都はきのふも今日も雨淋しく何時も御入の時めで給ひし隣家の琴の音あればかりを慰めにして過し申候御出立の後まだ僅かに候へども此ほどに變りし事は私宿への曲り角に舟いた塀をかしく瀬戸ものゝ表札かけたる女名前の家のありし彼れは御前樣御同藩の何がしとやらが控へ家と御仰せに候ひしが五日ほど前の夜物おきに火を放ちしもの候て悉く燒うせ申候往來に見あげて懷かしと思ひし一もと松おもはぬ烟に成り候て殘念この事に候取沙汰さま〴〵彼のうつくしき人はやがて暇に成り候ひき嬉しき事に指を折れば宿の小犬の病ひの癒えたる失せぬと思ひし頂戴の歌集見出たる勝手もと働くいとよき女子の參りたる猶それよりも妹が例の支度にと御相談願ひし染ものゝことあがり殊に

芙ごとにて少しも派手なる事はなく當人の喜び一重に御すゝめ故と辱なく嬉しく候日毎のやうに御目もじして猶ものたらぬ心地に候ひしを増して此朝夕の淋しさ文參らせたきにも御宿り定まらねば何とかはし候はん日々に此愚痴申出しては妹に笑はれ申候御文くり返し旦那さま御書のくだりを拜見するに御傍にお前樣が御心配いらせらるゝ御面かげ目のまへに浮かびて其人々態々の網うちに魚もて來つる有樣まで唯さながらに思ひやられ良人に斯くと申つればさても御多能の御事名畫の德に火とならば誰れやらが自贊おもひ合されて貧家の冬をもしのがれぬべければ雪ふる頃までに其御畫一ひら乞ひまつれ我れ等に木兎のようは無し唯そのかたつかたを床しがり候久しき御旅寢に見ゐつめ給ふ名どころのみならず斯る珍らしき事をさへ取いで給ふなればこれよりの山も川も可笑しき御事さぞかしと思ひやられ申候御歸京は來年とやかゝるゆるゆるの御ありきに書つめ給はん御旅日記拜見いつと樂しみ居り候此次の御文は又いつ頃の御便りなるべき其ほどいと待遠にも候かなやがて時雨ん紅葉のかげに御風めさぬやう御心用ゐあらまほしく其事いのり居り候　かしこ

◎山里にある乳母のもとに

其事となければ戀しければ文さし出し申候此一日二日風ことのほか身にしむは近き山にや雪の降りけんなど人の申合へるを聞くにも若し其あたりより見わたしの何某山や白う成つる其山がふもとの薄原うらがれ渡る頃に成ればいつも御もと持病のりうまちす起りてと覺え居候まゝいとゞ物のおもはれ候此ほどのさま委しう承らばや此所には父母より兄弟たち私もかはる事なく學校にも參り針仕事の稽古も精出し居候へば何とぞ案じ下さるまじく最早かさね物および袴の仕立も出來るやうに成り申候こぞ丹精に糸を引きておこしらへ下されし銘仙の彼れをば着物に仕たてゝ今日はじめて着候所縞がらよく似合へりと家内中にほめられ申候いと嬉しく御禮あつう申候斯かれば弟たちうらやみて姉さまは良き御乳母もちて此やうに物などをさへ貰はせ給へど我れ等は母樣の乳にて育ちたれば何も呉れる人なく口惜しなども言ひ其代り姉さまは繼子なれば父上母樣は可愛がり給はぬのなりなど負けをしみをも申候へば如何にとも宣へ我れには田舍にも今一人親のある身ぞと威張り居り候春にもならば又その地へ遊ひに參り度あまり度々にて與平どのに氣の毒なれど御もとより詫びいひて御寄せ下され度與之吉どのとも〴〵小川の魚つりいと樂しみに候此前參りし時あの子少し大きうならば

東京に出して商人の修業させたしとか申されしが數へにては十二にもなられ候こと年季といふに出さるゝつもりならば餘り年たけぬかた勤めよきよし人のはなしに聞き申候商ひは時計か呉服かと與平どの言はれしかど時計商は私うれしからず候呉服やならば行々いろ／＼の事たのむに都合よく候間なるべくは其方にと願ひ居り候さりながら私斯く言ひたりとの御話しは御無用になし下され度これはたゞ不圖思ひしを打あけの内々なるに候與平どの聞かれなば又東京の嬰兒さまが我まゝいふて來られたりなど笑はれぬべき事もはや今日此頃他人にむかひて昔しのやうの我まゝをも申さじの覺悟に候まゝ嬰兒さまの名耻かしう候ともあれ與之吉どのに御申ふくめ東京へ行くは嫌やなりなど申されぬやう致し度此ほど絶えて御清書御見せもなきは如何なされしや學校への御通ひやめ給へるには非ざるべく左らば其作文をも約束の通り折々は見せ下され度ほかの人々には夢々手をもふれさせ申さず私一人見て御褒美は必らず參らすべきに候さて此次參らん折の御土産何にせまし御もとよりの御注文與之吉どの望みの品も前もつて一筆御申こしあり度與平どのには瓶づめものと極めおき候彼れだに持ゆけばいつも目尻に皺のをかしき御酒たべる人の好みは同じやうのものと覺え候此節も猶手づ

くりにして彼のからきものに舌打ちせらるゝにや頭の爲には大毒なるべしと此處の人たちあやふがれど久しう馴れたれば仔細もなきにこそ夫れにはかはりて御もとは少しも酒の氣きらひにおはせど血の廻りわるくて折ふしにりうまちすなど起らるゝなれば葡萄酒少々づゝ常に用ゐられなば宜しからんとのこと此次試みに持參すべければつとめて御飲みならひなされ度候いはゞやと思ふ事のいと多くて次第も何もとゝのへあへず猶今少しと首かたぶけ居るを姉さまは何時までとや文かき給ふと弟たちくつがへりて笑ふもあれば墨筆うばひて逃るもあり餘りに詫しければ又もこそと書きさしたるやうにとゞめ候此ほどの御様だにお返事つかはされなば嬉しかるべく候　かしこ

◉同じ返事

まづは旦那さま奥さま御はじめ貴孃さまより若様がたにも御機嫌よくと承り御文さゝげ持ちて御喜び申上候この夕暮與之吉こと不圖おもひ出したるやうに東京の孃さまはいつ頃お出に成るやらん彼の山の雪の消えて此處の田の面に芹つむやうにならでは御出のなかるべきか我れには待遠しくて堪へがたけれど夫れまでに手よく書き書物さしつかへずに讀まるゝやう成りゐて孃さま驚かし參らせん夫れが樂しみぞと申候ひき

然る處日ともし過ぎに御文參り春にならば御入下され候よしの仰せ與之吉をどりあがりて我れが申當しと喜びいり候春にならば種々の御土産を御持ち遊ばされ彼の田の向ひを遠廻りに車に乘りておはしますのなり我れは表にかけ出でゝ兩手をあげてさし招けば孃さま車の上にていや〳〵と御首を振り給ふその時哇を傳ふて我れの驅けゆけば程もなくお車の前にいで御一處にのり度よしを申はれば孃さまやがて抱きあげて我れをば御膝の上に腰かけさせ給ふべし然してくるまは三太郎勘八等が垣根の前を矢のやうに走しれば彼等はおどろきて羨ましがりて驅け出でゝ見るに相違なし其我が嬉しさはいか計ぞと埒もなき事をも樂しみに春は〳〵と申候そのやうに言へど春は猶三月の後ぞと申せば困り入りて舌打して何故孃さまは其やうに御氣の長き折角旨きころ柿も何もなくなりて仕舞ふべきをと拗れ申候此やうにまだ九々の子供に候まゝ此前申上候御奉公のこと勤まるべきや否や其ほど誠におぼつかなく決して私一人子なればとて甘やかしゝ申すにはなく老爺も此ほどは其事申出さず成り候ひぬ切めて小學校を高等まで終らせて其後何かに志ざゝせ申べく何れともゝ參るは東京の地と極まり居候なればよろづの御世話御教へをも願ひ出るは御宅樣に御座候旦那樣奥樣へ皆孃さまよりよろし

う御仰せ上られ與之吉が事一重に御引たて願ひ奉り候私の身は弱し心配はこれが事ばかり誠にはゞかり多くて申上るも如何なれど貴孃さまをば唯子のやうに存じ上居候まま私なくなりぬとも此子がことを御覽下さるべきやうに賴み奉りて夫れにのみ心を安め居申候かく年々に病ひ多くなり候は若き時盡したる心勞の餘波と人申候へど左る事もあるべきにや御案じいたゞきしりうまちす相かはらず强くおこりて十日ほど前より起居よくかなひ候はず何に致せ瘦せの夥たゞしきを人も氣づかひくれ候辱なきおぼし召にて葡萄酒のこと仰せ下されいかにも彼れは藥との事故つひ飮みて見んとも存じながら勿體なきやうにて唯に過し申候郡長樣が御隱居などにてもあらば知らず我どちが持藥に恐れがましければに候老爺が濁り酒あれこそは骨休めの樂しみに每夜膳の上に德利のせては嬉しげに舌打いたし致され候都の御かたこそ頭にも障り給ふべけれど此處なる鋤鍬とりには斯るにあらでは利き申まじく候貴孃さま御文に御瓶づめのこと有りしゝ申せば扨も〳〵と額に手を加へてこれも與之と同じこと御出はいつと勝手の事ども老爺が迷惑おしはかるぞと御ことわりの有けれど何が此人そのやうに他處〳〵しくは存じ申べき土に手をつきても御入り待ち度こゝろざし世間の手前も鼻たかく思ひ

居るに候冬は御途中もいと寒し御覽に入るゝものも候はず大事の御身に風ひかせまし
など恐れ入るべく候まゝ時候よろしく成り候はゞ必らず御越し願度老爺こと御迎に出
づべきかと申居り候御ことゝ〳〵しき御土産も願ひに候はず唯御顔みせませ給はらば此
方には何よりの賜ものゝ其うへ學校御針仕事いろ〳〵の藝に御心入れ人のほめ物に御成
り下され候はゞ一つは御兩親樣へも此方が自慢申されぬべきこと萬のたまはり物にま
して其事ども願はしく候御文に與之吉か淸書何故見せぬとの仰せいかにも見ともなき
書きやうを唯今までいたしたれば耻かしうて御覽には入れかねしの由此次の週より一
心に書出で郵便にて御送り申べく手紙の文も自身かきて奉ると威張居り候御覽下され
て充分の御小言願度又その折に私も書き添へ申べく御前樣よりの御文をさても長手紙
と笑ひ參らせしが此方のはいよ〳〵にて斯く細かにしたゝめたれど猶尋にも餘り候い
かにせば盡ぬべき言の葉ならん唯御めもじならではと思はれ候末に成りて恐入候へど
御兩親樣御はじめへよろしう御傳へのやう願ひ上候　かしこ

◎死去を吊ふ文

御父上樣御こと俄に御容體かわらせ給ひ此曉に御かくれの由唯うち驚きて夢との

みたどられ申候此ほど御見舞に出し折は御氣色次第におよろしく召あがりものなど漸漸進ませ給へるやうに承りさて遠からず御全快の御事と御嬉しく存じつるを如何なる事ぞ十日の隔たりもなくて斯く成らせ給へる思へば御中なほりと申すの成りけんさりとは今一度御目にかゝらぬを繰返し打歎かれ申候御帶だにとかで明くれつき添ひ御いたはり入らせられし御孝養その甲斐もなき事にて御前樣が御歎き申すも中々に御傷はしく存じられ候さりながら御充分の御手當も盡させ給ひし御後のことなり斯るを浮世と思しめし御悲しびに御身をそこね給はぬやう致し度今は唯それぞ亡き御方への御孝に御座候御蠟一箱御靈前に御供へ下され候やう持たせ差出し申候今宵は私御通夜に參上いたすべく候へども取あへず御くやみまで　あら〳〵かしこ

◉同じ返事

父こと病中より一かたならぬ御心配をくだされしば〳〵の御見舞かたじけなく必らず癒りて御禮にと當人も申つゞけしを甲斐なきさまに成り候て夫れのみも殘惜しう存じられ候年には足らぬ處もなく候へど未だ我々兄弟何仕出でたる事もなく子のつとむべき片はしをだに見せ候はぬほどに斯くなられつるを飽かず情なく思はれ申候おはせ

の通り唯しばらくの中なほりを今全快の兆ぞと喜びゐつる心淺さ言ひ出れば限りもなき事どもに候へど返らぬ事を今更の歎きは佛の爲にもいとわろしとの御いさめ實にと承られて思ひかへし申候佛前へと御志しの一箱かたじけなく直ちに供へ申べく候よろづ取みだしたるほどの御禮委しうも陳べあへぬはさる方に御見ゆるし下され度唯御請のみ　かし

唯いさゝか

◎日用文のこと

今やうの文章いとみだりがはしくさまぐ\の體しきりに出で來つ、あやしう鵺などいひつけて去る人々あざみ笑ふものさへありとや、さても其記事記行、隨筆說話のくさぐさは此處に用もなし、男子の書くなる拜啓、頓首も我がしらぬこと唯我れどちの間にいひ通ふ日用文のこと少し言はんとなり。

此手紙の文よ、雲井のよそに心をやりて人の世をはなれんとにもあらねば、目に見えぬおに神を感ぜしめんのすさびにもあらず年始暑寒のとひおとづれより、月花の折に友を誘ひ、新宅新居をいはひもし。憂ひ歎きを慰めもしつ、親しき中には忠告、教誡、唯まのあたりならば、とあり、かゝりと口にすべきを筆にいはせて心かよはさんまでの業なり、されば用語の六づかしきを求めず、極めてわき安くすなほなる言の葉もて、事の筋あきらかに、序正しう書なしたらば其ほかに事なかるべくやあらん。文をみるよりやがて其人がらは推量らるゝものといふを、いかに聞たがへてか常いふ言葉をいやしみて、耳どほくわきがたき雅言打まじえ、したり顔に書出る人のあるはいかなるにか、言葉は末なり、もとの心優ならば飾らずして人ぎゝなつかしかるべきを、らんたつなどの縞ものゝ上に掛きたらんやうの粧ひはいと怪しう不用のものなり、すべて殊更のつくろひは自づから打あはぬ處いで來て見るまゝに興さめぬべき業なれば、紙筆とりて打むかふ時まづ我がこゝろを顧みたらんぞよかるべき、假そめの手紙の文、なほ千載の後にも殘りぬべきものをなほざりごとに墨ぬりをくべきかは。

かくいへばとて此文むづかしき物といふにはあらず、しひての切みを求めずして心

のまゝに書きいでんは平がなのわたり知り得たらんものゝ誰れもたやすく成りぬべきこと、はやう我が知る何がしの女子・年たけぬるまで文字かくことを知らで、日々の用事親はらからのものにも聞えやらん便きなくいと佗しき由に歎きしが、おもひおこして三十の手習ひにいろは唯四十七文字をまなびぬ、さて文のこと書きならふに、ます、ませぬをば候にかへて、いつしか前文の體もそなへつ、いと長き用事をも一句、一句に點打ちつゝ滞りなく書きおくる、いと珍らかに俄なる修業を、いかにして斯くはと問ひしに、何事にもあらず、もとより文法語格をまでたどりてあるべき際ならねば、あやまり書かじの一念にて唯この口にいふ事をもとゝしつ、夫れに縋りてものせしなり、人、人に逢ふかならず言葉あり、寒暑の挨拶、疎遠の詫び、これをば文のはじめに書きて、やがて用事の物がたりに移る、これより彼れ、かれより此れ、口ならば無用の言葉にいたづらの時をも過すべきなれば、文には紙の限りあり、用なきことをすべて省きつ、唯いはんと思ふそれ計を書きつゞくるものなりと言ひき、げにこれこそは手紙の文の本意にて法といひ心得といふ此外にはあらざるべし、古人の文のいとよしといふを見るに、左のみ禮服つけたらんやうの打かしこまれる物にはあらで、

心詞つくろひなく、さながら、筆づかひによろづの哀れも懐つかしさもこもりて、其時その人かくやありけんと推量らるゝ、こは作りものにてなるべきにあらず、文まなぶ人これに心をよせたらば奥深う何くれの教へをたどらんまでもなく、自づからにして好き文は書きいでらるゝ業なるべし。

さはいへど何の道にも稽古はかならずありぬべきこと、春の鶯谷を出でゝ軒ばの梅にこゑたて初る時、おのづからの調べ猶とゝなはず、しぶれるやうの節をかたなりとて愛くしうするものから、誠のこゑは鳴ならひての後なりけり、はじめより思ひのまゝに言ひいでもし書きいでもせんはいと難かるべし、常のならひ足らずして、いでさらば文かゝんと打むかふ人の、やがて心に筆のしたがはねば、もどかしう煩らはしう、いはゞやと思ひし事も半ばかりに書きさしつ、あらぬ雑事せんかたなく交りて、我が心にも見ぐるしう甲斐なきやうにうとまるれば、おのづと怠りがちになりて退く心いで來るなるべし、何事も俄にてはあるべからず、日頃心は用ゐて唯こゝもとに沸出るくさぐ\の事どもを日記といふに書きならひて口にいふと筆にするといさゝかの隔てなくなりて、多く世間に交りたる人の人おぢせざるに同じこと、心安う文かき得

らるべきにやあらん、古人の文をよみならふいとよき事なり、さりとも一向にそのおと計おふやうに成りてともすれば、我が心よりほかなる事を生さかしがりとり出る又みぐるしかるべし、人のは人のとして我れは我が文をと心がくるやうあらまほしくよき文を見るは好き文を作り出ぬべき養ひばかりになさまほしきなり。

文は短かくして事のわき安きを第一と人のいふ、男のなれど本多の何がしが陣中よりの文いつ〳〵も引出されては世のほめ物にたゝへらるれど、そは折からによりたる物なり、短かくて有りぬべき時あり、長きを人の樂しむことあり、遠くはなれて逢ひみるに難く唯大空を打ながめては、故鄕の人々今いかさまに暮すらん、野山のさまもなつかしく、彼の家、この家いかならん、里の童、鎭守の森とさま〴〵思ひつゞくる折したしかるべき人より文のきたる、いかゞは喜しからざらん、封じをとくも鈍かしう見るに、暑さ、寒さいかに暮し給ふ、此ほど此處にもかはりなし、御樣承らばやとのみあらんは口惜しさ思ふべし。かゝる時の文の上には雜事とて打すつべきものなく、一もとの草、一頭の犬、媼も翁もこと〴〵く見る人の慰めに成りてしばし旅窓の憂さをもわするべく、げによき友よと其人いとゞ懷かしうも成ぬべし、長き尋に餘

るともこはわづらはしからぬこと、短かくてよかるべきは近火負傷の見舞すべて、不慮のことに人の心あわたゞしからん折、いと長々と書きつゞけたる見るもうるさく中中の心地ぞすべき、よろづに時といふは必らず見るべきものなり、ついでよろしからぬことは何ならねども人の心を痛め、煩ひをまし、思ひのほかの怒りを招く事もあり人のもとへ物たのみにやる文に心づくべく、斷りの文は猶さら、事のさま早く人の心を破りぬべきなれば、そをなだらかに調へてやむを得ぬさま細かにつらね、實にとうなづかるゝやう言はんぞよき、老たる人に今樣の生さかしき事いひおくると、其道の心得なからんあたりへ我がしれるまゝ歌よみこみてやる共に無禮げなり、わかき男に用ある折の文ことさらに愼しまずばあるべからず、言ひつゞくれば何がしくれがしの事いと多く、心がくべき事さま〴〵あるべけれど、すべて事のさまを思ひはかり、文かき出ん時なほざりならざるやう爲さまほしきなり。

こと通はする便りばかりには文字拙なくともわき安きをよしとすなれど、拙なからぬや猶さらなるべし男の文だに楷書かたかなに書きたるはいかならん、まして女のこわごわしき筆づかひはいかばかり好き文章ならんとも先心おとりせらるゝ物なればっ

平がな能くならひて多くはこれにて續けたるこそ女しうはあれ、されば其假字格またみだりにすべからず。

馴れざらんほどは必らずした書き物すべきなれど、使ひ待たせおき取あへずのはしり書きなどにてあるべき折、ゆる〳〵と書きあらため、文章つくろひ居るいともどかしや、心靜かによく思ひめぐらし筆とれば忽ち書きつゞる事かなふべきやう平常に心ざしたらんにはしかず、さりとも取置きて後の證にといふやうなるは態とも書きかへ我が手もとにとゞむべきなり。

いかならん急ぎの折も、文かき終らば必らず一わたり讀みかへし見べきものぞ、心には思ひながら知らず落たる文字もあるべく、一字のあやまりにて意の通じがたき事などあらば其文つひに詮なかるべし。

其かきやう、天地の定めなど六づかしう言はんもうるさかるべし、唯見ぐるしからぬやうに心得たらば宜かるべきを・猶初まなびの爲にとて普通のこと三つ二つを。

◉文かきやう

卷紙のはし幾寸幾分とものさしの用もなけれど始めより終りまで一向かきつむる物

にあらず、いさゝかの餘白おきて、天地も行つまらぬほどにあらまほしく紙のつぎ目最初にあるも宜からぬ事なり、常陸の宮が實法なるさま今の世の文にも多くあれど、すべて女のものゝきはだ〳〵しう規則めきたるはわろしといふならねど懷しからず、上はかならず揃へかくべきなれど行の末は文字の長短により、いさゝか引下げて傍に書きたるなど中々に景色よきものなり、一行は太く、一行は細く書きたる見よしと言ふもあれど、夫れも判然としたるは型のやうにこそあれ、一句のはじめに墨をつぐも惡ろからねどさては、押ならびて濃きこともあるべし、此文の面みよくせんは猶法則にのみよるべくとあらねばにや、斯くあるべき物ぞ斯くあれなどいひて敎へられしを見るに、いと所せくのびらかならず、唯かしこまれる計にて見處もなきさまをぞしたる、物馴れたる人の書けるは何となき走り書きにも濃きうすき打交り、態とめかずして見にくからぬや、猶ならひのする業なるべき、されば彼の法、この法いづ方も書き試みて、さて文の面うるはしかるやうは我がおもふに任かせたる、中々にとゝのひぬべし。

◉上におくべきと下に書く文字

最行の上に候をかゝず、最行の末に御の字をかゝざるやう心がくべし、やみ難きと

きは行をはづれて傍書にする、仔細なし。

◉前文

あるべき物なれど必らずと限れるにあらず、遠國他郷の隔たりたる人にいひ送る折さらずば打かしこまれるあたりへ申上る、夫れらみな用ふべし、文かき出るごとに皆皆樣ます／＼御機嫌よくなどある、したゝかなりや、まだ逢ひ見ぬほど五日も隔たらぬを、さりとは戯れたるやうにと打も笑まれ、心おとりもせらるゝ事ともすればある事なり、親しき中にて輕らかなる用事いひやる時は御ゆるしとだに言はでもよし、斯く定まれる詞ならでは機嫌のとひやう猶あるべきにこそは、此知れるあたりの小さき子、いつも文おこすごとに前がき同じからず、唯今軒ばに月のゝぼりて窓に竹の影をかしきを見ながら此文かき終りぬ、君には門にいでゝや遊ばせ給ふ、燈火とりてや物よみ給ふ、御さま思ひやりてなど、折からをさながら書きおこす、いと懐かしうて、此方も無事に候とばかり見せられたるより嬉しきものなり。

悔みの文は更なること出水地震何の見舞にも不幸を訪らふやうの折、前文用ふべきにあらず、此方より知らせやる時も同じこと。

◉とぢめの詞

今も猶めでたくかしく、と書く人あり、こは道理たがへるの由、正しくはあなかしこと書くべきなれど、唯にかしことしたるもよく、早々、あら〳〵など添ふるは文のさまによりてなり。

◉月日かくこと

女の文に明治何年何月とやうに書きたるは餘りしたゝかにて五月蠅かるべし、後の爲にと六づかしき文ならば唯何年月日としたる、いさゝかは優れり、大かたのには唯日ばかりを書きもすべく、何月半ごろ、とも末とら書きてさしおく、いとよし、封筒の上に親展、直披など女子たちの間に行はるゝ頃なれば年號までも書く要あらんや知らず、猶おほらかなるこそ懐かしうはおもほゆれ。

されども文のうちに、今日いかなる事しつるとか、明日何方へゆかばやと思ふなど書き出る頃、日づけたしかならずは見る人まどふべし、こは必すべき事なり。

◉宛　名

父上様・母上様は更なり、伯父様、いづれも目うへの名はかゝず、數多き近親の似

よりたるある折は何がしの里姉上樣といふやうに書くべし、同じほど少し目したのはとには名のみを書きて、つる樣、龜次郎樣、などあらばよかるべし、何の何がし樣と姓名ひとしく書くは謹める折のことなり、封のそとにばかり姓名かきて中には、誰姓のみを書く事もあり、若き男にいひおくるには人のも我れのも名のみ書くべからず、姓名あきらかにと言ひ傳ふるは親しみに似て打とけめかしければなるべし、大かたは苗字のみにてもありぬべくや、女友達の親しき中には何子樣御もとに、何子とばかり書きたる、いとよし、いたく尊とべる人には何がしの君になど書く、大人、高臺、など女のいふ詞ならねど、ぬしと言へるも猶人によるべし。大方は樣の字こそ用廣きものにはあれ、殿といふも左のみ書かぬこと、ふるくは大將どの、内大臣どのなどもいひしを、今樣にはいたくおし下げたるやうに聞えて、唯めしつかひなどの許にぞ。

◉脇づけ

あて名の傍へは、人により處により、御前に、御許に。人々申給へ、人々御中、申給へ、御文机のもとに、まゐらす奉るなど書くべし、玉案下、座右、など書くはわろし、人々申給へは御もと樣より御披露願ひまつるの意なれば親しき人への言葉ならず

人々御中も同じやうのもの、御前にはいと尊べるにて、御もとに、御文机のもとになどこそ常々いひかよふには書くべけれ、返事の折には、御返し、御請、など書くべし。

◉なほ〳〵書

本文に言ひ餘りたるを折かへし言ひ出るにて、追書ともこれを言ふ、本文はじめの行の前より、少し引さげて間ひ〳〵へ細かく書き入るゝこともあり、末の白きへ書く事もあり、近き頃までは誰れも〳〵法則のやうに守りて猶々、かへす〴〵など書きつる物なれど、さあらでも宜き事なるべし、思ひのほかに取落したる用を失れよとあとより書そふるなれば取わき景色のよかるべきにもあらず、無くてもありなん、有りても侘しからず。

◉文の中に顯はるゝ時

月の夜、花のあした、何こゝろもなく打ながめ居る折に友のもとより文の來たる、華奢なる封筒のまづなつかしく、糊はなちて見れば折にあひたる繪半切れのうつくしきに、優なる筆つき墨の香にあひて、いと哀れなる二言三言、打まじへ書いたる歌のさまなど、身にしみて忘れがたきものなり、雪にも雨にも思ひがけぬ折の音づれを

得たるは唯にてだにも嬉しきを、歌のそへるはいふべくもあらず、さて其かき入るゝやうは、こと〴〵しう本文と引はなちかくは宜からぬよしなり、初句たゞ一字ほかより下げて書はじめ、やがて結句は本文につゞけたる然るべしとぞ、色紙のやうに書くもあれど猶此わざとならぬこそよけれ。

◎しめのこと

狀封じて墨を引くこと古くよりの法なりとぞ、封・緘、鎖、糊、いづれも女のものならず、まして此處に檢印おしたるいかなる心にかと怪し、たゞ〳〵とばかり書てありぬべきを。

◎くさ〴〵

郵便にて文さし出す時、切手のこと心づくべし、いさゝか量おもければ、やがて人のもとに罰かうむらする、みづからは知らぬ事にて禮を欠くなん、いかゞは口惜しからぬ。人のも我れのも處がきあきらかにして、あやまりても我が手もとには立かへるやう心がくべし、封の中には二つなき心をも籠めをくものを、沒書といふこといと侘しかるべし。

返事は成るべく速かにさし出さんこそよけれ事故ある時は猶さら、唯折にふれたる音づれにも、おこせし人は待らん物をなほざりに打おくいとわろし、彼方よりのをよく讀み味ひて待ち見る人の心ゆくばかり事こまやかに物すべし。一わたり見渡したる計にては思ひの外のあやまちも出で來る物なり。

尚ほ文のことさま〴〵あるべしといへど、大かたは人々の心もちひ一つにて如何さまにも成りぬべきを、あなくだ〴〵しやとてなん。

一葉全集前篇　終

明治四十五年五月十日印刷
明治四十五年五月十三日發行
明治四十五年六月十五日再版發行
明治四十五年六月二十五日三版發行
明治四十五年七月三十日四版發行
大正元年八月二十日五版發行
大正元年十月十五日六版發行
大正元年十一月五日七版發行
大正二年一月二十五日八版發行
大正二年二月十五日九版發行
大正二年九月二十五日十版發行

一葉全集前編

定價金壹圓七拾錢

不許複製

著者　樋口一葉

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　高橋季吉

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番　博文館

（金子製本）

幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生
校訂

文藝叢書

藤島武二
橋口五葉
裝幀

全十二冊
洋裝菊判
天金綠美本

正價各金壹圓
送料各十二錢

第一卷 忠臣藏文庫
椿說弓張月

第二卷 俊寬僧都島物語
賴豪阿闍梨怪鼠傳

第三卷 西鶴文集

第四卷 道中膝栗毛全集

第五卷 俠客全傳

第六卷 南總里見八犬傳 前編

第七卷 南總里見八犬傳 中編

第八卷 南總里見八犬傳 後編

第九卷 演劇脚本集

第十卷 忠義復讐傳

第十一卷 世話淨瑠璃名作集

第十二卷 紀行文編

文藝の人に於ける其の性情を薫染し、其の氣習を陶鑄す。功もとより尠少にあらず、目するに閑を消し心を娯ましむるの書を以てして而して之を輕んず可からざる也。聖代泰平、文運隆昌、本館今茲文藝叢書を出版し第一期十二卷を發行す。外觀はたゞ賞を士女に求むるが如しと雖も、微意いさゝか補風敎に添へんと欲するなり。是に於て、鑑裁を諸先生に仰ぎ、近古文藝の中に就き、精を取り粗を舍て、趣多くして弊少きものを蒐め刊す。校字は嚴密を期して、魯魚の衍り無きを必し、用紙は佳良を極め、破損の虞に遠ざからんを希ふ。印刷の鮮明より裝釘の緻緊に至るまで、皆一々心を用ゐ意を致し、實質の美をして廣く流布、の諸本に超ゑしめんと欲す。而して其價を低くして江湖の購得に便にするもの、また佳書の廣布を望むの意に出でずんばあらず。若しそれ本叢書の刊行によりて、山村水郭の人も容易に多數の書を得、繁劇怱忙の士も清興を寸暇に取るを得、而して不知不識の間に世態を悟り、人情を會し、敦厚邪を憎み正を愛し、忠恕の風を養ふあるに至らば、俊秀なる古作者の遺業も、其功空しからずして、且や本叢書刊行の微意もまた酬はむ。

發兌元
東京日本橋本町三丁目
博文館

現代名家譯述

近代西洋文藝叢書

中村不折
橋口五葉 装幀

全十二冊 洋装菊判 天金縁美本

正價 各金壹圓 送料各十錢

小説 決闘 生活の河 露クウプリン 昇曙夢
小説 サラムボオ 佛フロオベル 生田長江
小説 廣野の道 墺シユニツラア 楠山正雄
記 死人の家 露ドストエフスキイ 片上伸
小説 陥穽 佛ゴンクウル 前田晁
脚本 日の出前。織匠。鼠 獨ハウプトマン 小宮豊隆
小説 處女地 露ツルゲネフ 相馬御風
小説 クロイツエルソナタ 露トルストイ 阿部次郎
小説 死よりも強し 佛モウパッサン 中村星湖
小説 地獄 瑞ストリンドベルヒ 森田草平
小説 氷島の漁夫 佛ピエルロチ 吉江孤雁
小説 サッフオオ 佛ドウデエ 鈴木三重吉

文學は人生の表現である。人生を不滅にする唯一絶對の精神的努力である、吾々日本人は、我が國古來の文學に依つて、不滅にされたる祖先の生活を見ることが出來る。けれども、今日の如く、一般の生活が世界的になつて、彼と此との活動が、一々互に相響應する時代に在つては、吾々は單にたゞ生活の源泉を祖先の生活に求めるだけでは滿足が出來ない、廣くこれを世界各國民の生活に見て、以て「我」の生活に培ひ灑ぐの用意と覺悟とがなくてはならぬ、而して眞によく吾々の生活と其ゝ脈搏を同うし、直ちに共鳴を感ずる所の文學はと云はゞ、即ち西洋近代の名篇傑作を移植せんとするは實に民の意に副はんとするの微衷に外ならぬのである。譯さるべき悉く是れ西洋近代の世界的文豪の名篇傑作。譯者は悉く是れ、近代生活を味到せる現文壇の俊秀、されば吾等は本叢書の出版に依つて徒らに名のみ傳へられて、其實の味ひ知られなかつた西洋近代文學は、始めて其の眞面目を吾々日本人の面前に展開し、吾々日本人の生活を豐富に且つ深遠にすることを信じて疑はない。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

故尾崎紅葉君著

紅葉全集

全六册　洋裝菊判函入　表裝高雅　正價各金壹圓八拾錢　送料各十二錢

第一卷　○色懺悔○新桃花扇○南無阿彌陀佛○戀の蛻○夏痩○新色懺悔○猿枕○七十二文命の安貴○風雅娘○巴波川○拈華微笑○此ぬし○闇東五郎○文ながし○わかれ蚊帳○二人むく助○二人女房

第二卷　○伽羅枕○むき王子○夏小袖○おぼろ船○紙きぬた○戀の病

第三卷　○三人妻○男ごゝろ○袖時雨○侠黑兒○心の闇○むらさき

第四卷　○隣の女○鷹料理○冷熱○青葡萄○不言不語○三箇條○浮木丸○八重襷

第五卷　○多情多恨○千箱の玉章○安知歌貌林○寒牡丹

第六卷　○金色夜叉前編○金色夜叉中編○金色夜叉後編○續金色夜叉○續々金色夜叉○新續金色夜叉○煙霞療養○紅葉山人傳○紅葉著作年表

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し奇思縱横字々纖快を極めざるなし。曾て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、俊群英を養ふて藻社の名一世を壓す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知る所にして仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり、山人の逝くや命也。而て山人の精神は萬古常に新也、蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし則ち硯友同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ、思ふに七寶の散りて點散せるは聯ねて一環と爲すの美に若かず全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め謹みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

故國木田獨歩君著

獨歩全集

全二册　洋裝菊判函入　裝幀優美　正價各金貳圓　送料各十二錢

前編

○牛肉と馬鈴薯○運命論者○巡査○酒中日記○富岡先生○空知川の岸邊○郊外○鎌倉婦人○神の子○源をぢ○星○園遊會○春の鳥○少年の悲哀○夫婦○河霧○小春○遺言○初孫○岡本の手紙○わかれ○置土産○湯ヶ原より○日の出○非凡なる凡人○畫の悲み○馬上の友○惡魔○正直者○第三者○女難

後編

○竹の木戸○二老人○泣笑ひ○渚○たき火○おとづれ○詩想○忘れぬ人々○まぼろし○鹿狩○二少女○帽子○あの時分○死○波の音○號外○歸去來○別天地○初戀○絲くづ○非凡人○武藏野○入郷記○湯ヶ原ゆき○疲勞○肱の侮辱○都の友へB生より○節操○窮死○戀を戀する人○暴風

發兌元　東京日本橋本町三丁目　博文館

故樋口一葉女史著

一葉全集

全二冊
洋裝菊判函入
裝幀優美
正價 前編金壹圓七十錢
後編金壹圓貳十錢
送料各十二錢

—《內容》—

前編 日記及文範

○若葉かげ○わか草○筆すさび○蓬生日記○日記○しのぶぐさ○道しばのつゆ○よもぎふ日記○しのぶぐさ○塵の中○塵中日記○つゆしづく○日記ちりの中○いはでもの記○水の上○水の記日○新年の部○春の部○夏の部○秋の部○冬の部○雜の部○唯いさゝか

後編 小說及隨筆

○にごり江○われから○ゆく雲○やみ夜○大つごもり○經つくゑ○曉月夜○うもれ木○闇櫻○たま襷○五月雨○別れ霜○雪の日○琴の音○花ごもり○軒もる月○うつせみ○この子○十三夜○わかれ道○うらむらさき○たけくらべ○かれ尾花○椚なし小舟○森のした草○隨感錄○流水園雜記○ほとゝぎす○そゝろごと○棹のしづく○跋

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也、女史が遺せる所の日記四十四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也、人生に對する僞らざる觀察誌也、亂調なりし當時の文壇裡面史也，增訂一葉全集は從來刊行の女史が諸作に加ふるに此比類無き秘書と、女史が小說隨筆の未だ公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩編合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾なからん、敢て薦む。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館